早稲田文學

大正十五年

一月號





本間久雄著

生活の藝術化

（新刊）

四六判上製 定價壹圓八十錢
挿畫多數 送料十二錢

……此世に生を享けた以上、生きることの意義を自覺し、生きることの悦びを感じ、生きることの幸福を味ひ乍ら、日毎の生活を營みたい。かう云ふ慾望は、深淺の度はあつても、誰人にもあるに違ひない。さて、この慾望を滿たすためには吾々はどうすればよいか、この問題について、それの解決を與へたところの近英の思想家ウイリアム・モリス、エドワアド・カアペンタア等の思想を解說して、いさゝか私見を加へたのが、この拙著收めるところの「生活の藝術化」「美感の頽廢」の二篇である。「ウイリアム・モリスの生涯」は生活美化の思想を、いかやうな意味でモリスが實現したかといふことを、讀者諸君に知つて貰ひたく此處に收錄した。（著者序文の一節）

—内容—

東京神田 東京堂 振替東京二七〇番

早稲田文學 第二百四十號目次

明治文學號

興隆期の研究



早稻田文學

一月號

第二百四十號

回憶漫談　其二

逍遙

私が演劇革新の事に關係を持ちはじめた頃の事を話さう。

順序として、先づ、知識の上流が劇場に出入しはじめたのは、いつかと調べて見るに、「續々歌舞伎年代記」に左の如き記事がある。それは明治十一年新作史劇「松の榮千代田神德」を團十郎、菊五郎、左團次、仲藏、半四郎らが新富座で、其舞臺開きに演じた事を錄した條下の附記である。

此脚本の作者は無論河竹新七（後の默阿彌）なるが、依田學海翁が多少助言を與へたるは事實にして、日本の芝居で文人學者が直接喙を容れたるは、恐らくこれを以て嚆矢とすべし。學海翁の說に、「演劇改良の聲は此時より揚り、府知事松田道之氏の如きは最も熱心家にて、赤坂の自邸へ伊藤侯、冲守國氏などの洋行歸りを懇請し、勘彌、團十郎、菊五郎等を侍せしめ、大いに改良の必要を言ひ聞せたる結果が此舞臺びらきの狂言となり、稽古の時に學海居士は松田府知事と共に樂屋へ臨んで、種種差圖に及びたる事あり」と。

又團十郎も此頃より意を有職故實に用ひ、舊幕臣市川熊男を聘して顧問となし、始終斯道の知識を舞臺へ應用し、更に松岡明義氏にも敎へを乞ひ、即ち同氏の意見に依りて此劇（松榮千代田神德）の服裝を案出し、先づ序幕鷹野へ出る家康は、小紋の半天、脚絆がけ、近習の拵へと同一にて、頭だけ惣髮の棒茶筅を紫の糸にて結びたるのみ、在來の芝居の殿さまとは全く一變し、三幕目に築山御前が本身の薙刀を用ひ、次ぎのだんまりへ出る家康は折烏帽子に薄き褐色の素袍三つ葵の紋附にて、金剛草履を穿き、夢の醒めたる場にてお召茶の縮緬に葵の紋の羽折、仙臺平の袴といふこしらへ、大詰聚樂御殿は黑の袍に薄領

の冠をいたゞき、秀吉より太刀を拜領する件も矢張り松岡氏に故實を質して、近習の侍が膝行する事になしたり。此服裝、科、すべて從前の芝居に於て見ること能はざる新式なれば、煙に卷かれて感歎する者もありしが、大部分は急進の改革を絶對に否認し、此場の近習が膝行して御前へ進むを見て「芋蟲ごろ〳〵」などゝ冷罵を加へしも、其一つにてありき。此時舞臺内外へ花瓦斯を點ず。

明治九年の秋に出京して、開成學校の豫備門に入學し、翌十年になつて初めて東京の演劇を觀たのではあつたが、私が眞に全く新しい物を觀たと感じたのは、此時の舞臺面であつた。就中、中村仲藏の百姓權右衛門を團十郎の家康が松並木の海道で臣下に命じていたはらせる場の如き、何等悲劇味のあるわけでも何でもなかつたのだが、其淸新と純眞味とに撲たれて、私は覺えず落淚數行に及んだことを憶ひ出す。從來名古屋でばかり觀劇はしてゐたが、故團藏の九藏をはじめ、東京役者も第二流三流のは相應に知つてゐたから、此時までは强ち未見の物に觸れたやうにも思はなかつたのだが、此時ばかりは、譬へば、明治末年期の靑年たちが初めてイブセンの翻譯物に接した時のそれに類する感じがしたのでもあつたらう。蓋し所謂活歴の第一期は此劇で始まつたといつてよいのだ。

按ふに、依田氏と團十郎との親炙は此時分からで、其結果として、十二年二月に「赤松滿祐梅白旗」といふ同氏立案河竹脚色の史劇が新富座の舞臺に上つた。これは作としても餘り面白くはなく、世評は勿論芳しくなかつた。それにも拘らず、此前後から學者連や顯官や其他の紳士連の容喙が次第に頻繁になつて來たので、九代目の有職故實熱は、それにつれて、甚しくなつて、丸本物の演出にすら故實穿鑿の扮裝や大道具、小道具の寫實的提供を强要して、一部の觀賞を博すると同時に、他方に舊劇通の非難を招いた。其一例は例の「先陣館」の盛綱の場合で、「續々歌舞伎年代記」を見ると、左の如くある。十四年十月の春木座の上演である。

中幕の盛綱は在來の錦の裃でなく、初めが烏帽子に鎧姿、註進の受けには鎧下　實驗の場に、道具を換へて、黑がまちの

上段の間さなし、裃へも華美なる蝦夷錦萌黄地に金糸の縫紋ある麻の社杯、かつらは無論いつもの羅紗ばりのナマジメでなく茶筅にて、しぐさも宗十郎とは全然行き方が違ひ、一種言ひ知らぬ妙ありて、大喝采を博したり。

併し第一期の活歴で、最も多く一部の新好劇家を狂喜せしめたのは十七年十一月の新富座の中幕「紅葉時平家世盛」の重盛諫言であつたらう。是れ程の重盛は本物の重盛以外には又と無からうとまで讃美されたものだ。私が本郷の眞砂町十八番地に住んでゐた十八九年頃に狩野芳崖翁が、小倉袴の腰に辨當箱をぶらさげて、初めてだしぬけにやつて來て、座敷へ通るや否や美術談をはじめた時、「當時の劇界としては九代目に竝ぶ者はない。彼れは眞に藝術の眞訣を解してゐる。彼れの重盛の如きがそれだ。けれども惜いかな、一點の瑕瑾がある。それはあの足取がいけない。あれは是非斯ういふ風に歩かねばいけないのだ。」といひつゝ、すぐ立つて狭い八疊の間で歩いて見せてくれたなぞも、當年の知識階級に於ける九代目の人氣を裏書きするエピソードである。

重盛以後に於て一代のセンセーションとなり、延いて今日までも其餘威を遺してゐるのは、例の「高時の天狗舞」だ。あれは十七年十一月淺草西鳥越町に新築された猿若座の開場興行の中幕で、外題は「北條九代名家功」といつた。これが初期活歴の絶頂でもあつたらう。（活歴といふ名稱を櫻痴以後のやうに思つてゐる人もあるが、それは間違ひだ。あれは、魯文の造語で、明治十二年ころから使用されてゐる。）學者や畫家が夢中になつて、求古會といふを起して故實しらべの專賣局見たやうな役廻りをする。團十郎も夢中になつて、高尚がりの鼻息荒く、舊式劇通を煙に卷いた。假名垣魯文が九代目の高慢振を嘲つて「歌舞伎」の誌上に芳幾をして鳥羽繪式に天狗舞の場面を畫かしめ、木の葉天狗の各々の翼や袂に、依田だの、黒川だの、小中村だのといふ字を書き加へて、團十郎の似顔の高時が彼等のいゝ、おもちやになつてゐるのを諷したのは此時であつた　又、北條も九代、市川も九代と團十郎の增上慢を憎んで、其亡滅の前兆だなぞといやがらせをいふ舊劇通もあつた。



歌舞伎新報第四百八十四號所載　　芳幾畫

所謂大新聞記者が實際的に演劇刷新に干與したのは「報知新聞」の主筆藤田茂吉氏の「文明東漸史」を默阿彌が脚色し、團十郎、左團次で演じたのが初めてなのだが、此時なぞも有名な文人、畫家は總見物をするといふ騷ぎであつた。十九年五月の事だ。此接觸は團十郎の高尚熱をますく〳〵高ぶらせたと同時に、今までは殆ど劇に親炙せなんだ知識階級の或者をして舞臺裏、殊に作者部屋に近づかしめた結果、狂言作者の無學又は不見識を新聞紙上で攻撃することが始まり、一々名は指さなかつたものゝ、首座作者であるだけに、默阿彌が主として罵倒されてゐる氣味であつて、まことに氣の毒であつた。よくは記憶しないが、多分此十九年の秋ごろであつたらう、私が「讀賣新聞」で默阿彌の辯護を試みて末松謙澄氏と一二度論を鬪はしたことのあつたのは。

其末松氏の主唱で、――同氏は演劇改良の公開演說なぞもした。――ちやうど其頃演劇改良會といふ會が出來た。此事は既に「それからそれ」の中にも、又其他でも書いたから、くはしいことは今は省くが、只一二ケ條特筆しておくべきことがある。それは、第一期の演劇改良主義は、最初は單純な英雄烈婦、忠臣孝子本位主義や優美高尚專一主義とに結び附いた有職故實適用の正史活現主義たるに過ぎなかつたのだが、こゝに至つて一歩を進めて、やゝ複雜な、やゝ根本的な國劇革新主義と成熟しかけてゐたといふことである。

其趣意書中に掲げたる三目的は左の如くである。

（一）從來の演劇の陋習を改良し好演劇を實際に出さしむべきヿ。

（二）演劇脚本の著作をして榮ある業たらしむべし。

（三）構造完全にして演劇其他音樂會歌唱會等の用に供すべき一演技場を構造する事。

此中第二條に關して言つてゐる所は、われ〳〵をして實に今昔の感を深からしめる。

近時の脚本作者を見るに、其人は一も學術文章の士なく、徒らに陳腐の思想を左右彌縫し、以て下等人民の歡を得るに力め

ざるなし。蓋し本邦に於て脚本作者は俳優と共に士君子の爲に齒ひせられず、心を盡して妙案を構造するも、絕えて榮譽を一身に來さず、而して其利益の如何を問へば則ち、版權及び興行權の法備はざるが故を以て學術文章の士の勞を償ふに足らざるに因れり。宜しく舊習をして一洗し、脚本著作の實を明かにして榮譽を其業に歸せしむべし。

此演劇改良會員の或者は、いや、むしろ其最も有力なる分子は、——外山正一氏なぞは、末松氏と共に其代表者であつた——わが劇場並びに舞臺構造を悉く外國のそれと同一にせんことを主張し、女形を廢して女優となし、花道、廻り舞臺、チョボ、下座、附け等をも全廢し、扮裝、科介、セリフ廻し等の不自然をも改め、音樂劇的、舞踊劇的の分子をわが劇から撥無して、純然たる一種の科白本位の劇を拵へ上げようと望んだのであつた。で、其趣意書中に、在來の劇場にては到底改良の目的を遂ぐる見込みなければ、根本的に新式なる一演伎場を建築すべしと前提し、そこにては、時に來航の西洋俳優にも其技を演ぜしめ、又歌唱會、音樂會等をも催すべしと主張したり、在來劇場の粧飾の粗惡、時間の冗長、劇場出入の混雜等を難じたりした。だから、此時までは第一期活歷の急先鋒として活動してゐた依田學海並びに其內助者川尻寶岑二氏合作の「吉野拾遺名歌ノ譽」が此改良會の銓考に懸つて、まだ〳〵生ぬるい作だとして空しく落第させられてしまひ、依田翁をして、これより、其以前とは違つて、次第に失意に陷らしめた。翁が、其末年には、極端な活歷式寫實主義を唱へて、口を極めて舊劇を又舊劇好きの新聞劇通を罵倒し、花道廢止論などを高調したのは、或は此前後の感銘が無意識の間に釀し做した反動ではなかつたかと思ふ。

其頃の「歌舞伎新報」を見ると、下の如き記事がある。

去る十六日（十九年十月）築地の大椿樓に於て依田百川先生の新作「吉野拾遺名歌譽」といふ改良狂言の本讀がありて、會主末松謙澄先生を始め會員諸氏市川團十郎も席に列なり、伊藤、山縣、兩伯爵の夫人、松方、伊藤の令孃、其外貴婦人、貴顯、紳士も來會ありて、作者依田君と川尻君がはる〳〵に正本を讀上げられし其脚色は……伊藤伯爵は會員諸氏に向はれ、演劇改

良も過ぎたるは猶及ばざるが如くならざらんことを企案すと語られしとか。……劇場新築は木挽町汐の鐵道に接近せし場所にほゞ定まりし由。

如何に一部の改良論が急激的であつたかゞ之によつて察せられる。また櫻癡居士を立作者に聘して建築された第一期歌舞伎座の由來も同じく之によつて跡附けられるわけである。

「吉野拾遺」は、平叙式の史劇で、今日の目で見れば平々凡々の作だが、當時としては、たしかに或特色があつた。すなはち第一期活歴の――少くとも依田氏らの主張の――代表作たるに適するものであつた。多分、根本の立案並びに脚色は主として川尻氏の手に成つたであらうが、主人物たる楠正行、同正儀、辨内侍、伊賀ノ局などの性格及び其セリフには明かに依田氏の努力が見えてをり、從來の狂言作者らの作とは全く撰を殊にしたもので、此意味に於ては、一紀をわが史劇に劃したといつて當然であらう。曩に「平家物語」を土臺にした重盛諫言の長ゼリフが一代の耳目を聳かしたが、それを除いては、此作の正成の獨語、正儀との問答の如きは、其雅語を正しく且つ七五調を離れて、ところ〴〵漢文讀下し式に綴られた點に於て、異彩でもあり、品位も高く、讀んで快いものであつた。「汝の異見ひと一わたりはことわりなれど是れには深き子細あり。正行平生身弱くして云々……今より數年の生命を保たんこと覺束なし。迚も死すべき命なり。あはれ戰場に屍を曝し、云々……是れわが死を決せし所以なるぞ。わが心既に決せり。再び諫むること勿れ」などゝ毅然として言ひ放つ呼吸の如きは、狂言作者輩の掛けても及ばぬ新修辭であつた。又、內侍と伊賀の局の問答の如きも、在來の劇の烈婦、淑女とは、少くとも其態度、口吻の上に大差があり、「月卿雲客の人々も雲の上とは名のみにて、軒漏る雨も防ぎかね、苔のむしろの起き臥しに御身になれぬ賤のわざ」云々と、漢語、雅語を自在に操縱する局のセリフの凛々しさが何となく其人らしく、當時としては、破天荒であつた。作意には餘り感心もせなかつたが、此等セリフだけは嬉しく、私と竹のやが、廿三四年ごろ朗讀法を創唱した際にも、此作を其テキストの隨一に擇んだ。

依田氏は此外にも史劇の作が若干あり、川尻氏に至つては更に一層多く種々の脚本を書いたのであつたが、さうしていづれも團、菊、左を目的とした作であつたが、それが大歌舞伎の舞臺に上されたのは、其中果していくつあつたか？前者の「文覺勸進帳」は九代目が演じたが、それは狂言作者の手で大ぶ改作した上であつた。要するに、二氏ともに――其作も餘り香しくはなかつたが――其勞を報いられずに終つた。

依田氏の作に關しては、第一期の「早稻田文學」で沙石子が數號に亙つて評してゐるから參照されたい。

演劇改良會に對しては、それが餘り急進主義であり、學者一派の理想に偏したものであつたゝめか、興行策としては常に上流に接近せんと力めてゐた守田勘彌も餘り好感を持つてゐなかつたらしい。團十郎さへも、前の有職故實主義に共鳴したやうではなかつたから、菊五郎は尙更、點阿彌の如きは、「吉野拾遺」に對してすら「まことに結構なお作だが、團十郎が三四人ゐねば演ぜられかねる」といふ意味の事を何人かに洩して、暗に急激の革新はまだ〳〵今の俳優らの堪へ得ない所と評してゐた。

それやこれやで、此會は頓挫し、いつとなく中止となつたが、此會の正會員で、今尙生存してをらるゝは、恐らく指を屈するに堪へぬほどであらう。澁澤子爵、穗積陳重男、矢野文雄氏ぐらゐなものかと思ふ。今のうちに是れらの人達に質さないとくはしい事は分らなくなるだらう。かくて廿一年になつて、それとは別に演藝協風會と稱するものが、三宅花圃女史の嚴君田邊太一翁を會長に戴いて組織された。これは其會名の示す如く、前記改良會ほどにアンビシヤスな抱負、主張を持つたものでなかつたせいか、興行者も俳優も諸藝人も、すべて贊成者に加はつてゐた。鹿鳴館での其發會には、私も招かれて列席した記えはあるが、どういふ緣故で往つたのかは殆ど記憶してゐない。或は、花圃君が其處女作「藪鶯」を（私の校閲か何かで）公けにされた後であつたのだから、田邊家の好意に因つてゞあつたか？いやいや、さうではない。たしか掛川銀行頭取、故永富謙八氏の紹介に因つてゞあつたらう。私は其頃同氏の依賴で其子息雄

吉君（後に郵船會社重役）や其他の少年學生たちを眞砂町の宅へ預かつて監督をしてゐた。多分其關係からであつたらう。ところで、私自身の此會の記憶は甚だ朦朧としてゐるが、幸ひ長田秀雄君が其「新劇回顧錄」の中に此發會式（七月八日）の事を簡短ながら要を得て書いてをられるから、借用しよう。

當時の鹿鳴館は朝野の紳士淑女の華やかな交際場であつた。舶來のシャンデリアの輝く下で高貴な絨氈を踏んで、明治初年の日本人たちが、古めかしい洋裝でシャンパンの醉ひに任せて、恣まに踊り狂つた場所である。この鹿鳴館を中心としたのが、明治文化史上並びに政治史上に有名な所謂鹿鳴館時代である。その時の來賓には、皇族方を始め要路の貴顯紳士で、妃殿下は勿論、令夫人同伴であつたから、總員千餘名に達して、非常な盛會であつた。守田勘彌は此會に對しても、やはり反對の意見を持つてゐた。さて、開會は午後一時卅分、番組の通り、花柳師弟の「四季三番」を先づ第一に演じ、終つて休憩、それから立食の饗應に移つた。そして、餘興として、團十郎の娘實子、ふき子が稅所篤子作歌、杵屋正次郎夫妻節附、團十郎振附の踊を踊つた。それが濟むと、高崎正風作歌の「かざしの菊」を團十郎が踊り、物集高見作歌の「水の江」を菊五郎が踊つて大喝采を博した。

たしかに莊重であり嚴肅であつた。が、餘興の大部分が、私の頭には殆ど何等の印象をも遺してゐない。

念の爲に其頃の「歌舞伎新報」を見ると、右の「式三番」は淸元延壽が語つて、立方は花柳壽輔と同芳次郎と藤間勘右衛門とであつたことが分る。私も此踊りの幻影だけは朧氣ながら目に遺つてゐる。燕尾、桃林、圓朝、小さん（先代）の講談、落語のあつたことも憶ひ出される。併し小さんが例の得意の將棊の殿さまを、あの狆が嚏したやうな顏で、平氣で多勢の華族連を鼻の先に並べておいて盛んに辨じ立てた皮肉さだけが頭に遺つてゐるばかり、其他は記憶せない。此間ふと舊い懷中日記の斷片を反故堆裡から拾ひ出した。と、七月八日の條らしく「鹿鳴館演藝矯風會」として次ぎの如き零碎な下らん觀察が鉛筆で走り書きがしてある。餘りに些屑で詰らないが、わざと一字も改めないで、其儘を錄して見よう。

入來る奴いづれも揚々として得色あり招待されて官邸に登るといふ趣あり
藝人の洋裝し羽織袴きたる其あるき振常に似ず紳士然としてことさらにしとやかなるもをかしきにこと行きあひて會釋するを見得ゝ如く見せびらかす眞の紳士のふるまひ尙をかし
わざと時々に鼻の上へ眼鏡をつまんで載せ遙かに後の方を見かへり見渡す洋服の少孃子のふるまひ果して何物をか見んとして然するか又は何の爲もなくて見せびらかすか
ドキマギするレーデーを身を開いて先きへ通し振りかへりて後邊なるを案內し、立食の席へ件ひゆくある少孃十の心得顏
前なるレーデーの椅子の背に倚りかゝり耳こすりする若紳士
書肆の靑眼鏡黑フロック靴音最も朗かなる活版所の主人容貌若殿さまに似たる俳優の少年團洲のスマシ梅幸の輕卒我こそ今日の來目の目的なりと思ひ入りたるさまを見せて

と只これだけでは、下らぬアラさがしで、たはいもないわけだが、事實、此會に對しては、十分の同感を持つてゐなかつたので、それで印象が薄かつたのでもあらう。

此會の催しは此後も尙二三回あつた。其際の見聞も甚だ漠然としてゐて、特に錄する程でもないから今は省いて、故あつて、此會が改造されて日本演劇協會となつた二十二年九月以後の事をもう少し話さう。

第一の演劇改良會は、むしろ餘りに急進的で時世に先んじ過ぎてゐた氣味であつたが、第二の演劇矯風會はまた餘りに妥協的で、二回三回と重なるにつれて、ます／＼俗化を加へていつた。其證據には其廿一年十二月の大演習の久松町千歲に於ける出し物を見ても分る。それは團、菊、左其他の名優によつて演ぜられた「先代萩」三幕と「鞘當」で、何等尋常興行と異なるところもなかつた。此俗化もまた其改造を促した一面の理由であつたらう。

今までは、演劇革新事業の傍觀者、又は通りすがりの批評家たるに過ぎなかつた私が、此時からは、會の專務委員中に

親友や知人が多く居たゝめに、勸められて文藝委員中に加はつた。會長は子爵土方久元、副會長は子爵香川敬三、事務委員は岡倉覺三、岡野碩、太田原則孝、高田早苗、下村善右衛門、森田文藏、關直彦の諸氏。文藝委員は岡倉覺三、依田百川、高田早苗、坪內雄藏、黑川眞賴、山田武太郞（美妙）、古河默阿彌、小中村淸矩、饗庭與三郞、森田文藏、森林太郞、關直彥、關根正直、鳥居忱、尾崎德太郞（紅葉）、川尻寶岑、須藤光暉（南翠）。伎藝委員には、俳優としては團、菊、左、振附としては花柳勝次郞（黑勝）、藤間勘右衛門、其他は講談師、落語家、義太夫、長唄、淸元、一中、常磐津琴曲等の代表者。又演習委員としては、間野秀俊（「書生氣質」の出版書肆晚成堂の蔭の主人）、守田勘彌、田村成美。實際上の專任理事として活動したのは岡野碩氏で、この人は私が大學卒業前から關係してゐた本鄕の進文學社で學んだ人であつたから、其關係からも私は此會には緣故が深かつた。

文藝委員の顏觸れでも察せらるゝであらう如く、此協會は、種々の點に於て、前記二種の劇の革新會とは異なつたものであつた。第一に、それが彼の極端な寫實主義でも、活歷主義でもない點に於て、第二には、其英雄烈婦、忠臣孝子本位の優美高尙專一主義でもない點に於て、第三には西洋劇化主義でなく、飽迄も國劇の特長を保存しつゝ藝術としての向上を圖らうと望んだ點に於て。

此會の事實上の主腦者は高田、岡倉の二氏であつたといつてよい。二氏は、其頃に在つては、文藝の眞旨を理解せる點に於て、明かに群を拔き、內外の文學藝術の造詣に於て、前々の劇改良論者の、或は國劇の知識を缺き、或は寫實主義に偏し、或は劇を一圖に矯風の機關視するやうな淺薄さとは同日にして論ずべからざるものがあつた。もう其時分は內々未來の大臣を夢見てゐたのかも知れないが、學生時代には新富座を缺かさず觀て、雜誌「歌舞伎」の每號を待ちこがれた程の默阿彌贔屓、團菊禮讃の半峯、後の美術院運動を旣に胸中に畫きながら、傍ら此方面にも食指頻りに動いてゐた天心、兩者の意氣、理想は期せずして投合したらしく、前の二改良會の主張の行き過ぎたり偏したりしたのを矯正

し、國劇の長所を保持しつゝ而も時代に副つて向上せしめようといふ意見を抱いて、毎年一回づゝ諸演藝の演習を行ひ且つ特に十二月に於て、文藝委員の新作に係る新劇を上演すべしといふ會規を作つた。特に新進の作家中より脚本を募るといふ此一事だけでも此會の旨が在來のとは違つてゐたのである。

此頃から狂言作者以外の劇作家が出はじめた。山田美妙齋は、たしか此の前後に單行本の形をした作を公けにしてゐた筈だ。私も窃かに一作を試みようとしてゐた。竹のやも南翠も共に野心勃々としてゐた。

と廿二年九月初旬、私は當時「讀賣」の主筆であつた半峯居士から招かれた。私は其頃「讀賣」の客員であつた。往つて見ると、用件は日就社の改革に關する事と演藝協會の大演習の事で、「此年末の會には是非何か新劇を演じたいから君何か書け」といふ注文なのだ。其頃は、內心小說から劇へ轉じようといふ考へはありながら、早稻田の專門學校其他で數十時間の英語訓讀の外に西洋史や不得意な英國憲法史の講座を受持つてゐて其準備に忙しく、中々筆を執る暇が無いので、一旦は固く斷つたが、食事時となつて、酒肴が出て、一二盃掛み交すうちに、ふと興に乘じて鎌足と中の大兄を主人物にして史劇を書くと面白いと口走つたのが元で、居士に煽てられ、少しく心が動いたが、尙確答をせないで歸つた。すると其十四日に芝濱の離宮で演藝協會の委員會が開かれた。會長土方子をはじめ副會長香川子、事務委員、文藝委員、技藝委員皆集つた。私が團、菊、左や今の歌右衛門の福助らに紹介され、間近に其素顏を見て物を言つたのは其時が初めてであつた。菊五郞は氣輕に、もう三四度も會つたことのあるやうに口をきいたが、他の手合は殆ど無言で頭だけ下げてゐた。

此時も高田、岡倉の二氏に又頻りに煽てられたり强要されたりしたが、まだどうも自信がないので固辭したところ、散會の歸り路竹のやも同伴で二氏に引張られて下谷の蓬萊亭で二次會となり、いづれも酒客とて氣焰高く、話面白く、其上半峯居士が私の迷惑がつてゐた「英國憲法史」を代つて引受けようといふまでの手詰めとなつて、退ッ引きな

らず、とう〳〵一旦は承諾し、それから約一月ほど掛かつて、四幕物を二幕だけ書き上げたが、われながら不満でもあり、不安でもあり、仕上げかねてゐたうちに、他に少々妙ならぬ事情が生じて、いよ〳〵氣が乘らなくなつてしまつたので、半峯居士に對しては、何ともすまなかつたが、とう〳〵又辭退を申し出た。其作といふのは、後に文藝協會の第一公演の春木座へ「大極殿」と外題して、杉谷代水に改修案を與へて筆を執らせ、更に私が筆を加へたあの作の原本である。あの際、當時脱稿した二幕ほどゝ三幕大詰の筋書をも代水に渡してしまつたので、今は自分もくはしいことは忘れた。もとより言ふに足らぬ半產の作だ。よし書き上げ得たところで、多分上演はされなかつたであらう。何故なら、同じく此會のためにとて、すぐ其後、竹のやも團十郎本位で「太田道灌」を——但し是れは寧ろ筋書に近いものであつた——書き、南翠も助六を主人公にした新作を書いたが、二作とも上演されなかつた。

といつたやうな次第で、折角の演劇協會も、其理想が比較的立派であつたにも係らず、それが殆ど少しも實現されるに至らないうちに解體の餘儀なきに及んだ。それにはいろ〳〵複雜な事情もあつたらうが、要するに時機がまだ早かつたのである。

餘り長くなつたから、先づ此邊で段落としよう。

（十四年十一月下旬）

『硯友社側面史』

纏まらぬ記憶

——明治二十年から同三十年まで——

江見水蔭

自分が明治文壇を語る材料としては、飛々に記した不完全な日記と、自己を中心とした新聞雜誌の切拔記事と（批評、逸話、廣告文、豫告文等　それに少數な故文士の書簡　その他不秩序に持傳へた少數な當時の文學雜誌等を參考にして、大部分を古い記憶から喚起するより他には無いのであるが、扨て其記憶位信用の出來ないものは無いので有つて、事件が前後する　人間が混線する。迚も正確には語れぬのが通り相場。——では有るが、自己を中心とした事は、比較的間違ひが少ないので（自分で自分を買ひ冠つたり何かは有らうとも）それで、明治文壇の全部を語るといふやうな、然うした大膽な仕事は止めて、其代り、露骨に自己を僞はらずに、有りの儘に書いて見る事にした。自然其爲には自己及び自己の關係した現友社を辯護するやうな記事も出て來るで有らうが、今更時效に成つてゐる裁判に向つて、無罪に成らうとする野心なんか毛頭も無いので、唯それは誤解されてゐるのが不愉快でも有り、正しい事實を正しく語る順序として、必然的に出て來るので、此點は如何か公平に判讀して欲しいのである。

硯友社と自分

明治二十年の頃『日本文藝雑誌』といふのが、神田の書肆澤屋（後に敬業社）から出てゐた。それに自分が水蔭亭居士の名で『賤のふせや』といふ韻文擬ひの——今の歌劇脚本に近い——小説を載せた。これが自作の活字に組まれた最初の物で有つた。

其時は小石川久堅町の杉浦重剛先生の稱好塾にゐて、同塾内の『毎週雑誌』といふ各自筆耕の同人雑誌に執筆してゐたのだが、杉浦先生と敬業社とは密接の關係が有つたので、『日本文藝雑誌』の編輯も塾生が遣つた。その任に當つたのが自分よりは年長者の川那貞太郎氏で（號樂庵——日本新聞創刊からの記者で、後に高橋健三氏に附いて大阪朝日に入社。明治四十年歿。）此人が『毎週雑誌』から自分の『賤のふせや』を拔摘して異れたので有つた。自分はそれを知らなかつたが、雑誌が出たので驚喜した。

『おう、アレけえ。おもしろいから出しといた』

こんな口調で同氏は輕々に取扱つたのが、自分に取つては比較的年少で（十九歳）文壇に出る端緒を得たので有つた。現今のやうに青少年の寄稿を歡迎する雑誌は『頴才新誌』の他には絶無の時代に、諸大家と共に名を並べて、自分の文章が活字に組まれたといふ事は、當時に於てはどの位光榮で有つたか知れなかつた。

この川那邊氏は、其頃先生の口授を筆記してゐた。先生は礫川居士、安政居士、兩極道人等の匿名で『讀賣新聞』の論説欄に毎日寄稿してゐられたので——とは知らずに、巖谷小波君が、漣山人の名で、束髪論を鬪はしたのは此時代の事だ。

先生の御友人には文學思想に富んだ方が多かつた。坪内先生は別として、磯野德太郎先生（號無腸）西松次郎先生（號

芳菲山人）などで、その西芳菲先生から杉浦先生の處へ『我樂多文庫』ノ第一篇を送つて來た。（それは西先生が長崎縣人で有るので、同郷關係で石橋思案君の方から廻したものか）杉浦先生はそれを先づ川那邊君に示された。『こんな事は江見が好きだから、江見にも見せたら如何か。』然ういふお口添の有つた順序で、自分の手にも廻つて來た。

それは勿論非賣品で、會員組織なので、小說もあれば、俳文もある。情歌、狂歌、俳句もあると云つたやうな編輯振りで、明朝活字で組んだ小形の、薄い雜誌で有つた。

『どうや、二人で會費を一口だけ拂ひ込んで、一人のツモリで加入しよか。』

川那邊君は然う云つて笑つたので有つた。けれども實行されずに、それは過ぎたので有つた。

其後巖谷小波君が入塾したので、既に其時硯友社に入社してゐた同君から、會員と成る事を勸誘された。それで同君の紹介で早速社費毎月拾錢宛納入する事に成つたが、此時（明二十一年五月）から、非賣品『我樂多文庫』は賣品として世間に打つて出たので、正札附金參錢で買へるので有つた。同第三號（七月六日發行）に新加入社員として水蔭亭雨外の名が發表されて、狂歌を一首、登載の光榮に浴したので有つた。

尾崎紅葉君を初めて飯田町五丁目二十三番地に訪問したのは、小波君に連れられて行つたので、同君は未だ獨逸學協會へ通つてゐたので、僕は神田の東京英語學校の歸りに、猿樂町へ廻つて、同君の出るのを待つて、共に行つた。それは明治二十一年六月十四日の事で、幸に其時の日記がある。

――雨。寢過ぎる。學校へ行く。夫より漣を誘ひ、飯街に紅葉を訪ふ。三時間、談話して歸る。――

此日、小波君は洋服に蛇の目傘を差して行つた。僕は傘を持たずに、菅笠を冠つて行つた。これは決して奇行を好んだのでなく、其頃僕は傘を持たなかつたので。曾て遠足歸りに雨に遭つて、菅笠を買つたのを、其儘用ゐてゐるに過ぎなかつた。

けれども紅葉の目に映じた二人は異様變風に見えたかして、翌日寄せた手紙には、袴穿いて菅笠冠つた自分の漫畫と洋服で鞄を肩から提げた小波君が蛇の目傘を差してゐる漫畫とを書いて、それに。

山吹の里の小田もる案山子かな
かはほりは未だ世に出でず五月雨

と二句を賛し、更に別面に。

水蔭亭の主人は太田資持入道の從者とも見參らせし。かく野蕃なる御姿にて「櫻かな」の艶文、ハテ人は見かけによらぬもの。漣山人はロンドン花街の助六と見へたり。龍頭蛇尾といふ事よくきく事ながら、蛇の頭では尾は蚯蚓ではないかと氣づかはし。
御兩人さま共に奇人傳の人物と御見受け申し候。

此文中に『櫻かな』云々。これには自分としての追懷がある。『賤のふせや』は上の卷だけしか世に出ずして『日本文藝雜誌』は潰れたので有つた。然うとは知らず、博文館發行の『日本之女學』第壹號に轉載されたのは、明治二十年の秋で有つた。自分は早速博文館へ手紙を出して、其續稿も掲載して貰ひたいといふ事を、甚だギコチなく、堅苦しく申込んだので有つた。轉載されたのは實際嬉しかつたので、今なら光榮がるのだけれど、何分其時分は杉浦の塾で、亂暴者で通つてゐた爲に、その嬉しい感情を僞つて、併し、是非その續稿を採用して貰ひたいやうな、變な名文？　を書いて送つたので有つた。此時の編輯局は內山正恕君がゐただけで、坪谷水哉君は未だゐなかつた。館主は大橋佐平老人で、新太郎氏は未だ上京されてゐなかつた。斯うした因緣で、引續いて『日本之女學』に小說及び新體詩を寄稿して、紅葉君を初めて訪ふた時には『櫻かな』といふのを連載中で有つた。故に其頃から大衆を目的として大部數を發行する婦人雜誌に小說を寄稿し、僅少でも原稿料を取つてゐるといふ點に於て、紅葉君よりも僕の方が、先輩？　で有つたのだ。

現代では何んでも無い事で有らうが、二十歳の荒ッぽい書生ッ坊が、艶ッぽい小説を書くといふ事は、確かに其頃の驚異で有つたので、さればこそ『人は見かけによらぬ』云々と書いたので有らう。（此手紙現藏）

それから間もなく（學校暑中休暇前）僕は小石川の砲兵本廠脇を通過してゐると、壹岐殿橋の方を降りて來る兵士の群が有つた。能く見ると、ソレは豫備門を今年で卒業するといふ連中が、初めて兵式體操で訓練されて、何處かへ行軍した其歸途なので、中に尾崎が背嚢を負ひ、帯劍で、銃を擔いで、汗ダク／＼でゐるのを發見した。

早速その姿を漫畫にして、惡摺り風にして、紅葉君に出した處が、其返事が來た。無論畫入りで有つた。

「畫」水嚢が筒袖に袴を穿き菅笠を覆してゐる處。

雜兵の中にまじりしはマサシク紅葉山人。ハテ艶けしな姿じやナア。

行軍の道すがら方様に出逢しとは夢にもしらず。御手紙にて初めて承知いたし候。あのやうな姿は人に見せぬものにて候を、生憎慧眼にかゝつては今更詮無し云々。

「畫」紅葉が武装の圖。

山人歸路疲勞空腹喪家狗の圖。

弓矢されど武士にはあらぬ案山子哉

此後（七月一日）再び小波君と紅葉君を訪ふた時に、初めて川上眉山君に逢つた。浴衣に角帯で、學生とは見えず、如何しても大店の若旦那で有つた。

八月二十三日に中坂（飯田町二丁目二番地）の硯友社へ初めて行つた。此時に石橋思案君と初の對面で有つた。後又十月二十日に行つた。其所へ社員の香夢樓緑君と『出版月評』の編輯を打合せるとかで、石橋忍月君が訪ねて來た。

忍月君は、小說家でもあり、又批評家でもあり、主として『女學雜誌』に筆を執つてゐて、既に『露子姫』といふ單

行本を春陽堂から出版してゐて――硯友社から漸く遠ざかりつゝ有る山田美妙齋君などゝ、世間から文士として認められてゐたので有つた。(紅葉も思案も小波も、それは一部の人には知られてゐても、單に同人雜誌中の雖なる者に過ぎなかつたのだ。)

『都の花』それが金港堂から出て、日本に於ける文學雜誌の最初のものと評判されてゐた。この方へ美妙君は買收?されたので有つた『新小説』及び『小説萃錦』それは饗庭篁村、須藤南翠、森田思軒三氏の主幹で、春陽堂から發行されて、前者には名の如く新小説を、後者には新聞小説として好評で有つた大家の作を載せるといふ陣立で、大分文壇も賑はしかつた。それに刺戟されて博文館からも『やまと錦』といふ文學雜誌を出すから、是非その第一號に、自分にも寄稿するやうにといふ事で有つた。十一月七日に塾へ新太郎氏が訪問された。同君は塾の亂暴狼藉なのを見て肝を潰されたので有つた。障子は締切つて有つても、大きな穴が穿いてゐるので、開けずに出入りの出來ると云つた狀態で、下駄も穿いたまゝ座敷の縁側まで歩かぬと、ウツカリ脱いだら忽ち誰かゞ穿いて行くといふ亂暴さで有つた。

自分はそれまでに『日本之女學』へ引つゞき『鶯く鷗』といふのを寄稿してゐたが『都の花』や『新小説』には、縁故が無いので、實は如何にかして本舞臺を踏んで見たいと念じてゐた處なので『やまと錦』發行の事を聽いて、どい位勇跳したか知れなかつた。それで『花の杖』といふのを一生懸命で書いた。『花の枝』でなく『花の杖』といふ新熟字を考へなどした。(此前からの『櫻かな』にせよ『鶯く鷗』にせよ、其當時としては確かに破格な命名で、同人間では問題にされてゐた。)

此原稿を新石町? の博文館編輯局へ持つて行つた時に――土造形りの二階屋――其係の人として應對されたのが、廣津柳浪君といふ事が後に知れた。

處が、その『花の杖』は落選した。その時の失望といふものは無いので有つた。

十二月に成つて杉浦先生が『君、小說の學校といふのはトテモ出來まい。幸ひ今度美術學校といふのが出來る。友人の岡倉覺三君など關係するのだから、つまり小說も藝術だ。美術に緣が有るから、行つて見たら如何か。』その御言葉に從つて早速入學の手つゞきに及んだが、繪の畫けない僕が落第するのは當然過ぎてゐた。

二十二年に入つて、自分はヤケ氣味でも有つたが、萬卷の書を讀むより千里の道を行くべしで、それも當時の洋行熱を避けて、日本內地漫遊といふのに出立した。

けれども、徵兵檢査の爲に中途で止めて、鄕里岡山市に歸つてゐた。此間に『我樂多文庫』は『文庫』と變り。硯友社から吉岡書店の手に移つた。(編輯は依然として硯友社)それから同店からは『新著百種』が發行されるやうに成つた。それを鄕里で見てゐると、自分としてはヂツとしてはゐられぬやうな氣がするので有つた。

小波君からの書信に從ふと、硯友社も餘り人を入れ過ぎたので、中には不良分子も生じて來たので、一先づ解散して今では數名しか殘つてゐない。併し、他の『都の花』などとの對照上、いつもの同じ顏觸では妙でないから、新顏として何か君からも書いて送るやうにといふので有つた。

それは此方から願つても無い事なので、早速『旅畫師』といふのを書いて送つた。それが幸ひに改革された『文庫』の初號に乘つたので、どの位嬉しかつたか知れなかつた。それと同じ號に『柳櫻』といふ小說を、柳浪子といふ名で出して有つた。それが廣津柳浪君で、シカモ博文館で顏だけは見知つた人とは、覺りやうが無いので有つた。

これで景氣附いた自分は、猶小波君に向つて、手紙を出して『僕も老母一人を抱へてゐるので、早く一家を成したいのだが、全國漫遊は中止として、東京へ出たい。何んとか糊口を過す方法は有るまいか。』と相談を掛けて見た。

すると、それは恰好紅葉君が大阪へ行つてゐるで、同君に相談して見たら好からう。同君は坪內先生の紹介で、大阪の書店駸々堂の出版顧問といふ格に立つ筈で、其打合せに今下阪してゐるといふので、自分は不取敢岡山から大　に飛

び、紅葉君に逢つて志望を述べた處が『まア田舍にゐるよりは如何にか成るだらう。この駸々堂も赤本屋で、今まで碌な本は出してゐなかつたのだが、今度僕の『南無阿彌陀佛』（講談雜誌『百花園』に載せて好評の物）を出し、それから又『新著百種』のやうな物を出す計畫も有るのだから』と云つて與れたので、好意を感謝して、僕だけ先へ入京した。（再び杉浦の塾に入つた）

それから紅葉君の紹介の他に、奇縁にも塾友中の知人が駸々堂の番頭として上京してゐたので、同店出版の『小說無盡藏』第一篇に『白絲』を同『新著叢詞』第三篇に『花の杖』を登載し得て、僅少ながら稿料を得た。（二書共に『新著百種』の模倣で、單行本的雜誌で有つた。）

二十三年の一月には例の文士劇の元祖ともいふべき硯友社の芝居が小石川で有つた。それは曾て『新小說』に自分は明細に書き、又最近では、內田魯庵君の『思ひ出す人々』や、『中央公論』に柳浪君の書いた『飯田町時代』に、可成り委しく書いて有るので略するが。（但し兩君とも、少しばかり錯誤が有るが、大した事でも無いので、茲で訂正はせぬ。）然うした關係上、一旦解散した硯友社の前期では、自分はホンの一雜兵に過ぎなかつた。硯友社の創立時代には、殆ど無關係では有つたけれど、入社は正に明治二十一年で有つた。（『中央公論』に柳浪君が、自己と殆ど同時代に、入るともなく入れるともなく水蔭が共に入社した云々と、疑問附きで記載されたのは、正しく同氏の記憶違ひである。）

硯友社の勃興

創設者の一人で有りながら、甚だ不快な態度を以つて硯友社を去つた山田美妙君の事に就ては、既に發表濟みであるから略するが、僕が正統に硯友社に入つた時には、丸岡九華君が實業敎育界に投じた爲に、自然に社中とは遠ざかりつつ有つた。（私交上は依然としてゐたが、文壇的に）

同君は實に詩想豐かな、綺麗な文章を書いた人で、寧ろ詩人として韻文方面に成功すべきで有つた。同君を失つた硯友社は、全く大きな損失なので有つた。

一方に於て『新著百種』の『色懺悔』に於て、紅葉君が、雅俗折衷文に成功して、一躍美妙君の盛名を壓し、續いて同誌で小波君が『妹背貝』に、思案君が『乙女心』に柳浪君が『殘菊』眉山君が『墨染櫻』に成功してから、今までの如く部分的でなく、世間一般に硯友社が認められるやうに成つて來てからは、來り投じる者が大分多く成つた。

社中で門下生の一番先に出來たのは思案君で、平田錦蓑、石渡露紫、それから渡部乙羽の三氏などが、それで有つた。乙羽君就中秀才で『新著百種』に『露小袖』を出して、忽ち流行兒と成つた。（後博文館に入り大橋姓と成る）

紅葉系としては浮世夢助事北村三唖叉の名馬骨。これも『新著百種』に『石倉新吾左衛門』といふ滑稽物を出して好評で有つた。

自分は、といふと、紅葉君の諒解の下に、武内桂舟君の紹介で『都の花』に、時代小説『朝日川』及び旅行小説ともいふべき『檜木笠』を寄稿し、更に同堂から『新著百種』の向ふを張つて『小說叢書』といふのを出した、其第壹篇に『櫻月』といふ新婚旅行小說を載せて貰つた。

之より先に、宮崎湖處子が民友社から『歸省』を出版して、其當時の文壇を賑はしてゐた。實は自分の『櫻月』の方が早く金港堂へ廻つてゐたのだが、出版が遲れたので、同じ筋の小說ながら、湖處子君の爲に先鞭を附けられて、それをどの位遺憾に感じたか知れなかつた。

未だ此他に、紅葉君に依賴して、自分は新聞に、雜誌に、原稿を數種紹介して貰つたので有つた。

紅葉君は『來る者は抗まず、去る者は追はず。』それをモツトーとして居つたので、賴みに行けば快諾する。無沙汰するやうに成つたからとて、それに向つて何んにもしなかつた。北村三唖君の事に就て、魯庵君は『思ひ出す人々』の中

に、故人を傷けるやうな事を一寸書いてゐるが、それは三唖君の片口を聽いたゞけなので、僕は事實に於て三唖君晩年の事も能く知つて居り、及ばずながら少しは世話をした一人であるが、三唖君が紅葉君の感情を害したといふ事情は、他に有るので、それを委しく書く事は、三唖君を傷ける事に成る。それを明白に書けば、紅葉君が現に魯庵君の爲に傷けられてゐる以上に、三唖君の古疵を發表するやうに成るので僕は、何も云はぬけれど、全く紅葉君は『來る者は拒まず、去る者は追はず。』斯うした抱擁力が大きかつた爲に、硯友社が一大盛力を自然々々に張られたので有つた。論より證據、僕などは何回紅葉君と衝突したか知れない。私交的にも、文壇的にも、併しながら最後まで硯友社の同じ仲間として通したので有つた。

硯友社の勢力は、紅葉君が『春陽堂』との握手と『讀賣新聞』の入社とに依つて、自然に擴張した。別働隊としては柳浪君及び自分が金港堂の『都の花』に奮闘し、又博文館の『日本の文華』に小波、眉山二君が活躍したからでもあつた。

春陽堂は主として、篁村、南翠、思軒三氏の他に、南新二、幸堂得知、宮崎三昧、前田香雪諸氏の作を歡迎してゐたのだが、主人の鷹城和田篤太郎氏が見る處有つて、硯友社に秋波を寄せたので、其最初に口の掛つたのが小波君で『新小說』に『ア、夢！』といふのを送り、又『初紅葉』といふ單行本をも出した。此時紅葉君が『他流試合を大いに遣るさ』と云つたのを記憶してゐる。

これを瀨踏みにして紅葉君が、木版摺りの『新作十二番』に『此ぬし』を出し、同じく木版摺の『文學世界』に『七十二文命の安賣』を出した。

『此ぬし』を紅葉君が書く頃は、飯田町から牛込北町四十一番地（蜀山人の屋敷跡）へ轉じてゐた。此所から大學へ通ふ筈なのを、大學は詰らないと云つて行かなかつた。けれども祖父母（荒木舜海と云つて、元は漢法醫で有つた）の手

前、大學へ行つてゐる體にしなければ成らぬので、角帽を冠つては家を出て、筋向ふの家に飛込んで小說を書いた。

筋向ふの家といふのは則ち僕の住居なので（其家は舊の儘現存してゐる。宇田川凖といふ學者の借家で有つて、あの北町の角だ。）僕は最初に於てこそ、紅葉より小說は俺の方が巧いと思つてゐたが、此頃では全く兜を脫ぎ、又其人格に服し、同じ社中とは云へ、寧ろ門生とも云つて好い程の敬意を表し、何彼と指導を受けるのに都合が好いと、空家を幸に筋向ふを借りる事にして、店受には紅葉君を煩はし、杉浦の塾から机と本箱夜具位を、唯一輛の人力車で運んで住んだので、故鄕から老母が來るまでは、唯一人でゐた。パンを咬つてゐるのを見兼ねて、荒木の老人達が、御飯を運んで吳れられた事さへ有るので有つた。

間もなく老母は上京した。其所へ紅葉君は逃げ込んだ。然うして美濃紙——障子紙の卷にして有るのに、例の毛の長い繪筆で、一氣呵成にして書いたのが『此ぬし』で、たしか三日間で脫稿したと記憶してゐる。晩年紅葉君が遲筆に成つたのは『文章報國』で、文章に、否、その用字にまで凝り固つて、一日三行が難かしいといふやうに成つたのは、神經衰弱の結果なので、『此ぬし』時代には、實際健筆家の一人で有つた。

紅葉君は其後、横寺町に轉居した。其所が終焉の地で有つたが、僕が『文學世界』に『野試合』を出した時に、それを讀みながら、例の氣に成る性質で、誤字、宛字、假名違ひを發見しては、一々叮嚀に朱を入れて脩正して吳れて『併し、君のやうな鈍で荒削りの作も好いよ。』と云つて吳れた。凝り性とは云ひながら、兎に角それだけ親切で有つた。

僕は其頃北町の角から、紅葉君の宅へソツクリ移轉してゐたが、之より先に『江戸紫』といふ紅葉の道樂雜誌を出してゐた。（二十三年六月に其初號を發行した。）

硯友社は元來實行主義で、論議を甚だ好まなかつた。『傑作を出せばソレで好いではないか。屁理屈を並べたツて、それが何に成る。』といふ紅葉の意見には、悉く社中が一致してゐた。

此時代には不知庵君（今の魯庵）や、忍月君や、雲峰君や、緑雨君や、それから『國民の友』に據る諸文豪『改進新聞』に入つた美妙君や、其他で、批評がナカ〳〵壯んで有つた。それ等が隨分硯友社に向つて、當面側面或は裡面から攻撃が嚴しかつた。

『二足の草鞋を穿く奴がツマリ德だよ。默つてゐると好い氣に成つて、頭から小便まで引掛けられるからね。』

そればかりでも無かつたが、兎に角紅葉及び硯友社の機關雜誌として『江戶紫』を出して、創作の他に珍らしく評論をも試み紅葉自から筆を取つた。（編輯人には柳浪君が署名したが、編輯及び實務は紅葉が取つて、本社を尾崎の家に置いた、自分は其助手として働いた。今其評論の一例を擧げると。

●巾幗な贈らばや（江戶紫、第貳號）

一たび難ぜらるれば、之を憎むこと蛇蝎の如く、もし又揚げらるれば、之に親むこと美色の如しさは、當代の小說家が批評家に對する量見なり。思へや作者は小說の爲に筆を執るものにして、評者は小說の爲に言を吐く者なり。其職なれば士儀の上にこそ爭へ。其家に詣りて其茶を啜り、魚心あれば水心さ、味なる言葉の末に煙管を把つて其額を撲たば、誰か其卑怯を笑はざらむや

（以下略）

けれども論議は社中の長所でなかつた。それに賣捌法が不完全なのと、原稿の集りが悪いのとで、如何しても經濟上失敗に終つて、十二號限りで廢刊としたが、自分が『佐々木盛綱』といふ脚本を初めて世に發表したのはこの雜誌で有つた。

硯友社に裡面から攻撃の矢を向けた一例としては、二十七年四月右文社から出版した『文學者と成る法』といふ單行本で、それは三文字屋金平といふ匿名で、文壇人全體に惡罵を浴びせて有つたが、別して硯友社に向つて激烈で有つた。主眼は其所に有つて、他は附けたりかとも疑はれた。其著者は實に不知庵（今の魯庵）だといふ事を、確實に探り知つ

たと、社中で奮慨した者が少くなかつた。

もう時効だから、魯庵君も黒頭巾を取つても好いだらうと思ふが、併しそれが誤聞で有つたら自分は男らしく謝罪もする。けれども其當時に於て、紅葉も眉山も乙羽も雪後も、皆然う信じてゐたので有つた。然う信じた儘冥途へ旅立つたので有つた。地下の四人は誤解を覺りやうもなければ、又謝罪しやうもないわけだ。

『本統にアノ男はセキスピヤの物が理解出來るかね。』とか『並べ立てるほど本統に書物を讀んでるかね。』とか『理窟は如何にでも云へるさ。批評家は要するに他人の褌で角力を取るのだ。我々は實力主義だ。何んと云はれても後には分る。傑作を書きさへすれ好いんだよ。』とか『それにしても一人位、社中に評論家が有つても好いのだがね。』とか。然ういふ聲は時の批評家に對して、社中相會ふ度に發しるので有つた。

『不知庵も好いけれど、長尻で困る。著作の邪魔をされて……』

『思ひ出す人々』に紅葉が魯庵を忌んだやうに記して有るのを事實とすれば、實際その長尻に閉口したのに始まると、これは僕だけの解釋だ。

『江戸紫』に失敗して、今度は成春社の名で『千紫萬紅』といふ會員組織の雜誌を出した。それは僕の北町の家を本社として、事務を僕が取るので有つた。この『千紫萬紅』は主として後進の作を紹介したので、其會員の中に、田山花袋君が有つた。竹貫佳水君が有つた。小栗風葉君、柳川春葉君なども此仲間で有つたと思ふ。

硯友社とは全然無關係で有りながら、其實別働隊でも有る如く世間から誤解されたのは、東京に『詞海』大阪に『葦分船』の二雜誌で有つた。

前者は成珠會の山岸荷葉、武田櫻桃(今の鶯塘)山村水郭の三氏が首腦で、二十五年三月の創刊。後者は薰心社の山田芝廼園(三之助)といふ人が主筆で、二十四年七月に創刊で有つた。この芝廼園が紙上で洒落のめして、鷗外君の怒

りに觸れたなどの滑稽も有つた。

一方『讀賣新聞』では、旣に入社の紅葉を中心として、其文藝欄の一部に『千紫萬紅』をも移し、小波、眉山、思案及び自分の四人が社友として發表された。世呼んで是を讀賣の四天王と云つた。

一方には『報知新聞』で每週別附錄として出した『報知叢話』といふ小冊子が有つて、之には森田思軒君を中心として、村井弦齋、遲塚麗水、村上浪六、原抱一庵四氏が主として筆を取つた。これを又世では、報知の四天王と呼んでゐた。例の『三日月』の連載されたのも此冊子で有つた。

僕は此時代には、所謂大衆小說として時代物長篇を『中央新聞』に寄せ。『讀賣新聞』には藝術品として短篇を多く送つてゐた。一ッ筆ながら生活と藝術との追ひ分けで有つた。『新宇治川』といふボートレース小說や『短篇十種』などが問題にされた。其中の『賣奇郞』といふのは、漢詩人國府靑厓君の酒に醉ッぱらつた處を書いたので、其後に、二十四年五月三日の『東洋新報』で松村琴莊君が手酷く攻擊された事が有つた。森槐南君までが、詩まで作つて雪寃に努められた。つまりモデル問題なので、今から見れば馬鹿々々しい話だ。

それに自分は『都の花』で『花守』といふ長篇が當つた。それから『讀賣新聞』で脚本『石橋山』を發表して反響が有つた。

『花守』は會話を別行にして、寫實的に書いたが、他は大概、西鶴系の雅俗折衷文、會話も殆ど文章的で有つた。

今その時代の原稿料を摘錄して見ると。

——明治二十三年——

(櫻月—(小說叢書)金港堂　十五圓　一枚二十五錢)

○劍客—(讀賣新聞)　十五圓(七十餘枚)

○朝日川―、都の花 金港堂　六圓（一枚二十五錢）

―明治二十四年―

○野試合―（文學世界 春陽堂　七圓五十錢 二十二枚）

○花　守―（都の花）金港堂　四十圓（一枚三十錢）

前年の『白糸』と『花の杖』と二冊分合せて十八圓はヒドイが。博文館の『少年文學』第三篇『今辨慶』に五十圓を得たのは破天荒で、お神棚へ老母が載せて喜んだ位で有つた。新聞小說は大概一回五十錢『讀賣』だけが八十錢で有つた。

流行兒で有つて多作家と非難された自分で有つて、母子唯二人の生活（家賃四圓）が甚だ覺束なかつた。牛込の吉熊で時々社中の小集が有つて、藝妓も呼んだ。其割前が一圓五十錢位、月に二三度も行くとそれが拂へなかつた。紅葉君から割前の促催が來た手紙が今も保存されてゐる。紅葉其人も生活は苦しかつたのだ。

二十四年十月頃の『東京新報』に、高瀬文淵君が（本名黑川安治）『明治十八文傑』といふのを書いて、一寸問題に成つた。その十八文傑とは。

篁村。美妙。露伴。二葉亭。紅葉。嵯峨の舍。忍月。思案。南翠。柳浪。眉山。漣。學海　水蔭。三昧。虛心。鷗外。逍遙。

然うして鷗外を理想派の領袖。逍遙を現實派の巨匠とした。

十八人の中に、紅葉、漣、眉山、思案、虛心、柳浪、水蔭の七人が硯友社中なのは、矢張反感を抱かれる的にも成つた。と云つて文淵君は、決して硯友社の間者では無いので有つた。（其事情は後に記す）

未だ此他に切拔きが澤山有る。不眞面目な見立物が多いけれど、それで大略當時の文壇の大勢は分るのだが、その一部分は既に小波君が發表されたので、玆に一ツ反對側の眼に映じた硯友社への悪摺を載せる事とした。

▲花月新誌（第三號？）

「明治二十四年」頃―神田錦町三丁目一、花月新誌社より發行。半紙搨、十四頁。署名人には渡邊義方、小林清右衛門とあり。―義方とは鶯文門下の文京君か？　同誌四號には、孤竹小史といふ人の名にて、紅葉の「七十二文命の安賣」を罵倒しあり

硯友黨へ進物として

文壇の魔王　笑鬼道

紅葉山人へ……小笠原鳴の蝙蝠一匹

漣山人へ……革の濕つたデン〱太鼓

眉山人へ……也有の鉄硯

春亭九華へ……幼學詩韻一冊

紫山人へ……端本の秦淮畫舫錄

乙羽庵へ……飛上り器械の蝶一羽

柳浪子へ……宿場女郎の文がら一通

虚心亭へ……赤本源平盛衰記

北村三唖へ……彌次郎兵衛の古褌一掛

思案外史へ……睾丸火鉢一個

漁山人へ……夜見世で買つた川柳本

江見水蔭へ……コケ威しの鐵扇一把

誤解された硯友社

我々硯友社の者は大分誤解されてゐる。其當時でも斯ういふ事實が有つた。

それは杉浦先生にお目に掛つた時に『先日〇〇君に會つた處が、君の話が出た。シカシ硯友社の連中は如何も良くない。あの仲間にゐては前途が危ぶまれると、然ういふ忠告で有つたが、果して然うかね。〇〇君の云ふ事だから君も考へたら如何か』といふ意味で御注意下さつたので有つた。（〇〇君とせずに判然とお名前を出した方が好いのだけれど

御迷惑と思つて此所には隱くす。併し確かに杉浦先生は其人の苗字を仰有つた。）

成程、硯友社は評判が惡るかつた。それは『文學者と成る法』を見ても分るのだが、柔弱で、遊戲的で文學の研究なんか、全然見向きもせず、徳川末期の通人氣質を踏襲して滿足してゐるやうに、或る一部では睨まれてゐたので有つた。

自分は併し直ぐ答へた。

『先生、世間では種ンな事を云ひますが、内部に入つてゐると能く分ります。大丈夫ですよ。皆紺足袋主義ですから』

杉浦先生には紺足袋主義と云つたので、總てを諒解なさつた。

『然うか。』と云つて輕くお笑ひに成つた。然ういふ事も有つた。紺足袋は殆ど今の男性が穿いてゐるが、其當時、遊びにでも行く者は白足袋に限つてゐた。それを社中は何處へ行くにも紺足袋で有つた。この紺足袋は當時の志士間にも流行つて。『彼は紺足袋ぢやよ。』なんて云つたものだ。曾て陸羯南君も何かの紙上に『紅葉は文壇の紺足袋だ』と評したやうに記憶してゐるが、生憎に其切拔は持つて居らぬ。

歐化主義隆盛の時代、言文一致が擡頭して、西洋文學歡迎の眞ン中に、西鶴張りで飛出したのでさへ、其思想に一癖有るのが分るので有つた。

世間で騷ぐ程實際我等は遊惰では無いので有つた。それは理屈ばかり並べたり、無闇に西洋文學を口にしたり、然うした淺猿しい衒氣に充ちた或る一派の人を、我等は非常に憎んで、反動的に其前では、齒の浮く事も云つたので有つた。殊に江戸ツ子の紅葉としては、土臭い書生上りの空論が、癪に觸つて成らなかつたのだ。

『彼奴アあんな事を云つても腹が空ツてるんだぜ。』そんな嘲罵も時には漏らしたので有つた。

イヤ全部硯友社は遊戲氣分で無かつたとは云はぬ。事實、口上茶番もやれば、素人芝居もした。（抱負は持つて。）八

笑人式の花見にも行つた。それに又口實と思はれても仕方が無いが、現在ほど婦人觀察に自由でなかつた我々は、紅葉館の美妓を張りにも行つた。神樂坂で銘々浮名も流したが、今の若い人達ほど耽溺した者はなく、人妻と紛糾するやうな性質の良く無い戀をした者は斷じて無かつた。

然うしてゐる間に、紅葉、眉山、小波諸氏は、コツソリ外國文學を研究してゐた。殊更にコツソリ隱れて讀んだのではなく、讀んだといふ事を一々吹聽して歩くやうな事をしなかつたのだ。本を（和漢洋とも）少しも讀まなかつたのは實際水蔭一人で有つた。

それは紅葉君からも痛罵された。（桂舟畫伯の宅で）『めざまし草』巻の貳（二十九年二月）に鷗外君が、歸休庵の名で『海獵船』を評した中にも。

（前略 作者の寫さむと欲する想髓と、その寫し出したる文章との不調和若くは不相應にして、古人の所謂胸中完局あり。筆下相應ぜざるものなるべし、水蔭まことに志を遂げんとするものならば、少く書を讀み文を學べ。

とまで記された位。けれども自分には自分の考へが有つた。多くの文士の中に一人位は、無學の文士が有つても好いだらう。その結果が如何成るか。自分自身を試驗臺に提供したつもりでゐたので有つた。

硯友社としては、社中の著作に對して、嚴密な批評會を數回催した。それは紅葉君が一時本郷森川町？に掘紫山君と二人で侘住居をした事がある。其當時で、乙羽君の『露小袖』や、僕の『櫻月』など、解剖的に批評されたものだ。それは實に眞劍に論じ合つて、一頁々々、一字一句、微細に亘つて評し合つた程だ。

それから『觀察が鋭く成る――物をツカミ得られるから』と、つまり著作の補助として俳句の研究をも始めたので有つた。神田の勸業場裏に中村花痩君の家が有つて、其所へ集つては俳句を論じ合つた。

花痩君の親父が吃驚して、『今の俳諧は理屈だね。』と云つたといふ程で有つた。

當時の誤解の一例に、斯ういふ事が有つた。森川町時代で、或日僕が訪ねると、紅葉君は不在で、堀紫山君だけゐた。『先日、乙羽君が來て、私に忠告したのですが、今の文壇で成功するには、硯友社にゐては駄目だ。實際評判が惡いから……實は批評家の某君から注意されたので……君も其ツモリでゐ給へといふ事でした。〇〇や〇〇を乙羽君は信じ過ぎてはゐませんか。』

然う僕に話された事さへ有つた。これは又ズッと後の事で二十八年の末頃『國民之友』に八面樓主人の名の下に、湖處子君？が書いた『硯友社及其作家』といふ六號文字の長文などは、極度に硯友社攻撃を試みたもので有つた。（今その雜誌が一寸見當らぬが）けれども、悉くそれは見當違ひの論評で有つた。

それを證するには、同じく硯友社に好感を有しなかつた正直正太夫君すらも、餘りの暴言に傍觀しかねて『めざまし草』卷の壹の『金剛杵』の文中に、八面樓の誤見を正したる後。

（前略）勿論われは紅葉のために防護の任を執らんとにはあらず。われは屢々硯友派を攻撃したり。硯友派の途に瓦解せざる可らざる由は早くより言へり。今とても攻撃すべきあらば、八面樓主人とともに大いに攻撃せん。須らく先づ急所を衝け。仇矢は放つ可らず。損料屋の門を出入する者は、皆損料借なりといふ如き速斷には、到底與する能はざるなり。

如何に『國民の友』紙上の八面樓のそれが、急所脫れの仇矢――見當違ひで有つたかゞ知れるであらう。にも關らず、如何に嘲罵を浴びせられても、我等は一言も之に答へなかつた。

それは紅葉祭の會場で高田早苗先生の紅葉追悼演說にもそれを云はれた。

『自分が讀賣にゐた頃、あまりに紅葉君に對して惡罵が多いので、少し辯解したら如何ですと云つた處が、同君は唯笑つて、知る人ぞ知るです。最後には分る事です。議論より實行、つまり佳い物を世に出せば好いのですと答へられた』云々。

然うした意味の事を高田先生が云つて下さつた。當日の會員貳百餘名も皆一緒に聞いたのだから、間違ひも無い話』

自分は此時、好い事を云つて下さつたと、幕の後で賞は泣いて喜んだので有つた。我等は斯くの如く無防禦で有つた。議論の飛道具でコケ威かしなんか、絶對に試みはしなかつたのだ。

然るに、今日でも能く人は云ふ。硯友社は閥を作つたと。

閥とは何だ！然う叫ばずにはゐられないのだ。黨同伐異、それを我等が試みたらうか。それは黨は作した。紅葉を中心に多數の文士は集つた。硯友社といふ團體は形作つたが、單にそれは交遊機關に過ぎなかつ



紅葉の戯畫

た。他を害するやうな事は決して仕なかつた。味方を擧げて、味方ならざる者を抑へるやうな、そんな賤しい事は一ツもしてゐないのだ。我等は攻撃すべき武器――批評、論議を一切持たなかつた。自己が攻撃されても隱忍してゐた位だ。

魯庵君の「思ひ出す人々」に

――讀賣を牙城とした紅葉は、紫山を幕僚として欄を主文藝宰し、春陽堂は曙山、博文館は乙羽「新小説」も「文藝倶樂部」も硯友社の統轄に歸した――。

といふ意味で書かれて、硯

友社を政友會に比し、紅葉を原敬以上と評してあるが、それだと然も／＼紅葉が自己の勢力を張り、硯友社が横暴で有つたやうに思はれぬでも無いのである。

紅葉――硯友社――それは自然に紅葉を中心として集つたので、其集つた者が其當時では皆相當に働いたといふ、唯それだけの解釋なら好いが、もし魯庵君の文を讀んで、政友會が他黨を排斥する爲に極力陰險的手段を取つたやうに――議會で横暴を盡したやうに、硯友社も文壇を、多數を恃んで獨占したといふやうに解釋する人が有つたら、それは本統に紅葉君に氣の毒だ。眞に尾崎紅葉を解せざる者だ。

何も僕は今更紅葉を大偉人に、大文豪に、祭り上げやうとするのではない。無論同君に缺點は有つた。けれど意外な點を誤解され放しでは如何にも氣の毒だから、事實を事實として公平の判斷を天下に待つのみだ。

それは成程『新小説』に曙山君はゐた。『文藝倶樂部』に乙羽　これからして間違つてゐて、當時の『文藝』の主筆は三宅青軒君で、その背後に博文館支配人としての乙羽君はゐた。

曙山君は眉山君の友人前田太郎氏の弟で、其關係で眉山君の處へ出入はしてゐたが、紅葉君とは何んでもなかつた。然うして其當時の『新小説』を見れば、硯友社系で有りながら、一向同誌に歡迎されなかつた江見水蔭の有るのが發見されやう。然して硯友社に無關係の文士が澤山名前を並べてゐるので、事實より確實な辯明は無いと思ふ。『文藝』とても其通りで、あの大きな博文館で、硯友社員ばかりに幅をされてゐては、營業には成らないので、殊に乙羽君は、露伴君崇拜に傾き、又、魯庵、綠雨二君にも、多大な敬意を灑いだので、それは誰よりも現存の魯庵其人が一番能く知つてゐられなければ成らない筈だ。

『來る者は拒まず、去る者は追はず。』これが紅葉のモツトーで、困るから原稿の世話を賴みに行くと、社中社外に關

らず、宜しいと引受けた。紅葉君は江戸ツ子なのだ。唯それだけの事で有つた。

社外の人で、どの位依賴に行つたか知れないである。それを閑ならば斷はる筈だ。斷はらずに親切に紹介してゐる。

それで硯友會の橫暴に比せられては、餘りに酷い。

試みに紅葉の主裁した『新著百種』十七篇の顏觸を見ても分るのである。

「社中の人」――色懺悔（紅葉）――乙女心（思案）――妹背貝（漣）――殘劍（柳浪）――墨染櫻（眉山）――露小袖（乙羽）――芳季（XYZ實は九華）――妾薄命（虛心）――石倉新五左衛門（夢助實は三啞）――山吹塚（二たび九華）――新桃花扇（二たび紅葉）――離れ鴛（花瘦後に雪後）

「社外の人」――堀出し物（篁村）――松花録（三昧）――文つかひ――（鷗外）風流佛（露伴）――長者鑑（二十三階堂）――新世帶（仰天子）――小野篁（百川）――碧流（麗水）

十二篇は社中で占めたけれど、他流作家を歡迎するの雅量は有してゐた。

此通り門戶は閉鎖してゐないので有つた。のみならず、硯友社中で當然出なければ成らなかつた一人が、如何しても出る機會を得なかつた。それは僕だ。水蔭は實に『劍客』を、死力を出して書いて、眉山の『墨染櫻』の後に出す筈のが紅葉君に氣に入らなかつたのか、それとも吉岡の方で毛嫌ひしたのか、（勿論、拙作でも有つたらうが）兎に角事實として社中の苦心作が、硯友社の機關のやうに世間から見られてゐた『新著百種』には登載の光榮を得なかつた。（ズツと後に成つて吉岡君が來て連りに詫びたので、花瘦の『離れ鴛』の附録に匿名で『朝顏』といふのを書いたが）

この他春陽堂で出した社中文集ともいふやうな物の『五調子』の中に、天外君が割り込んだなども其一例だ。

其所で重ねていふ。硯友社は公然にも、陰謀的にも、他の作家を攻撃しなかつた。黨同伐異の運動を實際にしなかつ

た。それだのに閥を作つて政友會の如く横暴で有つたやうに言ひ傳へられてゐるのは、實に心外千萬で、殊に故人紅葉を誤解せる者の多いのを、自分は慨嘆に耐えないのだ。

硯友社に反旗

これは併し頗るデリケートの問題で、此間の眞消息を知つてゐる者は、今日では（硯友社中の者でも知つてゐまい）恐らく僕一人（然うだ。花袋君なんどもボンヤリ位は記憶してゐるかも知れないが）

その反旗を飄へした者は、二人有つて、一人は川上眉山君で、一人は僕で有つた。

本年六月號の『早稲田文學』に、小波君が――柳浪の『小文學』と、水蔭の『小櫻縅』とは、硯友社の別働隊であるといふ意味で書かれ。又魯庵君の『思ひ出す人々』の中にも、同じ意味が有つたやうだが。『小文學』は知らず『小櫻縅』は、正しく硯友社に叛逆の第一の旗じるしに他ならなかつた。

併し、誤解されては困る。それは文學上の意見の相違で、私交上には何等の變動も無かつたので。『小櫻縅』第一號發刊の時に、自分は奉加帳の如き帳面を持つて、先づ桂舟の處へ行き、其帳面に、櫻と紅葉の表紙畫を畫いて貰ひ、五部賣附け、次いで紅葉君の處へ行き、六部買つて貰ひ、署名までして貰つた。（帳面現存）

其後も引つゞき交遊に變りはないので有つた。

僕は如何にも紅葉君其他の、都會中心の寫實小説に滿足出來なかつた。

天然描寫（自然描寫と同じ意味だが、自然主義と混じるのを避けて）天然美を主とした人間の清淨味を、潔癖的に描寫したい。單なる都會中心の戀愛問題を捕へて、婦人の服裝を明細に記すのに餘分の腦力を盡すとか、文字の使用に忠

實過ぎるとか、そんな末技に餘計な努力をするのが——それは紅葉君等の、僅かに一微細な缺點で有つたらうが、それが不服で成らなかつた。

他から掣肘される事無しに、自分だけ自分の持つてゐる天分を、自由に發揮して見たい。それには自分で機關を作るより他に無いと考へたからで有つた。

今までの例に從ふと、僕が個人として雜誌を發行するとしても、先づ社中の祝詞か何かを得て寄稿も、無論依賴するのが順序だけれど、斷然それを避けた、唯『小櫻緘』といふ表紙の文字だけは、紅葉君に書いて貰うた。（其上に雜誌を賣附けた）

こんな我儘な事を仕向けられて居りながら、紅葉君は別に怒らなかつた。

『小櫻緘』の第一號は二十五年十一月發行で、その卷頭に。

天地の間に潜む處の美を面白く唄はむとす　これ第一の目的なりと雖も、次ぐに吾輩の餘響をして江湖の風潮を震動せしめむとする野心もあり、斯の如く希望大なり、只恐る微力共實踐を過まらむを。

これに對して正太夫君から唄ふの用字を冷かされたり（國會新聞）野心がイケぬと飯田四丁——鵜澤君から攻擊されたりした。（城南評論）

兎に角自分は此時位、眞面目は無かつたのだ。——『無韻の詩を短篇化する』方式で、嚴密に、潔癖に、材料を撰定した。然うして殆ど一人で書いた中に、花袋君の短篇と、玉茗堂君の新體詩と、土持某氏及び花袋君の和歌とのみを載せたので有つた。（他は本名變名で僕が殘らず書いた。）

花袋君は『千紫萬紅』から引つゞいて、殆ど毎日の如く僕の家を訪れてゐた。原稿を持つて來ては、僕に批評を乞ひ又修正をも託してゐた。然ういふ關係で『小櫻緘』を出すに就て、加賀町の秀英舍へ行つて貰ふとか、內務省へ屆を出

しに行つて貰ふとか。隨分下らない俗務まで手傳つて貰つて、今から思ふと濟まなかつたが、併し僕自身も雜誌を背負つて、牛込から神田の賣捌店まで、運送に行つたといふ程で、實はそんな事をするのを興味にも考へてゐたので有つた。

少し溯るが、桂舟畫伯の家は、其頃殆ど社の倶樂部のやうに、誰彼となく出入してゐた。自分は桂舟君の紹介で『都の花』と緣故を深くして、編輯主任の藤本藤陰翁には、一方ならぬ引立てを受けた。それは主筆の中根淑先生が、例の武士氣質からして、僕の十津川及び芳野山を背景にして書いた『檜木笠』に注目された、其餘慶では有つたらうが、兎に角僕の原稿を歡迎して呉れて『花守』の如きは卷頭にまで出して貰へたので有つた。

その『花守』を激賞して呉れた一人として、桂舟から紹介されたのが高瀨文淵君で、前には薰梅月とも名乘つて、矢張『都の花』に小說を書いたので有つた。この人は後に『若葉』といふ單行小說を春陽堂から出して、當時一寸注目された作家の一人で有つたが、鷗外逍遙對の理想沒理想論に野次つたり、文學評論を試みたりして、其方でも一旗幟を樹てたので有つた。房州の人で、漁業（潛水夫を使つて鮑を採る）に失敗やら、失戀やらで、妙に世の中からスネて、放浪生活を續け、最近まで講談社の仕事などしてゐたが、酒に隱れて遂に失意に終つたのは惜しむべしだ。

『紅葉時代は去つて、今に俺の時代が來る。』と春陽堂の主人に傲語したのが（二十六七年頃）紅葉君の耳に入つて『何んだ、天麩羅が』なんて紅葉君も好くは思つてゐなかつた。それは梅月といふ天麩羅屋が湯嶋天神下に有つたからで有つた。

この文淵君は併し自分に取つて、益友で有つた。駄々ツ子の守をするやうにして、僕のヘンチキな文學論を修正をして呉れた。花袋君も僕の紹介で交際して、兄事してゐた。それで當然文淵君も『小櫻緘』に、評論を書いてゐた。

だが五號で廢刊の悲運を見た。故鄕の古家を賣つた僕の財產は『小櫻緘』で半分以上摺つて了つたので有つた。

經濟上の失敗、それのみならず、實は散文詩を書くと同じイキで小說を書いてゐた自分は、思想の上に於ても行詰ら

ずにはゐられなかつた。

一方眉山君は、同じく硯友社にあきたらなかつた。それは全然思想の上で有つた。然うして『文學界』の諸氏と多く交際するやうに成つた。――決して硯友社と絶交したのでは無かつたのだ。然うして又一面に文淵君とも親しくした。眉山――文淵――花袋　水蔭――社中は詩人派だと云つて笑つてゐた。詩人といふ事を一種輕侮して云つたので、大橋新太郎氏なども『眉山水蔭の二人は詩人だからね』と云つて哄笑したものだ。

北町の僕の家で、新年、社中相會して、小宴を張つた時に、酒癖の良くない眉山君が、何か暴言を吐いたのに對して紅葉君が泣いて諭したのを記憶してゐる。眉山君は或は紅葉君を捨て得たかも知れないが、紅葉君は決して眉山君を捨て得なかつた。『來る者は拒まず、去る者は追はず。』紅葉君のモツトーに若し矛盾が有つたとすれば、此位のものかも知れないのだ。

二十六年の春に根岸黨（篁村、思軒、三昧、幸堂、默庵、永洗、米僊、其他）が大阪の南翠君を訪ひかた〳〵、大和の月ケ瀬の梅見に旅行するのに、何も張合つた譯ではなかつたが、硯友社からも、紅葉、乙羽、花瘦、及び自分の四人で、京都の小波君を訪ふ目的で、月ケ瀬から芳野山に向つた事が有つた。京都では共樂館で京都文學會が開かれて、大阪、神戸あたりからも諸文士が來り會した。蓋し關西方面に於ける文學的會合の嚆矢で有つたらう。

探偵小説を社中が匿名で出したのも此歳で有つた。涙香物が横行して、普通の小説が賣行が惡い。毒を制するに毒を以てすだ、讀者をして探偵物に倦きさせる程探偵物を世に出した方が好いと春陽堂主和田鷹城が、反間苦肉の計略なので、僕も『四本指』『女の死骸』『船中の殺人』等を出した。

斯うした俗惡な仕事の一方に『盆燈籠』といふ詩人小説を『讀賣』に書いた。けれども酷く受けなかつた。主筆の市嶋先生から紅葉君に宛て、樂屋内のやうな事を書かれては困るといふ小言の手紙が行つた程だ。

此時代は、一部の人には、文學の何物であるかを理解されても、多數の人からは、決して歡迎されなかつた。智識階級でも文學には門外漢が多かつた。從つて文士といふ者の地位は、決して今日の如きでは無いので有つた。

『讀賣』には小說の他に脚本を出した。『石橋山』（二十四年）『旭將軍』（二十七年）の二ツで、後者は懸賞に應じたので有つた。

博文館の『明治文庫』春陽堂の『小說百家選』共に諸家の小說集を出したのも此時分で有つた。双方とも自分の物を採錄された。

全盛期（水蔭の）

二十七年には自分として何かしら一轉化を見なければ成らなく迫つてゐた。所謂青年期の不安とでもいふか。それに自分の閱歷をして、モツト／＼多方面ならしめたい。活社會に投じて眞實の人間が知りたい。或意味では自分を自分で小說の材料に（もつと大きく云へば、自己の一生を悉く文學的に）提供したい。然ういふ煩悶に充たされてゐた。

其所で自分の素行上にも一轉化を見てゐた。社中の偏屈者では無く成りつゝ有つた際に日淸戰爭は突如として起つた。

博文館から『征淸畫報』といふのを發行するに就て、其編輯を一任された。（但し二號で廢刊した）その上に『中央新聞』から入社を勸められた。（其前から小說は寄稿してゐたが）それは此方の希望してゐる事で、新聞記者として、思ひの儘に實世間に突進して見たいつもりなので、勇んで入社した。（この新聞には、大岡育造氏が社長で、同氏と紅葉君と最初に握手が有つて、硯友社から柳浪君を送り、又柳浪君が桂舟君の挿畫を入れ、又乙羽君をも入社せしめた。が、僕の時には二君とも退社後で、桂舟君の口添えで入社と成つたのだ。）

軍事小說『電光石火』それは戰爭記事を短篇にして每日書くので、たとへば牛莊（ニューチャン）の市街戰が有つたといふ電報が入る

と未だ詳報の傳はらぬ前に、想像で市街戰を小説に書くといふ風で、無論キワモノには相違なかつたが、それを一面に詩化する―文藝品としても取扱はれるやうに苦心した。

それに、擧國敵愾心の最高潮を示した時なので、筆硯を以て銃劍に換へる位の意氣込は、溢れるばかりに持つてゐた。果然、反響は適面に來た。社内にも讀者にも非常に歡迎された。毎日机上には少からぬ賞讃の書が積まれた。二十圓で入社したのが、忽ち五十圓にまで月給が昇騰し、毎日出社のが、自由勤めに成つたのでも知れるので有つた。(「電光石火」は博文館から「水雷艇」『速射砲』の二篇として、出版。いづれも重版。)

僕より前には、岡本狂綺堂(綺堂)松居松葉(松翁)の二氏がゐられたが、綺堂君先づ去り、松翁君は次いで『報知新聞』に轉じられた。

二十八年には『女房殺し』を『文藝倶樂部』に寄せた。稿料漸く此頃一圓に成つてゐた。今までにソロ〳〵言文一致體に變つてゐて、短篇物にはそれを試みてゐたが、少し長いもので言文一致で書いたのは『女房殺し』が最初で有つた。幸ひにして之が當つた。『めざまし草』では惡口屋の正太夫君も『青年文』では田岡嶺雲君も極力賞讃して呉れた。不知庵君は『國民之友』二百六十八號で ― 水蔭は舊戯作界の生殘り者と度外視してゐたがと前置して。

此頃文藝倶樂部十編の「女房殺し」を讀む。讀んで水蔭が又呉下の阿蒙にあらざるを知る。水蔭は慥に自然を描くと共に人間を寫すの十分なる技倆を有する者也。」「女房殺し」は獨り水蔭の諸作に冠たるのみならず眉山の「大盃」と共に硯友社諸才子近業の双璧といふべし。且つ夫れ立案の警抜なる描寫の細密なる意匠の自然なる文字の明快なるは近日稀に見るの佳作にして、他の雷同に依て遽に聲名を博せし鏡花一流のものに勝るといふべし。

と批評して呉れた。

『水車』といふ短篇小説集を、春陽堂から出して、之も當つた。又青木嵩山堂にも連絡が取れて、單行本を(通俗物の)

續々と出した。

この得意の時に『中央』の記者として、松井柏軒、村松柳江、田村江東、幸德秋水諸君がゐたのであるが、その田村君の紹介で『國民之友』の新年附錄を書く事に成つた。この時分の編輯は國木田獨步君の弟の牧二君で有つて、田村君が友人關係から、萬事取次いで吳れたので。

自分は此時は大層鼻息が荒かつた。今から考へると汗顏の至りだが。

『今更『國民之友』の新年附錄へ頭を出すでも有るまい。(同誌は文壇の登龍門――大家號授與式場の觀が有つたのだ)相手が尾崎の處の書生の泉だの、女の一葉や、『文學界』の天知、『早稻田』の宙外なんかぢやアないか……好し、書くとしても、僕の物を一番先に出さなければイヤだよ。』

斯ういふ調子で『炭燒の煙』を書いたので有つた。處が結果は一葉女史の『わかれ道』が最高評で、男連は皆娘道成寺の取卷坊主だと正太夫から笑はれ。(『めざまし草』卷の一)不知庵君からは、紅葉の『戀の山賤』の模倣だとまで痛められたが、併し全然不評に終つたのではなく、『めざまし草』で鷗外君は。

……興有る話にて、全篇ドオデエが羊かひに似たり。眞次が花見がへりの娘を背負ふところには、名高きシエッフエルの「エッカルド」など思ひ出でらる。されど作者が脩辭の上に於いては、われ慊なきこと能はず……

とまで評された。僕は、そんな物を讀み得る程の學者で無いので、燒直しで無い事だけは承認されてゐたので有つた。

同年には『泥水淸水』を『文藝』に出して之が當つた。『絕壁』を『太陽』に出した。此六月には種々事情が有つて、老母と別居し、自分は大澤夫仙、羽太落葉(鋭治博士)を伴ひ、相州片瀨に移住した。これが沙地浪宅(八笑人の左次郎宅)で、怒濤庵とも云つた。

片瀨二年の生活は別に記すつもり故、玆には文壇的の記錄だけを載せるとするが、『中央』を去つて『讀賣』に入社して

『船大工』『短篇百種』『海の秘密』『しらぬ火』（海賊の戀）及び『龍窟探險記』等を草した。『文藝』には『葛城橋』『夫婦順禮』『新潮來曲』等を寄せた。『新潮來曲』も當つて『國民之友』で角田浩々君が、長文で明細に批評して呉れた。
『太陽』には『賣國奴の兒』を『國民之友』には『燈籠岩』等を載せた。
『新小說』に寄せた『鎧流し』と『嶋守』も共に好評で有つたが、併し一方には水蔭の想が荒んだとか、濫作だとか、大分非難の聲が高かつた。
この片瀨の生活中に、如何しても記入しなければ成らぬ事は、紅葉、思案、小波、柳浪の硯友社中が、紅葉門下の鏡花、風葉、春葉の三人を加へて、大擧して訪問した事で、（二十九年七月）其時紅葉君が僕の『太陽』に出した『螢の小舟』を讀んで、その小說に、友達仲間が失戀の主人公を勵まして、戀人を奪ひ出す處が有るのを見出して、其頃失戀で悄氣てゐた小波君を顧みて『漣谷はイカンよ。熱が無いからイカンよ。當人が一生懸命に成れア、友達は皆手を貸すんだ』と云つたのからして、一連り戀愛論が出たつひでに『實は今、米國の女流作家の（今記憶にない）ホワイト・リ・ーといふ小說を讀んでゐるが、女主人公が金持の方へ走つたので、若い主人公が失戀して、寺院での婚禮の鐘の鳴るのが聽えない處まで逃げて行く筋なんだが、それにヒントを得て、近日『讀賣』へ書かうと思ふがね。』
これが正しく『金色夜叉』なのだ。世間では小波君を貫一と云つてゐるが、全部然うではなく、紅葉君自身も出てゐるし、又中村雪後なども取入れられてある。お宮でも一人をモデルにはしてなく、集合モデルだ。複寫式モデルだ。此時代では、一人物をモデルとし、一事件を直寫する事を、作家の耻辱のやうにもして『誰某は自分の事を其儘書いた』とか。『友人の事をソックリ書いた。』と云つて、直寫するのを嘲笑したものだ。
三十年の末に自分は『讀賣』から退社を命じられた。怠けるといふことで有つた。其時、浪宅生活の亂暴さ、食客數

名絶えなかつた結果として、片瀬の扇屋といふ饅頭屋に米代二百圓から溜めてゐた。（其頃の二百圓――貸しも貸した。全く義俠的で有つた。）

其所で小波君の肝煎で『神戸新聞』へ行く事と成つた。流行作家沒落の卷は悲慘で有つた。其硯友社の送別會を、牛込の、吉熊（よしくま）で開かれたのは、三十一年一月二十九日で、會する者は、紅葉、小波、雪後、桂舟、乙羽、年峰、鏡花、風葉、それに大橋新太郎氏。此時別席にゐた高田早苗、坪内逍遙、市嶋謙吉の三先生も、途中から來り加はられた。（それは本年の當『早稻田文學』七月號に、市嶋先生が、單に硯友社の集會が有る――二十人許り列席云々と記載されてゐる、其時の事だ。先生は記憶のまゝだが、僕のは日記を見て記すので、二十人ではない、僅かに十人だ。）

二月一日に僕は新田靜灣を連れて、片瀬を出立。神戸へ落ちた。（家族は後から立つた）

此邊で筆を切るのが恰好で有らうが、最後に結論として――神經質的に云つて置かなければ成らぬのは、前記の如く硯友社は『我樂多文庫』から『文庫』に轉じた時に、魯庵君の云ふなる百餘名の社員は既に解散したもので、其後のは新硯友社員で、それは單に紅葉を中心とした友人關係で、社といふのは社交倶樂部に過ぎず。個々に文壇に活動はしても社全體としての何等團體的運動を試みて居らぬ。何よりも證據は味方を揚げて他人を抑へるやうな批評機關を有して居らぬ。――一意專心、著作その物に熱中したに過ぎないのに。それを閥だとか、橫暴だとか、そんな事が有りやうが無いので有つて、我等を誣いるも甚だしいものだ。

けれども、それだけ又其時代に、社中の個人々々が、各方面に於て勢力が有つたのは事實なので、虛心坦懷、公平な目で見るならば、正に文壇の一偉觀で有つたには相違なからう。それを嫉視する者の多かつたのは、已むを得ない事なので有つた。

無抵抗主義の自分が、これだけの事を今日發表するに至つたのは、よく／＼の事と察して頂きたい。兎に角之で多年の溜飲が一

時に下つた譯で、此機會を與へられた「早稻田文學」に深く感謝の意を表す。

現在の硯友社（文士非文士を問はず吉凶慶弔を共にする一團體として）

○石橋思案（助三郎）　○巖谷小波（季　雄）　○池田研池（賢太郎）　○武内桂舟（鋹　平）　○岡田盧心（朝太郎）

○久我龜石（順之助）　○丸岡九華（久之助）　○江見水蔭（忠　功）　○澤田桂山（與　吉）　○廣津柳浪（直　人）

「此他硯友社系にして生存せる人多し」

明治三十年前後の俳壇

河東碧梧桐

一　發祥時代

明治俳句作興の新運動も、一般文藝のそれと同じく、矢張明治新文化の生んだ、時代の産物であつた。一般文藝方面に、坪内逍遙、森鷗外、尾崎紅葉、幸田露伴等諸先輩の唱道によつて醸された新文藝の雰圍氣の刺戟に唆られた運動であることを否まれないのである。

總ての新たな運動の原始時代、其の黎明期に於ける私的性質を深厚に帶びた沈滯狀態は、それが不用意な、又た殆んど無意織であるかとも思はれる程の微弱な、狹い同士間の心的交渉であるやうに、明治俳句の發祥時代も亦た正岡子規を中心とする僅々數人の享樂的遊戯に始まるのであつた。

子規が俳句に指を染めたのは、明治十八年であつた。當時今の第一高等學校の前身大學豫備門に通學してゐた子規は

在鄕時代に學んだ漢詩漢文を始め、和歌、今樣、都々一等に至るまで、あらゆる在來の敍情詩的述作に耽つてゐた。向島に僑居をトし、それらの述作を集めて『七草集』を編んだのも其の頃の事であつた。『床屋俳諧』の名の下に、一般文藝から卑俗視されてゐた『發句』も、子規の目には矢張在來の詩形の一つであつた。何處かにあらゆる詩形を作りこなす多才の矜りを持つてゐた子規は、あらゆる在來の形式を網羅する慾望の上から、それが如何に士人の口にするを恥づるものであつても、等閑に附することは出來なかつた。恐らく『發句なんぞ』と内心大きな侮蔑を感じながら、それでも『發句とはどんなものか』を一應問ひ質さねばならなかつた。鄕里の三津濱に名の聞えた宗匠のあつたのを二三度訪問して、一時は其の添削をも乞うてゐた。

元來少年時に夙く詩文の才を認められた子規は、其の思想感情も早熟的に老成した觀があつた。のみならず青年客氣の鋭鋒は、他方に文壇的野心となつて、可なり強く燃えてゐた。總ての儕輩を眼下に見下してゐた心の誇りは、紅葉露伴の盛名をさへ、敢て物の數とも思つてゐなかつた。彼らの左右する文壇なら、又た容易に我輩自ら左右し得る自信と意氣を藏してゐた。

明治二十四年駒込に住み、一時は來客を謝絶して、專ら小說『月の都』に筆を執つたのも、年廿五に及んで、何ら爲すなき自己を愧づると共に、其の文壇的野心を實現せんとする抱負の片影であつた。子規としては、それまでに蓄積した自己の力を傾倒し、且つかねての構想を成就しようとする、已むに已まれない内的動機によつたのであるが、又たそれによつて文壇を壓倒し、一躍盛名を買はうとする外的野心も含まれてゐた。言はゞ純眞な自己表現でなくて、多少不純な挑戰的態度でもあつた。

併しながら、子規が創作苦を痛切に嘗めたのは、恐らくこれが最初であつた。「月の都」を完成するに前後三旬餘を費したのであつたが、其の完成されたものも、全く其の意に充たなかつた。之を以て自己を世に問ふには、餘りに貧弱

であり、又た淺薄であつた、子規は筆を釋てゝ長大息した。これが自己の總てゞある自己の投影を蹈みにぢりたい自己悲觀は、やがて創作に對する自己否定にさへ沈淪した。

若し幸ひにして『月の都』が或る程度までの自己滿足を買ひ、又た幸ひにして當時の文壇に權威を認められてゐたとしたら、子規は或は小說家として、又た一般文壇人として終始してゐたかも知れなかつた。子規が主として俳句に往くやうになつた動機は、性格、健康、環境の種々複雜な事情にもよるであらうが、長篇の創作に失敗した深刻な體驗は、恐らく其の主なる近因でなければならない。と言つて故意に創作苦の難境を避けて、句作の樂な道程を選んだではない。當時自ら『小說家となるを欲せず詩人とならんことを欲す』と其の意中を吐いてゐるのに見ても、むしろ刹那の感情の動きに立脚する短詩形の詩に、より純に、より正しい自己の投影を見ようとしたのであつた。

明治俳句の革新運動も、言はゞ子規の痛切な體驗に根づけられてゐるのであつた。

尤も始めは其の才氣の一裝飾として選ばれた句作も、子規の鑑賞眼と硏究熱は、古書を解し、先人を知るに怠慢ではあり得なかつた。子規の一生の事業とした、俳歷史の二百餘年間に產出した總ての作例を索引的に分類した『類題全集』若しそれが完成されるなら、總ての先例を明らかにし得る俳句字書ともいふべき大著に從事したのも、發句に指を染めた明治十八年から、僅かに二三年の後であつた。それは古俳書を繙くにつれて、たゞそれを讀了するのみにとゞめず、分類された題材の下に、其の總ての句を採錄したのであつた。それは詩人の仕事ではなかつたかも知れぬが、史實硏究の資を供する學者の篤學な態度であつた。『類題全集』を作る副事業とでもいふべく、古俳人の各作家個人々々の作を集錄する『俳家全集』なるものも同時に編まれてゐた。『俳家全集』を壓搾したともいふべき『一家二十句』では、各作家の代表作と信ずるもの二十句宛を擧げて、一言の批評をも加へない古俳人の鑑賞を明らかにした。年を追つて、其の、『一家二十句』の內容を變化して行く、其の代表作と信ずるものを改刪して行く、自己の鑑賞眼の推移を自ら批評した

りしてゐた。

自ら『詩人とならんと欲す』と言つた心的覺醒の一語は、たゞ捕捉し難い懊惱を訴へる言葉ではなかつた。又た敗殘者が自己慰問に發する偶然の歎聲ではなかつた。宗祇、宗鑑、貞德、宗因等を研めて、芭蕉に味到し、蕉門十哲に攻及し下つて天明中興の蓼太、白雄、曉臺、蕪村等の諸境に游んだ體得の詩境から自づと生れたのであつた。『月の都』に失敗した子規は、抱負を裏切られた惱みに堪へなかつたであらうが、この一語を發した時の心理は、明鏡のやうに輝かしく明るいものであつたであらう。わかり易く言へば、古俳書を讀むにつれて、始めて俳人の述作なるものゝ『床屋俳諧』の如き卑俗な低級なものでないことを明らかにしたのだつた。殊に芭蕉を中心とする多くの創作に、自己の共鳴するものを、より多く發見したのだつた。さうして多くの古人の管見とは別に、子規一個の鑑識によつて、それらの述作に對する獨自の心境に處してゐたのだつた。つまり俳句と子規との間には、もう斷つことの出來ない結びつきが出來上つてゐたのだ。よし子規が、對社會關係の濃厚な一般文壇に盛名を走せて、一時的に其の燃えるやうな野心の滿足を買ひ得たとしても、恐らくは須臾にして其の盛名の幻滅を味はねばならない運命の下に置かれてゐたのだ。それ程、自己の賴つて立つ、人生觀、生活哲學、思想及び感情は、多分に古俳人に影響せられた、世間の水準を逸脱してゐたのだ。

併しながら子規の會得した詩境と鑑識は、言ふまでもなく、まだ幼稚であり狹小であつた。爾後約十年、一家の見を大成する過程の素地を作つたのに過ぎなかつた。『子規全集』の句集部を見ても、明治十八年の遺作としては、僅かに七句、同十九年には僅かに一句、同二十年に二十三句、同廿一年に卅一句、同廿二年に卅二句、同廿三年に五十餘句を存するのみで、其の製作も亦た甚だ貧弱であつた。それは準備時代の第一歩であつて、理想も目的もない、個性の閃めきも、獨自の表現もない模糊混沌の時代であつた。明治廿四年に入つて、俄然として句數を增し、四季を通じて其の數二百五十餘句に達してゐる。句數の多少によつてのみ詩境の淺深を判ずることは出來ないやうであるが、右句集は、子規

生前其の草稿を整理して、自ら淬精を取捨したのであるから、或る程度まで其の詩境の進展のバロメートルと見得るのである。子規が『月の都』の述作に腐心したのが、明治廿四年であつた事實と對照して、其の句境も亦たこの時機に一轉化した黎明期と斷定し得る。さうして『月の都』を抛つて、『我れ詩人とならんと欲す』と言つた翌廿五年には、更に千句に垂んとする遺作を見、翌々廿六年には其の倍數以上の作を見る。思ふに子規句集中、明治廿六年は其の最も多作な年であつた。其の急轉直下的な、旺盛な句作力が何に因由するかは、特に説明を俟つまでもない。自ら心に誓つた詩人への猛精進であつた。

されば明治廿四年を黎明期とする子規の周圍には、僅かに内藤鳴雪、藤野古句、五百木飄亭、新海非凡、高濱虚子、河東碧梧桐等の追隨者を數へるのみで、其の範圍は尙ほ肉親的知友の外に出でなかつた。それだけ限られた交友間の遊戯味を脱しない私的性質を帶びてゐた。又た子規自らも、それによつて一世を敎化しようといふやうな思念もなしに、又た左樣に早く共鳴者を天下に獲ることすら夢想もせずに、たゞ自ら娯み、自ら勵む自得の境涯に安んじてゐた。

試みに當時の子規の作を見ても

夕立やはらすを笠にかぶり行く　（明治十八年）

ちる花にもつるゝ鳥の翼かな　（明治二十年）

花に行く足に二日の灸かな　（明治二十一年）

おのが荷に追れて淋し芒賣　（明治二十二年）

名月やともし火白く犬黑し　（明治二十三年）

冬かれや田舍娘のうつくしき　（明治二十四年）

など觀察も著想も格調も、まだ尋常一樣の類型的な發句臭を脱してゐない。尤も仔細に探究すると

木をつみて夜の明やすき小窓かな　（明治十八年）
ぬれ足で雀のあるく廊下かな　（明治二十年）
秋の蚊や疊に沿うて低く飛ぶ　（明治二十一年）
雪のある山も見えけり上り阪　（明治二十二年）
遊ぶ子の一人歸るや秋の暮　（明治二十三年）
やすんだる日より大工の衣かへ　（明治二十四年）

の如き、寫生に立脚する晩年の句風を暗示するものも交らないではないが、それらはむしろ甚だ寥々としてゐる。俳句的に傳統づけられた主觀、構想技巧からヒントを得た子規としては、そこに先入感を生じ、そこに句作の標準を見出すのも亦た當然の結果であつた。

明治二十三年の碧梧桐の處女作に對する子規の改删を對照しても

早びるで泉村より土筆狩　（原句）
筆捨てゝけふもつみけりつくづくし　（改作）

續々と梅に後繼ぐ桃杏　（原句）
梅ちりて桃と杏の後備へ　（改作）

春の日に冬見るけふの山の上　（原句）
佐保姫は裾にすがるやふしの山　（改作）
春風の吹き殘したりふしの雪　（同　）

其の改删が如何に俳句的技巧に泥んでゐるかの消息をうつてつけに物語つてゐる。明治二十四年に入つても

鶯やたまさか來鳴今宵かな　（原句）
鶯やたまには花の咲かぬ枝　（改作）

初汐に二階から見る白帆かな　（原句）
初汐や帆檣とゞく濱座敷　（改作）

鬼灯を門のかまへやわらの庵　（原句）
鬼灯や秋にはうつる藁の庵　（改作）

せきれいは尾に秋風を吹かせけり　（原句）
せきれいは尾に秋風をそらしけり　（改作）

扨さくら四國になりて六十里　（原句）
扨さくら四國まはれば六十里　（改作）

の如き筆を加へてゐる。原句の無拘束に近い、荒削りな蕪雜さは、多分に無經驗なアマチュア臭を帶びてゐるのであるが、子規の改删は、却つて作者の率直な自由書式の情味を沒却して、有り來つた因襲の裝飾を施すの觀がある。

併しながら、それらのアマチュアな作品の砂礫の中から、作者も無意識であり、又た他の同人も不問に附した眞珠を拾ふ鑑識の一頭地を抜くものもあつた。

鶯や谷間〳〵の水の音　【碧梧桐】
面白うきけば蜩夕日かな　【同　】
妻も子も一つまとひや萩の中　【雪　燈】

汐先のしくれてしろき夕日かな　(可　全)

何事も暮の秋だまれかれ芒　(碧梧桐)

雨にくれ雨にあけたる行々子　(虚　子)

これらは明治二十四年中の雜駁な瓦礫の中から、獨り子規のみの拾ひ得た稍句の形を備へたものであつた。これに限らず、子規の推稱する所以を作者自ら第三者として質さねばならないやうな滑稽には當時屢々繰り返された。さうして作者が自信のある句は概ね不問にせられ、時には惡評をさへ加へられた。子規の說く所は、諄々として盡きず、しかも條理整然として一指を加へる事も出來なかつた。我ら後輩のアマチュアは、子規を神聖なアンパイアとして仰がねばならない立場にあつた。或時は父とし師とし、或時は神として崇めねばならなかつた程、其の聰明と叡智とに打たれるのであつた。若し子規が單なる俳句考古學者であり、俳句論理學者であり、俳句玩弄者であつたとすれば、俳句美が那邊に存在するか、俳句美の價値感銘がどの程度に住するか、俳人生活の示す詩的評價をどう判定するか、恐らくは尋常一樣の管見にとゞまつて、萎靡沈滯せる床屋俳諧に新たな呼吸を賦與する事は出來なかつたであらう。又た其の同人儕輩の作に對しても、超然として一刀兩斷的の獨自の批評を加へる事も出來なかつたであらう。其の發祥時代、黎明期と言つても、自己を信ずる詩的批判の根據は、既に牢乎として明確なものを摑んでゐたのだ。古今の俳人の示す管見より一層突込んだ一層合理的な感銘に昻ぶつてゐたのだ。言ひ換れば、文學の各種類を涉獵して、始めて俳句によつて其の生くる道を見出したのだつた。其の全力を俳句に用ひたのを、已むない病軀の爲めのやうに解するのは、子規の內的衝動に觸れない外的觀察であると言つていゝ。又た其の俳句革新運動を、偶然の齎らした結果のやうに見るのも、事相の必然性を洞察しない淺見と言つていゝ。どれ程覇氣と野心の權化のやうに動き、常識の人間であると思はれ、詩人的素質の薄いかに見え、創作力よりも批判力に長じ、綜合觀よりも解剖觀を先きにする、さういふ子規として想定さるゝ場合は

多分にあつたとしても、夙く俳句の示す俳的最高の世界に味到して、そこに自己の生命を依托しようとした、獨自の創造力、鋭敏な感受性、純眞な猛精進は、子規の俳句に於ける內面史として特筆せなければならない要諦である。――尙ほこの發祥時代に於ける消息は、拙著『子規の回想』及び『子規の第一步』に審かである。

明治三十年前後の詩

河井醉茗

美妙、湖處子、梅花、透谷などの先驅者があつて、詩は當然起るべき氣運に向いてきたのが明治三十年前後の大勢であつた。その頂上に立つたのが島崎藤村であつた。だから、一篇の島崎藤村論さへあれば事足りるかも知れないが、ここにはさういふ氣運を盛り上げていつた時代の背景、幾多の青年作家の動靜等を觀照し、詩歌革新の聲を擧げたさまざまの動機を拾收して置きたい。時代がたてばたつほど藤村の詩に於ける功蹟のはつきりしてくる所以も自ら分つてくるわけだ。

×

三十年前後の詩運を興してくる前に二十七八年の戰役があつた。此の戰役が時代の人心に影響した點は非常に甚深なもので、血と、火と、烟との裏には、淚があり、詩があつた。

征淸歌といひ、軍歌といひ、民謠といひ、その他の抒情詩叙事詩といひ、その頃の詩には戰役の影を到る處に見た。詩人も歌人も國文家もみなそれを作つた。敵愾心をあほることが主になつて、藝術的價値の乏しい、國民性に觸れるこ

との少ない、典型的詩歌が大多數を占めてゐたのだが、只、その結果詩歌の形を自由ならしめたことゝ、詩に興奮と情熱を附與しようと試みる人のあらはれてきたことゝは、矢張戰役時代の好い影響であつたらう。

その後に刊行された與謝野寛（當時の鐵幹）の『東西南北』は代表的の詩歌集であつた。この書は藝術上から批評するよりも、時代を背景とする青年者の元氣、意氣、情熱等を明示し、また暗示したもので、一轉回して新派和歌の革新となつたのである。短歌の上からは更に功蹟を要求して然るべき集であるが、歌といはず詩といはず新しいリズムの世界に逸走を企てた點に於て、當時の新興藝術に大いなる動搖を與へてゐる。

たのしといふもおろかなり
くるしといふもおろかなり
千とせ八千とせたたばとて
この世ながらのこの世かな。
大詩人、小詩人
なにかさばかりあらそはむ
人を神ぞといつはらず
人は人ぞとうたへかし。（失題）

此の人間の心に覺めようとした努力は、鐵幹の詩歌の發生を自由に新鮮にしたのであつた。また彼自らは自分の作を『小生の詩』と稱した、小生の詩は自然の上に立つた個の創造であることを意味した。それが唯一の主張であつた　藝術的流派といふやうなものを特に標榜しなかつた。詩歌の束縛を脫して而かも新しい情感を詩歌に盛らうとした。鐵幹の詩は粗放である、淺薄であると譏られたのは、青年の意氣眞情をそのまゝに卒直にうたはうとしたからで、且又時代

の刺戟をそのまゝに享け容れたからで、今日の寛氏が見ても恐らく苦笑を禁じ得ないやうな詩歌が澤山にあるのは否まれなからうが、それでも猶ほ詩歌至上を目標として何等囚はれることのなかつた心境は尊むべき若き日の賜物であつた。

『東西南北』の卷頭に

野に生ふる草にも物を言はせばや
涙もあらむ歌もあるらむ

花ひとつ綠の葉より萌え出でぬ
戀しりそむる人に見せばや

と二首の歌があつた。『國民之友』の八面樓主人は此のうた及びその他二三首を擧げて『既に自我を立つて盡く過去の形式の束縛を脫し、舊套の鐵枷を碎く。題を採り、意を命ずることの自在にして清新なるべきは固より當然なることなり』と云つてゐる。自分達の驚きは決して八面樓主人に劣らなかつたばかりか、これが詩だと思つた、形は短歌の三十一文字を踏襲してゐるが、和歌といふものゝ囚はれた心持から全然脫却して、新意がある。詩はかういふところから發生しなければならないと思はれた。素より今日からみると短歌としても珍しい氣はしないだらうが、明治三十年前後には全く一つの新しい動搖に相違なかつた。

序だから云つてみるが、その後僅に五年ばかりの月日を經て與謝野晶子の『みだれ髪』が出た、同じく卷頭の一首を拔いてみると

夜の帳にささめきあまき星の今を下界の人の鬢のほつれよ

それにもわれ〳〵は驚かされたのであるが、此の五六年間の推移といふものははやしほのやうなもので、高く、深く、博く、大きく、而して最も急激に流動した詩的意識の流れであつたから、晶子女史の出現には更に壓倒的の力があつた。

のである。

而し、われ〳〵は飜つてその五六年前に於ける暗中の曙光のやうな『東西南北』の清新な印象を忘れることは出來ない

×

後に小說家または學者その他になつた人で、詩を作つてゐた人は可なりある。『この花』を刊行した新詩會では落合直文、佐々木信綱、宮崎湖處子、鹽井雨江、武島羽衣、繁野天來、杉烏山、正岡子規、大町桂月、與謝野鐵幹の十人が名を列ねてゐる。民友社刊行の『抒情詩』は國木田獨步、田山花袋、松岡國男、矢崎嵯峨の舍、太田玉茗、宮崎湖處子の六人の詩選である。『早稻田文學』に新作を發表してゐた繁野天來、三木天遊の（合集は『松蟲鈴蟲』といふ）二氏がある。雜誌では藤村、殘花、孤蝶、天知等の『文學界』の人達。『文庫』と『靑年文』は共通點があつて私の詩も載せたが、外に夜雨、淸白、伏龍、天眞、露子等澤山の人がある。『新文壇』『國民之友』『帝國文學』等にも新進の詩人の作が發表され、『早稻田文學』には前に云つた天遊天來の外、金子むぐらのや、伏龍等の詩もあつた。

『抒情詩』は今でも珍重される詩集だが、獨步だの花袋だの兎に角後に小說家として一代を風靡した人の詩だから珍しい感じがする。獨步に哲學じみた思想をうたはうとする傾向があり、花袋に自然を詠嘆する心持があらはれてゐるのもあらそはれないことで、就中松岡國男の詩は純然たる抒情詩であつて、如何にも詩が若き日の生命であることを語つてゐる。『夕ぐれに眠りのさめし時』と題し

うたて此世はをぐらきを
何しにわれはさめつらむ
いさ今いちどかへらばや
うつくしかりし夢の世に　（國男）

といつたやうな靜思、沈吟、短歌の形式で表現すれば、それまでのものであつたかもしれないが、彼自ら何うしても新しい形式でなければ云へなかつたといふ自信を序にも述べてゐるだけに、詩として一つの形を見出した處に淸新さがある。けれども用語は凡て古典的な雅馴なものを選み、律格もおだやかな七五調であつたから、當時の詩界では刺戟性が乏しかつた。此の點で藤村は同じやうな道を歩きながらもずつと刺戟と情熱に富んでゐたから、同じ靑春の心持であつても響き方が强かつたのである。

湖處子や玉茗は主として叙事詩を作つたが、或る事件を捉へてきて詩にするといふ現象も、二十七八年戰役後の一現象で、戰役には多くの事件が伴なふ、それを詩に取り入れた人もあるが素より一時の際物で、永い興味はつながれない。それで比較的永い感興を伴なふやうな事件を題材とすることに移つてきたのである。

叙事詩といふものが、いつの時代にも最大感興の的とならないのは、なほ小說に及ばないといふ遺憾があつて、これには作者の技倆ばかりでなく、さま〴〵の原因もあることだらうが、詩形の單調も一つの原因だらう、岩野泡鳴なども早くその點に氣附いて、數種の試作を遺していつたが、（二十九年の『早稻田文學』には「寢釋迦の渡し」といふ叙事詩がある）まだなか〳〵完成されてゐない。湖處子、玉茗、羽衣、雨江、直文等の幾種かの叙事詩は、三十年頃の詩壇を賑はしたものだが、詩の大勢は寧ろ抒情詩に移り、更に意識的に象徵詩が起るに及んで、叙事詩の如きは詩から除けものにされてしまつた。當時の叙事詩はみな相當の苦心洗錬されたもので、長篇だからとて決して投げやりにはしてゐない。ちやんとリズムをとゝのへ、言葉を練り、散文よりは興味を高潮しようとする苦心はあつたのだけれど、何うも立派な作は成されてゐない。藤村も『農夫』のやうな長篇を書いて、叙事詩の手腕を示してゐるが、矢張彼の抒情詩には及ばない。けれども古典派の叙事詩には殆ど人間の實生活に觸れてゐないけれど、湖處子のある作、藤村の『農夫』などには鮮明ではないがそれがある。また『早稻田文學』によく出た天來天遊の三人の作にも何うかして實生活をうたつてみ

たいといふ希望があつたらしく、敍事詩にそれが窺はれるのだが、なほまはりくどいものであつた。例へば『瓜盗人』の或る節

あさましくつらき我身に
人なみの乳房はあれど
水涸れし泉としれば
旅人もなどかは汲まむ。

あさましと見やる彼方に
一つ家の燈火見えて
瓜植ゑし背戸の小畠に
笑ひ聲洩るゝも床し。（天來）

詩歌が如何に貴族的傳統の下に養はれてきたものであつても、敍事詩を志す以上は現實を扱はなければならない。そこに矛盾が起つてきて、苦しい言葉づかひをしたり、こじつけが初まるのだが、それをきりひらくことは容易でなかつた。三十年頃にはまだ何人の手に據つても現實の生活は詩に入らなかつたといつてよい。それでも敍事詩の方面からそれを志した人があるといふことは記憶に價するだらう。

×

『文庫』が『少年文庫』時代から詩に重きを置いてきたのは不思議な現象ともいはれるので、廿八年に『文庫』となりその秋から私は詩の選評に專ら當つたのだが、弱冠の身でよくも大膽にやれたものだと思ふ。手當として月々金五圓貰

つたのだが、それでも下宿代はあつたので大威張で記者といふ肩書で澄込んでゐたわけだ。詰は毎月數十篇集つてきた。また詩の爲には相當の頁數を割いたもので、三段組で十頁以上はあつたやうに覺えてゐる。

『文庫』の詩人はみな初心の人ばかりで、湖處子や玉茗や藤村や雨江や羽衣などに渇仰して、散文の世界よりも詩の世界にあこがれを持つた人ばかりであつた。相當な力作を出しても記者先生に推稱されるだけで、文壇にはその名すら知られないのだけれど、よく忍從して二年でも三年でも、乃至五年でも十年でも『文庫』の詩人として作つてゐた。その間には何ういふ人が居たか、迚も一々の記憶は喚び起されないが、一家を成した横瀬夜雨や伊良子淸白は既に三十年頃に盛んに作つてゐた。

夜雨が『ありやなしや神も佛も』の題で自分の境遇をうたつたのは三十年前であつたらう。それこそ自分の感覺本位の抒情詩で何等の成心に囚はれてゐない作であつた。爾來夜雨は十年餘り詩作をつゞけてやめてしまつたが、一の獨立した抒情詩人であり、また鄕土詩人であつた。のみならず『文庫』にのみ終始したのも珍しいことであつた。淸白と共に明治詩人の一人として肩を並べて決して遜色はない。二十八九年頃には寶湖の名を以て發表してゐたが、後ち夜雨と改めてから詩も亦一層の光彩を增した。

淸白も恐らく廿七八年頃から作つてゐたらうと思ふ。淸白は理知の勝つた詩人で、夜雨とはゆきかたが異つてゐた。夜雨は野の詩人であると同時に、人間の執着、煩惱、戀愛など自家心境の情熱をうたつて盡きないところがあつたが、淸白は然うでない。最初は古典の傾きを多く有つてゐたが、次第に古典を離れて耽美の境地をつくりあげていつた。二三の抒情詩もあるが、概して敍事詩であり、詩語は健實、長篇を作つてもゆるぎのない句法を心得てゐた。夜雨の詩には憂鬱な陰影が有るけれど、淸白の詩には寧ろ陰影が見られない。明快であり暢達である。三十年頃の詩の大部分は然う

であつて、淸白の如きも若し『文庫』以外、詩壇の人として立つてゐたならば優に他の詩人と比肩するに足るべき素質はあつた。三十年以後と雖も彼は『文庫』にばかり據つてゐた。

塚原伏龍子もその頃多作者の一人であつた。長篇の叙事詩もあつたやうだ、或は山百合の名を以て發表した。遂に詩集は出さなかつたが、今日の島木赤彦となつては昔の詩人山百合と同人であることすら知る人は少ないであらう。

葉末露子（本名山田皪）山崎紫孔、木船和鄕、瀧澤秋曉、一色白浪、淸水橋村、堀井汀水などいふ人達の作には、それ〳〵の特色があつて、或は一冊の集を有つてゐる人もあり、そのまゝ埋れてしまつた人もあるが、此等の人達はみな三十年前後に活躍してゐたので、『文庫』では第一期の詩人ともいふべきである。

世に『文庫調』といふやうなものがあつたやうに思つてゐる人もあるが、『文庫調』とは何ういふ格調であるか、其の擔當者である自分にも未だ判然しない話だが、或は七五調の熟練されたものかも知れない。『文庫』は七五調をおし通してきたから然う思はれるのかもしれないが、特に文庫調といふやうなものを樹立したわけではない。詩の殖林地のやうな『文庫』のことだから、苗は同じやうな形に伸びたかもしれないが、成長すれば個々の形をあらはしていつたに違ひない。また實際然うでもあつた。

『靑年文』は『文庫』より高級な文學雜誌を標榜してゐたが、發行所も同じであつたし、共通點が多かつた。詩も大抵『文庫』の人の作を載せたのだが、よく整つて疵の少ない作は載せたのだが、『文庫』の方が淸新で、活氣もあつた。

×

當時の詞華集ともいふべき刊行物もないではなかつたが、編者の鑑賞眼が餘り優れてもゐなかつたので、特に代表的とみるべきものがない。『靑葉集』『山高水長』などがまだしも優れた方であらう。作家は大抵以上列擧した人々の中か

ら選まれたので、詩の篇數は多かつたやうだ。

私は明治二十九年に『詞藻』といふのを編輯してゐるが、それは詞華集といふほどのものではない。『文庫』に載せ得なかつた長篇ものや、埋沒させるのも惜しいと思ふやうな詩を集めただけで、それほど優れたものではない。詞華集としては寧ろ數年後に刊行した『青海波』が『文庫』の詩を代表してゐる。一冊だけでは盡さなかつた憾みもあるが、兎に角夜雨淸白以後三十七八年頃まで『文庫』に來た人の詩を選んであるので、また一つの參考とはなるであらう。

×

以上は三十年前後と云つても、三十年より前を主として考察したのだが、三十年後には詩の潮流は一層高まり、藤村の『若菜集』が動機ともなつたであらうが、詩人各自の詩集を刊行することが行はれた。晩翠の『天地有情』は三十二年に出たが、三十四年には與謝野寛の『鐵幹子』『むらさき』私の『無弦弓』などを初め年一年と詩書の刊行は增加するばかりであつた。

その間に詩の方向を指示するに與かつて大いなる力となつたものは上田敏の評論で、彼は頻りにフランスの詩風を紹介した。『海潮音』にまとまつたのは數年後のことだが、それまでの間、機會ある每に斷片的とはいへ氣の利いた筆致で西歐詩人の消息を傳へてくれたのであつた。

上田敏の感化は蒲原有明にあらはれた。薄田泣菫も同時代の人ではあらうが、詳しくいふと有明の方が早くから詩作（二十七八年頃）をしてゐた。泡鳴は二人を評して、渠（有明）がロセッチに生命を得たのは、泣菫のキイツに於けると同樣であつたといつてゐるが、先づ然うであらう。

有明の第一詩集『草わかば』は三十五年の刊行だ、詩は三十二三年頃から『明星』『新聲』その他に盛んに發表されたのだが、既に二十七八年頃『落穗双紙』といふ同人雜誌を出して詩を作つてゐた。その時分から有明は西歐詩人の作に

接近し、初めはバイロンを好んで讀み、後ちキーツを知り、シエレーを知るやうになり、三十二三年頃にはロセツチを耽讀した。藤村などゝも交通してゐた頃で、よい話對手であつたらうと思はれる。有明自身が嘗てその時代のことを述べてゐる中に、ロセツチのこともあつて、それは興味のある事實だから左にその一節を拔抄してしてかから。

その頃私はロセツチの詩を愛讀すること甚しかつた。どうもロセツチが好きになつて夢にまで見るやうになる。それで大學の國文科に居た友人のノートを借りて、小泉八雲のロセツチの飜譯を夢中になつて讀んだ。處がそれだけではどうしても慊りない。どうかしてロセツチの詩集を買ひたい求めたいと思ふこと、恰も飢ゑた人のやうであつた。或る日、私は麹町六丁目の文光堂といふ本屋へ行つて、積み重ねてある漢籍の棚を眺めてゐると、意外にも、その古びた漢籍の間にただ三冊の洋書がある。不思議のやうな思ひがして、その洋書をよく見ると、驚いたの驚かないのつて飛上るほどびつくりした。三冊の中の一冊は確に渇望してゐるロセツチじやないか。價をきくと三十錢だといふ。其處で早速家へ飛んで歸つて三十錢貰つてきて、その書を初めて自分の手に入れてホツとした。併し、それはロセツチの詩集ではなく、有名なロセツチの批評であつた。私は此の書によつて、ロセツチの詩人で有るとともに、又、畫家であることも知つた。その後三宅克己君と知り、ロセツチの畫について大いに論じたことがあつた。三宅君の紹介で岩村透氏に面會した。岩村氏はその時ロセツチに關する傳記、評論、畫、詩等一切の書籍數十冊を出して見せられた。貸してもらへまいかと願つたが、貸すことは出來ないが、來てみる分にはいくら見てもよいとのことで、毎日毎日餘程通つた。新聲社から出した『草わかば』はロセツチに負ふところ偉大である。況してそのバラツドに感化を享けたことは尋常でなかつた。その後『獨絃哀歌』を出した時まで、私のロセツチ熱は醒めなかつた。就中私の得意な『百合の園』などは、すつかりロセツチ調であつた。『春鳥集』を出した頃は、ベルレーヌの詩を愛讀してゐた●

それから後ち有明は象徴詩に移つたわけだが、それは前に云つた上田敏の影響を享けたもので、遂にわが國唯一の象徴

詩人として知られるやうになつた。

既成文壇打破の運動

「青年文」及び「新聲」と「文庫」

高須芳次郎

一

日清戰爭前後　明治三十年代の文壇は今の新人たちには、見當が付かぬと思はるゝほどの特殊現象を呈してゐた。文閥打破、風紀革新の大旆を翻した『青年文』及び『新聲』（『新潮』の前身）は、當時の弊套を一排すべき必要の下に一つのニユウ・ムウブメントを起したのである。が、今日の新文壇人には文閥打破といふ標語が、恐らく、三十年代のやうに強くその頭に響くまいと思ふ。それと同樣、風紀革新といふことも、あの頃のやうなセンセエションを青年間に起す言葉でなくなつてゐる。

それで當時の趨勢を明かにするには、どうしても、事實にもとづいて說かねばならぬ。それには、私事に亘つて濟まぬが、すこしばかり、あの時分の文學青年の一人としての私自身について述べさせて戴く自由を與へられたい。私がある官廳の書記（判任官程度であつた。）を勤めてゐた傍ら、大阪で第二次文藝復興の先驅に役立つた『よしあし草』を中

村吉藏、西村眞次、山川智應の諸君と協力して出したのは、明治三十一年の夏である。中村君と親しくなつたといふことが、私に『よしあし草』發行の決意を強めしめたと思ふ。あの時分、中村君は私と同じ役所に勤めてゐた關係から互ゐに往來するやうになつた。そして私は同君を訪問する毎に時々、その机上に『青年文』といふ雜誌が載せてあるのを見た。私が『青年文』の存在を知つたのは、中村君を通じてであつた。

田岡嶺雲！　この人の文章に一時共鳴したのは、『青年文』を愛讀するやうになつてからである。同誌は明治二十八年『文庫』と前後して出た評論本位の雜誌であつた。別に主筆といふやうな人は定められてはゐなかつたけれども、その中心となつたのは田岡嶺雲氏である。嶺雲氏を助けて同誌に文藝評論の筆を執つたのは山縣五十雄、大町桂月、笹川臨風、佐々醒雪諸氏であつた。臨風氏は栩々公子といふ匿名で書いた。また桂月氏も變名して執筆したが、時に自讚的文章を書いたことがあつた。氏は岩野泡鳴氏のやうに自ら『氏曰く』と正面から、公然、自讚はしなかつたけれども、覆面の下に自分を自ら罵つたり、賞讚したりするやうなことが稀れにあつた。無論それは一種の愛嬌で、無邪氣なところが、却て面白かつた。この事は、當時、秀英舍にゐて、親しく『青年文』の校正に當つた友人某氏の直話による。



「新聲」表紙

嶺雲氏はいづれかといへば、尋常文士の流でなかつた。氏は帝大漢文專科の出身で、一見、在野の志士とでもいひたい風格があつた。政治上にも多少の興味と野心とを持つてゐたやうだ。名利とか金錢とかいふことには極淡泊で、昔流にいへば、氣骨稜々たる人であつた。さうした性質が氏の文章の上にも、はつきり流露してゐた。氏は直言、直筆を生命とし、長所とした。自分の主張せんとするところ、自分の確信するところは、すこしも蔽はないで、自由に大膽にそして若々しく表白したのである

氏の思想の根據が何處にあつたかといふことは明言し難いが、ひろい意味で東洋的であつたといへる。つまり全體として支那文學の感化が强く支配してゐた。文藝時評の上で氏の主眼としたところは、既成文壇打破であつたが、それと並行的に風紀革新を唱へた。既成文壇打破といふことは、私が假りにさう名付けたので、當時は『文閥打破』と云つた。今から考へると『文閥』の二字に語弊があるやうに思ふ。その閥とは、硯友社閥を著しいものゝ一つに數へたのであるが、それに次いで、赤門派、早稻田派なども、いくらか閥があるといふやうに當時の新人は解釋してゐた。兎も角、嶺雲氏は文閥打破といふことを主張し、紅葉、露伴などが、餘り作品を發表しなくなつたり、割合によいものを出さぬときは、容赦なく、非難を加へた。その論難の當否は別として、嶺雲氏の意氣充實した文章、覇氣縱横の槪があつた評論が、あの頃の若き無名文士を魅し、青年學生の胸を强く打つたのである。

それから嶺雲氏は、よく『醜風陋俗を打破する』と叫び、社會が道德的に低調化したことを憤つた。この點は、明治三十二年頃に出た内村鑑三氏の『獨立評論』とよく似てゐた。唯嶺雲氏のは、漢學者趣味があり、内村氏のは、クリスト敎趣味が强かつたといふだけの相違を見るのみである。勿論、その表現上、内村氏のカアライル式苦味は、嶺雲氏になかつた。それに内村獨自の皮肉も亦嶺雲になかつた。その代りに勁拔、銳利とでもいひたい痛快味を嶺雲氏の文中に見出すことが出來たのである。

二

今日の文壇では、一面、雜文本位の雜誌が歡迎されてゐるが、今『青年文』のやうに全紙殆ど文藝評論を以て埋めた雜誌が出たとしたら、どんなに取扱はれるであらうか。恐らく、廣く歡迎せられまいと思ふ。ところが、明治三十年代には、文學好きの靑年は、好んで『青年文』を愛讀し、痛快を叫んだのである。そこに時代の變遷、趣味の變化がはつきり現はれてゐる。『新潮』の前身、『新聲』は、大體に於て、田岡嶺雲氏の影響を受けたものと云つて宜い。といふのは、最初、『新聲』の創刊者であり、編輯主任であり、合せてその主筆でもあつた佐藤義亮氏（橘香と號した）は、最近當時を回顧して『私は確かに嶺雲氏の感化を多分に受けた。當時の文士は大抵自讃したが、氏に限つて、絕對に自讃したことがなかつた。そこに氏の人物に美しいところがあつた一端を察することが出來よう』との述懷があつた。

嶺雲氏はさういふ風の人だけに、文壇の情實に重きを置かなかつた。その出身系統からいふと、氏は赤門派の一人であつたが、必ずしも、赤門派を贔負にするやうなことをしなかつた　赤門以外の文士でも、立派な作品を出し、すぐれた評論を書くものは正直に讃賞したのである。が、當時、横暴だといはれた硯友社の人々に對しては、慨して好感を持たなかつた。氏は『今日の文閥的弊害は硯友社によつて多く作られた。』といふやうに解釋し、それにつれて、硯友社の統領、尾崎紅葉氏などに手强く當つた氣味があつた。

硯友社一派の横暴といふことは事實、あつたかなかつたか。最近、廣津柳浪氏が拙宅へ來遊された時の話によると、『硯友社一派の横暴といふのは、事實相違してゐる。成程三十年代の文壇で、硯友社一派の作物が概して幅を利かしたが、『新小說』は幸田露伴氏が主宰し、『新著月刊　は早稻田派の人々が主として同人となり、硯友社の機關とも云ふべき雜誌はなかつた。それに硯友社一派は、創作家のみで、自家のことを吹聽したり、擁護したりするやうなこともなか

つた。それからしてもわかる通り、横暴などいふことは、事實上全くなかつたのである。唯それは一片の噂にすぎぬ。』といふ意味の話があつた。柳浪氏は比較的公平を以つて知られた人であるから、この話には、信を置くべき點がある。既に横暴でないとすれば、硯友社閥といつたやうなものもない筈だ。が、唯茲に當時の雜誌發行者や編輯者が、既成作家、相當名ある文士を尙び、無名文士を冷遇した結果が、やがて硯友社一派を重視し歡迎するやうになつたこと丈は蔽ひ難い。それと共に、無名作家の作品を出す場合には『紅葉補』とか、『紅葉閲』とか、或は『紅葉、何某合作』とかいふ體裁でなければ概して作品の掲載を拒んだのである。さうしたことが、世上に傳はつて、やがて『硯友社の横暴』や『硯友閥跋扈』の噂を生じたのだと思ふ。

以上の事實に裏書するのは、中村吉藏氏が早稻田大學時代『文藝俱樂部』に最初の小說を發表した事情である。あれを發表する時分、同君は廣津柳浪氏の家に寄寓してゐた。その緣によつて、柳浪氏が特に『文藝俱樂部』へ紹介したので、掲載されることとなつたわけだ。もし同君が柳浪氏の許に寄寓してゐなかつたら、そしてその紹介、推薦がなかつたら、『文藝俱樂部』へその作品を發表することが、もつと遲れたかも知れぬ。否、中々むづかしかつたにちがひない。たとひ、同君の實力が既に備はり、その作品の內容が充實してゐたとしても、まだ『文藝俱樂部』の記者に認識されなかつたかも知れないのである。かうした特殊事情が當時、文壇に進もうとする無名青年の進路をどんなに手づよく、また無情に遮つたか知れない。現に大阪に長くゐて東京に緣がうすかつた、否、寧ろ絕無に近かつた私なども、殊にさうした點に困難を嘗めたのである。

以上のやうな事情の下に於て、嶺雲氏が文閥打破といふ標語を掲げて、獅子吼したことは、どの位、無名の文學青年を感激せしめたか知れなかつた。その代りに、嶺雲氏の思想は深くもなければ、高くもなく、また銳くもなかつた。それに一本調子で變化に乏しかつた。時には客氣に驅られ、覇氣に累せられたところもあつた。また情熱の強い割に理性

に乏しいところが見えてゐた。文藝評論家としての嶺雲氏が、一時、青年間に相當喝采されたに關らず、中途から、次第に振はなくなり、結局、その晩年は、殆んど忘られ氣味となつたのは、右のやうな短所が附き纏うてゐたからである。それに氏自身が、さうした點に反省を加へなかつた所爲にもよるであらう。さて氏の文章は今日の人々に一寸珍しく思はれる漢文體にちかいものであるから、茲にその一節を拔く。

夏殷二代の忠質を承けて、周に至つて文勝つ。文の勝つは卽ち飾の勝つ也、飾の勝つは卽ち巧の勝つ也。巧の勝つは卽ち詐の勝つ也、詐の勝つは卽ち智の勝つ也、智の勝つは卽ち僞の勝つ也。僞は人爲也、人の爲す也、人の爲すところあるは卽ち慾するところあれば也。欲するところあれば則ち爭ふ。爭へば則ち競ふ、爭ひ且競へば則ち亂る（下略）

いかにも法度森嚴といひたい文章である。

田岡嶺雲氏の感化と影響とを相當に受けた佐藤義亮氏が『新聲』を創刊したのは、明治二十九年七月のことである。これを『文庫』が二十八年八月に出たのに對照すると、一年あとに出たこととなる。この二雜誌は共に既成文壇に反抗して出た意味に於て、また世上無名にして實力ある文學青年の評論、創作を歡迎した上に於て、略ぼ同一傾向を有した。唯『新聲』は別に風紀革新を呼號し、早く社會的傾向を帶びてゐた點が『文庫』と異つてゐたのである。

三

當時は文藝雜誌が殊に少かつた。今日のやうに個人雜誌、同人雜誌といふやうなものも殆どなかつた。それに他に於て小說や文藝評論を載せるやうな性質の雜誌に乏しく、政治雜誌などへそれを載せたとしても、極分量を少くするといつた具合であつた。加ふるに文壇を支配した特殊事情があり、事大主義――大家偏重主義乃至知名文士謳歌の傾きが强かつた。かうした際、多少實力ある無名文士や文學青年は、勢ひその作品、評論を發表すべき自由機關を要した、それ

の要求にぴつたりとあてはまつたのは『新聲』及び『文庫』である。

最初から『新聲』は旗幟鮮明で、毎號卷頭數ページに於て既成文壇打破の旨意を繰返して說き、風紀革新を標榜して靑年の意氣を鼓舞するにつとめた。實質上、文藝趣味が中心となつたが、數年後には、社會趣味が多くなつて、略ぼその一半を占めるやうになつたことさへあつた。初期の『新聲』即ち二十九年夏から三十二年冬迄は、主として佐藤義亮氏が編輯に當り、それ以後、私が上京して『新聲』記者となるに及び、大體私が編輯に當つた。それから間もなく、佐藤兄が專ら經營方面に力をつくすに及び、秋田から田口掬汀君が上京し、同君と私とが編輯に當り二人で卷頭の時評をも執筆したのである。が、二十九年から三十二年前後迄執筆した佐藤兄の文藝時評は、當時一異彩を放ち、嶺雲君の壘を磨した。大町桂月氏の如きは、殊に推賞を惜まない一人であつた。私も亦佐藤兄に敎へらるゝところが多かつた。文章上に於て、佐藤兄は私の先輩である。

それから三十四年頃に及び、正岡藝陽君が私の許へ來て、その文章の批正を求めた。また私の意見を聞いて、時々、著述などをしたが、奇警、痛快なところがあるので私から同君を佐藤兄に推擧し、『新聲』記者とした。その他、同人として、平福百穗、一條成美、奥村梅皐、登坂地嶺諸氏が加はり、客員として河東碧梧桐、金子薰園、蒲原有明、中村吉藏佐藤紅綠、結城素明、大沼鶴林の諸氏が加はつた。西村眞次君も初期の『新聲』に半年ばかり關係してゐた。今、新潮社支配人をしてゐる中根駒十郎君は、初期から庶務、經營に與つた人である。

さて既成文壇の打破といふことについて『新聲』同人は、勢ひ硯友社一派に手づよく當り、殊に紅葉氏が一時不振狀態にあるのを見ると『紅葉の思想は既に枯渇してしまつた』といつて、鋭い非難を浴びせ、時には『紅葉を葬れ、露伴を排すべし』と迄叫んだのである。それで紅葉氏は、ひどく『新聲』同人、殊に私を憎んだと見えて、その座右のものに『高須といふ男は病犬のやうだ。誰れにでも嚙みつくね』と罵つたさうである。當時、『新聲』同人は『三十棒』と題

した一書を出して、既成作家、既成評論家に喧嘩を挑み、奢侈に耽る傾向があつた日清戰後の社會上中流の生活者を痛罵し、餘りはげしく當つたので、蒲原有明氏は窃かに私のために心配してくれた。

『君、そんなに無暗に敵を作るのは損ですよ。』

と云つて、切に直言をやめんことを求めた。その時の光景は、今もよく覺えてゐる。それは何でも明治三十三年の晩秋初冬の頃であつたと思ふ。私は氏と神田の新聲社を出て街上を散歩しつゝ、九段坂を上つたが、その坂の途中で、有明氏は夕陽の光を浴びつゝ、熱意ある眼を私に向け『敵を作ることだけは早くやめ給へ』と再三、云つた。その忠告を私は心から感謝したが、やはり、頑剛の性は、容易に柔かず、そのため、筆禍を得たことがあつた。この事は、日夏耿之介氏の『詩史』のうちにも出てゐる。私が餘りに既成文壇を罵倒するので、ある時、正岡藝陽氏が匿名で書いた『文壇照魔鏡』で與謝野寛氏のことを大分非難したので、與謝野君は、筆者不明のために、輕卒にも私がそれを書いたのだと『明星』誌上に妄斷、吹聽し、私に迷惑を與へたことがあつた。與謝野氏の狼狽した體は『虎の鐵幹』といはれた氏に似合はしくなかつたので私は寧ろ氣の毒にも感じたが、兎も角そんな誤解を受けたのは私に取つて、確かに一種の筆禍であつた。それは平生、餘りに既成作家に强く當つたので、惡口專問家のやうに思はれたからである。當時『明星』の裏面には赤門派の上田敏氏らが潜み、種々『新聲』同人に當らうとして劃策したらしい形跡があつたやうだ。が、それは玆に省く。兎に角『新聲』は既成文壇打破に餘りに熱中したので、當時の憎まれた物であつた。が、その代りに青年の共鳴したことも亦多大で、一時、その讀者が二萬以上に達したのである。今日、二萬の讀者は何でもないかも知れないが、當時の文藝雜誌にあつては、確かに異數とすべきであつた。

次ぎに『新聲』に寄稿した人々で、今日知名の士となつてゐるのが非常に多い。片上伸（天弦）内藤濯（夕波）折竹錫（蓼峯）相馬御風、生田長江（星郊）土岐善麿（哀果）吉植庄亮（愛劍）の諸氏その他數へるといくらもある。また正宗白

島氏は、早稲田を卒業すると間もなく、新聲社の委囑によつて『海外文壇』の一欄を擔當し、約半歳の間、執筆を續けた。中村吉藏氏は早稲田在學中、匿名で一年間、文藝時評を書いたことがあつた。

それから『新聲』の體裁は、いつも卷頭に『文藝小觀』及び『社會時言』を載せ、文士月旦、創作合評を掲げ『甘言苦語』の一欄で『新潮』の『不同調』といつたやうな趣味を發表した。また『文藝春秋』の餘興記事のやうなものを掲げ『小說大學々課目及敎授名』といつたやうなものを戲れに出したことがあつた。既成作家、評家の間に憎まれ者とせられた『新聲』も明治三十五年頃には、基礎が固くなつた爲めでもあらうが、文壇知名の士のうちにも共鳴者を生じ、田山花袋、國木田獨步、德富蘆花諸氏その他、相當好意を寄せた。蘆花氏の『不如歸』が出た時、私は『新聲』の別働隊である『文藝新聞』で眞先にそれを推賞した。すると間もなく、蘆花氏から特に感謝狀を寄せ、間もなく、私を新聲社樓上に訪うて『君はもつと年長の人かと思つたが、まだ中々御若いやうですな』と云つたことを覺えてゐる。獨步氏などは再三、新聲社に來遊し、快辯を揮つて、紅葉罵倒論をしたことがあつた。また花袋氏は最も早く『新聲』誌上で自然主義文學を鼓吹し、次いで新聲社の『アカツキ叢書』の一篇として『重右衛門の最後』を公にしたのである。それは鮮明に自然主義的傾向を帶びた作品であつた。

以上のやうに旺んであつた『新聲』もそれが佐藤兄の手を離れて正岡藝陽君が專ら經營、編輯を擔當するに及んで品位が落ち、次ぎに隆文館の手に渡つてからは、最初から一貫した特色を餘程減じ、やがて自然に廢刊しなければならぬ運命に立至つたのである。それは日露戰爭後のことであると思ふ。

四

次ぎに『文庫』は『新聲』のやうに主張が明白でなく、漠然たる主義、方針の下に編輯せられてゐた傾きがあるけれ

ども、事實上、既成文壇に反抗し、その打破に任じたといつて差支えがない。『新聲』は同誌に對して理解ある知名の士の寄稿を時々掲げたが『文庫』は全部、無名の人々の作品、評論で埋めた。知名の士といふと、同誌の記者、小島烏水千葉龜雄（江東）河井醉茗、瀧澤秋曉、五十嵐白蓮の諸氏である。

その記者中で、當時にあつた最も傑出し、最も重味があつたのは瀧澤秋曉氏である。氏は曾て小島烏水の投書家時代にその文章を批閲したことがあつた。それと同樣、千葉龜雄氏の文章にも加筆したと聞いてゐる。かうした點からいつても、秋曉氏は『文庫』同人中の先輩であつた。のみならず『文庫』に掲げられた人々の作品、評論の末尾に六號活字で各記者の評言を加へた中で、一番鋭く、又巧みに穿つた言葉を出して氣が利いてゐたのは、何と云つても秋曉君であつた。同君が讀不書生の匿名によつて『文庫』の寄稿家を月旦した文章は、抑揚自在であり、一擒一縱の妙を極めてゐた。

秋曉氏は創作、小品の類にも獨自の澁味を發揮し、時に『水滸傳』の一節を老巧な筆で譯したりした。氏には支那文學の素養がそれほどないと聞いてゐたが、その譯文は確かにどつしりとした氣格があつて私はすつかり感心した。兎も角、氏は多方面の才があつて、而も上ついたところがなく、輕薄じみた點がなかつた。この人が、中途文壇を去つて郷國信州で實業家となつたのは今も惜むべきことであつたと思ふ。

秋曉氏と略ぼ同格の人として、もつと花やかで若武者が緋おどしの鎧を着たやうな趣があつたのは小島烏水氏である。氏は最初から紀行文家として出發した。氏は時に文藝評論をも書いたが、それは寧ろ氏の餘技で、同君の長所は紀行文の上にあつた。當時『新聲』と『文庫』とは、無名青年文士の二大登龍門として對立し、世上それを商賣仇の間柄のやうに思つてゐたが、實は烏水君の紀行文に最も感心したのは、私と佐藤兄で、同君最初の文集『扇頭小景』は佐藤兄が進んで新聲社から出版したのである。順序からいふと、當然、それは『文庫』の發行所――内外出版協會から發行せら

るべきであつたが、どうしても出版せぬといふので『新聲』同人が、烏水君の才能を尊重し、『扇頭小景』を世に紹介したのである。當時、歡喜した烏水君の俤、またその折同君と鎌倉に遊んだことは愉快であつた。それは明治三十三年の春であつた。

詩人としての醉茗君、文藝批評家としての千葉君については、玆に云ふ必要はあるまい。世上餘りによく知りすぎてゐるからである。醉茗君が北原白秋、三木羅風その他多くの有力な詩人を、『文庫』で育てあげたことは、蒲原有明君が『新聲』詩壇で新人を養成したのと同じ意味合である。また金子薫園君が『新聲』で多くの新歌人を養成したのと同様の趣である。千葉君は當時、今日のやうな平明、暢達の文を書かないで、漢字の多いゴツゴツした放膽な文を書き、その批評は眞面目ではあつたが、概して詠嘆的主情的に偏してゐた。時に五六十枚の長篇を發表して文壇鳥瞰を試みたことが一再ならずあつた。

そうした記者諸氏の指導の下に集つた『文庫』の寄稿家は一體に粒がよく揃つてゐた。私が正岡藝陽と意見を異にして、同君經營時代の『新聲』と關係を絶ち、烏水君の推薦で暫く客員として『文庫』の卷頭に文藝評論を寄せてゐた頃は、殊に『文庫』の內容が充實してゐた。中にも、小說、長詩の方面に優れた人たちが多かつた。小說といふと、記者の一人、五十嵐白蓮君を思ひ出すが、同君は中々の凝り性で長い間に短篇小說二三を發表したのみだが、いづれも文章が締つて當世西鶴とでもいひたい趣が見えた。同君が中途、『文庫』を去り、その後、全く消息がわからないのは文壇のため惜むべきである。と、その當時、河井醉茗君とも話し合つたことであつた。

それから『文庫』の體裁は最初に主として論文を掲げ、次ぎに小說、雜錄、詩歌俳の類を收めた。一時、內藤鳴雪翁が、俳句欄を擔當して、それへ一々句評を加へたことは、當時讀者の間にひどく喜ばれた。翁の評言や秋皚、烏水二君の評言は、投書家を啓發するところが少くなかつたのである。

かうして『文庫』によつて文壇に出た諸氏は森田草平、山崎紫紅、伊良子清白、横瀬夜雨その他隨分多い。事實上、議論よりも、實際といふ上から『文庫』は既成文壇打破の事業に於てある程度の成功を收め、且つ文壇の單調を破り、清新味を注入したのである。

が、それ丈の功績が『新聲』と『文庫』とにあつたに關らず、當時の赤門派の一團の如きは、故らにそれを默殺しやうとつとめ、或は中傷、誣讒を加へて、自ら高くするやうなことさへした。登張竹風氏の如きも、ニイチエについての論爭の餘波を『新聲』同人に浴びせ人身攻撃にちかいやうな言を放つた。自衛のためかも知れないが、故樗牛氏も、妙に『新聲』と『文庫』を惡意的な色眼鏡をかけて見てゐた。けれども伸びるべきものは伸びる。『新聲』『文庫』は『青年文』以上に伸び、その使命を全うしてから、自然に廢刊したのである。それから後『新聲』『文庫』同人がその雜誌廢刊後に於て赤門派などから特に復讐的に默殺されたり、冷眼を以て見られたことは、心あるものをひどく憤らしめたやうに私は思ふ。

明治三十年代の東都劇壇

松居松翁

一

老人は過去の記憶にのみ生きる。人生五十の定命を越して、われから松翁と名のる愚老には、東都劇壇の追憶は、或

ひはたゞ一つの適當な仕事かも知れぬ。が、老耄今日の如き愚老には、其適當な仕事すら不適當になつて居るかも知れぬ。たゞ明治三十二年の劇壇だけは、愚老に取つて、最も記念すべき年なので、割合に記憶に新たなるものがある樣な氣がせらるゝ。其意味から　題して明治三十年代といふものゝ、實は主として三十二年について語らうと思ふ。蓋しその三十二年は、愚老が處女脚本を、東京の劇壇で上場してくれた年であるからだ。

かういふと、『汝の樣な劣小な狂言作者が、處女作を出さうと、死作を出さうと、それが日本の劇壇に何の關係があらう。自分の作が初めて上場されたからとて、特に其年代の話をしやうなどゝは、僭越千萬な奴だ』と、御叱りを蒙るかも知れない。若し愚老にして、年甲斐もなく現代の作家先生がたの顰に倣ひ、已れ自からを高く標致して、天才の行爲はそれが如何に私的（プライヴエート）なものでも、文藝的に價値のあるものだといふ樣な了見から、此年を選んだものであるならば、如何なる御叱言（おこごと）を頂戴しやうと、辯解の語もあらう筈はないが、愚老に於いては決して左樣な大それた考はもつて居ない。これは自分を劣小なものとして公言を憚らない愚老の平常を御承知の方は、一も二もなく諒として下さる事と思ふ。彼の何者とも知れぬ、弱少な日本の先住民が築いた貝塚の中の、極めて微細な石器一つが、時に世界に名高い考古學者の好史料となる場合がある樣に、愚老のやうな劣小凡下の愚作家の當時の追憶が、意外の發見を演劇史家に促がす事になりはしないかと自惚れて、割合に印象の鮮かな年を選んで、記憶の糸をたぐり出して見やうと思ふのみである。

當年の梨園の狀況を語る前に、まづ日本及び世界の有樣を研究して見たい。此年は何と云つても、日淸戰爭が終つてやつと足掛け五年たつた計り、我邦の財政は非常に窮迫して、伊藤、山縣、大山、松方等の內閣に、いつも豫算の問題に逢着して、相尋いで倒るゝ有樣であつた。畸形ながらも日本最初の政黨內閣として其前年出現した大隈板垣の聯立內閣も纔か數ケ月にして潰えてしまひ、山縣が其後を受けて內閣を組織した。山縣は前年來提挈したる憲政黨の援助によつて、無事に第十三議會を乘切つたが、例の權謀政治は與黨の獵官熱を冷却すべく、文官任用令を振翳して、却つて畜犬

に吠えかゝられた。さうかと思へば、國民協會が帝國黨と變形するや、府縣會議員の選擧を機會として、陰からその後援につとめ、選擧干涉を敢へてしたりした。併し國內の政治は横濱埋立事件位の外には、大した波瀾もなかつたが、眼を國外に轉ずると、東洋の風雲はさすがに急にして、清韓兩國の危機は益す迫つて居た。獨逸は山東省をうかがひ、露國は關外の鐵道を求め、伊太利も亦三門灣に垂涎しつゝあり。英露の協商は、その國々の衝突は防ぎ得たとしても、清國はいよ〳〵壓迫を免れない。爆烈彈騷動、馬山浦事件、廈門公使館員に對する暴行等などゝ、內外漸く多事になつて來た。併しわれ〳〵が最も記念すべき出來事の一つは、日本國民が多年熱望して居た治外法權の撤去された事であらう。それと愚老を最も激しく刺戟したのは、明治維新以來名を成し功を遂げた老人連の凋落する烈しさであつた。勝安房や、後藤象次郎や、大木喬任なども此年を前後して世を去り、日清戰爭に異常の才能を發揮した川上操六や、新聞記者の泰斗として尊敬された高橋健三なども此年に逝いてしまつた。こんな風に舊時代の立者は、秋風に誘はるゝ落葉の樣に、ぽつり〳〵と散つて行くのに、幸ひに梨園の春は長へに榮えて、中村芝翫が七十歳で此一月に世を去り、文字通り（リテラリー）に當代の麒麟兒であつた澤村小傳次（訥子の長子、故宗之助の兄）を共六月に失つた外



明治廿九年歌舞伎座「助六」
團十郎の助六と芝翫の意久　鏑木清方氏筆

は維新以來の斯界の元老鼻を揃へて、劇壇を馳驅して居た。

さて泰西の邦々に視界を轉ずると、獨逸ではビスマルクが死に、英國では南阿戰爭で大に手こずり、西班牙はキユーバを棄て、アギナルトは國外に追はれて、救ひを日本の志士に求め、ヘーグには、世界の平和を標榜して萬國會議の開かゝるあると共に、佛國にはドレフユー事件があつて、人種排擠の醜き事實を暴露して居る。文藝の方面でいふと、その國では、愚老の好きなフランソア・ド・キユレルが『新らしき人形』をかき、ブリヨーが例の『赤い衣裳』を書いて居る最中スカンデナビアではイブセンが『海の夫人』を書き上げた翌年で、『マスタア・ビユルダア』の仕度に取かゝつて居たらしく、ストリンドベルグは『ユリエ嬢』や『友達』を書いた年であつた。英國ではシヨウが『運命の人』を書いた翌年で『シーザアとクレオパトラ』や、『惡魔の弟子』の執筆最中であつたらう。俳優では神聖サラが、サラ・ベルナル座を新に刱めた年で、ジヨーゼフ・カインツが維也納の皇室劇場の座員に推選された年而してエレン・テリー孃が初めてマクベス夫人を創作した年であつた。



明治卅九年歌舞伎座「助六」
鏑木清方氏筆

外國の劇壇を一瞥して、さてわれ〳〵の周圍を顧ると、まことに落寞の感なきを得ない。日本にはシヨウも、キユレ

ルも、イプセンも、ストリンドベルグもなかつた。默阿彌は世を去り其遺弟に其水、新七があつて、共に明治座の部屋には居たが、又割合に澤山の新脚本を出したが、共に俗衆を喜ばす迄にさへ至らなかつた。たゞ歌舞伎座には福地櫻痴居士のあるあつて、團十郎の爲めに新作を供給して居たが、今日から見ても――當時に於ても――其新作、若くは近松物のレアーレンヂメントが、一向に評劇界の尊敬を受け得なかつた。評劇壇にもウォーレクーや、アーチャアや、サルセエや、ルメートルや、ヘルマン・バールやは居なかつた。たゞ、鷗外、逍遙の二大家が、超凡な卓見と該博な學識とを以て、戯曲を創作し、演技の批判を試みられたが、陽春白雪和するもの尠なく、當時の劇壇とは、稍風馬牛の感があつた。當時の劇界にして兩大家の誘掖を容るゝ準備が出來て居たら、其進展は目ざましいもので有つたらうが、何分にも俳優以外には、藝術的天才が一人も無かつたのであるから、團菊の如き名優を有ちながら、寶の持腐れの氣味がないでもなかつた。

併し俳優にだけは驚くべき天才が有つた。いふまでもなくそれは九代目團十郎である。愚老は二回の世界漫遊中幾百の俳優を見且つ之に接したが、わが團十郎に匹敵すべきものは、維也納のカインツのみだと云つてもよい。巴里のサラも天才たるに異論は無いが、愚老が知遇を得た頃は、稍老いてしまつて、人を惹つける力が熾烈でなかつた。これにつぐのは五代目菊五郎、つゞいては先代市川左團次があつた。此三人を頭目として、市川門下には權十郎、八百藏(今の中車)先代壽美藏、先代猿之助などが、既に堂々たる大家で、菊五郎一家は養子の菊之助を前々年に失つてからは、松助と榮三郎(今の梅幸)を兩翼として、甥の家橘(今の羽左衞門)を擢用し、時には片市、歌六などゝ結びつき、又或時は團門と提携して、其寫實的な爛熟した藝を見せて居た。左團次は明治座の座長として、一門に兄の壽三郎、弟の先代荒次郎、小團次、甥の米藏等を擁して、堂々歌舞伎座に拮抗して居た。女形としては先代秀調、福助(今の歌右衞門)源之助、女寅などが尤なるもので、榮三郎、米藏等は花形をもつて鳴るのであつた。團菊兩門以外の飛將としては先代片岡

市藏、先代中村時藏など、花形として次期を飾るべき期望をかけられた人々は、家橋、染五郎（今の幸四郎）訥升（今の宗十郎）などで、莚升（今の左團次）などは寧ろ九代目團十郎の初期の如く、今日の名聲を博し得る萠芽をも見せては居なかつた。

新派に至つては、明治二十七年の日清戰爭によつて、彼等の進むべき道を發見し、累戰累勝、翌二十八年には二度までも歌舞伎座を占領し、その大將軍たる川上音次郎はその翌年六月、川上座と稱する新派劇場を新設するまでに至つた。が、驕る者久しからず、此年の八月、伊井山口の二派を除く以外の一派大合同して、歌舞伎座に於いて『又意外』を演じたが其頃の京童が諷刺した樣に、其成績は全く又意外であつて、川上は南洋探檢と號して、築地から荒海へ乘出さばならぬハメに陷つた。併しこの冒險渡航さへ不成功に終ると、神戸へ上陸して、そこから外國の漫遊に出かけた。川上に捨てられた高田、喜多村、小織等は大阪に走り、新派は極めて落寞たる姿を見せる樣になつた。


明治二十九年歌舞伎座「四谷怪談」
菊五郎のお岩　八百藏の伊右衛門　鏑木清方筆

此外に子供芝居といふものがあつて、二三年來極盛を示したが、その俳優の重なるものは小天才小傳次の三兄弟、吉

右衛門、幸之助(今の紋三郎)などで、故中村又五郎が上京するに至つては、又新團體の組織を見、その團體には團子、(今の猿之助)守田兄弟(今の三津五郎、今の勘彌、故玉三郎孃)が加入した。當時この子供芝居に加はらなかつたのは、菊五郎の子供たち位と云つてもよい程に、滔々として小さき天才がみなこの流行の淵に棹さしたのであつた。田村成義氏が編纂された『續々歌舞伎年代記』に愚老が當時『文藝倶樂部』にかいたものゝ一節を引用してある。

近頃劇界の漸く賑かなるにつれて、青年俳優の評判高く從つて俳優子弟養成の事については斯道好事家の頻りに奬勵する事なるが、夫れが爲めにや、子供芝居の流行漸く都下に盛ならんとす。其子供の中には小傳次、吉右衛門、宗之助、長之助などは、將來有望の俊才なるべく、兎に角劇界未來の花の蕾、爛漫たる才華はやがて劇道新舞臺の見ものなるべし。只望ましき事は、型さやら、式さやら、いつ迄も故人を慕ふ父兄の舊思想を襲踏して、藍より出て藍より青からず、虎を畫いて狗に類する愚を學ばざらん事を……。

但し愚老が耄碌の甚だしき、此なものを書いたといふ記臆さへ全く跡形もなくなつて居る。が、其當時から、こんな新らしがりをふり廻す事の好きであつたといふ事だけは、稍幻の如く腦裏に印象されて居るやうだ。當時『リタラリー、ダイゼスト』などを拾ひ讀みして、ブリヨーの作に非常に感動した事などが、そのついでに思ひ出されて來た。

女役者——今の女優とは稍趣を異にした——では、何と云つても九女八(後に守住月華)を泰斗として推すべきであるが、此女天才は常に孤獨となつて、或ひは新派に、或ひは歌舞伎派に、轉々として所定めぬ有樣であつて、其部下であつた鯉昇、錦糸、米花、千升などが三崎座に據つて種々なるレパアトリーに成功して居た。

大阪俳優ではまだヤングマンだつた延二郎(今の延若)と、雀三郎(今の嵐吉)とが此年の六月に上京して、東京座で大成功を收めた。成太郎(今の魁車)が明治座に加入したのも此年で、これも成功の方であつた。

當時の俳優の收入は——今日でもはつきり分らないが、われ〳〵素人にはそれ以上に判らう筈はなかつた。たゞ前年

の二月に、團十郎が大阪梅田の新劇場に招聘された時、二興行四十日で五萬圓の給料を取つたといふので、大分世評をまねぐ事となつた。併し團十郎は或人に語つてから云つたといふ事である。

……今回も土産物や祝儀が、どうしても二萬七千圓ばかりかゝり、義理さばきの出金を合算致しますと、三萬圓以上となりますから、二萬圓足らずにしか當りません、東京では四幕ばかり働いて、一萬圓はとれますから、出かけるだけが、算盤では損の方です……いやもう大散財です……。

これで彼の平素の收入も大抵想像され得やう。當時八百藏の中車も、五千圓の給料であつたといふ。團十郎の大阪に於ける特別收入が東京での收入の五倍とすれば、八百藏程度の俳優の收入も、推察は出來さうに思ふ。

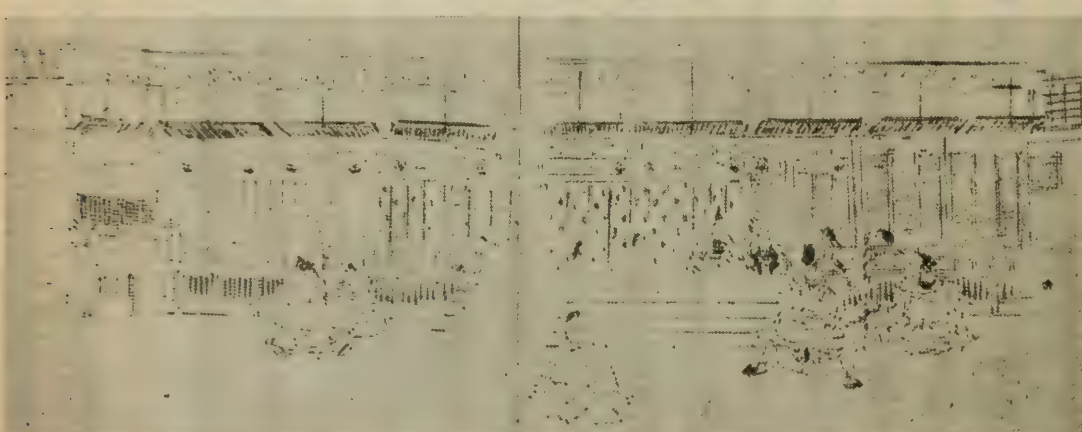
尚當時東京に存在した劇場は、大劇場としては歌舞伎、明治、市村、東京、新富、春木の六座で、小劇場は、演伎、川上、淺草、常盤、宮戸、眞砂、壽、柳盛、開盛、三崎の十座であつた。故關根默庵氏の詳密な統計によると、此年の興行數は、大劇場五十回、小劇場百三十八回、合計百八十八回で、前年度より二十七回少く、翌年度より十二回多かつた。これは、戰爭後一時財界の好況だつた爲めで、此年の下半期あたりから、不況時代に傾いたので、翌年は興行數の減少を見たのであつたらう。

現在東京には二十五の劇場があつて、其中安木節や、キネマ館となつて居るものもあるが、大抵二十位は演劇を上場して居る。此外に新富、明治の兩劇場は、遠からず宏壯なものとなつて再興される筈である。而して正月には一つのこらず開場されるのである。誰か現在の劇界を不振たりとするものぞ。

二

愚老は明治三十二年度の劇界を鳥瞰的に一瞥した。今度は更に事實について、其一月以後の分野を研究して見たい。

まづ其年の一月十二日から初日となつた歌舞伎座では、櫻痴居士の新作『敵討護持院ヶ原』といふ本庄茂平治をかいたものと淨るりを一幕やつて居た。顔觸は先代菊五郎一門に今の歌右衛門の福助、先代秀調、中車の八百藏、幸四郎の染五郎後年歌六になつた時藏等で、羽左衛門は當時家橘と呼ばれ、梅幸は榮三郎時代、今の菊五郎の丑之助彥三郎の英造、秀調の勝太郎などは、みな丁稚一役などといふ有樣であつたその觀劇料は、上等棧敷五圓五十錢で五人割の勘定であるから、一人前はたつた一圓十錢、外に敷物代五十錢はあるが、それでも祝儀までこめて二圓そこ／＼で一日の享樂が擅まに出來たわけである。土間に至つてはたつた五人で三圓五十錢、今の四階よりも安いの



―明治二十九年歌舞伎座平家物語舞臺面―
鏑木清方氏筆

で三階棧敷は二十錢に過ぎなかつた。

收容積（キャパシティー）こそ少ないが、歌舞伎座と並び稱された明治座は、十日が初日で、一番目が竹柴其水の新作『山田長政譽軍扇』これは海軍士官をして居られた小笠原長生子爵が、趣向を其水に與へたものだといふ。中幕は『操三番』に魚河岸の『大漁祝ひ』二番目が『三人吉三』といふ立て方。俳優は座長先代左團次の一門に、市川權十郎、澤村源之助、先代壽美藏、今の宗十郎の訥升といふ顔觸れで、新人勘彌などは、まだ三田八と云つて暹羅の王子か何か一役を取つて居る。場代は歌舞伎座から見ると二十錢安の五圓三十錢で、大入場は矢張二十錢であつた。

市村座も大芝居の一つで、こゝは先代片市といふ名人と訥子、先代芝鶴（後

の傳九郎）源之助故人稻丸などゝいふ顔觸れで、元日初日『新說黃金花籠』といふ惡醫者道庵の强盜事件をかいたもの中幕は『曾我』の暗鬪、二番目は『高田馬場』といふ立て方、顔つけも手薄だつたが、上等棧敷一名六十錢といふので、結局歌舞伎座の半値段にしか當らなかつた。

東京座は二十九年の開場式には、團十郎一門を招聘したが、其後は萎微振はず、此一月は青木千八郎の新派で『浮沈』と『和田酒盛』を出して居る。こゝに注目すべきは、後年柴田環と艶名を流し、獨逸で客死した千葉秀甫が、庄光寺彌三郎と號して、西洋婦人と曾我十郎に扮して居る事である。

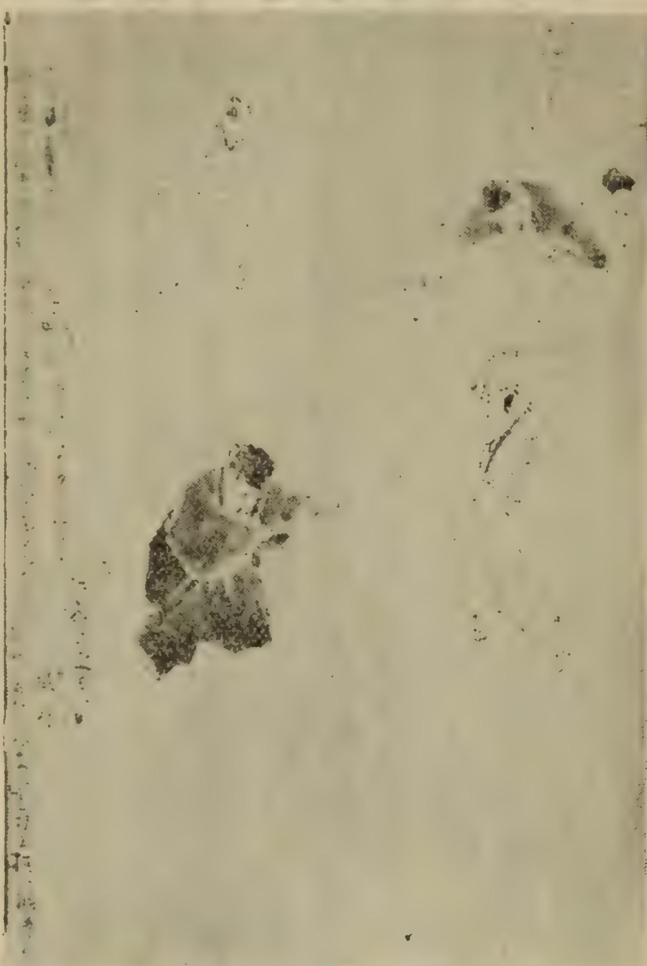
新富座はたしか座主の代變りで、春木座は興行主の財政困難で、二つとも二月になつて初めて開場した。春興行には各座とも一齊に開場する今日に比べると、當時の興行主は全く無力なものであつた。

さて小劇場の方はといふと、いづれも元日若くは大晦日初日で、まづ本所の壽座は猿之助に莚女、鱗昇などゝいふ顔で、『天保水滸傳』に『國性爺』『妹背の門松』切『中將姫』。演伎座は小供芝居で八十助（今の三津五郎）三田八（今の勘彌）團子（今の猿之助）玉三郎（八十助等の姉で非常な秀才、米國にて夭死す）福藏（今の荒次郎などゝいふ顔で『傾城鏡山』に『國性爺』『安達』で、猿之助親子は、別々に和藤内の競爭をして居た。常盤座は『惡魔拂』に『廻る小車』といふ壯士劇臭紛々たる狂言を立て、水野好美が首領で、河合武雄、小島文衛、原辰一などゝいふ顔觸れ、名女優九女八は、少々駑馬化してしまつて、守住月華の名で一緒に出て居た。新派の頭領川上音二郎が經營して忽ち經營難に陷つてしまつた川上座には先代佐藤幾之助、柴田善太郎などが集まつて、『不思議』と『抱腹』とを上場して居る。淺草座では、團十郎が初春休場の爲め、この門下の先代猿藏、團七（今の新十郎）歌仙、紅若、女寅（今の男女藏の父）鶴之助といふ顔で『中將姫』『兒雷也』二人新兵衛を出して居る。宮戸座は『子寶』『大功記』『操とどんつく』で猿之助、家橘（今の羽左衛門）花助（今の三十郎）菊四郎、訥子、源之助などゝいふ顔。眞砂座は訥升（今の宗十郎）女寅、家橘、鶴之助、馬十（河合武雄の

父）などの顔で、『善か惡か』『對面』『勢獅子』『無間鐘』『どんつく』『酒屋』を出して居る。

これが當年の初春興行の概觀であるが、これによつて見ると、當年の俳優の冠者、随市川の團十郎は、初春興行には出なかつた。これは宿下り小僧の騒々しい十五十六の兩日の出勤が忌だつたので、随つて盆興行も休むのが習慣だつた菊五郎は十日過ぎから出勤、左團次は元旦から一週間は、横濱で興行して、十日頃から明治座の蓋を開けるのが先例になつて居た。

前述の概觀からも分る通り、あの頃は掛持俳優が多かつた羽左衛門の家橘などは、叔父の菊五郎と共に歌舞伎座へ出勤して居るのに、宮戸座では主要な役を四つもつとめ、眞砂座でも主なる二役をつとめて居る。猿之助は團十郎の休み中とて大芝居へ出ぬかはりに、壽座では勢力に和藤內、宮戸座では光秀に翁といふ主要な役をいくつも出して居る。片市、訥子又御多分に洩れぬ今日でも松竹系の俳優には、如斯いふ駈持は無いでは無いが、一人で五役も六役も、可成大きな役を取る事は、殆ど例の無い事である。いや、駈持俳優ばかりが役が多いのでは無い。一人一座の俳優でも、幕が澤山あつた所以か、なか〳〵役が澤山ある。歌舞伎座の菊五郎にしてからが、四役を受取つて、序幕から殆ど出ずつぱりである。明治座の左團次は、殊に努力家を以て聞え、山田仁左衛



明治三十年歌舞伎座「寺小屋」
團十郎の松王　菊五郎の源藏　鏑木清方氏筆

門で一幕も休みなく、その上、浄るりの上下共に不得意の舞踊に出て、二番目に和尚吉三に出て居た。

小芝居の事は云はず、大劇場は今日の如く、毎月月がしらから興行するといふ様な事は無かつた。明治座は第二回興行を三月三日から開けた。而して左團次は例の如く、三種の狂言に悉く主なる役に扮して、五種の人間を創作した。三月六日から開場した歌舞伎座は菊五郎一派に、團十郎及び其一門を加へて『八陣』と『寺子屋』と『御所の五郎藏』を出した。その爲めに前回よりも上等棧敷一間について一圓三十錢高くなり、二十錢の三階が三十錢になつた。併し此興行に團十郎が、源三位、清正、松王、土右衛門の四役に扮し、菊五郎が猪早太、義次、源藏、五郎藏の四役に出て居るのであるから、春興行よりも一人前三十錢やそこいらの値上は、客にとつて何でも無い事であつた。果然此興行は大入つゞきで打納めた。

四月は花時で、一年中の一番の稼ぎ時である。明治座も歌舞伎座も引つゞいて蓋をあけた。前者は其月の八日からで、『大佛供養』に『難波六郎』に『五大力』を出した。左團次は相變らず五種の役に扮して大奮闘をつゞけたが、歌舞伎座の『勸進帳』に壓倒された。歌舞伎座は其一番目が『妹背山』中幕が『勸進帳』二番目に『歌祭文』を出した。此時の團菊の努力は實に目凄ましいもので、團十郎は大判事、入鹿、お三輪、辨慶を勤め其上二番目にも顔を出して居る菊五郎は定當、鱶七、善六、人形遣ひの外に初役で富樫をつとめた。此度は上等棧敷八圓五十錢で、菊五郎の一人芝居の時よりも三圓の値上げであつたが、それでも非常な大入であつた。（その癖三等は一名三十八錢で、前回に比して、たつた八錢の値上に過ぎない。當時は八錢の錢も貴とかつたのだ。）

こゝでわれ〳〵が注意すべきは、あの頃の名優たちの努力のしかたである。團十郎が大判事をして、次の幕では入鹿から代つてお三輪になる。それが切れると辨慶をして、二番目にも顔を出す。惣幕六幕の中に顔を出さぬ幕はたつた二幕で、しかし今ならその一役だけでゞも、苦情をいひ出しさうな役を四つもつとめる。今日から見れば殆ど嘘の様であ

る。近頃の立役者は、役の少きを以て誇りとしやうとして居る傾向がある。其癖團十郎は當時六十三歳で、今の歌右衛門と同年である。五役つとめた菊五郎も、既に五十七歳、二人ともに死期は四年の後に迫つて居たのだ。これを見ると愚老なども、耄碌を賣物にばかりしては居られぬ。新春をきつかけに大に覺醒せねばならぬ……といふ氣になつたのも亡友たちの賜だ。今年は一つ大いにやらう。

引つゞいて團菊の二人は、歌舞伎座で『忠臣藏』と『後藤』と『鈴ヶ森』に『左小刀』を出した。五斗と長兵衛の團十郎なる事は勿論だが、其外に彼は定九郎と、六段目の不破數右衛門をして居る。此數右衛門の演出ぶりのうまさには、愚老も實際舌をまいた。菊五郎は勘平に、和泉三郎に、權八に、甚五郎に扮した。この時は非常の不入で十八日間しか興行が出來なかつた。其後菊五郎は旅興行に赴き、團十郎は例の如く休場し、九月の末には又團菊の顔合せで、櫻痴居士脚色の『齋藤太郎左衛門』と『毛谷村』と『新皿屋敷』を出したが、團十郎は六助に扮する事を喜ばず、『面白くなくてよければ』との條件で、無理からに治まり、果して面白からぬ演出を見せた。十一月には『加賀騷動』『紅葉狩』『質屋庫』で、團十郎は小田大炊と、更科姫に扮し、菊五郎は大月に、佐渡守に、維茂に、陣大鼓の變化に扮した。この時は上等棧敷も六圓八十錢に値下げされ、三階も三十錢になつた。十二月の歌舞伎座は福助、八百藏、榮三郎、家橘、染五郎等の新進俳優の一座で、上等棧敷は三圓五十錢、三階棧敷は十五錢であつたが、それでも結局不入に終つた。

明治座は六月七日初日で『村井長庵』に『蘭平』と『薩摩踊』で、左團次は例によつて長庵、久八、蘭平、さつま踊りと、八天下を働いたが、此時は上等棧敷四圓八十錢に低下した、左團次はそれより旅興行に出かけ、九月廿九日になつて又開場した。此時の一番目は其水作『高野長英』で、上るりは「內地雜居の時に當つて、內外打寄る贊成員」といふ角書のあるつまりは長英の志望もとほつたといふ様な事を舞踊にしたものであつた。愚老の愚作『惡源太』が中幕となつて、脚光を浴びたのは、此時であつた。明治座は其次興行として十一月三日から『大岡政談』と『太鼓判』を出した。今の大阪の

魁車がまだ中村成太郎で、此興行から明治座に出た。此次の十二月興行は吉右衛門、三田八などの小供芝居で、棧敷か一圓八十錢、大入場がたゞの八錢であつた
　これで分る通り歌舞伎座も、明治座も、大きな俳優は、年に六回づゝしか興行して居ない。旅興行といつても、夏の中のみである。此點については、今の俳優は殆ど不血身の觀がある。大劇場を十回も演じつゞけ其上に旅興行に出かける。その勤勉勵精驚くの外は無い。
　但し當時の歌舞伎座とて、明治座とて、劇場そのものまで遊んで居たのでは無い。歌舞伎座などは、當時の社長井上が、算盤一方の人であつたから、上場俳優の種類を問はず、來る者は拒まずで



明治三十年歌舞伎座「春雨傘」
團十郎の曉雨　福助の葛城太夫　故猿之助の鐵心齋　鏑木清方氏筆

上演せしめた。七月には伊井、藤澤、福井、伊藤仁太郎の合同劇に味噌をつけ、九月には二銭團洲を中心として、家橘源之助などの顔で開場した。二銭團洲の又三郎の酒井は、團十郎の模倣を離れても、推稱に値すべきものであつた。それで上等桟敷一間につき二圓五十銭、平土間九十八銭（即ち一人二十銭弱）大入場は十銭で、初日はどこでも十銭といふ驚くべき安値の興行法であつたが、見物もまた驚くべく少なかつた。その上團十郎は、舞臺を削り直すに非れば、再び出演せずといひ張り、菊五郎は『劇場を自分で借りて猿芝居を興行する』とさへ憤慨した。此爲めに家橘は一時菊五郎の怒りを買ひ、或顔役の詫言によつて、わづかに勘當を免れた。曾て川上音次郎が此座に出勤した時にも、團十郎は、灰汁洗ひをさせて、わづかに自分の上演を許した。兩優の階級的意識は、今日から見て易く首肯は出來ないかも知らぬが、自己の藝術に對して堅き自信を有する點は、藝術を職業とのみ考へる現下の俳優諸君に比して、何となく奥床しいものがある。但しこれは愚老の舊式な感情が、現代の商品取引式演出の本質が分らぬ爲めの餘味言かも知れぬ。

當時新派の不振であつた事は、前にも云つた。一月興行にはわづかに四つの劇場が彼等を收容した。伊井の如きは四月以降淺草座によつて健闘したが、好成績を擧げる事が出來ず、折角歌舞伎座へ泳ぎ出しながら、終に慘敗を遂ぐるに至つた。其他の連中もただ蠢爾として新派——といふよりは自己の——命脈を繋ぐに過ぎなかつたが、中について兎も角も一座の結束を堅くして、毎月の興行をつゞけ得たのは、常盤座の水野好美であつて、當時賣出しの河合武雄が、此一座を支ゆる明星であつたのだ。

三

愚老の『惡源太』は、こんな時代に忽如として舞臺に現はれたのだ。一體愚老が劇作に筆を染めたのは、此時が初めてゞは無い。たしか明治二十八年の事だと思ふ。高田半峰先生の慫慂で『昇旭朝鮮太平記』といふ脚本を、讀賣紙上に

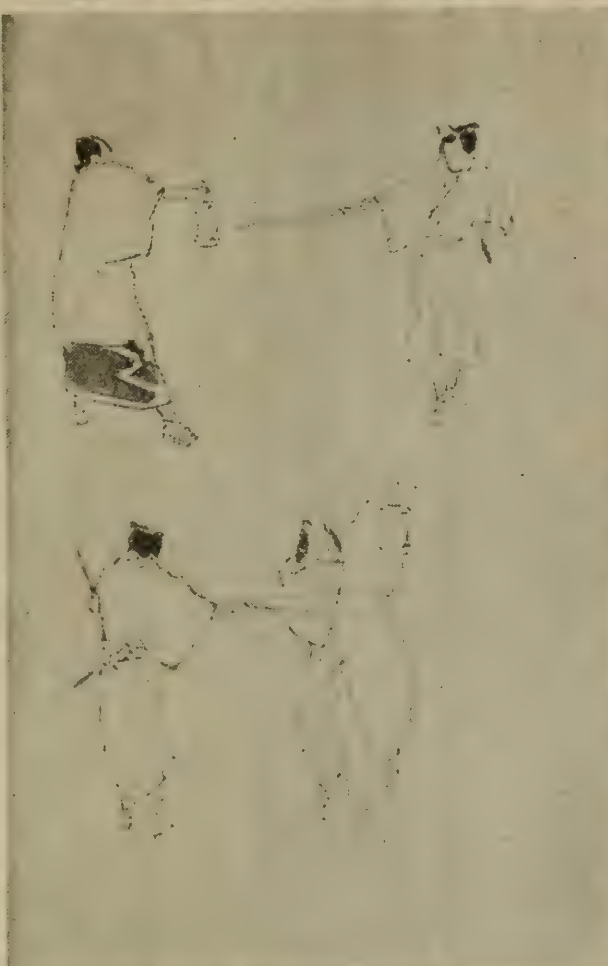
掲載した。これは其名題の現はす如く、朝鮮の内亂をかいたもので有つた。讀者側からは餘り惡評でも無かつたさうで半峰先生からは賞讃の辭を賜はり、福井茂兵衛の一座が大阪とやらで上演したさうであつた。併し斯道の先輩からは大分攻撃を喰つたらしい。愚老が直接に聞いたのでは無いが、曾て『讀賣』に關係のふかゝつた饗庭篁村先生は、「あんなものが、紙上にのるやうでは『讀賣』ももう最後だ」と關根默庵君に慷慨されたといふことであつた。其後團十郎の家族と共に長田秋濤君に招待された時席に侍つて居た竹柴賢二といふ酒癖の惡い歌舞伎座の作者から、「あんなものはわれ〳〵の仲間ちやあ、狂言とは思はねえ」などゝ罵倒された。そこで愚老も脚本には才分の無い事をすつかり悟つて、一時は新聞記者として立たうと決心はしたものゝ、誘ふ水のある度毎には、ほんの小遣取りといふさもしい心から、文藝倶樂部などへ、モリエルやシエリダンなどの飜案を掲載して居た。その二三篇が新派俳優に上場された事があり、或時はゾラの短篇や、無名の英國作家の小説の飜案が無斷脚色されて上演された事もあつたが、愚老は新たに筆を執つて、戯曲を書かうなどといふ野心は全く無かつた。と



明治三十一年歌舞伎座「お祭佐七」
菊五郎の佐七　鏑木清方氏筆

ところが、たしか三十二年の七月頃であつたと思ふ。今の松竹の奥役木村錦花の實父である左伊助といふ先代左團次の弟子（この人はどこかの藩中のなれの果で、俳優には珍らしい文字のある人で、左團次の名を冒して、『加藤清正』以下數篇の劇作をした。それらは大抵五幕物位の大作で、一しきり『時事新報』に連載されたものだ）で、懐刀であつた人が、突然愚老の品川の僑居を訪問して、曾て愚老が初めて新聞記者となつた時『報知』に連載した小說『惡源太』をドラマタイズしてくれと申込んで來た。愚老は從來喜劇の飜案物しか試みた事が無いので、とても大きな史劇などへは手が出せぬと斷はると、さらば一幕物でもよいから、兎に角『惡源太』をかいてくれといふ。愚老は『朝鮮太平記』ですつかり氣を腐らせて居たところであつたから、すこぶる逡巡躊躇したのであつたが、同時に市川左團次程の名優に、名もなき一介の書生の作を演出してもらふといふ誇りもあつたので、とう〳〵二幕六場の『惡源太』を作り上げた。併しその頃から新らしがりの愚老は、從來の狂言作者風のトガキなどは書きたくなかつた。いや、事實はかうとしても書けなかつたらう兎に角愚老のかいた脚本は、當時の專門家の目からは、極めて變態なものに見えたらしい。とう〳〵地內の新七がトガキ丈をかき直した。而して左伊助を以て、新七松葉合作といふ事にしてくれと申し込んで來た。愚老はたゞ上場して貰ふ事の嬉しさに、一も二もなく快諾した。が、その話が左團次の耳に入ると、忽ちに沙汰止みになつた。先代の左團次といふ人は、當時の俳優には並びない程常識の發達した、義理明白な行動をする人であつた。だから作者側の濡手で粟式の申出を聞いて、之に抗議を挾んだものと見える。それに左團次は此素人作者の拙劣な處女脚本に對しても、何等の改訂を求むる事なく、愚老が『大ざつま』として書いた文章に（一番目にも『大ざつま』があるので、其儘出せない爲め）頗る鷄肋の感をもつたらしく、それを段切れのチョボに直してくれといふ註文を出したゞけであつた。爾來愚老は彼の爲めに三篇の脚本を提供したが、たゞの一度だつてやりにくいの、直して貰ひたいのと、苦情を持出された事は無い。今の左團次君も、作者に對して一言も苦情を云はぬ人であるが、それは先代から遺傳の美德であると思ふ。

此時に面白かつたのは新聞劇評家の態度であつた。篁村先生はこの時も大分御不滿らしく、ほんの一二行、こんなものがついて居たとかゝれたに過ぎなかつた。一體愚老は以前から先生の御機嫌を損じて居たらしい。曾て『早稻田文學』記者として、先生を大久保の御住居に御訪問した事があつた。それは何か坪內先生からの命令で、火急を要する事だつたので、夜分になつて參上したのであつた。ところが禮に嫺はぬ野人の愚老は、堂々と表玄關から伺候に及んだものだ。それが大分先生の威嚴を傷けたらしい。歸りには愚老の下駄は內玄關にまはされて居た。その鼻つ垂れ小僧の作が先生の麗筆を揮はれた『讀賣』に連載されたり當時の大劇場明治座で上演されたりしたのであるから愈々先生の逆鱗を起す外は無かつたのだ。而來幾度愚作が上演されても、默殺されるか、一笑に附されるのであつた。或時愚老は餘りの口惜さに、眞劍になつて先生へ一書を贈つた。それには『御叱責を蒙るのは、愚劣な作物に取つて寧ろ名譽であるが、われらの樣な劣小なものを、頭から侮蔑笑倒されるのは殘酷だと思ふ。箸にも棒にもかゝらぬといふのならそれまでであるが、萬が一つ、何處かに取り處があるなら、御叱正を吝まない樣に願ひたい』といふ意味をかいてあつた。すると、先生からは直さま『從來の態度は惡かつた、これからは眞面目に批評する』といふ懇ろな返事を頂いた。が、いよ〳〵となると先生は默殺か笑殺か



明治三十二年歌舞伎座「鈴ヶ森」
團十郎の長兵衛　菊五郎の權八　鏑木清方氏筆

で、愚老の作物を虐待せられた。先生が世を終らるゝまで、愚老は一度だつて眞面目な評語を頂く事が出來なかつた。新聞の評は先生とやまとの故根本吐芳君のそれを除く外は、概して惡い方では無かつた。根本君のは可成猛烈なものであつた。ところが其後根本君に逢ふと、君はかう云はれた。『實は批評家が申合せて、君の作を滅茶〳〵になぐりつける筈であつたから、僕はその積りでうんとやつゝけたのであつたが、卑怯な同業者が裏切をしてしまつたので、僕一人が惡人になつてしまつた。』と。愚老はつい昨年も、ある新聞の劇評家から、殆ど同じ様な語を聞いた。『惡源太』上演以來、夙くも二十六年、しかも當時と同じ様な立場に立つて居る愚老は、あゝ、眞に是れ『憎まれ子世に憚かる』か。さて〳〵不德千萬なぢゞいでは有る。

先代左團次は、その後も盛んに愚老の新作を求めた。愚老も憎まれ序に、もつと書かうとは思つたが、さて趣向は立たず、筆は廻らず、丁度二年目の九月にやつと『源三位賴政』四幕を脱稿して、十月二日から矢張明治座で上演してもらつた。今から思へば冷汗の出る様な作であつたが、丁度洋行歸りの――しかも英獨の劇壇に精通して居る――千葉鑛造先生から、望外の賞辭を賜つたので、愚老はすつかり逆上せてしまつた。而してとう〳〵いつの間にかこんな下手作者となつてしまつた。先生の過褒と、先代左團次の慫慂が無かつたら、愚老は自己の天職と信じて居た新聞記者を以て一生を終始して居たかも知れぬ。さすれば今日の様なみじめな生活をおくつて、新進のえらい先生方から馬鹿にされ通して居ずに濟んだかも知れぬ。思へば當年の淺はかな自分の心がうらめしくてならぬ。……　明治三十年代の劇壇の回顧はとう愚老一身の愚痴話に墮ちてしまつた。それもこれも年寄の餘昧言と若い方々の御許しを願ふ外は無い。

De mortuis nil nisi bo num

あゝ又饒舌り過ぎてしまつた。これだから老年はわれながら嫌ひだ。

二葉亭四迷を想ふ

中村星湖

一

本誌昨年六月號、卽ち『明治文學胎生期』號に掲載された、矢崎嵯峨の屋氏の『春廼舍主人と共周圍』のなかの、二葉亭四迷に關する追想記は殊に私には興味深かつた。二葉亭の若い頃の事の記錄としてあれに勝る物を私は甞て見なかつた。

今度、本間君から、やはり二葉亭に就いて何か書くやうにとの依賴を受けたが、私は二葉亭の事を深く知つてゐるわけではない。あの人がロシヤへ行く前に幾度かお目に懸つてお話を承つたと言ふに過ぎないから、考へてみるとこれと纒まつた印象が殘つてゐるわけではない。それでも、本間君からの依賴を機會に、何か知ら書き留めてみたい氣持だけはある。

私が二葉亭の名前を知つたのは、多分、『浮雲』を讀んだ時分からだつた。それもあの書物の第一卷が春の舍主人名義で最初に出た明治二十年頃では勿論なかつた。明治二十年と言へば、私はまだ三歲か四歲の子供だつた。後年、あれが一冊に集められて、何處かの本屋から芳年か誰かの變に癖のある挿畫附きで出たのを讀んだのである。私は明治三十六年に東京へ出て來たのだから、『浮雲』を讀んだのもその頃らしい。飜譯集『片戀』（春陽堂發行）を讀んだのもその頃であ

らう。

二十歳前後の私に取つては、『浮雲』は大して面白い小説では無かつた。その主人公の神經質で内氣な性格は、紅葉の『多情多恨』の主人公と共通の點があるやうに思つた。後になつて考へるのに、主人公の性格描寫の點で『多情多恨』は『浮雲』の影響などを餘程受けてゐるらしい。

それはさて置いて、私は、二葉亭の創作にはさして興味を惹かれなかつたが、その飜譯にはすつかり誘惑された。『片戀』は勿論、同じ集に收められた『あひゞき』などは幾度繰返して讀んでも飽かなかつた。

私が東京へ出て間もない頃の二葉亭は、小説の創作は一つも發表せずに、ロシヤ物、殊にゴーリキイやガルシンの飜譯ばかりをやつてゐた。それは、私のおぼろげな記憶に依つてばかりでなくて、高木文氏の『明治全小説戯曲大觀』などに依つてみてもさうである。

『浮雲』を出してから凡そ二十年ばかりの間に、二葉亭がやつた飜譯と言つても、その數はさう多い物ではなく、創作と言つては實際何一つ出してゐなかつた。その間に、かれは語學の教師になつたり、實業方面に志を向けたりして、北京の方へ出懸けて行つた時分には、滿蒙經營策といふやうな空想に耽つて、文學や藝術からは遠さからう〳〵と努めてゐたのに違ひなかつた。

二

私が初めて二葉亭を音づれたのは、あれはたしか明治四十年の四月上旬頃の事だつた。拙作『少年行』が僥倖にして本誌の募集に當選した事が發達されて間もなくだつた。

或日、私は島村抱月先生に呼ばれてだか、自分から進んで先生をお訪ねしてだか、そこははつきり記憶してをらぬが

兎に角、朝早くに、牛込藥王寺前町の對墓庵の二階の書齋で、先生と相對して話し合つてゐた。主なる話題は『少年行』の事で、あれを近く「早稻田文學」の臨時增刊として出版する豫定だが、その前に、一通、選者である二葉亭先生を訪問したがよからう、そしてその注意によつて多少でも文章に手を入れるとか書き足りない部分を書き足すとかしたらよからうといふ島村先生のお言葉だつた。

私は勿論非常に喜んでその勸めに從ふ事にした。

「ところが、長谷川さんは大そうな寢坊で、十時か十一時頃でないと起きない人だと聞いてゐるから、朝早く行つては可けませんよ。」

島村先生はそんな細かい注意までして下すつた。私は、自分の作品の事は兎に角として、それが緣で、二葉亭四迷と言へば、坪内先生なども昔から一目置いてをられたといふ文壇の大家に近いうちに逢ふのだと思ふと、實に嬉しくて堪らなかつた。ふと、硝子戶から見下ろすと、對墓庵の庭に一本の桃の木があつて、それが普通の桃色ではなくて、まつ白な花を開いてゐた。その白桃の花の印象と共に、當時の自分の若々しい、本當に天にも昇るやうな明るい氣持がこれを書いてゐる今もなほ甦つて來る。

その日の中だか、それから一二日經つてだか、そこらは忘れたが、私は本鄕西片町へ二葉亭先生をたづねて行つた。あの靜かな町、「學者町」といふ別の名のある事は後に知つた靜かな町を、あちらこちらと步き廻つて、漸く「長谷川辰之助」と書かれた門札を見付けて、入口の格子を開けながら案內を乞つた時、直ぐに出て來られたのは若い婦人だつた。（それが先生の二番目の奧さんだつたといふ事はあとで知つた。）名刺を出すと、間もなく右手の二階へ通された。そこの光景の細かい事は覺えてをらぬが、獨り、暗いやうな感じだけは殘つてをる。寫眞か何かで前にその面影は知つてゐたかとも思ふが、いや、さうでなからう、全く初めてだつたらう、私はあの男らしい、だが憂欝その物のやうな二葉亭先

生の顔を見た。「額に太刀瘡のやうな深い竪皺があつた、」と私は何かに書いて置いたが、その皺はたしかに先生の顔の一つの特色で、後にロシヤに行かれてからの寫眞の中にも現れてをる。

強度の近眼らしく、眼鏡の下で、あの光の鋭い眼をしばたゝきながら、かすれたやうな聲で、靜かに色々な話をして下すつたあの時の先生の樣子は、（細かい事は勿論忘れてゐるが、）まざ〳〵と私の記憶に刻まれてある。あの人なみすぐれた大きな體格、それを包んでゐた質素な服裝、腰に卷かれた兵兒帶、すべてが日本風ではあつたが、よくある「老壯士」または「老書生」といふ風ではあつたが、話す事はロシヤに關係した事が多く、從つて、何となくロシヤの人にでも接してゐるやうな氣分に私はなつた。

先生がロシヤの話をおもになすつたのは、先生をロシヤ通だと知つてゐる私が、その向きの質問ばかりするので、先生自身はロシヤの話をする積りでなくても、自然さうなつたのだらうし、先生のロシヤ小說の飜譯を愛讀してゐた私がその先入主を以て先生の樣子を窺つたので、先生がまるで日本人ばなれのした人かのやうに見えたでもあらうが、然しあの時の私の觀察はそれ程主觀的ではなくて、多少は客觀的の正鵠を得てゐたやうにも今から思はれる。

三

「印刷にする前に、私の作の缺點を長谷川先生に注意して頂いて、訂正の出來るものなら、原稿のうちに訂正して置いたら何うかと島村先生が仰しやるので、御意見を伺ひに上がつたのですが……」

私がさう言つて恐る〳〵長谷川先生を見上げると、先生は暫く默つていらした後で、次のやうに言はれたと記憶する。

「注意すべき點と言つて、別に……あのまゝで好いでせう。一體、文學といふ物は敎へるとか訂正するとかいふ種類の物でないですからねえ。」

なほ私は强ひて言つた。

「あの作に就いてゞなくても、今後、自分などの氣を付けなければならぬ事を、一言でも……」

すると、先生はやはり非常に謙遜した態度で自分には文學の事は全然解らないが、昔ゴーゴリの『肖像畫』といふ短篇を飜譯した事がある、あの中には文學や藝術を以て身を立てようとする若い人などに教訓になりさうな事が書いてあつたと思ふ。折があらば、あれを見て御覽なさいと言はれた。

それから、若くて文學に志す人は、自分の親兄弟の事などは顧みずに、どんな犧牲を拂つてゞも志す方面へ突進しようとするらしい、友人の矢崎嵯峨の屋なども、若い頃は實に眞劍な努力をしたものだが、その生活は氣の毒な程みじめであつた、結局、今では生活に負けて、文學からはすつかり離れた形になつた、といふやうなお話もあつた。

私は、ゴーゴリの『肖像畫』の飜譯を以前何かで讀んだ記憶はあつたが、その中に何ういふ教訓が含められてあつたかは思ひ出せなかつたので、間もなく九段の大橋圖書館へ出懸けて行つて、（その頃、私は神田三崎町の伯父の家に厄介になつてゐたので、）色々と目錄を調べてみると、つひにそれの載つてゐる雜誌を發見する事が出來た。

その小說の荒筋は、ある天才ある畫家が、人氣に任せて濫作して、華々しい贅澤な生活をするやうな身分にはなつたが、持つて生れた天才をば何處かへ振り落して、つまらない通俗畫家に墮落した、といふのだつた。私は改めてそれを讀み終ると、長谷川先生が私に敎へようとなすつた事が何であるかを合點し得たやうに思つた。

燃えるやうな感激を以て私は圖書館から出た。夕暮の九段の招魂社の側を通ると、櫻がまつ盛りで、中にはもうチラ〳〵と散り始めてゐるのもあつた。

親類の家へ歸ると、私は冷め切らぬ感激を筆に托して、今日、ゴーゴリの『肖像畫』を讀み返した事、その作中の敎訓は卽ち先生が私に下すつた敎訓である事、この敎訓は私が肝に銘じて終生忘れない積りである事などを長谷川先生へ宛

てゝ書いた。

先生は私のその手紙を何と見られたか、もとより私の知るよしもないが、「今はそんなに逆上せてゐても、そのうちにその熱は段々冷める」と思はれたであらうやうに、今の私は考へる。

先生は、私が最初お目に懸つた時、一方でゴーゴリの『肖像畫』を讀めと教へて下すつたが、他の一方で文學のために一身は勿論一家の者共を犧牲にしてもかまはぬと決心してゐた私の血氣に逸る氣持を抑へる爲めにであらう、嵯峨の屋主人の事などを例として、文學などよりも生活が大切だといふ事を暗示されたのだつた。

その二つの教訓の間にはたしかに或矛盾があつた。然し、私は嵯峨の屋氏の事などはてんで問題とせずに、ゴーゴリの『肖像畫』の事ばかりを考へてゐたのだつた。

その後、私は「早稻田文學」の記者となつてからも、幾度か西片町のお宅を音づれた。二三度目か三度目の訪問には、もう餘程打解けてお話が出來た。

「君はフランス文學の方をおやりですか？　早稻田へ書かれた物を拜見しました。」

そんな事を先生に言はれて、私は恐縮した。碌々讀みもしないユイスマンの象徴主義などを、私は喋々論じてゐたのだから。實に、思ひ出しても冷汗が流れる。たしかその頃の事と思ふが、先生は人生に對する懷疑をボツ／＼と發表された。

「まだ君等の年頃だと、人生といふ物が、さながら約束の土地でゞもあるやうに、華やかに望み多く感ぜられるだらうが、人間も四十を越して、そろ／＼五十に近くなると、そして顧みて事多くは志と違へたのに氣付く時分には、とても堪らないアンヌイを感じますよ。」

そんな述懷をしみ／＼とされた事もある。健康が衰へて、夜よく眠れないといふやうな事をも話された。初めてお目

に懸つた時分ですら、何となく世の中が懶くて、友達の許をも殆んど訪ねた事がないやうに言つてをられたが、そのお目に懸る事が度重なるに連れて、先生の憂欝はます／＼深くなつて行くのが私にも察せられた。

「二葉亭さんは、ありや極度の神經衰弱に罹つてをられる。僕が君の作の批評を筆記しに行つた時なども、茶を汲んでくれるのに、急須を持つ手がブル／＼顫へるのですよ。」

片上伸氏は、或時、私にそんな風に話して聞かせた。片上氏や私ばかりでなく、長谷川先生を知つてゐる限りの人はその神經衰弱を知つてゐた。

「長谷川二葉亭さんて大變な神經質な方だつて、西片町でも評判だと松島さんが言つてゐましたよ。夜眠れなくて晝間雨戸を閉めて寢ていらつしやるツて、ねえ？」

私の伯母までがそんな事を言つた。松島といふのは西片町の長谷川先生の近所に住んでゐた醫者だつた。

あの神經質、あの憂欝症は、もと／＼先生の體質から來たのか、精神的の苦悶――懷疑から來たのか、私などには、今になつても俄に判斷する事は出來ないが、前にも言つた矢崎嵯峨の屋氏の『春廼舍主人と共周圍』に出て來る儁敏無敷の若い長谷川二葉亭と晩年のあの人とを比較してみると、何といふ變りやうだらうと驚かれる。

四

でも、「朝日新聞」に『平凡』や『其面影』を連載される頃の先生は、さすがに二十餘年間創作方面に緣を絕つてゐながらも、實に立派な働き振りを示されたものだつた。文學なんか滿らん／＼と口癖のやうに言つては來たが、先生の本領はやはり文學、殊に小說方面にあつたのだつた。

先生がわが國の飜譯壇での第一人者であつた事は言ふまでもないが、そして「長谷川二葉亭」の名を天下に高からし

め、文壇に重からしめたのは、半ばはあの絶妙な飜譯のためではあるが、半ばは先生がその文學的生涯二十餘年間に僅かに發表したたつた三篇(即ち『浮雲』と『平凡』と『其面影』のためである事を考へてみると、先生は文學を嫌つたと言ふよりは、むしろそれを尊敬し過ぎた人だつた。そして私にあの時與へて下すつた教訓、人氣にまかせて濫作するなといふ教訓を自ら十分にお守りなすつたのだ。

先生は生活に負けて文學から離れた人のやうに見えながら、決してさうではなかつたのだ。却つて私などは、(私の事は言ふにも足らぬが、)「御教訓肝に銘じて忘れまじく……」などと先生に誓ひを立てながら、鈍機、鈍根、いかんとも し難く、志のみは先生の教訓に添はうと努めつゝ、實際は生活に打負かされて、恥づかしげもない賣文の徒となり終つたのである。

二葉亭四迷の事を思ひ浮べてゐる間に、思はず餘りに多く自己を語つたわけだが、顧れば、私は『少年行』を書いてからもうそろ〳〵二十年に垂んとしてゐるのに、その間、何一つ仕事らしい仕事をしてゐない。本當に淋しい氣持だ。

「人間四十を越してそろ〳〵五十の聲を聞く頃になると……」

さう言つた長谷川先生の年頃に、やがて私もならうとしてゐる。

長谷川先生は、「朝日新聞」の露國通信員としてロシヤへ行かれる頃には、なか〳〵元氣さうに見えた。上野精養軒での談笑などが、目に浮び、耳に響く……

『平凡』『其面影』の二力作を仕上げられた事と、多年希望してをつたロシヤ行を果たされた事とは、先生の晩年を飾るに足りた。燈火のまさに消えんとする時の俄かに明るくなるのと同じだつたかも知れぬが、あんな事でも無かつたなら、先生の生涯は餘りに淋し過ぎたであらう。(完)

「暮の二十八日」其他

魯庵生

此作の發表された『新著月刊』からして手許に無い。參考したいものは何も無いし、圖書館や蒐書家を漁つて調べる興味も根氣も時間も無いから、ウロ覺えの記憶を辿つて憶出し〳〵しつゝ秩序も何にも無しに書く。

年月は參考物が無いからアヤフヤだが、凡そ三十年前。金子筑水や島村抱月や後藤宙外が早稻田の森を巣立ちして暫らく第一次の『早稻田文學』（といふのは坪内氏自身が維持した時代のことを指すので、一時休刊して島村氏が歸朝後再興繼承したのが第二次で、今のは島村氏が劇に沒頭して引退したあとを相馬氏等が繼承した第三次である）に立籠つて旗幟を振つてゐたが、幾何もなく島村後藤の兩氏は『早稻田文學』から離れて獨立して創刊したのが『新著月刊』であつた。が、『新著月刊』は島村後藤の聯立といふ條、實に後藤の獨裁で、柳浪や天外が加盟し、後には後藤と硯友社との關係が段々密接して『新著月刊』も亦硯友社の別働團のやうな觀があつた。毎號長篇小說を一篇と短かいものを一つ二つ載せ、其のあとは雜纂や批評や思想、歌や俳句までも景物に添えて、其頃としては可成丁數もあつて、兎に角島村が有力な後見者であつたから相當に氣品も高く、鳥渡面白い雜誌であつた。殊に創刊當初は學窓を離れたばかりの鋭氣勃々として、生氣が全幅に溢れてゐた。

私は其頃までは新刊の批評を主として文藝の評論や雜感のやうのものばかり書いてゐた。評論や感想なぞといふものは今でもだが其頃は猶更世間に喜ばれなかつた。其上私は、其頃も盛んな朋黨比周した文壇の何派にも屬さないで孤立してゐたからドコからも外樣扱ひされてゐたし、大抵な新聞雜誌は文藝擔任者がドコかの黨派に所屬して夫々繩張が極

つてゐたから外様の私らの、殊に讀者受けの餘りしない評論や感想は餘り好迎されなかつた。自然原稿で生活するには評論や感想ばかり書いてゐては(今でもだが)其頃は猶更不利益であつた。ザツクバランにぶちまければ評論や感想ばかり書いてるのでは温かい飯を喰うのは容易で無かつた。

どうして小說を書く氣になつた?『暮の二十八日』を發表した當時能く人に訊かれたもんだが、ドウもコウもない、小說を書くより外に生活する道が無かつたからだ。私が文壇に投じた抑もの初めも今の文學青年のやうに文壇的野心に燃えたわけでは無くて、半苦學生々活を送つてゐた境遇上、牛乳を配つたり新聞を配達したりすると同じ心持で雜誌の寄稿をしたに外ならんので、小說に指を染めたのも同じ動機、喰ふ爲めであつたのである。

そこで小說には愈々自信は無いが喰ふ爲めの小說を書く氣になつてゐた處へ折よくか折惡くか島村君から坪內君を通じて『新著月刊』への寄稿を交涉されて來たので、先方の要求は矢張批評か雜感であつたが、ソンナものよりは小說を書かうと返事して、約束が成立して早速筆を操つたのが『暮の二十八日』である。

今云つた通り纏まつた金を取るには小說を書くより外に道が無かつたので決心した創作であるから、相談のあつたのが十二月の初めで、差向き暮の支度に早速書かなければならなかつた。腹案も何も有つたもんぢやない。立案なんぞしてゐられない。出たとこ勝負で書出して見たが、イクラ出鱈目でも筋道は立てなければならないから考へ〳〵書直し書直しばかりして少しも筆が涉取らない。然う愚うする中、十五日となり二十日となり、愚圖々々してゐれば迚も暮の間に合はないので、俄にあせつて馬力を掛け、最後の二十七日の晚は徹宵猪武者のやうになつて無茶苦茶に書き飛ばして翌る朝、尻切り蜻蛉のやうなものだが、　に右く脫稿した。私は最後に題名を附けるのが其頃からの例で、二十八日に脫稿したから『暮の二十八日』と命題して『暮の二十八日だといふに……』云々の冒頭を數行加へた。

此の最終の二十七日の晚に書いたのが四十何枚で、コンナに大馬力を掛けて最大急行で書飛ばしたのは前後に此時し

か無い。インスピレーションよりはキンスピレーションだと、其後能く人に話しては笑ひ〳〵した。

處が弱つた。大骨折で漸とこさと書上げた原稿を二十八日の朝、發行書肆へ使に持してやると二十五日で會計を締切りましたからと仕拂をことはられた。然ういふ事が無いとも限らんと思つて、前以て一週間も前に島村に念を押して置いたのだから、不都合極まると坪内君を通じて島村に掛合ひ、島村も喫驚してソンナ筈は無い、何かの間違ひだらうと心配して交渉して呉れたので、三十日の朝漸とこさと請取る事が出來た。金が欲しくて焦眉の窮策にイヤ〳〵書いたものが金に換えられなかつたのだから、狼狽したよりは腹が立つてムシヤクシヤした。暮のヤリクリは十年どころか三十年一日の如く今も相應に魂膽してゐるが、丁度暮に際して其時のマゴツキが憶出される。

こんなヤクタイも無い魂膽咄は一般讀者には何の興味も無いし當人の人がらにも觸るからイ、加減に切上げるが、之が皮切となつて夫から諸方の雜誌にポツ〳〵小説を書くやうになつた。格別傑作も無いし、世間の褒貶は別として自信のある作といふものも無かつたが、多小は批評家の月旦にも上つたし、發賣禁止にもなつたし、モデル問題で攻撃された事もあつて、小説家一と通りの修行を積んで四五年間は小説家生活を繼續した。

モデル問題といふのは、私の或る作が知人の某をモデルにしたといふので、八方から痛く攻撃された事があつた。だが、私は此作に限らず他の作でも自分の知人をモデルとした事は一度も無い。誰でも小説を書く場合、自分の周圍の人物の風丰の片影や生活の輪廓が不用意の間に作中に滲み出すのは止むを得ないので、丸切り空想の中から産み出したものでも多少平生交渉する誰かに似通ふ事が有るかも解らん。夫は據ろない。僅かな類似點を捉へて直ぐ誰それをモデルとしたと當推量をして騷ぎ立て、忽ち攻撃の鋒さきを向けるのは作者に取つて迷惑此上も無い。（尤も此頃は樂屋咄を互にスツパ抜くのがザラになつて、小説は皆モデルがあるのが普通になつたから、モデルにされたと云つてヤツキとなつて騷ぐ野暮も無くなつたが、其頃は何かといふと矢鱈とモデル問題を擔ぎ出して作者を不德呼ばゝりしたものだ。）

夫に就いて面白い咄がある。『暮の二十八日』が發行された時、私の周圍のものは私自身の事を書いたと云つて私を冷かした。處が發行後二週間ばかりして長谷川二葉亭を訪ふと、座に就くや否、『到頭生捕られたネ』といふ。何の事か解らぬので問返すと、『暮の二十八日』は長谷川の家庭を書いたのだと獨りぎめしてゐて、『イ、サ、小說に生捕られるのは閼はんがネ、あれぢやア書足りてゐない、モ一度後談を書き玉へ、材料は今度は生捕られるツモリで提供しやう』と獨りで呑込んで了つて、『さうぢやア無い』と辯明しても、『イ、サ、そんな事を怒りやアしない』と丸で耳も傾けやうともしなかつた。

一方には私自身の事を書いたのだと憶測するものがある傍ら、一方には本人自から生捕られたとモデルを買つて出るものがある。だが、作者に云はせればドチラでも無いので、モデル問題なんてものは大抵そんなもんだ。

私が禁止を喰つた『破垣』といふ作がある。時の內相某が自分の秘密をスツパ拔かれたといふので甚だ不機嫌であつたのを屬僚が意を嚮へて禁止したといふ噂があつた。確かな筋から洩れ聞えたので萬更虛聞でも無さゝうだつたが、若し果して然うだつたら迷惑至極である。此作は或る外國の詰らぬ小說からヒントを得て、偶々聞込んだ某氏の家庭の紊亂に結び付けて書いたので、私が知りもしない當の內相の家庭の祕密話などゝ憶測されるは飛んでも無い見當違ひである。が、然ういふ誤解から奇禍を買つたので想像すると、私が『破垣』に書いたやうな家庭の紊亂は當時の上流階級を一貫してドコの家庭にも有つたものと見える。一々自分の神經から勝手に當推量して矢張とモデル問題を擔ぎ出されるのは作者としては迷惑千萬である。

だが、私は知人をモデルにした事は一度も無いが、其頃博文館から發行した週刊雜誌の『太平洋』（今三越の取締役をしてゐる濱田四郎氏が主筆であつた）に每號連揭した讀切の短篇小說、（小說よりは今云ふコントだが）其中には多少據りどころのあるものもある。或は事實は無くとも風采や言動に粉本のあるものがある。此興味から普通の小說讀者以外

の一部の知識階級者に讀まれた。今見れば詰らぬものだが、當時の世相を偲ぶ若干の材料にならない事は無い。（此の短篇物は後に纒められて『社會百面相』と題した單行本として出版された。が、今は絶版となつてゐる。）

當時はマダ硯友社の天下であつたが、實はソロ〳〵飽かれ初めた頃だつた。國木田獨歩がポツ〳〵書き初めてゐたがマダ認められないで、晝間の星ほども光らなかつた。小杉天外が頻りに力作を續出して一部の人氣を呼んでゐたが、紅葉と比べては矢張團十郎に對する大阪役者ほどにも受けなかつた。硯友社の人氣が下り坂に向いたと云つても之に代るものが出なかつた。樗牛や潮風の花やかな評論が文壇の人氣を獨占して小説は恰も冬蟄時代であつた。私はコウいふ黄昏（たそがれ）のトワヰライトに動めいてゐたが、明るくなるのを待たないで自分の古巣に引込んで了つた。漱石が出場し二葉亭が二度の返り咲きをしたのは之から二三年後であつた。

私が最後に發表した小説は何であつたか忘れて了つたが、單行本としては此の『社會百面相』が最終であつた。夫から以後本と〳〵小説は自信があつたわけでは無し、イヤ〳〵だつたのだからイツとはなしに小説の筆を絶つて了つた。が、當時の腹案で餘りプランが大き過ぎるので筆を着け兼ねたものが一つ二つ今だに頭の中に殘つてゐる。モ一度機會があつたら書かうかと思つてるが、さて然ういふ機會が來るか來ないか解らん。小説をライフ・ウオークとしやうといふやうな野心は毛頭無い。

（十二月五日）

明治三十年代の文士訪問

高須芳次郎

私が同人雜誌『よしあし草』の一記者として、心友中村吉藏君と一緒に文士訪問をはじめたのは明治三十一年夏頃のことである。當時大阪のやうな物質的都會では、文筆本位の生活を全く許さなかつた。今も大阪の新聞、雜誌によつて純粹な文士生活をすることは第一流の大家でないと、むづかしいやうに思ふ。殊に日清戰爭前後の頃、大阪在住の文士はいづれも『大朝』若くは『大毎』に關係をもつて、毎日出社し、新聞記者として一定の俸給で生活したのである。原稿料だけで生活するのは全く不可能であつた。

それら文士のうちで、比較的に文壇と交渉があつたのは、菊池幽芳、須藤南翠、渡邊霞亭、井上笠園、西村天囚、木崎好尙の諸氏であつた 他に東京から歸つた詩人三木天遊が令兄の家に寄寓してゐた位のもので、大阪文壇の寂寞は、殊にひどかつた。中村君や私などは、それを殘念に思つたので、第一次文藝復興時代ともいふべき『浪華文學』『葦分舟』などが出た頃を回想し、玆に『よしあし草』(後に『關西文學』)を出したのである。その前後、大阪で『文學評論』『寶樂』『ふた葉』『小天地』などが出て、兎も角、第二次文藝復興現象を示し、『大毎』は時文欄を設けて、私らの寄稿を掲げ、次いで『大朝』はその時分、『國民之友』に文藝評論を書いてゐた角田浩々歌客氏を東京から招き、新たに文藝時評執筆の任に當らせ、大阪を中心とする關西の文運は頓に新興の色を見せた。江見水蔭、白川鯉洋二氏が創刊した『神戸新聞』に招聘せられたのも亦その頃のことで、すべて日清戰爭前後に起つた現象であつた。

關西文壇の事情は他に執筆者があるから茲に省く。さて主題とする文士訪問のことについて一言する。文士訪問をはじめた雜誌は何であつたらうか。後藤宙外、島村抱月氏らの『新著月刊』などは、明治三十年代に文士訪問記事を掲げて、それを一つの呼物としたが、その依つて來るところは、『早稻田文學』でなかつたかと思ふ。『早稻田文學』はイギリス流に記實を主とし、極めて公平に各方面の文士の意見を掲ぐることを始めた。それで文士訪問に先鞭を著けたのは、『早稻田文學』であると思ふが、その特色を巧みに發揮したのは、『新著月刊』であつた。同誌に掲げられた訪問記のうちで、正直正太夫氏（齋藤綠雨）の皮肉な戀愛談、廣津柳浪氏の心中物についての話などは、二氏の口吻がその儘に出てゐて、生々した面白味があつた。『よしあし草』同人が、文士訪問記を書かうと決意したのも、一つは『新著月刊』に刺戟されたのである。

△

最初、我が大阪で訪問したのは菊池幽芳氏であつた。氏はその時分、イギリスの冒險小說、家庭小說に親み、ロシヤ物をも讀んでをられた。そして『文藝俱樂部』にドストエフスキイの小說を譯して、發表したことがあつた。ある冬の夜、氏を東區船越町一丁目の家に訪ふと、氏は丁度、讀書中で、小綺麗な室で、靜かにはきはきした調子でドストエフスキイの話などが出た。今では、珍しくないが、あの頃、それらを讀んだ人は文壇に少かつた。小說家といへば、余り勉強しない人だと思つてゐたが、氏に逢つて、私はその眞面目な態度、謹嚴なうちに溫味のある樣子に敬愛を感じた。

渡邊霞亭氏を訪ふたのも、やはり、その頃のことで、中村君と一緒であつたと思ふ。氏は『實譚』といふ文藝雜誌の話――それは氏に關係の深い雜誌――や歷史小說の話をしたのをかすかに覺えてゐる。その際、私らが驚いたのは、氏の家の玄關に四五人の弟子がゐたことで、私らが辭去するとき、主人と共に鄭重に一禮した。

「大家になると、あんなに書生を世話しなければならぬのであらうか。」

と思つたが、當時一般に知名文士の玄關には一二名の書生が大抵ゐた。今の文壇人は、そんな形式に拘泥しないが、三十年代はそうしたことが、大家の體裁を保つ一要素のやうな習慣付けられてゐた。勿論、中にはそういふ習慣を何とも思はない人もゐたが――

櫻の宮に『新裝の佳人』で名を得た須藤南翠氏を訪ふた時は愉快であつた。氏は『大朝』の社會部長に聘せられて下阪し、傍らその紙上に長篇小說を書いてゐた。氏の談話は江戸ッ兒式で、私らにも、痛快だと思はせた。それから井上笠園氏を訪ひ、支那小說の話を聞いたが、今日、その內容をはつきり覺えてゐない。

當時、大阪在住の文士は、大抵桃谷か櫻の宮邊にゐた。桃谷は桃の花の咲く里で東京の根岸のやうな閑靜なところである。櫻の宮は向島と同じやうに櫻の花で知られた場所で、藍を流したやうな淀川を前に控へ、風景は向島よりも遙かによかつた。幽芳氏も後に櫻の宮に住み、南翠氏は最初からそこにゐた。西村天囚、木崎好尚氏などは、『浪華文學』『葦分船』の時代に、桃谷に住み、井上笠園氏らと共に一種の桃谷黨を作つた形であつた。それは東京文士の根岸居住者を根岸派といつたのに對し、桃谷派とでもいつてよかつた。それから堺利彥氏が一時、日清戰爭後、大阪の新聞にゐて小說を書いてゐたが、到頭逢へなかつた。それと共に氏の令兄本吉欠伸氏の名を知り、その小說に感心して一度訪問したいと思ひながら、緣がないと見えて逢はずにしまつた。欠伸氏は露伴風の理念を寓した小說を書き、大阪文士中、一番前途に囑望されたが、少壯にして世を去つたのは惜しい。

△

それから東京へ來て、私が最初訪問したのは後藤宙外氏である。氏は今日、文壇から遠のいたが、當時は『ありのすさび』『闇のうつゝ』などで一躍、高名を得て『新著月刊』を主宰し、新進作家の中堅を以て目せられてゐた。あの頃の

ゴシップ子は、氏が粋な駒下駄をはいて、神樂坂邊を散歩するとか、その附近の風流な巷に遊んだとかいふやうな噂を傳へた。それで私は氏を瀟洒なる才人のやうに思つて、その藥王寺町の住居を訪ふたが、想像とちがつて、一見、『ごつい人』であつた。男性的にしつかりしたところがあつた。私が『新著月刊』に出てゐた氏の友人の處女作を遠慮なく非難し、その缺點を指摘すると、氏は不興な顏付で「私の友人のことを自分の前でわるくいふのはよくない。」と詰めよせたので、私は一寸氣まづい思ひをしたが、同時に正直な人だといふ印象を受けたのである。最近（十四年十二月）早稻田の同人が逍遙先生を中心として集つた時、偶然、氏の來會を見て今昔の感に堪えなかつた。氏は益々頑健で日下郷土史を書いてゐる。

それから間もなく、『新聲』の用事で神田淡路町の高田屋にゐた河東碧梧桐氏を訪ひ、續いて『文藝新聞』（週刊）の用事で神田猿樂町の『ほととぎす』發行處に高濱虛子氏を訪ふた。それは明治三十三年頃のことである。それに正岡子規氏をも、その時分、唯一度訪問した。碧梧桐氏は高田屋の古びた二階の四疊半に居を占め、質素な机によりかゝつてまだ書生その儘の生活をしてゐた。あの健康な長身、血色のよい顏、飾り氣のない話振は、私に快い感じを與へた。松山出身の、といふよりも、寧ろ江戸ッ兒らしいところがあつた。何でも二三度目に逢つたとき、新聲社から出す『猿簑評釋』を依賴したことを覺えてゐる。虛子氏はもう夫人を迎へて、猿樂町に一家を構へてゐたが、それも僅かに三間ばかり小さな家で、『ほととぎす發行處』といふ看板を出してゐた。庭など狹かつた。質素にすぎたやうな生活振であつた。氏の物の言ひ方は落着いて、柔か味があり、何となく、世馴れた風があつた。私が『文藝新聞』の寄稿を依賴すると、氏は言下に快諾し、約束した日に「煤はき」といふ一文を寄せられた。それは文中に俳句を挿んで、煤はきの感味、光景を淡々と叙したものであつた。氏が後に作つた寫生文とは手觸りのちがつたものであつた。

私が正岡子規氏を訪ふたのは、『新聲』の春季特別號へ氏の寄稿を得たい爲めであつた。氏は私を快くその病室に引見

して、初對面としては餘程打解けた話振であつた。壁間にかけてある笠と簑とは、第一に私の眼に映り、氏の過去の俳行脚を思はせた。氏は談中、日蓮聖人の人物に敬服してゐることを語り、その豪邁不屈の意氣を讃嘆した。この點で、氏は高山樗牛氏よりも遙かに早く日蓮聖人に歸嚮したといへるであらう。それから氏は「敎育事業は中々面白い。人材を養成することは一つの樂みである。」と話した。それらの談後、私が寄稿のことを依賴すると、氏は露骨に斷りはしなかつたが、「私は成るべく力の這入つたものをあげたいが、今は書く暇もないし、感興も湧かぬ。だから他日にしてほしい。」といふ意味を告げ、『ほととぎす』『日本新聞』以外には、成るべく書かぬ意を暗に示された。それで我は病中の氏を強ゐて煩はすのは禮を失すると思つたので、氏の加餐を祈り、靜かに辭去した。當時の光景は、どう云ふものか、私の頭に割合によく殘つてゐるが、一つは私が久しく子規氏の事業、人格に敬服してゐたためかと思ふ。

△

赤門派の文士中、一番早く私が訪問したのは、田岡嶺雲氏である。氏は山陽地方から上京して、神田淡路町の旅館に泊つゐた。その頃、新聲社で氏の最初の文集『嶺雲搖曳』を出版することになつたので、協議のため、氏を訪ふたのである。『嶺雲搖曳』は私が編輯したのであるが、嶺雲氏は自身の原稿を整理することなどをどうでもよいとしてゐたので、私は苦心してそれらの文篇を諸雜誌からあつめ、淨書するのに相當、骨が折れた。氏はさういふ風に無頓着で、原稿紙に字を書くにも、一行あきで、而も二錢銅貨大の字を一行中に十字ばかり放膽に書くといふ具合で、文字に奇氣があつた。

私が氏を旅館に訪ふと、十二疊ばかりの室にあぐらをかいて座つてゐた。眼光鋭く、肩怒らし、精氣が眉のあたりに動いてゐた樣子は、文字通りの東洋豪傑であつた。話振は淡泊で、すこしも嫌味がなかつたが、未だ打解けて話すべき間柄でないので、少時用談して、すぐに氏の許を辭去した。

それから『文學小訓』を出す用事で、本鄉駒込千駄木にゐた大町桂月氏を訪ふたことがあるが、折柄、氏はすこし前

に出かけたあとで、逢ふことが出來なかつた。私は空しく氏の家の二階を仰いで歸つた。その頃の桂月氏は高山樗牛氏と並稱せられて、赤門文士中の白眉だといはわてゐたのである。樗牛には一度も逢はなかつたが、當時、博文館の編輯局に入つた西村眞次君が、樗牛氏に逢つた印象を語り、西村君は樗牛から英語の發音を正され、またドイツのゲエテのことをゴエテといつたのについて注意されたりしたことを語つた。「鼻の高山」とゴシップ子が傳へたのは、その頃のことである。その頃、樗牛氏は『太陽』の英文欄を擔當し、暫く執筆を續けてゐたことがあつた。

それと前後して、私は土井晩翠、嶋崎藤村二氏にも逢つた。藤村氏と會見したことはいつか『文章倶樂部』へ詳しく記して置いたから省く。土井晩翠氏は『天地有情』その他の詩によつて、藤村氏と對立してゐた頃で、私が氏を訪ふた折は、本郷西片町の瀟洒な宅にをられたと記憶する。その書齋には金文字入の洋書がぎつきり書棚につまつてゐた。私が氏に逢つて得た第一印象は情熱の人といふよりも、寧ろ理性の人だといふ感じであつた。また女性的な感傷に親むよりも、男性的な考へ方を好む人だといふことであつた。あの頃の藤村氏が書生風であつたのにくらべると、氏は學者風で、私にカアライルの文學について話したのを覺えてゐる。氏は一面に於て、カアライルに心醉してゐたやうに思はれた。

間もなく、私は「虎の鐵幹」として有名であつた與謝野寛氏を麴町中六番町の新詩社で逢つた。座に內海月杖氏がゐた。與謝野氏は、今日の氏とちがつて、一見、覇氣汪勃たる風があつた。その坐談は氣が利いてゐて相手により、巧みに調子を合はすといふ具合で拔け目がなかつた。そして氏が本來持つてゐる人に對する好惡の感情を力めて抑へつけてゐるやうに見えた。次いで私は堺で、與謝野晶子（當時は鳳晶子）さんに逢つたが、その潑剌たる才情は、その頃の言動の上にも閃めてゐた。一見、尋常の女性でなく、何か優れたところがあるのを思はせた。それに晶子さんは男子の前へ出ても一向臆した樣子がなく、謙遜した調子で大膽に自由に物をいふ趣があつた。晶子さんがまだ堺にゐた獨身時代

に東京の私の許へ贈られた手紙が十數通あるが、いづれも長い。今日も私の手許に保存してゐる。

こんなことを記してゐると、際限がないのでこの位に留め、茲に一つ知名文士に訪はれた記を書く。ある日、新聲社にゐると、ずんぐり肥え太つて、百姓のやうな風格をした三十餘歳位の色黒い人が私を尋ねて來た。丸で見知らぬ人であつたが、「私は德富健次郎です。」と名乘つたので、はじめてそれが蘆花氏であることを知つた。それは別稿にも記した通り、私が『文藝新聞』で氏の『不如歸』を精評し、率先、紹介し推賞したので、氏は私を氏と同年輩ぐらゐであらうと察し、挨拶旁、逗子から來訪されたのである。ところが、その時分の私はまだ二十二三の若輩にすぎなかつたので、氏は一寸意外な感じがしたやうに、眼を瞬り、私の年少な割に老成人めいた文章を書いたのを異とされたやうだつた。さう見られた私も、文壇に於て超然たる蘆花さんが、わざわざ一書生たる私を訪問されやうと思はず、聊か狼狽し、恐縮して充分思ふやうに話が出來なかつた。

私の文士訪問錄の一半は、以上の通りであるが、恩師坪内逍遙先生に謁したのは明治三十四年の春だと思ふ。田中智學先生の紹介で訪問したのであるが、庭に面した座敷に通されたとき、一隅に小さくなつて、碌に自分の思ふことを述べることが出來なかつた。久しく、逍遙先生の創作、評論を拜見して、敬慕してゐたのが、さてその先生の前へ出ると何といつてよいか、無暗に遠慮する氣持になつてしまつたのである。あとで先生が、田中先生の許へ手紙を送られたがその中に「彼れは沈着なところがあつてよい。」といはれたのを聞き、恐縮したことを今日も思ひ出すのである。

尙ほ私は尾崎紅葉氏に是非一度逢ひたいと思つたが、別稿に記す通り、私ら『新聲』同人が、餘りに過激な評論を硯友社一派、殊に紅葉氏の上に加へたので、紅葉氏は私らを快く思はぬ。それで訪問しても、到底引見されまいと察し、晩年の紅葉に深く同感しながら、また『多情多恨』を愛讀しながら、到頭逢はなかつたのは殘念であつた。

明治三十年前後の文壇

田山花袋

一

あの賑やかな硯友社の人達が一方にあるかと思ふと、一方には早稲田派や千駄木派があつて、それが互ひに鎬を削つてゐたことを私は思ひ起す。しかし三十年頃には、時代は最早變りつゝあつた。イギリスの影響はドイツに變り、ドイツの影響はまた大陸的文學に變りつゝあつた。それは正面に立つてゐる作者は、紅葉、露伴、水蔭、眉山、柳浪などであつたけれども――またそれにつゞいて起つた作者は、一葉、鏡花、宙外、風葉などであつたけれども、さういふ人達のものでは進んだ讀者は最早滿足しては居なかつた。日清戰爭以後、ヨオロツパの潮流は流るゝやうに入つて來た。輕ロ、駄洒落、雜俳などは益々傍に押されて行つてゐた。

このヨオロツパの文藝の影響は、最初は國民文學派乃至は早稲田、または思軒の飜譯などからも入つて來てゐたであらうけれども、しかも次第に『しがらみ草紙』に押されて、後には新しい文學の知識を求めるものは全くそつちの方にのみ心を傾けるやうになつた。あの黑い中に白く浮き文字になつてあらはされてある『しがらみ草紙』の四字！　私達に取つて、それは何んなになつかしいものであつたらうか。

今日讀んで見てもわかるであらうが、そこにはいろいろなことが書かれてある。繪畫論もあれば、建築論もある。彫

刻を一方で論じてゐるかと思ふと、一方では頻りに新しい文藝を紹介してゐるといふ風である。私はそこからいろいろなことを教へられたことを覺えてゐる。ゾラの自然主義の手法もそこに書いてある。ドオデヱのことも書いてある。ドイツを中心にしてはゐたけれども、何方かと言へば、大陸文學的で、ロシアは勿論、フランス、イスパニアの文學までも紹介に及んでゐる。

イギリスを通つて入つて來た潮流は二方面ある。一つは坪内博士の早稻田である。一つは國民文學派、女學雜誌派、そこから文學界派がわかれて來てゐる。早稻田は沙翁萬能で、新しいヨオロツパの文藝をさう多く紹介してゐるとは私には思へなかつた。文學界派はイギリスから出たので、藤村の『詩』にしても、何處かイギリスの臭氣がある。つまり二十五六年頃ドイツの學問の影響が入つて來てから、ヨオロツパの近代文學が日本にも知れて來たので、それ以前は、大抵は宣教師などと一緒に入つて來た古臭いイギリス文學であつたといふことが言へると思ふ。勿論、二葉亭のロシアの影響は、それは全く別なものではあつたけれども――。

二

三十年前後にあつては、ヨオロツパの近代文學はもはやかなりに廣くひろがつて來てゐた。それはそれに影響されたやうな作品はまだ出てゐなかつたけれども、その描法が、その着眼點が、その調子が、早晩一變化されなければならないといふことは、心ある青年には皆なわかつてゐた。世に公にされてゐる作品のやうなものでは、將來とても駄目だといふ風にも考へられてゐた。否、その時分正面に立つてゐた作者自身でも、心あるものはさう思つてゐたらしく、眉山が『裏表』や『網代木』などで絕えず變らうとして苦心してゐた形などもたしかにそれであるといふことが出來る。天外、風葉なども新しい境地を拓くことに努力してゐたことは、それ　はつきり指點することが出來る。

三十年はたしか『めざましい草』の生れた年であらうと思ふ。『しがらみ草紙』が何うして『めざまし草』になつたか。それなども今日考へて見ると面白いことである。それは千駄木の鷗外漁史が次第に文壇に近寄つて來たことをあらはして來てゐるのである。更に言ひ換へれば、今まではぐつと高く、またぐつと離れて、一人相撲を取つてゐたのが、段々さうしてゐられなくなつて、文壇へと下りて來て、所謂大家（つまり、まごまごしてゐれば流されさうな人達）を寄せ集めて、新しい機運に對してその對抗運動を始めたのである。だから『しがらみ草紙』は當年の青年の渇仰の的になつたが、『めざまし草』は却つてその反感を惹き起した。それは『三人冗語』『雲中語』などいふ合評を見れば、いかにその時代の大家達がつまらなく新しい機運を壓迫したかといふことがわかるのである。

『矢張、幸田とか、齋藤とかいふ人は、持つてゐたものを皆な出し盡して了つたんですね。それで一緒になつて、あゝいふことを始めたんですね』

後には私達はこんなことを言つたことを覺えてゐる。

早稻田でも、三十年前後には、坪內博士は餘り多く表面へは出て來られなかつたやうである。金子筑水君が早稻田の文科の第一期卒業生で、第二期が島村、後藤兩君だつたと思ふが、それが二十八九年頃のことだと私は覺えてゐる。何と言つても、その時分は、創作では硯友社で『何うもあなたの方のかたは若筆が立たれてゐるから』と坪內博士が紅葉に言つたのは、あながちお世辭ばかりではなかつたのである。その證據には、小說をやるには、何うしても硯友社でなければいけないと思つて、それで後藤宙外は『紅葉論』を卒業論文にしたりして橫寺町へと近寄つて行つたのである。

所謂觀念小說といふものが流行つたことがあつたが、あれもたしか二十八九年頃だと思ふ。柳浪の『黑蜥蜴』鏡花の『夜行巡査』がその代表的作品であつたやうに私は覺えてゐる。その少し後で、一葉が俄かに頭を擡げ出した。

一葉の『わかれ道』鏡花の『琵琶傳』水蔭の『炭焼の烟』の出た年は賑かであつたやうに私は記憶してゐる。その年『めさまし草』もその第一號を發行した。

三

一葉は私はよく知らない。逢つたこともない。上富坂町の眉山君の家に行くと、『何うです、樋口へ行つて見ませんか』とよく誘はれたものだが、何だか海千山千の女性のやうな氣がして無氣味だつたのと、『めさまし草』の大家連があまり滅茶苦茶に褒めるので、それに同意するのが癪なやうな氣がしたのとで、たうとうそこを訪問することをしなかつたのである。書いたものに對しても面白いとは思つたが、あれが將來の文藝の作品に深い關係を持つてゐるとは何うしても思へなかつたので、別に驚かされもしなかつたのを覺えてゐる。『たけくらべ』も好いが、『ゆく雲』『うつせみ』などの方を私は選んだ。

これは私の考へ方で、或は間違つてゐるかも知れないが、あゝいふ風に、『めさまし草』が一葉を褒めたのは、矢張そこに何かがあつたのではないか。雨後の筍のやうに簇出した新進作家に對してのある心持があゝいふ風に一葉を褒めるやうな空氣を醸させたのではないか。何うもその頃さういふ風に思はれたことを私は忘れ得ない。

一葉の日記を見ると、その時分のことがよくわかる。緑雨が一葉に對して何んなに神經過敏であつたがなどといふこともそれとわかる。さう言へば、緑雨も私に取つては忘れられない人だ。今日の文壇にその例を求めると、質は丸で違つてゐるかも知れないが、感じは何處か近松秋江に似てゐるやうな氣がする。車を待たせて二時間も三時間も話して行くことが好きなやうな人で、私も、さうした文壇の大家を汚ない陋宅の一間に請して、長くゐられて困つたことのあつたのを記憶してゐる。私も緑雨醒客と名を並べて、私の作つた『朝月夜』といふ作を北海道の新聞に連載したことがあ

るのである。

水蔭は私がことに世話になつた人であるから、一番好く知つてゐる。ちよつと義俠的なところもあり、神經質なところもあつて、岡山人らしい氣分がかなりにある。正宗君や近松君などとも共通したやうなところがないでもない。私は一番先きに紅葉を訪問したが、さうした文學書生のために『千紫萬紅』といふ雜誌をやつてゐるといふので、それでその時編輯をしてゐた水蔭君を牛込北町の寓に訪問したのである。それはたしか二十四年頃だと思ふが、あの時分のことを考へると、何とも言はれずなつかしい。田舍士族の家は貧しく、外套などは着ることは出來ず、眞岡木綿の三つ紋の羽織を着て、ブルブル戰へながら、一日おきのやうに水蔭君の宅を訪ねたものである。水蔭氏は今は不遇だけれども、一時は中々全盛を極めたもので、紅葉が書けなくなつた時分に盛んに書いて、藻社の人達——つまり鏡花とか風葉とか春葉とか秋聲とかに立派に對抗したものである。つまり新しい文藝の起つて來る殿軍の將としてかなりに戰つたひとりであるといふことが出來る。

水蔭氏には、文學書生時代一方ならぬ世話になつたが、眉山君には世話になつたといふ形はなかつた。それと言ふのも、川上君と往來し始めたのは、ずつと後で、三十年以後であつたからであらう。眉山は『書記官』『若藤』『賤機』あたりがその全盛で、『網代木』(『暗潮』)を讀賣で中絕してから、生れ替えための藝術的苦悶が始つた。そして旅に出たり、あちこちと放浪したりしたが、(例の『ふところ日記』はその間に出來た)その苦悶はかれの最後の自殺まで續いた。晚年、龍士會あたりまで出て來たりしたけれども、その眞面目な純な心持は、新しい流に全く雜り合つて了ふことが出來なかつた。

四

藻社の人達の一時寄寓してゐた梁山伯をも私はちよつと覗いて見たことがあるが、それは表から行くと、今の電車通を左に入つて行くやうになつてゐたが、裏はすぐ紅葉の宅で、そこからもだらだらと下りて行くことが出來るやうになつてゐた。二階屋で、下はたしか八疊に六疊に四疊半ぐらゐだと覺えてゐる。陰氣で何となく薄暗いやうな家だつた。そこに、風葉と春葉と白峰とがゐた。秋聲もゐたかも知れぬが、はつきりしたことは覺えてゐない。風葉はその二階で、當時かなりに評判の高かつた『戀慕流し』を書いてゐた。鏡花はその時分は既に新進作家のチヤキチヤキで、小石川の戸崎町の大橋乙羽の二階に客分になつて住み込んでゐた。乙羽は硯友社の一員としては、さう大して立てられた方ではなかつたけれども、一度當時の大書肆であつた博文館の婿がねになると、忽ち翼が生えたやうに勢力が出て來て、原稿を持て餘してゐるものは皆なそこへ押しかけて行つたものだ。現にさういふ私もその一人であるが、乙羽は乙羽で、紅葉よりも却つて露伴の方に靡き、篁村とも交り、中でも一葉と鏡花とを最屓にして、それを文壇に送つたは自分であるやうな態度を取つてゐたのである。

その藻社の梁山伯では、何うかすると、紅葉がその南向きの六疊にこつそりかくれて、訪問客を避けて、頻りに筆を執つてゐたことがある。たしか『多情多恨』を書いてゐたであらうと思ふ。紅葉はその門人共を狹斜にまでは誘つて行かなかつたであらうが、あの神樂坂の今のプランタンのところにある西洋料理や坂の下の鳥金あたりまでは度々一緒に伴ふて出かけて行つたさうである。

後藤宙外が早稻田から硯友社の方に近寄つて、紅葉を始め、藻社の人達とも交際し、例の『新著月刊』といふ雜誌を出したのもその時分のことである。その社はあの神樂坂を堀端の方から八分通り上つて右に折れて少し行つた右側にあつたが、そこにも種々の文士連が出入したやうである。私も一度行つたことのあるのを覺えてゐる。何でもその前の年だか、その年だか、露伴が『新小説』の編輯主任になつて、後に出した『長言 讕 語』の長言の方を書きながら、その卷

頭には、成るたけ新しい人のものか、でなければ流行作家のものを一篇づゝ載せるやうにした。この企てはかなりに當時の文壇の勢力になつた。一番先に水谷不倒の『錆刀』そのつぎに小栗風葉の『龜甲鶴』つゞいて後藤宙外のものやら、廣津柳浪のものやらが出たのを覺えてゐる。その時分は『新小說』も大したものだつた。『文藝倶樂部』や『太陽』などよりもぐつと文學的だつた。しかしさうした露伴の編輯振りもくろうとには評判は好かつたけれども、賣行などには餘りよくなかつたと見えて、間もなく露伴がやめて石橋忍月がそれに代つた。つまりその頃の小說雜誌としては、その『新小說』とさつき言つた後藤宙外の『新著月刊』とが一番ハイカラであつたのである。『文藝倶樂部』や『太陽』もあつたけれども、それは原稿を買つて貰う上の好い機關であつた方が多かつたやうである。それにしてもこの『新著月刊』には何が出たか。大して覺えてゐるやうなものもなかつたけれども、いろいろな派を集めたといふ意味で、かなりに評判にもなり、勢力をも持つてゐたのである。島村抱月が一時小說家としての地盤をかなりに立派にそこで築き上げたのを私は思ひ出すことが出來る。『夫婦波』などといふ近松張りの心中物がそこに出たことを覺えてゐる。また當時の大家に（單に文藝家ばかりでなしに）いろいろな話をきいて、それを毎號つゞけて載せたが、その中で綠雨の戀愛觀の奇拔であつたことや、紅葉の戀愛觀の道德的トォンに滿たされてあつたことを今でも思ひ出す。內田魯庵の『暮の二十八日』もずつと後になつてからその『新著月刊』に出たのである。

五

その頃、私は何うしてゐたかといふと、さういふ文壇の中心からは殆ど全く外れて、縋るべき一握の藁すらも持たずに、何うしたら好いか途方に暮れてゐたのである。硯友社には交り合ふことは出來ず、さうかと言つて江見水蔭の江水社に入りきりに入つて了ふこともいやだつたし、もつと志も大きかつたし、早稻田にも早稻田には近寄れなかつたし、

止むなく宮崎湖處子や柳田國男などと交つて、そこから何うかして一縷の活路を見出したいと思つてゐたのである。宮崎湖處子は今でこそ誰も知つてゐるものはないが、國民文學派の驍將の一人で、常に『國民之友』の六號活字の欄に據つて、八面樓主人の名で紅葉や鷗外や宙外に喰つてかゝつてゐたものである。そして私はその湖處子を透して、始めて國木田獨歩を知つたのである。

湖處子は私に言つた。『國木田君はたとへて見れば金だよ。僕等のやうな銅や鐵ぢやないからな……。何しろ、大家を屁とも思つてゐないから面白いぢやないか。一度是非逢つて見たまへ。君なんか、きつと話が合ふよ。……さうだな北村(透谷)も金だが、あれよりももつと小説的だ……』で、私は湖處子を澁谷の道玄阪の左側のばれん屋といふ宿屋に訪ねた次手に、始めて失戀に苦しんでゐるかれをその丘の上の小さな家の中に發見したのである。

その時の事は『東京の三十年』の中に詳しく書いて置いたから、此處にはそれを略するが、一度で意氣投合して、それからといふものは、一週間に一度位は何うしても互ひに逢はなければ氣がすまないやうな形になつて行つたのである。私はその頃、牛込の喜久井町に住んでゐたが、國木田君が歸る時には、いつもそれを高田の面影橋の橋の袂まで送つて行つてそこで別れて歸つて來たものである。『武藏野』の中の都會と野との間にある町の描寫は、丁度その時分に書いたものである。私達はいつも目白の停車場で乘降した。(その時分のあの目白の停車場の小さかつたことよ。丸で掘立小屋か何かのやうであつた)

しかし國木田君はその時分には、まだ小説を書いてゐなかつた。『ひとつ運試めしをやるかな』かう言つては、國木田君はよく腕をまくるやうにした。材料は澤山持つてゐるし、腕は鳴るし、一擧して文壇の奴等は蹴散して見せる!さういふ意氣込で私達は三十年の四月に日光の山寺へと揃つて出かけて行つたのである。

六

島崎君とは私は一番最初『文學界』の新年の會で逢つたと記憶してゐる。碌々原稿料も出さないから、せめて新年の會でもしやうと言ふので、それであの會を星野天知君が根岸の伊香保でしたのである。たしか二十九年の一月だと覺えてゐる。そこで私は始めて島崎君ばかりではなく、上田敏君にも戸川秋骨君にもその他の人々にも逢つたのである。それも僕一人だけだつたら、一體がすばりで、多勢のところになぞ出るのが嫌ひで有たから出席しなかつたのであらうが、柳田國男君が是非行けと言ふので、それで出かけて行つたのである。上田君は好顏の美少年で、ハイカラで、鷗外の飜譯は誤譯だらけだなどと言つて氣焔を吐いてゐたのをはつきりと覺えてゐる。馬場君にはその前に上富坂の川上君の許で逢つたが、元氣な、話好きな、いろいろな新しい知識に滿たされた人だと思つた。歸りは島崎君、馬場君などと一緒に池の端をぐるりと廻つて本郷の方へと出て來たことを今でも思ひ出すのである。

島崎君はその時分湯島の新花町の所謂大根畠の家にゐた。そこに私は二三度訪ねて行つて牛肉などを御馳走になつたことがあつた。平田禿木君も何でもその近所にゐた。

島崎君はそのすこし後で、『うたゝね』といふ小説を『新小説』に出した。ハイカラすぎて、當時の文壇には向かなかつたが、それでも君の後年をトするに足りるべき何物かがあつた。『めさまし草』の『雲中語』でもかなりに長く評した。縋るべき一握の藁すら持つてゐなかつた私も次第にそこに自分の坐るべき位置を發見した。さういふ人達と藻社の人達との比較などが次第に私の眼を明けた。今は文壇のことを何うの彼うのと言つてゐる時ではない。勉強しなければならない。飽まで勉強しなければならない。かういふ風に私は考へ始めた。そしてそれから十年の後やつとあの颱風のやうな自然主義の運動が始まつたのである。

新派劇の勃興

渥美清太郎

明治興隆期劇壇の產物として、特筆しなければならないのは「新派劇」といふ新らしい演劇が起つたことである。明治期も、その初めは、あはたゞしさと同時に新らしい物を創造する活氣があつて、劇壇も兎に角勢ひがよかつた。若々しい潑溂さがあつた。それが、この期へ來ると、生々したところがスツカリ無くなつてしまつた。國會設立の後を受けて、社會は猶多事であつたが、劇壇――歌舞伎劇は沈滯してしまつたのである。俳優からいへば、前期には、大奮闘をしてゐた九代目團十郎と五代目菊五郎も、この期へくると、最早名優の鑑定書を脊負つて、のんびりと納まつてしまつた。興行師からいへば、怪傑守田勘彌が、重なる失敗で再び起ち得ざるまでに墜落してしまつた。作者からいへば、河竹默阿彌が明治二十六年に死んでしまつて純歌舞伎劇の作者の跡が絶えた。芝居は開いてゐたが、何時でも古い狂言ばかりだ。團菊の古典劇は評判になつた。が若い人達は明治座で、竹柴其水の新脚本で孤軍奮闘してゐる左團次の方へ行くのだつた。左團次だけは、事實若々しい努力を見せてゐたが、それだけでは、堰きとめられた水を突き進められなかつた。劇壇は、濁り水のやうに澱みかけた。世間は、そろ〳〵その臭氣を感じ出した。

さういふ透を覗つて、飛び出して來たのが新派劇である。劇といへば歌舞伎より外になかつたところへ、突然新らしい劇が躍り出して來たのである。昔から變らないのは東京市民の珍らし物好きだ。新派劇は東京人の膳に上つた。堅くつて味はよく解らないが、一時は皆がられたのである。

尤も、最初は新派劇とはいはない。壯士芝居といふ名前だつた。書生芝居とも云はれてゐた。

その壯士芝居を初めて演じたのは、角藤定憲といふ、岡山縣の士族だつた。丁度自由民權論で世間の騷がしかつた時分だ。猫も杓子も、國會だの自由だのといつて騷いだ時代だ。角藤も、政界の下廻り、いはゆる壯士であつた。彼れは岡山から大阪へ來たとき、「吉備の夜櫻」といふ政治小說見たやうなものを書いて、太華堂といふ本屋から出版させたが、これが大分評判がよくつて賣れたので、今度はこれを芝居にして、それも自演をして、一儲けしようとかゝつた。そこで角藤は太華堂の主人と相談して、「吉備の夜櫻」を「豪膽の書生」と改題して七幕の脚本に仕組み、越後町の新町座といふ芝居で興行しようとした。座員といつては、角藤の友人二十名ばかりだつた。今の佐藤歲三はこの仲間であつた。ところが警察で許可してくれない。角藤は、いろ〳〵運動して見たが駄目なので、ガッカリしてゐるのを、氣の毒に思つて盡力してやつたのが、故中江篤介氏である。中江氏は當時、東雲新聞といふ新聞の主筆であつたので、その緣から府知事の建野鄕三氏を說いてやつて、やう〳〵認可の運びとなつた。後見は板垣退助伯といふのだから、堂々たるものだ。振附は、當時大阪での名優、中村宗十郎が當るといふ譯で、中々大がゝりなものだつたが、內容は本當の素人芝居、勿論藝なぞといふものではなく、見るに堪えないものながら、東雲と大阪朝日新聞が頻りに提灯を持ち、アーチを設へ、球燈を贈つて景氣を添へたので、大阪人は煙にまかれてみんな見に行つた。興行は大當りであつた。時は明治二十年十二月であつた。新派劇最初の芝居は、京都をはじめ、地方を打まはり始めた。

この眞似をしたのが、彼の川上音二郎である。

川上音二郎は博多の生れで、寺の小僧、學僕、演說師、新聞記者、俳優、と種々職業を變へた揚句が、浮世亭○○といふ名で寄席藝人になつてゐた。彼れは角藤の成功を見て、その模倣を志した。川上の野心は燃えるやうであつたのだ。最初彼れは「書生仁輪加」といふものを作つて、橫濱から東京へ押出したが、これは見事に失敗したので、一旦阪地へ

歸つて寄席藝人をしてゐる内に、同志を募つて、今度は「書生芝居」を始めたのである。初興行は明治二十四年の二月で、場所は堺の卯の日座であつた。金泉丑太郎、青柳捨三郎、藤澤淺次郎等が座員の幹部といふ譯であつた。「經國美談」と「板垣君遭難實記」とが、その最初の狂言であつた。前者は云ふまでもない、矢野龍溪氏の小説を脚色したもので、後者は川上が寄席藝人の時代に、度々口演した種である。舞臺協會が板垣伯の事蹟を上演しようとして、中止をしなければならなかつたのが、ツイ昨年末の出來事である。明治二十四年、書生芝居の出來た時代には同じ題材の狂言を興行してゐたのである。思ひ合せると妙な氣がする。

この興行は、角藤が旗揚の時とは大違ひで、非常に失敗したが、川上は中中挫折しない。却つて勇氣を振ひ起し、横濱を足場にして、東京行を企てたのである。素人書生の集まりであるこの一座を、では引受けませうといふ興行師は流石に東京には無かつたのだが、どこをどう工風したか、淺草鳥越の中村座で開演する事になつた。中村座といへば、江戸劇場草分けの由緒深い劇場である。さういふ劇場が、この新來の書生芝居の爲に、舞臺を開放したといふのは不思議な話であるが、中村座は當時頗る振はず、掛ける物に困つてゐたのと、一つは川上の熱誠が、劇場當事者を動かしたの



寄席藝人時代川上の繪畫

で、この大劇場開演が出來たのだと思はれる。第一回の狂言は例の「板垣伯遭難實記」であつた。明治二十四年六月の事だ。

明治の狂言に、明治の人間が現はれて、明治の風俗のまゝで芝居をするといふのも、默阿彌が既に數度試みた事ではあつたが、様式が全然歌舞伎の體裁を踏襲した爲か、失敗に終つたまゝ、いはゆる現代劇といつたやうなものは、全然見る事は出來なかつた。その透を見て出て來た書生芝居である。主腦は權謀術數家の川上である。舞臺では、歌舞伎劇の穴を行くやうな事ばかりをやつた。宣傳は中々大がゝりな事をやつた。見物は釣られて集まつた。素人丸出しの一座の藝は、如何はしいものではあつたが、多分の愛嬌があつた。それに「オツペケペー」といふ餘興的な演藝を川上がやつた。近八へ出てくる御注進のやうな姿をして、日の丸の扇を開いて、オツペケペー節といふものを唄つたのである。これは川上が寄席藝人時代に、高座で賣り物にしてゐた唄で、大體こんなものだ。

お妾權妻に、芝居を見せるは不開化だ、勸善懲惡わからない、色氣のさこころに目をさめて、大事な夫を袖にする、浮氣なするのは必定だ、お爲にならないおよしなさい、國會開けた今日に、役者にのろけちやゐられない、日本を大事に守りなさい、眉毛の無いのがお好きなら、かつたいを色に持ちなんせ、目玉をむくのがお好なら、狸と添寢をするがよい、オツペケペー、オツペケペツポーペツポツポー。

人をくつた文句であるが、このオツペケペーが非常な人氣になつて、錦繪にまで出るほどで、相當に大入りをしめ、二回三回と狂言を替へて、依田學海氏の「双葉の楠」や、福地櫻痴氏の「平野次郎」なぞを出した。書生芝居第一回の興行は、先づ成功に終つたのである。

同じ年の十一月、淺草の吾妻座を濟美館と改めて、爰に別派の書生芝居が起つた。しかも男女合同劇といふのだ。「從來我國の演劇たる、鄙俚のみ、淫褻のみ、以て匹夫匹婦の歡心を買ふべし、未だ以て大人君子の耳目に入らさるなし」

といふ宣言と共に、ひどく世間を驚かしたが、女優といつても、芳町の藝者米八が、早替りに過ぎないのだつた。たゞ此方は、依田學海氏が指導の任に當つて、善かれ惡かれ同氏が日頃の理想を實現しやうとしたものだけに、多少の藝術的良心は加味されてゐた。一座の中心は今の伊井蓉峰に水野好美、それと米坡で、狂言は學海翁の高尚主義を具體化したやうな「政黨美談淑女の操」と、二番目が「名大瀧怨の短銃」といふ、今日の劍劇じみた脚本で、女優米坡がいはゆる淑女の露子を演じたのだ。今の目で見ると、隨分暢氣な芝居ではあるが、川上の芝居の方は、ザンギリ物へチョボを入れるといふ式であつたのに、此方では合ひ方さへ使はない行き方であつただけでも、一座の意氣ごみが現はれる。この一座も元より素人揃ひではあつたが比較的その新らしい試みが成功して相應な入りを占めた。



寄席藝人時代川上の繪葉

斯うして、川上の一座も、伊井の一座も、第一回は當つた。が翌年になつて川上が市村座へ乘出し、伊井が芝の盛元座で二三回演じ續け出してからは、興行成績は直ぐに惡くなつてしまつた。それは當然の話しで、單に新奇といふだけが取得であつたのだから、長續きのする譯はない。間々に地方廻りをして、舞臺は段々に馴れて來たが、芝居は反對に客を落して行つた。そこへ、名古屋から、山口定雄の一座が東上して、

この間へ割り込んだ。山口はもと片岡我若といふ舊派の俳優であつたが、書生芝居が當つたのを見て自分もこれに倣ひ、靑木千八郎や津坂幸一郎を語らつて、いきなり東京へ押出し、市村座を借りて「明治裁判辯護の卷」といふのをやつたが、どうやら失敗もせずに終つたので勢ひづき、後には新富座へも出て、新聞の續き物を脚色する事を始め、また電氣仕掛けといふケレンを度々やつて、低級な見物を呼んだ。何といつても彼れは舊派出だけに、腕もシッカリしてゐるし、女形も行けたので、强味を持つてゐたのである。

いま大阪にゐる福井茂兵衛、これもこの頃、川上から脫退して自ら一座を作り、時折小劇場へ現はれては興行してゐた。書生芝居の團體は、斯うして四つも出來たのだつた。その中で、後世にも殘る當り狂言は、明治二十七年の二月に淺草座で、川上一座の演じた「又意外」であつた。佛蘭西の探偵種へ、「ベルス」を加へたやうな飜案物で、脚色者は岩崎蕣花氏であつたが、簡單で氣の利いた大道具と、奇拔な筋とが評判になつて、これは非常に成功した。惡家令を勤めた高田實や、外國人の宣敎師をやつた小織桂一郎なぞは事實中々巧かつた。

この「又意外」で書生芝居が、實質的に世間に認められた矢先へ、幸運にも降つて湧いたのが日淸戰爭であつた。目先のきく川上は、早速これを脚色して上場した。同年九月であつた。新聞記者比良田鐵哉（川上音二郎）新聞記者水澤恭二（藤澤淺次郎）岸田海軍少將（小織桂一郎）植島陸軍少將（水野好美）李鴻章（高田實）副將洪炳集（柴田善太郎）脇田陸軍中佐（伊井蓉峰）副將道武慣（中野信近）初崎海軍少將（深澤恒造）といふ物々しい役割であるが內容は新聞種を無造作に綴り合したに過ぎなかつた。それでも、時が時、事件が事件、中心は書生芝居に持つてこいの戰爭だから、大當りに當つて數十日を打ち續け、「書生芝居は活潑でいゝ」といふ評判を取つて、後年新派劇隆盛の土臺をこの時築いたのである。宣傳に巧みな川上は、この興行が終ると同時に、演劇材料蒐集の爲めと號して滿韓へ出發し、歸ると直ぐに市村座で「川上音二郎戰地見聞日記」と大袈裟な名題を掲げ盖を明け、川上は自ら戰地視察俳優武田

装に扮した。脚本は藤澤の脚色で、可成りヤツツケなものであつたが、前の煽りで今度も又大入りを取つた。同じ月に歌舞伎座でも、團十郎の大鳥公使に菊五郎の原田重吉といふ役割で、戦争劇を出したのだが此方は失敗に終つてしまつた。それが又、川上の名聲を高める種になつた。さうして翌二十八年の五月には、歌舞伎座へまで出演する事になつたのだ。

當時の歌舞伎座は、日本一の大劇場であつた。いかに川上が戦争劇で當てたとて、この檜舞臺へ乗り出さうとは誰しも思つてゐなかつたのが、



新派の當時の番附見本

突然「威海衛陥落」と「因果燈籠」の看板が上がつたので、世間では愕りしたのである。流石は川上、よくも交渉を纏めたものだと評判になつたが、田村成義氏の續々歌舞伎年代記を見ると、「少しく見込を立てし事ありて、茶屋の山下清兵衛を介し鳥森の湖月に於て、初めて川上音二郎と面會をとげ、歌舞伎座にて戦争芝居を演じては如何と試みしところ、覇氣滿々たる彼れは、得意の態度を以て小生の勸めを容れ、談判忽ち調ひて、さてこその、威海衛と因果燈籠にて開場の運びをつけしが、市中の取沙汰は、歌舞伎座へ川上が出るのは、蒔繪の重箱へ西

洋料理のライスカレーを容れたる如しなど、さま〳〵の評判なりしかど、毎日賣切れざる日もなく、兎に角豫想以上の好況にて、無比の大入をなしたり」と書いてある樣子では、田村氏の方から歌舞伎座への出演を、勸誘したものらしい。この川上は渡りに船で、早速話しに乘つた次第である。この興行は記事通りに、當り振舞をする程の成功を占めたが、この替りの「誤裁判」と「大江山」は、甚だしい失敗で、流石の川上も這々の體で逃げ出した。前回は矢張り戰爭劇が利いたのである。戰爭劇を賣り物の一座が、まじめな芝居をして、二度目にしくじつてしまつたのである。丁度今日の劍劇が、なまじ大眞面目な狂言を出すと、却つて入りの薄いと同じことである。

川上はこの失敗に驚いて、早速一座を纏めて地方へ逃げ出したが、惡い時には惡い事が重なるもので、一座が信州の松本へ赴いて興行の最中、川上と座員との間に些細な事から大衝突が起り、大幹部たる高田實、岩尾慶三郎、小織桂一郎等は連袂脱退して東京へ歸つてしまつた。川上は流石に弱つたが、それでも屈せず東京へ舞ひ戻り、藤澤や中野だけで春木座へ立て籠り、須藤南翠氏の「盜賊世界」を出して大努力を見せた。一方の脱退連は、丁度地方から乘り込んで來た、新派の元祖角藤定憲の一座と合併して、市村座へ旗をひるがへし、「紳士の賊」といふ同じやうな狂言を出して川上と對抗した。狂言は飜案物で、岩崎舜花の脚色になり、中々面白くは出來てゐたが、その中に新聞社の實況を見せた幕があつて、しかも社長はじめ記者一同、殘らず盜賊や詐欺師だといふ筋だつたので、スッカリ新聞記者の反感を買つてしまひ、各新聞とも筆を揃へて、散々に罵つたので、芝居は滅茶々々になつて、みじめな不入りのまゝで打上げてしまつた。川上の方は相應に當つた。脱退組の一座は憤慨して、今度は「二人狂」といふ新作を出し、これでやう〳〵景氣を挽回したのであつた。

これから先の書生芝居は、四分五裂で、大阪へ走るものもあれば、小劇場へ立籠るものもあり、各團體を轉々して歩いてゐるものもあつて、群雄割據の狀態となり、主として新聞種の讀物を脚色上場しながら、格別の進歩もせずに、ダ

ラ／＼と月を追つて行つたのである。その中でも流石に川上は、苦しい中に資本主を探し當てゝ、神田の三崎町へ川上座といふ、自分持ちの劇場を建築し、明治二十九年の六月に、華々しく開業式を擧げたのである。俳優としては矢張り川上が主腦者に立ち、あとは藤澤中野柴田に石田信夫や河村昶なぞで、第一回の狂言が「日本娘」といふ變なもの、その外、毎回飜案物の、目先の變つた狂言で、見物を呼ぶ政策を取つたが、時には森田思軒氏の譯した「瞽係者」を脚色したり、紅葉山人の「冷熱」を上場したこともある。



當時の新派の番附見本

この「冷熱」が文學者の創作物を脚色した最初のものといつてもいゝので、兎に角川上は絶えず新らしい所に目を附けながら進んで來たが、併し戰爭劇の時代ほど、もう興行的に成功は得られなくなつて來た。

明治三十年八月、再び歌舞伎座の舞臺を借りて、川上はその頃での書生芝居大合同劇を開演した。狂言は「又意外」で、定めし大當りと思ひきや、僅か數年の違ひながら、見物の眼が進んで來たこの時では、書生芝居の獨參湯といはれたこの狂言も薩張り利目がなく、評判も惡く入りも惡いといふ結果を得て、川上は物質的にも精神的にも、非

當た痛手を受おり、少々自暴自棄になつたのと、一つは又宣傳の種として、南洋探検とかいふ狂人じみた事を云ひ出し妻の貞奴と姪のおしげと三人で、短艇に乘つて東京灣へ漕ぎ出した。無論途中で中止されはしたが、これから間もなく川上は洋行をする事になつたのである。

この川上の失敗で、新派劇の第一期が、終つたものと見る事が出來る。元々内容の空虚なものを、一時無暗と祭り上げてしまつたのは、全く珍らし物好きの東京人の仕業で、その淺薄さが解つてくると、今度は見向きもしない冷淡さに變つてしまふのである。勿論、書生芝居は、この後もズツと續いたが、それは可成り不健全な狀態であつた。新派劇が新らしい領域を見出して、新らしい觀客を吸收し始めたのは、第二期も餘程進んでから後のことである。

さうして、書生芝居又は壯士芝居で通つてゐたものが、新派劇といふ名稱で一班に呼ばれるやうになつたのも、この第二期以後のことである。

鷗外初期著書解題

神代種亮

はしがき

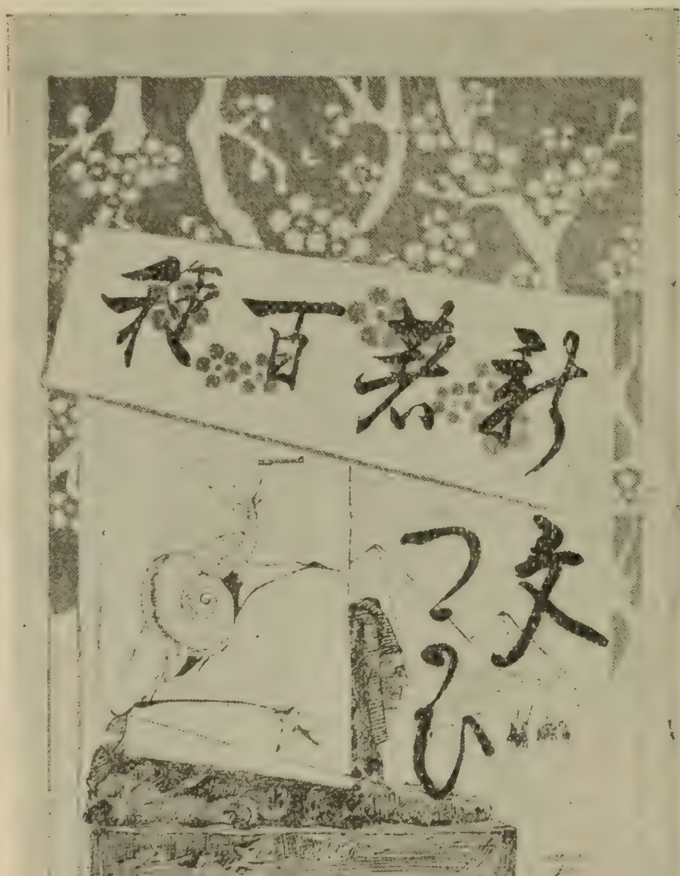
鷗外漁史の著書は、既に絕版となれるもの十八九にして、今是等を悉く求めむこと容易ならず。中には東京の大圖書

藏にも收藏せざるものあり。且つ又同一の書と雖も、版に隨つて內容に多少の異同あり。仍りて其の主もなるを簡單に解說せむ。

附言。歐外全集の底本の如何なるものなりやは未だ聞くを得ずと雖も、著者の文字に關する一面を徹底的に究めむとせば必ずや原版本に溯らざるを得ざること言ふを須ゐず。

「文つかひ」

「新著百種」第十二號にして、漁史の最初の著書とも觀るべきものたり。明治二十四年一月二十八日の出版にして、奧附面に據れば、發行者は中根安隆、發賣所は吉岡書籍店なり。



但し、中根安隆は名義上の發行人に過ぎず。吉岡書籍店の主人は卽ち理學士吉岡哲太郎なり。

此の書は「文つかひ」（五十六丁）と露伴子の「聖天樣」（三十丁）とを合綴せるもの。表紙は木版刷にて、ピラミッド及びスフインクスを現はせるものの上に、留針にて蝸牛の繪を附けたる趣向なり。挿畫一葉あり。日本の陸軍將校が腰掛ける西洋婦人と對して椅子に身を凭せて立ちゐる圖にして、蓋し本文の意に從つて描きしものなり。其の軍人が作者面影に髣髴たることは當時知人の間に傳へられたりと。

巻首に萩の舍主人の手翰を木刻せるものを載す。

新年早々戀の病とかいふやうなものにさりつかれ闇々と日をおくり居候ところ戀しき人よりの文いつかひさろ手もおそしと拜見の御文章拜見候たびに嬉しき事のみ來くそのさま戀ひうかれたる戀人にあひたるにことならず何故さ問ひ給ふなそな誰かしらむ戀ふるも戀ふる故に戀ふるさこそきけ嫌さすがの病者も鷄鷄の如くに不思フキ出し申候全篇おもしろく明治二十四年の新好文字ならん但し小生一箇人の考にはあらざろべし兄ふもまたさならん早々頓首

一月十四日

落合直文



森歐外先生
侍史

「文つかひ」は、萩の舍主人の手翰よりも推せらるゝ如く、稿本を直ちに上木せるものなり。旁訓あるは著者の志にあらざりしものならむ。

再版本。なし。「新著百種」中にて重刷せるものは「色懺悔」と「風流佛」の外見當らず。

「美奈和集」（創作三篇、飜譯十六篇、附録譯詩集おもかげ）



初版本の一。明治二十五年七月二日、春陽堂發行。菊判一二丁本綴ぢ(カヾリ)紙表紙、角背なり。檢印は圓形にして、小篆にて「林太郎」とある實印なり。表紙は淡緑色にして、天地の鷗と波だけが白抜きにて、文字も模様もセピヤ色なり。表紙の構造は、數枚の紙を貼り合せたるものにして强靱なり。奥附に定價なし。背には「水沫集、鷗外漁史著」とあり。裏表紙中央に圓く「千朶山房藏梓」とあり。扉は白紙なり。表紙の文字と扉の文字とは同一筆蹟なり。

内容は創作飜譯共に一たび公表せられたるもののみなれども、殊に創作（舞姬、文つかひ、うたかたの記）に於ては文字の訂正少からず。

初版本の二。初版本の刷本にて作れるものにて、用紙は同一なり。丸背、ボール厚表紙、綴ぢなり。模様も文字も一に同じ。たゞ背に、書にて「再版」とあり、扉に明朝活字にて「版」と入れあり。往々檢印なきものもあり。

初版本の三。奥附は初版本と同一なり。本文用紙また然り。初版本の刷本にて作れるもの。即ち初版の刷本を三回に分ちて製本せるなり。裝幀全く別樣なり。丸背、假綴ぢにして、背には淡クリイム色のクロースを用ゐ、河村墨稼の筆にて「美奈和集、再版、鷗外漁史著」と青色もて印せり。表紙はボール入りにして、黑色の紙に銀にて書名を出だせり。但し初版本の一、二には斜にあるものが、水平になり居れり。扉は青色の紙にして、隷書活字にて「第貳版」と入れあり。

再版本。奥附に「明治二十七年一月五日再版發行」とあり。表紙、裝幀は初版本の三に同じ。（たゞ背及び扉にある「再版」「第貳版」の字體は全く同一なりや否や記憶せず。）定價金六十錢なり。

訂正再版本。明治三十九年五月二日發行にして、題號を「水沫集」と更め、奥附には「訂正再版」とあり。草色クロース表紙なり。卷首に肖像及び「改訂水沫集序」を載す。目次中の人名は片假名を羅馬字に改めあり。九版まで發行せり。本文には多少の改訂あり。二〇七丁「文つかひ」に一行を脱して印刷せる如き甚だ惜むべし。印刷不良。

縮刷本。大正五年八月十三日發行にして、前四者とは全く形を異にす。卷首に新たに「丙辰夏日校水沫集感觸有作」と題する二首の七絕を載す。「訂正再版本」を底本として覆刻せるものなるが、字句に多少の修正あり。十二版まで發行せり。

「つきくさ」　（論文集）

「美奈和集」と同じく春陽堂の出版にして、明治二十九年十二月十八日發行なり。本綴ぢ、角背にして、表紙の構造は「美奈和集」初版本と同じ。表紙のつき草は木版色刷なり。九九六の大冊なり。初め遲々として賣行きしが遂に品切となれり。然るに春陽堂より之が再版を申出づること頻りなるが、著者の許す所とならず、初版にて絶版となれり。蓋し書中逍遙博士との論戰文多きを以て、坪内博士に對して再版を差控へられたるなりといふ。

「かげくさ」
（飜譯及論文集）

明治三十年五月二十八日春陽堂發行なり。製本の體裁前二



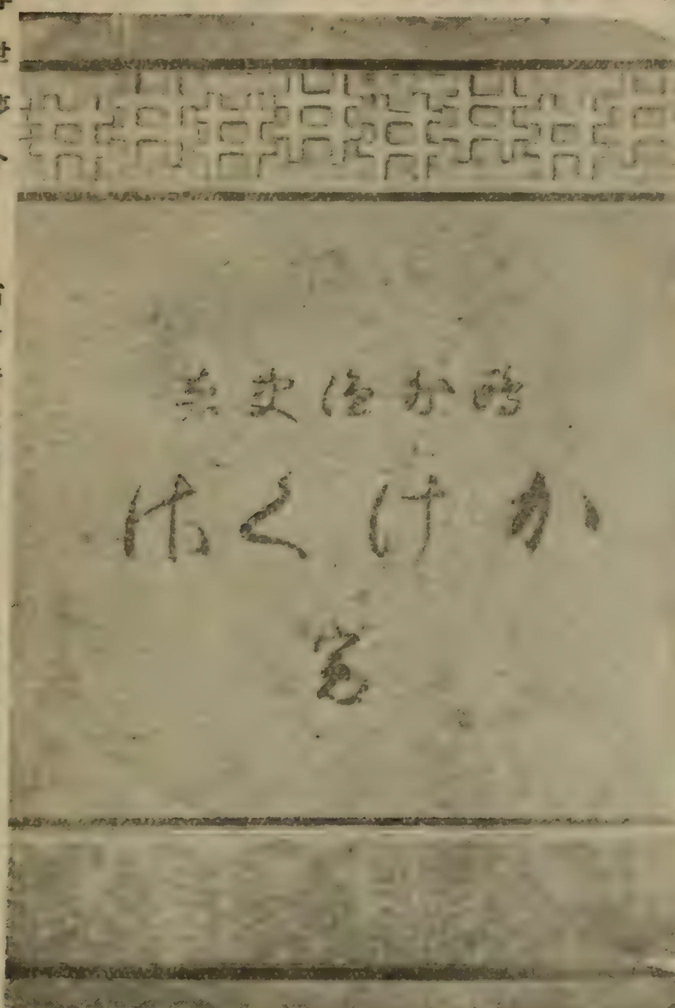
書に同じ。表紙下段の模様はシノブ草なり。石版刷にして、地は濃綠色なり。本文七二六丁なり。檢印は「つきくさ」のものと同一にして、MRの合字なり。

訂正再版本。明治四十四年九月十二日發行にして、本文に僅少の訂正あり。版型四六なれども、舊紙型よりの鉛版に三方輪廓を附して印刷せるものなり。角背、背クロース（青色）厚表紙なり。

註

（1）「新著百種」の篇名著者發行年月次の如し。何れも短篇小説なり。

號	著者	題名	發行
第一號	紅葉山人	二人比久尼色懺悔	明治二十二年四月
第二號	竹の舍	掘出し物	明治二十二年五月
	（第一號に對する雜誌新聞の批評を附載す）		
第三號	思案外史	乙女心	明治二十二年六月
	紅葉山人	風雅娘	
第四號	漣山人	妹背貝	明治廿二年八月
第五號	蝸牛露伴	風流佛	明治廿二年九月
第六號	柳浪子	殘菊	明治廿二年十月
第七號	三昧道人	松花録	明治廿二年十二月
第八號	XYZ氏	芳李	明治廿三年二月
	依田百川	小野篁	
第九號	眉山人	墨染櫻	明治廿三年六月
第十號	渡邊乙羽	つゆ小袖	明治廿三年十月
第十一號	虚心亭	妾薄命	明治廿三年十二月
號外	紅葉山人	新桃花扇	明治廿三年十二月
		巴波川	
第十二號	鷗外漁史	文づかひ	明治廿四年一月
	露伴子	聖天様	
第十三號	九華	山吹塚	明治廿四年二月
第十四號	浮世夢介	石倉新五左衛門	明治二十四年四月
第十五號	二十三階堂	長者鑑	明治二十四年六月
第十六號	仰天子	新世帶	明治二十四年七月



第十七號　中村花痩　離れ鴦
　　　　　匿名氏　朝顔
　　　　　漣山人　ばアや
　　　　　麗水　碧流
　　　　　　　　明治二十四年八月

（以下續出せざりしものの如し。）

(2) 吉岡哲太郎は東京の人、明治十六年東京大學理科の卒業生にして、專攻は化學科なりき。此の人の出版史上文學史上の功績に關しては、內田魯庵翁の「思ひ出す人々」（六二—六三頁）に詳かなり。

(3) 「美奈和集」初版の寫眞は、予の所藏する有島武郎氏舊藏のものにして、綴絲は後に有島氏の附けたるものなり。

(4) 「美奈和集」の發刊年月及び體裁に就きて、「一まとめにされて世に公にされたのは、たしか明治二十七八年の頃だと思ふがその黃がゝつた、一枚々々切つて讀む新式の製本はその內容の新しいのに伴つてゐた」と言へる田山花袋氏の言は、記憶の相違なるべし。鷗外漁史の著書にはアンカットのもの一も無し。又アンカットの文學書の出版さるゝに至りしは遙か後の事に屬す。

(5) 「美奈和集」の賣行きに就きて、「發行部數五百に超えず。」と三文字屋金平氏が「爲文學者經」中に言へるも、その誤算なること更めて證するに及ばざるべし。

(6) 「鷗外全集」第十五卷に附載されある小島政二郎氏の解說中、「美奈和集」初版本の裝幀を長原止水ならむと推せるは誤りならむ。又同氏の再版本に關する說明も少しく足らざる所あるが如し。

明治文壇雜事二三

木村毅

Passion の譯字

明治三十七年九月一日發行の文藝倶樂部に『好戰論者と不好戰論者』なる題下に上田敏の談話筆記が載つてゐる。その中にかゝる一節がある。

『また情熱と云ふ文字、これは北村透谷と云ふ人が、パッションと云ふ字を譯すに、感情でもいけず、熱情でも行けぬと云ふので、逆さに情熱と云ふ字を使つた。これが始めで、……また蝦茶式部と云ふ熟語は山岸荷葉君が始めたのだとか聞きました……』

山岸荷葉氏は、今で言へば久保田万太郎氏と言ふやうな風趣ある下町小説を書いた人で、私も少年の時に一讀した『紺暖簾』と云ふ作の如きは今もなほ忘れ難いものがある。だから明治卅年代に於て急に社會的視聽を聳だたしめた女學生の異名蝦茶式部が、荷葉氏によつて作られた熟字である事は、吾等の聊か意外とする所である。それに反して、情熱の譯字が透谷に依つて作られた事は——情熱そのものを生き、短かい全生涯が直ちに情熱の結晶であり、象徴であつたと言つてもよい透谷の創造語として甚だふさはしきを思はさるを得ない。

獨歩の懸賞小說

これはかつて、私が匿名で、ある雜誌に書いた事があるのだが、私が發見した最も珍材料であるのに、その雜誌は餘り多く人の眼に觸れる種類のものでなかつたから、玆に再錄しておくであらう。

明治三十三年の「太陽」にＳＳと云ふ匿名で、左の如き投書が載つた。

「太陽記者足下、藝術家の所謂理想主義なるものは悉く之を了せりとせむ。唯々予輩科學者の眼より見れば、幾多の馬鹿々々しき誤謬は、常に理想主義の名によりて行はれつつあり、是をしも尙ほ藝術の特權と許し去るべきか。

上野櫻ヶ岡に於ける西鄕像の側にある犬の四脚は「パラレログラム」に立てり。四脚動物の歩行が、常に梯行に於てすることは、三尺の童子も知る所にあらずや。彫刻競技會に遊馬の縮型あり、其中の多くの馬も亦「パラレログラム」的に走れり眞に噴飯すべし。

八月中旬の萬朝報懸賞小說「無究」と題するものの中に、烏が天文臺の雨量計中に、水浴びすとの意味を書せり。苟くも雨量計の構造を知れるものは、是の如き記事を讀みて抱腹絕倒せざるを得ず。――下略――」

斯る問題に對しては直ちに一言なかるべからざる樗牛は直ちに「太陽」の時評欄で左の如く言つた。

「藝術家の科學的知識に關するＳＳ生の意見は、吾人大體に於て是を是認すべし。四脚獸が平行四邊形的に歩行し、烏が雨量計に水浴びし、楠正成がアラビヤ馬に乘るが如きは、眞に笑ふべし。但し所謂理想主義と所謂寫實主義との實際上の界限如何に至りては、問題はしかく簡單ならず。」

以上は「樗牛全集」第二卷に收めてあるから誰れしも讀んで知る所であらうが、この「無究」と題する懸賞小說の無名の投書家が國木田獨歩であつた事に氣づいた者は少なからう。幸ひに此れは後に「獨歩全集」に收錄せられてゐるから、その問題になつた「烏が雨量計にて水を浴びる」一項を左に拔載する。これは書簡體の小說である。

「日々氣象臺にて風伯雨師の行方のみ氣にし玉ふこと御役目とは申す條、近頃御苦勞の儀に御座候。然るに先日來いたづらなる鳥あり。君が雨量を測り玉ふ水盤にて恣に行水をつかひ其事すでに數度に及びしとか。其つど君は「また行水されちやつたア」と鳥が飛び行く吹上御苑の杜を望んで口惜やしさうに叫び玉ひしといふ。此事も君が手紙には隱蔽しあれど同じく松村の報告に承知せり。鳥の飛び去り際、心地よげに翼をふるひて何と鳴きしやら、そこまでは判然せず。」

明治三十三年と言へば獨歩が三十歳の時である。彼はその前年治子夫人を迎へたが、その翌年五月は職を失ひ、試みに年表に依つてみるも『家計漸く窮迫を極む』とある。そして窮餘の窮策に萬朝の懸賞小說に應募して、たしか前記の『無窮』と『驟雨』の二篇が當選した。この意外の所得を喜んで、旅から家に送つた手紙を『獨歩書翰』で讀んだ記憶がある。

それにしても倨傲だつた樗牛は、自分の論文の一小材料となつた小說の投書家が獨歩なる事には氣付かず、況んや彼の沒後明治終末期の文壇に獨歩の名が最も輝やかしきものの一つとなる事などは夢想だもしてゐなかつたに違ひない。

トルストイと德富蘇峯

トルストイが初めて知つた日本人は恐らく小西增太郎氏であつたらう。併しヤースナヤポリヤーナ村莊の最初の巡禮客は惟ふに德富蘇峰氏であつたに違ひない。當時の事は蘆花氏著『トルストイ』（四〇頁）の中に挿入されてゐる蘇峰氏の『トルストイ翁を訪ふ』の中に詳しい。

『露國旅行中にて、第一の快感は、トルストイ翁の村莊に、一日を暮したることぞかし　いでやその概略を、鄕國の朋友に物語らむ。明治二十九年十月八日午前七時五十分頃、モスコー、クルスク間の汽車はサセツカの小停車場に來りぬ……』と冒頭にある事は誰しも知つてゐる。

ところで蘇峰氏のトルストイ訪問は、トルストイにはどんな反應を與へたであらうか。私は彼の手紙や手記を漁つてゐて、これは蘇峰氏の事を書いたのだらうと思はれる記事に三度位ぶつつかつた。今は手許にその一つしかないが、英譯によつてその數行を拔いて見やう。Maude の英譯した "Essays and Letters" の "To Peter Verigin, The Doukhobor Leader ——II"(p. 172) に左の如き一節がある。

"......I Come into touch with other men ——as happened this autumn with a Hindu who fully shares our Christian outlook(and who has sent me an English book by a lady, his Compatriot, explaining the teachings of the Brahmans in conformity With the essentials of Christs teachings), and again with some Japs Who profess and teach a quite Christian morality, and two of whom visited me a few days ago." "Two of Japs"

此の最後の行『數日前に二人の日本人が私を訪れて來た』とあるのが少くとも蘇峰氏への言及であると見ていゝ二つの理由がある。卽ちこの手紙は一八九六年十月十四日附であるが、この年は恰もわが明治二十九年に當り、そして蘇峰氏のトルストイ訪問は前述の如く實にその年の十月八日である。そして氏が深井英吾氏と二人で同行された事は、two of Japs の私の推定が愈々動かし難い事を語るものではないか。

臨川の杜翁論、橘香の批評

中澤臨川の『トルストイ論』と言へば、一度は島崎藤村氏から外國語に飜譯しても耻しくない名著と推稱されたが、後にロマン・ローランの燒き直しである事が分つて、二重に文壇の物議を招いた。インテリゲンチヤをインテセンチヤと讀んであつた事を記憶する。

明治三十四年、今の『新潮』の前身『新聲』の増刊に『桂花集』と言つて全部懸賞文からなる冊子の出た事がある。

今これを繙いてみると、論文の秀逸に『トルストイ伯を論ず』と言ふのが當選してゐて、中澤臨川なる署名のあるのを發見する。彼がこれを草したるは思ふに中學生の頃であつたらうから、してみると彼のトルストイも隨分久しいものであつた事を感ぜざるを得ない。選評者の評にかうある。

『トルストイ伯を論ずの一文、文章暢達にして再讀の價値ありと雖も、眞面目に人物評論の體を具へたるものにあらず。只、伯を讃する頌德文とも言ふ可きか。伯を世に紹介したる最初のものは、蘆花氏のトルストイ伯也。本篇、伯の性行を云ふところ多く蘆花氏のと酷似せり、而かも末段の結論甚だ輕弱也。人物評論の斷案としては、首肯し難き點ある也。』

文體から察するに、今の新潮社主、當時の佐藤橘香氏の筆であらう。氏は高須梅溪、奥村梅皐の二氏と並んで、新聲紙上の三羽烏の一つであり、且つその經營者だつたのである。

大西操山の社會主義觀

社會主義の實現が最早時機の問題であることは、一般常識となり終つたが、茲まで到達するまでに明治大正の思想界は如何に險艱の行路を辿つて來たことであらう。

中にあつて私が常に、その高論と卓識とに敬服せざるを得ないのは大西操山である。高山樗牛は明治三十年に於て、社會主義を一個の夢想と一蹴し去り、島村抱月は明治の四十年代になつて、社會主義に多くの同情を寄せながらもなほ文藝領域の事で實行には遠い事ではないかと言つてゐるが、獨り大西操山は明治二十九年十一月の六合雜誌に『社會主義の必要』なる論文を掲載して

『予輩は現社會に社會主義を唱ふるの必要ある事に眼を覆ふ能はず、而して宗教は由來社會主義と親しかるべき筈のものなりと考ふ。予輩は宗教を說く者が今一層大膽に平等主義を主張せむことを希はずばあらず』

と結論してゐる。

口吻の宗教的社會主義に類するものあるは彼が教養と當時の時勢との然らしめたもので、この論文を精讀すれば、彼の社會主義に對する理解はかなり正しかつた事が分る。彼は決して單なる書齋の哲學者、象牙の塔中の文藝批評家だけの人ではなかつた。

然るに明治社會主義史を說く者が大西操山の名前に一顧の注意をも拂つてゐないのは私を悲しませる。

明治文學に現はれたフェミニズム

本間久雄

最近代の社會問題又は思想問題の中の重要な一面であるフェミニズムの立場から明治文學を觀察することは、可なり興味あることである。文學は、いふ迄もなく時代の反映なのだから、明治文學を年代的に研究資料として考察するときにはわが國のフェミニズム運動が、いかやうなすがたを取つて、その時代々々に現れたかゞ自ら明かになるわけである。私は、さういふ立場から三年ばかり前に、今は廢刊になつてゐる某誌に、明治以後の婦人思想の變遷を連載したことがあつた。（不完全なものではあつたが）以下は、その一節を、多少の訂正を施して、轉載したものである。フェミニズムといふことに興味を寄せられる方の何等かの參考になれば幸ひである。

一、歐化主義時代の女性

――『雪中梅』の女主人公――

明治二十年前後は、明治文化史上の所謂歐化主義の時代でもあり、且つ、文壇の上では政治小說の全盛期であつた。

末廣鐵腸の『雪中梅』『花間鶯』や、東海散史の『佳人の奇遇』や須藤南翠の『新粧の佳人』などは、其の當時非常な勢ひで讀まれたものだと傳へられてゐる。

これらの作は、今日から見て、必ずしも藝術品として高級なものではない。いづれも所謂傾向小說で、作中の人物を借りて著者が日頃懷抱してゐる政治上の理想なり抱負なりを吐露したものであつて、その理想にかなはない人物は、極端に惡しざまに扱はれてゐる一方には、その理想にかなつた作中のヒーローなりヒロインなりは極端に理想化されて祭り上げられてゐる。つまり、德川時代の善玉惡玉の小說と餘り違はないのである。しかし文化史的に見ると、これらの作は可なりに面白い。といふのは、その時代の風俗なり、習慣なり、又一般民衆の好尙なり、傾向なりがそこによく描かれてゐるからである。卽ち明治文化史上の歐化主義時代の世相の反映として見て、これらの作には可なりの興味があるのである。

この文化史的立場から見て、それらの作に描かれた婦人にはどういふ特色があつたか。尤もこれらの作は何れも政治小說であるところから、そこに描かれた婦人にも自ら政治的色彩が色濃く出てゐるわけであり、從つてこれらの婦人を以て、直ちにその當時一般の實際社會の婦人そのものゝ描寫といふことは無論出來ない。しかし、少くもその頃の社會の一部――政治熱に浮かされてゐた社會の一部の要望を、それらの婦人は具體化したものと見ることが出來るのである。そのことをここで少しばかり述べるために末廣鐵腸氏の『雪中梅』『花間鶯』の二篇を引合に出したいと思ふ。

『雪中梅』は前後二卷に分れ、前卷は明治十九年の七月に、後卷は同十月に公にされたものであるが、非常な好評を博したところから作者は引つゞいて翌二十年にその後編の『花間鶯』第一卷と第二卷を、又その翌々年にその三卷を公けにしてゐる。つまり『雪中梅』『花間鶯』前後五卷で一篇の小說を形つてゐるのである。

この二書は明治一百七十三年三月三日の國會の祝日に、上野鶯谷からその百年前、明治二十三年の國會開設前後に國家のために盡して鶯溪といふ人物及び妻の古碑が發見されたといふことから稿を起して、その鶯溪といふ人を描いて、今は上野博物館に保存してあるといふ二書『雪中梅』『花間鶯』を寫し取つたものだと斷つてある。

即ち著者は明治十九年に明治百七十三年の日本を豫想し、その豫想した日本から、明治十八九年頃の社會を回顧するといふ極めて廻りくどい構想を取つたのである。著者は又、この書のはしがきの中で、「よく人情を寫し、明治廿三年の政治社會を眼前に見る樣で、名士賢女が種々の艱難を忍び、國會の設立に盡力するところは時代の違ふ今日の人（明治百七十年代の人）にまで感動を與へると云つてゐるが、今日の吾々が著者が云つてゐるほどの感動をこの作から受けるか否かは別として、とにかく其の時代の一潮流の描寫として、可なりの興味を與へるのは事實である。

この作の筋も、可なりに廻りくどく、複雜で、こゝに簡單に傳へることは却々困難であるが、極くその骨組みだけを左に述べて見よう。

ある西國生れの國野基といふ青年が政治家となることを志して上京し、故あつて深谷某と僞名して苦學をしてゐるうちに富永正左衛門といふ人の書生となる。富永は國野の有爲の人物であるのを見込んで故鄕の九州に置いてある妻と娘とを呼び寄せるを機會に娘のお春と國野とを結婚させようと考へ、その意を國野にも傳へる。國野はまだ一介の書生の身で、業も成らないうちに妻帶することを迷わくに思ひ居る矢先、用事があつて函館に往き、その歸路、陸羽の間を遊歷しつつあるうちに、ある國事犯事件が起り、國野にも嫌疑がかかつた樣子なので、彼れは越後に身を忍び、富永へも音信不通でゐるうちに富永は病死する。上京した富永の妻と娘とは、さま〴〵苦勞しながら許嫁の國野の所在を訪ね佗びてゐるうちに母も病死する。一方の國野は、やがて越後から上京して、政治運動に熱中して種々の艱難を甞める。その間お春は偶然のことから國野と親しくなり、互ひに意氣投合し、心私かに戀し合ひながら相互にその戀を抑制して交

際をつゞけてゐる。二人とも互ひに許嫁であることを知らないのである。といふのはお春に取つては、自分の許嫁の男は國野の前名である深谷某だと思つて居り、且つお春自らも父母の死後は義理ある叔父に身を寄せて居るところから假りに叔父の名字を名つてゐたので、國野に取つても、自分の戀人が、自の恩人富永の娘で、現在自分の許嫁であるといふことがわからなかつたからである。

とかくするうちに國野の先輩の友人で川岸といふ男は、お春に戀し、お春の身を寄せてゐる義理ある叔父も又、川岸から利を喰はされてその味方となり、三年後尙、お春が結婚しない場合には遺産を叔父が自由にしてもよいといふお春の亡父の遺言狀を僞造して、お春に否應なしに結婚をせまり、その間種々のからくりを用ゐてお春がやがては川岸と結婚せざるを得ないやうな羽目に陷れようとする。怜悧なお春はその遺言狀の僞筆であることを感づき、叔父と川岸との計畫の裏をかくために國野に賴み込んで表面だけの約束をする。そして二人とも、表面は結婚の約束をしたといふだけで男女の禮を紊さずに交際をつゞけてゐるうちに、お春の祕藏してゐる古い寫眞――國野の深谷時代の寫眞から、現在表面の婚約をした二人が、本當の許嫁であつたと云ふことがわかり、改心をした叔父の媒介で改めて結婚の式を擧げ、一介の貧書生であつた國野は、お春の亡父富永からの遺言狀によつてその遺產を讓られ、裕福な身分となり、鰻登りに立身して一方の政黨の頭領となる。

國野の政黨は自由黨で、保守黨、急進黨と相並んで、その當時、最も有力なる大政黨であつた。そして國野のその時代に對して計畫したところは官民の協調であつた。彼れはこれをするために、あらゆる努力を惜まなかつた。そして妻のお春は、痒いところに手の屆くやうに萬事夫を援け、夫の事業を大成させた。といふのがこの『雪中梅』『花間鶯』二篇に亘つた主人公國野夫婦の物語である。尤もこの中には他に、國野の友人で境遇や主義やから急進黨の首領となつた武田といふ男及びその妻の俠婦お勇やら、戀の怨みから、つひに反對黨の保守黨となつた川岸やら、その他さまざまの

挿話が織り込まれてはあるが、主人公國野夫婦の筋書はざつと上のやうなものである。

尙これは餘談にあるがこの作が前にも云つた通り傾向小説だといふのは、作者が國野の口を借りて自由黨の主義なり綱要なりを宣傳してゐるからである。保守黨を敵役の川岸に代表させて、それを批難し、急進黨を國野の友人武田に代させ、それに對してはある程度までの同情はしてゐるが、それはつひに日本の國情に協はないことを論じ、結局國野に代表される自由黨を一番よいものとして讃美してゐるからである。同時に、かやうな宣傳文學として書かれたこの作が、藝術品として決して優れたものでないことが誰人にも容易に肯かれるであらう。

さて、以上のやうに荒筋にして了つたのでは、この作に描かれた婦人の思想なり感情なりを窺ふに甚だ都合がわるいのであるが、私がこの作を特に擧げた所以は、つまりこの時代の新しい婦人の典型とも云ふべきものが、このお春の中に具現されてゐるからである。

このお春の中に具現された當時の新しい婦人の特色とも云ふべきものを數へ上げると、一、政治に非常に興味を有つこと、二、男女の自由交際の實行、三、戀愛の自由選擇、四、在來のやうな男尊女卑的な屈從的な結婚をしないこと、五、社會奉仕の觀念の非常に強いこと等である。

その頃の人は一般に政治に非常に興味を持つたのであるが、この傾向は、在來は全く、その興味圏外にあるものとされてゐた婦人をも驅つて政治社會に注意を向けさせるやうになつた。明治十年前後から英佛の自由平等の思潮が紹介されるとともに、その地女權思想も併せて紹介された結果、わが國の婦人の思想も少なからず向上して、婦人は單に家庭にあつて臺所の仕事や縫針の仕事だけを後生大切に務めただけで滿足すべきでないといふやうな考へが知識階級の一部に起つて來た。それに加へるに、當時は國會開設とか條約改正とかいふ明治文化史上内外多事の混亂時代であつたので

男子が一様に政治に狂奔するのに連れて、婦人も勢ひ、その方面に興味を集中せざるを得なかつたのである。本書の女主人公お春や副女主人公お勇などはこの意味でたしかに時代の一部を代表した婦人であつた。

男女の自由交際といふことも、この作では注目すべきものである。福澤諭吉の男女の自由交際論などもその頃の輿論の一つではあつたが、お春はまだ十八九のうら若い身空で、而も義理ある叔父夫婦の家に寄寓してゐる身でありながら、自由に公然と國野と交際をつゞけ政治を談じ社會を談じてゐる。これらは男女七歳にして席を同じうせずといふ封建時代の『女大學』の教訓に養はれた在來の婦人には到底見ることの出來なかつた現象である。

彼女はかやうにして自由交際を實現したからこそ又彼女には戀愛の自由選擇が出來たのである。この作ではまた一面識もなかつた許嫁の男と、それを許嫁と知らずして偶然にも戀愛關係に陷るといふローマンスになつてはゐるが――そしてその點で作者は在來の男女道徳に媚びてはゐるが――さういふ偶然に形られたローマンスは別としても彼女が國野に戀愛を感じ、たとひ一つは叔父夫婦の奸計の裏をかく方便であつたとは云へ、國野に結婚を申込むといふことは、いかに彼女が自分の意志に從つて、相手を選んだか、又選び得たか。そしてその點で「女は父母の命と媒妁とに非ざれば交らず親まず」と云ふ消極的な『女大學』式婦人とはいかに違つてゐるか、又いかにわが國の婦人として新しい典型であるかといふことを知ることが出來るであらう。尤も、彼女ばかりではなく、その相手として選んだ男も新しい男の典型であつた。彼女が國野に結婚を申込んだとき、國野は次のやうに應へてゐる。

「元來日本にては男女が一度や二度顔を見たばかりで同穴の契を結ぶから、その後に風波が起り、終身の幸福を全うすることが出來ません。貴女と私はお互に心を知り合つてゐるとは申すものゝ、御目にかゝつてまだ日も立たぬことだから先づ私と貴方とが夫婦の約束を結んだと申し立てゝ置き、事實は學問上の交際を結ばうでは御座いませんか。三四年過す内には私も何とかして一身の方向を立てる積りであり……愈々お互の心が合ふならば、その時になり大禮を行つて同居しても宜しいぢや御座いません

か。」

一つは作者が國野の口を籍りて云つてゐるのではあるが、これは今日英米で喧しい問題となつてゐる所謂試驗結婚の類であつて、たしかに新しい卓見である。作者も亦この二人を推賞して「流石、後年我邦の泰斗と仰がるゝ政治家だけありて情義に協ふ金言にお春も一々感心し、兩人にて後々のことなど打合せて、叔父へは國野と夫婦の契約せし樣に告げ男女の禮を紊さず互ひに親しく交際せしは實に得がたき節婦良士と云ふべけれ。」と云つてゐる。とにかくこの作の男女はこの點から見て全く新しい典型であつた。

從つて又彼女に取つては、結婚は夫婦の協力を意味するものであつた。相愛の男女が、相互扶助的關係にあつて、一つの事業をしてゆくものでなければならなかつた。在來のやうに妻は夫に取つて單なる服從的な人形ではなかつた。結婚生活の意義は彼女に取つては在來の『女大學』式のものとは全く異つたものであつた。卽ち彼女は實にこの新しい結婚觀の具體的婦人として描かれてゐたのである。

社會奉仕の觀念、今少し狹く云へば、當時の政治上の理想實現のためには喜んで一切を犧牲にするといふ理想奉仕の觀念の強いことも、この女主人公をしてたしかに在來の小說に現はれたものとは異つたものたらしめてゐる。一言にして云へば、お春はかういふさま〴〵の新して特色を備へた新しい意味の女丈夫であつた。普通の男は大抵彼女の見識と態度には蹴落されて了ふほどの女丈夫であつた。

ある時、國野夫婦が旅行しながら自己の政見を發表して歩いたことがあつた。その時ある地方で、反對派の保守黨の壯士どもに襲はれながら、反對に彼女一人で彼等を擊退したことなども、いかに彼女が女丈夫であつたかをよく證明してゐる。

それは、ある旅館に彼女一人が留守居をしてゐたときであつた。反對派の壯士どもがどや〴〵と押かけて來て、國野

に面會を求める。取次の者から國野の留守なことを聞いても、家探しをするなど云つてきかない。その上妻君のお春一人だときいて、「女一人で野郎がゐなけりや猶面白い」と無理にも二階に押上らうとする見幕を取次の者から聞いて、お春は一時は當惑したが、

「もしも我夫がおいでの時なれば悪者共がドンナ亂暴をするかも知れぬが、マサカ一人の女を相手に　て手荒きことをする氣づかひはあるまいから、御歸りのない内に一寸逢ふて見て、出來るだけは說き諭して彼等の心を飜へさして見んもの」

と、又氣を取り直して、彼等壯士を一間に通し、孰れも血氣壯んな一癖ありげな面魂の彼等を前に、少しも騷がず、ひるまず、彼等の云ふことを一々聞いた上で、それを立派な證據を擧げて一々反駁して彼等の荒膽をくぢく。一同は「まだお春を見ぬ前には、世間を知らぬ女のことなれば、我々どもの威勢に畏れ、物をも云はずヘコムならん。今日は國野に逢ふて喧嘩を仕かけんものと思ひしに、留守と云へば仕方がないが、その家內を嚇しつけ、嬲りものにするもマタ一興ならんと勢こんで二階に押上つた」甲斐もなく、あべこべに說諭されるのである。

『雪中梅』『花間鶯』に描かれた、女主人公お春は實にかういふ女丈夫であつた。そして又かういふ在來には類のない、新しい、よく時勢を知つてゐて、學問もあり、膽力もあり、新しい意味で夫の協力者となるといふ女丈夫が、とりも直さず、この時代の知識階級の一部の理想とした婦人であつたのである。そして末廣鐵腸のこの二作は、さういふ新婦人の典型を吾々に示して呉れたところに、作そのものとしての藝術的價値はとにかく、文化史的には極めて興味ある資料を提供するのである。

二　因襲的女性の哀愁

——紅葉と一葉と——

しかし上に述べた『花間鶯』の女性は、作者の考へてゐるかくべき女性の輪廓を描いたものに過ぎないので、實際世界の女性は、恐らくまだ〲古い因襲的な女性であつたであらう。明治廿五六年から卅年前後にかけて、最も多く讀まれた尾崎紅葉の作を見ても、明治文學唯一の女流作家であつた樋口一葉の作を見ても、そこに描かれた女性が悉く因襲的女性の好典型であるのを見ても、このことがよく肯かれる。

尾崎紅葉は、私が甞つて公けにした『人及び藝術家としての尾崎紅葉』の中でも述べた通り、善い意味にも惡るい意味にも典型的な世間人であつたから、兩性の性道徳問題などについても、又は女性といふものに對しても、在來の因襲觀から決して多くを出てゐなかつたことに無理はない。

「女について云つて置きたいことは、遊藝も着物を縫ふこともいらないが、教育がなくちやいけない。つまり温かな兩親の間に生れて、温かな家庭の教育を受けたものでなくてはいけない。かういふ女は米の飯のやうなれど、教育と云つても、理學の教育でも、女學の教育でもない、家庭的教育なんだが可なり手紙も書け、筆蹟も餘りまづくはなく、假名なしで新聞位は讀める位のがいゝ。金縁の眼鏡をかけて、被布などを著るやつは、家庭を修めることは出來ない。誰れだか才なきは女の德なりと云つたが實際才はじけた奴は困る。」（戀愛問答「唾玉集」所載）

紅葉はある時門下の鏡花、風葉等を率ゐて某料理屋に晩餐を喫した折、上のやうに語つた。

尤も紅葉の嫌つた金縁眼鏡をかけ、被布を著た才はじけた女といふのは、單に皮相的な、上べばかりの新しがりの女を指してゐるのではあらうが、それにしても彼れの婦人に對する理想のいかに低かつたかといふことが窺はれるのである。

白河樂翁は、「女はすべて文盲なるをよしとす。女の才あるは大に害をなす。決して學問などいらぬものにて、假名本讀むほどならばそれにて事足るべし。女はたゞ内にくど〳〵して日を暮すもの故、馬鹿なるが女の知なるなり」と云つたが、紅葉の見解は、これから餘り多く進んでゐるとは思はれない。たゞ假名本續むほどで澤山だといふのが、假名なしで新聞を讀む位で澤山だといふ程度の進歩にしか過ぎない。だから、紅葉の理想とした女が、在來のまゝの、因襲的な夫唱婦從といふ男尊女卑的思想なり感情なりの把持者であつたのも、彼れの作物のいかなるものからも、斷じて、新しい女の典型を求め得ないのも當然なことであつた。彼れにはたゞ、貞淑、可憐、從順等、わが國在來の『女大學』式の舊式の女が、あだかも日本の理想的婦人なるが如くに描かれてゐたに過ぎなかつた。『色懺悔』の若葉と芳野、『おぼろ舟』のお藤、『むき玉子』のお喜代、『三人妻』のお艶、『不言不語』のたまき、『多情多恨』のお種等何れもこの舊式な女に過ぎなかつた。

樋口一葉女史の作に描かれた女も亦紅葉と同じく舊式な、因襲的な女である。たゞ紅葉の作のそれと異なるところは一葉にあつては因襲的な古い女の哀愁が色濃く出てゐることである。紅葉の方では男尊女卑の思想なり感情なりを當然として肯定して描いてゐるだけであるのに比して、一葉の方は、更に一歩進んで、さういふ肯定から生じて來る婦人の悲哀を描いてゐる。これは一つは一葉その人が女性であるからでもあり、且つ、紅葉の樂天家であるに比して、彼女の厭世家であるからでもあるが、一つは一葉が紅葉に比して遙かに詩人的洞察が深かつたからにもよるであらう。

一葉は云ふまでもなく哲學者ではなかつた、批評家でもなかつた。しかし一箇卓越した詩人であつた。その天來の詩人的洞察をもつて、すべての現象の奥まで見通さうとした。彼女は戀愛について、次のやうに云つてゐる。

「いまだ戀といふ名の殘りある戀は淺し。人をも忘れ、我をも忘れ、憂さも戀しさも忘れぬる後に猶何物とも知れず殘りたるこそ此世のほかの此世ならめ。かゝるすゑにすべてたのしなどいふ詞を見出づべきにもあらず、されば苦しといふ詞もなかるべ

き筈と人云はんなれど、その戀あればこそ世にたゞよふなれ。捨てたりと云へ五體うごめき居らんほどは此苦も又はなれざるべし。佛者の佛さゝなへ、美術家の美さゝなふる、捨て〳〵すてめるのちの一物やこれ」（日記――一葉全集所載）

戀愛といふことを、いかに深く解釋してゐるかはこれによつても明かであらう。憂さも戀しさも忘れた後に猶殘つてゐる、此世のほかのこの世である境地を戀愛の究竟境と認めてゐる彼女であるからこそ、彼女はその作物に現はれた通りの人生の深い境地を觀察し得たのである。實に彼女はその天來の詩人的洞察によつて、永久の價値をもつてゐる數多くの作品を造り得たのである。

しかし惜しいことには、彼女は、得がたい詩人ではあつたが、つひに批評家ではなかつた。だから、時代の傾向とか趨勢とかいふことには比較的冷淡であつた。少くもその方面に格別の興味をもたないらしかつた。新しい婦人の世界は、新しい時代と共にどう動きつゝあるかといふやうなことは餘り多くの注意を拂はなかつたらしい。彼女は男尊女卑の因襲的習慣や在來の男女の二重道德に恐らく何等の疑惑をも挾まなかつた。たゞ男尊女卑の因襲的習慣や、男女の二重道德やを、女性に取つての一つの悲しむべき習慣なり道德なりとして無限の哀愁感をそれに對して寄せるといふだけであつた。だから彼女の作中に描かれた女性は、女性そのものとしての悲哀を身にしみて感じてゐる女であつた。彼女の傑作である『十三夜』のお關にしても『われから』のお町にしても『にごりゑ』のお兼にしても何れもさうであつた。

『十三夜』は、女性の立場から云へばわけても哀れ深い物語である。

しがない暮しをしてゐる貧しい家に生れたお關といふ女は、十七の春に、その美貌を見こまれて、勅任官原田勇といふ男の妻となり、お關の父母も娘の立身を常に喜び誇つてゐる。すでに結婚後七年を經、夫婦の間には六歲になる男の子まである仲であるが、どういふものか、夫はお關に非常に辛く當る。それを萬事內輪で、貞淑で、在來のわが國の婦道といふものゝ權化であるやうなお關は、何もかも自分の身一つに包んで、父母には、けはひにもそのことを示さない。

といふのは父母に心配をかけまいためである。

しかし、どうしても夫の虐待に堪へがたくなつて、一夜遅くひそかに父母の家を訪ねて、離縁を取つて貰はふとする。

「私は今日までつひに原田の身について御耳に入れた事もなく、勇と私との中を人に言ふた事は御座りませぬけれど、千度も百度も考へ直して、二年も三年も泣盡して今日といふ今日どうでも離縁を貰ふて頂かうと決心の臍を固めて來ました」と前置きして、彼女は父母の前で次のやうに自分の苦衷を訴へる。

「嫁入つて丁度半年ばかりの間は關や關やと下へも置かぬやうにして下さつたけれど、あの子が出來てからと云ふものは丸でお人が變りまして、思ひ出しても恐ろしう御座ります、私はくら闇の谷へ突落されたやうに暖かい日の影といふものを見た事が御座りませぬ。はじめのうちは何か串戲に態とらしく邪慳に遊ばすのと思うて居りましたけれど、全くは私にお厭きなされたので此樣もしたら出てゆくか、彼樣もしたら離縁をと言ひ出すかと苛めて苛めて苛め抜くので御座りましよ。」

彼女は更につゞけて云ふ。

「よしや良人が藝者狂ひなさらうとも、圍ひ者してお置きなさらうとも、其樣ことに吝氣する私でもなく、婢女どもから其樣な噂も聞えますけれどあれほど働きのある御方なり、男の身のそれ位はありうちと他處行には衣類にも氣をつけて氣に逆らはぬやう心がけて居りまするに、唯もう私の爲る事とては一から十まで面白くなく思召し、箸の上げ下しに家の内の樂しくないは妻の仕方の惡いからだと仰しやる。それも何ういふ事が惡い、此處が面白くないと言ひ聞かして下さるやうならば宜けれど、一筋に詰らぬくだらぬ、解らぬ奴、とても相談の相手にはならぬの、いはゞ太郎（子供の名）の乳母として置いて遣はすのと嘲つて仰しやるばかり、ほんに良人といふではなく、あの御方は鬼で御座りまする。」

いかに彼女の結婚生活の悲慘であるかはこれによつてもわかるであらう。

一部始終を聞いた彼女の父は、彼女を可哀さうに思はぬではないが、大丸髷に金輪の根を卷きて黑縮緬の羽織何の惜しげもなく、わが娘ながらもいつしか整ふ奥樣風、これをば結び髮に結ひかへさせて綿銘仙の半纏に襷がけの水仕業を

する事の忍びがたいところから、さまざま利害を說いて彼女の離緣を思ひ止まらせやうとする。そして「表面には見えねど世間の奧樣といふ人達の何れも面白くをかしき中ばかりは有るまじ、身一つと思へば恨みも出る、何のこれが世の勤め」だから諦めるより仕方がないと云ひ、彼女の弟が常に彼女の夫から厄介になつてゐることを數へ立てゝ「辛からうとも一つは親のため弟のため、太郎といふ子もあるものを今日までの辛抱がなるほどならば、これから後とても出來ぬ事はあるまじ」と云つてかき口說き「同じく不運に泣くほどならば原田の妻で大泣きに泣け、なあ關さうではないか、合點がいつたら何事も胸に斂めて知らぬ顏に今夜は歸つて、今まで通りつゝしんで世を送つて呉れ、お前が口に出さんとても親も察しる弟も察しる、淚は各自に分けて泣かうぞ」と因果を含めて云ふ。

すると、千度も百度も考へ直し、二年も三年も泣盡した擧句、どうしても離緣をしようと決心して來たお關は、すぐに、わつと泣出して「それでは離緣をといふたも我儘で御座りました。」「ほんに私さへ死んだ氣にならば、三方四方波風たゝず」に濟むものを、父母にまで、いやなことを聞かせたと云つて悔い「お父樣、お母樣、今夜のことはこれ限り歸りまするからは私は原田の妻なり、良人を誹るは濟みませぬほどに、もう何も言ひませぬ、關は立派な良人を持つたので弟の爲にも好い片腕、あゝ安心なと喜んでゐて下され」と云ひながら、すご〳〵と歸つてゆく。これが『十三夜』に描かれた女主人公お關である。

これだけの荒筋からでも容易に推測し得る通り、お關は要するに諦めの女であり、お關の父親の說くところは結局諦めの人生觀である。暗い谷底に突き落され鬼にさいなまれてゐるやうな苦しい結婚生活も、身一つと思へばこそ恨みもあれ、これが世の女のつとめだと悟れば文句はないといふ父親も、その意見に、すぐに同意して、離婚をしようとした今までの決心を手の裏をかへしたように飜がへし、ほんに私さへ死んだ氣にならば、三方四方波風も立たずと諦めて了ふお關も、新しい今日の性道德の立場からは、すべて悲しまれ、悼まるべき人物である。

お關のさういふ諦めの根本には、女は男よりも劣つたもの、從つて、男女によつて世間の待遇が異るといふ道德上の二重標準が橫つてゐる。良人が藝者狂ひをしようが、圍ひ者をして置かうが、「男の身のそれ位はありうち」と考へてゐる二重道德がその諦めの根抵に橫つてゐる。そして女はたゞ良人の我儘は許すべきもの、わが身の不運は諦むべきものと、われから女性を弱いもの扱ひにして、われ自らを悲しんでゐるのである。但しこれは『十三夜』の女主人公ばかりではない、一葉の作品の何れにも通じた女性の特色であるのである。

かういふ女性が新しい時代に適はしい女性の役目を演ずる女性でないことについては改めて云ふまでもない。たとひその時代の大多數の女が、さういふ女性であつたとしても、時代の進展の上から見れば、それらは明らかに古い女である。時代から取殘されつゝある古い女である。そしてこの種の古い女は、一葉女史の作品の中に自己の代辯者を見出して、そこに辛うじて一種の慰藉を贏ち得てゐたのである。

わが一葉女史は、この意味で、不幸にして古い諦めの女の代辯者であつた。

三　黎明期の女性

――透谷の戀愛――

しかし、廿五六年から卅年にかけて、男女關係の大勢が上のやうではあつても、又他の一面においては、來るべき時代のために曉の鐘を打ち鳴らした、新しい、若い文學者の一團がないことはなかつた。それは、北村透谷を中心とした『文學界』一派の文學運動であつた。

この一派は、明治文壇最初のロマンチシストであつた。彼等は、素直な、新しい、清く、すが〳〵しい心の眼で、宇宙と人生とを觀ることを始めてその時代の若い人々に敎へた。彼等はさういふ素直な、清新な心で宇宙と人生とに對し

た結果、その以前の人々の感じ得ない喜びを感ずると同時に、その以前の人々の感じ得ない苦しみをも感じた。彼等は一面に享樂の兒であると同時に一面に懷疑懊惱の兒であつた。

かういふ眞摯な心もちは、彼等の戀愛觀やその戀愛生活の上にも遺憾なく現はれてゐる。

彼等の生活なり、戀愛なりは島崎藤村氏の名著『春』の中によく描かれてゐる。『春』の中の二人の主人公岸本と青木は、藤村氏と透谷その人の影である。『春』は則ちこれらの人々の生活と戀愛とを中心として、明治二十五六年頃に、その時代の若い人々の間に起りつゝあつたロマンチシズムの大きな潮流を描いたものである。『春』一篇の藝術的價値の高いものである事は、改めて云ふまでもないが、以上の意味で、一個の文化資料として見ても、この作は却々に興味あるものである。

北村透谷は實際眞面目な戀をした。そしてその戀から彼れは結婚生活に這入つた。彼れは、その戀のたゞ中にあつたときにかう書き記した。

「もしわが彼女に會はぬ前のことを思へば、佗しげなる野中の松に風の當り易きがごとく、世の事物に感觸すること多かりし。彼女の情を得たる後は、物として春の色を帶びざるはなく、自ら怪しみて霞の中に入りたるかと思はるゝほどに、苦く辛く面白からぬ物に隔りて、甘く美しく優しき物にのみ近きぬ。肥太りたる駒にうち乘りて、春の野に遠乘したる時、菜の花の朝日に照りかゞやきたる畦を過ぎて、緩々と流るゝ小川の岸に駒を立てたる心地は——此戀の眞味なり。」

透谷はこの戀の眞味を味つた新人であつた。青木の名で描かれた戀の透谷を『春』の作者は次のやうに云つてゐる。

「戀愛は剛腹な青木を泣かせた程の微妙の音樂であつた。此世に屬いたものと云へば、名でも、富でも、榮華でも、一切の希望を置かないと云つたやうな、一徹無垢な量見から、實世界の現象悉く虛僞であるとまで觀じた程の少壯な青木ではあつたが、唯一つ彼れの眼中に虛僞でないと見える物は戀愛であつた。彼のやうに戀愛の思想を重んじ、またそれを憚らす發表したものも少

からう。彼に言はせると、戀愛に人世の祕鑰である、戀愛あつて後に人生がある、戀愛を抽き去つた日 は人生何の色も味もない――」

透谷の戀愛尊重はたしかにシエリー、やバイロンやさてはロセツチなど、近英の浪漫派の詩人のそれと甚だ似通つてゐた。彼れ位、全身全力を擧げて戀愛を追ひ求めた人はたしかに珍らしかつたであらう。

彼れの結婚生活は決して幸福なものではなかつた。といふのは彼れは一面において、懷疑の兒であり、厭世の兒であつたからであつた。それに加へて、在來の習慣を無視し相互の親たちの意志を尊重しないで、殆んど自由結婚に近い樣式を取つた彼れの結婚は、彼れの周圍から常に白眼視され、冷笑視されたので、彼れはいよ／＼益々厭世的になつた。そこへ生活難は烈しく押し寄せて來た。病弱な彼れは、彼れのために、彼れの妻子のために、惡戰苦鬪した。そして刀折れ矢盡きて、また、漸くこれからだといふ二十七の若盛りを、自ら縊れて死んだ。

死ぬ少し前へに、彼れは憮然としてその愛妻を顧みて次のやうに云つた。

「かう云ふことになつたのは俺の運命だ――母親さんなぞに言はせると、吾儕の結婚は三文の價値も無い。いや、母親さんばかりぢやない。世間の人が多く左樣思ふのは無理もないれ。しかし吾儕は世間の人に比べて見て、決して可恥しい結婚をしたとは思はん。吾儕の家庭も左樣だ、吾儕の事業も左樣だ――唯、矢盡き刀折れたんだ。」

透谷は、たしかに戀愛中心の新しい性道德の革命家で又その實行家であつた。しかし因襲道德の立場に立つた世間の人は、あらゆる方面の革命家に對してさうであるやうに、この性道德の革命家に對しても、辛く當つた。彼れは「世間の人に比べて、決して可恥しい結婚をしたとは思はん」と云つて自ら慰めてゐるが、可恥しい結婚どころか、却つて世間の多くが、戀愛を度外視した、最も恥づべき賣買結婚をしてゐるのだ。それにもかゝはらず、恥づべき結婚をしてゐる彼等に幸が多くて、神聖な結婚をしてゐる透谷に幸が少なかつたのは、どの方面でも先覺者の味はゝなければならな

い悲哀の一つであつたであらう。

透谷を中心とした人々の中の一人である『春』の作者も亦眞劍な戀に惱んだ第一人である。透谷は戀をして、結婚をした。たとひ、その結婚生活は不幸であつたとは云へ、彼れの心持ちの中には、春の野に遠乘りをして、菜の花の朝日に照りかゞやく畦を過ぎて、ゆるく流れる小川の岸に駒を立てたやうな心持ちがあつたといふ意味から云へば、主觀的には一面において透谷は幸福であつたとも云へる。

藤村氏――『春』に描かれた岸本の場合は、全然異つてゐた。岸本の戀の對象である勝子は不幸にしてある男の許嫁の女であつた。實現されない戀と知りつゝ岸本はその戀をひたすらに追うた。

四五日の間は、名のつけやうのない深い苦痛に壓されるやうな日がつゞいて、左樣いふ時には急に身體が震へたり、胸騷ぎがしたり、思はず知らず涙が流れたりするが、それを通り越すと、今度は妙に寂しい、居ても起つても居られないやうな日が來る。

岸本はかういふ苦しい心の狀態で、戀人のことを思ひつゞけた。そしてその結果は、彼れを烈しい失戀の淵に陷入れた。岸本は頭を丸め、ある寺の僧から古い袈裟を貰つて、目的もなく漂泊の旅にさ迷ひ出た。そしてそのさ迷ひの旅の苦しさから、つひに死なうとさへも思つた。ある夕暮死に場所を探して、彼れはつひにある海邊に出た。蒼茫として彼れの眼の前に展けたその暮れかゝつた海は、彼れ自身の言葉を借りれば、永遠偉大な自然の繪畫でもなければ、神祕な力の罩つた音樂でもなく、たゞ冷たい、無意味な墳墓であつた。彼れはその冷たい、無意味な墳墓の中に、今や汲ひ込まれようとして、辛うじて免れた。

岸本の戀はそれほど苦しい、辛いものであつた。相手の女の勝子は、同情の深い、理知的な、それでゐて女らしさを失はない女であつた。彼女は書物を讀むことは岸本に教はつたが、心の持ち方なぞは、岸本よりも、ずつと姉であつた。

「左樣焦れたり、騷いだりして、一圖に思ひ詰めるばかりが、男女のなさけとは言はれない。物のあはれは、まだ他に

ある。何故左様逆上せて了ふのだらう。何故左様無暗なことを考へるのだらう。すこしは自分の心情も知つて貰ひたい。」――から姉が弟に教へるやうに彼れに教へるほどの女であつた。

岸本と勝子、青木とその妻操、この二組の外に、青木を中心とした連中の間には、何れもそれ〴〵女性があつた。「世の中の歡しいや哀しいも早く解つて、怜悧な、考へ深い容貌をしてゐる」凉子といふ女や、我儘な岸本を「姉さんか母親さんのやうに面倒を見て呉れた」峰子といふ女や、その他若い新しい女のかず〴〵があつた。

これらの女性は『春』一篇の中では、表面に出ない何れも蔭の人物である。しかし、かういふかず〴〵の女性があつて、透谷を中心とした一團の若い人々の生活に、始めて重要な意義が生れて來たのであるから、これらの女性は、ある意味で、透谷一派の文學運動の土臺石となつたと見てもよいのである。これらの女性も亦『春』の作者が云つてゐるやうに「健氣にも彼等（透谷及び其一團）を助けやうとしたり、或ひは戀慕を捧げ、同情を寄せ、すくなくも彼等の精神に近づかうとしたもの」であつた。

透谷の時代は、ひろい意味の明治文化の黎明期であつた。透谷を始めその一派の若い人々は、この黎明期を背景として、藝術に、戀愛に、心も身をも打込んで、眞劍な生き方をした。從つて彼等先覺者に同情を寄せ、愛慕を捧げ、彼等の精神に近かうとしたこれらの若い女性たちには、明治以後其時までに見ることの出來ない、新しい、勇ましい、そして又女らしい一面があつた。これらの若い女性こそ、眞に新しい婦人の芽生えであり、又新しい婦人の黎明期を代表する婦人であつた。

四　『魔風戀風』の女性

明治三十年以後は、明治の思想界は急激に變化して來て、一面においてさま〴〵の社會問題に興味を寄せると共に、

ニイチエ思想の紹介と共に他面に個人主義的傾向が特に鮮かになつて來た。文藝界でも、この傾向に伴つて、所謂社會小説の出現を要求する聲が、切りに起つて來た。社會問題の一部門としてのフエミニズムといふことも、在來のまゝであり得ないのは當然のことである。そして、このフエミニズムの立場から見て、第一に擧ぐべきのは小杉天外氏の諸作である。就中その『魔風戀風』は洛陽の紙價を高からしめたほど、若い婦人、殊に女學生の間に愛讀されたものだと傳へられる。といふのはこの作には當時の新しい女學生の生活や、又は當時の女學生氣質が如實に描かれてあるからである。『魔風戀風』の作者はその初版（明治三十六年十一月）の序の中で「作中の主人公と二三の主なる人物とは、曾て世に在つた人、それから今現に世にある人をモデルにしたのだ」と云ひ、又「この作は、世の所謂婦人問題、女學生問題に意を用ゆる人にも、多少の利益を與ふるものと信ずる」と云つてゐるが、これによつても作者の意圖を知ることが出來る。

作者が、實際の人物をモデルにしたと云つてゐるだけあつて、この作には、實際、その女主人公の女學生の荻原初野及びこれを取卷く一團の女學生等がいかにも生々と描かれてゐる。同時に、今日の吾々が、その當時の女學生が、どういふことを考へたか、どういふことを理想としたか、當時の所謂女學生氣質はどういふものであつたか、又當時の世間が、女學生をどう遇してゐたかといふやうなことを考へる上に、この作『魔風戀風』はたしかに重要な參考資料となるわけである。この點で又、この作は作者が意圖したやうに婦人問題の考究家には相當に重んぜらるべきものたるを失なはない。

私は今、遺憾ながら、この作の梗概をくだ／＼しく述べる暇を持たないが、そこに描かれた女學生氣質は、明治二十年代のそれとは餘程趣きが異つてゐた。殊にこの作の女主人公初野に具體化された婦人思想は、前代の女性には見ることの出來ないほどしつかりしたものであつた。

妾腹の出で、異母兄や、親類やその他彼女の妾腹の出であることを知つてゐる郷里の誰彼から常に嘲罵と冷笑とを浴せかけられてゐる彼女は、どうかして、その恥辱を雪ぎたいといふ一念から東京に出て、その頃の女子最高の學府に學んだ。そしてそこを卒業して、立身出世をして、自分を嘲弄したものどもを見かへしてやりたいと思つた。彼女は一心をこめて學業にいそしんだ。そして今少しで卒業するといふ間ぎはになつて、無謀な妹の東京へ出奔して來たことから異母兄の迫害が一層烈しく、學資を絶たれ、かてゝ加へて自分は脚氣に冒されて、つぶさに辛慘を嘗める。そこへつけ込んで、種々節操上の誘惑がやつて來る。彼女はその誘惑を斷乎として拒む勇氣を持つてゐる。しかし生活の苦しみと病の苦しみとに堪へかねて、彼女はとつおいつ迷つた。獨立も出世もいらぬ。辛くとも郷里に歸つて兄の厄介にならうか、それとも寧そ男に身を任せて、この苦しさを救つて貰はうかとも、つひには考へた。しかし「なんぼ可弱い女でも荒い浮世の波をこゝまで漕ぎ來つて、すぐ手の達く岸に上らずに、このまゝ押流されてなるものか」と、ぢつと踏みこたへる。

彼女の自覺は、今日から見て無論物足りないことはいふまでもない。彼女は「男の造つた」在來の社會が、婦人をいかに慘めに遇してゐるかといふこと、及びこの慘めさから逃れるためには、婦人に經濟的獨立がなければならないといふことを痛感してゐる。この痛感あるがために彼女の專門教育を受けてゐることにも、そこに非常な眞劍さがあつた。たゞ今日から見て物足りないのは、彼女が、女性としての彼女自身の誇りの自覺を持つてゐないことであつた。彼女は社會的に、たゞ男子に及ばざらんことを恐れた。女性は、男子に劣るべきものといふ潜在觀念が、彼女からはまだ拔けきらなかつた。要するに、男女の對等感において、彼女はまだ〳〵自覺が足りなかつた。とは云へ、その意志の强固であることにおいて、獨立心の旺盛なことにおいて、而もそれらが決して、廿年代の新しい婦人によく見るやうな、一種の附焼刄からではなく、全く彼女自身の内心の要求から來てゐる點において、彼女は全く、その前の時代には見ること

の出來ない、しつかりした女であつた。かういふ女は、單に小說中に於てばかりでなく、『魔風戀風』の作者がその序で云つてゐる通り新しい時代の傾向に影響された實際社會の若い婦人の間に、その當時、しば〳〵見ることの出來たところであらう。蓋しこれは、疑ひもなくニイチエその他の個人主義的思潮の婦人に及ぼした最も善良な影響の一つである。

エレン・ケイが紹介され、イブセンが研究され、新しい婦人達が『靑鞜』を組織して、フエミニズムの實際運動に着手したのはこれから數年の後であつた。

狂言作者の衰頽期と學者派

河竹繁俊

○

明治文學に於ける演劇なり、戲曲なりの歷史は、可なり複雜な、又最も花々しいものゝやうに思はれる。が其の一面には、長い間特殊王國たる芝居國に唯一の戲曲作家として、傳統的に勢力を持續して來た、狂言作者の衰頽といふ、いたましい衰話を藏してゐる。

詩にも繪畫にも小說にも、何れの分野にも、それ相當の新舊の交錯、革新、改良は行はれた。けれども演劇に於ては演者たる俳優には、殆どさしたる變革もないのに、狂言作者等の上には、新世紀の高い革新的波浪が最初に押し寄せ、明治の末期に至つては、殆ど面影もなきまでに洗ひ去られたかの觀を呈したのであつた。詩、小說、劇の三者に就いて

見るに、明治の初年に最も盛んであつたものは、劇ではなかつたらうか。他の藝術の多くは、明治維新の變革によつて一時影を潜めたかの趣もあつたが、ひとり芝居のみは、相變らず興行を續け、俳優にも亦作物にも、可なり豊富な收獲を遺してゐると見てよいかと思ふ。――それだけに、狂言作者の上に押し寄せた波は高く、又急激なるものがあつたのである。

○

劇作を狂言作者の獨占から奪つたのと、小説を戯作者の獨占から奪つたのとを比較して見ると、劇作獨占を狂言作者の手から奪ひかけた方が早いやうに思ふ。

坪内博士の回顧録中に詳しく述べられてある如く、明治十一年六月新富座に上演せられた「松榮千代田神徳」に、依田學海居士は作者河竹新七（後の默阿彌）に、直接助言を與へ、座頭たる九世團十郎をして有職故實をたゞさしめ、全く新規な時代物として、史劇風の演出を試みさせたといふ。この以前にも「西南戰爭」の時などにも、多少政府筋などの援助を得てゐたかも知れないが、作と其の演出の上に最も顯著に學者派の影響の現はれたのは、この時であつたに相違ない。して見ると「小説神髓」に先立つこと約十年の前といふことになる。

この以來、依田學海、福地櫻痴の二居士に末松謙澄、それから高田博士、坪内博士、故饗庭篁村翁などといふ諸先達によつて、着々と諸種の改良機關が設けられ、新時代に順應せる劇の樹立に努められたのであつた。

○

學者派の演劇啓蒙運動が熾烈になればなるだけ、狂言作者の實際勢力なり、價値なりは、減殺され、低められるの結果となるのは、寧ろ當然であつた。一つには狂言作者中には、默阿彌以外にはしつかりとした人物もなければ、技倆ある作者もなかつたのに起因してゐる。であるから、明治二十六年に默阿彌が物故してからの狂言作者界は、實に秋風

落寞といふ感じを受けないわけには行かない。

默阿彌の後事を繼承したのは、三世河竹新七と竹柴其水の兩人であつた。三世新七は前名を竹柴金作と稱した。市村座及び歌舞伎座等にあつて、一年に三四種宛の新作を發表したが、講談に材を採つた、所謂脚色物、或は補作風のものが多數を占めてゐた。作劇術に於ては、正しく默阿彌の衣鉢を嗣いだものであつたが、新時代との交渉には、默阿彌が試みただけのものもなくして、明治三十四年一月六十歲で歿した。

明治二十年頃からの三世新七の主なる著作には次の如きものがある。

籠釣瓶花街醉醒（佐野次郎左衞門、二十一年）
鹽原多助一代記（圓朝の噺を脚色、二十五年）
怪異談牡丹燈籠（同前、二十五年）
安政三組盃（都築藤吉郎、二十六年）
粟田口鑑定折紙（粟田口、二十八年）
指物師名人長次（名人長次、二十八年）
江戸育御祭佐七（お祭佐七、三十一年）
羽衣（三十一年）
成田道初音藪原（藪原檢校、三十三年）
星舍露玉菊（遊女玉菊、三十三年）
清正誠忠錄（加藤清正毒饅頭、三十七年）

竹柴其水は東京に於ける默阿彌の第一の高足であつた。河竹新七は默阿彌の前名であるが、其水といふのは俳名であ

つたのを、俳名だけを嗣號せしめたものである。其水は前名を竹柴進三と稱し、新富座に立作者の地位に上つたのが明治十七年、其後明治座にあつて先代左團次の爲に新作を稿下してゐたが、これは明治四十年頃に退座し、大正十二年に七十七歳で歿した。明治二十年頃からの其水の主なる著作を掲げて見よう。

那智瀧誓文覺（文覺勸進帳、二十二年）
神明惠和合取組（め組の喧嘩、二十三年）
皐月晴上野朝風（上野戰爭、二十三年）
一刀流成田掛額（松田の仇討、二十四年）
遠山櫻天保日記（遠山左衞門、二十六年）
名高秋田義民傳（義民傳之助、三十一年）
三人片輪（滑稽上るり、三十年）
山田長政譽軍配（三十二年）
櫓太鼓出世取組（谷風、三十二年）
日本晴露領雪解（近藤重藏、三十五年）
享和春兩國紀聞（お妻八郎兵衞、四十三年）
百組出世鳶（大正四年）

三世新七の著作目錄の大部分が講談、實錄に忠實なるもの〻多いに反して、其水の作には比較的創案になるものが多かつた。が、奈何せん、強ひて新時代に迎合せんと勸め、努めて默阿彌式の脚色ぶりを避けんとした結果は、そこに却て質に於て純ならざる作品を遺すことになつた。其水は實に最後の狂言作者らしい作者であつたが、それだけに苦しみ

もなやみも多かつたらしい。わたくしは日常の談話に於ても、時としてさういふ述懐に觸れたことを記憶してゐる。而も彼れが明治二十二年三月中村座に於て九世團十郎の爲に稿下したことゝなつてゐる「文覺勸進帳」の如きは、學者派の一頭目であつた川尻寶岑氏の作を剽竊したものであるといふので、大問題を惹起したこともある。

學者派の捲き起した啓蒙運動に影響され、迎合に是れ努めんとしても、系統的な歴史の智識、時代の背景に關する造詣が、皆無であつたが爲めに、事毎に馬脚をあらはして、揚足取りの材料となるか、さもなくば不平を抱きながらも退嬰萎縮するのほかはなかつたといふ、一面からは同情すべき立場に立たせられたものと見てよい。

これを例へて考へて見れば、これまでは内海の航路のみであつたから、何の科學的智識がなくとも船頭の役が勤まつてゐたものが、急に大海を航行することゝなつて、そこに何等の天體觀測法の心得もなければ、遠洋航海に必要な機關もないので、折角荒波を突切るだけの揖の取りやう、櫓の押しやうは知つてゐても、——即ち作劇の技術には勝れてゐても、——それを動かす根本のアタマを缺いてゐたといふやうなものであつた。

では、學者派には、老練な船頭がゐたかといふに、それはほんの一二にとゞまつてゐた。學識と技術とを兼備した人といつては僅かに福地櫻癡、それに多少意味は違ふが坪内博士を算へることができる位のもので、船長と船頭とを同時に持つたやうな、有力な戲曲家は——いつの世でもさうであらうが、甚だ稀であつた。從つて、明治十年頃以來、或は演劇改良會の設けられた明治二十年の頃から、二三十年間といふものは、常に船長か船頭の何れかに偏した船が多かつた。やうやく、大正も十年前後から、いくらか揃つた船が出來始めたやうな様子も見えて來た。それも様子が見えて來た程度だといつてよくはなからうか。

○

以上は、甚だ大ザツパな見方に過ぎない。具體的な、個々の事實に就いて調べる必要は知つてゐるが、今は到底さう

いふ餘裕を持たない。が、次に少しばかり、默阿彌個人と、廣い意味に於ける學者派との交渉を、主要な作物に就いて見て、默阿彌の晩年が如何樣であつたかを見ておくことにしたいと思ふ。

ツイ昨日、坪内先生にお目にかゝり、學者派に關する材料に就いて、御教示を仰いだところ、學者派に關することは親しく本誌へ御寄稿になつたと伺つた。さうして、第一着手ともいふべき『松榮千代田神德』に於ける、團十郎の家康の新演出のお話を伺つた。實に學者派一方の中心人物であり、現時に於ても劇壇の權威である先生から、實際に就いてかういふ說明なり、感想なりを伺ふことのできるといふのは、大なる吾等の幸福と言はねばならぬ。

明治劇壇に於ける學者派の諸運動に關しては、今先生を措いて何人もよく說明し得るものではない。小生も默阿彌傳を作る時、始めて少しばかり御高示を仰ぐを得たに過ぎない。であるから、私には材料も乏しいし、實際問題に關する智識も乏しいのであるが、狂言作者側――狂言作者を代表せる默阿彌が、どんな風にその運動を受け、又は順應せんと欲したか。或は、それに從つて、一味の狂言作者が如何に懊惱し、順應せんと欲し、或は反抗せんとしたかを、分かる限り、時としては多少の臆斷をも加へて、一つ書きに簡單に列記して、他日の參考に供するに留めようと思ふ。

さま〴〵の心持の動搖などを、仔細に調べ上げるには、「歌舞伎新報」を隅から隅まで見なほす必要がある。あの中には、雜誌そのものが、主として狂言作者の手になつたものであるだけに、どんな風潮が漂つてゐたかは、雜錄や消息文等の筆つき、口吻によつて、十分に察することができるであらう。

結局は學者派の侵入に對して不平を抱き、怨懣を感じながらも、終には自縄自縛、手足を縛がれるに到つたといふ、悲劇に逢着するのほかなかつたのではなからうか。而して、狂言作者界今日の狀態では、作劇の使命を暫く別途において、演出上の取扱ひ人、手續きをつける人、―演出者(プロデューサア)でない舞臺監督(ステージ・ジャー)としての使命にいそしみつゝある――といふのが我國狂言作者の現狀ではなからうか。

少しく岐路にわたつた。わたしは、次に、極めて簡單に、年代順に箇條書きにして、默阿彌個人と學者派との交渉を拾ひ出して、稿を終らうと思ふ。

○

一、明治七年七月芝河原崎座に於て『新舞臺巖楠』を稿下。(九世市川團十郎が團十郎といふ名前で最初に演じたもの。)行在所へ出て來て櫻の木を削つて「天勾踐―」の詩を書く備後三郎の役は、その無造作加減に於て、樂屋の連中をも、見物をもおどろかした。活歴風の第一作、第一演出かと思ふ。これは山ノ内容堂公等の感化によつて、さういふ演出が誘致されたものではなかつたらうか。未だ學者派の何人もが、助言を此際試みたことを明らかにしない。

一、明治八年五月、河原崎座に於て『吉備大臣支那譚』を上演。やはり團十郎の注文に應じて、默阿彌が執筆したもの團十郎が何人の暗示によつて企てたものか明白でない。けれども、活歴風のもので、後の學者派の說に呼應する作柄であつた。

一、明治九年五月、中村座に於て『重盛諫言』を上演。

一、明治十一年三月、新富座にて『西南戰爭』を上演。朝野の名士と先代守田勘作並に團十郎との交渉いよ〳〵密接となる。

一、明治十一年六月新富座に『松榮千代田神德』を上演。明白に依田學海居士が直接作者默阿彌に助言を與へ、稽古にも立合ひ、松岡、市川氏等の故實家の指導を受けた劃時代的の狂言。詳細は坪内先生の回顧錄に讓る。この狂言以前のものは、準備時代のものと言つてよい。

「學者派の說を聞いて諒解する事ができて、實際運動に參加せんとしたるは、先代守田勘彌と、九代目團十郎だけであつた」とは、故其水の筆者に話してくれた列であるが、こゝに到つて、それが全く明白になつたわけである。

一、明治十一年十月、新富座に『二張弓千種重籐』上演。純然たる活歷劇にて、この作の評言中に、假名垣魯文が、學ろ嘲弄的の意味に於て活歷史を約して活歷といふ語を挿んだ。これが活歷の熟語の濫觴であるといふ。

一、同年同月、都座に『義重忠士礎』上演。默阿陀が此時榛澤六郎に扮した某俳優に向つて、「在來の敵役らしく赤面に塗ることはいけない」と注意したといふ逸話のある作。默阿彌も學者派の說話に耳を傾け、太いに新傾向の作として執筆したのに、在來通りの概念的の扮裝では困ると注意したのである。學者派の劇評におそれをなしてゐた面影もないではない。

一、明治十二年二月、新富座にて『赤松滿祐』を上演。依田學海居士から材料を提供されたといふもの。

一、同年同月、同座に『人間萬事金世中』上演、福地櫻癡居士より英國リツトン作の小說の筋を聞き、それを散切物として脚色せる喜劇。

一、明治十二年九月、新富座にて『漂流奇談』を上演。別に活歷風の作ではないが、朝野の名士、洋行歸りの紳士に接觸して、歐米を舞臺とした散切物。

一、明治十三年六月、新富座にて『荏柄の平太』上演。星月夜鎌倉顯晦錄によりて脚色せるもの。

一、同年十一月、新富座に『茶臼山』上演。眞田幸村、宮內の局、德川家康に團十郎が扮した。

一、明治十四年四月、新富座に『千代譽松山美談』を上演。依田學海居士の供給せる材料によつたものと言はれてゐる又一說には勘彌と親交あつた松本順氏の提案ともいふ。

一、明治十四年十一月、新富座にて二世河竹新七改めて默阿彌となる。

一、明治十七年四月、新富座にて『仲光』を上演。

一、同年十一月、猿若座に『高時』を上演。その新團十郎は依田學海居士起草の式辭を朗讀した。この高時と本間山城

と幾貞の太刀流しとを取扱つた『北條九代名家功』は、團十郎の顧問役であつた求古會の注文によつて、默阿彌の執筆したものであるが、「どうもこれでは芝居にならなくて困る〳〵」と愚痴をこぼしながら書いたもの。高時の件だけは今も生命があるがあとの二部は故實調べの演出をしたほかには、何の興味もなかつたものである。「芝居にならない」と心ひそかに不平を感じ、幾分忿懣をも感じながら、學者派の要求通りに脚色し、執筆したものであつたらしい。「求古會」の同志といふ中には、黒川眞頼、關根只誠、松岡明義、川邊御楯の諸氏があり、默阿彌自身もその一員に加へられてゐた。發企されたのは多分この興行の時であつた。

一、明治十九年五月、新富座にて『渡邊華山』を上演。藤田茂吉氏の「文明東漸史」に據つたもの。この時今の後藤新平子が高野長英を遊蕩児として取扱つてある點(？)に關して、劇場へ嚴重なる抗議を申込み、默阿彌を戰慄させたと傳へられてゐる。

一、同年十二月、新富座にて『伊勢三郎』上演。

一、明治二十年六月、新富座に『關ヶ原軍記』を上演。松本順氏から材料を提供されて執筆した徳川家康。

一、明治二十一年一月、市村座にて『會稽源氏雪白旗』を上演。「例の團十郎の古物調べ殆ど五月人形を見るが如しとの半疊もありたり」と、年代記には書かれてあるもの。

○

默阿彌が學者派の影響を受け、要求に應じて執筆したと見るべき、主なる作は大略上記の如くである。これで見ると明治二十年を以てその方面の執筆を絶つてゐる。尤も方面を異にせる作物の執筆も明治二十一年（七十一歳）を以て、殆ど終熄したかの如き觀を呈してゐる。たゞ「戻橋」、「一つ家」等の一幕物を發表してゐるに過ぎない。

一つは老齡の故もあらうけれども、演劇改良會が明治十九年八月に設立せられ、續いて演藝矯風會改稱日本演劇協會

の企てられたことと對比して觀ると、或は晩年を全うせんが爲に、筆を折つたものではあるまいかとの推測も、自然に湧いて來はしないか。さう考へると、默阿彌晩年のに心は涙なきを得ぬものもあるわけである。

演劇改良會、日本演劇協會の事に關しては、坪内先生の詳細なるお話があることゝ思ふから詳しいことは省略する。（もし大體の記錄を見ようとなれば、田村成義翁續々歌舞伎年代記四四五頁を御參照の事。）

演劇改良會の主張は、徒らに西歐崇拜的であり、あまり學者的、理想的であつた。甚だ過激突進的であつた。而してその趣意書の一節には、「本邦近時の脚本作者を見るに、其人は一も學術文章の士なく、徒らに陳腐の思想を左右彌縫し」と大いに狂言作者を論難した部分があつた。末松謙澄氏の起草したこの趣意書に對して、無一庵無二なる匿名によつて駁した「演劇改良論私議」の中にも「これら學力なき人物によりて作られたる演劇に向つて、閑雅の優美のと注文するは、途方もなき料簡違ひといふべし……兎に角、今の作者がいけないといふ一事は大賛成なり」といふことさへあつた。末松氏等即ち改良會に反對の立場にある人ですら、狂言作者をこんな風に觀てゐたのである。默阿彌並に默阿彌門下が如何樣の感を抱き、忿懣を感じなくてはならなかつたかは言ふまでなからう。

これまでは一般民衆から、憧憬の的になつてゐた芝居道の軍師として、評判記の上では、多くの場合幇間的な美辭によつて迎へられてゐたものが、直面して、汝等は無學無識である。その作物は猥雜野卑見るに堪えないものであると、洋行歸りの猪武者に罵られたのであるから、びつくり仰天した筈でもある。

然るに改良會の生れた時から三ケ月を經た明治十九年の十一月、默阿彌は攻擊ならぬ一篇の忠告書を、公開狀の形で受取つた。それは、讀賣新聞紙上へ四回にわたつて、朧月庵主人なる名の下に、今の坪内先生が寄稿された「河竹默阿彌翁に告ぐ」といふものであつた。其要點を抄出すると、左の如くになる。

第一、世間の好尙に媚る勿れ。一時の場當りを重んずる勿れ、下等にも上等にも媚る勿れ。翁の老練の才を以てして

これこそ人情の極意なるべし、これこそ現今の世態ならんと暗に感得せし美妙の廉のみを、着々其著述に寫し出し、これを劇場に上して見よ。

第二、脚色の奇を求むる勿れ。脚色は狂言の方便なり。脚色のみを重んじ、肝腎の人情世態を、さながら附屬のやうにするは演劇道の眞面目にあらず、故に脚色は見物を倦ましめざるにとどめ、強ひて奇を求むべからず。又例の勸懲とか高尙とかいふをかしな神魔物も放り出して、勝手に思ふままに人情を舞臺に躍らしめるやう綴り出されよ。

第三、外形を重んずる勿れ。演劇の美術たる所以は、正に彫刻と繪畫とを壓して無形の理を示すにあり。然るに萬端を外形主義、錦繪流儀に、序幕から結局まで殆ど錦繪で堅めたるが如きあり。これ實以て意氣地なき次第なり。繪よりは立ちまさりし身でありながら、繪工の眞似をするとは何事ぞや。(芝居の中せめて二幕位は、到底繪にもかけぬ、偶像にても出來ぬ……何とも形容し難い微妙の人情の極致を寫して、生な美學者の膽玉をエグリ、ギヤツと言はせ感心させて貰ひたし。

尙これら三項目の外に「勸善懲惡は本義ならねど、誨淫導惡は本義に違ふから、淫猥を避け、風俗紊らないやうにとの添書もあつた。

坪内博士の御直話によれば、此の忠告書は勿論默阿彌への忠告書ではあるが、その半面は、演劇改良會の主張に反對を述べたい爲ででもあつたといふ。道理こそ具體的に反對を唱へてはないが、反對的の氣勢は隨所々々にほのめいてゐる。此の忠先を默阿彌がどう受け取つたかは明らかでないが、感謝して値遇に感じたことは、其後出嫌ひな默阿彌が、舊知である饗庭篁村翁を介して、お近附になつたに徴しても明白である。

○

明治三十二年に設立された日本演劇協會は、二三年を出でずして頓挫した、演劇改良會の後を承けたものではあるが

改良會が極端に趨らんとするを抑へ、本邦劇の長所を保存しつゝ進歩を計らうとしたものであつた。土方伯を會長とし坪内高田の諸博士、岡倉覺三、依田學海、饗庭篁村、森林太郎、森田思軒、關根正直博士、尾崎紅葉の諸氏を文藝委員とし、默阿彌もその中に名を列ねてゐたといふ體裁のものであつた。實蹟をも擧げたのはこの會の方で、數回の試演を催してもゐる。

○

要するに、改良運動の諸會に對する默阿彌の態度は不鮮明であつた。又實際それより仕方もなかつたであらうと同情される。

＊　＊　＊　＊

此の稿は、甚だ不完全でもあり、首尾の一貫を缺く恨みもあるが、詳細ならずとも、述べんとする所は、大凡盡きたと思ふ。此の中には或ひは當らざるものもあらう、或は臆斷に過ぎた所もあるかも知れない。尚此の問題の如きは、興味ある、日本未曾有の演劇啓蒙運動であるから、他日の研究整頓に俟ちたいものである。（十四、十二、十日）

明治三十年前後

――讀者として――

生方敏郎

私たちの年輩の者は丁度明治文學の勃興時代に學生だつたから、自然明治文學は數多く見たわけだ。必ずしも後世に

傳はるやうな傑作ばかりでなしに、下らぬ物も斷片的なものも、すべて引つくるめて澤山讀んだわけである。

まづ少年時代——日清戰爭前後には巖谷小波氏卽ち漣山人を初めとして多くの少年文學者の筆に成る作品、及び「少國民」「幼年雜誌」「少年世界」「少年園」等の少年雜誌の數々を見た。

私たちの中學生時代には、「中學世界」が初めて博文館から創刊され、又中學程度の文藝雜誌として「青年文藻」其他類似の雜誌も現はれ、大町桂月氏の如き特に青年對手の文人も生れて來た。鹽井雨江、武島羽衣、大町桂月の三氏は明治三十年頃から新たに見え初めた名前で、當時の中學生から歡迎せられた。殊に博文館の雜誌は田舍までも行き渡つてゐたから、此等三氏は勢ひ田舍青年に悅ばれた次第である。併し、此三氏と限らず、當時の文學者の多くは彼等自身青年で、又青年の讀者のみを對手に書いた。國會開會以前、卽ち明治二十年頃迄の文人は假令彼等自身青年であつても、其書くのは大人のために書いた。經國文章は彼等の抱負であり、文章は大人對手のものだつた。

然るに國會が開けてから——委しく言へば例の品川彌次郞大臣のクウデタア以後に現はれた文學は、經國文章主義に依る文學ではなく成つた。文學は遊戲に成り藝に成り、青少年へのお伽話と成つた。

明治三十年以後——丁度私が上京した頃の殆んど總ての作家は、我々中學生どもの爲めに筆を揃へて小說と號する「青年の讀むお伽話」を書いてゐてくれた。彼等は我々中學生のお抱え文士みたやうなものだつたのである。

當時、坪內博士は筆を文藝に斷つて通俗倫理を早稻田に講じ、森鷗外博士は軍隊生活に隱れ、二葉亭四迷氏も稀にロシヤ物の翻譯を匿名などにて發表するに止まり、樋口一葉は旣に夭折し、文壇の中心は硯友社同人、幸田露伴氏一味の上に移つてゐた。多くの作家の中で露伴の作品は青年向きでもあれば大人向きでもあつた。又紅葉は後には「金色夜叉」の如き田舍青年對手の小說も書いたが、其多くは都會人對手大人對手の小說を書いたから、當時の批評家から二言目には紅露々々と囃し立てられて文壇の大立物に立てられてゐたに拘らず、案外田舍出の學生などの文學青年には理解し得

ない文學を書いてゐた。齋藤緑雨は春に自分が中學生お抱えの文人でないことを斷つた。「今の青年は緑雨を好まず、緑雨は今の青年を好まず、お互ひ樣也」などと言つてゐる。之は他の子供くさい連中——センチメンタリズムの似而非文士諸氏と自分とは決して同類に非ることをお斷りして、一面當時の文人を罵倒したものでもあつた。緑雨の云ふ青年とは、大町桂月等の新學士を指したもので、桂月は今にも言つた通り中學生お抱えの青年文士であつた。

併し、桂月は緑雨に何う罵られても、青年の中に尤も人氣を持ち續けたのみならず、彼自身已れの本領を理解して終生中學生の師友たるに甘んじた事は、賞讃に價ひすると思ふ。

一體に二十年代に盛んだつた作家は、三十年代へ來て沈默した傾きがあつた。ちぬの浦浪六は前に三日月、奴の小萬又は當世五人男などを以て讀書界の人氣者だつたが、此頃はトンと評判も無かつた。山田美妙の名は誰一人語る者無くたま〳〵語ればそれは惡い評判ばかりだつた。紅葉も「金色夜叉」くらゐの他は餘り書かなかつた。尤も此「金色夜叉」を書く作家の苦心談は可也しば〳〵報ぜられて、彼をしてます〳〵大文豪として奉らせるだけのことはあつた。併し實際の成績は擧らなかつた。露伴も評判は大きかつたが作品は少なかつた。その「二日物語」は短編。その「天打つ波」は梶田半古の挿繪入りで讀賣新聞に連載せられ、讀書子に期待せられたが之も尻切れ蜻蛉に終つた樣に記憶する。露伴は其後「出廬」と呼ぶ長編の詩を同じ新聞紙上に連載したが、もう大分疲勞の色を見せ、それ以來却つて出廬でなくて入廬の運命と成つてしまつた。氏は招かれて京都大學に趣き、玆に文壇を去つたのである。

明治三十五年前後、前時代の二流作家江見水蔭等の書くものは、青年讀者の眼からさへもたわいない物と見做され、川上眉山は「懷日記」以外のものでは遂に一人前の文士と見られないで終つた樣に思ふ。死に樣が死に樣であつた爲めに、そんな點から今日までも私達の記臆に殘された丈けのものとしか思はれない。

柳浪鏡花春葉宙外等は、惡い時代に生れて氣の毒と云ふの他はない。其中、鏡花は近年稍や返り咲きがしたかの觀も

あるが、彼等は何れも其盛んに世に出で持て囃さる可き時代を、紅葉露伴等の大家あるが爲めに頭を押へ付けられて通した。殊に廣津柳浪に於いて其感が深い。

柳浪は「今戸心中」を以て現はれ、その後「もつれ糸」「目黒小町」「骨盗み」等の短編三部作に依り其名高く、「河内屋」の如き深酷小説の名を附けられるほどの深酷な持色を見せたが、世は紅露在るを知りて新進作家あるを知らず、遂に彼は第一人者と迄の人氣は得ないで終つた。出た時代が惡かつたのだ。

鏡花も早く「三尺角」や「夜行巡査」の如き短編物を書いた抑もから、其特色は認められたに拘らず、頭の上には御大紅葉が燦いてゐたので、讀書界にあれ程多くのフアンを持ち得たに拘らず、覇を文壇に稱へることなくして過ぎた。

併し鏡花は「高野聖」にせよ「湯島詣」にせよ「三枚續き」にせよ「黑百合」にせよ「通夜物語」にせよ、又其尤も特色的な「錦帶記」にせよ、學生にも藝者にも官吏にも商人にも多數の讀者——讀者と云ふより狂熱的なフアンを得たことは、以て瞑す可しである。鏡花の作、之を讀まざるものは二つ三つとは讀まざる可く、之を讀む者は悉く集めて悉く讀む可し、と云ふ趣きがある。私なぞも小説と云ふものに逆上せ詰めた時代があつたとすれば、それは鏡花氏の作品を讀んだ時代であらう。

明治三十年代の初期からつい先年まで、殆んど五年に一度位づつ周期的にだが、突如として天の一角に現はれて燦然たる光輝に讀書界を眩惑し去つた文星に德富蘆花氏がある。彼は單に文學青年や小ボケな文壇對手のケチくさい文人ではなかつた。去りとて彼は村井弦齋の様な通俗專門の作家でもなかつた。文壇と通俗とを二つ一緒にして向ふへ廻し其名にし負ふ健筆を振つたのは、彼一人であつた。彼は尤も其デヴュウする時から、他の文人の持たぬ二つのトクを持つて出て來た。その一つは國民新聞を背景に持つことである。他の一つは蘇峯學人德富猪一郎氏を其兄に持つといふことである。當時蘇峯氏は例の勅參事件に依つて其人氣は九天の高きから九地の底へと失墜してゐた時だつたけれども、而

かも尙ほ蘇峯崇拜の殘黨はまだずゐぶん存在してゐた。少くとも誰しも蘇峯氏の令弟と聞いては多少好奇の心を以て、其處女作「不如歸」を迎へたことは爭はれぬ。

時に世間に軍人崇拜熱の最も高き日清戰役後であり、小說の內容は此戰爭を背景とした軍人の家庭生活であり、新舊思想の衝突といふ新らし相な招牌あり、加ふるにモデルは時の最大人氣外征將軍大山巖侯の可憐哀切の息女である。責め道具は揃つてゐた。盛んに賣れて盛んに讀まれた。賣れる〳〵と云ふ評判のために又賣れた。

中學校の寄宿舍の中に、紅露の文學を共に談ずる仲間は兩三人を出でなかつた。而かも「不如歸」を讀まぬ學生は唯の一人も無かつたといふとも決して過言ではあるまい。と云ふと甚く抽象的な論文口調に成るから、茲に細かいお話を申し上げてもいいが、私のゐた明治學院の寄宿舍――ヘボン館には八十二三人の舍生が起居してゐた中に、今生きてゐるか何うか泉廉治(れんぢ)といふ男が一寸二ケ月ばかり入つて來た。優しい銀流しで女みたいな青年だつた。前の下宿を細君と關係した如く疑はれて亭主に追ひ出され、依つて寄宿舍へ移つたなどと自ら艷聞を語る――その頃の學生は男色關係を誇りとし女色に就いて語るものは文學青年ででもなければ他になかつたらう。彼はよく私たちにブンダンといふ言葉を語つた。それが今思ふと文壇のことである。彼のみは其頃の二流三流の作者物をも讀んでゐた。其後三津木春影が來て此人も時々ブンダンだのケンユウシヤだのいふ言葉を放ち、文人の樂屋話をして私たちを驚かせた。今の文學青年が作品はロクに讀まずに文壇の樂屋話のみに詳しいのと較べると、餘程勝手が違ふ。その他純文壇的の創作に就いて語る仲間は幾人もなかつたが、蘆花氏の「不如歸」は小使でも讀んでゐた。

その後、「自然と人生」やら「思ひ出の記」や「黑潮」など何れほど多く學生の間に讀まれたことか。今なら學生雄辯會辯士といつた手合の演題にさへも、蘆花氏の作品は問題とされてゐた。併し氏は三十五年に「黑潮」を見せて以後、慧星の如く人々に仰ぎ見られて又慧星の如く數年間姿を消してしまつた。

（玆に一つエピソードがある。それは時代は少し後に成つて明治四十年頃かと思ふが、この蘆花氏の「不如歸」と人氣較べをした催しがある。何でも本郷座邊でやる壯士芝居の脚本を極めるために、或新聞で投票に依り脚本を募つた。其時、「不如歸」の上に遙に突破して最高點數を得たのは草村北星といふ一介無名文士の「濱子」と呼ぶ小說だつた。私たちは驚いて早速その「濱子」を買つて讀んだが、裝釘のみハデで美しいがサツパリ詰らない。何でこんな物が一等に當選したらうと怪しみ訝つたが、新聞の裡面も社會の內幕も知らぬ靑年に、その手品が分らう筈が無かつた。後にてこの草村北星といふ人は書肆隆文館の支配人である、ことを知つた。いくら金を使つたものやら知らぬが、わづかの金力は一寸の間よく「濱子」をして「不如歸」以上の人氣ありとして世間を欺むくに足りた。あの時代でさへも金の有る本屋の番頭さんは一流小說家以上の評判を買ふことが出來たのだ。現代の樣に一山三文のゴシツプ書き共が未だ殆んどゐなかつた時代ではあつたが。

この時代――明治三十年代は、日本も既に戊辰革命を經ること三十年、各方面の制度略々整ひ、社會は恰も重箱へ詰め込んだやうにキマつたものと成つてゐたが、唯文學の方面は此時分に來てゴダ〳〵と革進騷ぎが起つて來た。種々の方面に種々の舊物打破が行はれた。例へば、ホトトギス派の俳句の運動、新詩社等の新派和歌の崛起、新體詩人の一群等、等、等であつた。中でも尤も目覺ましいのは正岡子規の率ゆるホトトギス一派の俳壇復古運動であらう。月並などいふ新語は其時作られたのだ、が今は誰でも使ふ言葉と成つた。蕪村の輪講など俳句を造らぬ學生までも悅んで讀んだ。その寫生文もよく一代の風潮を作つたと云へやう。

得體の知れぬ三文文學雜誌が澤山市場へ並べられた事は恰も現代と酷似し、宣傳運動は仲々うまかつた。別けても宣傳上手だつたのは與謝野鐵幹等の新派和歌運動で、その機關雜誌明星の編輯振りなど新らしく、星だの菫だのを多く歌つたので、世間で惡口して「星菫派」などと彼等を呼んだ。その功績を云へば多くの新人を世に紹介したことだが、和

歌その物から云へば、彼等が口で云ふほどの實功は騷いだ割には擧らなかつた。その點では子規は偉い。子規の稱へた萬葉ぶりは其當時評判にも成らなかつたが、後年に成つてみると萬葉ぶりは歌壇を支配してゐる。

だが、歌壇への眞面目な功績は別として、明星派が一部文學青年の血を湧かせたことは事實で、去ればこそ又一方に非難の聲も高かつたのだ。一寸近頃流行のゴシップ式に成るが、興味本位で御紹介すると、與謝野鐵幹氏の全盛時代に何所のいたづら者か突如として「文壇照魔鏡」なる一書を現はして、彼及び夫人晶子氏をメチヤ〳〵に人身攻撃した。その目次位は今も尙記憶してゐるが、此所に記すに忍びないほどだ、與謝野氏の方では告訴するとまで立腹したが印刷所さへ何處であるやら一切證憑が擧らぬため、それなりけりの泣寢入りに終つた。

小杉天外と云ふ小說の新作家が盛んに其名を賣り出して來たのも、その頃だつたらう。「戀と戀」「夫婦星」「流行唄」など續々として公刊し、寫實主義と稱する描寫法を自ら揭げて出て來たが、此人も仲々青年の間に愛讀者を得た。それから女學生を描くに得意だつた梶田半古の挿繪入りで「魔風戀風」の長編を讀賣へ連載した――それは多分日露戰役中の頃かと思ふ――其頃が此人の絕頂ではなかつたか？

さうだ。私は硬派の方面を語る機會が無かつたが、三十年代の初期、論文家としては竹越與三郞山路愛山諸氏の如き民友社系の人々が活躍した時代があつた。私の上京當時まだ古本屋の店頭に志賀重昂氏の日本風景論や何かも見られたが、竹越氏の二千五百年史は大分青年讀書子の間に大持テだつた。そこへ新渡戶稻造氏が米國から歸り英文"Bushido"を公刊し非常なセンセーションを學生の間に起した。私のゐた學校などでは之を敎科書に用ひるやら新渡戶氏の講演を請ふやらで、私たちは特に講演後接件役として氏の謦咳に接したのを、甚だしく光榮に感じたものだつた。

又、內村鑑三氏が非常な人氣で、その主幹する「獨立評論」のキビ〳〵した警世的慷慨とその該博な科學的知識とは大に吾々青年を悅ばせたものだつた。氏の崇拜者は實に澤山ゐた。

宗教界にはリバイバルが起り、市内の各教會は歳暮の街の賣出しの如き景氣で毎夜提灯を點け、之を大學傳導を稱へて日々數十の受洗者を出した。學生が辻々で聲を枯らして路傍演説などしてゐるのも見られた。

倫理問題が今日の社會問題の如くに諸所で戰はされた。安部磯雄氏をはじめユニテリヤン宗の人々の講話は、青年學生を引き付けた。そこから初期の社會主義が生れて來た。經濟よりも寧ろ道徳から日本の初期の社會主義は生れたのだそして之は學生の間に一時壯んだつた。日露戰役の初まる迄年々に盛んに成つて行つた。その中に國家主義帝國主義を稱へる者が盛んに現はれ、新聞などは何れも猛烈に社會主義及び主義者を攻撃してゐた。又は主義者に對し同情の無い書き方をした。之は現代とは正反對に見える。

坪内博士が文筆を抛ち早稲田大學の講堂に在つて專ら通俗倫理を講じられたのも此三十四五年頃だ。尤も博士は其後歌劇に就いての抱負を發表し「新浦島」を公刊して、待ちに待つたる讀書界を驚嘆させた。(だが之は文藝協會の事業として後時代の項に其説明を讓らねばなるまい)

「太陽」に據つて高山樗牛が氣を吐いてゐたのも此頃だ。彼はニイチエ主義者として、「平清盛論」「本能滿足論」「姉崎嘲風に送るの書」等、等、等、こと〳〵く我々若者を驚かせた。我々は互に引つ張り合つて「太陽」を讀んだものである。すると、又一方馬骨人言なるものあり――ハテナ此馬骨人言は論文の題目だつたか、夫れとも著者の匿名だつたか、今一寸失念した――讀賣紙上でメチヤ〳〵に樗牛のニイチエ主義を揶揄翻弄したものだ。我々心の定まらぬ若者は、樗牛におどかされ又此馬骨人言に叱り飛ばされ、「一たい之は何うしてくれる」といふやうな次第であつた。いや、今考へても實に面白かつたなあ。あの頃は。

岡島梁川が「見神の實驗」を公にしたのも此頃だらう。

恁ふしてゐるところへ、日露戰爭がおつ初まつた。チャン〳〵バラ〳〵だ。號外だ。繪葉書だ。市内は兵隊だ。

之からは戰爭中の文學で、私の記憶は益々新らしく益々面白く成るのだが、迚も手輕には語れないから、又此次のことにして今日は御免蒙らう。此戰爭中に紅葉綠雨は死ぬ。夏目漱石が出て來る。國木田獨步の「武藏野」は出る等、等、等だ……

（以上、皆ウロ覺えの記憶のみを辿りてメートルをあげたこと故、年代や書名など少しは違つてるところが有るかも知れません。何れ又もつと完全なものに書き代へてお詫びします。讀者諸君、左樣なら）

小說『無花果』前後

中村吉藏

あの當時の「日記」をくりかへして見たら、もつと詳細な、精確な事が書ける筈だが、その「日記」が、何處かの隅の方へ、押込んであるらしく、一寸とさがし當らぬから、おぼろげな記憶を辿つて書く、隨つて、前後したり、間違つたりする事がないとも云へない。

唯、近頃刊行された高木文氏編「明治全小說戲曲大觀」といふのが手許にあるので、大きに便利だ、これは相當信用を置いて善い書物らしい、あの小說「無花果」などの事を今更今彼と書立てるのはをこがましいが、それにつれてあの前後の一時代の文壇の見聞錄を手當り次第に書きつゞつて見るのも、何かの參考にはなるかも知れない、そういふ意味で臆面もなく筆を取る氣になつたのだが、「無花果」は大阪每日新聞の懸賞小說に應募して、幸ひ一席に當選したもので

選者は逍遙、紅葉、露伴の三大家であつた、その中では露伴の點が一番辛らかつたのを記憶してゐる、新聞紙上へ掲載され始めたのは三十四年五月で、てうど泉鏡花の連載物「通夜物語」の後を受けたわけである、完結後は大阪の金尾文淵堂から出版されて忽ち十餘版を重ねるといふ人氣であつたが、その初版の表紙は當時「明星」などの挿畫家として賣出してゐた一條成美の意匠で、金の十字架に蛇がまきついてゐる、風變りの構圖が珍らしかつた。

當時の批評家、高山樗牛はトルストイの「復活」くさいものだが、今時の小説に比べれば一異彩だといふやうな事を云つて大分推賞されたかと思ふ、今時の小説といふのは勿論硯友社一派の作をさしてゐたのである、杉村楚人冠は「新佛教」でこの小説を「復活」の模倣作だとか、飜案だとか云つて、サン／＼にコキ卸ろしたものである、實は作者の自分は、まだ「復活」なんか讀んでゐなかつたし、筋もロクに聞いてはゐなかつたので唯、苦笑してゐる許りだつた。

それはまだ善いとして、三年程前に出て、大に歡迎された蘆花の「不如歸」や、一年程前の、幽芳の「己が罪」や以後の一二年間に續出した田口掬汀の「伯爵夫人」や草村北星の「濱子」などと共に、善い加減に批評家たちからこれに光明小説、乃至家庭小説などといふレッテルを貼られ、ついに家庭小説家などといふ名詞まで無理押付に頂戴させられたのは今から思ふと隨分迷惑な話であつた、尤も當時はこの所謂光明小説、家庭小説が文壇、乃至社會の人氣を獨占するといふすばらしい勢ひではあつた、しかしやがて反動期がやつて來て小杉天外の寫實主義全盛時代となり、更に自然主義運動が擡頭するといふ段取になつてゐる。

小説「無花果」は光明小説とか、家庭小説とかいふわけのものでもなく、勿論、作者の體驗をそのまゝ書いたのでもない、ロマンチツクな、理想主義的肌合の一青年が、自由に想像力を働かせて、人生に對する疑義と、その疑義を解決する爲めに、キリスト教的信仰とを交錯させて小説に纏め上げた丈のものである、今から見ると幼稚千萬で、所謂舊思全書の一つに相異ないが、唯、理想主義的要求といふ事が作者たる自分の一性向として、或意味で先天的のものらしい

といふ點には聊か思當る節がある。

それはそれとして、明治三十二年、三十三年時代は自分は、廣津柳浪（敬稱を省く）家に寄寓して、早稻田專門學校英文哲學科に通學してゐたのだが、その頃は柳浪全盛時代で紅葉は大分影が薄くなつてゐるやうな氣持がした、最も例の持病が手傳つて「金色夜叉」を書き澁つてゐたせいもあろうが當時「新小說」と共に文藝雜誌の檜舞臺ともいふべき「文藝倶樂部」などには柳浪の小說が殆んど缺かさず載せられて、それが又世評の中心になつてゐた觀がある、「乳もらひ」だとか「雪見酒」だとか、「目黑小町」（新小說）だとか、は自分が寄寓してゐる間に、書かれたもので、その執筆ぶりが又變つてゐる、何んでも夜晩く筆を執り始めて、夜が明けてからも、雨戶をとざしたまゝ、ランプの下で書きつゞけられる、梟のやうだ」とか、誰かゞ云つたものである、勿論こうした習慣は、文士の中には別に珍らしくもないが、隣近所では不審がられたらしい、そして筆は早い方で調子が乘ると一晩に二三十枚位は行けたやうに憶えてゐる、或時內田魯庵が訪ねて來て、「雪見酒」を激稱してゐるらしい話聲が、奧の室から一々洩れて來るのをつい耳にした事もある。

永井荷風は柳浪の門下生として折々訪ねて來た、黃八丈か何か（？）の長羽織を着流してイヤにニヤケた風采なので自分には今丹次郞とでも云ひたいやうな氣持がして、親めなかつた、勿論、一方は所謂都會肌であり、此方は田舍者丸出しだから、自然、互に寄り附けなかつたのかも知れぬが、双方で打解けて語る機會も作られなかつたので、別に交際といふ交際もしないで過ぎて行つた、荷風がそうした風采である上に、三味線が上手だなどといふ事を聞かされては、愈々以てたまらないと思ふ程、その當時の自分は所謂、朴念人であつたらしい、隨つて小說家志願とか小說修業などいふ事に何んとなく輕蔑と反感を持つてゐたのである、そのくせ自分にしても別に哲學者にならうとか、宗教家にならうとかいふ程のハツキリした自意識を持つてはゐなかつたやうだが、何んでも小說を哲學や宗教と同等以上のレヴエルにまで引上げやうなどといふ漠然たる信念をこさへてゐたのかも知れない。

又、その頃、田村松魚が慥か「帝國文學」で、中内蝶二か誰かに、「天才」とまで褒め上げられて、一時は盛んに人氣があつたのである、そして北廓に情人が出來て、大分熱度が高いといふ噂まで當時のゴシツプに上つた。慥か博文館の養子文士として羽ぶりのよかつた大橋乙羽邸に、松魚は寄寓してゐたと思ふが偶々乙羽を訪ねて行つた序に、松魚に逢うと、緋ぢりめんの長襦袢を着てゐたのを見せびらかされた記憶がある、俊子女史は、松魚と、その情人との同棲後、更に三角關係が生じたので、松魚の渡米となり、その歸朝後に、晴れて田村俊子と名乘る事になつたのであらう。

露伴門下には、松魚を始め、米光關月、神谷鶴伴、藤本夕颷、それから俊子の露英女史などがゐたが、米光關月は、「大阪毎日」の懸賞小說の時に、第二席で「薄墨の松」といふのが當選した、その後、雜誌小說も書いてゐたやうだが大して現れず、養鷄事業か何かに、身を入れてゐるとも聞いたが、已に故人となつたやうだ、何んと云つても、女流小說家としてその後賣り出した田村俊子女史が露伴門下の唯一の異彩であつた「一葉女史よりゑらい」などと一時、評判されたのは、近頃の事だから大抵の人が知つてゐやう。

三十四五年代に、新作家で最も有望視されたものに柳川春葉がある、春葉も新聞小說家で終つたが、あの頃は、競爭者であつた德田秋聲などよりも、もつと優れた大物になりさうに云はれたもので三十四年三月の新小說誌上の「遠砧」などから注目され十二月の同誌上の「錦木」などは、なか〳〵好評であつた、じみな、控へ目がちな描寫の中に、人の心核に迫つて來るものがあるやうな感じがして、これは將來畏るべき作家だと思はされた一時期がある。

書けばまだいろ〳〵あるが、大ていにして置かう、イヤ、昔語りなどするやうになつてはもう人間も老境に入つたのだ、自分も、もうさうなつたのかと思ふと、少々心細くもなる。

樗牛前期の詩評

——詩評家としての高山樗牛（一）——

日夏耿之介

（まとまつた批評を試みるつもりであつたところ、微恙を得て果されぬので前牛期だけの小感なものとして責をふさぐ。樗牛後牛期のそれ、及び全體としての詩評の價値については次號に筆をつゞけたい所存である。）

高山樗牛の詩評は、かれの批評の重大な部分では決してないが、當時他に異彩を放つた評家が多くない故を以てしてだけでも、明治文學史上に於て、一瞥を試みる價値はある。

先づほゞ編年史的にかれの著作中から詩歌に關する論議を抽出して見ると、（增補縮刷樗牛全集による）

第一期　明治二十四年六月ヨリ明治二十九年十月マデ

詩人と模倣と天然（「太陽」）

詩人と模倣　明治二十九年二月）

自然の詩人（明治二十九年二月）

天然と田舍（明治二十九年六月）

新體詩形論　(明治二十九年一月「太陽」)
新體詩のけふこのごろ　(明治二十九年二月「太陽」)
今日の新體詩歌を警醒す　(明治二十九年四月「太陽」)
抒情詩及び叙事詩界　(明治二十九年十月「太陽」)
詩歌宗教及び道德　(明治二十九年五月)

第二期　明治三十年六月ヨリ 明治三十三年七月マデ

詩的の兩面と其利弊　(明治三十一年三月「時代管見」)
ワルト・ホイットマン　(明治三十一年五月「時代管見」)
僞詩人とは何ぞ　(明治三十一年六月「時代管見」)
詩歌の所緣と其の對象　(明治三十二年二月「帝國文學」)
友人某に與へて昨今の文壇を論ずる書　(明治三十二年七月「太陽」)
土井晩翠に與へて當今の文壇を論ずる書　(明治三十三年二月「文藝評論」)
朦朧派の詩人に與ふ　(明治三十年七月「太陽」)
朦朧體の末路　(明治三十年九月「時代管見」)
新體詩家の新體詩評　(明治三十年九月「太陽」)
晩翠の詩　(明治三十年十二月「太陽」)
『天地有情』を讀みて　(明治三十二年六月「太陽」)

詩人唱はず（明治三十一年三月「太陽」）
詩人と批評家（明治三十二年九月「太陽」）
詩人と史家（同上）

第三期　明治三十四年一月ヨリ明治三十五年十一月マデ

土井晩翠を送る（明治三十四年七月「太陽」）
明治三十四年の文學界（明治三十五年一月「太陽」）
五、進歩せざる新體詩

以上諸篇を得べく、その内で、一般詩壇論、詩の本質論、形式論、對社會論等の諸篇を付けて、純粋に詩評と見るべきものの内で些かでも鑑賞のあとが具體的に表はれてゐるものを求めると、前掲表中圏點を附した數篇にすぎない。而も、その數篇の傾向は主として土井晩翠を賞美の心緒と彼のいはゆる朦朧派を排斥せんとする精神との二を出でない。

そこで、先づ樗牛が武島羽衣を評した一文をとつて見ると、羽衣の詩『小夜砧』は形の上よりは叙事詩と見るべきであるが、これを抒情詩と見れば（圏點は原文通り以下同じ）

『洵に意味深き作なりと謂ふべし。秋夜思婦の心、麻に亂れ火に燃え、世に遣る瀬無き一念の幻に、吾身ばかりの現を寄するもの情誠にかくもあるべくや。文辭の精錬典雅なるは言はずしあれ、再讀三讀すれば、幽玄一物の微、我心に冥契するもの有るを覺ゆ。世の徒に詞藻を富麗にして俗耳を娯ましむるものと自ら徑庭あるが如し。吾等は武島氏が是の

詩篇を近來有數の作と稱ふるを吝まじ。』――「縮刷全集第二卷」一七八頁。

と推賞し、ビュルゲルの『レノレ』の換骨脫胎に相違ないが、この有名な詩はスコツト之れを英譯して William and Helen と題してゐる、「テーロル」「スペンサー」などいふ詩人の異譯もあるが、スコツト本は飜譯の常として原作の妙を缺いてゐる處が尠くない。而も『レノレ』と『小夜砧』とは大意は同じであるが主意は異つてゐる。前者は『記實的』で、後者は『純主觀若くは抒情的』である。卽ち、後者は前者の「事實を取りて之をフアンタジー化したるもの」であるとし、後者は『記實的筆法』をなるべく避けて「專ら婉微恍惚の文字によりて夢現の境を叙せむと務めた」らしいと推斷し、さて「美はしき馬上の道行の終り」で、後者が

物も覺えぬけうとさに
あたりの景色ふと見れば
人氣たえたる古寺の
半ばやれてぞ立てりける。」

と叙したに對し前者は

Rasch auf ein eisern Gitterthor
Ging's mit verhängtem Züyel;
Mit schwankter Gortein Schlag davor
Zerspringte Schloss und Riegel.

と「明に書」いてゐるのに比べると「兩者の差別」が判る。「但し、夫の行方を共によりほのかしたる用意は、武島氏亦之を怠らず。『あはれ、吾夫待ちねかし、寢よとの鐘も打つなるに、こよひは馴れし我閨（？）のなごやが下に明して

てよ』と言へるに、夫は答へて、

あな心無のいいごとや
　來む年月の末かけて
千代に住むべき我宿を
　いそぐに何か憂かるべき。

と言へるは、『レノレ』の夫が妻に答へて、

Weit, weit hiei. still, kükl und klein;
Sechs Bretter und Jwei Brettchen

と言へるに比して其深刻及ばずとするも、溫雅は勝ぐれたるが如し。吾等を以て見れば、ビュルゲルのは少しく露骨に失せるに似たり。スコットが之を英譯して

'Tis distant far, low, damp, and chill,
And harrow, trustless maid.

とせしに比すれば、武島氏のは數層巧なるが如し。……鬼氣讀む者を悚らす如き馬上の問答の代りに、夫を形容して『霧のまがいに影薄き』といひ、『身は朝影と細り』と示せるが如き、少くとも妻が夫を抱きて、

But why so stern and cold?

と怪める様にせしスコットの譯のありのまゝなるには優りなむ』 ——全集第二卷一八一——一八三頁。

と評してゐる。以上長々と引證したが、これを見てほゞ樗牛當年の鑑賞及び批評のセンスル能力と標準の有無とを推測することが出來よう。

羽衣の『小夜砧』はかれの作中では佳品であり、『身は朝影と』云々のパツセイヂは樗牛の引證した通りに巧妙の措辭には相違ないが、明治初年の長歌作者から『新體詩歌集』著者等及び落合直文、大西祝、大和田建樹、山田美妙齋その外の原史的新體詩の發達の徑路を考へて、一たび優秀卓拔な譯詩集であ、るS・S・S社の「おもかげ」に眼をそそぎ、さて、二十年代末期から三十年代初葉かけて榮えた所謂大學赤門派の擬古詩人の一人である羽衣の詩業を一わたり調べて見て今日のわれらから彼の立場と價値とを考へて見ると、如何に過渡時代の青年詩家の試作にすぎなかつたといふハンディキャツプを念頭に置いても、樗牛が價値づけたやうな爾く秀でた詩價をこの『小夜砧』一編の上にとても置くわけにはゆかない。

特に樗牛は、鑑賞に於て全然的はづれではなかつたにも係はらず、價値づけの標準に於ては著しい見當ちがひを粗雜な心構へのままで行つたために、かへつて『小夜砧』そのものゝ正當の位相を、ともすれば僻感をもつて多くの傍人に迎へさせるやうな結果をさへ惹起してゐるのは允しがたい缺陷であつた。

卽ち、獨逸詩人の作意と「小夜砧」の作家のそれとの比較を見よう。これは、よしんば後者が構想上の暗示を前者から受けたものにもせよ、樗牛自らも末文に於て辯解的に、

「斯く書振の異なるは、前にも言へる如く、主として想の相同じからざるに因るなれば、强ち之を以て彼此を上下せむとには非ず。武島氏をビュルゲル、スコツトに較べ得べしとは倘更ら思はず、只武島氏の此一編は、一個の抒情詩として又一個の飜案物として、注意すべき價値あることを述べたるのみ。」――「全集」第二卷一八三頁

と說明してはあるけれど、かりにも如何の意圖のためにもせよ、民族と時代と國家と言語とを全く異にする二個の作家の詩品を比較する以上、比較の底意に兩者の立場を正當に認めた上で比較の可能なことを肯定してゐるだけの準備がなくてはならぬのに、右に引證した比較の如きは、表面上兩者の位相を認めてゐるにもかゝはらず、比

較その事は全く不可能で、ひがごとで、横紙破りで、比較のための比較で、更に詮索をたくまうしうして云へば、當時としては立派な知識であり、學者としての大條件であつた外國文學、英獨詩を引證しての比較が學者的論文制作心理に於ける一個の快感であつたがためにこと更らに云はずもがな、無くもがなの比較を、それも餘計の個處にまで及ぼして羽衣詩を推賞するの材料に供してゐるなどは全然無用の仕儀であつたといはねばならぬ。

ビュルゲルを「少しく露骨に失せる」とし、その「深刻」は及ばぬけれど「溫雅」は羽衣の方卓れゐるといひ、又、

But why so stern and cold ?

のスコツト譯の「ありのまゝ」を斥けて羽衣の「温藉縹渺」をあげた如きは、「一個の抒情詩そして又一個の飜案物として、注意すべき價値あることを述べ」るためにもせよ、詩の根本作意に對する批評の態度が、民族的國民的詩歌の本質を亡して單なる自己の文學上趣味の好憎感に立脚する甲是乙非の判別に外ならぬ素人評に近い粗笨の視察を形してゐるにすぎぬため、つひに文學高等批評上の最後の重要問題に接觸してをらぬ缺點がある。

樗牛の批評は、啻にこの一文のみでない、數多くの書生論に近い快氣焔が、頭のよい論理立てに飾られ、相當に讀みあさつた博識に裏附けられて、當年の文學作品としては最上の意味のジャーナリズム的所産としての價以外何物もないものが少くないのである。

『新著月刊』發行と其の環境

後藤宙外

文藝雜誌『新著月刊』は明治三十年四月三日に第一號を發行しました。發行所は神田今川小路の東華堂といふ新書店で、主人は私と同鄕の秋田縣人柴田資郎君であつたのです。當時東京で發行されてゐた純文藝雜誌と云へば博文館の『文藝倶樂部』と春陽堂の『新小說』だけで、金港堂の『都の花』は旣に廢刊になつて居つたと思ひます。そこで早稻田の文學科出身の純文學に趣味を持つた水谷不倒、嶋村抱月、それに『早稻田文學』社員であつた伊原青々園の諸君などの間に創作專門の舞臺がほしいと常に話してゐた。それが確かに動機の一つであつたけれども、發行するに至る原因は外にもう一つあつたのです。

明治二十九年の秋頃かと記憶するが、嶋村抱月、伊原青々園の兩君と私が、坪內逍遙先生の大久保余丁町の表座敷が早稻田文學社の編輯室に兼用されゐた、その室で我々同人が一つ都下に大新聞を發行して見たいものだとの話をしたものです。私は諸君が堅い決心を以て起ち、又坪內先生が參加して應援して下さるなら、資金の出所は必ずしも困難では無い、私の同縣人で、しかも私の從弟で親友の間柄な小西傳助君（先代の小西君で、今の小傳氏は法學士辯護士で秋田市にゐる）は相當の資產家であり、新聞を發行して見たいと云ふやうな話をして居つた事もあるからと我々の希望の可能性ある事を力說した。忽ち塾議が調ひ、我々三人へ更に小杉天外君と、小西君との關係から考へて、私の從兄の有明文吉君を會計主任に推し、更に同君と親交ある柴田資郎君（後の東華堂主人）を營業部の一員に加へる事まで段取を定め

而して坪内先生に賛成して戴くやうに懇願したのです。案外先生も御同意であつたので、先生のお宅に小杉天外君と我々三人（有明文吉君は參加したか否か記憶は確でない）に坪内先生にも臨席して戴き、内協議會を開いた、文藝及び軟派方面の主宰には坪内先生を戴き、硬派の方は三宅雪嶺先生に内藤湖南君を据ゑ、編輯顧問には斯道の老練家野崎左文翁に交渉する事に話を纏め、營業主任は斯道の練達者を得て一任する事に決し、標題まで選定したやうに覺えてゐる。此の計畫に就いては故小西傳助君が私から書面で交渉を開き、同君も大に乘氣になつて居るので、我々の胸は希望の光に輝いてゐた。然るに小西君の心を最も堅く握つてゐた柴田資郎君は、此の話を聞くと、會計主任は僕が引受けると云ひ出して來たのです。柴田君に縱横の奇才ある事は私共も知つて居るが、何しろ放縱不羈で始末におへぬ方面もある事を十分知つてゐた私達は、是れには大反對であつた。「柴田が會計主任では前途は沒落だ」と一齊に悲觀の聲を擧げて躊躇する事になつた。柴田君は其の後機敏にも秋田に下り、親しく小西君に說いて、我々の排斥運動の裏を搔いたのであつたらしい。それとも知らず、兎も角書面の往復では十分意思の疏通ができぬから、直接小西君に遇つて懇談して見るがよいと云ふので、有明文吉君と私とが二十九年の歲末に秋田へ赴いたのです。途中岩手縣の湯田村湯本の寂しい山間の溫泉宿で、二人が頻りに說得の方法や柴田の會計主任不可論などを練つた事など今も明かに思ひ出されます。

小西君に遇つて諄々と說いたが、才人柴田資郎君が先廻りして既に我々の計畫を顚覆してしまつてゐたのだから仕方がない。小西君は新聞發行は色々事情あつて決行しかねる、と斷然と退けられてしまつた。有明君と私とは悄然として空しく歸京するの外はなかつた。

その年の暮か翌年の春匆々かに柴田君は小西君の出資で、今川小路に堂々たる書肆を開店し、法律書類を出版し始めた。血の氣の多い我々は柴田君に對して多少憤慨したものです。それと小西君も氣が付いたものと見え、三十年の正月頃上京して、「既に柴田が書店を開いた以上は、諸君も從來の行きがかりを忘れて應援して戴きたい」と云ひ出した。こ

れが導火線となつて『新著月刊』を柴田君の東華堂から出す話が起つたのです。

東華堂との交渉は一切私が引受け、編輯の方は嶋村、伊原、水谷、小杉の諸君と塾議を遂げ、私を加へて五人で丁酉文社といふものを組織し、此の社から『新著月刊』を出す事にしました。そこで明治三十年四月三日、紀元節の佳辰を選んで第一號發行と共に向島中の植半で創刊披露の宴を開き、文壇及び畫界の諸先輩を招いて此の雜誌の首途を祝したのであります。此の席に臨まれた諸名家の中に確かに覺えてゐるのは、依田學海、宮崎三昧、饗庭篁村、森田思軒、大町桂月、白河鯉洋、藤田劒峯、野口寧齋、大野洒竹、寺崎廣業、富岡永洗その外猶十數名あつたやうであるが、三十年前の事なので、一々は記憶してゐません。我々同人の方は嶋村抱月君が代表して挨拶の辭を述べました。

『新著月刊』は今私の手許にもないので、詳しい内容の事は伊原青々園君や水谷不倒君君のお話に讓りまして、記憶の概略を述べます。創作七八分の雜誌で殘りの二三分には「作家苦心談」「名優逸話」「評論の評論」それに雜錄と詩、歌、俳、川柳の懸賞募集を載せ、短篇小說の懸賞募集をもやりました。私は編輯事務一切を引受け、嶋村君には「評論の評論」伊原君には「名優逸話」や劇壇短評のやうなものを每號書いて戴き、私は諸名家を訪問して『作家苦心談』を筆記して出す事に致しました。本欄には專ら小說や戲曲を載せたのですが、當時早稻田の方には創作家は極めて少なく、巧拙は別問題として、小說でも書かうと云ふのは水谷不倒君と私とだけであつた。『新著月刊』發行後、私が頻りに勸誘に力めて抱月君に「月暈日暈」といふ小說を書いて戴いたが、なか〳〵容易に書かうと云はなかつたので困つた位です。同人中では不倒君、天外君と私は代る〳〵書いたし、青々園君も私が勸誘に力めて短編小說を一つ書いて貰つたのです。何時も同人の物ばかりでは誌面が單調で賑かとは行かぬ。それで當時新進の花形作家に書いて貰ふ事が雜誌發展の策として必要であつた。此等の方針も同人と協議の上大體きめて、古い大家の物よりは當時賣出した紅葉門下の鏡花、風葉秋聲、春葉の諸君、それから硯友社の客將格であつた廣津柳浪君などにお願ひする事になつたのです。

一寸話が前後する嫌ひはあるが、私が『新著月刊』の編輯主任を擔當して事務方面を引受けるに就いては、丁酉文社の集會所も編輯局も私の宅に置くのが便利なので、其の事に決すると共に、發行元の東華堂及び印刷所の秀英舍との交渉が頻繁になるから、此等との交通に都合のよい場所を選んで轉宅する必要が起つた。早速牛込辨天町の私の宅を引拂つて、神樂坂上の俗に溫泉横町といふ、料理店末よしの二三軒北隣にある舊幕時代の幕本屋敷らしい古い邸宅の長屋門に續く借屋に移つたです。家主は區裁判所の判事を勤めてゐるとかいふ人であつた。今も其の家は現存してゐるかに聞いてゐます。何しろ直南隣は藝者屋であり、筋向には常盤亭といふ料理店がある、その間にはさまよつて筆を執つたり編輯をやつたりするのですから、今から考へると、甚だ好位置を占めたものでは無かつたのです。

私が『新著月刊』に諸名家の「創作苦心談」を聽いて其の筆記錄を掲載する事になつてから、最初に尾崎紅葉先生の門を敲いたのです。その以前『早稻田文學』で硯友社の人々の攻撃やらアラ探しやらを多少私は書いたので、私達に對し餘り好感を持つて居ないと仄かに聞いてゐましたので、門前拂ひを食ふかも知れぬと覺悟をして訪問しました。所が心よく引見せられて、極めて快活な親しみのある態度で『色懺悔』『南無阿彌陀佛』『二人女』『三人妻』『多情多恨』その他の創作苦心談を獨特の能辯で話して下すつたのです。紅葉先生の話上手は非凡なもので、文章より一層うまいとさへ云つた人が多かつた位でした。話上手なのみでなく、風采や表情や話題や音聲にも確かに人を引付ける魅力を多分に有して居られた。折には鋭い皮肉に辟易する事もあるにはあつたが、世間的知識の豐富な事や江戸趣味に徹底してゐられた事などが、私のやうな田舍者で世間見ずな、世故に通じない者の眼からは、種々な點で教へを乞ふに足る所が多分にあつたのでした。そして門下には鏡花、風葉、秋聲、春葉諸君が新進作家としての秀才揃ひであり、寄稿を此の人々に依賴する便宜もあるので、其の後紅葉先生を訪ふ機會が多くなつたのです。當時横寺町の紅葉邸の斷崖下の南隣、簞笥町に藻社の塾舍があつて、玆に紅葉門下の人々が立籠つて居つたのです。同門の人々の一團は硯友社に對して藻社と稱し

て居ました。私が藻社の人々と極めて昵近な交際を致すやうになつたのは、右の次第からでもあるが、居所が近所であつたから、自然往來し易いからでもあつた。

「作家苦心談」を紹介する爲めに幸田露伴、森田思軒、森鷗外、齋藤緑雨の諸先輩をも歴訪して此等の名家の著名な創作の苦心談を筆記して掲げたのです。相當に讀者に歡迎せられたらしい。

青々園君は毎號名優の逸話を書かれて、これも非常に評判がよく、抱月君が文壇の「批評の批評」も寸鐵殺人的筆鋒で隨分と當時の批評家を惱まして喝釆を博しました。

創作の方では、抱月君の「月暈日暈」も評論家として頭角を顯してゐた人の處女作といふので大評判であつたし、鏡花君の「湯嶋詣」や「七本櫻」も好評嘖々であつたのです。それから好評であつたものに廣津柳浪君の「あにき」もあつた。風葉君の「十七八」や「覺めたる女」も相當に世間の注意を引いたと覺えてゐる。

此の明治三十年の十一月三日、天長節の日でした。紅葉先生が門下の鏡花、風葉、春葉の三君を引連れて、神樂坂の私の宅の玄關に立たれ、「今日は天長節だから、一寸一緒に常盤まで行かうぢやないか」と誘はれたのです。そこで私は垢の付いた綿服のまゝで御一緒に直近處の常盤亭へ參つたのです。打寛いで酒を酌みながら雜談に耽り、やがて紅葉先生は傍らの硯箱を引き寄せ、卷紙をのべて引裂いては即興即吟俳句を例の美しい健筆で盛んに揮灑し續けた　一本の卷紙が殆ど盡きる程に書かれたのである。その中の三枚は泉鏡花君が頂戴して今も掛物にして保存せられて居る。私の所にも此の時戴いた三枚を表裝さして珍襲してゐる。左に其の句を掲げるが、私の雅號に先生と敬稱を添へたのは、當座の戯れに過ぎぬのは勿論である。これにも打寛いだ親しみのある情味は偲ばれるのである。

○自　賦

色好まさらむ男とも見えず花の陰

○詠宙外先生

春待つや心を綾の古布子

○

三の糸機を織居る妓老たり

「心を綾の古布子」と詠まれたのは、其の際私は垢染みた綿服のきたないのを着てゐたからで、「三の糸」は其の頃私の書いた短編の標題である。

當時漢詩壇の巨擘であつた野口寧齋先生は毎號謫天情仙の雅號で、小説の評を漢詩で發表され、是れも一部の人には頗る好評であつた。歌の選者は落合直文先生に今一人は忘れましたが、俳句の選者は正岡子規、大野洒竹の兩君で、新體詩は始め大町桂月君に依頼し、後には社選にしました。川柳も募集したが、此の選者は小杉天外君でした。この選者の件から天外君が紅葉先生に強い反感を持つ事件が起つたのは、今から考へて氣の毒の感に堪へません。それは紅葉先生の目から見たら、川柳は世故に長けた江戸ツ子のする事で、田舍出の書生などの指を染めるのは頗る當を得ないと思はれたのでせう。その意中は今忖度の限りではないとして、兎も角紅葉先生はあの美しい筆蹟で諷刺的な川柳を三つばかり書いて投稿したのです。選者たる天外君は一見侮辱したものだとして、非常に憤懣してしまつた。その以前は頻繁に尾崎家へ出入して居つたのが、この以後殆ど絶交といふ姿になつたのです。何しろ敏感な天外の事ですから已むを得ぬ次第といふの外はなかつたのです。

創刊の三十年は暮れて、三十一年の一月には兎も角私は一生懸命で書いた「思ひさめ」と題する可成長い作を元旦號で發表しました。この時、紅葉先生が之れを一讀されて、門下の人々に「好男兒惜むらくは兵法を知らず」と云つて居

られた傳へ聞きました。その意味は着想や觀察には見るべき所もあるが、惜い事には文章に至らぬ所があるといふのだッたとか申しました。そこで、私は先輩の實に好い訓誡を聞く事を得たと恭けなく思ひ、直接に其の訓言を書いて戴くやうに紅葉先生に願つたのです。始めは容易に承諾して吳れませんでしたが、再三懇願に及んだので、終に我を折られて、

おもひさめを讀みて陰に人にかたりて曰く好男子をしむらくは兵法をしらす
宵闇の梅ありと知れとさりながら　紅葉山人

絹地に、かう美しく書いて贈つて下されました。

明治三十一年の二月頃からと思ひますが、從來の口繪は廣業、永洗、半古其他の名家に卷頭の小說の或場面を描いて貰ひ、極彩色の木版刷にしてゐたのを、急に網版の裸體畵に換へてしまつた。この裸體畵は佛蘭西から新らたに歸朝された黑田淸輝畵伯の携へ歸られたもので、彼地では有數な近代の名畵であつたさうです。これは編輯の局に當つた丁酉文社々員の知つた事ではなく、全く出版元の柴田君が經濟上の都合と好奇心をそゝつて賣らうといふ商略に外ならぬのであつた。實は當時柴田君は書肆の利益を間ぬるく思ひ、一攫萬金を夢みて內々相場に手を出し、大損失を招いた。それに花柳癖が嵩じて店には殆ど姿を見せぬ體であつたから、手內も頗る逼迫に陷つてゐたらしい。そこで、安價に出來る裸體畵を頻載するに至つたのである。それと共に編輯費も減額に遇ひ、雜誌の體裁も紙質も內容も月每に低下する一方となつた。柴田君と丁酉文社とは最初刊行の際、如何なる事情あつても一年間は必ず繼續するといふ契約を結んでゐたから、單に此の契約の條件を充たす程度で續けるといふ風になつたのである。これは後に私が春陽堂の編輯局に入る事になつてから、同店の支配人佐藤助治君（後に樋口と改姓）から聞いたのであるが、三十年の秋から三十一年の春にかけ『新著月刊』の勢力隆々たる頃は『新小說』の打擊は極度に達し、內々廢刊の相談をした位であつたと語られた。

『新著月刊』は甚だ短命で、明治三十一年の四月終刊號を黑枠白紙の表紙で出し、脆くも終焉を告げたのである。

裸體畫を毎號卷頭に掲ぐるやうになつたので、俳句の選者正岡子規君から嶋村君と私との兩名に宛てた裸體畫掲載反對の書面が來た。その趣意は「掲載の裸體畫は美術として現在の日本人の眼で見て價値あるものではない、俗受け多賣の手段なら自分は贊成は出來ぬ、速に掲載は以後止めるがよい」といふのであつた。一方警視廳の要路の役人も私の友人を通じて穩かでないから續載を見合せたらよからう、左もなければ斷然たる處置を取ると注意をして呉れた。この事は其の後、露伴先生からも警視廳の方では續けると起訴しさうだから、止めたがよいと忠告して下すつた。私も好んで掲載してゐたのではないから、柴田君に再三裸體畫はやめて呉れと頼んだが、「何に心配には及びませんよ」と一向取合はずに其の後も載せた。そこで子規君は憤つて、俗惡な裸體畫を載せる雜誌の選者たる事は斷はると云つて、絕緣狀を送られたのである。不安の思ひは事實となつて、編輯人たる私と、發行人の柴田資郎君は風俗壞亂罪で東京地方裁判所の法廷に立たねばならぬ事になつた。裸體畫問題の裁判沙汰は當時珍しかつたので、無料辯護の申込みが七八人もあつた。飯田宏作氏が主任で、文學者で辯護士の石橋忍月君を始め新進の辯護士七八名に辯護の勞を取つて戴き、幸ひにも無罪とはなつたが、檢事は直ちに控訴したので、再び控訴院に招喚される事になり、前と同じ人々の熱誠をこめた辯論のお蔭で、又無罪の宣告を受け危い難を逃れたのである。青柳有美君は此の事件に興味を持たれ、激勵の書面を送られ傍聽にも毎度來られたのである。これが緣で同君と交際が開始されたかと覺えてゐる。

前に書くべき事で洩らしたが、內田不知庵君　今の魯庵　の處女作「暮の二十八日」といふ長篇の小說も三十年末頃に掲載した。又薄田泣菫君が新體詩人として名を成されたのは『新著月刊』が其の投稿を續載したのに因ると云はれてゐる。

この外正直正太夫君（別號綠雨君　の事に就いては面白い事もあり『かくれんぼ』『油地獄』の苦心談にも趣味の豊かな話もあり、又紅葉先生のねつきに熱衷して其の分類表を作つたりした事など色々あるが今は省いて擱筆します。

もう三十年前の夢物語を終りませう。當時は文學者の間に人生に觸れたの、觸れぬのと云ふ事が、非常に大切な問題として考へられてゐた。そして一度強く深く人生に觸れた作家でなければ、書くものに價値のあるべき筈はないとした。それ故、一般の新進作家は力めて人生に觸れねばならぬと考へたのであるが、その觸れようとし、又實際觸れた人生なるものは他の諸君の事は知らぬが、私だけの範圍に於いては――今から振かへつて見て、極めて低調な、無價値な狹い一局部の人生を選んで接觸して居つたのです、私としては實に慚愧至極である。今の人々には此のやうな愚なる覆轍を踏む筈もないが、此の記事を懺悔錄の一端して見て戴きたい。（終）

新年號は御覽の通りの內容で、讀者諸氏に見えることとなりましたが、何分にも、この興隆期は、頗る多種多樣に亘つて居りますので、本號だけでは無論十全を盡すことが出來ませんから、追つて興隆期研究號の續篇を刊行するつもりで居ります。…………記　者

新刊書一覽

○近世歐洲繪畫十二講　伊達俊光著新潮社十一月發行四六三三頁定價參圓五拾錢序論歐洲繪畫の起源第一文藝復興期及其後の伊太利繪畫第二文藝復興期及其後の北歐畫派第三西班牙の繪畫の發達と其特徴第四和蘭の繪畫と二大巨匠第五ルイ王朝時代の繪畫と西班牙畫派第六佛蘭西革命時代の繪畫第七佛蘭西風景畫派と和蘭近代活第八佛蘭西印象派の起原と裝畫ノ第九後期印象派以後の佛蘭西現畫壇第十英國繪畫の發達と其特徴第十一十八世紀の獨逸古典派より表現派まで第十二南歐と北歐の現代繪畫に分つ。蓋し類書中最も完璧に近きものである。

○世界文學の輪郭　木村毅著新潮社十一日發行新四六判二〇四頁定價八拾錢同社の文學入門叢書の第一編である。民族、言語等よりまづ筆を起しギリシヤ・ロオマの文學を說き、ついでイタリイ、フランス、スペイン、ドイツ、スカンヂナビア、ロシヤ、イギリス、アメリカ文學に到るまで、各國の各時代の文學に就いてそれぞれその特色、その消息を遺憾なく、簡潔にしかも興味深く解說してある。著者としては最も得意な壇場である。

○文學思想研究第二卷　早稻田大學文學思想研究會著新潮社十一月發行菊判四三二頁定價貳圓八拾錢「商慎苛」津田左古吉「アレフレド・ド・ヴニィ」小林龍雄「ウイリアムジエムスの宗教論」伊達保美「西風賦の詩想技巧及びその位相」日夏耿之介「ナルダナパルの最後」坂崎坦「トルコ革命について」煙山專太郎「問答物語としての大鏡」五十嵐力以上の長篇研究をおさむ。例によつて、絕對に他に見られない大研究である。

○詩集死刑宣告　萩原恭次郎著長隆舍十一月發行菊判一六二頁定價壹圓八拾錢「裝甲彈機」六篇「鮭と人間の定價五拾錢也」十七篇「靜物は缺伸をする」十一篇「愛は悲哀の薔薇なり」八篇「首のない男」八篇「惡夢を嚙んでゐる自殺者」九篇「祈禱はマッチ棒一本で足りる」九篇「ラスコリニコフ」八篇すべて八十餘篇の詩をおさめてゐる。

○新古今和歌集詳解　鹽井正男著大町芳衞補明治書院十月發行菊判一四四二頁定價八圓五拾錢著者鹽井氏が生涯の事業として多年にわたる研讚の果になれる大研究である。「本居翁の美濃の家づと、さては石原正明主の說を傳へたる尾張の家づとなどは、誠にたよるべきものにしあれど、それも、また、全部を註せるにあらず、その一部分にとゞまりて且ついとあらましのあげつらひにて、この集の歌の意義、歌の姿を始より終まで、つばらに究めゆかむとする初び學びの者には、思ふほどなるたよりにはあらざるべし。しかもそをおきて他に懇ろに說、導ける栞もあらぬぞかへすがへすこの道の恨みなる。」著者は本書によりて、この先人未踏の大研究をなしとげてゐるのである。はじめに和歌史上に於ける新古今の位置を定めたる長篇より稿を起し、一首ごとに語解、意解の二分に分つて詳解してあますところがない。新古今集の寶庫は、本書によつて完全に開かれたといふべきである。

○世界文明史物語　前田晁譯早稻田大學出版部十一月發行菊判六七〇頁定價四圓八拾錢坪內逍遙博士の序文に曰く「兒童の世紀と呼ばれた現世紀も、今は其第一期の童話、童謠、童劇の時代を終へて、漸く第二期の歷史教育時代に入らうとしてゐるとの見える。それかあらぬか、特に今いつたやうな目的に副はしむべく書かれたらしい種々の歷史物が、外國では、近年やゝ現れかけた。例へば、世界のはじまりとか、人類の祖先とか、古代の文明國とかを主題とした少年の讀物が、おひおひ殖えてくる氣味がある。而も、大震災以前に於いて、私をして一瞥の下は「あゝ、これこそだ！」と感歎せしめたものは、此ヴアン・ルーンの一著の外にはなかつた。」と。この書は、編輯の仕方も、其材料も、其解釋も其機智に富んだ、氣の利いた、十分に初學者の趣味に、心持に同化し得ての取扱ひぶりは到底、簡にして要を得てゐるなどゝいふ月並評では掩ひ盡しがたい巧さで書かれてある世界文明史であつて、人類の未生以前、地球のはじめて生成する太初から筆を起して、人類の成長と活動との跡を詳細に要領よく尋ねながら、文明の推移を說いて最近の世界大戰役の後にまで及んでゐる。博士は更に、この飜譯振を評して言ふ、卷を開いて先づ試みに其

四五ページ乃至七八ページを讀み味つて見るがよい。一字をも等閑にはせない譯者の用意のいかに愼密であるかが一目の下に窺はれる。」と。近時の好出版として江湖に推薦する。

○一茶と良寛と芭蕉　相馬御風著春秋社十二月發行四六判三二八頁定價壹圓八拾錢

野人一茶の悟其他一茶に關する三篇、良寛と大村光枝其他良寛に關する九篇、芭蕉と良寛其他芭蕉に關する六篇を集めてなつた隨筆感想集である。著者が郷土に歸耕して十年、その間に書いた夥しい作物の中でも、これらの詩人たちについて書かれたものに、最も光つた、作者の獨自な情趣の漲つたものが多い。蓋し、詩人御風は、これらの人々について筆をとる時に、他のいづれの場合に於けるよりも、詩人たり得ることが出來るからである。著者の近著のうち、これは恐らく著者にとつて最も會心の書であらうと思はれる。

○子を打つ　安成二郎著アルス十二月發行四六判二八頁定價壹圓八拾錢「大抵どの作品も、自由であり　愉快であり、思はず微笑まれるものが多いのである。たとへば、それがどんな苦しい生活を書いたものであるにしても、作者はいつも善い意味の輕いヒユモラスな一種甘美な慰安をもつことを忘れてゐない。そして是も本當の安成君の面目なのである。この點では現文壇にちよつと類のない好い素質を多分にもつてゐる譯で、君の詩歌に散見す種類のものである。」と德田秋聲氏は序して言つてゐる。「神樣が人間に殺された話」「外套」「松飾り廢止論者」其他すべて十二篇の短篇小說の集である。

○美學原論　藤井昭譯東京堂十一月發行四六判三二二頁定價貳圓五拾錢本書はヴントの高弟キユルペが實驗心理學的の立場にあつて、古代よりフエヒネルに至る美學史の概說を與へたものである。特に美的原理の中では音樂の美的効果や、優美崇高悲壯滑稽の美の對照に就いて、詳細な敍述をなしてゐる。美學の觀念、美學史概說、科學體系に於ける美學美學の方法、美學對象論、美的狀態論、美的原理、に篇を分つ。

○村を襲ふ波　加藤一夫著大阪屋號十一月發行四六判二五六頁定價壹圓三拾錢かつて太平洋岸の或る漁村に起つた一つの重大なる問題、そこに現代の社會に起るべき凡ゆる要素を含んだ一つの類型的な社會的疾患があるを見て、著者は徹底的にその村を研究し、調査した。その結果が、この長篇小說となつてあらはれたのであつて、本書はまだ日本の文壇にあまり類のない創作である。

○大空の下　谷崎精二著エルノス十二月發行四六判二九一頁定價壹圓八拾錢某紙に連載された著者の長篇小說である。惠まれざる一女性を主人公として展開さるる結婚期に渦く大波瀾が、その主題となつてゐる。とくに現代のブルジョア生活の破綻の光景が活寫されてある點に興味が深い。

○レーニン回想記　勢田洋譯エルノス十二月發行四六判二六六頁定價壹圓六拾錢レーニンの信頼すべき一つの傳記だになきを憾みとして提供されたものである。彼の僚友トロツキイ自身の傳へたもので、その簡潔にして雄渾な筆は、レーニンの一生のみならず、能く當時の時代の美醜兩面を活寫して遺憾がない。而してこの著は、著者トロツキイに追放の事件を惹起せしめたものである。

○婦人問題の諸相　滿月會編輯帝國講學會十二月發行四六判七三三頁定價三圓五拾錢思想、學術、文藝、美術の人々及びこれに趣味を有する人々によつて組織されてゐる滿月會の事業の第二輯である。本書は、一般の婦人問題の概念を與へるといふよりも、我が國に於ける今日の婦人問題の各部面を點出し、讀者の眼前にその種々相を開展せしめることを主眼として編輯されたもので、執筆者は山田わか、奥むめを、生田長江、市川房枝、山川菊榮、牛塚らいてう、秋田雨雀、本間久雄、原田琴子　其他四十餘氏。

○湖上の美人　幡谷正雄譯交蘭社十二月發行二六一頁定價壹圓八拾錢スコットの有名なる敍事詩の現代語散文譯である。本篇の現代語散文譯はこの書が最初である。

○日本論　室伏高信著批評社十二月發行四六判二九七頁定價壹圓八十錢「文明の沒落」「土に還る」の後をうけて現はれたもの。「日本はあまりに長く忘られ、そしてあまりに多く誤られた。自由思想家によつて忘れられ反動主義者によつて誤まられた。私たちが日

本を再思し、反省し、そして自由な心のうちにわれ〳〵の日本を再創造する時がきたのだと私には思はれる」と著者は序して言ふ。日本について、商工日本と農村日本と、日本の理想に章を分つ。

○文壇隨筆　中村武羅夫著新潮社十二月發行新四六判二七六頁定價壹圓貳拾錢同社の感想小品叢書の第十編である。印象記五篇、文藝論五篇、文壇雜筆六篇、身邊雜記六篇、雜文帳八篇よりなつてゐる。創作以外の最近の收穫は、こと〴〵く本書によつて窺ふことが出來る。現文壇の渦中の眞只中に立つてゐる人だけに、さま〴〵な意味で興味深く讀まれる。

○イワン・ダ・マリヤ　尾瀨敬止譯新潮社十二月發行新四六判一三六頁定價六拾錢同社の海外文學新選の第三十二篇である。作者はロシアの現代作家ピリニヤーク。革命の中から生れ、革命の中に育ち、革命の中に名を知られた作家である。內容は、パミール高原のやうな清淨な世界と、革命の洗禮を受けたなま〳〵しい現實の世界とを對照せしめたものである。

○離婚法案　繁野天來譯新潮社十二月發行同第三十二篇である。現代イギリスの女流劇作家クレメンス・デインの作。離婚問題を取扱つたものであるが、問題を提出したばかりでなく、これが解決を試みて、紋切型の悲劇を悲喜劇に轉じた所に新味があると言はれてゐる。

○はるそだつ　能村潔著詩篇時代編輯所十一月發行四六判七〇頁定價壹圓「日本詩人」「詩篇時代」其他に發表した詩、大正十三年より以後の作をあつめてゐる。「彼は詩を何らかの目的のために作爲せんとする徒輩でなく詩自身を彼の心境の體現そのものと信じて疑はぬ詩人である。」とは著者を評した川路柳虹氏の序文の一節である。

○理想國　津久井龍雄譯述新潮社十二月發行四六判二二八頁定價壹圓貳拾錢同社の新學說大系の第十一編である。有名なるプラトンの理想國である。理想國篇十章、チマイオス篇、クリチアス篇の三篇よりなつてゐる。千古に卓絕せるこの哲學者の洞見は、現代の世界及日本が傾聽するに足る貴重なる教唆に滿ちてゐることは言ふまでもない。この原著がかゝる平明なる譯述書として現はれたことを喜びたい。

時事消息

○瀧田樗陰氏逝く　中央公論主幹として長らく文壇に貢獻した樗陰瀧田哲太郎氏は十一月廿六日逝いた。享年四十四。

○童顏社第二回展覽會　昨年第一回展覽會を催した美校系青年作家の小團體である同社では、その第二回展覽會を十一月二十一日より同廿五日まで美術協會列品館にて開催した。

○鴻巣山人遺作展覽會　鴻巣山人の遺作五十餘點を、與謝野氏夫妻、里見、岡野知十氏等の手で十一月廿二日より同廿四日まで鴻巣二階にて展覽に供した。

○フランス現代美術第二次展覽會　十二月二日より同十五日まで、日佛藝術社の手で、コラン、ロベエル等の二百餘點を日本美術協會列品館に開催された。

○金子薰園氏誕生五十年祝賀會　歌壇の老宿金子薰園氏の誕生五十年祝賀會は、同氏の先輩友人門下諸氏發起にて、十二月五日上野精養軒にて催された。吉植庄亮・高須芳次郎、土岐善麿、與謝野寬、原田實等七十餘年氏參會した。

○「新小說」の發賣禁止　「新小說」十二月號長塚節號は風俗問題で發賣を禁止された

謹賀新年

大正十五年一月

早稲田文學社
東京堂

二月號豫言

來二月號は全誌を擧げて創作號とし、諸家の力作になる小說、脚本、詩歌等を滿載いたします。

■早稲田文學（毎月一回一日發行）

定價及郵税

本號に限り特價金壹圓とす。
隨時特別號を發行することゝし、該定價はその都度これを定む。
毎號の郵税は內地一錢五厘。
外國行八錢。特別號の郵税はその都度これを定む。

▲本誌の御註文はすべて東京堂（振替東京二七〇番）へ御申込の事
▲御註文の際は必ず（早稲田文學何月號より）と御明記の事
▲郵券代用の御送金は一割增の事
▲轉居の際は誌名と新舊兩住所御通知の事

大正十五年十二月廿二日印刷納本
大正十五年一月一日發行

No. 240

（禁轉載）

編輯兼發行者　本間久雄
印刷者　內田慶藏
印刷所　內田印刷所

編輯所　東京市小石川區雜司ヶ谷町一四四　早稲田文學社　電話牛込一九〇八

發行所　東京市神田區表神保町三番地　東京堂　電話大手六一〇七　振替東京二七〇番

本號特價壹圓

サン・サーンス著　馬場二郎氏譯（新刊出來）

特製　菊大判◆價貳圓五拾錢　◆郵送料拾貳錢

音樂の十字街に立つ

十九世紀の後半より二十世紀の前半に亘る殆ど一世紀の間、音樂の蒼穹に輝ける巨星シャールル・カミーユ・サン・サーンスが、その心血を濺いで近代音樂に就いて説けるものである。即ち、現代作曲界の權威たるヴアンサン・ダンディ、世界最高の大洋琴家リスト、ピアノの魂たるシオパン、その他の大音樂家を捉へて、鋭利なる批判を加へながら、仔細に音樂の本質を説いて、自家の藝術主義を明らかにし、傍ら近代音樂が行き詰りの狀に逢ひ、今や十字街頭に立つて焦慮しながら、如何の方面に轉換すべきかの大問題に悶えつゝあるの事實を擧げ、音樂が斯くの如き難關に立つの已むなきに至れる經路を說いて、その未來に於ける歸著すべき途を指示して居る。尙ほ音樂に關する興味深き隨筆、旅行記の類も收めてある。近時、西歐樂壇の書頻々譯出せらるゝも、斯くの如き名著を逸するは頗る遺憾となし、これを公にすることゝなつた。啻に音樂界の聖書たるのみならず、一

早稻田文學

大正十五年

四月號

新刊

島村民藏著

戲曲の本質

劇藝術及び演劇の原理

（學藝叢書）

四六判
函入
洋布製
定價貳圓五拾錢
郵送料十二錢

本書はアリストテレスよりブリユヌテイエール、ア、チャーに至る重要な演劇論戲曲論を或は批評し、或は綜合し、更に美學、藝術學、詩學の學説を渉獵し、古くは希臘劇より、近くストリンドベルク、チエホフ、オニールに至る名作戲曲の興味ある例證を引いて「戲曲とは何か」「演劇とは何か」の問題に答へた研究である。然も空疎な抽象的な概念論ではなく、演劇及び劇藝術の本體、文學及び演劇としての戲曲、行爲、性格、對話等の戲曲の要素、意志爭鬪、危機、緊張等の戲曲美の諸相、戲曲的發展のリズム、扱巧等に渉つて、包括的に構成的に戲曲の本質を説いてある從つて、一般戲曲作法類よりも遙かに深く廣く、其上實際的な參考に資する處あるは疑ひを容れない。戲曲の學問的研究を畢生の事業とする著者が、執筆以來一箇年半これのみに沒頭して漸くなれる勞作で、日本人の手になつた最初の學術的な戲曲

東京神田　東京堂　振替東京二七〇番

本間久雄著

生活の藝術化

（再版）

四六判上製　挿畫多數
定價壹圓八拾錢　送料拾二錢

……此世に生を享けた以上、生きること〻の意義を自覺し生きること〻の悅びを感じ、生きること〻の幸福を味ひ乍ら日每の生活を營みたい。かう云ふ慾望は、深淺の度はあつても、誰人にもあるに違ひない。さて、この慾望を滿たすためには吾々はどうすればよいか、この問題について、それの解決を與へたところの近美の思想家ウイリアム・モリス、エドワアド・カアペンタア等の思想を解說して、いさゝか私見を加へたのが、この拙著收めるところの「生活の藝術化」「美感の頽癈」の二篇である。「ウイリアム・モリスの生涯」は生活美化の思想を、いかやうな意味でモリスが實現したかといふことを、讀者諸君に知つて貰ひたく此處に收錄した。（著者序文の一節）

—內容—

生活の藝術化

一、生存と生活　二、二つの生活美化
三、創造的衝動　四、生活の藝術
五、勞働の快樂　六、有用と美
七、新しい富

美感の頽癈

一、民衆の藝術　二、古代建築
三、自然美　四、日常生活の美
五、美的生活　六、單純生活

ウイリアム・モリスの生涯

ジャックソンのモリス論—モリスの生ひ立ち—ラスキンの感化—宗敎的熱情—バーン・ヂョーンズ—以下數十章

東京神田　東京堂　振替東京二七〇番

明治文學研究第五號

混沌期、胎生期、興隆期補遺



早稻田文學

四月號

第二百四十三號

淡島寒月氏

露伴學人

寒月氏は今年七十歳を以て二月廿三日に永逝した。本間久雄氏から、予の知るところの寒月氏を傳へて吳れといふ依頼を受けたので、ほんとにたゞ予の知れる限りの寒月氏――予の知らぬ他の方面の寒月氏も定めし多いだらうが、それに就ての臆測や聞取りなぞを除いて――を有りのまゝに思出づるまゝに記す。人の事をしるすに、當推量や噓を交ぜて、よい加減に捏上げるのは、予の好かぬことである。だから以下にしるすところは、予自身の目睹した事か、さも無ければ予が氏より直接に聞いたことである。

氏の極若い時は無論予は知らぬ。然し氏から聞いたところでは、氏は極若い時は當時の所謂文明開化風の崇拜者で、今で云へば大のハイカラであつたのだ、何でも西洋風の事が好きであつたとの事だつた。氏の父の椿岳氏がまだ西洋樂器が碌に舶來せぬ頃、洋樂の曲を彈奏する日本人などの全然無かつた時に於て、ピアノだつたかオルガンだつたか何でも西洋音樂を殆んどイの一番に横濱で買込み、それから又西洋風の覗き眼鏡を買つて、淺草公園で人に觀せたことが有つたといふ事實などに思合せて、如何にも文明黨だつたらうとも思はれる。

然し予が氏を知つた時分は、氏は既に日本趣味の人であつた。今でこそ燕石十種は刊本にもあるが、其頃は寫本のみであつたし、大冊六十冊の完本は非常に珍稀であつた。それで氏はそれを圖書館で毎日〳〵氣長に樂み〳〵影寫してゐ

られた。毎日借覽する本が定まつてゐるので、圖書館の出納係から云へば、まことに手數のかゝらぬ好い閲覽人で、いつとなく燕石十種先生といふ綽名をつけられたが、予輩の如き卒讀亂讀者流の出納係に手數をかけること夥しい厄介ものとは違つて、館の人とも自然に懇にしあつてゐられた。

　繪は椿岳氏から學ばれたのか何樣か知らない。が後に至つて自然と何處か椿岳氏と血脈相牽くところの畫を作られたのに比して、早い頃のものは畫は眞面目な、手際のきれいな方のものであつた。

　讀書はヘチ堅いもの丶方へは向はれ無かつたが、美術、文學、隨筆、雜書方面へは中々廣く渉られ、文學は德川期、美術は奈良あたりまで、特に美術の方は書籍研究のみで無く實物研究にも年月を過されたから、其の鑑識眼は實技上の智識が內部から支持するのと相伴つて、直覺的にばかりで無く、比較的にばかりで無く、精髓から出發して看到するところの中々手强いものが有つた。世間慾が盛んで、書畫骨董でも取扱つた日には、學問も文字も相當にあり、愛嬌も有り聰明怜悧の人であつたから、慥に巨萬の富を獲るに足るのであつたが、それでゐて其樣な事で利を得る人を冷眼に見るやうな傾が有つて、そんな事を敢てしなかつたところは、一つは生活難が無かつた爲でもあらうが、氏のおもしろい氣風のところであつて、傲岸の氣味の無いでも無かつた依田學海氏などの氏を打寛いだ好い友人とした所以であつた。文學に於ても矢張り其氣味があつて、根深く手を染めてゐれば、多數で無いにせよ、必ずや一部二部は此人で無ければ書けないといふやうなものを留めたのに相違無いのに、西鶴ばりの「百美人」だのなんだのといふのを一寸書いた位で終つて仕舞つたのは、それも却つて其一生が幸福で有つた證據で芽出度には相違無いが、少し殘りをしい氣がする。俳諧なぞも芭蕉以後のイヤにショボたれたやうなのは嫌ひで、宗因風の所謂檀林がゝつたのを、我流でホンのよみすてに吟出するに止まつたから、永機なぞと知合であつたにもかゝはらす、俳諧もおもちやにするに過ぎなかつた。エラがつておれの俳諧は眞劍だなぞと云ひながら、好い句も作れぬばかりで無く、審美眼さへまだ碌に開いてゐないやうな人々よ

はまるで行き方が違つてゐて、勝手に遊んでゐたといふ風なので、句もといふやうなのが多い。寫實の句になると猶更抛り出したやうなのが好きで、

行水は其日〳〵の湯くわん哉

見おろすや音羽の瀧に三人ならぶ

は何様だい、なぞと自ら笑つてゐるといふ調子であつた。かつて聯句を試みたことが有つたが、すべて其調子だから、何も彼も構ふものでは無いので、其の自由自在で、おもしろいことゝ云つたら無かつた。其代り所謂宗匠に見せると、宗匠は苦い澁い顔をするもので、其の又宗匠のイヤな顔をするのを面白がつたものであつた。

禪にも或時代には參したのであるが、參禪などしない中から寒月流の一家の悟りを開いてゐるのだから、そして又恐ろしい禪師に出會するやうな機緣も無かつたのであるから、傍から觀ると禪師の方は立派な師家であらうが、氏の方が中々洒落れてゐる。本所の五百羅漢寺で、或時問答をしたのを、丁度誘引されて傍觀した事があるが、思ひ出しても涙がこぼれるほどおもしろかつた。禪師か侍者を具して威張り込んで椅子にかけてゐると、僧俗が交る〳〵出て何か云ふ、應酬宜敷あるといふ次第だ。やがて氏が出て、何を云ふかとおもふと、如何なるか是れらいうん、と何か分らない方角を指でさして問うた。予には何だか分らなかつた。らいうん、なんて何の事だか誰にも分らなかつたらう。すると禪師は、先刻旣に說了す。と答へた、流石に澄ましたものだ。氏はそこで工合よく禮を作して而して去つたのである。其場はそれで濟んで仕舞つたのであるが、自分にも、らいうん、といふのが何様も、トツケも無くて分らなかつた。何様も禪錄類にも、らいうんといふのは思當らないので、後であの、らいうん、といふのは何だね、と聞くと、らいうんは來る雲さ、雲がブラ〳〵と來る其意は何様だ、と問うてやつたのさ、と云ふので、予は堪らなく無つて笑ひ出すと、氏も一緒になつて面白がつて笑つてゐるのであつた。後年基督教の外人宣教師が小梅あたりに來て住んでゐたので、氏も其教を聽いたから、宣教師の妻か氏の家を訪ふに及んだ。ところが來て見ると、室中一ぱいに色々な物がゴテ〳〵有る、中にも古い佛像などが二ツや三ツで無く飾つてあつたので、外國婦人の事だから眼を瞠つて驚いた。氏は其様子を見て、

其等の偶像を指さしながら "all is my toys" と云つたので、其婦人は又驚ろいたといふことであつた。其日だつたか、其次の日だつたか、其談を聞いて、予は「らいろん」を思ひ出して、おもしろいと思つた。

人類學を研究するなぞといふ然様いふ肩の張つた譯では無かつたらしいが、原人土器採集や比較などにも興味を有して、數々近在へ出掛けられたが、予は土器いぢりは好まなかつたから餘り知らぬ。然し一日土器破片を氏が模造してゐるのを見て、實に其の好事に驚いた。何千年前の土器の破片を模造して、そして樂んで居る人が、他に何所に有らう。すべて此様な調子で自ら娯んでゐたのが、氏の面目で有つた。

氏の一生を通じて、氏は餘り有るの聰明を有してゐながら、それを濫用せず、おとなしく身を保つて、そして人の事にも餘り立入らぬ代りに、人にも厄介を掛けず、人をも煩はさず、來れば拒ます、去れば追はずといふ調子で、至極穏やかに、名利を求めず、たゞ趣味に生きて、樂しく長命した人で有つた。晩年の氏は予が貧困多忙でおちついて遊ぶ暇が少くなつたために不知不識訪問して閑談を樂むの機會が乏しくなり、又住所も遠ざかつたので、傳聞に其無事なのを知つて居た位に過ぎなかつたから、よくは知らぬが、矢張り例に依つて例の如くおとなしく面白く世を送つてゐられた事とおもふ。中年頃の氏が蔵書に富んで、そして其を予輩等に貸與することを悋まず、無邪氣にして趣味ある談話を交換することを厭はれ無かつたことは、今猶追懐やまざることである。



淡島寒月氏筆

明治初頭の新聞紙回顧

市島春城

自分が新聞記者生活をやつた頃、新聞紙の歴史を書いて見たいと志したことがあつて、古るひ新聞雑誌を手當り次第集めたり、材料となるやうなものを寫したりしたことがあつた、其の集めた材料は、往年讀賣新聞在社時代、今は故人となつた早大の秀才伊藤蘇水といふが讀賣の記者であつた、それに整理させて、紙上に連載したこともある、稀にある新聞雑誌の類は早稲田の圖書館に納めたので、今も幾ばくか保存されてゐる、尚ほ幾許かの材料を所持してゐるが、大震災の後藏書と共に他へ預けた爲め、一寸今は檢出し兼てゐる、讀賣に連載した新聞の沿革も切り抜いて保存してある筈だが、それも今は捜がしかねてゐる、そんな譯で、明治初頭の新聞の有樣を話すには不便を感ずるが、既に公刊された新聞紙の歴史は幾種かある、特に年代を追ふて歴史めいたものを談じて蛇足を添へるにも及ぶまい、自分の試みんとするは、襁褓時代の新聞に就て、今日から見ると案外の思をなす樣な事を聊か云つて見ようと思ふ、但し多くは記憶を辿つて云ふのだから、年月のハツキリしないことや、新聞紙の名稱のおぼろげなのもある、事實の記憶違ひもあるかも知れんが、それ等は大方の是正を請ひたいものである。

日本に新聞紙の初めて刊行されたのは幕末の文久頃からである、勿論其前にも稍々新聞のごとき働きをしたものはあつた、例へば和蘭船が長崎へ齎らした、海外の出來事を長崎奉行が書き集めて、江戸幕府に呈したものゝ如きは、新聞

と見れば見られないでもないが、これは公刊されたものでもなく、實は報告書に過なかつた、元治以後に米人ウェンリード、蘭人ベーリーなどが海外の事情を報道する目的で出した新聞紙は公刊されたものである。ベーリーの發　したものは萬國新聞紙と云つたと覺へてゐる、但し同じ目的で日本人で發刊されたものが其前にある、それは元治より六七年も前、即ち安政年間に江戸の萬屋兵四郎といふものが發行した。その新聞の名は記憶しないが、それは外國新聞を飜譯したものであつた。尚ほ此頃出た新聞紙は外にもあつたに相違ないが、その穿鑿は見合はせて、爰に其頃の新聞の名を集めた、一枚の番付を掲げ、る。これは何年に出したものか刊年が無いので判斷に迷ふが、明治の前と明治の初頭と併せて收めてある樣に思はれる粗略の番付であるから、脱漏もあるやうだが凡そはこれに就て見るべきである。



此番付の第一段は明治元年の發行で、第二段は慶應第三は文久である。開成とあるは開成所か　發行、陸海軍とあるは陸海軍の機關紙であらう。此等幾種の新聞は大概外國の出來事を譯載したもので、其の體裁は今の雜誌の樣に五六枚乃至十枚位日本紙で綴つたものであつた。今見れば如何にも幼稚いものであるが、しかし明治元年に興つた幾種の新聞には當時の革命戰の記事があるから、稍々新聞紙らしい面目が具つて來たとも云へよう、此革命戰は維新の大業の成ると成らざるとの繫つた天下別け目の戰爭で、幕府方を東軍と云ひ朝廷の方を西軍と云つたが、新聞も自然兩軍に別れた。妙なことには幕府方の新聞が多く、朝廷方のものは京都

で發行した太政官日誌と、大阪で發行した內外新聞位であつた。幕府方の新聞は中外新聞、江湖新聞、內外新報、遠新聞『もしほ草』などで、なかなか多かつた、その譯は此等の新聞に筆を執つたものが皆な幕臣であつたからであ乃ち中外新聞の柳河春三、江湖新聞の福地源一郞、遠近新聞の辻新次、內外新報の橋爪貫一のごとき皆幕臣であつそして江戶の人氣に投ずるには佐幕派で無ければならなかつたのが、東軍に左擔した原因であらう。

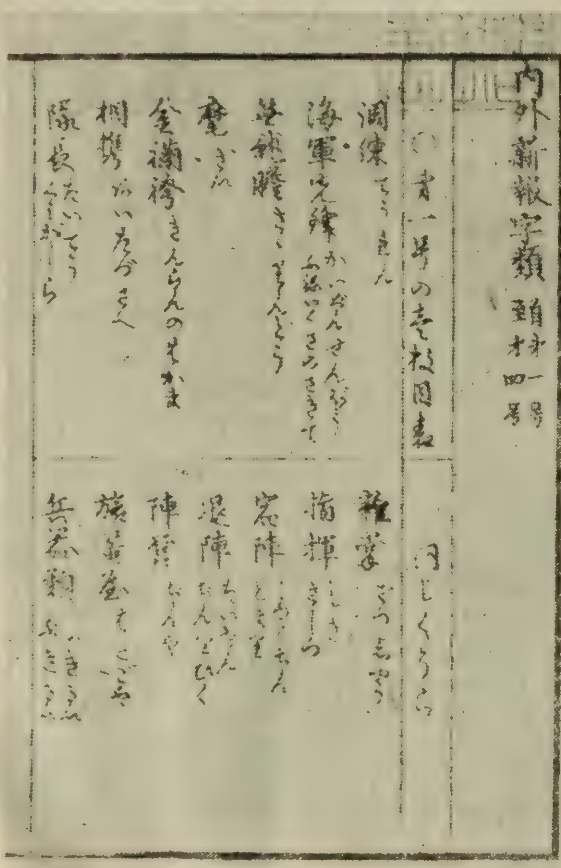
幕末に傑出した人物小栗上野介は文久元年北米合衆國に使して彼國の新聞紙の實相を見て深く感ずる所があつて、朝後幕府に新聞紙發行を建議したけれども其議は納れられなかつた。小栗の新聞發行を献議した趣意は、幕府と各の間に萬事疏通を缺くのは、兩者の事情が互ひにわかりかねるからだ、相互に誤解なからしめんには、新聞紙で內情を報ずるに在りとしたのであつた。此の小栗に隨伴した一行には福澤も福池もゐた。彼等が小栗と同じ様に成のは言ふまでもない、此等の二人が其後新聞界に牛耳を執るに至つたのは決して偶然でない。若し幕末に小栗の議られ幕權新聞が發行されたとしても、幕府衰亡の氣運を挽回することは出來なかつたであらうけれども、西軍の氣挫くには可なり力があつたであらう。

幕臣出身の記者には文學の士が多かつた。彼等は王政復古に反對であつたのでは無く、薩長の橫暴を惡んで、西あしざまに書いたのである、福地が江湖新聞に德川幕府が倒れて薩長幕府が之れに代はるとすれば、王政維新は六過ぎぬと論じそれで忌諱に觸れ牢に入れられたのも、つまり薩長の橫暴を惡むの情が迸つたのである。斯く薩長を福地が、後に薩長政府の御用新聞の主筆として、終始薩長の辨護につとめたことを思ふと共の變化に驚かさるを得のである。

兎に角明治の元年は兵馬倥偬の時で、新聞記者は勝手氣儘の筆を揮ひ、政府も放擲して取締ることも無つたが、の論文が動機となつて、福地を罪すると共に其新聞の發行を停止し、其後太政官布告を以て官府の許可なくして新

を發行し及び發賣することを禁じ、又違犯の出版物は版木製本を沒收することゝなつて、爰に新聞取締の萠芽を發
た。

維新の革命戰が終ると新聞紙は平々凡々となつた。隨つて政府も一旦發した布告を廢止するに至つたが、此頃外人營なまれた有力の新聞は彼のブラックの發行した日新眞事誌であつた。これは明治四年に創刊したもので、「左院御用」標榜し、專ら諸官省の布達を掲載したが、此外人に傭はれてゐた記者の多くは日本人で、追々民權論などを掲げ、時々政府を攻撃する記事をも掲げたが、政府は之れを奈何ともすることが出來なかつた。當時外人は治外法權の袖に隱れてゐたから、日本の法權はそれ ばなかつたのである。政府はこれに見る所があつて明治八年六月新聞紙條例發布するに迨んで、新聞の持主、社主編輯人は內人に限る事にした。これ爲めに此新聞も廢刊を なくされた。


內外新報字類 第一號 第四號
第一號の壹枚目表

新聞紙の揺籃時代は り長い間續いた。當時の新聞が如何に幼稚であつたかを知るには一二の適例がある、慶應四年に創刊された內外新 美濃紙半截の小本であるが、それには「字類」といふ一小冊子の字引を添へて出した。乃ち解し兼ねる漢語や新語に點を附し啓蒙の用に供した。それは圖の如きものである。

尙ほ明治六年かに東京日日新聞が載せた記事に據ると當時の新聞記者が府廳に召喚されて、官吏から說諭を受けた

ある。その說論の次第は新聞紙の務は今日の出來事を直に報道するで無ければならぬ、カビの生いた樣な過ぎ去つた事をヌル〳〵書き出す樣では、新聞紙とは言へぬと、西洋などの例を引いて懇々說法されたなどは如何にも滑稽であるが當時の新聞の幼稚であつたことが思ひやらるゝであらう。東京日々新聞は後に五大新聞の首坐を占めた有名な新聞となつたが、明治五年二月廿一日第一號を發行した時はどんなものであつたかといふと、冊子體を脫して一枚摺とはなつたが、如何にも貧弱のものであつた。用紙は硬質の小奉書大の紙を用ゐて、片面摺りで、記事は官報とも合はせ十項も無い位で、可ない長り間、木版彫刻であつた、二號より十日間ほど五號活字に組んだが、また整版となつて一百十八號に至つて四號字組となつてゐる。第一號に載つてゐる記事の一項をこゝに掲げて見ると

神田元久右衛門町和泉屋と云ふ酒屋本月廿六日開店の由にて五十駄樽の鏡を拔て施行致せしに道路に醉人多くよこたはりたる處評者曰人力車ひき等は偶々和泉屋の仁にあふて愉快を極むるに至れど妻子は暗に空腹を抱くもおかし所謂慕參りして子を干殺せし類ひならんか仁過れば却て禍あるとは是等ならん

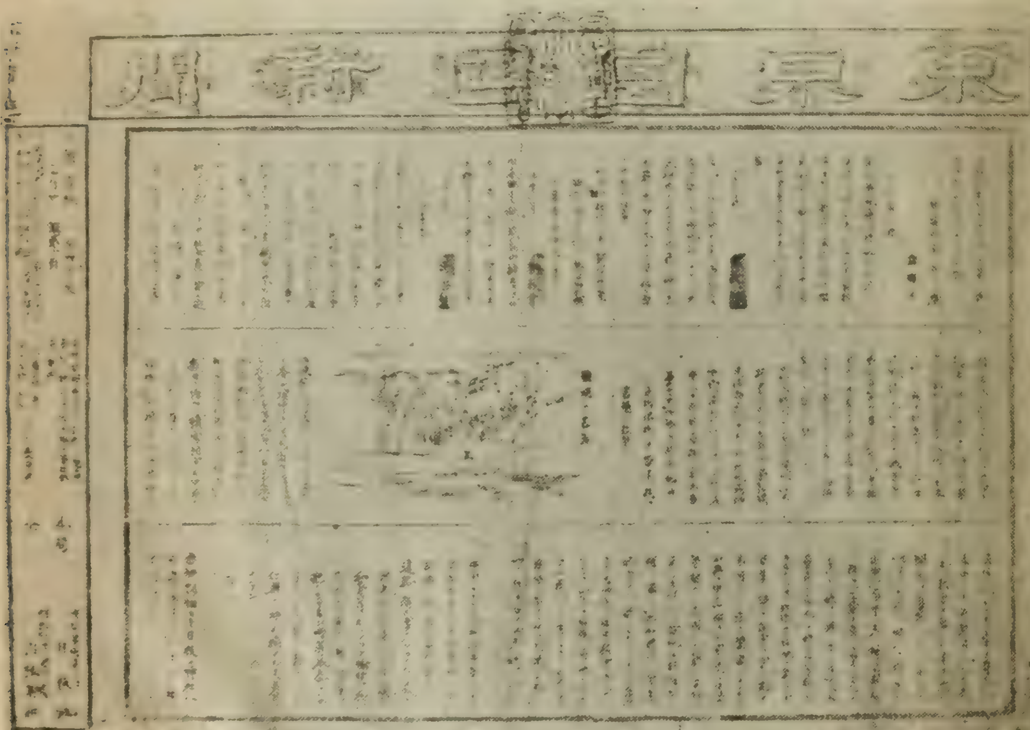
コンな句合に雜報に評が附してある。定價一枚百四十文一ケ月分銀二十目、必らず前金を要し、今の廣告に當る引札掲載料は一行一度一匁ツヽとある、往々繪もあり新聞の題號は色摺となつてゐる。

東京日々新聞の生れた頃は斯く幼稚なものであつたが、追々岸田吟香が入社し其後福地が入社し社を銀座の一角に置くことゝなつてから面目が大いに改つて大新聞となつたのである。

尙ほ明治五年、時の驛遞頭前島密が發行させた新聞紙がある。今の報知新聞の前身郵便報知新聞も前島が郵便の機關として創設したもので、これは隱れもなく知れてゐるが、六年發行のものは人多く知つてゐぬ、これは「每日ひらがなしんぶんし」といふ全部平假名文字で發行したものである。前島は日本に於ける最初の漢字廢止論者で慶應年間に早く其の獻議をしてゐる。此の假名新聞も一は漢字廢止を事實に試み、兼ねて下級蒙昧の者に每日の重要事項を知らしめん爲

めであつた、併しこれは行はれず十號ほども出して廢刊となつたが、發行所は神田淡路町二丁目啓蒙社で市川清流、平野榮、山田敬三、の三人が記者であつた、余が編纂した前島翁の傳「鴻爪痕」に左の記事がある。

此新聞は壽命は短かつたが、新聞の歷史には漏す可らざるものである。何故なれば此假名は「かなの會雜誌」の先驅で、明治初年に早くこれあるは、如何にも奇拔の企てゞあるからだ。此新聞は半紙三枚綴りで、表紙もなく、卷首には啓蒙社の商標とも思はるゝ蛇の目の紋のある旗が書かれてゐる。記事の內容はと云ふに第十號の冒頭に此新聞發行の趣意が書かれ、其次に布達があり、其次に外字新聞から譯した外國の話があつて、終り

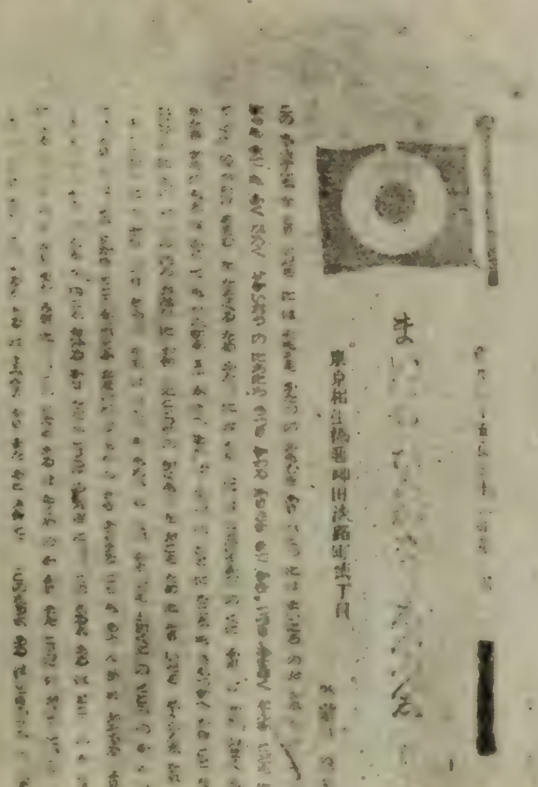


に郵便汽船會社の廣告が載つて
ゐる。そして汽船の圖が挿んで
ある、特に云ふべき一事は活字
に一特徴のあることである。當
時タザと作つたものらしく萬朝
報が後年工風した活字と同じ樣
に幅廣堅短かの薄ペッタラの字
である。これは假名を縮めて疊
み重ね讀み易からしめん爲めの
用意で字型が整つてゐる。そし
て一語づゝに間隔を置いてある
などは西洋の排字に倣つたので
あらう。左に載せるのが其一端
である。幸にポスターも存して
ゐるからそれも併せて掲げる

此頃の新聞は如何に配達され
たか委しいことは分り兼ねるが
便郵もまた實施されず、今の新

謂配達人といふ様なものも無つた頃であるから隨分遲緩のものであつたに相違ない。自分が曾つて筆を執つた、讀賣新聞社中の故老に聞へたことがある。毎日社より退社の折に、事務員が翌日の新聞を五枚十枚懷中して持去り、翌朝出の折其通路の讀者の家に配達したものだと云つたが、兒戲に齊しい様な感がある、田舍の僧父が銀座邊の巍然たる建築の日報社を見て官署と誤認したり、京橋角の日就社を神社と思ひ誤つて正面の受付へ賽錢を投げたりしたのも明治なつて餘程後の事であることを思ふと文化も遲々たるものであつたと謂はねばなるまい。

明治の初年に罪を新聞に得たものは如何に取扱はれたかといふと、後のごとく監獄入れられたのではなく銘々の家の坐敷に幽閉されたのである。門前に邏卒が立番するでもなく、時々動靜を調べるため役人が見回はにる位なことで、如何にも寛大のものであつた。特



定された守にさへ居れば いのであるから、酒を飲 でフザケたり放歌吟詩 つても構ひなく、夜分 は密かに家を抜け出で 屋遊びをしたり、北里 つたなどは公然の秘密 つた。それが嚴になつ 獄に收容さるゝ様にな のは、明治十一年四月 日の内務省の布達があつてからの事だ。明治の初年にはまだ平民と士族に差別待遇をする遺習があつて、士族には寛 民には稍々嚴であつた。同じ犯罪でも、士族は縲紲の辱みを免かれ平民は繩付で引かれた。のみならず士族は自宅 で濟み平民は監獄に送らるゝ様の差別もあつた。明治九年一月發行の評論新聞に郵便報知新聞と東京曙新聞が福島

三島通庸の醜行を摘發した爲め兩社の編輯長が罪せられたが、曙社の長谷川義孝は士族であつたので、自宅禁錮で濟み報知社の藤田茂吉は平民であるといふので、繩付で監獄へ送つた。同一犯罪で待遇に斯る差別のあるのは公平でないと論じてゐる。

明治初年には政府も新聞に對して寛大であつた、のみならず新政府は新聞の必要を感じ、其の發達を欲して之を奬勵した。前島が郵便條例を定めた時、新聞紙の遞送と新聞の通信を無稅にしたのも奬勵の爲めであつた。明治五年に大藏大輔井上馨の名を以つて「新聞雜誌」「日報社新聞」「横濱每日新聞」の三種の新聞紙を各府縣へ頒つ爲め每號三枚づゝ買上ぐることを達したのも亦奬勵の爲めであつた。此頃は政府の官吏が進んで新聞の創刊を企たてもした、前島が郵便報知新聞を起したことは前に云つたが「新聞雜誌」といふ新聞は參議木戶孝允の發意で四年の五月發刊したもので、長三洲や山縣篤藏や島地默雷が執筆したり經營をやつて、時事に觸れた說を掲げた。かやうに政府自から進んで新聞を奬勵した位であるから當時の新聞は幼稚でもあり平凡でもあつたが、併しいつまでも沈滯の有樣にはゐなかつた。追々政府の施設に不滿を感じ、それが筆端に迸ることにもなつた。殊に政府が財政問題につき紛紜を生じ、井上澁澤が辭職をしたことだの、征韓論で內閣に分裂を生じたことなどが新聞紙を刺激して、盛んに是非の論議を爲すやうになつて來たので、政府も漸やく困惑を覺へて、こゝに新聞紙の取締を嚴にした。明治六年十月の條例改正がそれであつた。併し此の取締は餘り峻嚴のものでは無つた。然るに其後征韓論で野に退いた板垣等が民選議院を主張するやうになつて、自由民權の論が喧すしくなり、政府を攻擊する鋒鋩が銳くなつてきたので、政府は明治八年六月新聞條例十六條と讒謗律八條を發布するに至つた。これが具體的に新聞紙法を定めた始めとも云ふべきもので、西洋の新聞法をも研究せしめて制定したものであつたから、條文の包容が廣く制裁も亦頗る嚴で、筆者の責任を明かにし、初めて記者に體刑を科することになつた。從前は筆者は變名や雅號や匿名で隱れたが、それが出來なくなり、官吏の職務を譏毀するものや、事實の有無

を論せず人の榮譽を害するの記事を掲げるものは讒謗律を以つて問ふこと丶なつた。

此の條例と律の發布は新聞界に大なる恐慌を起さしめた。此頃漸やく發達しつ丶あつた新聞の主筆にも、此條例と律の適用が殆んど測度しかねた、どれ丈の程度までが自由で、どれ丈からが犯則となるのか見當がつき兼ねて、各新聞共に一齊に畏怖の念に驅られた、其際平素鎬を削つて論戰した官權新聞も民權新聞も、犬猿啻ならざる關係を忘れて、共同の利益のため相會して對策を講じた末、條例と律の適用に就て政府に伺書を出し其指令を乞はんと決した。其時出席したものは各社の首腦で東京日々よりは福地と岸田、報知よりは藤田、朝野よりは成嶋、曙よりは末廣、評論新聞よりは横瀬（文彦）などであつた。伺書の起案は福池が擔當し、各條に例を設けて箇樣な事が政體變更となるか、箇樣のことが成法誹毀か、箇樣のことが人の榮譽を毀損するに當るかと、細かに書き連ねて、政府の意嚮を探らんとしたが、此の苦辛した伺書は指令の限りにあらずと云ふ一喝で却下された。

此の伺書の草稿は、日報社の西田氏であつたか條野氏であつたかその何れであつたかは忘れたが、確かに保存してゐた。今から三十年程前に自分はそれを借り受けて鄭寧に映寫したことがあつた。それは確かに今も存してある筈だが、震災後多くの圖書を外へ預けた其内に混じてゐるので、今は容易に見出し兼ねる。此の場合その伺書の全文を出すのが時機を得ており、亦た興味もあるのであるけれども遺憾ながらそれが出來兼ぬ。今は唯此の伺書の草案のおもかげを大略叙するに止める。

此の伺書の草稿は美濃紙十二行罫紙十枚許のもので、福地一流の立派な字で細書したもので、字句の補正に餘程苦心したらしく塗抹が多く、各條の正文を書いて二字程下げて、（例）とあつて、それに議論めかしい文や事實の叙事などが五六行乃至十行ほどもあつて、角張つた事は皆な福地の筆に書かれてゐた。但だ今の三面記事に當る樣な市井の雜事雜報は、柳北の方が得意と知つて福地は筆を之に讓り、（例）の内で柳北の書き添へたものが若干ある。それは無罫の紙に

柳北の自筆で書いたものが附箋としてそれ〳〵の處へ貼りつけられてゐる、最も可笑味を感ずるのは、此附箋の叙事で柳北一流の筆致で諧謔縦横、市井の夫婦喧嘩や、官吏の醜行や、華族の自墮落な有樣などを砕けた俗語交りで書き、それ〳〵に警世の意を寓して、譏誣が目的でないことを言外にあらはしてゐる。此の硬軟二種の例は共に筆者が餘程苦心して案じたに相違ないと思ふ譯は、成法誹毀なり、官吏侮辱なり個人の名譽毀損なり將た又裁判所の下調に屬する事實の掲載を禁ずることなども、皆程度問題であつて、成法の可否を論議したといふて、それが一概に誹毀と見らるべきでもなく、官吏の公正を望んだと云ふにそれが侮辱と認めらるべきでなく、民選議院の設置を冀望したといふて國體を壊亂するものとも云はれず、法廷に於ける事件の經緯を記したからといふても一概に裁判に妨害を與へるとは限らない。福地柳北の二人が例を案ずるに、此樣なキワドイ處に筆を付けるには可なり骨が折れたに相違ない。或る者は此伺書を見て當時の記者が法律思想に幼稚であつたと一笑するけれども、法文はともあれそれを司る人の方寸で寛にも嚴にもなり得る當時にあつて、新聞記者連が恐怖に驅られたのも決して無理はない、一概に法律思想の幼稚を以つて口すべきではない。寧ろ新聞の歴史に大切な紀念的資料として傳ふべきものであると自分は思ふが、知らず此の原書は今尚ほ存じて居るかどうか。

此の畏怖された新法は果して間もなく多くの違犯者を生じた。曙新聞の主筆末廣重恭が先驅で、東京日々では甫喜山景雄、報知では栗本鋤雲、朝野では成島柳北と云ふ樣に、各社の首腦は皆筆禍に罹つて牢獄に投ぜられた。此頃の新聞紙には其社の首腦が多く編輯長として名を署してゐた。然るに新法は編輯長を首犯としたのであるから、設令ひ他人から投書したものでも編輯長は責に任ぜざるを得なかつたのである。そこで各社は此の災厄に顧みて、編輯長を二流三流の記者の名に換へ、眞の主筆は後に隱れて、替玉を使ふやうになつたのである。當時都鄙の新聞記者が陸續獄に繋がれ獄舍の或る部分は全く記者で充ち滿ちた位な仕末で、今尚ほ人に知られてゐる人物の內には小松原英太郎や箕浦勝人や杉田

定一などもあつたのである、此の峻嚴な新令は記者の口を箝するに功があつた代りに、政府に反抗する氣燄が一時に高まつて來て、新聞記者に同情を寄するものが激增して來た。それまでは餘り多く賣れなかつた新聞に多くの得意が殖えた位であつた。全體人情として自から罪ありとも認めない事の爲め縲獄の恥辱を受けたりすると、反撥心の爲め温厚な人も過激の人となるのは自然の數で、此法令實施の爲め猫のやうな人を虎にしたのである。それが爲めに穏健な人がひどく惡化して前とは別人のごとく過激な言論を吐き、政府に反抗するの念を一層高めて自由論民權論に一層の氣勢を添へ來り、囂々たる政論を惹き起したが、其の俑を作つたものは此法令にあつたとすると、政府は言論を鎭壓せんとして却つて反對の結果を見たものである。どう考へても此の法令は政府の失策であつたに相違ない。併し翻つて考へれば新聞紙の氣運を助成したものは此の法令のお蔭であつたとも云へるであらう。各新聞紙はこれより世の注意を惹き、政府を攻撃するの記事をば江湖は快として愛讀することになつた。

あらはに政府を攻撃すれば直に法を問はるゝ虞れがあるから各新聞記者はつとめて婉曲の筆を揮ふに至つた。婉曲であつて諷刺があり諧謔の間に寓意のあるやうな文章は漸やく現はれ之れが珍重せらるゝやうになつたのも自然の勢である。成嶋柳北がその筆を雜錄欄に揮つて朝野新聞の名聲を高からしめたのも又其の發行部數を激增せしめたのも柳北の天品の文才が巧みに諷刺を弄し、それが呼び物となつたからの事だ。後年になつて團々珍聞といふ雜誌體の繪入の滑稽新聞が起つて手廣く賣れたのも繪畫で諷刺を寓したのが一ツの原因で言論壓迫の産物と見ることが出來よう。勿論明治十年頃に横濱に外國人が刊行した外字に繪を入れた日本紙摺りのジャパンポンチといふものがあつて、之れも諷刺的寓意があつたけれども、外字新聞丈に多く擴がらなかつた。

此頃は今日の様に何か事件が起つたからといふても自動車で急に記者を派するやうなことも無つたは勿論、後年のやうに專門の探訪者などもなく、記事は隨つて疎略で甚だ幼稚であつたことは言ふまでもない。明治七年に臺灣征伐とい

ふ事件が起きた時、東京日々から岸田吟香が身を挺して戰地に赴き、自ら探訪の衝に當り續々戰報を東京日々に掲載したのは破天荒の事で當時之れを異數とした。これが恐らく事實の探訪が新聞の一大任務であることを教へた第一の警鐘であらう。併し此の先例の爲めに相當地位ある記者が自から動くやうなことは餘り無つた。熊本や萩の亂などがあつても專ら官報にのみ據つて、特殊の情報を掲げることも無つた樣である。十年に西南戰爭が起つた時ですら、福地は山縣監軍の記室として戰地に赴むき、戰報を日々の新聞に掲載したけれども、他の新聞の主筆は大本營の所在京都までは出張したが、何れも京都の風月を樂むで優悠たりし狀態であつた。ひとり東京日々だけは、福地の外相當の記者が二人まで戰地に赴むき通信を力めたので、紙面は戰報を以つて賑つた。自分は當時帝大に居つたが、毎朝競つて東京日々の戰報を讀むことを何よりの興としたものである。福地は參軍の帷幕にゐたから、その報道は大體正確であつたに違ない。當時はまだ新聞の號外を特に配達するなどは無つたやうだが、玆に報知新聞の號外らしいものが一紙存じてゐる。それは熊本城に官軍が達した際の電報を掲げたもので郵便報知新聞第千二百六十三號新刷とあつて、左の如く記してゐる。

左の電報三件は警視局より今午前各新聞社に特別に五下附相成たる所なるが弊社は道も隔り居るに付其利達稍や時間を遲延し四時に過本紙刷成　既に配達人派出したる後なれば不得止別紙に急刷し以つて觀客日々渴望の意に應せり

明治十年四月十六日　　　報知社

○十五日午後七時三十分宇土に於て黑田參軍より岩倉右大臣公へ宛し電報に本日拂曉より山田少將黑田大佐の率ゆる左翼の兵を進め綠川を渡りて開戰正午十二時川尻へ進入賊散々に敗走す時に山川中佐右側一中隊の兵を引率し熊本城に達したる旨左の報知ありたり

今午前川尻の火を望み、前面の賊勢を察するに頗る狼狽の樣子あり故に午後第二時直にヤセ川を渡りたるに一の賊を見す、只賊の後營を望むのみ、因つて長驅熊本城に達せり、取敢す此段御報知申候、進十四日午後四時廿五ヶ熊本城にて山川中佐而して明日下官谷旅團を引率し未明大擧して熊本城に連絡を通し入城の議に決せり且輜重の義も整頓輸送の筈此段御屆に及ぶ

（他の一報略す）

これは當時待くたびれた大快報であつたのだが、報知は特に補刷して即日之れを配布したかどうか、翌日の新聞に挿んで出すならば本紙に印刷してもよい譯であるから、特に讀者に配達したと見れば、これを號外と見ることが出來ようと思ふ。

明治十年までを假りに一期として考へると此間に新聞は可なりの進歩をした。東京で有力であつた新聞紙は日新眞事誌、郵便報知新聞、東京日々新聞、朝野新聞であつた。日新眞事誌は其主宰者ブラックが政府に引入れられてから衰微したが、曙新聞が追々大新聞の列に伍するに至つた。此の新聞に社説を書いたものは末廣鐵腸で六年の條例改正の爲め犠牲の先驅となつたのは、末廣である。末廣は刑期滿ちて朝野新聞に入り柳北を助けた爲め曙新聞は甚だ振はなくなつた。一時政府に買收されたといふ説もあつたが、後に伊勢桑名の人岡本武雄と云ふが入つてしきりに民權を主張した爲めに、漸やく頽勢を挽回したけれども、大新聞中の最も下級に屬するものであつた。尙ほ此の十年間に東京に有力な小新聞が生れたことを爰に漏すことが出來ぬ。乃ち明治七年に讀賣が生れ、翌年平假名繪入新聞とかなよみ新聞が生れた。此新聞は共に平易を主としたが、各々其の特色があつた。讀賣は教訓を主とし文藝に重きを置き、政治記事を揭げず、上品の筆を揮つた。平假名繪入は後に東京繪入と改題したも



（ジャパン・ポンチ）

ので、繪が一種の呼ものであつたのと前田香雪の俗に入りやすい雜報や小說が人氣を博し、かなよみ新聞は假名垣魯文の編輯に係り藝妓の內幕などを寫し「猫々奇聞」といふを連載し、これも繪入であつたので亦人氣を博した。當時大新聞が政治に熱狂する時にあたり、全く色彩が變つてゐた爲め却つて何れも成功し、發行部數は優に大新聞の上に出たものもあつた。讀賣新聞は多くの小說家を包容して後年文學界に認められたことは何人も知る通りである。かなよみ新聞に就ては多く語る違がないが、爰に自分の手元にある妙な材料がある。それは芳原の妓が此の新聞に讒謗されたと云ふて正誤を申込んだ原書で、此の妓の且那筋である福地が代筆してゐる所に可笑味がある。當時の正誤文の標本とも云ふべきであるから長文ながら爰に掲げて讀者の一笑を博せんとする。

以書狀得御意候然は當九月六日の假名讀賣新聞第百五十八號を以て私一身の儀に付種々之讒謗を御記載相成甚恐入候次第に御座候右は素より事實に無之候儀は申迄も無之假令事實に有之とも私に於ては飽まても貴所樣の御筆先にかゝり榮譽を害せられ候儀さ存候間何分此儘には打捨置がたく候何方より御聞込に相成候とも私に於ては乃ち貴所樣を御相手取候外致方無之に付一應貴意を得候儀に御座候乍去貴所樣さへ御懇意仕候間柄に候得ば打付に公裁を奉仰候は私の本意に無之わざさ此御懸合を仕候　付此書狀御落手之日より二十四時において私が相穢されたる汚名を雪くべき丈の正誤取消を御出被成候はゞ御示談に可致存し御不同意に候歟又は十分の御取消無之に於ては餘儀なく讒謗律に據て其筋へ御訴可仕心得に御座候何れさま貴所樣の御好にまかせ申候間左樣御承知可有之此段一應之御掛合仕候爲如斯御座候也

明治九年九月十一日

新吉原藝妓渡世
増田はん

横濱
假名讀賣新聞編輯長
假名垣魯文殿

此の正誤文は假名讀新聞がまだ横濱にあつた時に寄せたものと見へるが、此新聞も後には東京へ移轉したのである。福地自身の手に成る此正誤文が或る好事家の手に入り、それを種に柳北と魯文に狂歌の揮毫をもとめ、それ等を一幅に收めたものが今自分の處に藏してあるが、柳北の狂歌は流石に福地に對して皮肉を言つてゐる。

この幅の著者は紛なくも御用新聞社の隊長吾曹先生にてましませは假名讀の寶庫になかく秘藏すへきことにこそ

思ひきや鐵棒こさき筆なもて

あたらはんにやの代書せんさは

喋也社の餘娯齋

しるす

福地櫻痴先生花街の猫妓牛めか代筆して余を苦しめられしも、はや十五年の昔さになれり此戯筆を藤白老兄の持來れるに猫々寄聞の筆の跡を思ひ出て

此頃は鼠もさらで膝の上に

睡るを常さなれる老猫

明治廿三年四月

金花猫翁印

明治十年迄に東京の諸新聞紙の追々發達した狀況は大略以上の如くであるが、各地方にも種々の新聞が起つていろいろの沿革もあるけれども、今それ等を一々考へる遑がない。併し大阪と横濱の新聞だけには聊か一瞥を與へねばならぬ。大阪では早く明治五年に大阪新聞が起り同八年に大阪日報と浪華新聞が起つた。大阪日報は大阪に於ける唯一の政治新聞であつて、陽新吾が盛んに民權論を書いた。これが今の大阪毎日新聞の前身である。浪華新聞は花柳の雜事や市井の巷説を專らとした小新聞であつた。大阪朝日の前身たる「朝日新聞」は明治十一年に至つて起つたやうに思ふが、創刊の頃は微々たる小新聞であつた。大阪の朝日毎日が新聞界の覇を唱ふることゝなつたのは餘程後年である。横濱にもいろいろの新聞が起つた中に明治三年に發行された横濱毎日新聞は特に擧げねばならぬ。此新聞は栗木鋤雲が最初編輯

し後に嶋田三郎が論説を書いたものであるが、餘りに振はなかつた。東京の諸新聞が追々發展するにつれて、此新聞は益々衰運に赴いた。然るに十二年沼間守一が此新聞を買受けて之れを東京に移し「東京横濱毎日新聞」と改題することになつてから、頓みに勢力を增し、忽ち大新聞の列に伍し、東京日々の如きは一敵國として之れを目の上に揚げざるを得なかつた。沼間守一は越後柏崎の陣屋に生れた幕臣の子で、早く佛國士官に就て戰術を學び、維新の際には會津庄內の兵を率へて官軍を惱ましたこともある。其後は明治政府に仕へて相當の地位に居り、曾つては司法卿江藤新平に隨伴して英國に赴き法律を學んだ。沼間の尤も特意とするろは法律であつて、其の議論は概ね法律を根抵としたので、論旨が確乎として隙が無つた。流石の吾曹子も沼間の嚴正の法律論には辟易して時には敗を取つた。此の人が官を去つて嚶鳴社を結び、他の民權論者を率て、文壇に立ち縱横民權の爲めに論議し、殊に御用新聞の所說の反駁をつとめたから、その勢力は隆々たるものであつた。恐らく議論として拔目のないものは此の新聞の社說であつたらう、此新聞が起つてから大新聞間の論戰は一層の繁を加へた。

一ト通り明治十年頃の都下有力の新聞、東京日々、郵便報知京濱毎日、朝野の四新聞紙の體裁やら論調やら文章やらの一端を擧げて見ると、先づ新聞紙の體裁は四種四色で、大きさが違つたは勿論、活字もそれ〴〵異つて特徵があつた。東京日々は普通の明朝活字を用ひず、支那の康熙乾隆頃の板本の字に倣つて菱湖系の軟か味のある楷體の活字を用ひた。（此體の活字は可なり長く用ひられ今でも名刺などに用ひられてゐる）それに反して朝野は全紙四號の大活字を用ひ、他の二紙は五號活字を用ひた。內容に就て云へば、當時大新聞は孰れも社說に重きを置き、三四段に亘る長篇は珍らしく無つた。讀者も社說に注意したので、各社の社說計りを集めて、翌日發行の新聞集誌といふものも出た。文體は漢文崩して言文一致に近い文などは絕對に無つた。尤も同じ漢文崩しでもそれ〴〵の特色があつたのは言ふまでもない。福地は流石に老成の筆を揮ひ、むづかしい漢字や熟語を避けたゞ、文章に氣品があつて堂々たる趣があつた。彼れは叙事

にも長じ太平記風の文が得意であつた。朝野には末廣鐵腸が社説を擔任し成島柳北は專ら雜録に筆を執つた。末廣の筆は激越の調があり語々風霜を帶び氣魄があつたので年壯志士の氣に投じた。柳北はそれに反して其の獨特の瀟洒の筆を弄し諧謔の間に諷刺を寓したので鐵腸の文と併せて呼び物となつた。報知は此頃藤田茂吉が筆を把つたが、末廣の文よりも流麗で文學的であつたが、氣魄に於ては讓る所があつた。栗本鋤雲が隨筆を書いたのは柳北の雜録の朝野に於けると同じ趣があつたけれども、鋤雲のは諷刺文では無つた。京濱毎日に至つては、文章には飾り氣がなく徹頭徹尾議論づくめで、檢事の論告とも云ふべきものであつたが、併し議論に拔目がないので重きをなした。當時新聞社説の題材は當面の時事を論ずることは勿論あつたに相違ないが、各新聞相互ひの論爭が寧ろ日日の行事で火花を散らした。何れも理論タツプリで、今から見れば幼稚のものであつた。或は民權を論じ或は自由を說く、西洋ではどうだとか、某學者の說はこうだとか云つたやうな事で、議論は書生離れがしてゐなかつた。唯だ東京日々だけは流石に理論を云ふ側らに尤も實際に觸れた論を立たけれども、大勢は理論の範圍を出ることが出來なかつた。明治十年より少し後に、一時各社が數十日に亘り主權論を戰ひしたことがあつた。これは立憲國の主權は君主と議會にありといふ民權論者に對抗して東京日々が立憲君主國に於ては主權は全然君主一人に在りと抗爭し、福地も結局敗を取つたが、此の論爭などは全く政治學の初步の議論であつたけれども、各新聞主筆の頭腦だけでは戰ひ切れず、その道の學者を延て顧問にしたやうな仕末であつた。吾等當時の帝大學生が各社の論爭に對して批判を下し主權論一篇を著はし、丸善から出版するに至つたのも此時であつた。これ等は明治十年後に屬するから、話頭をもとへ戻して、尙ほ當時の新聞の內容に就ていふと、大新聞は多くルビをつけないことを以つて見識とした。勿論今日の樣に繪を挿まなかつた。繪を入れたものは繪入新聞で一段階級の卑いものとしてゐた。小說を載することもなかつた。尤も西洋小說を反譯して載せた新聞もあつたけれども、大體小說を載せることは小新聞の爲す業であるとして地步を保つものである。勿論當時探訪通信の法も進まなかつたので、日々

の出來事を報ずることも疎慢であつた。外國電報などは政府筋へ來たものを載せる位で、直接外國から電報を取るやうのことも無つた。ナント云ふても大新聞といふて幼稚のものであつた。

明治十年を過てから國會請願運動が熾んになり、政黨が起り開拓使拂下事件が起つて政論が沸騰し、新聞紙は政黨別となり御用新聞の東京日々ですら開拓使事件には政府に反抗し、政府反抗熱は益々高まつて來たので、爰に政府は新聞紙に對し空前の取締法を定め「發行停止」といふ峻法が實施され、其後更らに一層峻嚴の新聞紙法が布かれ、自分の如きは其の第一の犧牲となつて八ケ月獄舍に投ぜられたが、それは可なり後のことで明治十年少し後には今の元老西園寺侯が自由新聞を起して過激の論を吐き、當時侯の實兄である時の侍從長德大寺を困しめたこともあつた。新聞紙の歷史は明治十年を經て益々進境に入るのであるが、自分は十年を盡して爰に談話を打切ることにした。

輕氣球

仙人の雲にのりしは何ならし今は空ゆく舟もありけり

新聞紙

くすの葉のうらめづらしく書かへて日毎見れどもうみはてぬ哉

トンネル

つきな堀り岩を穿ちし通路のあふめづらしき世にもあるかな

明治十七年版「開化新題歌集」より

服部撫松傳

三木愛花

「一」 明治初年の文化と服部誠一氏の出顯

徳川幕府が瓦解して江戸が東京と改稱され、萬機の政が此地より發布さるゝに至つた明治維新の初年に在つては、百事革新の緒に就き從て文化事業も漸くにして更新擡頭の氣勢を帶ぶるに至つたが、當時は尚ほ漢學者の支配權に屬し其刊行さるゝ書籍は八九分は漢籍の餘流であつて、文章ものには『唐宋八大家文』『文章軌範』『古文眞寶』『唐詩選』等の飜刻若しくは講義の類であり、歴史ものには『史記』『十八史略』『日本外史』『國史略』『政記』の如きものであつて之れに伴つて種々の字書籍が纂輯され只經書のみが閑却される位の處であつた。

然るに此際に在つて崛然として興り來つたのが福澤諭吉氏の著述刊行であつて、氏は今尚ほ漢學者の治化に屬した文學界に對して、挑戰的と云はんよりも寧ろ攻勢的の陣容を進め、漢文書籍の難解に反して、平易通俗の文字を以て極めて普遍的に編輯し、一面に漢學思想の現時勢に適應せざることを駁撃し、楠正成の戰死を權助の縊死に比論せし如き奇矯の言までを弄し大に物議を惹起せしに拘らず、其一面に於ては更に西洋文學の鼓吹に努力し續々として其著書を刊行しつゝ頻りに刺撃を各方面に與へたので、其著書の中の『西洋事情』『世界國盡』『學問のすゝめ』の如きは疾風の如き勢ひを以て日本の津々浦々に行き渡り、他の刊行物の如きは其百が一の賣れ行きに過ぎざる形勢を見るのみであつた。

當時徳川氏の末期より殘存した漢學者には尚ほ少なからず碩學鴻儒とも稱すべき大家もあつたのであるが、福澤諭吉

氏の跋扈跳梁とも稱すべき威勢に對しては只啞然として傍觀するの形勢であつて、之れに對抗して文學界に新生面を開かんとの氣勢に出でしものは纔かに中村敬宇氏の『西國立志編』位のものに過ぎなかつたのであつた。

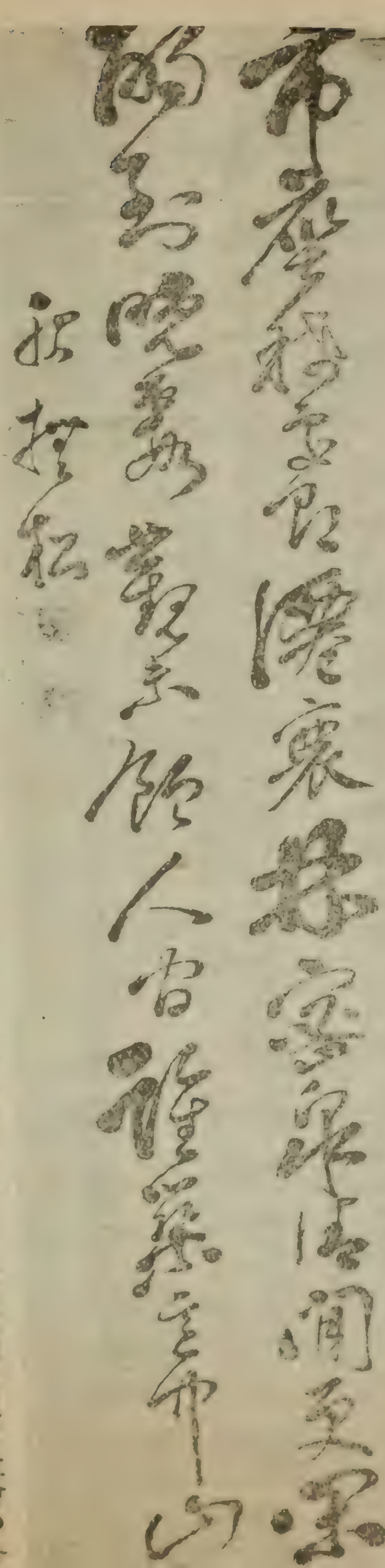
一方小說家又は戲作者と稱する德川氏末季より傳統したものにも、多くは舊稿を繼續して新たに小說若しくは戲作の上に生面を開かんとするものも少く、只一人假名垣魯文氏があつて機を見ることに敏であつたものと見え巧みに福澤諭吉氏に追隨して福澤氏に『西洋事情』あれば假名垣氏は『西洋膝栗毛』を出し、福澤氏が『窮理圖解』を出せば假名垣氏は『胡瓜圖解』を出し、其小說（小說と云ひ得ずば讀み本）にも其時々の出來事卽ち高橋お傳の如きものを出して明治初年の文學界（之も文學と云ひ得べくば）を飾つたのみであつた。

斯る形勢の許に在つて突如として漢學卽漢文を以て明治の新舞臺を描出することに着手した一人があつた、之れ別人でなく卽ち號を撫松と稱した服部誠一氏である。氏は今の福島縣なる二本松の藩主丹羽左京太夫の儒臣であつたが、德川氏の瓦解より明治維新に亘つて市井の風習、花柳界の事情に通曉したのを幸ひとして、之れ等諸方面の內外狀態を描寫して之れに『東京新繁昌記』の名を冠し其第一編を刊行したのは卽ち福澤氏の『西洋事情』『世界國盡』と前後した交であつたが、時恰も新舊文學の過渡期に際して其著作が能く其過渡期に適應し、文章に於ては極めて平易の漢文體を用ひ、內容に於ては新東京の新粧新面を描き出したのであるから、一面には漢文の尙ほ愛讀されたる讀書子の歡迎する處となり、一面には新東京の內情外樣を知らんとする好事者の愛玩する處となり非常の賣れ行きを以て都鄙遠近に行き渡つたことは殆んど福澤諭吉氏の『西洋事情』『世界國盡』と伯仲するの勢ひを爲した。其好況に乘じて二篇三篇四篇五篇と續刊し所謂洛陽の紙價を高からしむの槪があつて、明治初年の出版界に在つては福澤氏の『西洋事情』『世界國盡』と服部氏の『東京新繁昌記』を以て力士に於ける三役と稱すべく『世界國盡』が大關たらば『東京繁昌記』は關脇に位すべく、少なくも小結までには降らざりしものであつた。但し福澤氏の『學問のすゝめ』も此三役に入るべき賣れ行き

を爲したるものであるが之れは僅々數葉の小冊子で雜誌と稱すべきものであつた。假名垣氏の戲作數も相當に普及を見ることは得たが能く張り出小結に入るも遠かつたのである。

二二　東京新繁昌記出づ

服部氏の『東京新繁昌記』は漢文ではあるが、之れを漢文と稱する上に於ては素より純漢文と云ふものでない、若し支那人をして讀ましめたらば其大意は解し得らるゝであらうが到底讀み下し得ることは出來ぬ。恰かも日本人が不熟の



服部撫松筆蹟

英語で外人と對話する位の程度であつて、所謂文法とか熟字とか云ふものは全然眼中に置かず只漢文體を以て社會の各方面を描寫したに過ぎぬであるから、純漢學者からは之を見て雜駁なり散漫なり卑俗なり猥褻なりと笑罵されたのであるが、服部氏は素より漢文の力倆を示す爲めに書いたのではなく成るべく各方面の實情を細寫することを努めたのであるから、時に應じ處に應じて勝手の熟字を創作し勝手の語句を並列し、卑俗を寫すには卑俗の文字を用ゐることを敢て

し、猥褻を寫するに猥褻の文字を用ゐることを避け難いものとして、他の碩學鴻儒が純漢文を以て其賣れざるを嗟嘆する時に服部氏は此變體漢文を以て大に賣れることを獨笑して居たのであつた。之れにつき一つの挿話がある。往時寺門靜軒が『江戸繁昌記』を著はして大に學者界を驚倒せしめ魔道なり邪道なりとの非難攻撃を受け、終ひに幕府より江戸構ひまで蒙つたのであるが、其『繁昌記』は却て益々賣れ行きを増して當時の大儒が著はした處の經書の註解の如きものは『江戸繁昌記』の脚下に雌伏せざるを得ない程であつたが、京都に中島棕隱と云ふ漢學者があつて一面寺門の『江戸繁昌記』が卑猥雜駁であるのを笑ふの意と、一面純漢文を以て社會を寫し得らるゝの技倆を示すの意を以て『都繁昌記』を著はして其一編を刊行するに至つたが、其文章は寺門の『繁昌記』に比して大に優越し之を漢文の上から見ても立派に讀み得らるゝものであつたが、如何せん其賣れ行きは『江戸繁昌記』の十の一にも及はず、終ひに一篇のみで二篇以下の刊行を見ることが出來ずにしまつた。之れに對し寺門は多言を費さず只彼の如き立派な漢文を書いては賣れることは困難であらうと云つたとのことであるが、之には寺門の心には腐儒者が文字に拘泥することを諷刺したものであらうが果して『都繁昌記』は不成功に終つたのであつた。服部氏が純漢文を度外して一流の變體漢文を以て『東京新繁昌記』を書いたのは偶然か又は寺門の諷刺を耳にして居たのであるかは知らずとしても、能く讀書子の心意を捕へたものであつて當時の文學界に於ける一才物であつたことが想像し得らるゝのである。

今日からして『東京新繁昌記』を見る時は其體裁に於ても其材料の選擇に於ても其文體に於ても、寺門靜軒の『江戸繁昌記』に摸倣したものであつて格別に其斬新とか趣向とか云ふことを認め得らるゝものではないが、其當時一方には『文章軌範』『八大家文』が勢力を持し一方には『世界國盡』が流行した中流に在つて、既に久しく忘れられる『江戸繁昌記』を抽出して之れを改造修築して新東京新帝都の新生面新狀態を描寫することに着眼したのは、服部氏が單に一種の漢學者でなく所謂文學界の新進作家であつて、之を寺門靜軒の模倣者として片つけ去るべきものでなく、寺門の『江

戸繁昌記』すら此服部氏の『東京新繁昌記』を借りて、忘れられる名より再び世に知らるゝに至つた如き奇觀を呈したのである。

服部氏の『東京新繁昌記』は却て『江戸繁昌記』を蘇生せしめたのみならず、更に當時の文學界に新生面を開き爾後之れに類似した著書は踵を接して刊行され、明治十年頃までに世に出たものに成嶋柳北氏の『柳橋新誌』、松本萬年氏の『新橋雜記』菊池三溪氏の『西京傳新記』の如きものがあつて、之を文章の上から見る時は共に服部氏の『新繁昌記』の上に出で、其漢學の力は大に優つたことを知れらたのであるが、要するに中島棕隱の『都繁昌記』の亞流に落ちて其賣れ行きに於ては遙かに服部氏の『新繁昌記』の下に在り、服部氏をして彼の如き立派な漢文では其賣れ行きは困難なりと寺門靜軒の言を反覆させるのであつた。此他總生寬氏の『東京繁昌新詩』關機岔子の『銀街小誌』の如きもの若くは地方都會に於ける何々繁昌記と稱するものなど十指を屈する程のものがあつたが、要するに服部氏の開拓した地盤に於て扶植されたもので、前者は其文章の純漢文に拘泥した爲め、後者は其文材の『新繁昌記』に企及し得られざりしため其賣れ行きに在つては『新繁昌記』の十の一に及ばざりしものであつた。其好證として服部氏の『東京新繁昌記』は大震災前の古本者の店頭には屢々之れを見ることが出來たのであつたが、他のものは殆ど之れを見ることを得ないのであつた。之れに因つても『新繁昌記』が如何に廣く賣捌かれて殘存の古本が多かつたかを想像されれのであつて、震災後の今日に在つても『新繁昌記』は尙ほ往々にして古書肆の店頭に見ることとを得るのである。

然らば『新繁昌記』は凡そ幾部位を賣り得たものかと云ふに、先づ一萬部より一萬五千部内外と見られるのである。一萬二萬の發行數は今日に在つては決して大成功と云ふことを得ざるものであるが、明治の初年に未だ新聞の廣告と云ふものが無く又郵送、鐵道便等の運輸法の設定せられざる時代に在つて一萬以上の賣れ行きは今日の十萬以上の賣れ行に相當したものである。次に服部氏が之れに依つて收め得た利益も今日の一萬圓以上の印稅を支拂ふものあるに比して

は甚だ輕微たるを免れぬが、當時著書に依つて收入の多かつたのは、福澤氏を除きては服部氏が第一であつた事も想像される。『新繁昌記』は一冊二十五錢であつて五篇を通じて一圓二十錢であつたから、其總賣れ高は二萬圓內外である此中服部氏は一冊に對し五錢、一部五篇に對して二十五錢を得たのであつたから、之を一萬五千部と見る時は約三千七八百圓となり今日の三萬圓以上四萬圓に相當したのであつた。氏は士族奉還金の貯財も多少あつたのであつたらうが之れは聞くことを得ないが、當時此奉還金の方で生活を支へ得たものと見え『新繁昌記』に依つて得た收入は之を邸宅の新築費に當て、明治十年頃に湯島天神の傍らなる妻戀坂の上に二階建の紳士に適應する新家屋を建築したのは文士として第一流の家構へであつた。予も明治十四五年比より屢々此の邸に招かれたことがあつたが、其家の地位は妻戀坂を登りつめた右方の高臺であつて、表は湯島天神に通じ樓上よりは左に上野の森を指顧の間に見、左には神田明神の樹木を控し、東南は淺草より隅田川までを俯瞰し、月に雪に絕好の風景を收め、其地名の妻戀と云ふのも『新繁昌記』に依つて得た新樓に相應しき感を懸ひたのであつた。其新築費は約二千餘圓であつたと云ふのであるから之れも今日ならば二萬圓以上に相當するものである。地所は買ひ得たのか借地であつたか之を聞かなかつたのか、聞いても忘れたのかは覺えがない何れにしても此新築費のみでも約三千圓を要して其出所は『新繁昌記』であつたとすれば今日ならば三四萬に相當する收利のあつたものと見らるゝのである。且つ氏は尙ほ明治二十年比までは紳士の生活を持續した處から見て奉還金の多寡は知らず、邸宅新築費の外に更に幾千かの『新繁昌記』收益の餘財はあつたものと見られるのであつた。予が斯く『新繁昌記』に就て詳記するのは『新繁昌記』あつて服部氏あり、服部氏あつて『新繁昌記』あり、氏の傳記は此『繁昌記』を生命とするものであるからである。

「三」　服部氏の勢力

『新繁昌記』の普及に伴つて服部氏の名聲は當時の文學界に嘖々として喧傳さるゝに至つたので、福澤氏の西學鼓吹に

關するものと假名垣氏の戯作讀本以外に屬する漢文體、若しくは漢文崩しと稱せる漢文直譯體の出版物、特に情事に亘るもの飜譯小說に類するものは、服部氏の校閲又は序文を請ふを以て書肆の希望條件の一つとなつた程の勢ひであつたから、其比の出版物にて實際同氏の校閲せぬものにも其名を署したるものがあり、又同氏の序文を以て卷頭を飾つたものが少なからずあつた。予の記憶に存するものにも飜譯小說『二十世紀』『春江奇緣』の如きは全然服部撫松飜譯の名で出版されて居るのであるが服部氏は歐文を讀み得ざりしを以て之を飜譯せる理由なく、全く名を貸したのみである。此二種の中の『二十世紀』は何人の飜譯であつたかを記憶して居ないが『春江奇緣』は高田早苗、天野爲之及び他の某氏等三名が在學中に合譯したものであつた。之等の諸氏は後日著名の大家となつたのであるが、其比は服部氏の名を借りて其飜譯書を世に出さゞるを得ざるのであつた。又序文の掲げられて居るもので予の記憶して居るのは其比新歸朝の織田純一郎氏が『倫敦繁昌記』五冊を著述出版するに當つて書肆は是非とも服部氏の序文を要するとの請求を爲し、織田氏も已むを得ず服部氏の前に膝を屈して序文を懇請したのである。之等の事實に依つても當時服部の『新繁昌記』が讀書子の間に傳唱された事の盛んであつたのを想像することが出來るのである。

「四」　東京新誌の創刊

明治五六年以前までは未だ活字の印刷が普及せず、其比に生れた今の東京日々新聞、報知新聞の如きすら木版彫刻の半紙手摺りものであつた位であるから、前來記した處の出版物は悉く木版手摺りのものであつた。然るに明治七八年比より活字器械摺りの應用が流行を始めたので、服部氏は『新繁昌記』の木版彫刻等のため一冊を出版するに半年近く（早くも三四ケ月）を要するを手緩しと考へ『新繁昌記』は第五年を以て終了として之を活字版の雜誌として連續發行するの計畫を立て之れを『東京新誌』と題して編輯其他一切を自家の手にて經營し、社名を「九春社」と稱したのは明治九年一月であつた。然しながら當時の活版事業は尙ほ甚だ幼稚であつて、服部氏の『東京新誌』發行に用ゐられた印

刷器は手廻し四枚懸け一臺のみで紙數の多きものを發行することが不可能であつたので、僅々十二枚つゞの小雜誌を一週一回發行すること　したのであつた。用紙は支那製の竹紙（即ち俗に白紙と云つたもの）表紙は各號に色を變へた金簇箋で、専ら風雅を主としたのである。內容は服　氏獨得の繁昌記體の漢文七分に片假名書き下しの戲文及び爲永流の人情小說等を以て三分を滿たしもので、漢文體と片假名文とは服部氏自から筆を執り、人情小說は東傑竹翠と稱する青年の筆であつた。

『東京新繁昌記』は編輯後出版までに數個月を要したので勢ひ動的即ち時事を描寫することを得ず、専ら靜的即ち一部の社會情態を描寫したものであるが『東京新誌』は週刊であるから一面社會の情態を描寫し行くの旁ら、一面には前週に於ける朝野の出來事より著名人物の佳話艶聞を報道揶揄し、且つ政治上の事までも諷刺批評して、未だ新聞條例の一定されざる時であるから其筆鋒は極めて無遠慮にして放縱のものであつた。然し其始めの文章は『新繁昌記』體であるから變體漢文とは云ひながら先づ漢文と稱せらるゝものであつたが、後には次第に放縱となつた和漢西洋雅俗混合殆んど名狀すべからざる服部氏獨得の上に又更に獨得の怪文字を連ね縱橫無盡、魑魅魍　を誌上に顯出せしむるに至つたのであつて、其大膽と才筆は驚倒せざるを得ざるものであつた。

誌中の項目は其號に依つて多少の變化はあつたが、第一には『美也乎鎖傳』と題し前週間に於ける朝野內外の出來事を春秋左傳の體に倣つて經傳に分つて記述し、始めに「經」として其大意を記し次に「傳」として縱橫詳細に記したもので、此一篇は稍や眞面目のものであつた。次には當時の大官若しくは華族の風流情事を捕へ來つて之を小說的に布衍しつゝ嘲罵諷刺、骨を刺し肉を剜り、而して其表面には極めて流麗婉曲の文字を弄して百花爛熳の觀あらしめたのであつた其他妾宅の秘密、藝娼妓の內情・私窩子の平生などを序して微に入り細を穿ち又「捧腹茶話」と題して古今の小話を漢文で記する如き、之を新繁昌記に比しては一層服部氏の怪腕才筆を發揮したものであつたから、當時の雜誌としては其

發行部數も他に數倍して一二年の後には之れに模倣した雜誌が續々として創刊さるゝに至つたが、素より服部氏にして始めて此雜誌があつたのであるから、其模倣者は大抵二號を出でずして廢刊せざるを得ざるに至つた。

『東京新誌』と前後して創刊された雜誌の中に『東京新誌』と相並んで永く繼續したものに政治雜誌の『近事評論』『扶桑新誌』を別として『團々珍聞』と『花月新誌』とがあつた『團々珍聞』は狂文、狂詩、狂句、漫畫、川柳、など一の如きを主とし『東京新誌』とは其選を異にして廣く讀者に適應せしめたので、其發行部數は殆ど『東京新誌』を凌いで十數年を繼續し『花月新誌』は成嶋柳北氏の經營であつて專ら當時の漢學大家の詩文を網羅し其の內容は遙かに『東京新誌』に優つたものであつたが、之れ亦中島棕隱の『都繁昌記』が寺門靜軒の『江戶繁昌記』に企及し得られざりしと同觀であつて、其發行部數は到底『東京新誌』に企及し得られざるものであつたが、幸ひに柳北氏の私財と『朝野新聞』の後援とに依つて十數年を繼續し得たのであつた、此間に假名垣魯文氏の『魯文珍報』川島象二氏の『同樂相談』闘槎盆子の『鳳鳴新誌』山田風外氏の『風邪新誌』等の創刊があつたが長きも百號、短きは十號內外で廢刊したのであつて此他予の記憶から去つた三號雜誌も十指を屈する程であつたが、多くは世に知らるゝに至らずして消滅したやうであつた畢竟は服部氏あつて『東京新誌』あり他の模倣を許さなかつたものである。且つ服部氏は明治十三年の交に至つて印刷器の能力が具備したのを以て、他に二三の小冊子を經營した中に『春野草誌』と題し『東京新誌』の姉妹雜誌を創したが、之れは『東京新誌』と重複することを避くるため、多く假名文のものを載せたのであつたが、服部氏の得意でない上に多く他の編輯員の文章を載せ印刷工場の手明きを埋めるための事業であつたから、終に不成功に了つて一年計りの後に廢刊するに到つたが、之れにても『東京新繁昌記』と『東京新誌』が服部氏の天分であつた事が明かにされる。

「五」 服部の文章は天才

服部氏は漢學者ではあつたが聖堂とか儒塾とか云ふものに在學して正規に漢文を習學したのではない、只其天才に依

つて繁昌記體の文を巧妙に書たのであるが、其餘才は筆を執れば論文、和文之くとして可ならざる無しであつたから、明治十三四年より政論雜誌の發行を企て『東京新誌』に執筆の傍らに『江湖新報』と題する政治雜誌を發行したのであるが、之れは當時の『近事評論』『扶桑新誌』に倣つたので其れ等の雜誌と同じ體裁で、唐紙十二ッ切り（今の四六版ぐらゐ）十五六枚綴りの片假名文の政論雜誌であつた。一週二回の發行で毎月十號近くを出し之を氏が一人で執筆したのであるから之れに『東京新誌』を加へて氏の執筆するものは一週に四五十枚（今の八九十頁）の多きに及んだのであるが、氏は午後より出社して社員と談笑しつゝ優に其原稿を滿たせたのである。予が服部氏を知つたのは明治十四年で始めは『東京新誌』に投書したのに起り一日招がれて氏を新橋畔の九春社に訪問したのであるが、氏は一室に机を控へ雜誌の原稿執筆中であつた。予は暫時其傍に坐して原稿の書き終るを待つたが、其原稿を書き行く狀態は殆ど筆を以て紙上を掻き廻す如き早さであつて、毫も筆を止むる事なく咄嗟の中に一枚を書き終れば直ちに給仕が工場に運び、再び給仕が入り來る間には殆ど次の一枚を書き終ると云ふ如き眞に筆下に風を生ずると云ふ狀態であつた。現今新聞の雜報を書くには此の如きことも珍らしからぬものであるが、氏の筆するものは假りにも漢文であり論說であるのに構思の暇も推敲の間もなく『江湖新報』の如きは午後一時より執筆し始めて夕刻には既に印刷を終る如き迅速さであつた。予は啞然として其編輯の終るを傍觀し居たが、其日より予にも編輯員の一人に加はることを勸められ筆墨料として一ケ月十二圓を給せんとの話であつて、一見舊知の如き情交となつたので、予は氏の行文の迅速に驚嘆せし意味を語りしに、氏は笑つて「之れでなくては活版の間に合ひません、自分は午前は家に在つて新聞を閲讀しつゝ此日に起稿すべき材題を考定し、出社の後は其腹稿を筆に任せて書きなぐつて行くのですが、一々筆を上下するのは面倒ゆゑ斯の若く滑べり好き机を用ひ、筆は一處に置て左の手にて原稿紙の方を上下に滑らして行くので、斯く早く書き得らるゝのである」と語られたのであつた。即ち氏の行文はミシンで布を縫ふ如く針に相當する筆は一處に在つて動き布に相當する原稿紙は左の

手で上下に送つて行くのである。之れにても氏が一種の天才を持つて居た事を知られるのであらう。

「六」　天才より畸才

『新繁昌記』の文章が寺門靜軒に私淑したものとは云へ旣に服部氏獨得の文才を持つて居たのであることは、之を讀んだ人の驚愕した處であるが『東京新誌』が其成熟の期に至つては氏の文章は殆ど自在と稱せん乎、不羈自由と稱せん乎、忽ちにして六朝駢驪の金粉文字を連ねるかと思へば、忽ちにして淨瑠璃の文句となり、堂々と六經古體の章句を書き出すかと思へば、急に諧謔滑稽の言辭を弄し、絢爛花の如き一節が轉じて諷刺辛辣の嘲罵となり、喃々呢々、嬌女の痴情を訴へるかと見れば大聲疾呼、丈夫の快論となり、小歌となり、どゞ逸となり、狂句となり、俳句となり、和歌となり漢詩となり其行く處は端倪すべからずして終に一編の文章となる、彼の近松門左衛門の淨瑠璃を讀むも、が其縱橫自在にして木に竹を續ぎ裸體に衣冠を着せしむるが如き勝手氣儘の筆鋒の中に、終に一場の戲曲を爲すものと能く其趣を同くし敢へて他人の模倣を許さゞるものであつた。當時風流花月の筆を以て一世に名を爲したる成嶋柳北、菊池三溪、石井南橋諸氏の如き文章家と雖も、服部氏の大膽には眞似せんと欲するも眞似し得ざるもので、中嶋棕隱を笑つた寺門靜軒も服部氏のためには地下に瞠若せしならんと思はる。

服部氏は自由自在に造語して憚らず其一二例を擧ぐれば

⦿妾を權妻と命名す、當時權令、權屬等の官名があつて正に次ぐの意である。卽ち正妻に次ぐの權妻と云ふ義であつて、其行文の中に「銀座街頭、走ニ黑漆之車ヲ、車夫行ク々々呼ゴンサイ々々々々ト、卽チ是レ大鯰公某氏之愛妾ノ至ニ劇場新富座ニ也ト」と云ふ如きものであつて車夫が御免なさい〳〵と呼ぶをゴンサイ〳〵と聞ゆる如く書て其車上の女子の權妻であることを意味し、漢文中に片假名を用ゆる如きも氏が常用手段である。其當時妾を權妻と稱せしことは殆ど普通となり、或る時千葉縣にて蓄妾稅を創設せんとの議が縣會に提出された時に其說明者が屢々權妻々々と唱へたので、一議員が其權妻とは何ぞやと質問せしに說明者は

一笑して「君は服部誠一の文章を讀まざるや權妻とは即ち妾の通稱なり」と釋明を與へたとの事である。蓋し權妻の語は服部氏
の造語である。

當時大官を綰、小吏を鯰を通稱したのも服部氏の造語であつたやうに思ふ。卽ち當時の官吏は多く髯を蓄へて居たからである。

藝妓を猫と云つたことは昔からの云ひ來りで服部氏の造語ではないが、服部氏は之れを「一猫兒」と書て其賣淫婦たることを諷し
たのである。

娼妓を狐と云つたのも昔からで服部氏の造語とは云へぬが、氏は之れにも「黠姉(きつね)」の字を與へて手管に長じたことを諷したので
ある。

氏は又大官や華族の醜聞醜行を書くには一々露骨に其姓名を書かず、文章の中に附圖して暗々裡に其人を明かにしたのである。例令ば當時の外務大臣井上馨氏の令孃の艶聞を書くに先づ同邸庭前の風景を叙し、令孃が此春光に對して懊惱せる情懷を寫し
「非上ノ梧桐。鎖陰印レ階ニ。籬畔ノ薔薇。微風送レ馨ヲ。」と云つたやうに書き、西園寺公望の艶事を寫すには「日ハ落テ西山ニ。鳥
宿ニシ園樹ニ。遠寺ノ鐘聲。早ク告ゲテ初夜ヲ。車聲轢碌留ル一樓ノ前ニ。車上ノ綰公。咳一咳シテ而望レ内ヲ」と書く如きものであつたが斯
の文法を以てし表面には隱約として婉曲の筆を弄しても何人が如何なる行動を爲したかゞ顯然として眼に映るのである。

「七」服部氏の單行本

明治十五年の交に氏は九春堂の事業を擴張して數寄屋橋外の紙商丸谷新八と云ふ人に資金を提供せしめ『東京新誌』『江湖新報』『春野草紙』の外に單行本の發行を企て、數種の書籍を出版するに至つたが、予の記憶に殘るものは左の數
種である。

東京新繁昌記後篇　壹册

之れは總て前著の新繁昌記に倣ひ木版半紙摺り日本綴りのものであつた。

第二世夢想兵衛胡蝶物語　二册

之れは馬琴の夢想兵衛胡蝶物語に擬し、明治の夢想兵衛が夢中に四方を漫遊した時事と社會を諷刺せる服部氏一流の漢文であつて活版四號字の半紙本である。

繡像奇談　二冊

之れは支那の傳記を集めた唐本に訓點を加へたもので服部氏自身の文章ではない。

此他小冊子數種あつたが今は其名を逸して記憶に留めぬ。

「八」　服部氏の政治新聞

明治十五年後に世上に政治熱が勃興し、自由黨、改進黨が組織され國會開設の請願などが提出さるゝ時代となり、今後の文學者は政事を語らざれば世に落伍するかの勢ひとなつたので、之れまで風月に吟誦して居た墨客文士も自然に其渦中に捲き込まれ、成島柳北氏の如きすらも改進黨員に擁さるゝ状態となつたので、服部氏も私かに此に着眼して曾て予に向つて「今に國會でも開かるゝ時代となるのであるが我々も其準備をせなくてはならぬ」と云つた程であつたから何時の間にか改進黨に加入して幸ひに政論雑誌の『江湖新報』あるを基礎として、一の政治新聞を刊行することを企圖し其年宛かも大學を卒業した山田喜之助、市島謙吉、高田早苗、天野爲之、砂川俊雄等の諸氏と共同して『内外政黨事情』と云ふのを發行するに至つた、之等の諸氏は後には皆著名の人物となつて世に重きを爲した人々であるが、當時は皆服部氏の傘下に集つて服部氏を先生と稱し、其發行所たる新橋畔の四通社へ通つたのである。（四通社は今の宇都宮運送店の在る處にあつた、間口八間計りの煉瓦建であつた。二階は編輯局と獨身社員の宿泊所に充て、階下は活版室と本春社の販賣店に充てられ『内外政黨事情』の本社は此中に同居したのであつた）新聞は今の新聞を二つ折りにした如き小形のもので、四頁或ひは八頁の日があつて、主として政論と批評を登載し、今日の所謂社會記事と稱する雑報を記載せず、即ち雑誌と新聞の中間に属したものであつたが、發行日は毎日でなく多分隔日であつたかと記憶する、然るに此

新聞が普通の新聞として日刊であつたならば或ひは永續し居られたるやも知らざるが、單に政論のみの如き新聞は時機が尚ほ早やかつたので新たに大學を出た山田、高田等諸氏の安定を計るに足らず、幾何ならずした諸氏は其思ふ所に職を定め、服部氏一人となつたので久しく經營を續くる事が出來ず、僅々數月にして廢刊するに至つたのは素より畑違ひの服部氏には已むを得ざる事情である。

「九」 東京新誌の發行

服部氏は一時政界の渦中に投じたが、其長所にあらざるを悟り『内外政黨事情』の廢刊後は專ら『東京新誌』と書籍の編輯を業としたが、時勢の變遷と新聞紙條例の拘束に依つて氏が獨得の文字を十分に操縱することが出來ず、例令ば淺草奥山の見世物の婦人が足で弓を射る狀態を形容して、新聞紙條例に觸れ罰金を徴されし如き事あり、終に外務大臣井上馨氏令嬢の情事を記述せし一文が官憲の忌憚に觸れ、新聞紙條例に依つて『東京新誌』發行禁止の危に遭遇するに至つたのであるが、當時顯官の内事を摘發するは尤も重しと見られ、現今の如く其當號の發賣禁止に止まらず永久に發行を禁止されたのであつた。

「十」 吾妻新誌と京華新誌の創刊

『東京新誌』が發行禁止となつたので、服部氏は直ちに第二の『東京新誌』とも云ふべき『吾妻新誌』の發行を屆け出で、體裁内容毫も『東京新誌』に變りなきものを出し、爾來無事に一個年餘を經過したが、玆に端なく服部氏と資本家丸谷新八氏との間に葛藤を生じ、双方より訴訟を提起するの狀態に陥つたので、服部氏は全然『吾妻新誌』に筆を執らず予等二三子に依つて發行だけを繼續して居たが、訴訟の原因は双方に道理も非理もあり、服部氏は新誌及び單行本の收益に就て帳簿面に依て其配當を請求したのであつたが、丸谷氏は自家が紙商であつたので用紙は其必要に應じて自由に提供した爲め、其金額を帳簿に記入しあらず因て利益の精算には此紙代を控除すべきものであると主張し、服部氏は

帳簿に記入しなきものは全然認むる能はずと主張したのであつたが、裁判の審理進行に從ひ用紙がなくて新誌書籍の發行せらるゝ理由なしとの丸谷氏に有利の傾きとなつた。然しながら其紙價額が果して幾何なるかは到底證明する材料なく、此訟訴は二年餘に亘つて終に物分れとなり、服部氏も利する處なく爾來丸谷新八氏との提携を斷ち『吾妻新誌』は予の主任の許に丸谷氏の經營を繼續し、服部氏は別に『京華新誌』と題する同種の雜誌を發行したが、此雜誌は僅かに二三號で廢刊したのは明治二十一二年の交であつた。而して予の繼續した『吾妻新誌』も凡そ二年後に時代の風潮が漢文 誌に適せざるに至つた爲めに、亦廢刊の已むなきに至つたのであるが、此に附記すべきは『東京新誌』の初回より服部氏を援けて花柳界の記事に筆を執つた人に顧柳散史桑野鋭氏あり、初期の投稿家に金春散史荒井錄太郎氏あり、中期よりは予が桑野氏に代つて執筆し、後期には夢遊仙史大久保常吉、骨皮道人西森武城等の諸氏が記者とし每號執筆し凡鳥道人結城蓄堂氏は十數號に亘り支那文の小説を投書して其才筆に讀者を驚倒せしめる如きことあり、之れ等の人々の單行本としては既記服部氏のものを除きて

凡鳥道人著、扶桑橋花譜　一册、日本橋花柳界の名妓十數人を品評せるもの。

顧柳散人著龍山北誌　一册、淺草金龍山の北、即ち吉原の雜記。

予の仙洞綺話一册、仙洞餘譚　一册、仙洞美人禪一册（以上各漢文）

明治初年の東京新繁昌記（服部氏）柳橋新誌（成島氏）新橋雜記（萬年氏）以後に於て漢文を以て花月の情調を寫したものは大凡上記の如きものであつた。

「十一」　服部氏の晩年

服部氏は『京華新誌』を廢刊して後は數年間雜著に從事したが、名を署する程の著述なく、明治二十九年三月三十一日宮城縣仙臺第一中學校の漢文教師に聘され、居ること十二年にして四十一年八月十五日暇のため東京に歸養中に急に

病んで享年六十八歳で歿し、男子なく女子一人あり、之れに贅婿して家を嗣がしめたが今其所在を知り得ざるは予の遺憾とする處である。

予の服部氏を知つたのは明治十四年に在るから、氏の前半生は聞き知らざりしを以て、今回此稿を草するに當り舊主丹羽子爵の邸を訪ひ、又舊藩の古老槇逹司氏を訪ひ聞く處あらんとしたが、子爵邸には知る人なく纔かに槇氏の厚意に依つて左の數語を聞くことを得たるのみである。

服部氏の家は代々二本松の儒官であつたと聞くも誠一氏が二十七歳の時に明治維新となり氏が壯年時代であつたから其當時藩中のいかなる地位にあつたかを知り得ず、藩中に在つて服部姓を名乘つたもの數人あるも其知られたのは用人服部久左衛門（三百石）服部九郎右衛門（百石）儒者服部半十郎（百石）の三名なりしことが同藩の知行錄に見ゆるのみ云々。

予は誠一氏は前記二本松の儒臣服部半十郎の子か或は誠一氏が半十郎の改名かと疑ひ居りしが幸ひに同藩の服部宇之吉博士に依り其正確を知り得たので左に揭ぐる事とした。

誠一氏の祖父は信州の人にして儒官として二本松藩に聘さる、通稱半十郎、名は誼、字は和甫、大方と號す始め江戸に在りて帷を垂る、其子亦半十郎と稱す、洞城と號す、亦藩學の教授たり誠一氏は卽ち其子にして維新の初年藩廳に出仕すと云々」

「十二」　服部氏の風采人格

服部氏の文章を讀んだ人は必ず其人の風采が俊俏清雅で、其人格が風流飄逸であつたかを想像するのであらうが、氏は全く其文章と反對の風采人格であつて、予は始めて同氏に面晤した時に餘りに豫想と違つたのに驚いたのであつた。

予が始めて同氏を九春社の編輯室に訪問した時は初冬微寒の日であつたが、氏は黃八丈の綿入羽織を着し面貌赤味を帶びて薄き痘痕あり、體軀も巖丈造りであつて、一見して田舍儒者か漢法醫師とも稱すべき風采であつた。又始めに豫想したる處では能く風月を談じ能く諧謔を語る才氣横溢の人格であらうと考へたのであるが、始め面晤した時より六七年の

交際中、終始一貫して寡言自重、毫も風流輕薄の言行なく、傲慢と云ふにはあらざるも常に學者的體度であつて、交遊中に曾て滑稽諧謔の言を聞かず、又情事艶聞を耳にすることが無かつたのである。尤も予の始めて面晤した時は氏は既に四十歳を越ゆること一二、予は纔に二十一二歳の白面であつたから自つから後進に對する體度を持されたものであつたらうが、爾後六七年の間も同一體度であつた處に依つて見ると、氏の風采人格は全く其筆と反對であつて儒家に生れた士族と云ふ典型を備へたものであつた。

然るに氏が如何にして『新繁昌記』や『東京新誌』に筆を執りたる如き花柳界の事情や遊技場の狀景や、待合妾宅其他下層社會の内外面に通曉し居たるかと云ふに、氏は壯年時代の明治初年に在つて多少此方面に出入したものを基礎として『東京新繁昌記』を編述し、其賣れ行きの盛なるを見て二篇、三篇と次第に材料を探究しつゝ、且つ知り且つ執筆したものであつて、氏は實際に於て通人でもなく放蕩兒でもなく、其天分の才筆を以て「歌人は居ながら名所を知る」的の筆を弄したものである。

氏の號を撫松と稱したのは『孤松を撫て盤桓す』の語から出たのであるが、此號は能く氏の人となりに適應して、氏は交際を好まず人と共に酒樓に登つて歌妓を呼ぶ如きことは一年に一回にも及ばず、其孤松を撫て盤桓するのみであつたことは當時同型と視られた成島柳北、石井南橋の兩氏とは甚だしき相違であつた、予の如きも交遊六七年の間に一回氏の近傍なる湯島天神境内の魚十樓に招宴されたのと、又一回忍ばず池畔の待合へ伴はれたのみであつて、其時に座に侍した歌妓も皆な氏の生面であつて一人も熟面のものが無つたのは、氏が平素茲に遊んだものでないことを知られたのであつた。只氏が孤松を撫する的の微行は必ずしも絶無とは云はれぬことゝ思つたのは、忍ばず池畔の待合の女將は頗る能く氏を知り居たるものであつたやうであり、又予が氏と共に湯島天神の境内を散歩せる時に、氏は當時此境内に多く在つた魔窟の老婆と知り合ひであつたことを記憶するので、氏は或ひは當時尙ほ暗中に之れ等の處に出入して探究的

の遊びをして居たかを追想されるのであるが、其他には蓄妾の風説も耳にせず、新橋、柳橋、吉原、根津等の遊里に出入せしことも耳にせず、比較的君子人であつたことは疑ひないのであるから、氏は一を聞て十を察し外を見て内を知り其天分の才筆を以て半ば想像、半ば布衍して其文章の成るに至つては百を知り微を知るものよりも一層詳細周到の感あらしめたのである。

氏の文章即ち『新繁昌記』や『東京新誌』の文章が氏に具つた天分であつたことは、氏の漢學の力は柳北、南橋兩氏の如き根柢を持つたものでなく、他人の書籍に書きたる序文の如き眞面目の文字は『新繁昌記』『東京新誌』風のものに比して甚だしき劣りを見たのであつて、漢詩の如きも予の知れる處では絶句の二三首のみであつた。斯くの若きであるから氏の『新繁昌記』と『東京新誌』は氏の天分であつて明治初年に處女作の『新繁昌記』が忽ちにして洛陽の紙價を高からしめのも、其天分の發露に外ならぬのである。

近時明治初年の文學界の事が屢々雜誌や新聞に記載されて居るのを見るに其の筆者が明治中間以後の人であるためか、他の方面は姑く措き漢文方面のものには書名人名が誤記混合されたものが澤山あるので今服部氏の傳を草するを幸ひに當時予が直面した實際を記して參考の資したのである、之れがため時に餘岐に入つたものあることを諒とされたいのである。

野崎左文附て云ふ、此の傳記は僕が舊友愛花氏に頼んで起稿を煩はしたのであるが、丁度聚芳閣で撫松翁の『東京新繁昌記』を飜刻の際であつたから、同書の解題代りに傳記中の一部を抄出してはどうかと勸めたのであつた、夫から傳記の全文は本誌の二月號に掲げる筈であつたが、遲れて本號に出る事となり、一方聚芳閣では筆者の承諾をも得ずその全文を東京新繁昌の卷首に掲げて發行したので、所謂後の雁が先になり且どちらかゞ剽竊したかの觀を呈するに至つたのは、全く僕の手落ちであつたから、茲に其の不行屆を陳謝して置ます。猶撫松翁の遺族としては嗣子服部誠治氏が翁の未亡人と共に今は京都市紫野築山町に住つて居られ、翁の長男はな子は故馬越新吉氏に嫁しその令息樹兵も早稲田大學在學中である事も聞込んだので、序ながら茲に附記して置ます。

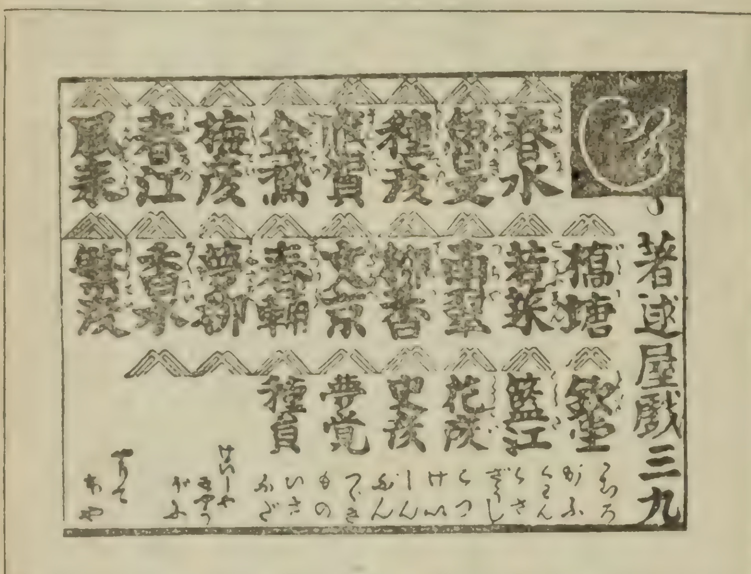
明治年間に於ける著述家の面影

野崎左文

本間君から又明治年間に於ける古い著述家の事を書いて見よとの御注文であるが、頽齢七十に垂んとしすつかり記憶力に乏しくなつた僕に取つては、何か話しの端緒を見出さねば容易に憶ひ出す事が出來ぬ、一つの材料を捉へそれに批判的意見を加へて話しを捏ね上げるのとは違つて、事實談はどこ迄も事實談で、僕の見聞以外漫りに憶説を加ふべきもので無いから頗る話柄に窮するのだが、幸ひ手許に『東京流行細見記』といふ一冊の小本がある、其中に著述屋戯三九（著述家）として春水以下當時の作家の名が列ねてあつて、是れで人名だけの手掛りを得たから、名前の順を逐うて其人の面影を思ひ出す儘に書く事とし、その目次代りに原本著述家の部を「カツト」にして茲に掲げる事とした。

最初にこの『東京流行細見記』から說明してかゝる事とするが、實のところ此書は僕の舊著に係り、明治十七年に今日新聞每夕社に假名垣魯文翁と共に在社の頃戯れに起稿したのであつた、その動機はどうかと云へば、たしか嘉永と慶應との兩度に、魯文翁が風雷山人の變名を以て吉原細見に擬した『さいせん記』といふのを著して居る、其本がいつも編輯局の机上にちらばつて居るのを見て、之を現在の人に書換へて見やうと思ひ立つたのが始まりで、編輯のひま〳〵に筆を取り、詩人歌人書家畫家等は文雅人名錄、文人見立番附の類から名前を拾ひ出し、商買は買物案内、商人名鑑のやうなものを材料とし、別に探訪者を問屋に走らせたり花柳界に向はせたりして夫々名前だけは集まつたが、一軒の内

で誰を甲にし誰を乙にするといふ其順次を定むるに至つては何も標準とすべきものが無い、固より公刊するつもりでは無かつたけれども若くくらゐならば穏當なものにしたいといふ希望から、之を魯文の説に聞き又編輯同人の意見を徴しどうやら斯うやら脱稿した時、魯文は著述屋の部に魯文、春水、種彦といふ順序に書いてあつたのを見て、是れでは自分は甚だ僭越である、著作家としての技倆から云つても、又年齢經驗の上から云つても、春水翁は先輩だから、翁が第一位を占め、自分は其次にすわるのが當然だと主張して止まぬ、そこで僕は先生是れは出版して人の批判を請ふべきものでは無く、唯吾々の見込みを以て評定しその順序を付けたまでのものですから是れで宜しいでは有ませんかと反問しても翁は中々承知せず、それにしても斯かるものは依怙贔負に流れて公平を失すべきものではない、是非とも甲乙の順を顚倒して貰ひたいとの事であつた、僕はひどく此謙譲なる態度に感じ、よろしい改めますと快諾して春水、魯文、種彦の順に書き直すと共に、實は僕の左文の號も自分の手盛りで文京の次へ書入れて置いたのを魯翁の言に鑑みて窃かに愧るところがあつて、之を削り去つて仕舞つた（狂歌は自信があつて俳諧屋うたの部にシバかにのやと出して置いた）が、其空虚を塞ぐ爲めに松村春輔氏の名を漏らして居るのに心付き、順序にも構はず此處へ埋めて置いた、一體年齢手腕から見ても春輔氏は第一段の列に入るべきであるが、それが二段目に落ちて居るのは全く此窮策に起因した



「東京流行細見記」所載

のである。

此原稿は其後同じ編輯員の清水米洲氏（名は市次郎芝愛宕町の本屋の主人で自ら德川十五代記を編輯出版した事もあり、其前は假名讀新聞投資家の一人であつたとも云ふ）から望まれて讓つたのだが、米洲氏は自筆で丁寧に版下を書き序跋などを附けて、翌年自宅から發行したのが即ち是れである。

今から憶ふと當時戯作者として當然此内に加はるべき人にして其名の洩れて居るのが數名ある、例へば山々亭有人（條野採菊明治卅五年歿）歌澤能六齋（萩原乙彥明治十九年歿）二世笠亭仙果（篠田久次郎明治十七年歿）田島任天（名象二明治四十二年歿）總生寛（號竹夭明治廿七年歿）服部撫松（名誠一明治四十一年歿）南新二（谷村要介明治廿八年歿）久保田彥作（明治卅一年歿）古川魁蕾子（名精一明治四十一年歿）福地櫻癡（名源一郎明治卅九年歿）等の諸氏がそれである、何故この人々の名を脱したかを考へて見ると、明治十六年頃には此人々の著作が途切れて居て一寸と其名を忘れられて居る爲めではあるまいか、（夫れにしても魯翁の相棒とも云ふべき有人の名を洩らしたのは我ながら不思議でならぬ）又十七年に歿した松村春輔の名を故らに後から書入れたなどは迂濶な話しであるが、是れも今の文士の如く其死が世上へ喧傳せられず同業者なる吾々の耳にすら入らなかつた爲めであらう。

然るに近頃に至つてこの舊著が、明治事物の引合ひとして折々雜誌などの記事に引用されて居るのを見て……署名して居ないから責任はないやうなものゝ……杜撰の譏りを免れまいと何となくくすぐつたい樣な氣がしてならぬから、一切をぶちまけて茲に舊惡を白狀する次第である。

これから本題に入るのであるが、豫めお斷りをして置くのは、一座の廿二名中僕が一度の面識も無かつたのは應賀、金鵞、香水、欽堂、鑑江の五氏で、外に柬彥、夢覺の二氏は果してどんな人で又何に據つて其名を撰み出したのは、幾ど何の記憶もない、故に知らぬ事は知らぬとして見聞せし儘の談片を記すのだから、素より列傳を綴るといふ意味でな

い事を御承知を願ひたい。

爲永春水（號狂訓亭通稱染崎延房明治十九年九月廿七日歿、年六十四）の著作物に就いては『早稲田文學』十四年三月號に於て、坪内逍遥先生が詳細に述べられたし、僕の如きは先生の十分の一だも其作物は讀んで居ず、批評などを試みる資格は無いから、唯僕の見た翁の人格風采だけを語ることゝする、そこで僕が春水翁に接したのは明治十四年か十五年の事で、繪入新聞の落合芳幾氏から魯文翁に向け、近頃我社では缺員がある爲め編輯に差支へるから、誰か手傳ひの記者を貸して呉れまいかとの依頼があつて、僕が其撰に膺り繪入社へ往つて見ると、其頃前田夏繁氏は既に朝野社に轉じ、古川魁蕾子氏の姿も見えず（神戸又新日報へ入社した跡か）主筆春水翁の外は前島和橋（後ち九世川柳）岡田韮吟（雷堂と號す背中一面文身のある勇み肌の人）編輯の纏めをする武田とか言つた三四人に過ぎなかつた、さて僕が雑報の筆を執るに當つて、翁の言はるゝには假名垣さん一流の文は結構であるがどうも私方の新聞にははまらぬから成るべく平易になだらかに書いて下さいとの注意があつた……にも拘らず、僕はやはり僕流で書く夫れを翁は無言で筆を入れる（魯文翁は門人の書く雑報でさへ添削はしなかつた）斯ういふ風で今日のはいくらか奇警な文が出來たと聊か自負するものでさへ、翌朝の新聞を見ると是れが平淡無味の文體に變つて居る、こんな事が癪に障つたのと、又一つは僕の書いた雑報の爲め或る高利貸が受附へ怒鳴り込んで來た事などもあつて、僕の事は大に危險視せられる風であつて、旁々多少の不平もあり其内補充員も出來たのを機會とし、在社僅に七日にして元の魯翁の膝下へ歸つて來た、たつた一週間の觀察では十分その性格などを窺ふことは出來なかつたが、翁は其頃既に七分までの白髪で、痩身長軀ながら如何にも嚴丈造りな老人で、人情本でも書きさうな意氣な點は少しもなく、どつちかと云へば生國嚴原からたつた今出て來たやうな田舍士族の風であつた、併し言葉は鮮かな江戸辯で、物靜かに淳々と語り出す話し振には自から引付けられるやうな心地がした、僕の知る所は只是れ丈けで、繪入新聞退社後の消息などは全く耳にした事もなかつた。

假名垣魯文（本姓野崎氏戯號を以て通稱とす明治廿七年十一月八日歿、年六十六）の事は『早稻田文學』の同號に詳記して置いたから、これ以上は話しの種切れであるが、今日から見れば翁は機を見るに敏なる達筆家で、草雙紙や滑稽本は固より、軍記はござれ地誌はござれと何でも大膽に筆を把り、そして流行の何物かを捉へて、際物の著作に成功した人と謂ふべきであらう。

柳亭種彦（自ら二世と稱せしも實は三世なり通稱高畠藍泉明治十八年十一月十八日歿、年四十八）の事もやはり同號に載せてあるが、其聞く所によると、君は明治五年東京日々新聞創業の頃より既に同社の記者となり、同社資本家の一人たる落合芳幾氏と協力して、同八年平假名繪入新聞を興してその主筆となつたのであるが、十三年意見合はずして退き直ちに讀賣新聞社に入つて印刷長に署名し、十五年に種彦の號を襲ぎ、翌年大東日報に聘せられて大坂に赴き、その廢刊後歸京して淺草千束村に卜居されたが、其頃より脊髓病に罹り、後には天井より數條の紐を垂れてピンにて原稿紙を綴付け、蒲團の上に仰臥しながら生活上の爲めに筆を執るほどの窮境に陷つたが、終に此病の爲めに斃れたのであると。

萬亭應賀（服部長狹男通稱幸三郎、明治廿三年八月三十日歿、年七十三）は僕の逢うた事のない人であるが、翁の名が賣れたのは弘化二年より年々引續いて發行した『釋迦八相倭文庫』からで、此書が近松淨瑠璃の飜案であるなどの評判にも頓着なく、婦女子には喜んで讀まれたものらしいが、此外にも維新前には（小說年表に據れば）『福德天長大國柱』『慈石山浮世精靈』『大國初夢話』『兩筋道山路』『忠臣藏之助立』『高祖朝日衣』『本朝金剛傳』『神編藻鹽草』の新作がある、それから明治の初期に入つても『當世利口娘』だの『馬鹿につける大妙藥』だのといふ半紙六七枚綴に曉齋繪入の表紙を加へた雜誌のもの二十餘種を著して居るが、餘り世評には上らなかつたやうである、その晩年の事も詳かでないが、魯文翁の書き殘した雜記中廿一年の部に「下谷金杉上町七十三番地服部應賀翁七十一歲」とあり、同廿三年の

部には「萬亭應賀八月三十日死去、下谷萬年町櫻香横丁人力挽の妻は萬亭の一女の由」とある。

梅亭金鵞（通稱瓜生政和、明治廿六年六月三十日歿、年七十三）は魯文翁と伯仲の滑稽作家で、安政四年の『妙竹林話七偏人』は實に翁の代表作であるが、明治年代には是れぞといふ著述もなく、同十年『團々珍聞』に入つて得意の時筆を揮つて居た外、浮世を餘處にして果てられたのは殘念である、僕は折々翁の奇行逸話を耳にしながら終に親炙する機會を得なかつたから、その高足鶯亭金升氏に聞合せて、小傳を作つて見やうと、此程同氏に照會した處が左の返翰に接した。

團珍さへ知らぬ人の多き世に先師梅亭の傳御書き被下候由難有き事に候、右は「文藝共進會」の七號か八號に小生寄稿致居候のども、何分「文藝俱樂部」の前身として古き雜誌の事ゆゑ博文館にも如何かと存候（圖書館にはあるならん）近頃東京毎日新聞にて「大江戸物語」を書き、江戸戲作者の題下に明治まで少しく續け、魯文、有人、梅亭、應賀の事も出し候へども詳しくは見さず遺事だけに御座候、もし「文藝共進會」無之候はゞ日記より取纏めて材料御報致しても宜しく候

十四日　　鶯亭

左文樣

四方梅彥（通稱新次郎、狂言作者としては竹柴瓢助と云ふ明治廿九年十一月八日歿、年七十五）は神田の四方といふ酒舗の主人で、若冠の頃より著作に志ざし、初代梅彥の門に入つて文亭梅彥と號し合卷物、人情本の作がある、中ごろ狂言師鶯傳右衛門に就て狂言を學び、其藝上達して黑人の域に達したとの事である、晩年默阿彌翁に隨ひ狂言作者のケとして名を番附面に顯はし、又歌舞伎新報の客員たりし事もあつた、四方と名乘るところから狂歌の四方側にも入りその狂詠も遺つて居るが、狂歌集としては豊介子との合著で『近世商賣盡狂歌合』（嘉永五年）一冊がある、松本觀阿の話に「梅彥は神田の四方といふ酒店の主人であつたが、晩年は今戸あたりの長居住ひをして玆に死にまして、此人は

あまりでかした人では有ません誠にひどい人で、各座の番附だの繪本だのが來ると讀んで了ふとドシ〳〵賣飛ばして、
私の頭に仕舞つて置くからと云つて居ました、夫れだけ記憶はよかつたのです云々」その著書には『江戸鹿子紫草紙』
四冊（嘉永四年）『神音手綱染分』三冊（同五年）『造榮櫻叢誌』十冊（同年）『水滸傳正本製』八冊（安政四年）『文
娘伊左衛門』八冊（同年）『月宴更科譚』四冊（同年）『都正本製』六冊（同　年）『青砥縞花紅彩畫』三冊（文久二年
『濡衣霧雨雙紙』一冊（元治元年）『月見花名畫一軸』四冊（年代不明）等である、僕は僅々一二回面會……それも三十
年前……したのみで其容貌までも忘れたが、梅彥翁を熟知する人には大槻如電先生がある。

●●●●風來山人三世（初號岡丈紀通稱河原英吉明治廿二三年頃歿）の事も聽い『早稻田文學』に掲げて置いたが、僕の狂歌
の蟲干と題する舊稿中に此人に關する一節があるから左に抄出する。

（余の交際せし人々の中にて亡友岡丈紀氏ほどの奇人にはあらざりき、氏は晩年三世風來山人と號し日本橋木原店の裏屋に住ひ、
其居を紙鳶堂と名づけ、楣間に破れたる鳶凧を額の代りに掲げたる外は何一つの裝飾品もなく、古机に缺けたる硯を置き　新聞
の續き物（小說）を作りて糊口となせり、去れど山人は頗る遲筆にて一回の小說を綴るに一日以上、長きときは二三日を費しけ
れば、一日掲げては二三日休むこと珍しからず、且多くは其大團圓を見たること無く　いつも中絕するが常なりければ、地方の
新聞社すら一度にて懲り果てゝ、氏に寄稿を請ふ者漸く減じて收入愈々少く、赤貧洗ふが如けれども、山人は少しも意とせず、
猶机に倚り筆を嚙みつゝ沈思默考すること前日に異ならず、其頃山人は獨身にて自炊を爲し居りしが（後には後妻を娶れり、
事に就ても一挿話あれど略しぬ）客到れば先づ懷中に錢の有無を問ひ、有りと答ふれば其内の若干を借り得て食費に充て、無し
と云へば庭を掃かせ水を汲ませるなど、殆ど自家の奴婢を頤使するが如し、余も亦一日この水汲その役を仰せられし時ただ
れに詠める

　奴凧と見てか上へはあげもせず水を汲めとは情ない君　　左　文

山人も亦取敢へず

水を汲む役は奴に任せ置きて高くとまるがとんび凧なり　　風　來

小說の遲筆なるには似ず狂歌の至つて口まめなるは心憎し。

伊東橋塘（名專三、大正二三年頃歿）は淺草船橋屋の主人とかで書を善くし又馬琴崇拜者で、八犬傳の如きは十數回繰返して讀んだとの事である、最初は魯文翁に師事して居たので僕は假名讀新聞社で逢つたのが始めてであるが、其頃は大藏省の吏員であつたやう思ふ、後に何事からか師翁に反いて喧嘩腰と　り、翁に對して箍のゆるんだ耄碌などゝ惡聲を發して居た、官職を去つて有喜世新聞に入つてからか、嘲罵的の筆を振つて居たが、氏は筆舌ともに毒氣を含んで居た爲めに、敵を作ることが多く、狂犬の專三などゝ云ふ仇名を取つて居た、有喜世新聞の三益社を去つてからは、一時荒川高俊氏等と共に鯛娘（たいむす）新聞とかいふのを發行して居た事もあつたが、いつの間にか新聞界から其姿を消して仕舞つた、僕がその十數年後兩國橋町の居宅を訪ふた時は何々教とかの神職らしき者に成りすまし、加持祈禱などを行つて居たやうである、死去の事も知らなかつたが、令息は法學士で某會社に勤めて居るとの噂である。

胡蝶園若菜（若菜貞爾別號夢想樓、大正七年五月廿五日歿、年六十五）は千葉縣長生郡佐坪村の人、神田區役所の書記であつたが、明治十年頃より小新聞投書家の仲間に入り、僕と同じやうな經路を辿つて魯文翁の門人となつたのは明治九年頃の事であつた、十一年には假名讀新聞に入つて雜報記者となり、十三年には大阪に於て津田貞氏が創立せる魁新聞に聘せられて同地に赴き、魁の廢刊後は大阪朝日新聞、福井の越陽新聞、東京のめざまし新聞等に轉々し、めざましを經て今の東京朝日新聞に移り、半井桃水氏と共に其の創刊から筆を執つて居たが、或る事件から失脚して放浪生活に入り、後には半狂人となつて日本橋大坂町の途上で人を傷け、保護者のない爲めに根岸病院に引取られて療養中、終に同院で歿した、氏は前にも述べた通り、明治十一年（僕よりは二年前）から記者生活に入つた人ゆゑ、小新聞の編輯には經驗に富み、殊に新聞小說……其頃でいふ續き物……のはやり出した頃は、健筆家としての賣れッ兒で、『明治全小

說戲曲大觀』にも作名が出て居るほど、續き物の數十篇を書き、就中その標題は忘れたが自由燈の廢刊から書き續けた岩崎彌太郎氏を平淸盛に擬し、三菱一家の豪奢ぶりを寫し出した小說の如きは頗る評判がよかつたが、惜い事には稍や德義心に缺くる所があつて友人からも見放され、晩年は頗るみじめな生活を續け、死去の事も舊友すら誰知る者もなく時過ぎて桃水君と僕とが、實弟某の方へ弔問に出掛けた時は、遺骸は鄉里の某寺に葬られた其後の事であつた。

須藤南翠（名は光暉大正九年二月四日於大阪歿、年六十三）の傳は令息眞金氏がくはしく『早稻田文學』十四年六月號に掲げられ、後之を補正して南翠傳と題し、小冊子に印行して知己の人々に配られたから、僕としては之に附け加ふべき何等話材の持合せもないが、子を見ること親に如かずと云ふならば、親を見ることも亦子に如かざる道理で、南翠傳の附言に於て眞金氏が父君の性質に就て辯明せられた一言は、僕等厚交の遺友としては、誠に眞相を得た適評だと思ふ、或ひは初對面の人には一寸傲慢とか尊大とかいふ風に見えたかも知れぬが、親しく交はつて見ると、友誼に厚く目情に脆い性質であつて、自家本位の「獨よがり」といふ點は僕には少しも見出す事が出來なかつた、若し世間に傲慢を以て君を片付け去らんとする者あらば、夫れは又聞きなどから來た誤解であるから、僕は玆に令息の言に賴まれもせぬ裏書をして置く。

彩霞園柳香（廣岡豐太朗別號豐洲、明治卅五年五月廿三日歿、年四十六）は大阪の產、始め雜賀姓を名乘つて居た、氏は一面識もない魯文翁をたよつて突然上京し、その門下に馳せ加はつた人で、左のみ文才は無かつたがいろは新聞から有喜世、開花等の記者となり、やはり續き物を書いて居た、同じ門下生ながら僕は餘り近しく交際せず、一度氏の宅（其頃は宗十郎町に住めり）で義太夫を聞かされたぐらゐのものだ、隨つてその作品に就ても注意せず、どんなものが刊行されたか幾と記憶する所がない。

花笠文京（渡邊義方別號花笠堂又濤白童子）は胡蝶園と同じく某區役所の書記であつたとの事だが、魯文翁の門に入

り翁の周旋で花笠の號を繼いで二世となり、いろは新聞、繪入自由等の記者として盛んに續き物を書いて居たが、其後宏虎童氏に就て實業界に入り、蓄財して三田豐岡町に貸屋などを建てゝ納まり、後ち麻布竹谷町に移轉し、釣道樂に耽るなど氣樂に餘生を送つて居たことまでは知つて居たが、此頃聞く所では何か事業に失敗して大損失を招き、落魄して笄町の某家に寄食し、終に悶々の間に一昨年頃死亡したとの事である、嘘かまことか俄かに信ずる事は出來ないが、家族の所在も詳かならず、之を確める手掛りがないから、唯聞いた儘を掲げて置く。

松村春輔（名は操信州の人明治十七年四月六日歿、享年未詳）には僕はたつた一度某懇親會席上で挨拶を交換したのに過ぎないが、その著『復古夢物語』と『春雨文庫』とは僕の耽讀したものであつた、當時は戲作者の系統を引いた者でなければ、文壇では幅を利かす事が出來なかつたのに、一本立で押出したのは自信ある著作家と言はねばならぬ。

宮崎夢柳（名は富要、明治廿一年頃於大阪歿）は土佐の人、始めは繪入自由新聞で佛國革命史等の一節を小說化して書いて居た人で、元來詩人育ちであつたから高蒼體の花やかな文章には長じて居た、僕は東京に居る頃は名のみを聞いて顏は知らなかつたが、大阪の東雲新聞に聘せられた時始めて君と机を並べる事となつた、其頃社中には中江篤介、栗原亮一、江口三省諸氏が居て、夢柳君と僕とが小說と雜報とを受持つて居た、君の死去したのは僕の在社中の事で、遺骸を南郊阿部野に葬り、僕も社主寺田某のフロツクコートを借りて會葬し、式場で兆民翁の弔詞を栗原氏が代讀した事だけは覺えて居るが、生憎十九年以後三四年間の當用日記を亡失したから、歿年月日は明記する事が出來ぬ。

菊亭香水は『世路日記』の著者といふ事以外何も知らぬ。

柳葉亭繁彥（中村邦彥）の事は同じ柳亭門下の三品蘭溪氏が能く知つて居られる筈だ。

戶田欽堂は『名人忌辰錄』に「大垣侯の三男、五歲の時分家戶田阿波守の養子となりて其家を繼ぐ、放蕩にして落魄し小說戲文を綴りて世を渡りぬ、明治廿三年八月十日橫濱にて歿す年四十一、駒込蓮光寺に葬る」と出て居るが其の著

作には『情海波瀾』（明治全小説戯曲大觀に據る）がある。

柳淵亭藍江（姓倉田氏歿年月享年共に未詳）は曾ても記した通り元と幕府のお坊主で、高畠種彦氏と知り合ひであつた爲め、一番早く種彦氏の門下生になつた人らしいが、芳譚雜誌へ小說を寄稿して居た外に、一二草雙紙體の單行本も著した事があるやうに記憶する、くはしい事は同門の三品蘭溪氏が知つて居られるだらうと思ふ。

柳條亭華彥（別號蘭溪通稱三品長三郞現存）は今東京朝日新聞に勤めて居られるが、若し僕が假名垣派で生き殘つた者の一人ならば、君は卽ち柳亭派の生存者を代表すべき第一人者であらう、其傳は御當人に就て聞くのが一番確かであるが、此程東朝社で二十年以上の勤續者を表頌した時、君も其内に加はり、その小傳が同紙に掲げてあつたから、全文を轉載する。

三品長三郞君　號蘭溪、安政五年東京芝區南佐久間町に生る、明治三年大學南校に學び七年工部大學に轉じ電氣、建築を修めたが中途退學し、翌年より工部省技手を拜命、十四年十一月胸を病み聽覺を減じたので官を辭し、十五年東京繪入新聞を振出しに新聞記者生活に入り、傍ら芳譚雜誌の編輯長を兼て居た、十六年大阪此花新聞、日本繪入新聞東雲新聞等に相次で小說を執筆し、三十一年歸京、改進新聞を經て廿九年十二月東京朝日新聞社に入つた、卅一年の本社第一次夕刊發行當時は第一線に立つて奮鬪努力したが夕刊中止後は社會部に在つて小說を發表し、後ち整理部校正部に入つて今日に及んで居る、溫厚の長者として社僚の尊敬厚き長者である。

柳下亭種員二世（別號麓園、通稱有山新兵衛、現存）も亦僕が舊知己の一人で、此頃三十年振に會合して懷舊談を試みた事がある、始めは二世種員は未知の人だと思つて逢つて見ると夫れが昔の紅楓子であつた抔は我ながら物忘れの甚しきに歎息した、氏は今世田ケ谷字太子堂に住ひ道樂半分『俳三昧』といふ雜誌を發行されて居るが、その自傳に依ると祖先は武州日町驛在の產で、氏から五六代以前の人が兩國横山町に移轉し來つて幕府の際物用達を勤め家業も追々繁

昌した、氏は商家に生れながら幼き頃より讀書を好み、稍や長じて文筆に從事したこともあつたから、明治十七年高畠種彦氏の門を叩き、終に其翌年十月に柳亭の號を繼いだ、それから東西新聞に鯉魚風といふ小說を書き、新潟繪入其他二三の新聞に筆を執つた事もあつたが、感ずる所があつて實業方面に志し、或は鑛山油田の仕事に沒頭したり、又は滿洲の興業に從事したりして大に活動して居るうち、大正十年大患に罹つて一年間修善寺で靜養し、幸ひ元の健康には復したものゝ、再び輸贏の衢に飛出す勇氣もなく、又昔の筆取りに立戻り、月刊雜誌を發行し、その題號通りの俳三昧に入つて、悠々其日を送つて居るのであると。

●●●為永春江（號狂文亭通稱知久況堂？明治二十年十二月二十日歿、年七十九）は四方梅彦の次へ書入れるべきを脫したから、玆に追錄する事としたが、翁は初代春水の高弟で、その年功から云へば染崎氏よりは高齢な此翁が二代を繼ぐべき筈であつたと聞いた事がある、見るから溫厚な好々爺で、二世春水翁とは違つて老年ながらどこかに小意氣な處があつた、僕が小石川水道町の宅を訪問した時は翁には二人の娘……と云つても稍やらう長た年齡……があつて、是れがやはり為永何々女と名乘つて小新聞へ投書もして居たやうに記憶する、翁は芳譚雜誌以外には新聞記者となつた事はなく全く續き物を書く事を以て營業とし、都下の新聞は固より遠く大阪の朝日新聞にまで寄稿して居た、そして當時社外から來る原稿は、大概筆者の物好きとか名譽心から送るもので、各社でも之に對して報酬金は贈つて居なかつたが、一回何圓と額を定めて潤筆料を取り出したのは、實に此翁から始まつたのである、僕が明治十一年に知友から寄稿を請ふて蟹文集（非賣品）といふのを刊行した中に、翁の文も掲げてあるから、左に轉載する事とした。

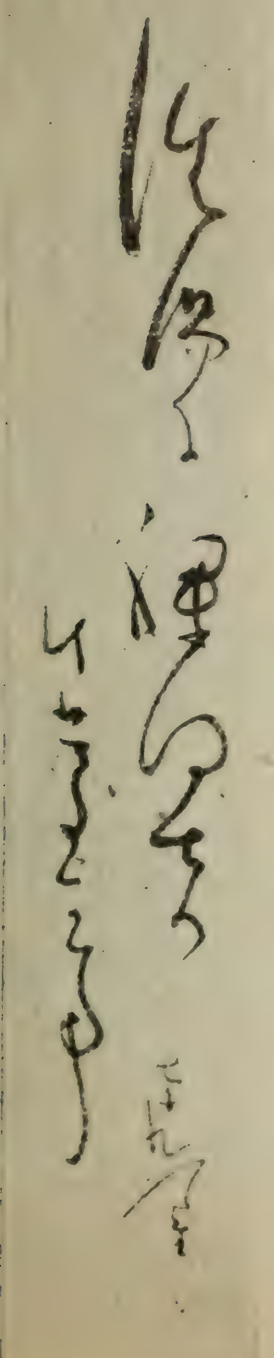
抑々蟹い愛たきこさ先づ書出して見た處が老松の替唄にはあさの文句に差支へいかにも淺學の机上には俄かに云ふべき事もならぬかに釘なる愚かには世話し、餘かにひそかに考へ漸く僅かに執る筆も靜かに書いては埒が明かず、看官方は眼かに笑にれ苦しいなかに淺はかにも成るたけ豊かに賑やかに猶更こまかに和らかにほかに目先の替つた趣向さ三ツかに仕上げ、了簡もさかに車

の跡戻り十かに成つてもまだ果てぬ和かに狂かに混合つても倩穩かに出來兼るは年の加減か我ながら馬かに藥のないのに困りどこかに有るか尋ねてや見ん

狂文亭春江

さて是れで一順お話しは終つた譯だ、まだ追加として有人氏以下の事を、書けば種の無いでもないが、下手の長談義に渉るばかりゆゑ一先つ打切る事として、前の話しを振返つて考へて見ると、僅か二三氏を除くの外は其程度にこそ多少の相違はあれ、晩年振はずして窮困の境にさまよひ、遺族の所在すら不明なのが多いのは何に基く爲めであらうか、或ひは當時の著述家は後顧の憂ひなどには頓着なく、のん氣に暮して居る爲めかも知れぬが、見やうに依ては其人々の功勞に對し、世人が之に酬いる事の薄かつた爲めだとも解せらるゝから、何かの機會にその英靈を慰める追悼會の如きものを催されんことを、世の有志家に哀願する。（をはり）

二月末に逝かれた内藤鳴雪翁の句並に筆蹟



柳水亭種清

鳶魚

明治初年の合巻を尠し集めた中に、種清の作が二三あつた、さうして其の巻末に編輯、芝區愛宕下町二丁目二番地櫻澤堂山とある、此の氏名が如何にも不似合に見えた。戯作でもする人間には餘り野暮臭いので、其の出身を考へさせる。醫者か、それとも坊主か、坊主らしいと思つた、今日は全く忘られて了つた柳水亭種清、誰だつて彼の作名を知つて居るものもあるまい、まして氏名などを注意する人があらうとは思へぬ、けれども安政五年の一枚刷、三福對濁占語葉を見ると、

正本寫　いそが　柳水亭種清
一代記　しから　鈍亭魯文
端歌作　うヨ　梅暮里谷峨

とあつて、當時が思ひ遣られる、並記した顔觸れで、彼は江戸の末に第一流の作家として、盛名を馳せたことが知れる。

我等が種清を注意するのは、淫水亭といふ作名で多數な春本を拵へて居る、その怪しからぬ文字を睨めて、不埒な奴だと思つたからではない、此の頃の雜誌に極つた一種の讀み物となつた芝居見たまゝ、それは演藝畫報第一巻第十一號（明治四十年十一月）以來のものゝやうに覺へて居るが、種清は安政の一枚刷にも正本寫とある通り、現在の芝居見たまゝとは些少体裁も違つては居るけれども、舞臺を見る通りに讀ませることは同樣である。むしろそれ以上である。特

に合卷は毎丁悉く畫入りであるから、今日の芝居見たまゝが何程巧に書いても及び難い所がある。

文政の昔に柳亭種彥が創案したのに正本製で、製の字をシタテ（仕立）と讀ませたが、種清の正本寫で、寫の字をウツシと訓した、前者は脚本小說とでも云はうか、後者は小說體脚本とでも云ひたい。それに種清のは總べて上演された脚本を資料として居る、種彥のは勿論創作であつた。其の邊からの差違もあらうが、正本製と正本寫とは只だ一字の違ひでなく、大體に心持ちが變つて居る。

此の正本寫といふ言葉は種清以前に使用されなかつたやうに思ふが、芝居物の合卷は無論彼が始めたのではない、それに坪內先生の少年時に觀た歌舞伎の追憶に、

此草双紙仕立の正本と私の特稱する種類の物が、更に嚴密に調べて見ると、おのづから二種に分かれて、第一種は全く其儘に臺帳を草双紙に引直したものであつて、役々も其上演當時の俳優のまゝ似顏に畫いてあり、幕數も場數も、ほゞ其儘に知ることが出來るやうに綴つてあるもので、チョボの文句さへも其儘書き入れてあるのも少くない。道具立や背景は挿繪に讓つて書いてないが、トガキは地の文となつて相應にくはしく記入されてある……ところが形式だけは同樣であるが……當り芝居を七分以上其儘に取込んで、さうしてそれへ餘計な作意を附け加へて、蜂蜜に砂糖をまぶしたやうにわる甘く仕立てた草双紙も隨分ある。

と云はれたやうに二種に大別される、此の二種の正本寫の合卷を現在に行はれる芝居見たまゝに對比すれば、雜物を澤山に混じたのが往けないのみならず、正直に筋を書いたゞけでも往けないのだ、近年の芝居見たまゝは演藝記者が親しく目擊した舞臺面を描出するものであるから、筋は勿論のこと、登場俳優の動作から氣込みまでも傳へられる、それ故に讀者を讀みながら芝居を見て居るやうな心持にさせる、然るに最近の某誌は作者部屋に托して、芝居見たまゝを拵へさせる、未だ開場しない內に原稿が出來るから便利ではあつても、實際の舞臺を見て書かないのであるから、筋だけの

ものになつて了ふ。

正本寫の合卷にしても讀者を芝居見物の心持にする積りなのだ、舞臺の興味を傳へやうとして居る、讀者は其の積りで正本寫の合卷を讀むのであるから、作者が其の注文に外れゝば、出版者が承知しない、是は大阪版の讀本仕立のものと違ふ譯で、正本寫の合卷が今日の芝居見たまゝに近い理由なのだ。孰れにも舞臺に背くものではないが、大阪の主として脚本の方を考へ、江戸のは見物の方を重にして書くといふ差を生じる、云ふまでもなく兩地の讀者の注文が其處だつたのである。是は根柢のあることで、江戸の見物は役者を見て芝居を見ない風があつた、それ故に脚本も役者を見せるやうに拵えられる習癖がある、上方から何時も筋立の無雜なのを笑はれ、芝居を見ることを知らないと嘲られて居た。それが上方役者に依つて盛に上方狂言が上演されるやうになつても、見物の心持は何分にも變らない、役者を眺め舞臺を詠め、ヤマを喜ぶ以上にはならぬ、あの生世話物が趣向立が筋立よりも先へ立つことを脱れなかつた、斯うした風習は同じ芝居物を讀み本に仕立て、合卷に仕立ても、上方と江戸と往き方を違はせなければならぬ筈であらう。

種清の正本寫は坪内先生の少年時に觀た歌舞伎の追憶に列擧されて居る、安政三年の蝶衛龜山染（龜山仇討とお房徳兵衛）から、萬延元年の花摘籠五十三驛まで、前後二十八種、その中の二十種は安政度の出版であつて、總體から云へば河竹默阿彌の作が多い。

我等は種清の合卷を多く讀んでも居ないが、他の作家のものと見較べて、大變に目立つことは、彼の筆致が現在の芝居見たまゝに近いことだ、系統を立てれば正本寫――芝居見たまゝとなることだ、故に又た正本寫といふよりも舞臺寫しといつた方が好い。種清の前に岡三島があり、一九があり、雪麿があり、種員や仙果のがあり、彼の後（文久以降）に梅彦とか、有人とか、魯文、交來とか、當時に顯著な作家の合卷がある上に、狂言作者も手を延して居る、其の孰れに對しても種清の特色が現在の芝居見たまゝ（某雜誌の作者部屋製造のものを除く）の御先祖樣だつたことにある。我等

は爰で種清の特色を話さずに、彼の合巻を讀んで貰ふことにしたい。

その種清は果して坊主であつた、あとさき坊の中やつこといふ諺があるが、彼も其の通り中頃還俗して晩年はお寺へ復歸したのである。種清は默阿彌の弟子だと聞いたから、曾て河竹繁俊氏に聞合せたことがある。

種清の事、大凡申上候

文政四年の生れ、六七歳の頃、生地飛彈高山より越後に行き、兩親に別れし後、遊行上人に伴はれて江戸に來り、日輪寺（淺草紫崎町）に入る

役僧にまでなり、女一條より傘一本にて寺を逐はれ、默阿彌の門に入る、紋番附へ「能晋輔」として載りしは、嘉永四年の顔見世よりなれども、嘉永三年の交に入門せしものと存候、嘉永三年とすれば三十歳に相成居候筈に御坐候

後種員（柳下亭）の門に入り、種清、柳水亭と名乘、何故に狂言作者となりしか不明、又た何故に狂言作者より戲作者に轉ぜしかも不明に御座候、然し多分は相當に佛學もあり、種員と默阿彌とは親交有之候まゝ、望まれしにも哉、又は始め狂言引直しの草双紙をやらせて見て案外旨くまとまり候故、戲作の方へ轉じ候にも哉。

何時戲作に轉ぜしか明確ならず候へども、嘉永七年（安政改元）六月河原崎座の紋番附迄にて、其以後能晋輔の名は無之候

安政三年三月市村座上演の「雪駄直し」（默阿彌作）より、種清綴るとせし草双紙の續出する所を見れば、安政年度よりは種員門下に入りしものと考へられ候。

安政の末に至り、お詫が叶ひ、遊行上人に相見致候て、其後に常陸にて寺を持ち申候、その年代は知れ申さず候へども、戲作を廢し候後の事と存候、大分明治の初にも可有之候。

明治二十年前後より相州酒匂上輩寺の住職に相成、明治四十年三月、八十七歳にて歿し、同寺の墓石には桂光院箕阿上人智俊堂山老和尚と有之候、八功舎得水と申すは別號に御座候、晩年にも精力壯健にて終日机對し、筆を執り絶えず何か書き居候由にて、更に倦色見へ申さずとか。

種清といふ名は柳下亭種員から貰つたので、彼は種員の弟子になつたのだ、種員は柳亭種彦の門下なのだから、種清は正本製を創案した種彦の孫弟子になる、芝居物の合卷は師匠の種員にも數種あるが、種清の正本寫はお師匠さんのとは違つて居る。彼の特色は其處だ、種清の正本寫でない合卷も尠くない。別けて種員が嘉永二年に初編を出した白縫譚は二十七編を書いて沒し、安政元年から二世種彦（笠亭仙果）が引繼いで廿八編まで出し、其の後を五十六編から種清が嗣作し、明治十六年に九十編で完結させた。善く先師の遺緒を嗣いて、長い〳〵間を續けた手柄は、彼の才分を立證するものであらう。

話は戻るが、一體芝居物の合卷は、正本で往けず、筋書では尚ほ往けず、小說にして了つたも往けない、或る興味を出すのにある、其の興味を出すのに何を描いて好いのか、現在の芝居見たまゝは、種清を知つて始めたものらしくはない。けれども書き方が其の儘ではないが、心持ちは違つて居ない。正本寫の合卷は、合卷といふ體裁のために造られたのもではない。芝居の話をして、相手を見るやうな氣持にさせる處に意義があるのだ。

種清の閱歷の中で時宗の坊主であつたことは此の際必要もないが、默阿彌の弟子であり、種員の弟子であつたことは如何にも仕事に適當である、さうして作劇の方よりも、戯作の天分が勝つて居たことが注意される。種清は明治になつて、白縫譚の續成のみならず、多數の合卷を出して居るが、それよりも我等は正本寫の方が好もしい、世間の評判からは英泉のおいらん繪のやうに褒められて居ないけれども、種清の正本寫は英泉のおいらん繪と並べて、江戸末の名品だらうと思つて居る。間違ひましたら御免なさい。

明治初期『東京日日』に現れた文藝記事（承前完結）

松原至大

○

老儒琴臺東條先生は古今の魯靈光なり。本年七十有九。流行の麻疹に侵されしが、此節平癒してかくしやく故に減ぜず挺然獨秀とは先生の謂か（七月十日）

東條琴台は『先哲舊談續篇』、『儒林小史』、『談藝折衷』『逸人小史』などを著した人で、明治五年八月に龜戸天神の神官となつたとあるから、この時もまだそこに居たのであらう。博覧強記の人で、麻疹のために眼が見えなくなつたが、人との應對には少しも困らなかつたさうである。亡くなつたのは十一年九月二十七日、歳は八十四。向島の蓮華寺に墓がある。

○

來二十一日淺草南元町梅若六郎宅にて、定催能の興行あり。番組を左にあぐ（七月十七日）

氷室、實盛、柏崎、橋辨慶、阿漕、（狂言）足連、蟹山伏

○

序ながら二十三日のには、過日炎上した皇居のために献金した人の名と金額がのせてある。二十六日のには、先日
野國富岡に行啓あらせられた皇后陛下の御詠が、次ぎのとほりにのせてある。

　ふる雨にしひてもみませ云々と云ふ歌を福羽美靜がよみ奉るをり

心ありてしひても見よと賤のわざこれも敎のうちとこそおもへ

　富岡なる製絲場にて

糸くるまさくもめくりて大御代のさみをたすくる道ひらけつゝ

　雨晴れし日

けふうれし雨晴れてものゝふの心の駒もさそいさむらし

　玉井さいふ所にて田植ゑを御覽して

おり立てゝうゝろ早苗の手ひらきにうたふ田うたのにきはしきかな

次ぎにお供をした福羽美靜氏の歌が、附錄として二首のつてゐる。

降雨にしひても見ませぬれつゝもはこぶ田つらのしづがわか苗

取糸のけふのさかえをはじめにてひき出すらしくにのさみなか

美静氏のことは知つてゐる人も多いであらう。亡くなられたのは明治四十年八月十四日のことで、年は七十七であつた。當時は侍講を仰せつけられてゐて、歌道文學の御用掛であつた。身體は小さかつたが、いかにも膽の大きい人であつた。

○

南新町狂言座大薩摩吉右衛門は、近日澤村由次郎櫓を讓りて、澤村座と改稱し來八月初旬より狂言始る由なり（七月三十日）

○

『續々歌舞伎年代記』によると『當座は昨年薩摩座の櫓を以て願ひいで、今般田之助の養子百之助座元となり、澤村一家出勤することゝして開場したるなり。』とある。

初日を開けたのは八月四日で、田之助と訥升が口上をのべてゐる。狂言は第一番『其擧湖水駒』、中幕『義經腰越状』『伊勢音頭戀寢刃』大切淨瑠璃（國周廣重か合筆に模寫して）『墨江舟姿抽』で、訥升か光俊、小早川高景、和泉三郎、福岡貢、浮世伊之助を、田之助は藝妓おたの、女達二見のお浦を、岩井紫若か油屋おこんをやつた。

○

八月六日御藏前梅若六郎定會袴能

龍虎、鷹苅、誓願寺、天鼓、熊坂、（狂言）文相撲、井襠、法師々母

この他に長川東洲先生著の『讀外史餘論』の廣告があつて、販元は室町書肆中外堂とある（八月二日）

○

先考追福書畫會（九月六日）

東兩國於中村樓上不論晴雨相營候
本日諸先生悉皆出席揮毫

會主　故一勇齋國芳娘
　　朝櫻樓　芳子
後見　社中一列　拜
（八月十七日）

歌川國芳が武者繪を得意とした浮世繪師であつたことは、これもよく人に知られてゐる。『歌川家列傳』を見ると、亡くなつたのは文久元年三月四日、年六十五。淺草八軒寺町大仙寺に葬るとある。朝櫻樓と云ふのは國芳の別號である。芳子と云ふ人のことはよくわからない。

○

來る六日伊太利亞皇族新富町守田座戲場を見物せらるゝに付き、狂言新たに取仕組、午後六時頃より初む。尤も本日は他の見物をも隨意之を許すと云へり。（九月四日）

この時の守田座は芝翫、左團次、紫若、訥升、彥三郎、三津五郎等の一座で、『清正公荒木立像』、『復讐誓彥山』をやつてゐた。『芝翫の清正は船の場が最もよく、彥三郎の政右衛門は岡崎が取りわけ出來よし。』と云ふ評判であつた。

開化の俳優

三島驛よりの投書に曰く、頃日駿州沼津驛に於て、尾上菊五郎及び重立たる俳優を招きて、八月二十六日より芝居興行をなせしが、其趣意毎に勸懲を基とし、

無筆の早學問たる名に脊かず、看客こぞつて感服す。殊に菊五郎におけるや、せりふの端々皆開化ならざるなし。實に道の巨魁と稱せらるゝはこの所以ならん。

これに續いて記者の批評の言葉が添へてある。岸田吟香氏の筆であらう。

菊五郎なる者沼津においては、勸懲となるべき何等のことをなせしやは知らざれども、往々府下の演劇に於る主親の爲に妻を賣り、子を棄て、甚しきは人を害して金を奪ふ。是れらの犯律を以つて忠臣孝子となせらるゝ者比々たり。既往はとがめず、古今開明日新の際外國人も見物するの時なれば、速に劇の宿弊を洗除し無筆の小學校と賞せられんを希望す。

○

俳優坂東三津五郎なる者段初めの風邪に打ち臥せしも、遂に傷寒となり、醫療驗なくして遂に死去せり。本日埋葬、諸俳優これを送れり。本年二十八歳、當時女形の一人なりしが、いと惜しむべきことなりかし（九月十三日）

五代目三津五郎は、初代しうかの實子であつた。前に記した守田座の狂言に、三左衛門娘雛衣、傾城花紫、佐藤の奥方葉末、圓右衛門妻笹尾、娘よね等をつとめたのが最後であつた。

○

十月十七日のには梅若六郎宅の定催能が、十一月二十一日にあることがのせてある。番組は次ぎの通り。

卷絹、淸經、千壽、藍染川、野守、（狂言）水懸聟、鐘男、粟田口

○

中金正衡先生著並書

增補世界風俗往來　初篇一冊

此書は小學校の御教則追加の部へ御編入ならせられたる世界風俗往來歐羅巴の部を增補せられたるなれば、諸氏お求めあらんことを願ふ。

發兌書肆　東京大傳馬町一丁目

三家村　佐平

（十月二十六日）

むやみに使つた敬語が、私たちにはをかしく思はれる。

○

十一月十三日のには、十一月六日の別會催能組として、次ぎのやうに記されてゐる。

邯鄲（梅若六郎）道成寺（梅若實）、絃上（觀世鐵之丞）、

同じく二十一日追善能組として

翁（三番叟　大藏彌太夫、千歲、梅若六郎）、養老（水波の傳）梅若實、景淸　梅若文）、戀重荷（觀世鐵之丞）、葵上　梓の出）山

階瀧五郎、亂(置壺)梅若實(狂言)末廣、釣狐

○

十二月二日のには、ヘボン先生のことがのせてあるので、次ぎにあげてみる。

アメリカの名醫ヘボン氏昨年歸國せしが、去る三十日横濱へ歸港せし由。この人は實に賢人又は君子ともにふべき德ある人なり。その行狀の正しき心術の明なること、とても我輩の及ぶべきにあらず。蓋し漢土宋代の先生方も、その行ひは多分この位のものなるべし。日本へ來りし後、諸人の病氣を療治して、死者を救ひ、廢人を癒したること千人なるを知らず、而して謝儀を受くることなし。その著したる和英語林集成は、わが邦部學生徒多くの益を蒙れりと云々

○

同じ日の廣告に、靑木輔淸と云ふ人が編んで、有馬私學校が藏板する『英和掌中字典』定價一圓六十二錢のことがでてゐる。

右はダイヤモンドと稱する小字典を元とし、語數三萬近く、通俗の譯語を下し、極小の活字を以って、出版仕候細小輕便の字引にして、夜學懷中に便利なる、部學童蒙に解き易き、實に掌中の珍書なり。右字典私實弘仕所々書肆へも差出し置き候間、御購讀の程本希候。

東京淺草門跡裏田島町三十番地

岡田　伴治

○

これで五六の二ケ年が終つた。前にも記したやうに、今日から見ればお話にならないほどのお粗末さである。けれどお粗末ながらにも、當時の様子が思ひやられるであらう。ひと先づこれで筆をおいて、またの日を期したいと思ふ。

明治初期文學餘話

三品蘭溪

明治初期の新聞小説や、操觚者の研究に就ては、昨年三月發行の貴雜誌「明治文學號」に親友野崎左文大人の細叙詳説さるる所
や、その他諸君の追憶談に因て、殆ど盡されて居ると思ふ。然るに今更私など蛇足を添へるは、却つて胡盧の至りですが、居る
所の位置で、嶺とも峯ともなる廬山の面目觀と言ふ事もありますから、當時私が知遇を得た、諸先輩の面影や、その逸話など申
し上げ、いささか御參考として、貴囑にお答へ致します。宜しく御取捨を願ふ。

坪内逍遙博士が、同號で多大の同情を依せられた、幕末遺留の戯作者の一人染崎房延（二世爲永春水）老に、私が初
めて會つたのは、明治十六年の秋、東京繪入新聞社の編輯局樓上でした。同社は今でもある銀座一丁目の、金田とい
眼鏡舗の北隣に接した、極めて矮小な煉瓦家屋で、その編輯局なども、實に粗雜なものでした。

主筆格（局長と稱してゐた）の前田健次郎（夏繁）君の紹介で、同君と机を對して居た、色の稍黑い、少しく眇眼
やうな、ギヨロリとした目へ、鐵緣の眼鏡を懸けて居る、七十歳近い老人に挨拶して、之が染崎老である事を知つた。
生粋な江戸ツ兒肌、意氣な老人だらう、との初めの想像とは違ひ、マア一寸と觀た所、勤番武士とでも言ひさうな（
老は對馬の人、宗藩の士族）何地かと言へば無愛想の方で、此樣な人の筆端から、如何して那樣な艶つぽい情話が綴
れるかと、未だ二十歳代の私は、一寸と異樣に感じた程でした。

此の編輯局には、今一人古川精一（魁蕾子）氏が居られ、私と都合四名で、追々日數を經るに從ひ、無愛想であつ

た染崎老も、案外優しい老人である事を知つた。そして同老は、毎日午前十一時頃に出勤、前日下畫が出て居る、受の繪入續き物一章づゝ書かれる丈で、執筆中、字句に支へたり、睡魔に襲はれたりすると、いつも懐中の財嚢から、ツ折の半紙を取出し、その小隅を裂いて、鄭寧に紙撚を拵らへ、それで暫く耳の穴を穿るのが癖のやうであつた。

その頃同老は『淺尾岩切眞實競』について『小政の話』と言ふのを紙面に書いて居た。

その小政と言ふのは、何でも、大阪生れの相當な商家の息子で、家庭の事情から遊蕩に耽り、遂に勘當されて、横へ漂泊して來たのを、馴染の藝妓や婚約の娘が、互ひに實意を盡し合ふと言ふ、先づ陳腐な人情本筋で、これ丈ならに取立て云ふ事もない。然し此の小政が、自身配達人となり、その新聞を毎朝配達する、之が非常な人氣を呼び、横丈けで、三千も紙が出たと云ふ話であつた。けれど、斯うして爲永一流の情話も、概して千篇一律なので、此樣な宣傳式でも行はねば、モウ讀者の歡心を維持する事の出來ない、裏面の悲哀が既に窺はれて居た。

大蘇芳年の巨大な挿畫を載せた、繪入自由新聞と言ふのが創刊され、宮崎夢柳居士、渡邊文京氏等の記者が、爲永とは反對な、太平記調や馬琴流を、盛んに書き立てたのも此の時代で、眞つ先に其の影響を受けたのが東京繪入新聞であつた。夫れが爲め編輯内部に、紙面改良の叫びが擧げられたが、染崎老はいつも『小僧は小僧らしいのが好い、小の生意氣になつたのは見苦しいものだ』と言ふ保守一點張で、遂に時勢に乘じて進む機會を失つた。私は其の後間もく大阪の此花新聞社へ招かれ、古川氏も去り、前田君も暫くして退かれた。同社は之等の爲に、益々萎微として振は後に『東西新聞』と改題し、續いて廢刊した。染崎老は、此の前既に社を退き、築地の寓居で淋しく逝れた事と思ふ。然し東京繪入新聞が、讀賣、有喜世、魁新聞等の群を拔いて、一時盛んに聲價を擧げたのは、多く同老の艶筆から織出された魅力に依つたもので、幕末文學の過渡時代に於る『日既暮、而猶煙霞絢爛』の餘韻は、此の老に對しても、に認めねばならぬと思ひます。

○

前田健次郎（夏繁）君の事は、既に左文大人のお筆にあり、重複を避けて、大概は省略に附しますが、同君は流石に國學家の出身丈けありて、假名使ひや語格に就ては非常にやかましく、先づ亂雜を極めた、自家新聞の假名使ひを一定し、延いて他新聞をも、正しい假名使ひに導いた。其の効は確に感謝に價ひするものがあつた。其代りに又、妙な處へ國粹主義を徹された。一例を擧げると、『チンプンカンプン』とか『トンチンカン』とか、其の頃よく使用した俗語を書く時、『ン』と跳る音を絕對に嫌ひ、『トムチムカム』又は『チムプムカムプム』と訂正する。それが爲め世間では、あの『トムチムカムチム』を廢せば尙ほ二三千紙數が殖えるものをとの蔭口もあつた。然し同君の主張に因ると『ン』の跳音は支那語に多い。言葉は國の手形とも言ふ。日本が支那の屬邦でないと言ふ事を立證する爲めには、飽まで『ン』の跳音を排斥せねばならぬと言ふにあつた。これは日支關係の危機が、當時既に豫測される所から來たのだが、其處にも因襲を重んずる國學者の思想が竟はれた。

東京繪入を退かれた後の同君は、朝野新聞へ入社し、柳北居士の獨占で有名の雜錄欄を補助し、居士の歿後は、二世雜錄子として同欄を擔當し、傍ら、繪入朝野をも主宰されたが、同紙が江戸新聞と改題し、更に中新聞（社長大岡育造氏）と代つた後、遂に操觚界を退き、專ら美術鑑賞の大家として仰望された。

新聞上では、艷ものゝ筆よりも、投書欄などで、改進主義の鼓吹を努めて居られた。香雪散人、鶯園、金衣公子、小羅浮山人などの別號が多く、何れも前田家の定紋梅に因んだもので明治二十一年春陽堂發刊新小說（現時新小說の前期）には、小說の筆も揮はれ、就中八文字やものゝ輕妙な筆致に特色あり、又た純和文風の短篇には、他の追從を許さぬ健腕を有して居られた『淡路島』や『化物屋敷』（いづれも新小說所載）がソレで、別に『新形蒔繪流行護謨櫛』とか題した脚本もあり、斯う言ふ方面の、日本在來の文學に對し、往くとして可ならざる無き縱橫の健筆は、當時同君を第一位

として推すも、敢て過當では無からうと思ふ。

○

盃を手に把ると、忽ち筆の方を忘れると言ふのが、古川魁蕾子で、同氏の筆は寧ろ爲永系に屬し、東京繪入紙上へ連載した『雛の菊』などは染崎老の筆意に彷彿たるものあり、同老からも私に、遺鉢を繼ぐべく囑目されて居た、然し追々讀物の嗜好　變遷して來たので、遂には『栗原百介傳』など言ふ、武張つたものゝ方へも筆を向けて居た。

私が大阪の此花新聞へ行つた後、畫工の歌川國松氏（現存、大阪在住）と共に、同氏を推薦し、二年ほど一緒に筆を操つて居た。明治二十二年ごろ、氏は私より先へ歸京して、再び東京繪入へ戻り、更に都新聞へ入り、又た幾干ならずして、神戸又新日報の渡邊尙（投書家）氏に呼ばれて又新に入社し、同地には十數年居られた。明治三十二年ごろ歸京一時操觚界を引退したが、又た日々新聞社？へ出勤する樣になり、程なく膽石病で逝れた。

同氏は漢詩や和歌をも良くし、當時の新聞記者とか通俗小說家としては、相當に學殖を有して居たが、一生を通じて少しく盃酌に親しみ過ぎた爲め、魁蕾子の雅號にも似ず、終に文華爛漫の春に遭はれなかつたは遺憾であつた。

○

本名よりも、投書家の南新二で博く知られた、明治のユーモリスト谷村要助氏も、一時東京繪入に筆を操つた、氏は極めて眞面目な風貌の持主で、而もあの輕妙な諷刺や滑稽の筆には、如何な苦蟲の顋をも解かずには置かなんだ。小說百番（春陽堂）の鎌倉武士などが其の代表作でした。尙ほ滑稽もの以外小說の方でも、滋味のある、普通離れしたものもあつた、中でも『蓮池の水禽』（新小說）などは、お坊主の玉島蓮貞、八丁堀の與力榊原數右衞門など、多くは實在の人物をモデルに充てたらしく、對話も一言隻句皆な活躍して、人物の個性を表現し、湯島の坊主奈屋殿村家や、辰巳藝者の描寫にも、その時代の背景が、可なり深刻に描かれて居る。唯だ惜しい事には、斯うした作物が極めて尠ない。

同氏は晩年中風病に罹られ、久しく病臥して居たが、いよ／＼危篤と言ふ噂さの傳へられた時、これも氏と名を同じうした、滑稽作家の幸堂得知（鈴木利平）氏が見舞ひに行かれると、モウロの利けなかつた病主人は、枕頭の筆紙を取り寄せ、それへ顫へる手先で。

『……君、こんな南瓜頭に、毎日一分（二十五錢）づゝの氷が要るよ、たまつたものぢや無い』と冒頭して『ひやし南瓜に一分の氷は如何だ……』

と地口つて示めされた。これには幸堂氏も膝を拍つて感嘆し、『その勢ひなら、必ず全快するよ』と慰めて歸つたと言ふ逸話がある。

生死の巖頭に立ちながら、尙ほ斯うした滑稽に安住して居る事は、天稟のユーモリストで無ければ出來難い、洒脫の境であらう。

〇

明治十五年の一月、柳亭種彥（三世）を嗣號された、高畠藍泉翁の事も、左文大人のお筆で既に委しく記されて居ることゝで私が操觚に入つた動機に就て、をこがましいが一寸と述べさせて頂き度い。私は其の前年耳の疾患に罹り、一年餘病臥して、實に悶々の情に堪へなかつたが、フト新聞投書を始め、その頃日本橋新葭町に假寓して居たので、土地が狹斜の巷であつた所から、橋屋蝶之助（家紋の橋と通稱の長の字に因つたもの、後には單に橋蝶とした）の變名で、東京繪入や讀賣新聞へ頻りに投書して見ると、大概は掲載された。

これが乃ち動機になつて、高畠、前田兩君とも知る事を得、そして柳亭翁の嗣號會へも出席し、續いて柳門に遊ぶ事にもなつた。

併しその後半年間ばかりで、同翁は大阪の大東日報社へ雜報主任として赴任され、同地に一年半餘り滯在し、同十六

年の暮歸京されると、今度は又た半年ほどで、私が大阪の此花新聞へ行く事になつた。其様な譯ゆゑ、同翁に近侍したのは前後を通じて、僅に一年ほどに過ぎなかつた。

斯うした短日月中の事とて、餘り多くを知る處なかつたが、夫れでも前田、饗庭の兩君等と共に、折々催された源氏物語講義の際なども出席し、又た面白い文話も時をり聽く事を得た。その中で尚ほ記憶して居るのを擧げると、翁は常に『私は漢籍の素養がない、唯だ幼少の頃から、種彥ものを耽讀した丈で、所謂る草双紙學問に過ぎない』と謙遜して居られながら、而も金瓶梅や水滸傳の原本にも一ト通り眼を通し、別けて曲亭の文藻に就ては、却々深刻に評された事もある『曲亭ものも、あの理窟臭い所や、濃艶に過る口調は感心出來ない。けれど、或る叙景の文に至つては、實に拍案する才筆が尠くない。現に芳流閣上、信乃現八接戰前の「頃は水無月……」と書き出した炎天下屋上の實景などは、眞に入神の妙筆でせう』と激賞され、其處の文章十數行は悉く暗記して居られた、又た大村大角が無言の厳行をして居る所へ、雛衣が尋ねて來て、綿々と怨言を陳べる中に、「ひとり暮すがほんいかいな」とある、あの淨瑠璃口調に漢字を當嵌め「ひとり暮すが、本意歟。否」としたなどは、餘り才に任じて文字を弄び過ると指摘し、信乃が村雨の名刀をいよ〳〵許我の御所へ持參する前夜、一應刀身を檢べる所で、初め曲亭氏は「先づ柄の塵を拂ひ、徐かに鞘を押拭ひ、引拔きて打見れば、這はそも如何に、村雨にはあらざりけり」と書き下したのを、或る親友が見て、信乃ほどの大丈夫が刀を拔くや否や、這はそも如何にと忽ち吃驚するのは、少しく輕卒のやうだと評した。

これには流石が傲岸の曲亭も大いに首肯し直ちに「引拔きて打見れば、村雨にはあらざりけり、這はそも如何に…」と改めたので、如何にも沈痛の情が現はれるやうになつた。との文話も伺つた。斯う言ふと、翁は品行方正、文事にいそしむ學究の様にも聞えるが、爾う許りでも無い、攀柳折花の興味も有ち、通人として花柳にその名を唄はれもした。唯だ生野暮の私が、爾う言ふ方面のお交際に洩れた丈けだ。

翁は又た極めて人の世話好きであつた。或る時、私の下宿して居た、新橋出雲町の松本と言ふ旅店へ、一人の質朴な青年を同伴して來られ『君、これは繪を描く人です、僕の宅は人出入か多く、落着いて描けないから、どうか此處へ、二タ月許り置いてやつて下さい。賄ひ料の方は一切僕が引受けます』と頼まれたので、私は直ちに承諾した。そして其の青年は、垢面蓬髮、如何にも、ちゞむさい風采であつた。少し馴染になつた後、私は無遠慮に『君、髭でも剃ては如何です、マア此の鏡を御覽なさい』と小さな硝子鏡を出すと、青年は一寸と衿を正して『イヤ、私は三年間、絶對に鏡は見ません』と、きつぱり云ひ放つた。これは少し變人だなと思つて、私は別に氣にも止めなかつたが、その青年は爾來益々屹々として、絹本に繪筆を染め、やがて二タ月ばかりで、見事に竣工したのは、粗畫の方が「權兵衛の種蒔き」一密畫は吾妻橋から遙かに櫻花爛熳の墨堤を見渡す絶景で、此の畫はその年の繪畫展覽會に入選し、銀印か銅印かの褒賞を得た。此の青年こそ、後には審査官にも擧げられた、村瀬玉田畫伯であつた。

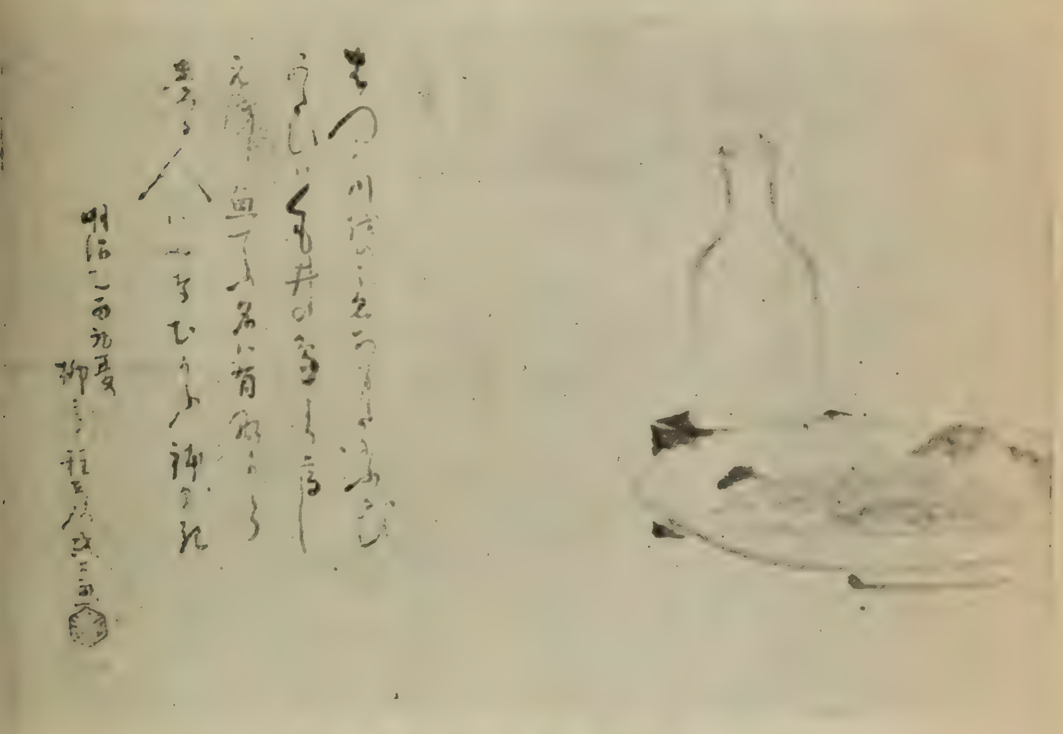
春風秋雨、十何年かの後、社僚の山本笑月君が、或の日畫家連の宴會から歸社されて、私に向ひ『あなたは村瀬玉田氏を御存知でせう、今日あなたの事を種々尋ねられ、懷かしいから是非近日連れて來て呉れと頼まれました』と話された。私はすつかり忘れてゐた、古い記憶を呼び起し、輕い今昔の感に打たれた事もあつた。その後二三度友人達からも斯うした傳言を受けたが、いつも出無精の私は、つい尋ねもせぬうちに、同畫伯が逝れたことを新聞紙上で知り、何とも言へぬ寂しさと、尠なからぬ一驚を吃した。元來此の畫伯（京都の人）を、東京の美術界へ紹介し、早く手腕を認めさせた裏面には、高畠翁の斡旋に因る力が、尠なからず與つて居た。

私の知つて居る範圍で、世間に知られた翁の著書を擧ると、

慶應水滸傳　小金井小次郎と新門辰五郎の俠客談、これは元々講釋師神田伯山？の得意にした續みもので、同人の番頭平木由兵衛と言ふ、一寸と小文才のある男が師匠の種本を材料にして綴つたのを、翁が訂正して芳譚雜誌へ載せたもの、夫れ故初めの著

名には、平木平々子稿、尊々堂主人校閲となつて居る今では何處の新聞紙にも、講談もの、載らぬのは無いが、此の時代新聞雑誌へ、講談ものを扱つたのは、或ひは之等が先驅で無かつたかと思ふ。

岡山紀聞筆命毛　これは岡山藩主池田家のお家騒動をいくらか事實に因て脚色したもので、可なり好評を博したが、池田家から告訴され、遂に絶版と言ふ事で和解になつた。ところが狡猾な書肆があつて、卷中に出る人物の名前を少しく變へ標題も「筆命毛岡山紀聞」と顚倒した文でドシ／＼發刊し、又々其の頃蠣殻町に在つた、中島座でも演劇に上せた後に此事を知られた翁は「イヤ運、不運で仕方が無いよ、ハツハヽヽ」と大笑して居られた。



柳亭種彦戲畫

蝶鳥筑波裾模樣　初代種彦の正本製(劇曲)に模したもの、「維新の前後ごろ、高知藩の山本旗郎と云ふ浪人が、水戸藩の住谷某を何かの遺恨に依り、京都の鴨川邊で討果したその住谷の子兄弟が、臥薪嘗膽の困苦を重ねた後、明治の初年、東京柳原堤において首尾よく復讐を遂げた、その事實が脚色されて居る。

其の他短かいものも多くあつたが、能く覺えません。さて翁は私の在阪中、明治十八年十一月、千束町の自宅で永眠された、終に再會の期を得ぬ事になつたのは、今尚ほ呉れ呉れも殘り惜しく思つて居ます。歸京後、翁の嗣子金子益三君から、初代種彦翁の草双紙で、翁の手譯本である諸國郡鄲物語や、千瀬川一代記（全二冊）二箇裂手細之柴（全二冊）等の珍本を讓り受け今も深く愛藏して居る。

柳門の出で、白眉と推されたのは、柳塢亭寅彦（右田年英畫伯の實弟）氏である。氏の新聞に書かれた艶種の筆は、奇想天外とか、天下一品とかの好評まで博された。後に帝劇の*



故右田寅彦畫讚

*作者になつてからも、種々面白いものを作くられたやうだが、尚世間の記憶に新たな處だから、多くを述べない。唯だ私とは所謂高陽の酒徒で久しいお馴染みであつたが思ひの外早く世を去られたは遺憾に堪へません。

因みに翁の自畫讚と、寅彦氏の狂詠一葉とを副へました。英忠とあるのは、年英門下の高足、故川合英　畫伯の筆です。

叙上は主として明治十六七年（今から四十四五年前）頃私の知つた、先輩諸君の面影や逸話を、何の秩序もなく、追懐のまゝ述べたもので、多くは噴飯の資に過ぎない。然し總てが幼稚時代であり、且つ戯作者として世間から輕く蔑視されて居る人。縱しや爾う無くとも、文化の進んだ現今のやうに性格描寫とか個性發現とか、爾うした深い研究は誰も重ねて居ない、從つて活きた人間を描かうと言ふ意識は無かつた。唯だ馬琴なり、種彦なり乃至八文字や京傳、三馬何でも*



故川合英忠畫寅彦讃

*彼でも自己が好む所に依つて、巧みに筆を操るのを能筆のやうに心得て居た。模倣を離れぬ、惡く言へば鸚鵡式かも知れない。が、夫れと言ふのも、文體に統一の無かつた、混沌期の然らしむる所であつて、又、已むを得ぬ時代相でもあつた。

○

何しろ交通機關と云つても、あんほつや四つ手駕籠の影が、未だ目の前に散見されたり、僅かな重量を運ぶにも、三四人がかりの大八車を、狹い街衢に押廻つた頃だ、飛行機の發達や、汽車、自動車が都大路を縱横に狂奔する今日から

觀れば、如何にも莫迦らしく思はれやう、淺ましくも見えやう、けれど夫れは、幼稚であつた時代の所爲だと言ふ事を痛切に考へて欲しい。況して當時の之等操觚者は甚だ幼稚な筆ながらも民衆文化に向つては、大新聞の藩閥攻撃以上に可なり大きい貢獻をして居ると思ふ。鳶髷頭やお齒ぐろの舊風俗に、諷刺や熱罵を浴せて、早く陋習を改めさせもした。時勢に通ぜぬ失敗者を、士族の商法と嘲けり、頑固一途の迷信家を、おありがたやと笑ひ、斯うした機智の諧謔を弄してあらゆる舊弊方面を啓發した、頂門一針、多少の效驗あつた事は爭はれぬと信ずる。而も斯うした幾干か時勢に貢獻した、其の人自身も、やがて時勢に遲れ、多くは悲慘な終焉を遂げたのであつた。

明治初期の文學史を編纂せられる有識者は、彼の逍遙博士が、能く當時の世故に通曉せられ、同情に富む筆を揮はれたやうに、之等の先人に對しても、一掬の涙ある同情の筆を向け、單に戲作者とか模倣者とのみ排斥せず、明かにその功過を認めて頂き度い。甚だ僭越ながら、先人の爲めに、殘された老の義務として、切に此の點をお願ひしておきます。

男女同權

おなじさは誰かいふらん鳥すらも牝鳥は時をつけぬなりけり。
いづれをかわきておもしさ定むべきおなじ波間にうつすおしどり。

牛肉

世におそき心なればやきのふまで、食ふをうしとは思ひたりけん。

—明治十一年版「開化新題歌集」より—

硯友社の文學運動（承前完結）

丸岡九華

丸岡九華氏の硯友社の文學運動についての追憶記、「初蛙」は昨年六月號の「胎生期研究號」並びに七月號の「胎生期研究續篇」に載つて居ります。本篇は、その七月號からすぐつゞくものです。ですから、本篇も前のと併せて讀まれんことを希望いたします。……………………記者

十六號は同年二月十六日の出版にて硯友社我樂多文庫の歷史中、更に特筆すべき變動起れり、即ち今回よりこの文庫の出版權を神田乘物町三番地吉岡書籍店（理學士吉岡哲太郎君）に引渡し印刷は勿論發賣方法も一切委任することゝなり即ち社員は編輯と選稿といふ事ばかりとなりたり、此原因たる從來九段中坂の本社に於て紅葉思案を初め自分等は、一切取次の老爺を信じて印刷物の發送より收金の事までをも托したるに、この爺利益を何時か我物にして、印刷所同益社への仕拂金は毎月滯りとなり、積り積つて二百餘圓となり、是ではたまらぬといふ時は老爺はいつか姿を隱したるなり殊には我樂多文庫は從來唯一の文學雜誌たりしに、金港堂都の花の發賣以來大に其販路を狹められて、此分にては持續せば徒に道樂に借金する始末なれば、いよ〳〵相談まとまつて吉岡氏へは一部〳〵を原稿料にて賣り、二百餘圓の借金は月拂として支辨する事として結了せり。是の爲め紅葉は二三年同益社の爲め苦しまされたり。

第二十號では、小說類は皆前回の續きのみなり、此號に思案が紅葉色懺悔の評あり、色懺悔は豫て記せし如く、紅葉が
初めて文庫紙上を離れて吉岡書店より單行本として世に示したる初一卷なり、事少しく硯友社文庫の記事以外に脱する
の嫌あれども、筆の次手に同書に關する一二を記さん。

卷頭に坪內春の舍氏の序文あり、是序と言はんより、硯友社全體につきての先生の御世辭にして、一同痛み入つたる御
賞讃なり、然して坪內氏と吉岡氏とは大學時代の同窓なれば先づ最初に左の手紙樣の斷り書あり。

拜啓「新著百種」發兌につき何事か書けよとの貴命屹度承諾いたし先日以來いろ〳〵に工夫を凝らし、何か思付をつられ度苦心致
候へ共兎もすれば戰國にたとへたく、左なくば花とも引合せにいたし度、所詮ありふれたる文例のみ心に浮み差出し候程の文章
も出來ず、せめては色懺悔の原稿お示し被下候はんには　忘評を識し言はんものを、天機漏らし難しとぞ韜みたもふ上はそれも
不叶勿論拜見に不及とも、紅葉君の筆の縱橫なるは「文庫」にて幾度と見たる事なれば、ほむるに料をかくにもあらず、さりなが
ら草廬に高臥せし臥龍と、之三師となりて打て出し諸葛亮とは　自からけじめあるべきを、同じつらに評せんはくち惜しかるべ
し、また紅葉君も爪彈きしたまはん。去るからに新著百種については、今一言を言はぬ事とし、別に思付し事を綴り序の代りに
差上候御採用あらば本意なり。匆々頓首

二月廿三日　　　　　春のや生

鶯村吉岡君　硯北

右はまづ序文の序文にして、さて本文に入りては左の如し。

近頃批評家某の君、我樂多文庫を評して文壇の梁山泊と言はれき、實にや及時雨は果して誰ぞ、そは今はまだ知りがたけれど、智多
星の智、武行者の武勇、其文章の上に炳焉たり（人の己に知れる美妙なる美妙の君を除きして）艷麗にして古雅なる紅葉君は立四
川の昔を偲ばしめ、縱橫にして澁滯なき思案外史は、眞に思案外の神託ありて常に其筆を導くかと思ふ、漣山人の輕くして精妙

なる、誰か春達の如しと云はざらむ、眉山人の得意の調格、也有か、許六か、紫女か清女か、澁きが如くにして澁きに流れず艶あるに似て艶にかたよらず、美人の眉か、遠山か、山か眉か眉か山か、おぼろげなるが中々ない、扨又九華君の筆の跡花は紅葉に似たりとは僻目なり、紅葉と花の相違あり、紅葉はひそみ花は膽太し、七重八重に咲き出る姿、勇まし面白し 心地よし、香夢棲綠君の筆おちついて長閑なり、濃かき香夢の心持は斯ふか、此筆にて優なる筋を書かれんには、讀者新綠の陰に立つて杜鵑を聞くの思ひすべし、それにまた痲溪君の詩才、さり立てゝ言ずもあらなん、眞美人をかひまみし人は知るなり梁山泊といふ評いつはらず、よくもかく揃ひしものを、此間鶯村君の寮にて、初めて諸君に見ることを得つ、夫故に世辭を言ふにはあらねど、かつて或人の言しと異なり、道樂に小說を書かるゝ人とは露ばかりも思ふ能はず、硯友社の人々は、滿身都之小說なり、我文學の未來に取りては、賴母しき又嬉しき人々のみ、其賴母しき人々を爪牙とし、又他の諸名家を二陣三陣に備へさせて、此度「新著百種」を出すは元來何人かと言に、是亦走利の人にあらず、我文學と忠實なる友人、鶯村吉岡君なり、斯文の未來賴母しからずや、嬉しさの餘り硯友社の諸君に向ひ又八萬の才子に向ひ、予が乞願ふことあり、願くば文壇の梁山泊といふ榮ある名を、狹く硯友社に用ひずして、廣くそれ〲祖國に用ひ、此日の出る國をして、二十世紀のアゼンスとならしめよ、さりながら是をせんとならば、小主義の相違新舊の別を問ふべきにあらず、相共に同心して、斯文の發達を圖るべし、和平ならぬが持前の政事にだに大同といふを唱ふものを、和平なる文學家が相和せぬは理に當らず、余は今隱れ退き、絕て小說に筆をとらねど、去とて取らざるを願ふにあらず、若し取ば我が拙き筆の文壇を汚さんかと憂ふるのみ、修行して幾分か上達せば、又大膽に文壇に登り諸君と共に馳驅せんと思ふ 但し相戰はんとには非ず、何ぞ。予が敵は陋劣不正の文學のみ、高妙の筆を總て（主義に雲泥の相違はあるも）予が終生の友なればなり、さりながら予はボルテヤ、ポープを好まず、たとひ相並び局に當るも、ポンペイ、シイザル、クラッサスの如き、又はチクタビユース、アントニイ、レピダスの如きを好まず、只嬉しきはデッケンス、サッカレーの交ゾーラ、ドーデの友誼、エパミノンダス、ペロピダスの愛國……是れにて予が文は團圓なり、讀んでこゝに至り諸君手を拍つや否や

また著者紅葉が自序として左の文を掲げぬ

二人比丘尼色懺悔なる、例の九華、香夢樓、思案、廝溪、漣、眉山等わが机を取まき、言葉より先大口開いて笑ひ　爾紅葉若氣の至りからまた〳〵好色の書を著すか、喝爾等絲の塗で絲光か竹光か判斷がなるか、そも色懺悔を題にして妙齡の比丘尼二人が山中の庵室に寄遇し、古を語り今を墓なみあふと脚色、一字一淚の大著作、卽ち是と薄汚き原稿さし出せば、手にだも觸れず腹をかゝへ。

さても企圖のしほらしさよ、心根のふびんさよ、茶番狂言の飯炊場が情なからうが悲しからうが、尺八に似た大吹竹、いかなる音をや出すらむ、爾性諧謔、爾口善罵、なぐり書の滑稽物、或は怪我の功名に見らるゝもの出來ずやも計られず、爾が悲哀小說・——盲人が染小袖の是非其器にあらずして之を云ふは間違へるなり、鴝鵒は濟を過ぎず貉は汶を渡つて死す、鳥の智にしかざる紅葉、毛物の愚に似たる惡太郎、勞して物笑ひの種となる共我等が知る處にあらず。

我知る處なり、爾等が知る處にあらず、向ふ横町の東坡きのふ我に教ていふ。貧家は淨く地を掃き、貧女は巧に頭を梳る隨分骨を折つてやつてはなさいと、これわが宗旨違ひの小說を試む所以なり、われ諧謔自ら喜べど淚なきにあらず、口より罵れど慰言なきに非ず、さては力を盡さば縱令横目のすなる事、などかわれのみにあらざらむ、英國のシエークスピヤといふは、鬼にも非ず神にも非ずして、一枝の筆に萬象の人情世態を寫して、泣くやうにも笑ふやうにも得書きしと聞く、かれは富にして下男に掃かしめ、富女にして髮結に梳らしむるものなれば、手細工の及ぶべきにあらねど、紅葉の果は淚なきか、須からくこの書發市の曉を待つて世の看官に問ふべし。淵を素通して、其底に蛟龍の棲むを見るか、林を一日して、其奧に栴檀のあるを知るか、麁忽ばしのたもふなと、咳二ツ三ツ　一同嘲としていふ、天水桶には蛟龍湧かず、芋畠に栴檀生へず、紅葉再び非望の著作は蛟龍を天水桶に覓めて底をぬき、栴檀を芋畠に探がして地を荒す、笑止〳〵と歸り行く。

紅葉其影遠くなるまで見送り、やがて二三尺とびすさつて衣紋かひつくろひ、大方の君子に向つて合掌再拜して曰く、拙劣の才學もとより變幻の人情を寫すに、萬分一さへ得可からざるを、俗す世間の蜆わが門前の蛤、今ほざいたる誇大の言は、人を見下

し罵詈に對する一面の肝癪、ほんの內々だけの高話・眞平御免下さるべし。もし万々に無まれ奉り、色懺悔を見てかなしがり涙を落すものは書肆の主人ばかりなどの惡評、かの六人の耳に入らば、むごらしや彼等が爲に罵殺せられむ。他人に向つてならば惡口雜言お心まかせ、たゞ六人へはコレひそかに〱

明治二十二年小草生日

戯作堂の南軒に

紅葉山人　戯誌

この緒言に續きて「作者曰く」として、左の斷り書あり

一此小說は涙を以て主眼とす

一時代を說かす場所を定めず日本小說には此類少なしいかなる味のものかと好心に試みたり難者あらばある時ある處にてある人の身の上譚と答ふべし

一文章は在來の雅俗折衷おかしからず言文一致このもしからずで色々氣を揉みぬいた末風か雛か——虎か猫かわれにも判斷のならぬかゝる一風異樣の文體を創造せりあまりお手柄な話にあらずといへどこれでも作者の苦勞はいかばかりそれを少しは汲分けて御評判をねがふ

一對話は淨瑠璃體に今時の俗話調を混じたるものなり倣ふるにこれを以て時代小說の談話體にせんものと作者の野心

一前述の通り世間在來の文とは下手なりにも趣を異にすれば讀人一見してつらしといふ作者は少しもつらからず我つらからざるを人々何故につらしといふや專ら句讀法をたよりに再讀の御面倒を請ふ

月　日　紅葉山人

已に前章に於て述べし通り、この色懺悔は紅葉が公然世に向つて已れが作を一冊物として、發賣せし第一篇にして從來

我樂多誌には幾多の作ありといへども、いへば内輪同志の我面白、萬々一評判豫期の通にあらずともさまでの苦痛は感ぜざるも、この一篇はとにかくに文界に向つて滿を引て放ちたる第一矢、其褒貶勝敗は自家が後來に及ぼす影響に甚大なれば、その衷心の苦は察するに餘あり、且つ當時は、予は已に文學を以て立身榮達の礎となさんと決せし處女作にして、不結果不評判に終らば、再び筆を折つて他に轉ずるの苦は忍ぶ可からず、加之に美妙子は已に同窓の硯友社を捨てて、都の花に「いらつめ」に國民の友に、言文一致の大旗幟を立てゝ、才筆奇想の盛名隆々たる、已に篁村南翠採菊學海の諸先輩も、爲めに幾分の光輝を蝕せられたる當時、其對美妙と對世間の處女作として、然も文體は流行の言文一致にあらざる創造の雅俗折中體、のるか反るか、行くか行かぬか、南無八幡と投出したる此一卷、外目には健氣なれども内心の戰々恐々たる、予が一代の心配此時に越たるはあらざるべし。されば後年紅葉が自分に話したるにも、實は山が當つたのさ、評判聞くまではまつたく寢られない樣な心持がしたのさと、察するに難からずや。また硯友社の連中にても誰一人としてこの作評判よかれかし、紅葉子があれまでの苦心、何卒世間でも十が六までは受けてくれかしと祈らぬはなくこの成功を祈る一片の友義は強ち美妙が硯友社を捨てたる恨みにてもなく、紅葉が常に自分等に溫き爲めにてもなく、ましてや美妙が盛名を嫉んで之を蹴落さんなぞの卑劣心は猶さらなく、只其苦心の内幕を知り抜きたる爲めに、唯同情の思に堪えずして誠心誠意其好評を望みたるなり、然して書一度市に出るに及んで、幸ひなる哉

世上の好評嘖々として新聞に雜誌に、稱贊の聲は美妙に讓らず、一躍文壇に盛名を得たれば、社中の喜悅はいふまでもなく、紅葉自身が悅びは實に空前絶後なりし、其後に於て幾多の好著ありて、世間の好評を博せしとはいへども、確に其悅しさは其時に越たるはあらざるべし。然して此後この文體にて、紅葉には伽羅枕風流娘の作あり、露伴子が風流佛も此體なりしも、美妙自身が言文一致は其行文奇怪に過ぎて、一時の盛名大に降り、遂には全く稱贊の聲を絶つに至りしも是より四五年を經て、各自言文一致體を試みたるときは、創立者美妙が轍に懲りて、平易流暢を主とし勉めて

歐文式の臭味を避けたるを以て、再度此文の勃興を來し、研磨年を重ねて遂に一種の美文となるに至れり、この二十號には豫て廣告せし合作小說を揭ぐ、第一回は紅葉たるべきを都合ありて漣に讓り、紅葉は殿する事となれり、漣が序文左の如し

後の雁が先さはこの事、當號より揭載する合作小說の先陣、紅葉都合ありさ言つてわれに推付けた、初めは易からふさ思つて受合つた、然しつら〳〵、おもん見るに、吾今あるたけの智慧を絞つて、新奇絕妙の種を蒔ても、どうせ後から來る連中に踏み返されてしまうもの、折角の枳殼が橘に化るも殘念、むだ骨折つて何の益があらう。それよりもこゝにひさつの難題をかつぎ出して、野さも山さもなり放題、苦しくなつたら株を讓つて、他の連中の弱るのをひさつ笑つてやりたいものぢやさ、こゝに工夫を凝らして見たが、人を落せばわれも其穴、人よりまづわれ苦しめられて……その苦しまぎれに書出したのが、柄にもない大時代の怪談沙汰、恐くなるかならないか、其處は後連の筆次第、中途でドロンとなつたつて、己等のせいぢあないさホゝ敬まつて曰す。

漣山人

と前置して書出したは橋姬の怪談、在原の輔平といふ武士が宇治橋で妖婦に逢つて、空中へ攫去られて、そして血だらけの腕と、肋骨が五六本橋の上へ落こちたといふ後漣泣せな趣向、これぢあ手がつけられないと愚痴をこぼしたのが次番の眉山、この號に思案が修善寺紀行を揭ぐ。

文庫二十二號は明治二十二年六月十七日の發兌にして、此號に初めて廣津柳浪が小說柳櫻を揭ぐ、江見水蔭も亦旅畫師を出す、柳浪子が入社後第一に揭げたるはこの柳櫻なれど、同子は是より以前に大和錦に筆を取りたれば、小說は是が處女作にはあらず。水蔭が旅畫師は恐らく其の處女作か、是より以前に脫稿せしものあるやも知れざるも、公に人に示したるはなき樣に思はる。

此號より雜誌の體裁を改めて一頁上下二欄とし、紙數を增加し、全部四十六頁の大冊となれり、此中思案の熱海紀行可

愛子(あいこ)完結となる、今其一部を拔きて予が當時の文例とす。

……こゝより七八町離れた田の中にある蛭の小島の舊跡を見ました、寛政二年に建た一の石碑があります、諸君も御存じの通り蛭が小島と申せば、頼朝の流されたところ、それが今は田畠、雀海中に入つて蛤となり、新造束髮に結つて楠妻となるのも無理はありません、半里ばかりの處で淺田氏に別れ、獨りてく／＼歩行くうち日も漸く暮れかゝつて來ましたから、歸り車に飛乘つて三島に着た時分は、雨さへぽち／＼降て來ました、外史は傘を持ませんから、ナアーニ少し位濡れるのも亦一興かと負惜しみ言ながら、車を降りて行く路に見殘した官幣大社へ飛込んで、山門の下で、明治の五右衛門といふ格で雨止みをした時分は、日もばつたり暮れてしまひ、池に跳る緋鯉、樹に鳴く梟、社の九華なら早速新體詩でも唸り出しそうなところ、暫くたつても雨が止みませんから社内を出て、宿の千歳屋に一泊しました

思案子が言文一致は當時皆此風にて、同子に限らず當時の言文一致は、總て人に向つてお話し申上る風に、「ありました」「ございません」の語尾を付せしものなり。

また此號に思案が催主となりて、風流文章會といへる豫告を爲す、第一回は課題を美人の形容として、文字は五百字以下に限る、又硯友社の社告として、我樂多文庫二號三號十號、御所持のお方は御郵送被成下度云々の廣告あり、當時に於ては原本散逸して社内の備付すら欠本せし爲めなり。

第二十三號は七月四日の發行、前號よりの續篇の外、新加盟者露作君が一刹那なる短篇を掲ぐ、文庫紙上に予が文章を見るは本篇等初めてなり、記して當時予の文體を示す。

零落の袖にあまる涙

芝居淨瑠璃で苦海に沈む者を孝女にしなす故、是に見なれ聞なれたる無心の少女等、左程の恥と思はず身を賣も多からんなれ共まことに傾城となつて孝行なれば、殺生禁斷のお濠に網を入れて、親に濃汁をすゝめるも罪とはならぬ筈なり　それ〳〵錦衣さん

と郎名よばれ、直に返事の出ざりし程はしほらしく哀れなる處あれど田舎客にしのぎ二三本折られてからは、根性間太くなりたまひて、忍び通はし玉ふ奏任官の某様を、髯黒の大將と言へばまだしも、舶來の鍾馗なぞと勿體なくも蔭言つかまつり、いつへりさした呉服屋の息子殿を、おひらの長芋といへばまた愛嬌もあらふ、雨上りの蚯蚓なぞと冥利も恐ろしき悪口申し、品定めせらるゝ身でありながら、三人よれば姦ましき客の評判、あの男は睫毛が長ふて、その人は鬚が氣に喰はぬなんぞと、伊勢の後家が十軒店ひやかす様な贅澤いふも、土地のせいと憎むものなければ自然自由の足るまゝに、氣風だん／＼變つて男の如くなりゆき、弱を扶け強に屈せぬ意地増長して、初めは左程に思はざりし有様に、ちよいさした意氣張りより嘘から出た誠を遂し、惚れた證據などうかこかいなさぢれて筆をかむやうになれば、御文も石版摺のきまり文句にあらで、當世言文一致、寫し得て人情の微細云にあり難きことなれば、可愛がられるも運のつき、可愛がるも運のつき……

當時明らかに西鶴を耽讀せられたる筆を見るべし、是に續きて新著百種の風流佛、文名一時に現はれたる決して偶然にあらざるを知るべし。

この二十三號の附錄に、乙村庵主人がこぼれ松葉なる小説を掲ぐ、言文一致に書下したる、是子が文庫紙上に於る處女作なり。

二十四號は同年七月四日發行、眉山の枯尾花、紅葉の江戸の水、漣の紀行もの迂記、思案が新著百種の作處女心に對する紅葉の評、紅葉の風雅娘に對する思案の評等あり。

江戸の水は紅葉が本町庵の作を模せしものにて、紅子戲語以來の滑稽本なり、三馬が家の藝なればと江戸の水と題す、

いづれも樣御存じ江戸の水は本町庵三馬が家傳の賣藥、外には類と眞似のない代物、それと知りて不良見にもかうもあらうかさの事實にならひしが、似ても似つかぬまつかいな似せ物、誠や式亭のお家物、一流江戸前の筆勢、古今獨步の文中虎、及びもねへ事ダス

との斷り書あり、其一節を掲ぐ

……折から鶯の聲道端の籔に聞ゆる

(いつも初音の心地こそすれ)

(ホウホケキヨは野人の口吻、厭ふべしだ)

(野の花の色ある類ひ……恕すべしだ……そこで……)

と暫らく考へ

(エーツ可レ憐野花色……なんと當座にしちあ吟しられぬ、そこにひとつ對を所望だ)

(所望と言はれるとどうか所作でもやるやうだ、野花の色は大に語呂がよくない)

(これも唐音で讀むと流暢に聞へる)

(詩を和訓で讀むはそも／＼、誤てりかはツヽヽ……)

(時に、今の對句は……)

(かうだ、偏に愛す……)

(今の時候ぢあ袷を愛しそうなものだが)

(足下でもれへチト靜にさつし、偏愛籔鶯聲)

(早鶯)

(籔鶯と、やぶ鶯と書く)

やぶ鶯で籔鶯はいゝ、いはゆる斬新なるものだ)

(野といふ字に籔を對とした處が手際さ)

（若し厭さしたら何と對させろ）

（されば蚊といふもよし、儂が三疋たぞもよからう）

（もし蚊が出たら何といふ）

（ぶゥんと言ひやす）

（置きやあがれ）兩人（はッハ……）

また漣が紀行は、予が故郷近江へ歸りし時の日記にして、其緒言に、家を出るとき紅葉兒を訪ふて、われ旅路に出でなばその紀行を送らんと約せし言の替がたく、可愛子といふよき題は、性悪の思案兒に先を越されしにぞ、せん方なく「もの迂記」と洒落て、夜半行燈のかげ暗きところ、藪蚊を防ぐ蚊帳の中に、禿筆をひねくること左の如し」然してこの紀行思案のものとは行方違ひて、何なぞ挿みて眞面目なものなり。其一節

箱根も過ぎて沼津

いざこゝで素顏拜まん夏の富士

と思ひしに、あら心憎や情知らずの雲めが邪魔立て、折角のお富士どのも只可愛らしき額ぎわのみ拜みしに恨みなり、田子の浦打出ても、白妙の高嶺は跳められず三保の松原あれかと見やるに、天人らしき影もなし。薩陀二つのトンネルは過ぎて、やがて天龍大井の鐵橋、箱根につゞいての贈りぶしは此ぞかし。

また此號中、紅葉思案が新著百種、乙女心風雅娘の相互許左の如し

思案（前略）あの序文を一見して本編の主人公お千代に替つて名句ありサ。なんだ〳〵

途からか知られどあれぢや分らないなんと名句でげしやう、恐れ入つたものですな

本文――上下とも見出しは明治の八文字屋、まづ類なしでござるてや、俳諧娘で名はお千代、小姓の吉三に……（オイそりあなんだい）八十七丁の（容色は吉野櫻これは〳〵、おいでなすつたネ、かうだらうとは覺悟の前だがこれは〳〵（帶ならやの字の

歎ひしか〳〵）甘いかな〳〵（風狂亂の姥櫻）（初雁や並べて聞くは惜しいもの）（武夫の紅葉に耻ぢず）さてうるさいかな〳〵（語近人耳義憤神明）ウツ笑はせやがらア、餘程讀者を憤らしめるわけさ、味な手爾葉をつかへさ山類へ水邊の挨拶）まるで謎でもかけて居るやう、それも其筈戀の闇（中略）九十七丁の結末の澁さ、評者も魂消て直に嵜造（句造にあらず）をして上包みに書いたネ、ハテなんと、鰊の粕漬一樽、江戸飯田町紅葉殿行、九十七丁の冒頭に偕老丸だの絹布舟なんで、まるで其蹟が言文一致を書きやアしめいし、澁そうで甘い。

これに對する紅葉が乙女心の評左の如し

（前略）第六回は善惡ともに考べきものです、田舍近で惡の手込めに逢んとするなぞ中本作者がしやぶり拔たる上骨湯にして今は芥溜に捨てゝあれど犬も喰はぬ趣向、それをどこまで御空腹か、あゝ人にして犬に如ざるべけんや

第七回　そんなら兄さん……「妹」……とまごまごして居るうちに此あとは書すと、御推もじなぞとひどく邪慳な事を言つて獨で目出度がるとは大に斬新なり。

かへす〳〵も、乙女心はつまらないものなり、硯友社々幹頓智後見人の爵位ある思案外史とも言つべき御仁が、兎毫を染るほどの作意にあらず、われをして此奥書をせしめば、越前屋長次郎十六歳作とすべし。極くつまらない中本の「なりけり」を「です」と改め、？や――なぞを多分に加味して、煎じ樣常の如しにて、巧能なければとて奇應丸をへたくたいれて、當世風に見せかけたるのみ、この卷中の「……」を集めなば、一町内の節分はやす〳〵すべし、われ色懺悔にて大に悟りたれば、スープに懲りてサラツドを吹くなり。

文庫二十五號は二十二年八月の發兌、此卷に思案妹背鳥なる小說を掲ぐ、また露伴子が刹那なる小品あり、自分も亦かばん物語なる滑稽物を出す。

この號に社幹尾崎紅葉石橋思案兩人の名にて「硯友社を解散す」云々の廣告あり、この原因たる從來この文庫の發行は

書店吉岡に托して爲さしめたるも、數年前よりの印刷料の負債、塵積んで山を爲し、兩社幹が迷惑一ト方ならず、且は此儘硯友社にて發賣し居たりとて、到底其償却の途もなければ、文稿を一括して吉岡書店に渡す方遥に利益なれば、斯く文庫は硯友社に緣なきものゝ證明として、玆に解散を廣告せしなり。

二十六號は以前よりの續篇の外に、北三晤が秋風扇出で、紅葉また文盲手引草なる戯筆を試む、是れ當時新派小說中に用ゆるパンクチユエーション(句讀法)を、例の筆法にて戯解せしものなり。其例左のごとし

第三章　?

?　英吉利にて(クエツシヨン、マーク)といひ、疑問標と譯す、尋問のしるしあり、此れに付いて種々の異說あり、未說定かならず、其一二を擧れば

(a)?は耳の形なり、耳は音聲を聞取る道具なれば、若し聞へぬものは木耳同然なり、さて耳の形を何故疑問標にしたかといふに、何やら言へど聞取れぬから、今度は「?」の樣に引立耳をして、語らば聞かむ風情を示すなり。此時相手が惡い奴だと(二度言ふと風を引くさと)などゝいふ。

(b)一說に「?」は耳の形にあらず、耳掻きの形なり、耳垢があまり溜つて聞へないからよくほじくつて、さア今度はたしかに聞へるから、もウ一度といふ心持を圖に彰はしたるなり――おヤこの銀は性が惡いよ、ほらこんなに曲つちまつてサといふ姿

(c)また一說に「?」は蕨にも似たり、紫蕨にも似たり、そこで蕨?將又紫蕨?と疑問の記標これよりぞ初まりける「古篆圖會」によれば「?」は古篆の雲の字なり、雲といふ奴は、昔しから不思議なものとせり「俗諺考」に雲を掴むとは、見當のつかぬをいふ「小學唱歌集」に霞か雲かはた雪か、是花を疑ふ心なり、何に致せ怪しき雲の振舞ぢやなア、因つて奇怪のものとす、疑問に是を用ゐるも(また雲ぢアないか)といふ洒落を象に現して用ゆ、是愚傳なり、可秘可秘「曲緣江戸櫻」に「助六さんその鉢卷はヱ?

「この鉢卷の御不審?

とせりふにありて浄瑠璃(この鉢巻は過しころ)さよろしく振りあり……あの狂言ははでゞいゝネ(下略)

の如し、また豫て思案が募集せし「美人の形容」引續きて本號に掲載す

二十七號は明治二十二年十月十五日發行にして、露伴子また刹那生死を出す、漁山が劇本是にて完結す、此號に新らしきは紅葉が戀の山賤、思案が房州紀行うはの空なり。

この號には吉岡書店より、露伴子が風流佛、近き中に出版すべしとの廣告あり、紅葉が色懺悔と同じく、予が單騎にして名乘り上げし第一篇にして、永く文壇を照らせし光明の初一閃なり

文庫は、去る明治十八年二月を以て、我樂多文庫の名を以て創めて同好の間に頒ちし以來、叙し來りたる如き幾多の變遷を經て冊を重ぬること四十二冊、年を閲すること滿四ケ年と七ケ月、遂に此號を以て廢刊するに至りぬ、顧て其過去を考るに、紅葉思案美妙虚心眉山漁山漣廉溪水蔭桂丹柳浪及び自分の如き最初はほんの道樂半分筆を持たのが理由もなく面白くて堪らぬ處より遂に雜誌となつて現はれ朝夕の往來もこの事ばかり時には珍本奇籍が手に入つたとか、妙想奇文が出來たとか一文出來れば讀んで聞かせ一章成れば批評論難し、其間は口上茶番とか三題話とか文墨の緣遂に離れ難き交となつて果は印刷に付し發賣も試み世間に名も知られ幾分の收得も出來、果ては一方の天下を乘取つた氣になつて初めて是を己が天職にしてもといふ觀念も起り遂に紅葉思案を初めとして漣眉山水蔭の諸氏は純然たる小說家文學者となりて個々自營の途に進み虚心廉溪自分の如きは筆は捨てざるも他に本業に向つて進む時機となり、自然は文庫にのみ力を竭すことも能はざる事情より、遂に廢刊とはなりたるなり。斯く雜誌は廢刊したるも交情結んで解けず其後自分は神戸に走り、虚心は歐洲に航したるも常に音信を絶せず其後紅葉柳浪思案の發起にて再度硯友社の機關雜誌として小文學及江戸紫、千紫萬紅の小誌を發行せるも、是亦號を重ぬること僅々にして絶版し、其後此種の計畫は口にするものなきに至りぬ、然れども硯友社なる一團の社交は猶存せり。

須原の花漬

——露伴氏の風流佛——

山　口　　剛

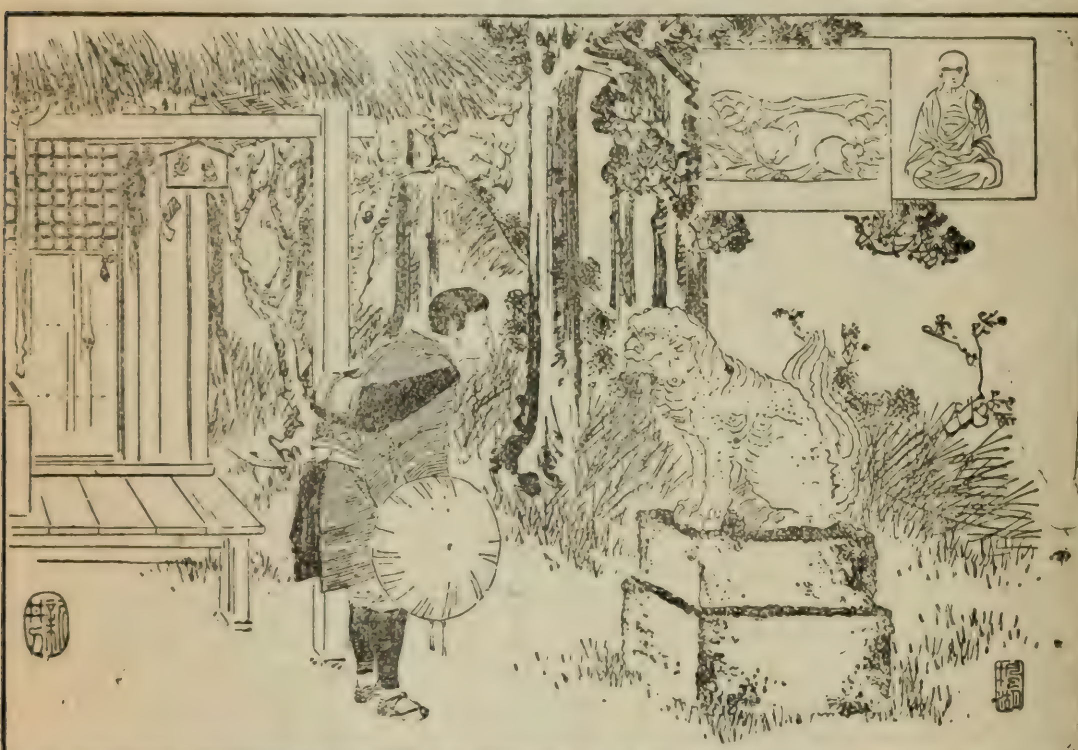
明治二十二年の一月、露伴氏は雪の木曾路に遊んだ。「醉興記」はその紀行の文である。十日須原の驛に宿れるくだりにいふ。

「花漬とて種々の花を小さく平たき箱の中に排列し、玄冬素雪の今猶枝頭に在つて開けるが如く研芳の美を保たしめたるを賣りに來る女あり。さても風流なる商賣かなと賞して二箱三箱購ひ求めぬ。」

この花漬が緣をなして氏に「風流佛」の作がある。おなじ年の九月の刊行である。「須原の驛の花漬といふのは名產で中々風情のあるものですから、あれへ花賣女をつかつて見たので、餘は假想に過ぎません。つまり旅行をしてそこらで見聞し得た材料を殆ど旅行記を書く樣に彼作に傾注したのですね。」

斯う作者は「新著月刊」の記者の問に答へて、その由來を語つた。卽ち「風流佛」の全體は空に憑つて想を構へたものであるが、材料の一々は基くところがある譯である。所謂小說を以て虛の實となすのがこれであらう。小說の虛の實は、旅行記の實の虛に對する。しかいへる者は露伴氏である。言は「客舍雜筆」に見えて居る。

小說「風流佛」はまさに旅行記「醉興記」と對照して讀むべきであらう。「風流佛」の珠運は藁沓の爪先に唐辛子三四本足を燒ぬ爲押し入れて、吹雪の中を行かうとする。「醉興記」の露伴は奈良井の宿屋の老婆から、つまごのさきに唐辛子のさきを入れよと敎へられた。その對比は事の小いものである。珠運は美しきおたつを見た。花漬を餘所にして花賣る女をうつゝなく覗き込む。さても露伴は洗馬の宿に額のびやかに鼻筋通り菩薩眉、菩薩眼の少女を見た。すらりとしたうしろ姿黑地に赤い翻れ梅の染められたメリ



「風流佛」挿畫　松本楓湖筆

ンスの帶まで貫しと見た。そのうしろ姿を見送りて少時爐邊に茫然として居る狀を「醉興記」に叙していふ。

「草鞋のさきを火に焦して足の指の熱くなりしに驚きて見れば剝げたる膳の早や我が側に据ゑられたるに、又驚きて箸を取れば、あれまだ盛つてはござりませぬといふ。」

　この露伴とかの珠運はおのづから影と形との關係にある。虛中の實と見るべきであらう。しかし、「風流佛」中の實は、たゞ木曾路に見聞したものにとゞまる事であらうか。わたしは作者の

所謂假想のうち、何かしら一味の實の他に潜在して居りはせぬかをおもつた。

往日蝸牛庵裏の談、偶ゝこの事に及んだ。主人はいふ、あれは或人の事を書いたのだが、決してあの通りの事があつたのではない。その人は故人であるが、名をいふ事は避けると。斯うして主人は口を噤む。客も強いて問を重ねぬ。何となれば「風流佛」は人我の別なく事實を事實としてさながらに寫して憚らざる文界現象の起る二十年前の作である。當時は事を假りて情をうつすべく情に基いて事を構へるを小說傳奇の常とした。事實を事實とのみうつすものは寧趣向なき者として斥けた。まして人の身の上をさながらに叙する如きは沒道義ゆるし難きものとした。今にしてなほ主人が作中人物のモデルの名をいふを憚るを、わたしは意味深しときいた。

事實と作物の關係を如實に知る事が出來ずとも、作者の筆端の私はこれを推するに難くない。たとへばおたつの名もそれである。「皮籠摺或は七部集其他に所々散見するたつといへる者の句あり。予が曾つて作りし文中に用ゐし女の名は是より思ひ寄せたるなり。」「句の面白きよりは作句者を風流溫籍の好人物ならむと想像して面白がるなり。」かくいへる「折々草」の一節は言裏の消息を明にする。

「一口劍」のおらんにモデルのあつた事は「新著月刊」の談によつて知つた。今またわたしは作者から正藏のモデルが講談の直助である事をきゝ知つた。直助は後の名刀工越前守助弘である。はじめ赤穂の義士小野寺十内の奴であつたが舊主のために憤を發して、短日月の間によく精鋭を鍛冶する樣になつて新刀正宗の名を博し得たのである。作者はこれによつて、賤夫また志を立てれば尋常が意圖せざる偉を成す事を語らんと欲した。故に「一口劍」の上卷中卷の正藏をこよなき痴漢としたのは、下の卷の正藏に對照せしむるためである。動ゝすれば、前の正藏と後の正藏との間に性格の不備の難あるも、作者は深く意とせぬ事であらう。また書きゆくほどに、作者は氣づかぬ事であつたらう。何となれ

ば、正藏が槌を手にとり持つて專念する時、露伴氏の靈はいつか正藏の體に宿つてしまつたからである。

重兵衛が五重塔の造營にいそしむ時もさうである。「寢耳鐵砲」の道也にしても、鐵砲の製作にいそしむ時もさうである。この點世にすでに定論あり。またくりかへしいふ必要はなからう。それをまたぞろいひ出したのは、珠運が風流佛を彫りなすその姿に、作者の面影を見るといはうためである。

「風流佛」は發端から團圓まで章を分つ事十二。それに各題名を附して居る。如是我聞、如是相、如是體、如是性、如是因、如是作、如是緣、如是報、如是力、如是果、如是本末究竟等、及び諸法實相これである。據るところは法華經方便品である。十如是といふもの、佛家の釋によれば極めて甚深の理がある、天台の一念三千の妙觀法華三昧の妙行もこれより出づる。しかし、「風流佛」はその理のために事を叙するのでなかつた。事を說きゆくついでに聊通ふ筋があるをたよりに十の如是を配列して各章の題名におほせたのである。配列は必ずしも方便品の順序でない。作者の意のどういふ事であるかは、この一事を以てしも瞭たるものがあらう。この作者屢この種の洒落戲をなす。たとへば「露團々」の各章の題に俳句をおくやうなものである。その俳句を殊に芭蕉のそれに限り、さらに諸國に散在する芭蕉碑上のそれに限る。これは漫に芭蕉の句をとるを意味なしとおもつたからである。しかし、その有意味なるものは別に深く寄與する理がある譯でなかつた。

「風流佛」中また他例がある、小わけの題の「弱に施すに能以無畏」の能以無畏は普門品の語「我を忘れて而生其心」の而生其心は金剛經中の語、しかも一々この經中の意をことわるのでない。たゞ假りていふところあるに過ぎなかつた。

「露團々」の世界はアメリカである。この例言に、文章は拙きはさておき趣向は中々リツトン、サツカレイ何のそのとは、大きな噓にて實は種子のある手品なり。慧眼の讀者は早くも觀破されつらんといふ。自ら慧眼たらん者はその種を

物色して、蟹字の書を漁つたであらう。また卷中の一人のブンセイムが實は紀國屋文左衛門である事を卷中の一人を文世武としたるは彼の千山子の豁達を慕ひて、其の名の響をとりて負はせぬといふ例書の一つから氣づいた者は、頻りに元祿古板をくりかへしたであらう。この時作者は心私に長い舌を出して居たらう。何となれば、作の輪廓は支那の小說であるから。蝸牛庵會談の際、氏はふと物忘れして、書名をわたしに告ぐるに至らなかつた。たゞ唐宋のものならず、もつと新しいものとのみいはれた。おもふに、それは「玉嬌梨」でなからうか。その書は明代の作であり、また才子佳人の姻緣談の間に、替玉で耦を得ようとした狡猾漢の失策を趣向としたのであるから。

巨匠善く人を欺く。わたしは「露團々」の作意を知りながら、なほ「風流佛」の團圓に欺れた。團圓の叙述は戀愛佛の種々相である。

わたしは蝸牛庵主に普門品によつて作爲せりや、せずやと問うた。主人は笑うて答へた。然り、必ずしも然らずと。「風流佛」の虛と實の關係は大方斯うであらう。これ亦當時の作風であつたらう。わたしは不知不識の間に、いつか方便品を眞向にうけて、つひに普門品に惹きつけられたのである。作者の實をおもうて虛を解さなかつたのである。作者の虛實のねらひは、なほ俳諧味である事を忘れたのである。

「風流佛」の題意は何であらうか。これよりさき氏に「風流禪天魔」の作がある。氏の處女作である。風流禪なるものは何であるか。しばらく俳諧を以て釋くならば重五の「あだ人と樽を棺に飲乾さん」を前句とした杜國の附句「けしの一重に名をこぼす禪」に見ゆるが如きものであらう。風流佛また同じ心して解すべきであらう。かゝる意味で風流といへるものに風流今兼好、風流今平家、風流文評判、風流曲三味線の類がある。皆一樣に西鶴なんどの好色本の趣向をさながらに踏襲した元祿の浮世草紙、いはゞ好色曲三味線、好色今平家など呼ぶべきを、わざと典雅めかしたものである。

現に風流文評判の如きは好色文傳授の別名をも有して居る。「風流佛」刊行の當時またこの種のものがある。「風流京人形」「風流狂言記」の如きがそれである。元祿物復活の折から風流の名目の蘇れるのも不思議はないが、「風流佛」の風流は必ずしもそれのみではない。心を同じうして、情を異にする。直に漢土の色調を帶ぶ。これがおのづから紅葉等の作と相違する點である。

「風流佛」の着想は女人像の製作にある。否その身に纏ふ花衣を奪ひとつて裸形佛を現ずるにある。世に裸形佛なるものは往々に存する。それは決して奇異のものでない。けれど當時にあつては裸形は、新しい興味の一つであつた。美妙の「胡蝶」紅葉の「むき玉子」もその風潮のもとに出來た。「風流佛」もまた同じ時の勢に負ふものがあつたらう。作者は「西洋にては語なき詩の色あるを繪といひ、景なき繪の魂凝りしを彫像と云ふ程尊む技をなす吾」などゝラオコーンまでもひき合ひに出して珠運の述懷をものした。たゞ美妙が漫に裸形を點綴したのと、これのさうなくてはならぬ裸形との間には大方ならぬ相違がある。「露團々」の一種の歐化熱は漸く冷めて來つて、別樣の方向に傾かうとする。いはゞこれ珠運がわが好の心に滿足さすべく、且は石膏細工の鼻高き唐人めに下目で見られし欝憤の幾分を晴すべしと佛像彫刻に精進したのとおなじ事であらう。また西鶴其磧を學ぶこの筆致と美妙の新しぶりの文辭とはもとより大なる距離を有する。珠運がおたつと別れてゆく折の思案の狀を叙した後、作者は輕い筆もて揶揄していふ、「箒木は山の中にも胸の中にも有無分明に定まらず。こゝ言文一致家に賴みたし。」

裸形佛、名は佛といふものゝ、實は愛慾の化身なるもあり、或は愛慾崇拜の對象たるもある。珠運が女身の像を刻みて未安心を得ず、裸形女佛を成してなほ意に足らぬものあるは、おのが作り上げた佛體を人間にかへさうの焦慮があるためである。しかも珠運はこれを意識せずして精進の鑿を手にする。かくして作者は愛慾を愛慾として描き出さずし

て、佛像を假りて裏に寓するのは、蓋　虛中また虛實の戲をなすものである。また俳諧の手段である。「風流佛」の妙は珠運が裸形佛の前になき聲をきゝ、唆き佛の手に抱かるゝくだりを頂點とする。玄秘の間、よく紅葉の「むき玉子」の艶冶を藏する「むき玉子」は現實に終始し、これは有無明幽の界に歸着せしめる。作者は筆を玄の又玄摩訶不思議の姻緣に收めて、實事の成行をば讀者の想像にまかせた。作者の意は實にその漂渺を重しとする。その以前、宙外氏がなせる評語の如きは作意に背くものであらう。評は「風雲集」に收められてある。

「露伴は人心の玄妙を發揮したる點に於ては今の作家中冠たらんとすと雖も、氏も亦科學との衝突を平然として看過する能はざるの痕あり。これ其の玄妙を寫して性々平凡に墮落せしめたる所以なり。例へば珠運をば妄想の影法師に馬鹿にされ、有もせぬ聲まできゝし愚さと後悔せしめ、尙彫像が動いたのやら、女が來たのやら、問ふは拙く語らば遲し、玄の又玄、摩訶不思議といひて、その次に珠運は自が歸依佛の來迎に辱なくも救ひとられてと綴りて珠運が客中に聲を聞きし時にお辰は戶外に潛み居りしやうにほのめかしたれば、珠運が聞きしは壁越しの實聲たり。世にも不思議なしといふ理を說明せんとせる痕歷々たり。かゝる用意はなくて却つて興趣深かるべきに。」

それならば寧こゝは珠運死せりと讀む方が興趣深い事でなからうか。生か死か、作者はわざと斷る事がなかつた。

露伴氏は語つていふ。わたしの筆はあそこで終つた。當時まだ元曲何々を讀まなかつたが、後之を見て、畫ける人の出現の描寫の妙が遙にわが筆を凌いで居る事に驚歎したと。わたしの耳はうとい。補聽器によつてわづかに聞えざるをきく。その何々なるものを膝にする事が出來なかつた。また聽く。また聞えず。聞えないではない。わたしの元曲を讀む事多からざる罪は、そのおぼろげなる音を明なる辭に譯し得ないのである。窮餘、それはどう書くかと問ふ。指頭の動きを追うてそれと知らうの策である。けれど主人は指を動かさないで、それこれといはれる。わたしはあまりのうるさ

さを憚つてまた問ふ事なかつた。

家に歸つて後、話の筋をもとにかへして考へると、もしやと思ふものがないでもなかつた。しかし、元曲ならぬが佗しい。曲は明代のもの、湯臨川の「牡丹亭還魂記」である。第二十八幽媾の齣、畫中人の出現の條。生は畫を展じて畫中の人を玩ぶ事しきり。風吹いて畫を動かし、また燈を吹く。生うたうていはく、

好一陣冷風襲人也、險些兒誤丹青、風影落燈花、罷了、則索睡掩紗窓去夢他。」

かくして睡る。魂旦やがて上る。生の睡中詩を念ずるを聴いて悲しみに打るゝの介をする。さてうたふ、

他原來睡屛中作念猛嗟牙、省諠嘩、我待敲彈翠竹窓櫳下。

生また驚き醒めて姐々をよぶの介をする。旦また悲しんでうたふ。待、展香魂去近他。生その聲をきいて獨語する。呀、

戸外敲竹之聲、是風是人。

旦いふ。有人。斯うして明幽の二人は相會した。いかに「風流佛」の末章と相似たる。優劣は遽に斷じ難い。それにしても、元曲の何々なるは何であらうか。わたしは書を贈つて教を乞ふべきである事を承知しながら未果さゞる怠慢のわたしをみづから憎む。

追記。この蕪文を草して後、漫然として「讕言」を繙く、「粲花主人の畫中人」の目を見るや、つひ呀といはざるを得なかつた。これは「還魂記」なんどより、いちはやく想ひ起すべき筋である。露伴氏はその文に於て「畫中人」の梗概を叙して詳細を極める。その一節にいふ。「第九齣は畫からいよいよ美人のぬけ出すところだ。むかし此場合にやゝ肖た光景を自分が作した事があつたが、其當時此の畫中人を讀んで居つたならば、今少し書き方をふんごんで書いたかも知れぬ。」これはもとより元曲でない。一體わたしは何を聽いたのであらう。聾者無用の辯、まづわたしから之を嗤ひ棄てる。

眉山緑雨透谷

――春寒き夜に――

馬場孤蝶

△

本郷春木町の今の柳島線の電車路へ沿うてゐるあたりが焼けたのは、明治二十三年頃かと思ふのだが、川上眉山君の家もあのあたりにあつて、類焼の厄に逢つたものと見え、その頃の硯友社の關係の雑誌か何かに、巖谷小波氏――その頃は漣山人――の眉山君に與へた火事見舞ひの句の

『焼けあとによいもの出でよ山根草』

といふのが載つてゐたことを記憶する。

吾々の間で一番早く眉山君を知つたのは平田禿木君であるのだが、眉山君のおとつさんは、春木町の家主だか、差配だかであつたといふことを禿木君から聞いたやうに思ふ。

眉山君は若い時分に生母に離れてしまつたらしく、おとつさんには若い同棲者があつて、それに兄弟が幾人かできてゐたやうに聞いてゐる。

二十八年頃、僕の家へ度々眉山君がたずねて來て呉れた時分、何かの話の序に、

「僕の家の人は、土佐の生れだつたとも云ふんだがね ………それに實は僕は何處で生れたのかはつきりしないんでね……」

といふやうなことを云つたのを記憶する『その家の人』といふやうに云つたのを、僕は川上君のおつかさんのことだらうかと思つた。他人の傷みに觸れるべきでないと思つたので、そのおつかさんとは死別だか、生別だか、聞きもしなかつた。

川上君は時々高利貸しに苦しめられてゐるやうな話をしたのだが、何うもそれはおとつさんの爲めに判を突いたがためではなかつたらうかといふ氣がする。

そのおとつさんの亡くなつたのは、二十九年の五月頃ではなかつたかと思ふ。一葉女史の日記『みづの上』の二十九年六月十日のところに、左の如く書いてある。

「門に人のあし音聞ゑ初めぬ、お家にかといふ聲はさながら其人なるに、あな川上ぬしにこそとて座をたてば、平田ぬしも同じく席をはなれて迎ふ………かれこれ共に悔みなどいふに、定まりたるにこそは、さても其後のせはしさよ、淋しなどいふ事かけてもなく、日々夜々にさまざまの相談事などいとうるさう、負債のぬしよりせめはたり來るなども多く、やる方なき暇なさなりといひて、さのみは憂はしげもなく打笑ふ………」

僕はその時分、江州の彦根にゐたのだが、眉山君のところへ悔み狀を出すと、その返事に、あとの始末に忙殺されて、淚を滾ぼすひまもないといふやうな手紙を貰らつたことを覺えてゐる。

「眉山君のおとつさんの後添ひの人は、年も眉山君と幾らもちがはない位で、眉山君と一緒になつてもいゝぐらゐな氣でゐるらしいんで川上君も困まつてゐるだらう」

眉山君と親しい或る人はそんなことを云つてゐた。

その後、僕が眉山君に逢つた時——二十九年の八月頃かと思うのだが——眉山君は次のやうに云つてゐた。

「子どもは僕の方へ引き取つてしまはなければ、教育上のことなど到底向ふではだめなんだから、その話をつけようとしてゐるんだがね、向ふぢやア子どもを手放なせば、僕から當人の生活の資が得られなくなるとでも思ふのか何うしても子どもをこつちへ渡すことを承知しないので、困まつてゐる」

眉山君は異腹の弟たちのことではひどく心を惱ましてゐるらしかつた。

これはずつと後になつて、眉山君が南榎町へ引越してからであつたかと思うのだが、眉山君の家で、撞木杖を突いた二十位の青年の歸つて行くところへ行きかゝつたことがあつた。

「僕の弟なんだが、關節炎であの通り脚が惡るくなつてゐる。畫でも習はせてみようと思つてゐるんだがね……。」

眉山君はさういふ風にも云つてゐた。

△

眉山君が上富坂の家を營んで、あの『ふところ日記』の旅へ出たのは、二十九年の秋になつてからだと思ふのだが、あの旅へ出る前に、眉山君は、浦和の本陣であつた星野巴聲氏の家にしばらくゐたのだらう。

三十年の一月末頃であつたかと思ふのだが、戸川秋骨君のところへ、川上君が箱根から電車で遊行を勸めて來たので僕も秋骨君に誘はれて、塔の澤の環翠樓へ行つた。眉山君は江見水蔭氏と一緒に泊まつてゐた。一二泊してから、吾々も一所に江見氏の片瀬の家へ行つて、とめて貰らつた。その家は、片瀬川の畔の上に立つてゐた家で、西の縁側から富士がよく見えた。座敷には、巖谷氏の

「大山や富士を間は雲の峰」

といふ句の額が懸つてゐた。

翌日は、下の川から小舟を出して、江見氏か江見氏の家にゐた大澤氏——であつたかと思う——かが櫓を操つて、江の

島を一と廻はりした。

その晩であつたか、その前の晩であつたか、明には覺えてゐないが、川上君は酒を飲みながら、江見氏と東京へ歸ることに就て、相談を始めた。江見氏は眉山君に酒を控へろとしきりに忠告し、その末に、

「君が本氣になつて稼げば、受け合つて月にエイテイにはなるんだから、東京へ歸つて眞劍になり給へ」

さういふ意味のことを云つてゐた。眉山君はもうその時分では一流作家のなかに入つてゐたと云つてよかつた。それが、相當に稼いで、月收たつた八十圓といふ時代であつたのだから、當時の文壇の小規模であつたことは大凡察知することができるであらう。

尤も、その當時では中學校の校長で、年俸千圓位なところはそんなに少くはなかつたし、主任教諭などだと、五、十圓ぐらゐであつて、一般に給料の金高の低い時代であつたのではあるが、勿論それに準じて物價も安かつた時代に相違ないのだが、それにしても、文筆の收入は幾らもない時代であつたのだ。

△

眉山君がその後東京へ歸つての最初の家は、牛込の南山伏町――今の新宿線の電車路の南側――の一寸と路次を入たところの家ではなかつたかと思ふ。茶は上富坂時代にも立てゝゐたのであつたから、その時代からかも知れぬが、山伏町の時には、何處か生花の師匠のところへ通つてゐるらしかつた。

その後で越したのが、矢來の低い方にあつた家であつたらうと思ふ。何うもそれは三十二年頃のことのやうな氣する。

その後に越したのが、南榎町の家であらう。家も間數があつて、一寸と氣取つた建てかたのものであつたし、第一庭が可なり廣かつた。眉山君はその家で結婚した。長男はその家で生れたかと思ふ。夫人が惡阻(つはり)が強くて困まると眉

君が云つてゐたのを記憶する。

その次の眉山君の家は、辨天町――早稲田南町から眞直ぐに辨天町の大通りを突き切つて、東へ坂を上がつて、右――であつた。此の家には、廣津柳浪氏が前に住んだことがあり、後には、村上鳥遥君が住んでゐた。川上君がそこにゐたのは、三十七年頃であつたらうかと思ふ。

眉山君が最後の家、天神町へ越したのは三十八年頃であつたらうかと思ふ。その家では眉山君には逢はないでしまつたかと思ふ。尋ねてみたことは二度程あつたが、何時も留守であつた。

富士見町で、眉山君と門下の某氏とが酒の席へ出たと、或る藝者が云つてゐたが、それは四十年頃であつたらう。逢つたら、そんな笑話もしようなどゝ思つてゐながら、つい尋ねそこなつてしまつた。

眉山君のなくなつたのを、新聞で見て、驚いたのは、四十一年の五月頃の或る朝であつたかと思ふのだが、或るひは記憶に誤りがあるかも知れない。

△

それからずつと後になつてのことであるが、或る晩、細川風谷がたづねて來た時、眉山君の話が出ると、風谷は「川上が死ぬ前に、僕の方が借金なんぞでよつぽど弱はつてゐたんで、これぢやア近々に腹でも切るか、ぶら下がでもするかより外はないと云うと、自分で死ぬなんてそんな心得違ひがあるかと云つて、川上からひどく異見をれんだがね、ところが、それから一週間ばかりたつと、僕に異見をした川上の方があの通りにやつてしまつたんだ」と話しした。

△

「川上君はある點までは、自分の心を人にうち明けるが、その點から先きへは何うしても人を近づけなかつた人だ」

確か田山花袋君はそんな風に云つたと思ふ。さういふところは、眉山君の一種のプライドから來たものであらう。紅葉君とのなかもさういふ點で餘りうまく行かなかつたのではないかとも想像せられる。あの世話好きな紅葉君から云へば、すつかりまかせろと出さうであるし、眉山君の方からでは、それは困るとなりさうに思はれる。

三十年頃では、「紅葉に想なし、紅葉の天下は眉山取つて代はれり」といふやうな雜誌の若い記者の評などがあつたので、眉山君も紅葉君とは一寸とうち解け兼ねるやうな破目になつたのではなからうか。

近き頃世を去つた小栗風葉君の口振りなどだと、硯友社の若い人々のなかなどでは、眉山君は餘り尊敬されてゐなかつたやうだ。

△

硯友社の先輩のなかでは、眉山君が一番當時の新しい、若い文學者に近づからうとしてゐたやうに見える。

「川上君なども、舊い殼を破ぶらう破ぶらうと努力してゐるのだが、なか／＼破ぶれないので煩悶してゐる」

田山君が三十八年頃かに、島崎君と同席の時に、さういふ意味のことを云つたと思ふ。それは田山君が辨天町に住んでゐた頃のことであつたと記憶する。

眉山君は新しい時代のいぶきに敏感であつたがために、當時の既成作家としての惱みが多かつたのであらうと思ふ。

△

何にしても、眉山君の文章は美くしかつた。「網代木」であつたかと思ふが、霧の夜の描寫が評判であつた。「觀音岩」は元よりのこと、その他の多くの短篇にも、美くしい、情味に富んだ文字が、隨所に見出されると思ふ。

「ふところ日記」の如き、「弔紅葉詞」の如きは、確に文の軌範となるべき文字であることは疑ひがない。

△

眉山君の話はこれくらゐにして置て、次きには齋藤緑雨のことを書く。

「明治二十二、三年頃なるべし、今おもへばいらぬ雅號も、見やう見眞似にほしくなりて、友なる紫瀾氏の紅露情禪、緑雨醒客とかきて送られしに、前者は其ころ咲盛る花形ともいふべき作家の、頭字一つ宛寄せたるにひとしければ、避けて後者を擇みしは是又住處に因みありければなり。緑雨は若葉のしづくを謂ふとぞ」

これは隨筆「日用帳」中の一節であつて、此所にいふ紫瀾氏は坂崎氏であらうと思ふのだが、明かでない。緑雨君の當時の住處は本所緑町の藤堂家別邸内であつた。緑雨がなくなつて三日目位に幸田露伴氏に緑雨の戒名を撰んで貰らつたが、氏はそれが春の朝であつたので、春曉院緑雨醒客として、信士とも居士ともしないで置いては何うかと云つた。吾々は至極結構だと云つて、さうきめてしまつたのだが、寺の僧には吾々の考が十分通じなかつたと見えて、居士がついてしまつたと思ふ。緑雨君の墓は本郷東片町の大圓寺にあつて、高島秋帆の墓も同じ地内にあるであらう。

正直正太夫といふ別號に就ても、緑雨君自身、同じ『日用帳』のなかで、左の如く書いてゐる。

「正直正太夫といふは、古く伊勢音頭の狂言に見えたる役名なること、大方の人の知れる所なり。二十二年の末なりきと覺ゆ、小説八宗といふを出せるとき、わが生國の縁あるにまかせて、ほんの一時の戯れと之を假りしに、後には往來中に正太夫君など呼懸けられて、オヽと言はんに躊躇はれし事もありしが、曩に或人に答へし如く、吾家の油を耗らして他家の米を作る者よと不圖思ひ浮べしより、喧嘩商賣さらりと廢めにしたれば、今はこの名を掲ぐべき場合の、殆ど絶えたるやうになりぬ」

『小説八宗』と言ふのは、緑雨君の文集『あま蛙』のなかに入つてゐる諷刺文であつて、逍遙、二葉亭、篁村、美妙、紅葉、思軒七氏の筆癖をパロディにして、冷やかしたものである。

△

ところで、此の正太夫の號のことに就ては、『おぼえ帳』のなかに、いろ〳〵可笑しい事實談が表はれてゐる。

「煤掃なればと辭むもきかず、朝より妓樓に推登りて、疊十枚積重れたる上に大胡坐をかき、こゝへ酒よこせ、肴よこせ、第一は女よこせと喚き立つる人の、やはり正太夫と號し居たるよし、程經てわが知れる役者の話にきゝたり」

「いづれの若旦那かとおもはるゝ人の、藝者幇間を狩催し、意氣揚々、われこそ正太夫なれと殊更名告らるゝを、恰も隣室に在りて貴食をなし居たるわれの、聞くともなくきゝたる時は、冷汗忽ち背に傳はりて、おのづから身を縮するやうの心地したり、今考ふれば、其人僅かにわれよりは美き衣着け居たりしには相違無し」

△

綠雨君は伊勢の神戸に生れたのだと聞く、綠雨君の竹馬の友ともいふべき上田萬年氏の記するところでは、綠雨君の生れたのは、慶應三年六月で、伊勢から兩親につれられて東京へ出て來たのは、明治十年であつたさうだ。又上田氏の記するところに從へば、綠雨君の學校教育は左の如くであつたさうだ。

「始めて本所彌勒寺橋畔にありし土浦藩主土屋侯が設立したる土屋學校に入り、東洋小學に轉じ、暫くして籍を同向院裏の江東小學に移し其卒業を待ずして退き、後一ツ橋外の東京府第一中學に入り、續きて、內幸町府廳構內にありし第二中學に轉じ、また中途より退學し、後其頃本所にありし明治義塾に入りしも、半年を出ずして之を去り、岸本辰雄、磯部四郎等の設立したる現今の明治大學の前身たる明治法律學校にて法律學を學びたるも、之れ亦業成らずして廢學したり……」

綠雨君には、讓、謙といふ二人の弟さんがあつたのだが、その二人の弟を教育するために、自分の教育は中止しなければならなかつたのだと云つてゐた。上田氏も云つておいでの通り、綠雨君のおとつさんは、醫者であつたが、藤堂家の御隱居附きになつてゐただけで、さう患者などはなかつたので、家は豐かではなかつたらしかつた。

「僕が小さい時分にね、新しく西洋から來るやうになつた變つた鉛筆か何かがほしくつて、母にねだつたんだね。母は親のかたみだと云つて、銀の平打を大事にしてゐたんだがね。或の日觀音さまへお參りをした歸りに、鉛筆を買つて來てくれたんだ。

が、行きに挿して出た平打はさしてゐなかつたんだ。平打を賣つて、鉛筆を買つてくれたんだと思ふ。母は月のうちの或るきつた日に必らず觀音さまへお參りをするのだツたよ」

綠雨君は、そんな話を、或るうすら寒い日の夕闇のなかで、淺草の觀音堂の前で、僕にしたことがある。

△

「夕立や、田をみめぐりの其角堂に永機翁の在りける時、父の入懇なりければ、遊びに來よといはるゝまゝ、われも音づれたりよみ試みたまへと、かの故人五百題を與へられしも、一句も得作らざりき。さる頃人に強ひられて、覺束なくも呼子鳥、初めて口眞似をなしたるが、俳とは源元手の小商ひ也、融通を利かす也と例の理にのみ走りて、百はおろか、五十にも滿たで止みたりいつの年なりしか、「拾錢は貳錢銅貨を五枚かな」、這樣なるがわが性には適應るなるべし」

綠雨君はさうは云つて居るもの〻、『あら酒』のなかの「春一ダース」『こり物』『小細工集』『枯菊十句』などに出てゐる俳句を見ると、なか〳〵老手であるやうに思はれる。文才のある人であつたので、俳句でも、和歌でも、本氣にやらうとすればできぬことはなかつたらうと思はれるのだ。

「年十七の比なれば、猶學校に通へりしと覺ゆ、われは永機翁の紹介によりて、魯文翁に面したり。駒牽錢に擬したる印一つ贈られしを用ひこそせざれ今も藏せり。いかなる事を書きしか忘れたれど、携へ行きしわが一文に名を眞猿と署し芳譚と稱する雜誌に出されたり」

眞猿は綠雨君の本名の賢の訓(まさる)から取つた號であらう。駒牽錢の印は野崎左文君の綠雨の記事(早稻田文學所載)のなかに綠雨の筆蹟と共に載つて居　と思ふ。

△

「名は元かり媼の分けもたゞさず、亂れし本末の闇の礫、甚だあたらぬ字義のまゝを、今は一般に小說と呼慣れたれど、以前は

いづれの新聞社にても、單に續きものと稱へしなり。われの初めて之れに筆執りしは、明治十九年一月、住處にちなみて江東みどりと號し、善悪押繪羽子板といふを、今日新聞に出したるときの事なり。引つゞきて二三の新聞紙に雨夜の狐火、杜鵑里初聲比翼蓮鴛鴦毛衣、紅白梅花笠、春寒雪解月などいふを出したるが、何れも所謂お伽草紙、七五づくめの極めて甘たるきものなりしは、已に命題に明かなるべし。はやく手元より取棄てたれば、書きし事柄の一部をさへ、われは全く記憶せざれど、むかしを言はば爐の一本、面はもみぢすべきに定まれるを、あれのこれのと洗ひ立てのうるさければ、自らこゝに名告り置くものなり」

緑雨君がなくなると、直ぐ吾々は、緑雨全集といふわけには行かぬだらうが、責めて緑雨君の作物で本に纒まつてゐないものでも、此際一冊にして置からでないかといふ相談をしたのであるが、その時に、前記の續きものゝ話が出ると野崎左文君が、緑雨君の筆になつたものなんだから、それ等の初期の作物でも當時の他の一般のものとは、餘程違つた異色のあるものであつたと云つた。明治の小説史を編む材料としては、眼を通すべきものだらうと思はれるが、もう今日では、さがし出しようのないものであらう。

緑雨君は『日用帳』のなかで新聞社との關係を次のやうに書いてゐる。

「誰々は元校合方なりきと、よらでもあるべき人の垢をよりく噂の世に流れしが、われも最初新聞社に入れる時は、やはり校合に從事したる身分なり。今日新聞といふに二度入りて、二度逐はれたり。自由の燈といふに入りしが、こゝは改革沙汰の起りて除かれたり。朝日新聞の東京に創まるにあたりて、少しは取立てられしも退きたり。東西新聞の倒れしより、大江氏の下に政論社に在りしが、江湖新聞の倒れしより又も同社にもどりて、末廣氏の大同新聞となる迄居續けぬ。されど他に合併の都合ありて、放たれたり。國會新聞、改進新聞は惰け者なればとて、逐はれたり。二六新報に入り、時論日報に入りしも、われを迎ふるほどの社の、など倒れでは止むべき、共に法の如き最期を遂げぬ。逐はれしといひ、放たれしといふもの、皆わが罪なり、他人の罪にはあらず、決して、他人の罪にはあらず、最早われは新聞社に所縁をもつまじきものに考へ定めて、長らく浪人修行に慣

れたりしも、あらぬ望のあゝさて凡夫なりけり再び動きそめて、萬朝報に入りしに、こゝはわれより退社を申出でたるなれば、逐はれしにはあらざるべし。猶めざまし新聞、讀賣新聞等にも寄書したる事ありて、いかにも渡り者の埒無き末とわれも思へど假りに一切を運といはゞ、運は菅の根の長きも一年を超えず、蘆の葉の短きは二月に足らざる程なれば、われの筆取りし時間を總計するに、まことに僅かなる事なりしなり。十露盤手にせぬ商人の扶持によりて、先つ年迄立ちしわが身をおもへば、遡るにをかしき元來空蟬の人の志よな」

緑雨君の二六新報にゐた時に、與謝野寛君、坂本紅蓮洞君が緑雨君と知り合ひになり、萬朝報時代に幸德秋水、田岡嶺雲その他の諸氏と相知るに至つたのだ。

餘まりに緑雨君の書いたまゝを引用し過ぎたやうでもあるが、かうした方が當時の世相などが說明なしに端的に分ると思ふからである。

△

透谷北村門太郎君は小田原の生れであつた。先達て亡くなつた坂本紅蓮洞君なども同じく小田原生れなので、透谷君のことを話す時、門公々々と云つてゐた。透谷君のおぢいさんは可なり名のあつたお醫者であつたといふ。

先年俳人倉橋如虹君が北村家の故宅を買つたといふので、尋ねて行つて見せて貰らつたことがある。それは昔の電車通りの會社——即ち小田原電車の停車場——へ曲がる手前に、藤棚といふ小停留場があつて、その又少し手前の南側で門口に大きな柳の樹のある茅葺きの古い家であつた。元は何うであつたか知らぬが、僕の見た時には、三間ばかりの家であつて、藥局であつたと說明されてみると、なるほどさうかと思はれるやうな跡が入口の部室に殘つてゐた。夜であつたが、一番廣い八疊程の座敷に座はつて、倉橋君と話をしてゐると、さアッといふやうな幽な音が聞えて來る。それは、その邊では、井戸の水が湧きこぼれるやうに泉んで來るので、その水を筧で淨水鉢へ引いて來てあつて、それが下

の溝へ流れ落ちてゐる音だといふのであつた。但し、此の箕は倉橋君の風流のすさびで作られたもので、前にはなかつたものだらうと思ふ。

此の家も無論十二年の震火で燒けてしまつたであらう。

透谷君の家は、京橋の數寄屋橋外の彌左衛門町の角――橋から銀座の方へ向いて云ふと、四角の銀座寄りの右角――にあつた煙草屋であつた。勿論代はかはつてゐたが、震災の時までは矢張りその家では煙草を賣つてゐた。透谷といふのは、數寄屋を書き換へて音讀したまでの全く無雜作な雅號であつた。雅號には大分そんなのが少くない。現に、戸川秋骨君なども文學界の始め頃には築地に住んでゐるので、捿月と號してゐた。

△

北村君は早稻田がまだ專門學校と云つてゐた時分の政治科の出身であつたやうに聞いてゐる。

妻君は、所謂る三多摩から代議士に出た自由黨の石坂昌孝とかいつた人の娘さんだと、戸川君は云つてゐた。

『蓬萊曲』といふ長詩――劇詩といつて宜しいものが出たの――は、明治二十四年頃であつたらうかと思ふ。それはバイロンのマンフレッド張りのところの餘程ある詩であつたやうに思ふ。

透谷君と島崎君とが相知つたのは、明治二十五年ぢうのことであらう。僕は高知へ行つてゐた時、蓬萊曲の作者北村氏に逢つたが、有爲の人だと思うといふやうな手紙を藤村君から貰つたことを記憶してゐる。

藤村君が明治女學校の教師をやめて、旅へ出る時に、自分の後任に北村君を推薦したのだと聞いてゐる。

僕は何處で始めて透谷君に逢つたのか、明には記憶してゐないが、何うも秋骨君の居た秋骨君の伯父さんの原氏の家でゝはなかつたかと思ふ。

『馬場君などの北村君にお會ひなすつた頃は、北村君のからだが大分弱りだしてゐた時分なんだ。もうあの時分では北

村君は少し長く話してゐると正座してゐることができないで、何か物によつかゝるといふ風だッたからね』

藤村君は何時であつたか、そんな話をしたことがあるのだが、成る程、僕の會つた時分には、北村君の風つきにもからだの具合にも、如何にも神經質らしいところが現はれてゐた。後になつて考へると、何うもその時分の北村君の顏つきその他では、神經系統に病ひが生じてゐることが明かに知れるくらゐになつてゐた。

明治元年か或ひは慶應かの生れで、僕などよりは少し年長でもあり、世間知識も多かるべきであるのに、吾々と話をする時など、ヘンに堅くるしく、さばけないやうに思つたので、或る事情で、透谷君を前記の煙草屋の二階へ尋ねて行つた時など思ひきつてザツクバランといふやうな調子で、荒ぽい言葉も使へば、ふざけた言ひ廻はしもして對談したのであつたが、透谷君はあとで戸川君か誰かに、馬場はあんまり輕佻だから忠告しろといふやうなことを云つたさうだ。

それは二十六年の晩秋頃のことであつたらう。

北村君が、國府津の手前の前川に住んだのは、矢張りその頃から二十七年の始めへかけてのことかと思ふ。

北村君の最後に住んだ家は、飯倉の坂上の四つ辻から、芝公園へ入つたところあたりで、今小學校がある邊であつたといふのだが、今はその家はなくなつてゐると、何時か島崎君が云つてゐた。

△

或る若い人が、透谷の創作は何れを見てもうまいと思ふものはないと、云つてゐた。どうせ開拓者の仕事なんだからその精神を買ふより外はない。當時の新興の文學さへまだ初歩の寫實主義のうちに彷徨してゐた時分に、あれだけの詩(心の上の意味)の世界へ飛躍突進しようとしたあがきは確に多とすべきであつた。あの時分では、吾々も同じやうな動きのなかに入つてゐたので、自分たちのまはりで行はれてゐることに就ては、別に感服するといふ氣は起らなかつたのだが、今日になつて、當時のことを回顧すると、或る人々の仕事や作物の本當の意味がずつと明らかに認め得らる。

殊に、民友社の人々の文學に對する功利的觀察に反抗しての論戰は全く目ざましいものであつたと云つて宜しからう

△

『文學界』の始めの方に載つてゐる北村君の『人生に相渉るとは何の謂ぞ』といふ論文は、山路愛山氏が『頼襄論』の
かで述べた文學功利論ともいふべきものに對する論難であるが、大體論としては、今日も尙生命のある文字である。

「極めて拙劣なる生涯の中に尤も高大なる事業を含むことあり。極めて高大なる事業の中にも尤も拙劣なる生涯を抱くことあ
見ることを得る外部は見ることを得ざる内部を語り難し。盲目なる世眼を盲目なる儘に睨ましめて眞贇なる靈劍を空際に撃つ
士は人間の感謝を拂はずして恩澤を蒙むる神の如し。天下斯の如き英雄あり、爲す所なくして終り事業らしき事業を遺すこと
くして去り、而して自ら能く甘んじ自ら能く信じて、他界に遷るもの、吾人が尤も多く同情を表せざるを得ざるところなり

吾人は記憶す、人間は戰ふ爲めに生れたるを。戰ふは戰ふ爲に戰ふにあらずして戰ふべきものあるが故に戰ふものなるを。戰
ふに劍を以てするあり、筆を以てするあり、戰ふ時は必らず戰を認めて戰ふなり、筆を以てすると、劍を以てすると戰ふに於て
相異ることなし、然れども敵とするものゝ種類によつて戰ふものゝ戰を異にするは其當なり。戰ふものゝ戰の異なるによつて
利の趣も亦た異ならざるを得ず。戰士陣に臨みて敵に勝ち凱歌を唱へて家に歸る時、朋友は祝して勝利と言ひ、批評家は評し
事業といふ、事業は尊ぶべし、勝利は尊ぶべし、然れども高大なる戰士は斯の如く勝利を携へて歸らざることあるなり、彼の
生は勝利を目的として戰はず、別に大に企圖するところあり、空を撃ち虛を狙ひ、空の空なる事業をなして、戰爭の中途に何
へか去ることを常とするものなり。

斯く如き戰は、文士の好んで戰ふところのものなり。斯の如き文士は斯の如き戰に運命を委ねあるなり。文士の前にある戰
は、一局部の原野にあらず、廣大なる原野なり、彼は事業を齎らして歸らんとして戰場に赴かず、必死を期し、原頭の露なる
覺悟して家を出るなり。斯の如き戰場に出で斯の如き戰爭をなすは文士をして兵馬の英雄に異ならしむる所以にして、事業の
果に於て、大に相異なりたる現象を表はすも之を以てなり」

かうして引用してみると、此の一節は、透谷君が自分自身の生涯の意義を辯明するために書いて置いたのではない
と思はれる位今日に於ては、讀む者に取つて感慨なき能はざる文字である。（をはり）

文藝評論界の新人群起

高須芳次郎

（一）

私が十七歳の時、田舍で『早稻田文學』の古本を手に入れたが、それには偶然、島村抱月氏の「審美的意識を論ず」といふ一篇と後藤宙外氏の「紅葉、露伴、美妙三家を論ず」といふ意味の長篇が載つてゐた。いづれも、それは二氏の卒業論文――早稻田專門學校に於ける――であると後で知つた。それからこれも後になつて知つたのであるが、坪内逍遙先生は故人大西祝博士と共に抱月氏の卒業論文を「出色の成績だ、美學者としての資質を充分に持つてゐる。」と認めひどく感心せられたと聞いた。

まだ私には美學の素養がなく、僅かに『早稻田專門學校文科講義錄』で金子筑水氏の「哲學概論」を讀み、合點したところや、わかりかねたところがあつたといふ幼稚な時代であつたので、抱月氏の「審美的意識」もよく呑込めず、唯むづかしいと思つて感心したのを今も覺えてゐる。が、それから間もなく、東京へ出て、すこし知識の糧にありついたがそれでも赤門（帝大）の前を通つたとき、「これが日本の最高學府だ、そこに學んで業を卒へた學士たちは皆立派な學者になれるのだな。」と羨ましく、無邪氣に考へこんだといふ程度にぶらついてゐた。今日、それを回想すると、丸で夢のやうに他愛がない感じがする。

さういふわけで、私は『新聲』記者として文藝評論の筆を執り、旺んに氣焰を吐いてゐたが、一面、當時專ら評論を書

いた赤門、早稲田出身の新人に對して相當の敬意を拂つた。その時分、赤門の新人として高山樗牛、大町桂月、姉崎嘲風、上田柳村、畔柳芥舟、佐々醒雪、笹川臨風、田岡嶺雲の諸氏がゐた。早稲田の新人として島村抱月、後藤宙外、綱島梁川、五十嵐巴千(力)金子筑水の諸氏がゐた。それから民友社の新人として角田浩々歌客氏がゐた。以上のうちで、桂月、宙外二氏は評論以外にも筆を執つたが、桂月氏は主として評論の方に力を入れたのである。

元來、文藝評論は以上の人々が輩出した以前に於ては、左程旺んでなかつた。さうした時代に執筆したのは逍遙、鷗外二先生を始め、石橋忍月、大西祝、寺山星川、內田不知庵(魯庵)、山路愛山、高瀨文淵、宮崎湖處子(八面樓主人)高橋五郎、森田思軒、北村透谷氏等であつた。德富蘇峰先生も時々、文學に關する評論を發表して健全なクリスト教的思想を皷吹された。今玆にそれらの人々の評論について述べることを略するが、要するに樗牛、抱月らが出る迄の評論界では、逍遙先生の系統を引いたイギリス派の穩健な評論、鷗外先生の系統を引いたドイツ流の學究的な評論及び民友社一派のクリスト教的思想を基調とした評論など、凡そ主派と目すべきものが三つあつた。樗牛氏は鷗外先生の系統と『文學界』一派の主情的評論を一つにしたやうな論文を書き、抱月氏は逍遙先生のイギリス流を學んで、それに一味の學究的な趣を加へた論文を書いた。勿論、抱月氏には大西祝博士の影響もあつたやうに思ふ。さういへば、樗牛氏には幾分、井上哲次郎博士の影響を認めねばならぬであらう。

大西祝、井上哲次郎の二博士はいづれも哲學者として終始したが、共に多趣味の人で文藝に對する理解が相當にあつのた。殊に大西博士は文藝上に於ても素人でなかつた。ヨオロッパの新しい文學を終始讀み、進歩した見解を有した。その美學上の論文などは立派なものがある。この人が早稲田の講壇に起ち、逍遙先生と共に抱月、筑水諸氏を指導されたことは、早稲田の文科に取つて大なる幸福であつた。また帝大に於て、井上哲次郎氏が樗牛、嘲風諸氏を指導し、哲學以外、文藝の趣味を皷吹されたことは帝大文科のためによい事であつたと思ふ。

（二）

以上のやうなわけで、早稻田、赤門から文藝評論界の新人が輩出したるは偶然でない。勿論、日清戰爭の勝利に伴ふ花々しい人氣が新文藝の發達を促がすべき機運を作つたことも與つて力があらう。それに小說の方面でも、やはり新人が群起して、泉鏡花、小栗風葉、樋口一葉などの諸才人を見たのであるから、小說の振興と評論の振興とが相俟ち、相倚つて、文壇に生氣を漲らせた。

高山樗牛氏は島村抱月氏よりも、最初花々しく評論界に現はれた。それはひとり、樗牛のみでなく、桂月なども花々しい方であつた。蓋し早稻田は常に穩健、着實を主として、輕々しく感情にまかせて言議しなかつたので、當時、見た目に花やかな方が活氣あり面白味があるやうに思はれたのは止むを得ない。樗牛氏が初期の『帝國文學』に出した「巢林子の女性」などは文章が花やかで清新な趣を有し、文學青年をよろこばせた。これを學的に見ると何等の新しい發見もなく、寧ろ平凡にちかい方であつたが、その若々しい感じ、潑溂たる文章が讀者を魅したのである。

當時は今日のやうに文學上、學問的な發達を見ない時期であつたので、文章が華麗で、奔放な感情が漲つてゐさへすれば一般によろこばれた。評論家としての樗牛氏は丁度以上のやうな趣を備へてゐて、思想上何等發明したところがなく、學問上何等創見を示さなかつたけれども、表現が華麗で、情感の強烈なところが、人を魅したといへるであらう、それに氏には幾分學者的なところもあつて、美學方面に若干の素養を有したので、それを巧みに活用した。かういふと樗牛氏の價値を減ずるが、必ずしもさうでない。氏には一面、天才肌があつて、時勢の推移に先立つて動く敏感な作用があり、また文壇に對していつも新しい問題を提供する熱心と機敏なところとがあつた。さうした意味で樗牛氏には、いつも態度としての立派さがあつた、男らしさがあつた。そこに彼れ獨自の長所を示したのである。

初期の樗牛氏は井上哲次郎博士と共に日本主義を鼓吹した。その所説は偏してゐたが、態度の上に、公明なところがあつた。即ち彼れはその所信を堂々と述べ立てゝ、すこしも曖昧なところがなかつたのである。彼れが一切の宗教を排したことは、妄斷獨斷ではあつたが、明快な齒ぎれのよい文章で巧みにその說を述べるので、うつかりすると、その說に引込まれさうに思はれた位である。樗牛氏が光明小說を要求し、國民性に根ざす文學を要求し、「詩的の二面とその利弊」を書いたのはその時分——明治三十年及び三十一年頃——のことである。

その時分、樗牛氏は『太陽』の論壇に依つて筆を執り、始終、文壇に問題を起さなければやまないといふ風があつた。そしてそれに對して、往々反對の意見を發表したのは、早稻田の諸才人であつた。殊に綱島梁川氏は概して樗牛と反對の考へを抱き、事每に論難したのは一奇とすべきである。當時、梁川氏は『大帝國』といふ雜誌に執筆してゐた。私は氏の所說を讀むために、時々『大帝國』を購求したが、その頃の梁川氏は『病間錄』時代の氏とちがひ、學究的に偏して云ふことがはきはきせず、いかにも煮え切らぬところがあつた。態度は穩健で文章も平明であつたけれども、銳いところ、突込んだところがなかつた。この點、到底、樗牛氏の論敵となるには、力が不足した氣味があつた。が、三十二年樗牛氏の「歷史畫論」に反對したときは、相當突込んだところもあり、割合に銳いところが見えた。

樗牛氏の「歷史畫論」は當時文壇に問題を提供し、逍遙先生とも論戰したことがあつた。蓋し樗牛氏の論は說明の足りないところがあつて、「歷史畫は歷史の人物及び時代を假りて繪畫その者の美を發揮するにある。」と定議したことが、解釋の仕樣によつては、史美——史上の人事美、人情美を無視するやうにも思はれたのである。つまり、樗牛氏が當時の無生命な歷史畫の弊に激して、すこし大　な物の云ひやうをしたのが動機となつて、評論界に一波瀾を捲起したのである。

樗牛氏の行き方は右のやうに大膽であつた。充分の考覈を經て、周到な論理を辿つてゆくといふ方ではなく、直覺的

に一度かうだと信ずると、氏はそれを巧みな文に托して、寧ろ情感的に述べた。「月夜の美感」その他にも、さうした趣がよく現はれてゐた。それが、ニイチエヤズム鼓吹の時代になると、一層鮮明を増した感がある。その形式は論文にちがひないが、内容は情感本位で寧ろ散文詩といひたいほど直覺的なところがあつた。理論は例によつて周到綿密を缺いたが、感じ方に鋭いところがあつて、強く人を動かす心熱を示した。

が、樗牛氏が、ニイチエヤズムを鼓吹するに至るまでには、當時、肺を病んでゐるうちにいろいろ人生を思念し、苦悶し、内省しある強い信念に到達しやうとつとめたあとがある。その事は氏が友人に與へた手紙のうちに出てゐる。ニイチエヤズムのことについては、他日述べることとしたい。

（三）

以上、樗牛氏のことを餘りに多く語りすぎたが、島村抱月氏が評論家として文壇に出た頃は彼はより多く美學者としてその本領を示した傾きがあつた。無論、當時氏は『早稻田文學』の彙報を擔當し、文藝、教學の形勢を毎月記述的に報道することにその力を割いてゐたことなどもあつて、樗牛氏の花々しい遣り口にくらべると極質實な行き方をした。氏は明治二十八年から二十九年へかけて「新奇の快感と美の快感との關係」「氣韻生動」「音樂美の價値」などの論文を『早稻田文學』に出した。美學の素養が乏しい當時の文壇人に對して、それは確かに有益な論議にちがひなかつたけれども、多くの人たちは、それを漫然看過した氣味があつた。それは氏の遣り口が一時の場當りを取らうとせず、餘りに質實であつたからだ。

さういふわけで抱月氏は樗牛に匹敵すべき實力を備へてゐながら、文壇人の間では、樗牛氏ほどにその力を認識せられなかつた。極一部の具眼者にその識見、學殖を認められた丈であつたらう。が、抱月氏は孜々として倦まずに精進して、

「悲劇論」のやうな立派な論文を書き、三十年には態度を新たにして『新著月刊』に「しろあらし」「玉かづら」以下續々小説を發表するに至つた。この點は後藤宙外と行き方を同じうするのである。

正直に云ふと、當時私は文壇人の一人として、抱月氏の評論よりも小説の方に興味を持つてゐた。その近松の戯曲の構圖を思はせるやうな小説は氏の美學者的な評論よりも遙かに親み易かつた。氏の聲名が漸く高まりはじめたのも、評論よりは小説のためであつたやうに思ふ。つまり、それは評論界の風潮が、見た眼に花やかな言論、わかりやすい主張をよろこび、抱月氏のやうな質實を旨とした評論に共鳴するものが少かつた爲めであらう。

後藤宙外氏も評論家として質實な行き方をした。そのため、抱月氏と同様、優勢な地位を占めるについては、寧ろその小説によつたのである。氏は明治二十九年、「ありのすさび」を『新小説』に發表し、爾後、續々、その新作を提供した。抱月、宙外二氏が、かうして小説方面に手を着けたのは、逍遙先生の奬勵によつたのである。逍遙先生は早稻田派に評論の筆を執るものがあつても、小説、戯曲の方面へ志すものが殆どないのを遺憾とし、早稻田派のために、また文壇のためにも、さうした方面を新しく開拓すべき必要あることを告げられたと聞いてゐる。その教示の下に躍進した抱月、宙外二氏は「教養ある新人が始めて創作をやり出した。」といふので、當時好奇の念と期待の心とを以て迎へられたのである。そしてそれが一般の期待に背かなかつたことは二氏のためにも幸ひであつた。

さういふ具合で、當時、金子筑水氏もまだ表立つて文藝上にその識量を示さなかつたので、その時分、評論家として比較的、花々しく活動したのは、綱島梁川氏であつたやうに思ふ。が、前に述べた如く、氏の文藝評論は穩健といふばかりで、頗る齒切れがよくなかつた。『病間錄』以後に於ける氏のやうに冴えたところを示さなかつたのである。が、これを赤門派の桂月、芥舟、醒雪、臨風諸氏にくらべると、學見に於て稍優つた點があつた。桂月氏の文藝評論は唯文章が流暢で氣焔が旺んな文であつた。その内容は概ね貧弱であつたし、また矛盾したところもあつた。芥舟氏は學究的で時

流の文學には縁が遠い、醒雪氏は修辭學者の講義めいたことを繰返すに留つてゐた。臨風氏はいくらか氣が利いてゐたが、當時は歷史家として起つて江戶趣味に傾倒してゐた氣味が見え、文藝評論に大した熱意を持つてゐなかつた。また嘲風氏は宗敎、哲學方面に傾き、柳村氏は高踏的態度で文藝を談ずるといふ風で、眞に文壇人として、より多く有意義に働いたのは田岡嶺雲氏ぐらゐのものである。勿論、これは日淸戰爭前後の時代に於ける諸氏に就て云ふのである。

結局、梁川氏の評論は當時、文藝上に關したものよりは倫理、道德に關する諸問題を議した方面に、氏のよりよき特質を發揮したといへる。それは後に氏が『病間錄』に於て、その個性を發揮すべき豫示を爲したものだと見ることが出來る。例へば「存養論」「孔子の倫理思想を論ず」「支那三代の倫理、宗敎思想概論」「神の人格性につきて」などを始め「ミユイアヘッド氏の動機論を評す」などは、文藝評論よりも、しつかりしたところが見える。氏は文藝方面よりも、段々かうした方面へ深入りして、そこに氏獨自の世界を築くに至つたのである。

（四）

玆で一寸云つて置きたいのは角田浩々歌客氏のことだ。同氏は早稻田、赤門の新進評論家が出た時分『國民之友』に據つて、文藝評論を書き、必ずしも民友社のクリスト敎的思想にかぶれないで、寧ろ早稻田派の筑水氏を思はせるやうな傾きを示した。後、氏は『大阪朝日』の招聘によつて下阪し、同紙上で、やはり、文藝評論を書き、劍南道士の匿名で、『讀賣』の月曜附錄にも執筆した。氏は支那文學の素養が深く、傍らイギリス文學に親み、それらの基本知識によつて、公平に文壇の事象を批判した。その口吻にすこし漢學者めいたところはあつたが、理路正しく、論步を進めてゆくところは、趣こそ變るが、綱島梁川氏に匹敵するに足りたと思ふ。が、氏が孤立してゐた爲め、比較的に名聲を馳せなかつたのは惜しかつた。けれども事實上、新興評論壇を賑はした上で相當の功勞があつた。

その他、赤門派に於ては、上田柳村氏が確かに卓越した素質の閃きを見せた。氏は高踏的ではあつたが、最初から學究としての誇りを保ち、ヨオロッパ文學の一面を紹介して、イタリイ、ギリシヤの趣味に　び、南歐の藝術を闡明して文壇人に向ひ藝術至上主義、唯美主義の傾向を鼓吹した。それは典雅な文章によつて述べたので、樗牛氏ほどの反響を見なかつたが、心あるものは抱月氏の論文と共に柳村氏の研究發表に敬意を表したのである。

概していふと、當時の評論界では、赤門派は樗牛氏以下、概ねロマンチシズムに傾き、早稻田派は抱月氏以下、概ねリアリズムに傾いた氣味がある。前者は理想的で花やかなところがあり、後者は實證的で質實であつた。前者は文、質に優り、後者は質、文に優つたのである。が、それら好個のコンツラストを爲した新人によつて、評論界は空前の活氣を呈した。ある意味に於て、當時の文藝評論家は小說家に對し、相當威嚇的な力を持つた。それを今日の文壇に於て評論家が概ね輕視せられ、冷遇せられてゐるのにくらべると、今昔の感が深い。

かういふと、今日の文壇人は私が評論家の肩を持つやうに思ふかも知れないが、さうではない。明治三十二年頃、私が泉鏡花氏に逢つた時分、「どうぞお手柔かに……」と愛嬌を示して云つたことがある。それは私が『新聲』で文藝時評の筆を執り、直言、直筆したことをよく知つてゐたからである。小栗風葉氏なども評論家を好遇したのみならず、相當敬意を以て、その人に對したことは、當時比較的年少であつた私に示した氏の親みある態度にも、それと察することが出來た。さういふ具合で赤門派の樗牛、桂月、嶺雲、柳村諸氏などの鼻息は相當荒かつたのである。それは唯年が若かつた所爲ばかりではない。

帝國文學發刊の前後

笹川臨風

私は明治二十六年京都の第三高等中學校（其頃は高等學校ではなくて、五年課程の高等中學校でした）を卒業しましたが、其頃各高等中學校には校友會の雜誌がありまして、互に交換してゐましたから、編輯にたづさはつたものは、各高等中學に於ける重なる執筆者は未見ではありましたが、其名を知つてゐました。東京の第一には校友會雜誌、仙臺の第二には尙志會雜誌、第三には壬辰會雜誌、熊本の第五には龍南會雜誌がありました。金澤の第四のことは記憶してゐません。校友會雜誌に於ける大町桂月君、島文次郎君、殊に上田敏君が、鷗外さん張りの「ウクラインの五月の夜」「春の夜に基督を憶ふ」なんて名文には少からず敬意を拂つたものでした。尙志會雜誌で高山林次郎の名で「近松巢林子の女性を論ず」などに驚かされたものでした。上田君は一年あとの大學生でしたが、とにかく斯う云ふ連中が二十六年の秋東京の文科大學生となつたのです。上野の三宜亭で新入生の顏合せ會があるときなどは、此未見の友人と會して、十年の知己のやうに感じたものでした。

確か二十七年の秋の頃と思ひますが、一夕大學の中堂に相談があるから集つてくれとのことでした。其頃には大學に寄宿舍があつて、中堂と云ふホールがあつたものです。往つて見ると文科の學生の手で文學雜誌を出さうと云ふことでした。すると、中には廻覽雜誌の體裁がよからうなんて主張する人もあつたやうですが、然しそれに反對して大に世間に打つて出ようと云ふ論が可成多かつたのです。其主張者の中には上田敏君なども居ました。之が勝を占めて公刊說と

なり、大日本圖書株式會社で引受けることになりました。

岡田正美君の談によると、此雜誌は岡田君の思ひつきで、桑木嚴翼君、高山林次郎君との間に相談が成り立ち島文次郎君も之に參加した、それから鹽井雨江君と大町桂月君等が國文學雜誌を出さうとするのと合同して、大學諸先生の贊成を得、富山房に交渉しようとしたが、店主が面會しなかつたので、大日本圖書株式會社の方に話をつけ、それから中堂の協議會となつたと云ふことです。

私は其頃藤田(劍峯)藤田(精一)藤岡(作太郎)藤井(乙男)田岡(嶺雲)小柳(司氣太)君なんかの一味に依りて作られた東亞說林、東亞學院講義錄の方に關係してゐましたから、初の頃の帝國文學とは緣が薄かつたのです。此東亞說林の後身は江湖文學でした。帝國文學創刊十周年回顧錄に依りますと、創刊以後十開年の役員は次の通りです。

明治二十七年十一月

發起人

井上哲次郎　上田萬年
三上參次　高津鍬三郎
芳賀矢一　鹽井正男
高山林次郎　姉崎正治
島文次郎　岡田正美
内海弘藏　上田敏

役員

鹽井正男　狩野直喜
高山林次郎　島文次郎
岡田正美　内海弘藏
上田敏

明治二十八年四月改選

大町芳衛　　武島又次郎
佐々政一　　畔柳都太郎
（兼庶務委員）岡田正美　（同上）藤岡勝二

明治二十九年三月七日改選

土井林吉　　青木昌吉
戸川明三　（兼庶）藤岡勝二
（同上）岡田正美

明治三十年三月十三日改選

（兼庶）藤井信吉　（同上）大伴來目雄
戸澤正保　　岡本勇
藤井健次郎（辭任）　竹井悌四郎（補缺）
（參與委員）岡田正美

明治三十一年三月五日改選

竹井悌四郎　（兼庶）十時彌
（同上）大伴來目雄　　淺野和三郎
久保得二

明治三十二年三月十一日改選

十時彌　　高木敏雄

(兼庶) 中内義一 (同上) 入杉貞利
(同上) 樋口秀雄 (參與委員) 岡田正美
顧問委員 大町芳衛 高山林次郎
武島又次郎 竹井悌四郎
土井林吉 上田敏
笹川種郎 島文次郎
畔柳都太郎 姉崎正治

明治三十三年三月二十四日改選

(兼庶) 登張信一郎 武島又次郎
上田敏 久保得三
笹川種郎 藤村作
小日向定次郎 安倍叔吾

明治三十四年三月九日改選

飯田御世吉郎 戸澤正保
久保得二 (兼庶) 畔柳都太郎
(同上) 大木俊九郎 松村猪久治
安倍叔吾

明治三十五年三月八日改選

畔柳都太郎 登張信一郎

（兼　庶）　内ケ崎作三郎　深田康算

（兼　庶）　尾上八郎

明治三十六年四月十九日改選

（兼　庶）　内ケ崎作三郎　安藤勝一郎

島地雷夢　垣内松三

評議員　井上哲次郎　上田萬年（代表者）

三上參次　芳賀矢一

大塚保治　高楠順次郎

藤代禎輔　藤岡作太郎

夏目金之助　岡田正美

明治三十七年三月十二日改選

安藤勝一郎　齋藤信策

垣内松三　櫻井政隆

小山東助　厨川辰夫

小山内薫

初めの帝國文學の表紙は織文圖彙から取つて赤地に白抜きの花筏と云ふ友禪の長襦袢のやうな鮮やなものでした。題簽の文字は聖武天皇の御宸筆と傳へられる賢愚經に依つて、多田親愛氏が書いたのださうです。二十七年の十二月に一ツ橋の帝國教育會で發會式を擧げ、二十八年の一月十日創刊號が生れ出て、之から毎月十日發行したものです。創刊號

の序詞は高山君の筆に成つてゐます。

初の事務所は島君の宅、其後には本郷森川町新坂の上、それからいろ〳〵と代つて、東片町の登張君の宅にも其看板がかゝつたことがあります。要するに委員が代ると多く事務所も代つたものでした。

會費は十錢、圖書會社から編輯費が幾分ありましたが、要するに知れたものでした。度々値上げの問題が起り後に幾分か上つたのでした。それですから内輪は可成困難で、無論原稿料なんかは出しません。春秋二回に大會を開くを例としました。一體どのくらゐ此雜誌は賣れたでせうか、精確なところは分りませんが、賣れた頃は三千五百部、賣行きが惡くなつて二千五百部、それも後には段々と減つて來たやうです。

さて物變り星移りまして、當時の編輯員中物故されましたるは、私の知りゐる範圍でも、鹽井、高山、岡田、上田、大町、佐々、畔柳、竹井、齋藤、小山、厨川の諸君で、十一名の多きに上つてゐます。感慨無量ならざるを得ません。

○一葉女史の名聲いよ〳〵高し。上野兩大師のあたりに、銅像を立てゝは如何といふ人あり。

○こんにやくに味噌をつけておでんで御座いといふ。誰れにでも出來るは今の文壇の事と何處やらのおば樣申せり。

——明治廿九年七月「文學界」より——

美文及び寫生文流行時代

高須芳次郎

「一」

私が『新潮』の前身『新聲』記者をしてゐた時分、文學上、二つの興味ある現象を見た。それは日清戰爭前後から美文と稱する一體が勃興した事、今一つは『ホトトギス』の創刊と共に寫生文が流行した事である。今日美文や寫生文の名稱は全く忘れ去られたが、それらが流行した時分は誰れも彼れも美文または寫生文に筆を着けるといふ勢で、すこし誇張していふと、文學青年を風靡したのである。今それを考へると、一寸不思議な氣がするが、文學の進歩が漸次その階段を辿つてゆくことを普通現象とする以上、美文及び寫生文の勃興したことは當然の順序であると云はねばならぬ。

美文の底を流れてゐた精神は、ロマンチシズムであり、寫生文の內容を一貫してゐたのは、リアリズムの精神である。美文は形式上、當時の小說と異つたところがあつたけれども、內容上、やはり小說の主流となつてゐたロマンチシズムの傾向を追ふた、ところが。寫生文は小杉天外、永井荷風氏らが提唱したゾライズムと共通した精神を持つて美學が唯美的であつたのに對して、眞實を主眼とした。無論、それは自然主義の平面描寫に似て、形骸、色彩を詳しく寫す方に傾き、神韻、精髓を逸したところがあつた。けれども現實の洗禮を受けないロマンチシズムの文學によく見る缺陷を補ふ上で（當時にあつては）一つの意義を有した。つまり、寫生文は、ゾライズムの精神を小品文の上に結晶したもので、また一面では、おぼろ氣ながら自然主義文學の新興を豫示したところがあつた。

それから寫生文は近代科學的精神にもとづいて、唯物的、散文的なところを長所ともし、また短所ともしたが、美文は當時新たに勢を得はじめた新體詩と比して、詩的精神にもとづき、唯その形式を自由にしたものである。それは今日の散文詩と同じ意味合を含んだ。寫生文は何處までも、科學的精神によつて事物の眞に徹し、精確、周密を旨として、些末の事象をも細かく觀察し描寫しようとしたが、美文は本來、散文詩のつもりで生れたので、寫生文のやうに科學的精神の上に基礎を置かなかつた。從つて事物を描寫するにも、その神韻を窺ひ、精髓に觸れることにつとめ、些末の事象、枝葉の形態は措いて問はなかつた。そしてヨーロッパの散文詩、小品などから暗示を得て、描寫叙述の上に新味を加へやうとしたところがあつた。けれども寫生文のやうに「眞」を主眼とせず、飽迄「美」に徹しやうとしたのである。

美文が流行し始めたのは大町桂月、武島羽衣、鹽井雨江三氏の『花紅葉』が出た頃からであるが、その先驅をしたのは森鷗外氏落合直文氏等で、次いで『文學界』の人々が早くこの方面の開拓に從事した。勿論、美文の名稱は『花紅葉』以來旺んに用ゐられるやうになり、それに對して新體詩のことを韻文と云つた。『花紅葉』の序文を見ると、桂月氏は「美文を花になずらふるも可なり、韻文を紅葉とみはやすも亦妨げず、花や紅葉や、これ天の文、美文や、韻文やひとしくこれ詩なり、而してその字句に拘束あるものを韻文といひ、拘束なきものを美文といふ。議論叙述の文、絢爛を極むるも、美文となさゞるは、その本質、詩にあらざればなり、小說は一種の美文なるべく、文學の大綱、韻文、戲曲、小說にしてつくといへども、なほこまかに分たば、この三者の外に、純粹の美文あるべき乎。今こゝに美文といへるはやがて是にして、小說と戲曲とは、また玆に及ばず。」と述べてゐる。

それによると、桂月氏らが散文詩のつもりで「美文」を書いたことがわかる。けれども『花紅葉』のうちには、散文詩と目することができない、性質の物も這入つてゐるので、嚴にいふと、それを新國文若くは新散文と稱した方が適當してゐた。實際、美文と稱した物のうちには、普通の紀行文もあり、叙事文もあつて、唯その表現がいくらか新しく、

美しいといふ丈にすぎぬのも少くなかつた。それらを散文詩といふことが出來ぬとすると、美文は實質上、新國文とか新散文といつた方がふさはしいが、さうした詮議は玆に略して、以下美文の流行について述べやう。

「二」

思ひ出すと、可なり古いことだが、明治二十一年、三宅雪嶺氏らによつて、歐化主義に對抗すべき國粹主義が唱へられ續いで國文學が勃興した時分、落合直文氏は舊來の國文（和文）に慊らないで、新しい趣味、新しい表現を主とした新國文を創作した。直文氏は短歌革新の事にも先驅したが、國文革新にもまた先驅したのである。

當時、直文氏は國文學者のうちで、餘程現代的精神を持ち、すべて新しい方へ志した。それにヨオロツパから新たに歸朝した當時の新人、森鷗外氏とも親交があつて、いくらか西洋文學の話をも聞き知り、國文の上に新しい風味を注入しやうとつとめた。かうして氏の國文は在來のものよりも新味があつて、文壇の一角に異彩を放つた。氏の作品は『しがらみ草紙』及び『新國文』といふ雜誌に時々出たやうに思ふ。直文氏と親交ある森鷗外氏が早く國文の形式を以て、その新詩想を表現し、或は小說を書いて、事實上「美文」の一體に先驅したのは偶然でない。唯鷗外氏はそれらを「美文」と云はなかつた丈だ。この點が桂月氏らとちがふ。

今日の若き人たちは國文で小說を書くのを奇異に思ふかも知れないが、言文一致體、口語體がまだ普及しない當時には誰れもそれを怪まなかつた。寧ろ當然とした、鷗外氏がその處女作『舞姬』をはじめ『うたかたの記』『文づかひ』などを國文體で書いたのは、さうした事情にある。それに新國文がその時分、讀者間にも、よろこばれたのである。私は曾て「文づかひ」の內容を紹介して左の如く云つた。

『文づかひ』は一番優れてゐるやうに思はれる。女主人公イイダ姬には、自分の個性を何處までも保つてゆかうとす

る新代の女性の俤がある。イイダ姫は、父が強ひて纏めた許婚の年少士官メエルハイムに眞の愛を感じないで、孤獨を通してゆかうとする美しい、そして意地の強い、何となく淋しい女である。鷗外はさうした特殊の女をよく描いた。イイダの周圍、家庭、姉妹、軍人などの配合も具合よく出來て居る。唯イイダを慕ふ可憐の牧童を挿んだのは、宜い思ひ付ではあるが、作爲に過ぎた。だが、イイダ姫の特殊印象は彼の女の騎乘姿を先づ出したところから、ロマンチックの色彩が強い。「すこし引下がつて白き駒控へたる少女、我が目がねはしばしこれに留まりぬ。鋼鐵ぐろの馬のり衣裾長に着て、白き薄ぎぬ卷きたる黑帽子を被りし身の横けだかく、今かなたの森蔭よりむら／＼と打出でたる獵兵のいさましさ見むとて、人々騷げどかへりみぬさま心憎し。」と叙して、その名を出さないで、ビュロウ伯の晩餐會のところで「食卓に就きてみれば、五人の姫達みなおもひ／＼の粧したる、その美しさいづれはあらぬに、上の一人の上衣も裳も黑きを着たるさま、めつらしと見れば、これなんさきに白き馬に騎りたりし人なりける。」とイイダ姫の印象を一段鮮かにしてゐる。（下略）

以上によつて鷗外氏がどういふスタイルを以て小說を書いたかゞ察せられる。鷗外氏は國文の形式によりながら、比較的に國文の短所、弊套に囚はれないで、新しい描寫をすることに骨を折つた。そこに一つの意義があつたと思ふ。そして氏はひとり、右のスタイルを小說の上に實現したのみならず、ヨオロツパ文學を飜譯するについても亦やはり、同じスタイルによつた。それは『うもれ木』『ふた夜』『悪因緣』などいろいろある。勿論、鷗外氏は一面に於て『玉を懷いて罪あり』のやうに、言文一致體を用ゐて飜譯したこともあるが、大抵の場合、國文體によつた。それら全體を通ずる趣致は上品で優雅であつたが、何となく、氣力、生氣に乏しく、平板な嫌ひがあつた。氏の老手を以てしても、やはりさうした短所を除き去ることが出來なかつたのである。が、美文の先驅として氏が以上の成績を收め得たのは、やはり氏が卓越したことを示したものと云へる。

鷗外氏の行き方を學んだ人に令妹小金井喜美子さんがある。が、大體、鷗外氏の風趣を模したにすぎない。他に於て注目すべきは『文學界』の一派である。この派の人々は新國文によつて、その感想を表白した。北村透谷氏を始め、上田柳村、平田秀木、馬場孤蝶、島崎藤村、星野天知、戸川秋骨の諸氏は皆ヨオロッパ文學に親んだ人であつたが、スタイルの上では寧ろ在來の國文體に據つた。それは一見、矛盾してゐるやうだが、總じて文體は時代の好尙に左右せられやすいので、當時、新國文體がよろこばれたとき『文學界』一派がそのスタイルに據つたのはあながち矛盾ではなく寧ろ正當適切であつた。

正直にいふと、私は思想上『文學界』一派に共鳴しなかつた。當時私はあの一派の人々の感想に接して、餘りにそのセンチメンタルにすぎると思つた。またそれがいかにも女々しいやうな氣がした。私はもつと男性的文學を要求した。それにも關らず『文學界』に一味の愛着を感じたのは、この一派の人々の文章が優雅、流麗なうちにいくらか清新味を有し、一脈の詩情が靜かに波打つてゐたからである。

「一」

實質上、『文學界』の人々は皆詩人であつた。すくなくとも、當時に於ては靑春多感の詩人だつた。勿論、柳村、秋骨二氏などは主として評論の筆を執つたが、その評論にも一脈の詩情を湛えてゐた。後になつて、柳村氏は學究的になつたが、その幽韻徴韻の趣が文學に必要な所以を說き、南歐の天地にあこがれた初期の柳村はやはり一個の詩人と云つてよかつた。さうした傾きは、これを秋骨氏の上にも見ることが出來た。禿木氏とても同樣で、以上二氏にゆづらぬ詩的性情の所有者であつた。

更に透谷、藤村、孤蝶、天知らの人々は情熱を以て生命としてゐたやうに思はれる。といふと語弊があるが、この四

人は當時抑へ切れない青春の情熱に燃えてゐた。殊にその傾向が著しいのは透谷、藤村二氏である。孤蝶氏にはイギリス紳士のやうなところがあつて、常識肌か、ともすると、情熱の奔放を抑制したやうに思ふ。孤蝶にくらべると、天知氏の方がいくらか情熱が強く、時に心熱が高潮したことがあつたやうだ。

既に『文學界』の人々のすべてが詩人であつた以上、その叙情文、小品文の類は、桂月氏らが唱へた「美文」よりもより多く詩味に滿ち、散文詩にちかいところがあつた。『花紅葉』の著者はいづれも常識的の人々で、唯桂月氏がいくらか情熱にすぐれてゐたといふ迄である。羽衣、雨江二氏は穩健な教育家で新代の詩人たるには餘りに常套を脫しきらぬところがあつた。勿論『花紅葉』の人たちは、帝大國文科の出身だけに、スタイルの上に長じてはゐたが、詩情には乏しかつた。それにくらべると『文學界』の人々は詩情が割合にゆたかで、スタイルの上でも『花紅葉』の人々に讓らなかつたのである。さうすると、「美文」といふ點では、『文學界』一派が內容、形式の上で略ぼ成功したといふことが出來る。

『文學界』一派の傾向は北村透谷氏が最もよく代表してゐる。無論、個々人について見ると、いくらか異つたところがあるが、一卷の『透谷選集』を讀むと、『文學界』全體の空氣に接した感がある。透谷は未完成の人であつたが、著しい個性の所有者で、『文學界』のうちでも異彩を放つた。それだけに彼れの感ずるところ、思ふところは同人に先驅したところがあつた。藤村氏が『一葉舟』に書いた散文の俤、天知氏が『骨堂に有限を觀ず』と述懷した俤、『草堂書影』を書いた禿木氏の俤、その他同人の俤は、これを『透谷集』のうちにも徵することが出來る。例へば透谷の『山庵雜記』『秋窓雜記』『富獄の侍神を思ふ』『一夕觀』『我牢獄』『哀詞序』などの諸篇を讀むと、『文學界』そのものに接するやうな氣がする。勿論、柳村の明るい南歐情調、秋骨の洒脫な氣分とはすこし隔りがあるけれども、その他の諸氏の傾向は以上諸篇と共通したところがある。卽ち暗い厭世的な心、眞面目に宇宙の根本生命に觸れやうとする心、さうした心が透谷氏の文にくつきりと表現せられてゐる。それと同時に唯美的傾向乃至藝術至上主義の考へが表示せられてゐる。それを引く

るめると、つまり强烈なロマンチシズムの心そのものだと云へるであらう。

透谷の文章は必ずしも精錬せられたものではない。字句蕪雜なところもあり、修辭上の工夫の足らぬところもある。けれども一道の眞氣が人を打つて、不知々々讀ませしめる。それは透谷のみでなく、『文學界』の人々は形式、修辭の上よりも内容、質實の上により多く長じてゐた。それも今日見ると、幼稚な點もあるが强烈な主觀の燃燒が先づ内容をゆたかにすべき一因となつた。透谷の詩文に力があるのはつまり主觀の燃燒による。藤村に於ても、天知に於ても、禿木に於てもこの傾向が見えた。かうして『文學界』一派の美文は主としてその本質に於てすぐれたのである。嚴に見ると形式、修辭の上では尙ほ到らぬところがあつた。それは到底、鷗外氏の洗錬したスタイルに及ばないのである。今、透谷氏の『山庵雜記』の一節を引かう。

夢見まほしやと思ふ時、あやにくに夢のなき事あり、夢なかれと思ふ時、うとましき夢のもつれ入ることあり。寢むる時亦た斯の如し、意はざらんと思ふに意ひ、意はんと思ふに意はず。去りとて意の如くならぬをば意の如くせまじと思ふにもあらず、靜に傾き盡きなんとする月を見れば、よろづ意に儘のならぬものぞなき。徐ろに咲き出づらん花を待つに、よろづ心に任せぬものぞたき。如意却つて不如意。不如意却つて如意。悲むも何かせむ。歡ぶも何かせむ。『無心』を傭ひ來つて、悲みをも歡びをも同じ意界に放ちやりてこそ、まことの樂は來るなれ。（下略）

右の一節はスタイルの上に於て尙ほ充分の洗錬を經てゐないが、一篇の散文詩を讀むやうな感じを與へる。それは内容に於て詩情が流露してゐるからである。もしスタイルの上にもつと美しく、もつと練つたところがあつたら、更に讀者を牽引する力が强いであらうと思ふ。要するに『文學界』一派は主として本質上「美文」の先驅をしたのである。

「四」

以上の如く、美文の系統は落合直文、森鷗外氏らを經て、『文學界』に及び、更に『花紅葉』の出現となつたのである。『花紅葉』が出たのは明治二十九年十二月である。この書が出て青年に歡迎せられると、久保天隨、戸澤姑射、淺野馮虛三氏の『白露集』が出た。それから大和田健樹氏の『雪月花』馬場孤蝶氏の美文集、桂月氏の『黄菊白菊』などが續出した。その他、この種のものが一時、いろいろの標題を冠して出た。川上眉山氏の『ふところ日記』高山樗牛氏の『わが袖の記』なども、やはり、この潮流に乘じて出たのである。

かうして『花紅葉』は美文流行を促がすべき一勢力となつた。それに於て、大町桂月氏は『病院』『荒寺』『須磨の一夜』『夢の跡』『日光山の奥』などを書き、鹽井雨江氏は『折太刀』『ゆく水』『笛の音』などを書き、武島羽衣氏は『秋の山ぶみ』『露分衣』『春の夢』などを書いた。そのうちで雨江の『折太刀』桂月の『須磨の一夜』などは佳作であるが、内容は左程でもない。唯修辭の美に於てすぐれたところがある丈だ。これを『文學界』の人々にくらべると、人生の見方に於て、思想的態度に於て、遙かに劣つたところがある。

ところが、『白露集』になると、馮虛、姑射二氏の作品は寧ろ內容に於て、『花紅葉』を壓倒してゐた。勿論、この二人は帝大英文科の出身で、ヨオロッパ文學に親んだところから、自然、その方面から暗示を得て、小說風の物を書くにつけても、新しい結構、新しい着想に凝つた。例へば、馮虛氏が高橋お傳の半生を描いたものなどは、毒婦の心にも純情が閃めいてゐることを示し、人情の一面に深く觸れたところがあつた。

が、「美文」といふ一つの固定した形式が出來るやうになつてからは、それに束縛せられた氣味が漸く生じ、將來自由に伸びてゆくべき望みがなくなつた。私なども「美文」に熱中して『暮雲』『遊子』『わが散文詩』など三冊の單行本を出したが、やはり、「美文」の形式に囚はれすぎて、徒らに修辭の美にのみ心を勞したのである。

さていふ點に起つて見ると、川上眉山氏の『ふところ日記』は自由無碍なところがあつた。氏は夙に俳文の素養があ

り、その上、あれを書いた時分は哲學に凝つてゐたので、內容、修辭共にすぐれ双方ぴたりと一致してゐた。私がそれを見たのは明治二十九年の冬頃であつたかと思ふ。それが單行本となつて、新潮社の前身、新聲社が出たのは明治三十四年である。

私が『ふところ日記』を雜誌で讀んだとき、その冒頭「東瀛に物あり、曾て名づけられて玉卿といふ。化して眉山となれる時、愚なる事太郎兵衞殿の黃牛の如し。三年この方物狂はしくも哲學を疑ひ、宗教を疑ひ、世を疑ひ、我を疑ひたりし果は、此肉と骨とを粉碎せん事を思ひ、遂には了々の眞を見出し得ざる痛癢まぎれ、目に障るべき凡ての物を無法無徹に打破し盡して、强ひて快を呼ばんとしたる去年十二月末つかたなりけむ、突如として一道の光明に接したる其時此時、心機がらりと一轉して、思知らず十幾年ぶりの嬉しさに醉ひたりし其心。」云々とあるのに先づ心を惹かれた。眉山のさうした氣分が全篇に滿ちて、飄逸、洒脫なうちに一道の眞情、眞氣があつて、捨て難い情味を感じた。これを『花紅葉』のうちにある紀行文などにくらべると、遙かに垢ぬけがして、一段立優つてゐた。樗牛氏の「わが袖の記」も『ふところ日記』には一歩を讓るやうに思ふ。

かうして美文の一體は、日露戰爭前頃までその命脈を維持したが、自然主義が起らうとする頃には寫生文に壓せられて、次第に衰えた。田山花袋氏の『ふる鄉』なども、やはり、美文として書いたといつてよいが、その內容は宮崎湖處子の『歸省』に似て、それよりも一歩を進めてゐた。兎に角、詩の心に即して、ロマンチツクの傾向を示し、修辭の美につとめた美文が一時流行したことは必ずしも無意義ではない。文學的進步の一道程として振返つて見る丈の價値がある。

「五」

美文に次いで寫生文が新興したのは明治三十二年頃である。本質上から云ふと、寫生文は寫實小說が唱へられた時代

からもう始められたと云つてよいが、寫生文の一體が明かに提唱されたのは、明治三十一年、『ホトトギス』が創刊せられてからだ。その主唱者は正岡子規氏である。子規が寫生文に思ひ及んだのは、俳句の上に用ゐた寫生の心持を文章に應用しようとした結果である。當時、子規は俳句革新と共に短歌革新にも想ひ到つたが「山會」と云ふ文章會を開き、同人を子規庵に會したとき、「寫生文を始めやう」といひ出したのである。

子規氏が文章會を「山會」と云つたのは、寫生文に一つの「ヤマ」がなくてはならぬ。興味を惹くべき焦點「ヤマ」がなくてはならぬといふ理由にもとづく。子規はさうした呼吸を人々に說き示すために、『水滸傳』輪講をはじめた。『水滸傳』といふと、今の若き人々は丸で誇大な文章で固められた結晶品のやうに思ふ人もあるが、實は全體が寫生の旨を得た文章から成り、すべての人と光景とを如實に再現してゐる。例せば快漢武松が猛虎を打ち殺す一段などは描寫の上に迫眞の妙があつて、層々光景を展開してゆくところは再三讀んで倦がない。子規氏が『水滸傳』に共鳴した一つの理由はさうしたところにあつたと思ふ。

子規氏はいつも自分の主張したことを具體化して見せる人であつた。それで自ら進んで寫生文を提唱したとき、先づ氏自身がその模範を示すことにつとめた。『子規選集』のうちに收められてゐる『小園の作』『ラムプの影』『熊手と提灯』『根岸草廬記事』などは、初期の『ホトトギス』曾て私が偶目したものである。

元來、子規氏は小說の上に發展したといふ考へを早くから持つてゐた。さういふつもりで『花枕』などを書いたが、その結果は氏が期待してゐた點まで達しなかつた。それはひとり、子規のみでなく、虛子、碧梧桐らも子規に勵まされて、二三の小說を書き、『中央公論』の前身『反省雜誌』にも出したが、やはり、思はしくゆかなかつた。かうして子規は小說に一旦失望したが、今度は小說の土臺となるべき寫生文の方へ心を向け、それへ力を傾けることにしたのである。結局その努力の末はやはり、小說に辿りつくわけで、虛子、漱石、三重吉三氏が寫生文の畑から出て、小說を書き續け

るやうになつたのは偶然でない。

さういふわけで、子規氏の寫生文のうちには『墓』などのやうに、短篇小説として上乘の物がある。『熊手と提灯』も小説にちかい、蓋し子規の寫生文は寫生の長所を發揮して、而もその短所を巧みに避けてゐる。すくなくとも、短所らしいところを見せない。子規以外の人になると、寫生文の長所と共に短所を具してゐるのが多い。この點に於て子規の用意が最初から平凡でなく、行き屆いてゐたことがわかる。

子規氏の寫生文の範圍はひろくない。始終病床に引籠つてゐたので、大抵その身邊のことを寫生することにしてゐた。『小園の記』は寫生文を提唱し始めた時分のもので、明治三十一年十月に書いたのである。それは普通の文章體によつて寫生を試みてゐたが、眼前口頭の光景を俳文風に叙して趣味が淺くない。『熊手と提灯』は三十二年十二月に書いたのであるが、それは正に寫生文に油が乘つた時分の作で西の市の情趣、光景を如實に描き、寸分の隙がない。熊手をかついでくる人間の様子や、それに對する子規の感じなどを述べて、人生の一角を切り取つたやうに見せてゐるのは老手だ。それはよく寫生文の骨法を得てゐる。

以上の如く、子規氏が一度『ホトトギス』で寫生文を皷吹してから、それに倣ふものが輩出した。虚子、四方太、鼠骨、三重吉氏は、いづれもこの方面に熱心であつた。また子規氏の友人として、夏目漱石氏が寫生文に筆を着けるやうになつた。後に佐藤紅綠氏が小説を書くに至つたのも、やはり、寫生文の刺戟による。

「六」

寫生文に於て、子規氏の風格に追隨する趣を示したのは高濱虚子氏である。氏は始終、子規の指導を受け、子規によつて啓發されたことが少くない。それに子規が始めた寫生文には最初から共鳴して續々この方面に氏獨自の作品を示し

た。それは主として『ホトトギス』及び『國民新聞』に出た。

氏の寫生文は人を寫すにも、情景を寫すにも精細、周到を極め、才氣が溢れてゐる。どれを讀んでも面白い。その代りに時々些事を寫しすぎて神髓を逸し、枝葉や部分に力を入れすぎて、根幹、中心を閑却するやうな時がある。つまり氏は不知々々形態、色彩に氣を取られ、それへ目を注ぎすぎて神髓に想ひ到らぬやうな傾きがあつた。そのために、折角の描寫が時に煩鎖な感じを人々に與へた。つまり、氏の寫生文は長所も短所もはつきりしてゐる。が、何を寫生しても、氏一流の妙趣を湛えて、讀者を飽かしめない。曾て讀んだ『屁』の一篇などは俳味津々として盡きないのを感じた。

かうして氏の寫生文が行きつくすところ迄ゆくと、玆に長篇小說『俳諧師』となり、小說家としての地步を確持した。この事は他日、別に述べるが、兎も角、自然主義文學に對して、別に一派を爲した寫生的小說は文壇の單調を破る上に充分の功があつた。

虛子のほかに夏目漱石もやはり、寫生文を書いたが、『幻の盾』『倫敦塔』などは、明かに寫生文の行き方をした。それに油が乘つて『吾輩は猫』を書いたのである。それは虛子の『俳諧師』よりも三四年前に出たから寫生文派に於ける長篇小說の嚆矢を以て目すべきものだ。最初『ホトトギス』に連載せられると、非常に讀者によろこばれ、『ホトトギス』はそのため、賣高を增したと傳へられた。漱石氏は自ら『吾輩は猫』に序して『此書は趣向もなく、構造もなく、尾頭の心元なき海鼠の樣な文章であるから、たとひ此一卷（上卷）で消えてなくなつたところで一向差し支へはない。』と云つた。それは氏の謙辭であるが、當時にあつては確かに奇想天來とも云ふべき作品であつた。

寫生文といふと、大抵單調な小品文にすぎぬと思惟した人々に對して、「吾輩は猫」は寫生文のために氣勢を揚げた。それは俳趣味を基調とし、英文學を骨肉として、寫生の外容を備へた混合體のものであつたが、兎も角、單に寫生文として見ても、興味深く、且つ變化があり、波瀾があつて、單調に墮してゐなかつた。唯全體としては、くどいところが

あり、冗漫に流れたところがあつたが、概して寫生文のよいところを攝取してゐた。

或意味から云ふと、『吾輩は猫』は虛子氏の『俳諧師』が出る前に旣に寫生文の到り着くべき頂點を示した觀がある。四方太、左千夫、鼠骨の三氏も寫生文家として、それぞれの長所を示したが、やはり、虛子氏のやうに從橫無碍に筆を揮ふところ迄ゆかなかつた。また鈴木三重吉氏は、『俳諧師』以後の時代に名を爲したのであるから、結局『吾輩は猫』を以て、先づ寫生文の頂上を示した第一作だとせねばならぬ。

それから寫生文が當時の文壇を刺戟して、小說家の一部に寫生氣分を起させたことは天外、風葉氏らの作氏に徵しても明白である。それに左千夫氏の『野菊の墓』長塚節氏の『土』などは、三重吉氏の『小鳥の巢』などと共に寫生文の畑から育つた、天外氏や風葉氏は小說以外、寫生文めいた小品を書いたことがあつたやうに記憶する。その他寫生文は一般普通の上にも影響し、物の見方、構法などの上に一味淸新の氣を賦與し、形式の「美」よりも、事相の『眞』を穿たりとする傾向を强めしめた一困となつた。それは「美文」が釀し出した弊害——形の美に囚はるゝ缺點を矯正する上に確かに功果があつたのである。以上の意味で日清戰爭殆ど十年間に亘つて一般的勢力があつた寫生文の流行は輕視し得ない。その開拓者正岡子規氏と大成者虛子、漱石二氏の功績は沒すべからざるものである。

歐洲文學の渡來と影響

高安月郊

明治の文學に重大な影響を與へた歐洲文學の渡來を回想すると、我等の青年の頃、丸善か東洋館――これは小野梓が小川町へ暫出してゐたので重に政治書であつた――そこらへ行つて見ると、いつも備へてあつたのは、シエクスピア、ミルトン、バアンス、ウヲーヅウヲース、スコツト、バイロン、ムーア、カンプベル、コールリツヂ、カウパア、テニソン、ロングフエロウなどの詩集、デキツケンス、サツカアレイ、スコツト、リツトン、デユマ、デキスレリイ、ユゴーなどの小說、マコーレイ、カアライル、アービング、エマアソン、ラムなどの文集などで、其影響の著るしかつたのは、マコーレイが德富蘇峰氏等に、カアライルが三宅雪嶺氏等に、アービングが志賀矧川氏等に、ウヲーヅウヲースが宮崎湖處子等に、バイロンが北村透谷氏等文學界の社中に及ぼした事で、私も或時はバイロンに共鳴して、チヤイルド、ハロールドやマンフレツドなどには山家集や杜工部集より痛切に感じたものである。それからゲーテのウエルテル、シルレルの「盜賊」ルウソウの「懺悔」などに及んで、愈々自覺した個我と人世との不調和に惱んだのは、丁度彼方の風雲時代に相當したので、それからローマン的時代に入つたのも同じ順序である、或時、ユーゴーの「九十三」を讀んで一驚した、フランス革命を取つて、其中に人道の葛藤を描いた奇想、斷崖絕壁的の文章、スコツトやリツトンの比で無いと、更に他の諸作をあさつた。其頃森田思軒氏が「隨見」の中から「モルテイール伯」「探偵ユーベル」など數篇を譯出したが、依田學

海翁までが感服して、文章上の細評をした位、殊にユーベルの結句

「然らばユーベルは飢ゑてありしなり」

には非常に苦心して人々にも謀つたといふ。私も取りよせて見たら、一本に

「それではユーベルは飢を知つた。」

とある。どちらが適當か、原文を調べたら好かつたにと思つた。兎に角其位一句にも念を入れたものである。次で森鷗外氏がドイツの女流作家、オシツプ、シユビンの「天才の話」を「埋木」として譯出したのや、長谷川四迷氏がツルゲネフの「遊獵者の記」から「あひゞき」と「めぐりあひ」を譯出したのも注意をひいた、國木田獨歩氏など後者の影響を受けたらしい。或時丸善へゆくと、ロンドンのビゼツテリイから出したゾラのルゴン、マクアル叢書の繪入本が來てゐた、其中の「彼の傑作」が尾崎紅葉氏の手に入つて「むき玉子」の模範になり、山田美妙氏の「いちご姫」の一部に取り入れられたといふ。

同時に「ロシアの現實小說」として、ドストイエフスキイが來てゐた。私は彼の名は始めてゞあつたが、ロシアの小說といふに興をもつて「罪と罰」「損害と侮辱」「白痴」「賭博者」「伯父の夢」など買て歸つて見て驚嘆した、ユゴーなどの外部の波瀾より深い心裡の葛藤に人物も一層近い所がある。それで「損害と侮辱」を譯して公にしようとしたが、出す所がなかつた。數年立つて京都の「同志者文學」へ出しかけたが、編輯者が變つたので中絕した。「罪と罰」は內田不知庵氏が譯出されたが、半分で止まつたのは、まだ早過ぎたのである。或日尾崎氏の處で落ち會ふと、主人は「ロシア文學は血の出るビフテキ、日本のは洗ひだね！」

西洋でも一般的になるには早かつたか、ビゼツテリイがゾラの作を禁止の厄に逢うて破產した爲、豫告してあつた「カラマゾフ」其外も出なくなつた。

二十三年、私は、スキンの「近代劇家」の餘白の廣告で見て、イプセンの「散文劇」をアメリカから取り寄せた。「人形の家」始め八種二卷で、これはまたゲーテ、シルレルより一新した着想、技巧に驚いて更に「ブランド」「ピール、ギント」「ヘダ、ガブラア」など、其頃出てゐる丈探し集めた。「社會之敵」を譯して、「同志社文學」へ出したのは二十六年三月同四五月「人形の家」を大阪の「一點紅」へ出した。これもまだ早過ぎたか、其頃京へ尾崎氏が來た時「妙な物に手をつけましたね、今度はホッテントチアの文學にしてはどうです。」

其後三十四年、東京專門學校から文學叢書を出すに付て、右二篇をまとめて、イプセンの評傳をそへて出した、今度は稍注意を引いたらしいのは「社會之敵」の事で、ストツクマンの演說の場は面白いと、よく聞いた。三十五年、川上音二郎が西洋から歸つて來て、一旗擧げようとすると、私が先づシエクスピアの「リヤア王」を飜案して新派にやらせたので、それを介してやつて來て、兼てイプセンに付て尋ねようと思てゐたといふ、しかし「江戸城明渡」を書てゐたので、これを上演したが、其序にノラを貞奴にと本を渡したがそれきりになつた。其後河合武雄にも勸めたが、やるなら原作の儘でやりたいと云てまた成立たず、更に幾年の後須磨子が演じたのを見ると、久しく逢はなかつた熟知の人の聲を聞く氣がした。

イブセンと同時にツルゲネフの「父と子」等六種を取りよせたが、ドストイエフスキイが先に入つてゐたので、それ程印象を受けなかつた。長谷川氏が「ルディン」を譯したのはいつ？　しかし氏にも彼よりゴンチヤロフの影響が著るしい。「平凡」は彼の「平凡の話」を模型にした痕が明。川上眉山人が晩年にトルストイの「アンナ、カレニナ」を研究したといふがレウヰン程活路を見出さなかつた。メレディスを夏目漱石氏が藥籠に收めたのはいつ？私は三十五六年から見出したが、露佛の小說ほど親しめなかつた。

英の小說より、詩の方が尙多く蓄つて、キーツに薄田泣菫氏が親しまれたのは二十七八年。更に遡つてダンテを得ようとして、ロングフエロウの譯より、ケリイの方をと思つても見つからず、圖書館で寫して、地獄を終る頃やつと神田で

見出されたといふ。シエレイは私も三本木にゐた頃、其詩よりも多く其一生に自分と似かよふ所があるので愛讀して、「シエレイを吊ふ」一詩を作つたのは三十六年。丁度ローマでキーツの死んだ家を「キーツーシエレイ記念館」として二人の著書から、關係書類一切を集め出したのを聞いて、其詩を收めた「春雪集」を送つたら、次の大會に出席を求めて來たが、シエレイほど懷が裕で無かつたから、空しく其目錄をくりかへした。

フウヰツトマンの詩文を手にしたのは三十一年頃、既にバイロンを脫してゐたが、愈々纖細なシエレイに傾かうとした頃で、新開地の草の葉は粗剛に過た、廣く行はれ出したのは四十年近くであらう。

ニイチエが高山樗牛、登張竹風氏等に受け入れられたのは三十四年頃か。私も彼とイブセンとの比較講話をやつた事があるが、其思想を其儘是認したので無く、思想と人格との矛盾に悲劇を認めたのであつた。

ロセツテイの詩集が種々の版で來たのは三十六年の暮。蒲原有明氏等が親しまれたのも其頃か。私は其頃洋畫家の事を傳へてゐたので、翌年へかけて彼や、ラフワエル前派に關するもの「芽」の複刻など取りよせ、其樣な詩と畫と音樂を合せた雜誌を出さうとしたが、見はてぬ夢になつた。

ヴエルレーン、バウドレヤア、ワイルドなどは其跡、ダンヌンチヨ、メーテルリンクなどは三十六七年頃からそろ〳〵入つて來た。

回想すると、英に始まつて、佛になり、獨になり、露になり、北歐になり、南歐になり、順序も向で出た年代を追うてゐる、受け入れるも同じ進化を要したのである、然も向が百餘年、各國相刺戟して進んで來たのを、三四十年で追ひつかうとしたのであるから、其努力、其苦勞、今と違ひ、向からどし〳〵來るので無く、取り寄せるにもどれ丈出てゐるか調べねばならなかつた。近代の人々のは小傳すら無かつたから要領を得るにも色々の物から探し出さねばならなかつた。其代り一でも始めて名作に接した時の感動、とても此頃の人の想像も出來ぬ位であらう。其頃の書で今も手元に殘つてゐるのは僅になつたが、年が立つほど情味が出て、其著者と共に其頃の自分を印象してある氣持がする。

晩年の正岡子規

島田青峰

晩年の正岡子規に關しては、最早私の筆を費すべきことが甚だ少いやうに思はれる。語るべきことが少いのではない晩年の彼が最もよく世間に知られて居り、子規を說くものと云へば必ずこの時代に限られてゐるからである。晩年の子規は一言にして云へば「病牀の子規」もう少し明かに云へば「病苦の子規」であつて、その病苦たるや殆ど局外者をして言を挾むを許さゞる底のものである。已に高濱虛子氏の長篇「柿二ツ」――小說ではあるが――をはじめ、晩年の彼に親灸した人々によつて、いろ〳〵彼に關して語られたものがある以上、今日我々がとかくの言を加へることは無益でもあり、困難でもあるやうな氣がする。けれども又一方から云へば、普く世に知られてゐるだけ、晩年の子規に關する資料は多いわけであるから、その點からいさゝか私の言を費す餘地が見出されるかと思ふ。

以下は私の見た「晩年の子規」の斷片である。纏まつた評論などではない。又晩年の子規はこれに盡くるといふのでもない。たゞかく見たところに就てかく語るのみである。

○

子規の書いたものを讀むと、足が立たなくなつたのはよほど前からであるが、明治三十二年頃まではまだ一年に何回か車に乘つて外へ出る位のことは出來たやうである。常人ならば先づ日々の通勤先位の距離に行くのでも、彼の病體に在つては非常な大事件であり、その車上から瞥見する風物は、病牀に閉ぢ込められきりの彼にとつて、重大な收獲なの

であつた。だから彼は一度外出すると、大概それを何かの形に書いてゐる。それが三十三年になると、もはや大分病苦が募つて來て、車の外出もだん／＼困難になつたらしい。四月二十九日に伊藤左千夫を訪ふべく出かけたのが、「龜戸まで」「車上の春光」等の文章によると、その年はじめての外出で、然も私の知つてゐる範圍では、これが子規一生の最後の外出のやうである。

翌三十四年の「墨汁一滴」の中で、彼はこんなことを云つてゐる。

> 我病牀に於ける希望は初めより極めて小さく、遠く歩行き得ずともよし、庭の内だに歩行き得ばといひしは四五年前の事なり。其後一二年を經て、歩行き得ずとも立つ事を得ば嬉しからん、と思ひしだに餘りに小さき望かなと人にも言ひて笑ひしが一昨年の夏よりは、立つ事は望まで坐るばかりは病の神も許されたきものぞ、などかこつ程になりぬ。しかも希望の縮小は猶こゝに止まらず。坐る事はともあれせめては一時間なりとも苦痛無く安らかに臥し得ば如何に嬉しからんとはきのふ今日の我希望なり。小さき望かな。最早我望もこの上は小さくなり得ぬ程の極度にまで達したり。此次の時期は希望の零となる時期なり。希望の零となる時期、釋迦は之を涅槃といひ耶蘇は之を救ひとやいふらん。

以てその病勢昻進、苦痛增加の度を知ることが出來る。我々と雖も時に病の爲に籠り暮すやうなことが無いではないが、さういふ場合でも我々のはいつも外出休止の域にとゞまつてゐて、全く外出不可能に陷つたわけではない。即ち現在の自由は一時奪はれても、未來の光明はまだ失はれてゐないのである。それが一旦子規の如く、全然外出不可能になつてしまつた曉には、人間の生活は如何に索莫を極めたものになるか、固より我々が想像の外であらうと思ふ。

車上の外出ならともかくも出來た頃ですら、田舍から出た者と同じく「吾も東京を見たき一人なり」と云つてゐた彼が、病牀に釘付にされて後、如何に東京が見たかつたかは察するに難くない。三十五年の「病牀六尺」には「ずん／＼

と變つて行く東京の有樣は僅かに新聞で讀み、來る人に聞くばかりのことで、何を見たいと思うても最早我が力で及ばなくなつた」と云ひ、自らちよつと見たいと思ふものを一つ書きにして擧げてゐる。それは格別珍しいものがあるわけではない。「活動寫眞、自轉車の競爭及び曲乘、動物園の獅子及び駝鳥、淺草水族館、淺草花屋敷の狒々及び獺、見附の取除け跡、丸の内の楠公の像、自動電話及び紅色郵便箱、ビヤホール、女劍舞及洋式演劇、鰕茶袴の運動會」など數ふるに暇が無い、とあるからまだ〱いくらもあつたのであらう。文學者がつたり、俳人がつたりしない子規の天眞の面目がよくこの中に現れてゐる。子規の晩年に書いたものが殆ど病牀に於ける苦惱の聲でありながら、常にいふべからさる生氣を持つたゐるのは決して偶然ではない。

○

文人の不幸なるものは寧齋第一、余第二と思ひしは二三年前の事なり、今はいづれが第一なるかを知らず。（病牀六尺）

子規がかう云つたのは明治三十五年の五月末である。寧齋との比較はしばらく措くとして、子規の病苦は慥かに明治文人中の首に置かるべきものだらうと思ふ。

「をかしければ笑ふ。悲しければ泣く。併し痛の烈しい時には仕樣が無いから、うめくか、叫ぶか、泣くか、又は默つてこらへて居るかする。其中で默つてこらへて居るのが一番苦しい。盛んにうめき、盛んに叫び、盛んに泣くと少し痛が減ずる」とは、已にその前年の「墨汁一滴」でも云つてゐる言葉であるが、三十五年には益々その苦を加へてゐて、「絶叫。號泣。益々絶叫する。益々號泣する。その苦その痛何とも形容することは出來ない。寧ろ眞の狂人となつてしまへば樂であらうと思ふけれどそれも出來ぬ。若し死ぬることが出來ればそれは何よりも望むところである。併し死ぬることも出來ねば殺して呉れるものもない」と云つてゐる。「如何にして日を暮すべきか、如何にして暮すべきか」と繰

返し「誰かこの苦を助けて呉れるものはあるまいか、誰かこの苦を助けて、呉れるものはあるまいか」と繰返す彼の悲痛な叫びを讀む者は、今日に於ても猶「文人第一の不幸」たることを認めずには居られないであらう。

當時子規のこの文章を讀んで、手紙を寄せた人があつた。子規はその手紙を「甚だ余の心を獲たもの」として「病牀六尺」中に掲げ、且云つてゐる。「唯余に在つては精神の煩悶といふのも、生死出離の大問題ではない、病氣が身體を衰弱せしめた爲であるか、脊髓系を侵されて居る爲であるか、とにかく生理的に精神の煩悶を來すのであつて、苦しい時には、何とも彼とも致し樣の無いわけである。……（略）……たとへ他人の苦が八分で自分の苦が十分であるとしても、他人も自分も一樣にあきらめるといふより外にあきらめ方はない。此の十分の苦が更に進んで十二分の苦痛を受くるやうになつたとしても矢張あきらめるより外はないのである。けれども其れが肉體の苦である上は、程度の輕い時はたとへあきらめる事は出來ないでも、なぐさめる手段がない事もない。程度の進んだ苦に至つては、啻になぐさめる事の出來ないのみならず、あきらめて居ても尚あきらめがつかぬやうな氣がする。蓋しそれは矢張あきらめのつかぬのであらう……（略）……」

實に慘憺たる狀態であり、悲痛な文字である。私はこれらの文章を讀む每に、天の斯人を苦しむることの餘りに甚しかつたことを嘆ぜざるを得ない。さうして子規が斯の如き苦痛の間に、痲痺劑を服用して僅に苦痛の薄らぐのを利用して、畫を描いたり、歌や句を作つたり、この種の文章を書いたり（これは口授したことが多かつたのであらうが）したことを思ふと、格別の苦痛も無い自分の體を、ありがたく感ずると共に、健康な人間が如何に時間を浪費しつゝあるかを痛感せざるを得ない。子規は「笑へ。笑へ。健康なる人は笑へ。病氣を知らぬ人は笑へ。幸福なる人は笑へ。達者な兩脚を持ちながら車に乘るやうな人は笑へ。自分の後ろから巡査のついて來るのを知らず路に落ちてゐる財布をクスネンとするやうな人は笑へ」と云つてゐるが、これは到底笑ひ得る話ではない。正に肅然として自己を省るべきことである。

中江兆民が「一年有半」を著したのはたしか明治三十四年中のことだつたと思ふ。その死期の迫つてゐるに拘らず、從容としてこの種の著述を敢てするといふ點から、世評の甚だ高いのを聞いて、子規は「仰臥漫錄」にかう書いた。

兆民居士の一年有半といふ書物世に出候よし新聞の評にて材料も大方分り申候居士は咽喉に穴一ツあき候由吾等は腹背中臀ともいはず蜂の巣の如く穴あき申候一年有半の期限も大概は似より候ことゝ存候乍併居士はまだ美といふ事少しも分らずそれだけ吾等に劣り可申候理が分ればあきらめつき可申美が分れば樂み出來可申候杏を買ふて來て細君と共に食ふは樂みに相違なけれどもどこかに一點の理がひそみ居候燒くが如き晝の暑さ去りて夕顏の花の白きに夕風そよぐ處何の理窟か候べき

又別の箇所に

「一年有半」ハ淺薄ナコトヲ書キ竝ベタリ死ニ瀕シタル人ノ著ナレバトテ新聞ニテホメチギリシタメ忽チ際物トシテ流行シ六版七版ニ及ブ

とある。子規は「死ニ瀕シタル人ノ著」だから、といふやうな程度の同情が「一年有半」に集り、一方又自分の書くものゝ上にも加へられつゝある、といふことが不平で堪らなかつたのであらう。「仰臥漫錄」は三四年の手記で、右の文章も固より發表する爲に書かれたものではないが、翌年「病牀六尺」の中で又少しくこの事に言及してゐる。それは前に云つた「あきらめ」に關聯したことで、子規は灸を据ゑられる子供を例に引き、子供が灸はいやだと云つて泣いたり逃げたりするのはあきらめがつかんのであり、とても逃げてもだめだといふことを觀念して、おとなしく灸を据ゑて貰ふのは已にあきらめたのであるが、その子供が灸を据ゑられる間絶えず精神の上に苦悶を感ずるならば、僅にあきらめたのであつて、あきらめる以上の事は出來んのである」と云つてゐる。さうして若しその子供が灸を据ゑられる間に書物

を見るとか、いたづら書きでもするとかして、灸の方を少しも苦にしない、といふに至つて、はじめて「あきらめる以上」に達したのだといふのである。

兆民居士が一年有半を著した所などは死生の問題に就いてはあきらめがついて居つたやうに見えるが、あきらめがついた上で夫の天命を樂しんでといふやうな樂しむといふ域には至らなかつたかと思ふ。居士が病氣になつて後頻りに義太夫を聞いて、義太夫語りの評をして居る處などは稍々わかりかけたやうであるが、まだ十分にわからぬ處がある。居士をして二三年も病氣の境涯にあらしめたならば今少しは樂しみの境涯にはひる事が出來たかも知らぬ病氣の境涯に處しては、病氣を樂しむといふ事にならなければ生きて居ても何の面白味もない。（病牀六尺）

この言葉は前の「理が分ればあきらめつき可申美が分れば樂しみ出來可申候」といふ意味を敷衍したものと見るべきである。こゝに子規が用ゐた譬喩を用ゐれば、彼の「墨汁一滴」なり「病牀六尺」なりは、卽ち灸を据ゑられつゝある子のいたづら書きに類するものだつたのである。今手許に「一年有半」がないから、引用比較することは出來ないが、子規が兆民の裡に發見し得なかつたものは、蓋し美の天地、詩の世界で、それが缺如してゐるため、彼は「一年有半」に慊らなかつたのではなからうか。兆民と子規、「一年有半」「續一年有半」と「墨汁一滴」「病牀六尺」との根本的相異は、懸つてこゝに在るのではないかと考へる。

○

子規の健啖については、私は嘗ても一度書いたことがある。さうして「我々は、少くとも、この文豪の健啖に感謝していゝと思ふ」と云つたのであるが、御馳走論は實に彼の持論であつて、同時に彼自身その忠實なる實行者であつたことは、彼の書いたものゝ隨處に發見することが出來る。

「世の中に立つて一定の職業に從事し劇烈なる生存競爭に勝たんとせらるゝ諸君には御馳走を勸め申候」——これは彼

が三十二年中に「ホトトギス」に書いた「消息」の一節であるが、彼は更に御馳走の意義を解して、珍しいものを食ふ贅澤の謂でないと云ひ、具體的に云へば牛を食へといふこと、牛がなければ豚でも鳥でも魚でもいゝから食へといふのだと論じてゐる。さうして「坐つて居て頭腦を使ふ人は少量の食物より多量の滋養物を取らざるべからざる故猶更牛が宜しく候」といふのである。だから彼の門に出入する者は、皆この御馳走論の洗禮を受けた。「子規言行錄」中にある阪本文泉子の追懷によると、「少し血色の惡い者が來ると、直ちに捉へて御馳走論を説く。近頃は發句が出來なくて困るとか、頭が惡くていかんなどゝ言ふと、それは君が御馳走食はないからだ」といふやうな調子だつたらしい。

けれども子規を惱まし通した病魔は、この病牀の彼に殘された口腹の樂しみをも、遂には奪つてしまつた。三十四年の五月頃、彼は第一の臼齒が左右とも傷はれて、少しでも嚙み合すことが出來なくなつた。「かくなりては極めて柔かなるものも嚙まずに呑み込まざるべからず。嚙まずに呑み込めば美味を感ぜざるのみならず、胃腸直に痛みて痙攣を起す是に於て衞生上の營養と快心的の娛樂と一時に奪ひ去られ、衰弱頓に加はり晝夜悶々、忽ち例の問題は起る。人間は何が故に生きて居らざるべからざるか」——而してそこに左の歌がある。

さへずるやから臼なす、奧の齒は蟲ばみけらし、はたつ物魚をもくはえず、木の實をば嚙みても痛む、武藏野の甘菜辛菜を、粥汁にまぜても煮ねば、いや日けに我つく息の、ほそり行くかも

下總の結城里ゆ送り來し春の鶉をくはん齒もがも

菅の根の永き一日を飯もくはず知る人も來ずくらしかねつも

固より食欲が著しく減殺されたまでで、全然奪はれたわけではないから、これより後の「仰臥漫錄」に於ても、猶吾々の如き虛弱者を驚嘆せしむるだけの健啖の記事は發見し得るのであるが、病牀の子規が唯一の樂しみとしたところの食物は、この頃から漸く奪はれはじめたのである。三十五年の六月に至ると、彼は「去年頃迄は唯一の樂しみとして居

つた飲食の慾も、今は殆ど消え去つたのみならず、飲食共物が却つて身體を煩はして、それが爲に晝夜もがき苦しむことは、近來珍しからぬ事實となつて來た」と歎じてゐる。その英氣を養ひ、間接にはその事業を輔けた御馳走も、却て身體を煩はす因となる、子規の病勢は寔に悲しむべきであるが、然もその中から毎日缺かさず「病牀六尺」の稿を「日本」に送つてゐるに至つては、私などはたゞ恐れ入らざるを得ない。御馳走主義は病苦の爲に實行不可能となつても、その間に猶殘存する一脈の英氣は、嘗て御馳走主義の間から得來つたものだといふことを、誰か否定することが出來よう。私はこゝに再び繰返して云ひたい「我々は、少くとも、この文豪の健啖に感謝していゝと思ふ」と。

明治三十三年の十月、一時興津へ轉住の計畫などをしてゐた子規は、病苦が漸く加つて來た爲、今まで根岸草廬で每月催してゐた歌會、句會等を廢止することゝし、「ホトトギス」の「消息」に左の如く書いた。

成るべく靜養を旨としたる上に於て病氣に多少の間あらば日本とホトトギスとの上に力を盡すべく、此新聞此雜誌に小生の名現れ候間は六疊の病室に籠りてガラス越の日光を浴びつゝ猶ながらへ居候ものと御推察被下度候

この「消息」を認めた時の彼が、その未來に對して如何の想像を馳せたか、それは知らないが、彼は眞にこの言葉通りを實行したやうである。三十四年以後の「ホトトギス」に發表した彼の作物は、篇數に於てはさのみ多いとは云へないが、「病氣に多少の間あらば日本とホトトギスの上に盡す」の一事は、實にその通りであつた。彼が「天王寺畔の蝸牛廬」と「九月十四日の朝」との二篇を揭げた「ホトトギス」は、その訃報を載せた號であつたし、「日本」紙上の「病牀六尺」の如き、「晝夜の別なく、五體すきなしといふ拷問を受けた」といふ苦痛の間に、歿前二日まで續けられたのである。彼は又云つてゐる「人間の苦痛は餘程極度へまで想像せられるが、しかしそんなに極度へ迄想像した苦痛が自分の此身の上に來るとは一寸想像せられぬ事である」と。即ち極度にまで達した苦痛の裡に身を置きながら、猶かくいふことを止めなかつたのである。子規の一生はその最後まで、稀に見る奮闘の一生であつた。

「魔風戀風」のこと

小杉天外

明治二十年代と言へば、藝術作品の發表舞臺としては、讀賣新聞は實に、檜舞臺でありました。

明治二十八年四月に、『改良若殿』といふ小說を書きましたが、これが私の出世作をなした作品でありました。原抱一庵氏が、何處ででしたか、――多分『國民の友』誌上だつたと記憶してゐますが――長い批評を書きまして、またそれに舞臺が舞臺だつたといふこともありまして、小杉天外なるものが、はじめて世に認められたのでありました。それまでにも、書いてゐたことは書いてゐたのでしたが。

二十八年八月に、やはり同紙に『蝶ちやん』といふ八回ものを書きました（一回はまづ原稿紙三枚半くらゐでした。）これは上田敏氏一派から、しきりに酷評を受けたものでした。この八回ものの原稿料は、こんなことでも記錄に殘して置いたら何かの參考になるかも知れませんから申しますが、すべてで六圓でした。

明治三十五年に、やはり同紙に長篇『魔風戀風』を書いたのでした。その年の五月、私は小田原に越してゐましたがそこへ關如來氏が九月十四日に訪ねて來まして、長篇を書いてはといふ話がありました。その頃は、紅葉もかなり疲れてゐまして、ともすると作がとぎれ勝ちでした。時に私は、大阪毎日に『新婦人』といふのを書いてゐましたし、また『文藝界』にも何か書いてをりましたもので、その需めには應ずることが出來ませんでした。が、再度の勸めに遭ひ、明治三十六年一月三十日に、最初の一二行を書き出しました。そして、脫稿したのは九月十

四日で、新聞紙上では百九十回にわたつて連載されたものでした。言ふまでもなくこれが『魔風戀風』です。稿料は、この頃讀賣では一回（三枚半）一圓が普通でしたが、『魔風戀風』は、百回までは三圓五十錢、百回以後は四圓になりました。

この作品は、當時、萬朝報紙上で、本郷森川町邊に下宿してゐた或る看護婦が自殺したといふ記事からヒントを得て事實を調べ、それを基として書いたものですが、何分あゝいふ甘い筋のものでしたので、書いてゐるうちからあちこちで非難の聲を聽きました。が、新聞としては非常にあたつて、そのため新聞紙は再版を出すといふ新聞紙界の歴史に嘗つてなかつたやうな現象をもち來たしたものです。このことは、時の編輯長永田新之充、足立北鷗兩氏などは記憶してゐられることゝ思ひます。

その頃も今日と同じやうに、新聞の小説に對して讀者からの端書便りといふものがありましたが、或る時、平尾不孤――この人も早稻田では正宗白鳥氏等と同じクラスの人だつた樣に記憶してゐますが――といふ人がやつて來まして、同氏のはなしに、自分が大阪の某大新聞社にゐた頃、その時の連載小説の作者は自ら筆をとつて盛に端書便りを書いたものだつた、あなたも是非やれ、と言つて頻りにすすめたものです。けれども勿論私はそんなことはやりませんでした。すると同氏は、では自分がやつてやると申しまして、事實やつたやうでしたが、それからといふものは、端書便りといへばみんな同氏の仕業のやうに思へて、――勿論みながみな同氏の仕業ではありませんでしたが、――端書便りなるものに一向刺戟を感じなくなつてしまひました。こんな記憶もあります。

本野盛亨氏が小田原に來られた時に、私の宅へ訪ねて來られまして、『魔風』の好評を非常に悦んでくれられたことなぞも、忘れずに覺えてゐます。

この作品は、翌年東京座（いまの歌右衛門が芝翫時代、幸四郎が高麗藏時代）で上演されました。

春陽堂の手で、やがて單行本とされましたが、私としてはこれによつて印税といふものをはじめて得ることが出來たものです。當時の印税は、初版三千が一割、再版からは一割五分といふ相場でした。

この作品は、前にも一寸申しましたが、世間から、主として新聞雜誌から、手ひどい非難攻撃を受けまして、特に正岡藝陽といふ人などは、わざ〳〵この作のために、淫蕩文學といふ書物を書いて、私の攻撃につとめたものでした。

その頃の文藝界は、一口に言へば甚だ混沌たるものでした。批評家としては、森鷗外氏がありましたが、いまの批評家のやうに突込んだ批評はあまりしませんでしたし、高山氏などのは大體論で、少しも突込んだものはありませんでした。――批評家はやはり、作者とは觀察も異つてゐたし、單に書物を讀んだといふに過ぎない人が多かつたやうでした。作者は、めい〳〵自分の研究によつて、制作態度をきめて行きますから、いまよりも作品がぐつと個性的であつたやうに思ひます。とにかく、いまよりも全力をあげてあたつたやうでした。

當時の文藝界の潮流は、描寫といふものが即ち藝術だ、描寫の完全が藝術の完全だ、といふことになつてゐました。それが、自分としては甚だあきたらなかつたのです。紅葉の描寫なぞも、自身の調、型にのみ捉はれて書いてゐましたので、自身ではとにかく、讀む者にとつては浪花節でも聽くやうな調子のものが多かつたのでした。かういふものではあるまい、私はさう思ひました。それで、私は、會話なぞもずつと現實に近いものにしようとつとめました。意味ばかりでなく、音をも、現實のままにうつし出さうとつとめました。

それに、私は、風俗といふものに小説家はもつと忠實でなければならないと思ひまして、その方の努力も出來るだけはしてみました。ともすると、當時の作家のものは、あまりに作者にとつて都合のよい、實寫とは遠いものばかりであつたやうです。

餘談ですが、『魔風』は大正三年迄もとの儘で增版し、それ以後縮刷にし、震災で燒け、目下また縮刷を印刷中です。（談）

露伴『風流微塵藏』の一班

柳田泉

一

若し文豪露伴の明治小説壇に於ける文學活動を二十一二年頃から四十年頃にわたる約二十年間として、これを假に初、中、晩の三期に分けると、『風流佛』『一口劍』『對髑髏』『五重塔』が其初期たる二十四五年迄を代表し未完の傑作『天うつ浪』が晩期の四十年前後を代表するに對して、中期なる二十五六年より三十年前後を代表するものは、『露伴叢書』中の諸作よりも、寧しろ『風流微塵藏』の五集でなくてはなるまい。『風流微塵藏』は、未完ながら露伴作中無二の大作であるのみならず、二十五六年より三十年前後へかけての明治小說壇に於ける第一の收穫であるとわたしは考へる『風流微塵藏』とは、『さゝ舟』『きくの濱松』『ひとり寢』『雲の袖』『もつれ絲』の五篇に作者が冠した總名である。

此の期の露伴の作風なり特色なりを、『風流微塵藏』を通じていさゝかうかゞへば、中期に於ける露伴のうつす世界は前期に好んで描いた神韻漂渺といつたやうな空靈的な架空的な詩人特有の世界ではなく、大抵日常茶飯、現實凡俗の世界である。前期には自己の創造の狹い人生から殆んど出てゐるところがないが、此の期ではあるがまゝの人生を觀察し描寫する方に大に近づいてゐる。描く人物も、前期の作品の如く、その悉くが意氣の烈しい露伴の分身ではなく、客觀性のある、あるがまゝの人間に近いものを描いてゐる。理想小說は理想小說でも、其理想は現實を抽象した理想である。

此の傾向は、既に『いさな捕』には見えてゐたとはいへ、他の前期の諸作には殆んど見えなかつた一新轉向である。特有な佛教の知識なり思想なりもよくこなされて生のまゝでは出て來ず、世間の觀察も豐富になり、文章の西鶴ばりの圭角がとれて、漸く露伴式の甘味が出、以前には好くあつた筆致の重苦しさが、圓やかな輕妙さを添へて來てゐる。例をとらうか、――

元氣よかりし雲雀の聲入り相の鐘に收まりて、春の日の暮れ方しづかに、柳の蔭より段々暗っなりゆけば、頓ては小流の傍の白躑躅ばかりを染め拔いて、地の塵は見せぬほどの日の光り柔かに世界を罩め、霞みわたる鎭守の杉の森、庄屋殿が背戸の竹藪、そよりさもせで諸鳥夢にあたゝまる夕べの景色。

これは『一口劍』の書出しの數句である。更に、――

春やゝ過ぎて小山の間やら流れの傍やらに一抹の霞一簇の雲さゆかしく眺められし桃櫻の花は名殘少なくなりたれど、日頃は趣き無かりし雜樹も拔頭の嫩芽に姿色(いろ)をつくる卯月の中旬。

これは『さゝ舟』の書出しである。引用簡にすぎて曖昧の氣味があるにせよ、一は突兀嵯峨、天才的な鋭さがあらはに見え他は平明坦夷、圓熟の自然さがうかゞはれることは、何人でも否まないところだと思ふ。天才の若々しい元氣がひそんだかも知れないが、代りにどつしり落ついた大家の風格が出てゐる。

既讀の人たちからせば、此のわたくしの文字なぞ馬枯箕を嚙んで午枕に喧しの誹りを免れぬものであるが、偏へに未讀の人たちのためにこゝに『大作微塵藏』の一班を模する。

二

『微塵藏』の第一集たる『さゝ舟』(明治二十八年刊)は、獨立せりとも見え、連絡せりとも見える四篇の短篇を綴り合

はして成る「さゝ舟」「うすらひ」つゆくさ」「荷葉盃」これである。

「さゝ舟」は、二十幾年振りにて叔母のおとわを訪ねて來た栽松道人なる禪僧と叔母との今や昔の物語が經となり、少年新三郎、少女お小夜の牧歌的な愛の交らひが緯となつて、その間に後篇乃至後集に出る樣々な人物や、人々の名やを織り交ぜ自ら發端となつてゐる。所々の春の叙景も穩やかに美しい。新三郎が境遇のためにひねこびた小供らしからぬ剛情者でありながら而かも同情を引くのは、心の晴々した時々「菩薩の幼時」とも擬ふ本來の彼の麗はしさが見えるからである。新三郎をしてこの晴々しい心の瞬間をもたしめるのはお小夜である。お小夜の描寫は新三郎程詳しくはないが實に鮮やかに出てゐる。遊びたい心を抑へて女今川を復習するあたりなど、何人には溫やかに微笑させる。おしづ（お小夜の母）は直接にはさまで出ないがおとわの物語で賢明な男まさりの而かも優しい女性なことが印象される、栽松が若年の時出家したのはおしづに關係あることが栽松の態度顏色で暗示されてゐる。新三郎がお小夜があつて同情をひくに對し、父の新右衛門はお力があるので同情を失ふ。これは好い對照である。なほ栽松の物語りに出る締のすきな玉之助（後に玉山）は後に關係が深い。篇中の文により、發端は明治五六年のことゝみて可い。

「うすらひ」は、「さゝ舟」に名の見えたおしづの兄の子の遠藤雪丸の物語が主となつてゐる　雪丸が突然東京から歸り退學して支那に渡るつもりと叔母につげる。原因は情人のゆゑと暗示されてゐる。おしづは客氣をいましめて、功を焦るなとさとす、末段自ら雪丸を激せしめ、而かも激して去らんとする雪丸をはつと驚いて止めるあたりは、長說教に浮世の酸さ甘さをきかされた讀者にとつて一抹の人間味、女性氣を與へる。お力がおとわと新三郎に對する非道無情に切齒させる。尤も、おしづの青年客氣を誡める長說教には當時日清役前後の渡清熱に對する寓意がふくまれてゐはしなかつたらうか。「忠義水滸傳」や「三國志」をよんで豪傑がるやうに弱い了見の人間では、先が知れてゐる云々」など雪丸の情事を暗示する皮肉は日頃のおしづとしては少し冷やかすぎる氣味がある。

「つゆくさ」全篇雪丸が支那に出發の場の出來事である。木工助がおしづの命令で三日間横濱埠頭に雪丸を見張る朴直さ、雪丸の後を追ふて來た無名の情人の泣きぬれて別れを惜しむ悲しみ、共に申分がない、たゞ前後何となく茫乎として印象の分明しないうらみがある。雪丸のことは以下に出ない。

「荷葉盃」は、新三郎とお小夜の睦びを經におとわがおしづの許に引取られて後の臨終から九才の新三郎が東京に丁稚奉公に出されるまでの物語である。「さゝ舟」は少年の遊びが緯となつてゐたが、此の篇では反對に經となつて中心を占める。新三郎お小夜との睦び、お春と新三郎との喧嘩、馬鹿の三太のことなど、少年少女の生活を寫せる箇所は皆そのまゝ詩である。お春も馬鹿の三太も何れも面白く描き出されてゐる。蜘蛛の巣にかゝつた蜻蛉を種子にして、これを憐れむお小夜の天使の如き心とこれを喜ぶ新三郎の天の邪思の旋渦毛曲りを描きわけ、それを緣にして蜘蛛を殺せしお春と、その仕返しに蜻蛉を殺せし新三郎との喧嘩を寫し、新三郎のお小夜に對する感情の疎隔となり、終に馬鹿の三太の馬鹿氣さから二人の交情が舊に復するに至るまでが細やかに而かも簡潔に描かれてある。馬鹿の三太がお小夜新三郎に拍子をとらせ奇妙な唄をうたつて踊るあたりは眞に醍醐の妙味がある。此の一篇は四篇は四篇中最も詩的である。おとわの死、おしづの親切、お力新右衛門の自墮落などがその間に點綴されて涙と温さと腹立しさを添へる。

三

『きくの濱松』（明治二十九年）前集『さゝ舟』が上總久留里在の青柳村の出來事なるに對し「つゆくさ」の場面を省いてこれは通篇九州小倉の出來事である。

此の一篇の內容は大體前後三段に分たれる。第一段は、栽松道人にからんで『さゝ舟』に名の見えた少年玉之助卽ち本篇の雛僧玉山の金仙寺に於ける生活の一般を描いたものである。栽松が青柳村から小倉へ歸つたこと、玉之助が栽松の

許に引取らるゝこと、彼の惡戯と天眞らんまん、彼の畫才、栽松の畫へ落書して却つて師を嘆服せしめることなどが、極めて明るいユーモラスな筆で輕々と書いてある。全篇凡て玉山の出る場面は皆明るく光明と陽氣さにみちてゐる趣がある。これはその性格のためであらう。

第二段は、栽松、玉山に因んで出入の筆屋正太郎のことにうつる。正太郎がお桂老婆に獨身者の不自由を說得され、友人の傳吉に妻帶生活のみじめさを力說されて迷ひ迷ふた揚句、老婆の姪の娘のお初を押付女房にもたされること、始めて知る世帶の苦勞、栽松の智慧をかりて筆屋の傍ら刷毛屋を始めて稍や成功し、不運一轉して幸運とならんとする刹那、女房お初に關連して不祥な事件が湧いて禍福の權衡が再び一轉することが語られてある。お桂老婆の獨身不便論、理髮師傳吉の獨身便利論、何れも處世哲學として傾聽の價値がある。殊に正太郎の結婚前後の心理、結婚の夜花嫁お初の身體に妙なことのあつたのを、「此年此月此夜正太郎が腑に落ちざること一つありたり」の一句で暗示してゐるのや、女房三人もつた傳吉が新婚の正太郎に結婚生活の表裏をうがつて聞かせるところが面白い。それ何よりより面白いのは玉山が正太郎に加勢してお桂老婆を論破する條と玉山の無邪氣な珍無類な女性觀である。だが正太郎が迷い拔いて易者の蠱吝にかけつけるところ及び金仙寺にて觀音樣の御みくじを受けて凶と出るところなどは、舞臺が喜劇から悲劇へ推移しかける前兆を示してゐる。

第三段は、正太郎の女房お初にまつはる事件を、お初に裏切られ惡魔の如く恨んでゐる手代久四郎の昔語りをかりて說明したものである。お初が正太郎に嫁ぐ前、奉公先で久四郎と戀を語つたことがあつたこと、やがて隱居の情をうけて久四郎を袖にしたこと（少くとも久四郎にはさう思はれたこと）、久四郎がお初を思ひ切れず狂氣のやうになつてお初を追つかけ、文やら直談判やでお初に脅迫めいた事をしたこと、主人夫婦の留守に隱居の詐略で放逐されること、木賃宿で自分を思つてくれる乳母のお大からお初が隱居と關係あること、隱居の巧らみを聞かされて、憤恨の餘り氣絶し、

蘇生はしたが熱病にとりつかれて、宿の主人夫婦(己之助、お淺)の義俠に生命をつないでゐる迄で筆をとめてある。これは更に直接に第三集『ひとり寝』につゞく。此の第三段は趣向の變化乏しく、いさゝか退屈を感ずるが、これは久四郎が恩人卯平次(お初の仲人)に述懐めかしく語る獨白と見るべきものであるから、かゝる結果になるのは止むを得ない。慾にはお初が心變りがしたことを描く段取をもう少し細かにして欲しいと思ふ。又人事を寫すに偏して、說教めいた語が多すぎ、背景の描寫がおろそかになつてゐる點も批をうてばうてる。然し次の『ひとり寝』の前半と相俟つた露件作品稀に見る好箇の喜悲劇として纏つてゐる。

四

第三集『ひとり寝』(明治二十九年)は、『きくの濱松』にすぐ物語の續く「ひとり寝」の一篇と、それとは直接の連絡なき「さんなきぐるま」「あがりがま」の二篇から成つてゐる。

「ひとり寝」は彼の「きくの濱松」の後半に見える手代久四郎の物語のつゞきとこれに因由してお初の離縁のことが述べられてある。宿主己之助の女房お淺は、久四郎に諦らめさせるために主家京屋の消息をつげ、お初の恬然たる根性の賤しむべきを教へる、久四郎はこれを聞いて却つて憤怨を益して深夜京屋にしのび込みお初を斬らうとする。無論失敗する。再び已之助の俠氣にすがる、それから暫時して筆屋に手傳ひに來て前集はお初と會ふ段と照應する。正太郎は卯平次から久四郎の告白を聞いて一概にお初を去らうとする、が老巧なる卯平次は正太郎に勸めて一應お初の懺悔を聞かせる。お初は一度は隱すが終に懺悔する、此のお初の懺悔で今迄小面憎い氣のしたお初が却つて可憐薄命の女性として一掬同情の涙をそゝがしめる、久四郎を憎からず思つたことは眞實なること、隱居の口說の辛らさも久四郎と相見んことの嬉しさを樂として堪へたこと、遂に隱居の暴力を受けて久四郎が恐ろしくなつたことなど、お初の例の心理がよく寫し出

されてゐる。懺悔の結果はついに離緣となる。中で久四郎がお淺からお初の消息を聞かされて狂人の如く自分を嘲ける一段が殊にすぐれてゐる。正太がお初に白狀させるために無理に工夫を弄するところはいさゝか取つて附けた嫌がある結末に出る金仙寺の庫裡の壁に落書された「會者定離の圖」云々前後は、一結千鈞の趣致ともいふべきであらう。落書に始まり、落書に終る。玉山の惡戲で始まり玉山の惡戲に終る首尾照應の妙に何ともいへないところがある

「さんなきぐるま」これは『さゝ舟』の集中の「荷葉盃」中に直ちに接續する物語である。東京に丁稚奉公と定つた新三郎をおしづ母子が送る。お小夜の可憐、情をかくす新三郎のねぢけた性格がその間にも見える。だが別れ際に今を最後と二人があやとりの遊びに興ずる一段には涙をそゝる哀愁がある。それから木更津の勝浦屋の有様（こゝの主人が新三郎を東京に連れ出す）、船出、東京見物、奉公先へ眼見え、主人阪本屋喜藏の素生、一家の人々の性格、難物の主家長男某吉のこと、奉公早々の新三郎の生活のことに筆をつけて終る。主人喜藏の出身は後の物語の楔子となつてゐる、即ち阪本屋の先代に見込まれて遺言で一人娘おこのゝ養子と定まつたものがおこのゝ母が娘の我儘を許して醜男の喜藏を體よく追ひ出し、おこのと通ぜし手代榮吉を入婿にしたこと、喜藏は男らしく屋號のみをもらつて手切金を却けて獨立奮鬪したこと、おこのゝ方は間もなく零落して田舍落せしことである。短いが入組んだ一篇である。

「あがりがま」、發端があつて、おこのと榮吉との馴れそめ、父の遺言、喜藏逐出しの前後、おこの榮吉阪本屋をつぐこと迄が述べてある。それから直下して、筆が、今は零落して浦和在（榮吉の故鄕）に佗住居せるおこのゝ凶夢にうつる。突兀の妙味はあるが聊か筋が、曖昧たるを免れない。『微塵藏』第五集『もつれ絲』は蓋しこの間の消息を補ふために書かれたとみてよろしい。

無頼漢の村醫者宗安が近頃死んだ榮吉の藥代をおこのにはたつてゐる。成上り者の勇造が來ておこのを助けてこれは勇造のえせ慈悲で、おこのを恩に絡んで手に入れるために宗安と組んで仕かけた芝居である。これから勇造は榮吉が生

前の不始末の相談にかこつけて村の端れの小料理によび出す。おこのと宗安の掛合の間に長女おすまが千住に出奉公してゐること、長男榮太郎が母の手助けに日傭稼ぎに出てゐることなぞが分かる。よく讀めば、此の趣向に一脈の舊の世話劇めいたところが看取されなくもない。

五

『雲の袖』（二十九年刊）は『微塵藏』第四集に當る。叙述の筆は直ちに第三集末の「あがりがま」に續く。

日傭から歸つた榮太郎は母の不在に驚く。おこのは勇造の無禮をやつと免れて歸つて來るが世の無味氣さに榮太郎を喜藏に托して自ら死をもとめんとする。榮太郎も子供心に世をはかなんで母と共にといふ。死を求めた母が却つて死を止める始末、榮太郎の發議で千住のおすまの許に金策に出かけることになる。千住で姉に會はれず落膽して歸る途中不圖した事件で義賊蠣崎十郎といふ、人物にあふ、これからが趣向が變化に富んで來るが、情味が薄くなつて駈足的にたつて、それ程面白くもない。却つて前後の榮太郎の述懷のところなどがしみじみと味はゝれる。

十郎は榮太郎の物語を聞いておこの母子を助けてやると誓ふ、その資を得んとて東京に引返して仕事をする、それに榮太郎に手傳はせるのは感心しない。此の時賊に入つた中の一軒が阪本屋喜藏の家である。十郎はおすまを助けにとて榮太郎と分れて行く、榮太郎は母の許を指して歸る途中捕へられる、遺留品の榮太郎の名ある書面を小僧新三郎がひろつて屆けたからである。一方おこのは榮太郎の歸りが三日間に亘つてもないのを心配してゐるところへ、勇造が來て御託をならべて苦めかける。そこへ意外にもおすまが十郎に伴なはれて歸つて來る。おこのはおすまの口から助けられた仔細をきく、此の物語はもつれいとの次に來るべきである。十郎は策を設けて仕返しに勇造を自分の案山子につかつて捕へさせる。

喜藏はおこのゝ書面が遺書體になつてゐるので驚いて死んだつもりで種々盡す。榮太郎は無事歸されるが、おこのは此の時の行違ひから喜藏に再び恨みを結ぶことになる。末段の十郎が警察屯署に當てた書面は面白い。

筋は「あがりがま」と同じく、世話狂言からの脱化と見られるところがある、十郎が榮吉の昔の兄弟分鎌九郎となのつておこの母子をすくふところ、捕はれんとして巡査を投げ殺すあたりがさうである。おすまをすくふところは眞に面白いが、勇造を退治るところは、些と小組工を弄しすぎる。尤も元來が賊といへば奇手百出もやむを得ないことであらうか。たゞ何うしても腑に落ちないのは、おこのゝ遺書にとて認めた手紙が阪本屋の傍に落ちてゐたかといふその理由である。榮太郎の外には落し手はゐないのであるが、榮太郎は元々千住の姉にあひに行つたので、出立の時に自分に用のない此の手紙をもつて出はしない、又おこのが無理に榮太郎の知らぬ間に懐中にでも入れた風もない。郵便でやつたとしても、榮太郎の歸らぬ中にさういふことをする理由もない。此の件だけは幾度よみ返してみても説明がつかない。總じて此の篇は作者の興味が乘つてゐないといふ感じがする。十郎は或は作者得意の人物かはしらないが、昔の鼠小僧張の義賊に髣髴として却つて興味を殺ぐ恐れがある。

六

第五集『もつれ絲』は(明治三十五年刊)は、後篇と銘うつて、露伴と門下の松魚との合作である。何回が露伴で、何回が松魚か分からない、後篇とはいふ條、『雲の袖』より前の事件の物語であるから、本來拾遺とでもいふべきものである『もつれ絲』は通篇おすまが女主人公である。それは『雲の袖』が榮太郎が主人公になつてゐるのと似てゐる。おこのゝ夫榮吉が零落して浦和在で病床に臥しおこのゝ裁縫と二人の子供の日傭稼ぎの眞似によつてその日を過してゐる際のことである。千住から來た平九郎といふ男は宿で聞いて義俠心にかられたとかいつて、おこのゝ許を訪れ、おためごかし

に千住の扇面亭といふ小料理やにおすまを奉公に出しては何うかといふ。おこのと榮吉は、平九郎の口ぶりに欺かれ、扇面亭の堅氣の料理屋といふにつられて、金の欲しさに（宗安の藥禮や勇造への借金を拂ひたさに）それを承知する。おすまが奉公に行く前後は一の家庭悲劇、むしろ一の心理悲劇である。おすまは家を離れて第一に平九郎なる人物に幻滅を覺え、既に千住に來ては扇面亭なるものに大に幻滅を感ずる、それが私窩子屋兼帶の貧弱な小料理だからである。然し病父と母のことを考へて、辛らさを堪へて漸く操をたもつて暮してゐる中に、草加大盡とかいふ六十爺の好色漢がおすまを手折らうとしてうるさくつけ廻はす。主人夫婦は勿論これを助成する氣で、おすまにいふ事を聞けと迫る。おすまは凛乎としてそれを聞き入れない、その爲めに物置に押込められたりいろ／＼虐遇されるが、何うにもならぬので扇面亭でも平九郎に返す。平九郎は前借を返すのに困つて辨二郎なる仲間に相談する。辨二郎は更にお勘なる惡婆にたのんで折檻して貰ふ。そこへ鎌九郎（蠣崎十郎變名）なる人物が出ておすまを救ふて母の許に連れて行く。『雲の袖』の記事と二三筋が相應しない所があるが、合作とて止むを得まい。例へば、『雲の袖』ではおすまが辨次郎の妾の家に隱されてゐるとなつてゐるのに、此の『もつれ絲』ではお勘婆の許で折檻されてゐるといふ如くである。一體に調子が低く情熱がなく、文章も露作の平生と違つて力が弱い、『微塵藏』中の劣作である。

七

『風流微塵藏』の描かんとしたところは何處にあるか、作者の眞意は未完だからそれと指し難いやうでもあるが、然し現に描かれてあるものを言ふのは難くはない。即ち人生そのもの〻種々相である。此の作を讀んで第一に心をうつものは、運命にとらはれて遣る瀨のない人間の姿である。お小夜、新三郎、筆屋正太郎、女房お初、手代久四郎、阪本屋のおこの榮太郎、おすま等、以上に出る一人として神樣にもてあそばれて足掻きのとれない人間でないものはない。神の

惡戯運命の皮肉が人生到るところに事件をかもして、それが或る者には悲劇となり、或る者には喜劇となる。此の作にはその悲劇的な惡戯が多い、作者は微笑して書いてはゐるが、見樣によつては悲劇の連續である。

『きくの濱松』の筆屋正太郞は、別にお初に戀したのでもない、お初も正太郞が好きで一緒になつたのでもない、が、兎に角一緒にならなければならない羽目になつて夫婦生活に入る　食ふ口がふへて仕事が不景氣になる、正太郞は知己の栽松道人の智慧をかりて刷毛の製造を始める、不景氣が一轉して大景氣となりかける、自分と丁稚の乙吉のみでは手が足りない、そこで雇人をたのむ。賴んだ先から來た雇人は、女房お初の昔の戀人で今の仇敵の手代久四郞である。そのために、妙な事件が生じ、お初は離縁され、正太郞は折角芽の出た仕事を拋擲し、自暴自棄となつて酒色にみだれる。久四郞は死んだと噂される。お初にしても、久四郞にしても、かゝる場合に、かゝる思ひがけないところで會はなければならなくなるのは、皆運命の皮肉である。お初久四郞の關係が先に好く後に惡いのも皆さうである。

お淺が久四郞に、男らしく諦めさせせんとの親切心から、友達のお金に賴んで京屋の有樣やお初の本心を探つてもらひそれを久四郞に取りつぐ。お初が久四郞の去つたのを喜び恬然として日を送つてゐるといへば、如何に意氣地なしの久四郞もあきらめて考へをもち變へるだらうと推測したのである。ところが人の心は分からない、そのために久四郞の憤怨は益々激されて、寒夜京屋にしのび込み、お初の小用を足して洗手せんとする刹那をねらつて斬りつける。親切が仇となつて却つて未練な振舞に出でさせた。又お初が久四郞に憎まれるに至るのも、お初が告白に、『此の事を久四郞樣に云ひもならねば、隱してゐる底氣味の惡さ、胸の苦しさ、顏をみるたびに恐ろしい神樣の前にでも出たやうな心地して我を責めらるゝ憂さ辛さに、自然と思ひの色に出でゝ歟、心變りと勘違ひして何ぞにつけては厭味をいはれ、云ひ說くことは知らぬにあらねど、暗いことのあるに否も澁つて口も利けずそれを又わざと口さへ利かぬ歟と久樣は合點するやうな調子に、彼方此方が段々と「ぐりはま」になつて（中略）終にはほとほと眞實に、執念く思はるゝが却つて厭になつた

ころ不圖久様の恐ろしい文を』云々となるのを讀めば、お初の罪だけではなく、運命の惡戯であることが察せられる。

更に又、「さんなきぐるま」「あがりがま」に見える喜藏とおこのゝ運命は何うか。喜藏が舊主人に見出されて一人娘の婿と遺言されるのは、福である。然るにおこのが喜藏を嫌ひ、又榮吉といふ情人のあるのが原因となつて、罪もないのに遺言を反古にされるのみならず、阪本屋を體よく逐ひ出される、これは福が轉じて禍となつたものである。而かも遂に屈せず撓まずに奮闘して一本立の商人になり、阪本屋の屋號を失はぬのは、禍が轉じて福となつたものである。おこのは何うか。これは通な母親の捌きによつて情人榮吉と阪本屋の後を取る、これは福である。然かも榮吉の媒介人の鈴鹿屋に欺かれて財産を失ひ、柳島に落ち、遂に浦和在に落ちのびて貧苦を嘗める、これは福が轉じて禍となつたものである。然かも困難の頂點に至るや却つて天佑か人助か、窮して通ずる道理から前途に一縷の光明をみとめるに至る、禍が轉じて福となつたものである。禍福は糾へる繩の如しで、運命の綱の目は何處で何う落ちかゝつて來るか、人間には分からない、たゞ痛感されるのは、人事一切その藩籬を脫することが出來ないことである。

かく運命が盲目的に萬事を決する如く見える中にも、自ら凛然たる正義の應報が行はれてゐることが、陰然看取される。必然の中に自由意志を認め、自由意志に必然を認める手法である。例へば『さゝ舟』の中の新右衛門がお力のために次第に零落すること、おしづ母子が無事平和の生活をつゞけることをみよ。又罪もなき喜藏を逐ひ出さしめたおこのゝ子の榮太郎が、喜藏によつて知らず識らずの中に盜賊の汚名をきせられることになる。おこのが勇造に苦しめられ、その勇造が蠣崎十郎に苦しめられる如きは、最も顯著な例である。かく觀じ來れば、運命の神は、盲目的なるが如くして終に盲目ではない。

八

翻つて見るに露伴の前記の作品中で、此の篇程多くの少年少女がこれ程見事に書き分けられ、これ程重大な役をもつて上場されてゐるものはない。今此等の少年少女の性格をいさゝか通觀してみたい。

『さゝ舟』の新三郎は剛情な拗け者である。幼い頭を早くから人生の惡に鍛はれたので少年の純眞さのなくなつた最も少年らしくない少年である。可憐とはいひ難い、場合によつては隨分憎らしくさへなる。然かも何人も『さゝ舟』をよんで新三郎に同情せずに居れないのは、この拗けた性分が本來の彼ではなく、祖母おとわやおしづ母子に對する時の柔順な、涙もろい、弱々しい心の持主が本當の彼だといふ點からである。お小夜は清く、美しく、優しく、邪氣なく、可憐の小天使ともいふべきで、新三郎に對する吾等の同情も、大部分お小夜に對する贔負から生れて來る。お小夜の愛する新三郎に同情するのである。新三郎とお小夜の性格の對照して描き出されてゐるのは、二人が蜘蛛の巣にからんだ蜻蛉をみるところである。——

「見れば蜻蛉の小さきが、いさ大きなる網を張り居し色美しき女郎蜘蛛に得られて、今や露の命の絶々に羽を鼓き身を悶躁けど断つことも及ばぬ無慈悲の絲に尾を搦められ脚を縛られ、頓て果てつべき狀態なり。あれ可愛さうな、蜻蛉が死ぬ新ちやん彼を助けてさお小夜は空を指さし示すに、同じく梢は眺めながら新三郎は笑を含みて、やあ面白い、蜘蛛めが勝つ、蜻蛉が負けるか、いゝ氣味いゝ氣味、小夜ちやん默つて見てお出で、今に蜻蛉が食はれて終ふさと面白げに云ひなせば—云々」「さゝ舟」

同じ「荷葉盃」中に出る與助の子お春も氣丈な自然の子として面白い性格を示してゐる。殊に面白いのは、馬鹿の三太だ。

「心足らずの三太、蓮の葉を頭上に被りて太腿の出づるを關はず衣裾高く揭げ、何かは知らず跳れ舞ふ傍には、お小夜掌を拍ちて歌ひ囃し、お勘新三は腹突き出して太鼓拍つやうに打敲き拍子取りながら、いづれも得しれぬ鄙俗歌を興に乘じて歌ふ態（中略）三太の高く躍り低く舞ふ身振さいひ、或は開き或は蓋づる手付さいひ、馬鹿々しくもまた可笑しければ、いづれも其を打笑ふに加へて三太自らも嬉しがりて腮も脫しかれまじく哈々と笑ひ騷げるなり。『我等が家のお背戸を出て見れば、松の樹三本に杉三本、合せて六本、根をみれば、根さは根草が生ひかゝる、梢さは鴨めが巣をかける昨夕生れた鴨の子が、今朝は這ひ出てちよちよさ」さ、歌ふにつれて、お小夜は掌を拍ち新三は腹を敲き、三太は無茶苦茶に踊ることさ蛙兒の如し云々」「さゝ舟」

『きくの濱松』の玉山の玉之助は又以上と變つて腕白で、ませて、小癪で、いたづらでそれで、無邪氣で怜利で憎まれぬ徳な性格の持主てある。本文を引用すれば、『實に玉山は未だ十二の兒童なれど不思議な性にて、自己が師の他の者といへば大人兒童の別ちなく、頭から愚人と見侮りてか毫末も遠慮の擧動無く、饒舌りたければ饒舌り、騒ぎたければ騒ぎ、能く笑ひ能く戯れて、如何なる氣むづかしき男、位高き人の前をもつゆ憚らず、日々自己が氣まゝ氣隨に飛び跳ね遊び廻る程に、初めは誰しも厭ひ嫌へど、此方さへ馴染みて見れば無毒無邪氣の憶面なしにて、『却つて可愛らしくこそあれ憎みたらても憎まれぬ、愛嬌ある兒である。玉山の性格中注意すべきは天品ともいふべきユーモアを持ち合はしてゐるところである。例へば、正太郎がお桂婆に獨身主義不便論を說かれて老婆の雄辯に閉口してゐると『始終を聞きゐた玉山は笑ひながらに水口より首さし出して、ヤイヤイ饒舌婆の世話燒婆め、紫色の齒ぐきを出してエヘ、エヘ、と笑ふ奴ヤイ、老耄婆(ふるばけ)の餡婆め、汝は說法上手だが「會者定離」といふことを知るまい、正さん、我が加勢をして其婆を一寸負かして遣らうかといふあたり、又は顚倒の迷ひを說いて老婆をやり込めるあたり、正太郎がお神を去つたと聞いて、――』

「金仙寺の庫裏の白壁に得知れぬ異樣の畫は描かれぬ(中略)惡戯せしは何奴と糺すまでもなく當人の玉山揚々として「ゑしやうぢやうりの圖玉山ゑがく」と稚き文字もて決め置ければ、散々に師の栽松をはじめ皆の者に罵り懲らされしが、大和尙の海音禪師は衆徒の噂に知り玉ひて、一覽し玉ひしのち、笑つて玉山が頂を摩し玉ひしぎり何とも叱りもし玉はざりければ、玉山いよいよ増長して江らいが此の寺中に乃公の繪の解つたは大和尙樣ばかり、他の奴等は何の畫とさへ知れぬのであらうに、消すな消すなと呼ばりて舞ふやら跳ねるやら大得意なりし云々

とあるあたりがそれである。且つ又少年玉山には面白い女性觀がある。曰く――

「第一女は意地が惡くて、吝嗇で、世話燒で喧しくて、直に乃公のことをお師匠樣に告げ口したりなんぞして、頭髮が臭くて、母人(おつかさん)ぶつて、高慢で、赤坊なんぞ生みくさつて、ぎやあぎやあと泣かせくさつて、惡いことばかり澤山ある、それだによつて此

の乃公は女のしなくな氣取くさつて歩行くに町で出會ふときは何時でも唾液を足の前の三尺ばかりのところに向つて必ずぷいと噴きかけやる」云々

『雲の袖』の榮太郎『もつれ絲』のおすまに至つては、何と評するより先にあゝいたいたしいといふ感じで心が一杯になる。共に孝子であり孝女である。然かもよく物の本にあるめそめそした意氣地のない孝子孝女ではない、凛とした心の張りのある孝子孝女である。榮太郎が蠣崎十郎に奮然跳りかゝらんとする如き、おすまが扇面亭夫婦と草加の狒々爺の迫害に操を曲げない如き、この例とみてよろしい。玉山を光明の兒とすれば、新三郎と榮太郎は暗黒の兒である、だが榮太郎には新三郎のひねくれと剛情がない、それは未だ幸ひに母の愛があるからである、此の點で榮太郎は新三郎より幸福であるといへる。而かもその厭世觀をきけ、——

「畜生、惡徒、無益だ〳〵、自己は活きてゐても窘められるばかりだ、母樣も窘められてゐるばかり、姉樣も左樣だ、お父樣も窘められて死んで仕舞つたのだ、あゝ自己はいゝが母樣が愍然だ、姉樣が愍然だ他家の奴は皆惡徒で、人を窘めて、而して美い衣服を着て、美いものを食つて、吾家のものは皆善い人で、人に窘められて、而して加之に自己なんぞは惡徒の兒童にまで襤褸を着てゐるから汚いだの、雜食だから力が無からうだのと笑はれる、詰らない、生てゐても、何うなる、死んだらば、死んだ先には何も無からう、睡たやうなら死んだが可い。自己は死なう、母樣は何うなさる、母樣も死ぬがよい、姉樣も死ぬがよい」云々

これを吐くものは僅か十四の少年である。わたしは餘りのいたいたしさにこれ以上此の兄弟のことは述べぬことにする。

『風流微塵藏』五篇さゝ舟より讀み始めて、『きくの濱松』に及び『ひとり寢』に及べは、わたしが此の作を大作だと斷じたことが、決して不思議とは思はれなくなるであらう。描寫されてゐる世界は爛れたやうな近代人の世界ではない、活動する人物も神經病的な近代人ではない、だが此の作は人間そのものゝ姿の一相を捉へてゐる。小説は『人生の批評』で、やがては人生そのものであるといふ『近代小説』の著者フォーレッの語がわたしを欺かないならば、露伴の『風流微塵藏』は未完のまゝでも明治小說壇に永久に殘るべき記念塔の最も重要な一つとならざるを得ない。

東京の大劇場小劇場

渥美清太郎

王政維新の大業成つて、慶應は明治と改元されたが、東都の劇界はそんな事にはおかまひなしの至極無事らしく見えた。芝居は淺草の隅の猿若町にたつた三座しかなく、この頃は新狂言も餘り出ないで、忠臣藏や菅原の古典劇が度々繰返され、たゞ〳〵頽勢で押し流されてゆくやうではあつたが、併しそれは表面だけの事で、時流に從つて、永い間夢のやうな暮らしをしてゐた芝居國にも、革新の口火はチョロ〳〵と燃えかゝつてゐたのである。打つちやつて置いても、自然に爆發はしたらうが、少し早目にその烽火をあげたのは、守田勘彌であつた。はたの者もぼんやりしてゐた譯でもなからうが、勘彌の頭腦は殊に明敏だつた。この先覺者は、東都の僻隅に劇場が押しこめられてゐる事の、營業上非常な不利なのを痛感して、他の二座に先んじて東都の中央たる京橋へ飛び出してしまつた。移轉するまでの段取りは、大槻如電氏の「守田勘彌」に詳しいが、兎に角可成りな苦心をして、明治五年の十月、守田座を新富町に開業したのである。轉座以後の守田座は、地の利を占め、人氣俳優を多く獨占し、加ふるに勘彌の鋭い興行政策はいつも金的を射て、東京での第一劇場の榮冠を得るやうになつた。後には債務關係から法人組織に直して新富座と改稱したが、座の位置は益々向上して、殆んど當時の貴顯紳士が交際に必要な倶樂部となつた感があつた。取殘された中村市村の兩座は、爾來一向に振はず、指を咬へて守田座の盛況を、傍觀してゐなければならなかつたのである。

この守田座移轉事件が動機となつて、五年九月に東京府から、劇場に關する法令が發布された。「府下劇場三芝居其外

これまで無税興行致し來り候處今般免許鑑札が相渡候條、これまで興行いたし來り候者は、更に願出可事」といふのであつた。つまり、三座以外の芝居でも、鑑札は受けられる事にはなつたのだが、名目は、緞帳芝居といふのであつた。併し翌六年になると又新らしい法令が出て、府下劇場を十ケ所許可する事になつた。つまり三座並の大劇場をもう七座殖やしてもいゝ事になつたのである。三座にとつては可成りの打撃であつたらう。

この法令によつて、大小劇場が矢繼早に設立され始めた。その重なるものは、日本橋蠣殼町の中島座、同久松町の喜昇座、中橋の澤村座、本郷春木町の奧田座、等であつた。

中島座は、俗に三人兄弟といつた兩國の薦垂れ芝居の後身で、明治五年に兩國を取拂はれたゝめ、座主の石渡吉藏が設立した中劇場で、明治六年四月に開場式をあげた。最初は緞帳芝居であつたが、明治六年の法令以來劇場の仲間入りをした。爰へ最初から出てゐたのが今の尾上幸藏で、これが五代目菊五郎張りで、新富座で五代目のやつた狂言を、其まゝ演じては中以下の民衆の喝采を得てゐた。その外には、嵐鱗舍、中村翫丸なぞが重な役者であつたが、後には今の藤間勘壽郎の父、中村壽三郎を座頭に迎へて、松尾猿之助の故段四郎、坂東太郎、勝川又吉、澤村巴杖、中村重藏、等をかはる〴〵迎へて、年中休みなしに興行した。ズツと後になると、故歌六も、故工左衛門も、故市藏も、今の仁左衛門も、隨分長く出勤してゐたものである。この芝居のモツトウは、場代を廉くして狂言を盛澤山に見せるといふ事であつた。それが當つて、いつも興行成績は好かつた。最初は、新富座で當てた狂言の蒸し返しときまつてゐたが、後には方針を變更し、大坂種のお家騷動劇で、十二三幕もあるものを、取かへ引かへ演じてゐた。それが又いつも好評であつたものだ。故段四郎が一時宗家から破門された原因の、勸進帳を演じたのも爰であるし、仁左衛門が得意の松平外記を初めてやつたのも爰であるし、市藏が伊東道庵をやつて、唸らせたのも爰である。本當に休みなしの毎月興行を續けたのは、東京でもこの座だけであつたが、明治二十年の十二月に燒けて、たうとう廢座になつてしまつた。

喜樂座も矢張り兩國の薦垂れ芝居の後身で、鈴木吉兵衛、高木秀吉、高濱敷動の三人が座元になつて、明治六年の四月に、久松町三十七番地へ設立したものである。最初は矢張り緞帳芝居で、舊守田座の中所にゐた坂東三八を連れて來て座頭に据ゑ、書出しは今の竹三郎や一鶴の祖父にあたる坂東鶴藏。その外市川團升、中村十藏、といつた、何でもこざれの腕達者揃ひで、廉價を看板に毎月開場した。後には歌六や段四郎も入つてゐた事がある。經營者に中々頭があつたと見えて、盛んに新作物を上場した。殊に新聞の三面記事などを脚色して、素早く上演したものだ。西南戰爭の芝居なぞは、新富座よりも一足先へ演つて、歌六が西郷さんで威張つたものだ。有名な横濱の小僧殺しなぞも、直ぐこの芝居で狂言になつた。明治十二年八月には、小屋を改造して立派な建物にし、大劇場の仲間入りをして久松座と改稱した。開場式には、助高屋高助、市川九藏、尾上多賀之丞、中村翫雀、尾上多見藏といふ顏觸れで開けたが、その後もズツと一流の俳優で上演を續け、途中火事にもあひ、明治十八年一月は千歳座と改め、明治二十六年十一月には、明治座となつて震災前まで續いたのである。

澤村座は、兩足切つた不具の名女形澤村田之助が、一子百之助を座元名儀にして、明治七年八月に開場したものである。舞臺を思ひ切つた田之助は、將來興行師として立つ抱負があつたのであらう。爰にも彼れのきかぬ氣が窺へるが、何にしてもその頃は、人氣役者や腕達者は、三座で抱へて手離さないので、肉身の兄訥升と澤村一門しか召集する事が出來ず、いかにしても座組みの貧弱であつた爲めに、初興行から大した景氣でもなく、段々に衰へ、遂には債務關係から中橋座と改稱したが、興行らしい興行もなく、休座に休座を續けてゐるうち、明治九年の暮に燒けて、其まゝ再建を見ずして止んだ。

奧田座は、味噌問屋の奧田登一郎といふ人が、明治六年七月に建てたもので、丁度守田座が新富町へ移轉するので、その古建物を買ひ込んで、ソックリ用ひたのである。最初は山崎河藏、尾上いろは等に、先代壽美藏が奧田登美三郎で

加はつたやうな貧弱な一座で、矢張り緞帳芝居であつたが、明治九年頃から劇場の列に入り、春木座と改稱し、市川
十郎、市川門之助、市川女寅に次いで、片岡我童、關三十郎等も加入して、中々侮れない勢ひを得て來た。明治十四五
年はその全盛時代で、一時は團十郎菊五郎が出た事もあり、素晴らしい勢になつたが、その後漸次衰微して、しまひに
は何うする事も出來ないやうなさびれ方になつてしまつた。これが又恢復した事は後に記す。

斯うして、明治六年の法令以後に設立された四劇場は、盛衰種々な運命を辿つて行つたが、この外にもまだ劇場は出來た。四谷に相座、本所に壽座が出來た。相座は內山新造といふ人が、四谷の津の守へ新築したので、明治六年五月であつたが、最初から女役者なぞがかゝつて、あまり華々しくもなかつた。稀には仲藏や九藏も出た事はあつたが、ほんの一時的で、殆んど劇場らしい興行もしないうちに、取拂はれてしまつた。壽座は、明治九年三月、本所綠町に出來たもので、芳賀茂七といふ人が座元となり、最初は常磐座といふ名儀で、故勘五郎が銀之助時代に座頭になつて出たり、女役者で興行したり、いかにも緞帳芝居らしかつたが、明治十四年六月、相生町へ轉座したを機會に壽座と改稱し、助高屋高助や澤村田之助を聘して賑やかに開場式を行つたが、初開場から成績が悪く、後にはズツと二流三流で打ち續ける事になり、稀には九藏や家橘が出たのを花として、今日まで名儀だけは續いてゐる。

明治七年八月になると、芝の新堀に大劇場が出來た。河原崎座といふ、守田座の控え櫓の名儀で、立派な座名であるこれは河原崎の養子であつた三升が、實家へ歸つて九代目團十郎を襲名する都合から、養家への義理に設立した劇場で團十郎專屬の芝居ではあつたが、場所があんまり片寄り過ぎるのと、人氣俳優の召集が不可能であつたのとで、この劇場も成績はよろしからず、翌十年は代が變つて新堀座と改稱し、二流どころで打つてゐたが持ち切れないで、また代變りで榮升座となつたが、興行もせずに取拂はれてしまつた。

中村座は維新後、守田座に押されて一向振はず、細々ながら開場だけは續けて行つたが、明治十年の幕の火事で燒け

てしまひ、翌年の七月、新築落成しても、同座の名儀では開場の出來ぬ始末で、都座といふ名で我童を呼んで續けて行つたが、のちに猿若座となり、度々燒けて鳥越座ともなつたが、遂に花々しい事もなくして廢座となつてしまつた。曾ては江戶劇場の草分けたる、最も由緖深い座ではあつたが、明治にあつては、三座の中で、この座が一番の貧乏籤を引いたのであつた。

猿若町に最後まで殘つたのは市村座で、のちに燒けて、今の所に移轉したのは、明治二十五年の十一月であつた。勿論座主も度々變つたが、それにしても元祿享保の昔から、この座だけが、兎も角も櫓名を今日まで維持して來た譯なのである。

明治十五六年頃から、本鄕の春木座は、何をかけても入りがなく、衰微の極に達してゐたが、一擧これを恢復して、非常な繁榮を來さしめた人があつた。それは有名な鳥熊だつた。本名は三田村熊吉といふので、伊勢の松坂で茶屋をやつてゐたが、鳥を澤山に飼つてゐた所から鳥熊と呼ばれてゐた。中々度胸のある男で、早くから度々洋行をして、象を持つて方々興行して步いたが、後にはその儲けた金で芝居興行をしたところ、忽ち大損をして一文なしになつてしまつた。苦し紛れに計畫したのが東京の興行で、大阪の荒木屋といふ衣裳屋から衣裳を借りこみ、嵐魁昇や尾上松壽（今の菊右衞門の父）市川福之丞（今の男女藏の父）だのといふ三四流どこの大阪役者を抱へ、チョボ道具方囃子まで連れて上京し、當時腐つてゐた春木座を借りて、明治十八年五月一日から開演したのが鳥熊芝居である。

鳥熊芝居といふのが、今でも話に殘つてゐるのは、その興行法が、當時の東京としては頗る破天荒なからであつた。純大阪式の芝居を、木戶六錢で見せ、しかも場內八分通りは追込みで早い者勝ち、朝八時までに來た客には丸札を出すといふ勉强さであつた。丸札といふのは、それを持つてくれば、次には無料で見られる切符だ。その頃の芝居といへば、場代は高し、敷物料は取られるし、狂言は中々出揃はないといふのが當り前なのに、場代は斯うした勉强で、その

上初日惣幕出揃ひといふ、今日なら不思議でも何でもないが、その頃はとても思ひ及ばなかつた事を實行して見せたかで、サア大した當りやうだ。毎日々々割れ返るやうな騷ぎで、忽ち市中の評判になり、大劇場も鳥熊芝居に押されて、さつぱり入りがなく、據なしに値下げをしなければならなかつた位である。これと、もう一つこの芝居が評判になつた譯がある。それは觀客の履いて來た下駄を洗つて返すといふ事だ。役者まで手傳つて客の下駄を洗ひ、棧敷の見物には風呂敷に包んで返すといふ、空前絶後の歡待法を行なつたのだ。評判になるのも無理はない。

その外、湯茶は無料で飲ませる。簡單な狂言の筋書を書いて天幕の所に貼りつける。出方を全廢して同じ服裝の女を澤山置き、どの女でもお梅さんと呼ばせる。幕間の時間を書いて貼り出す。俄雨には傘を貸す。なか／＼今日でも實行出來さうもない事を實行した。鳥熊芝居は市中を風靡した。

この芝居があまりに景氣がよかつたので、鳥熊その者が我意を振舞つたとかで排斥され、間もなく三田村の興行ではなくなつたが、それから先は芝居も大變景氣よく、例の中村駒之助が來て座頭になり、追々と名優も現はれて、明治三十年頃までは、全く春木座の黄金時代を現出した。今の歌右衛門も出た、羽左衛門も出た、中車も出た、仁左衛門も出た、雀右衛門も出た、宗十郎も出た、故芝翫も故家橘も故段四郎も故菊之助も……その後、三十二三年頃から、また衰微して、新派隆盛當時までは、どうにも始末におへない小屋になつてしまつた。

明治二十年十一月になると、淺草公園に吾妻座が出來た。千葉勝五郎の後援で、山下清兵衛の設立であつたが、いはゆる緞帳芝居で、花道もなければ引幕もなく、座附き茶屋もないといふ芝居であつた。開場式には市川九藏も出勤したが、一二回で引いてしまひ、あとは今の訥子が座頭で大奮鬪の功が現はれて、芝居は毎回大入りをしめた。これが今の宮戸座の前身であるのは云ふまでもない。

明治二十二年十一月には、いよ／＼木挽町に歌舞伎座が開場した。本邦改良劇場の率先といふ息込みで、千葉勝五郎

補地櫓狗の設立である、早くから落成はしてゐたのを、俳優を他座で挾んで開かさないので、開場に手間どつたが、

勘彌の計畫したトラストは、千葉勝の金の力で破れて、第一回興行には團菊左が揃つて出演した。同座の出現が、日本の劇界にとつて、直接に間接に、非常な好影響を與へてゐる事は、今更云ふまでもない事だから略して置く。

明治二十四年には、神田三崎町に三崎座が出來て、今の源之助や幸藏、菊三郎なぞが出演すると、問題が起つた。大劇場の俳優は小劇場に出演すべからずの、規約に觸れるといふ問題だ。今から考へると不思議なやうでもあるが、この事件は當時なか〳〵やかましく、團十郎なぞは先へ立つて故障をとなへ、その爲め出演俳優は、進退に窮した程であつたがその後、明治二十五年になると、赤坂の溜池に福祿座といふ小劇場が出來て、爰へ市川一門の若手が出演したばかりか、開場式には團十郎が現はれて、口上まで云つたものだから、サア團十郎は依估だといふので、新聞からは攻撃され、小劇場からは責められるといふ騷ぎになつて、團十郎もひどく神經を惱まし、若手の奬勵劇も立消えになつてしまつた。これほど、當時にとつては、大小劇場の區別といふことは、やかましい問題であつた。この事ばかりでなく、その後にも度々紛擾が湧いたので、明治二十八年二月になつて、東京府廳では大小劇場の頭取を呼び出し、劇場の大小は區別しても、俳優まで分ける事は官の意志でないといふ事を明示したので、その後は斯うした事件も起らないやうになつた。

明治二十五年の四月には、淺草の新猿屋町へ、澤村座といふ、以前中橋にあつたと同じ名の小劇場が出來た。座頭には訥子が据つて、澤村一門を網羅し、吾妻座の時と同様、休みなしの大奮發を始めたが、訥子と、座主の鈴木との間に何か紛擾が起り、興行二三回にして物別れとなつた後は、座名も淺草座と改まり、一時は九藏や外のいゝ所も出たが、地利關係からパッとせず、國華座から蓬萊座、駒形劇場に變つて、震災前廢座になつてしまつた。

前に云つた福祿座は、後に新市村座と改稱したが、間もなく演伎座となつて、つい先頃頃まで續いたのである。多くは舊劇の若手連が出演したが、この頃から一勢力を造り出した新派が、一時籠城してゐたこともあつた。

明治三十年の三月には、神田三崎町に東京座といふ大劇場が出來て、團十郎を呼んで花々しい開場式をあげた。この

車は、山崎武兵衛、久保豊次郎といふ二人が主となつて工事を起したので、最初は芝の薩摩ッ原の豫定であつたが、たに轉座の許可をうけて神田へ建てたのである。隨分大きな劇場であつたが、何分にも地の利を占めてゐないので、第回からして捗々しくゆかず、暫くは歌舞伎座の若手一派で明けて、いつも芳ばしい成績を得られなかつた。故段四郎が座頭で打つてゐた間と、歌右衛門幸四郎が歌舞伎座に對峙して籠城してゐた間とが、まづこの座の華やかな時代であたらう。その後は不成功を重ねて、震災前、たうとう氷の倉庫に化けてしまつた。

これより前、明治二十九年七月には、矢ッ張り同じ三崎町に、川上座といふのが出來てゐた。東京座は、この川上座の筋向うに建てられたのだつた。川上座は、例の川上音次郎が、自分の小屋として經營したので、即ち自分が座頭になつて、奇抜な書生芝居の興行を續けたのであつたが、歌舞伎座での新派大合同が失敗に歸して以來、この座の經營も不可能になつて、座名も改良座と變り、矢張り書生芝居の定小屋になつてゐたが、間もなく燒けてしまつた。

明治三十年前後には、この外にまだ、中洲に眞砂座、淺草に常盤座、開盛座、柳盛座、深川に新盛座、根津に榮座、等の小劇場があつた。眞砂座は中洲の島の中で、一時は羽左衛門中車宗十郎も出勤したし、新派が近松研究をやつた事もある。懷かしい小屋なのだが、震災前これも倉庫に賣られた。常盤座は最初は舊派であつたが、後には新派で長く打ち續け、兎に角今日でも名が殘つてゐる。開盛座は今の千歳座で、柳盛座と共に三四流舊派の定小屋であつた。新盛座は後に深川座となつて、これも舊派で打ち續けてゐた。榮座は根津の片隅であるため、興行も隨分見すばらしかつたがいくらか改築して、これからといふ時に燒けてしまつた。

胎生期から興隆期へかけての東都には、斯うして、二十近くの大小劇場が存在し、相當の觀客を汲收してゐたのである。江戸三座の時代から、わづか三十年しか經たぬのに、思へば盛んになつたものだ。が此の興隆期時代と、今日とを比較して見れば又より以上大きくなつてゐる繁昌さに吃驚する。さうして、この間の劇界三十年を、うま、其中から割つてゐるのが、帝國劇場の出現なのである。

明治の小唄

湯朝竹山人

ここにいふ小唄は、つぶさにいへば「絃曲江戸小唄節」のことです。或は幕末小唄節といつた方がよいかも知れませぬ。更に、端唄節、歌澤節、及び小唄節等、詞型短小にして曲調の手輕なる小品的聲曲を主題といたしましたことを御承知おき願ひます。

明治に小唄なし。明治の文藝壇には新しい明治文藝が出現いたしました。明治の聲曲界には新産物の出現したことを私は知りません。明治時代は舊きを放棄し破壞して新しきを輸入し摸倣するの時代ではなかつたでせうか。社會のあらゆる階級が、舊物打破と舶來歡迎とに狂奔したる時代ではなかつたでせうか。若しさうだとすれば、かかる焦燥にして殺風景なる時代に、風流小唄節といふが如きものが流行しようはずがありません。多忙な世間と、ゆとりのない人心とが、一流小曲の風韻などを顧みてはをられませんでせう。

されば、明治に小唄なしといはんよりは、むしろ明治は小唄破壞の時代であつたといつてよいかも知れません。邦樂全體の上からいへば、明治に洋樂を輸入し、明治政府歴代當局者の方針が、普通教育には洋樂器を採用することに定まり、音樂教育は所謂文化形式を備へたのですけれど、そのおかげで、一般人の頭に、過去の高價なる日本音樂を輕視し輕蔑するが如き僻見をさへ釀成したる嫌ひが見えました。

歐洲大戰この方、各國民族の胸に共通的に暗示を與へたる民族的意識の自覺は、實は私等にも大層利きめのあるお藥でした。外ばかりに見とれて、わけもなく摸倣することに奔命してをりました日本人も、少しは內省の傾向を促し

祖先の遺したる文化の本質を吟味鑑賞するのおちつきを見ることになつて來ました。あわただしく裝はれたる新い衣と、舊い衣とを振りかへりて見てゐるのが、今日の實狀でございます。

なほも幕末及び明治時代の文獻研究熱の昂進を見るに至りましたのも、罹災文獻の厄難が、あづかつて有力なる原因の一つではありませうけれど、想ふに文化的自覺がもたらし來つた衝動であらうかと信じられます。このたび「早稻田文學』が「明治小唄界の消息」を需められたのも、事は小なりといへども、蓋し愚考と同じい思想からの要求かと推察し、私は斯道のためにこの上もなくうれしいことだと思ひまする。

聲曲五人の名物

明治の小唄は、いふまでもなく、江戸幕末流行小曲の傳統でございます。幕末から明治へかけて、江戸聲曲界の名人とされ、江戸の名物とまで歎賞されたのは常磐津の林中、富本の豐前、清元のお葉、ならびに小曲界の百一翁と政壽翁との五人であつたと傳へ聞きます。

安政年間、笹丸によりて一流を創始いたしました「歌澤節」が、やがて虎右衛門と芝金との二派に分れて、明治から大正の今日に至るまで對立的に維持されてをることは皆さん御承知の通りです。さてその歌澤節を劇場音樂として作中に應用を試みんとしたのは河竹默阿彌翁の創意であつたといひます。明治三年に書下された「慶安太平記」に「濡裕松藤浪」を使つて評判がよかつたといふことです。後ち「梅暦」にも用ひ「ざんぎりお富」の時には殊に内容としつくり一致してよかつたさうです。けれど端唄から胚胎したる輕い調子を特色〔、〕歌澤節が、舞臺の音樂として永續しなかつたのは無理もないことかと思はれます。默阿彌翁と歌澤とに關するこの一項は、河竹繁俊氏が『河竹默阿彌』の「明治の初年」の章に紹介されてをります。

歌澤芝金直傳本『小曲松のみどり』に「花雲命捨鐘」「黄色露濡衣」等の歌章がありまして、いづれも河竹其水の作であり、初代芝金の節附であります。いふまでもなく明治の初期に劇場用として作歌作曲されたのであります。けれど默阿彌翁の工夫でも、歌澤をヨリ以上に活用することと困難だつたのは當然のことです。小曲歌澤節の本來が、四疊半を天地として産まれてゐるのですから。

さるほどに、初代芝金は明治七年に、初代虎右衛門は同八年にいづれも死亡し、次で向島長命寺に小庵を作りて隆達堂といひ、みづから今隆達をもつて任じ、一流「東小唄」を唱へてをりました港崎可醉は同十一年に死亡してをります。芝、虎兩人には後繼者があつて命脈をつないだのですけれど、可醉の東小唄はその死亡と共に消えたものかと思ひます。

春園節と百一翁

さて、林中、豐前、お葉等と肩をならべて名人といはれたる小曲界の百一翁も政壽齋も、元は虎、芝等と同様に、幕末端唄仲間の天狗連であつたのです。兩人は笹丸歿後の端唄界において、芝、虎等の專横なる振舞のあるのをところよからずとし、笹丸傘下より勇退し、更に、高蹈的に互に別天地を開拓しようといたしました。

はつきりとしたことはわかりかねますけれど、百一翁は文化文政頃に産まれた人らしいのです。本名は丸山與惣右衛門とかいひました。百組の一ちやんといはれたところから察すると、例の仕事師の仲間であつたのでせう。百一坊主といふのが彼れの通り名であつたともいひます。

百一翁が「春園節」を新立し、公然役所へ届け、みづから百一を號したのが明治十八年だつたといひます。今日では知る由はありませんけれど、彼れの工夫したるところは、どうやら諸流を混合したものらしくいひ傳へられてをります

どれほどの作歌作曲があり、特色がどんな風味のものであつたかは無論知ることができませんけれど「松の色」「夢見草」などいふのは小唄そのままの風致であつたと申します。外輪を崩した菱形の中に二引の紋をその流派の定紋とし、稽古本も發行され、名取の師匠もあつたと傳へられてをります。百一翁は明治二十二三年の頃、七十餘歳で死亡したといふことです。

小曲に愛著一方ならぬ私は、往年、この一流のことで隨分奔走して見たことでした。その結果、百一翁の春園節第二代目家元として、檜物町絲商加藤某の娘お歌といふのがあることを知り、同女が明治三十三年、東京府に襲名屆を出してゐるとのことも聞き、新橋で「ごもく」の師匠をしてゐるとの噂も耳にしたことでした。

新橋の藝者屋町を私は探り廻りました。歌女に逢つて彼の女から直接に幕末小曲界の消息を聞くことと、春園節の曲調を聽くことを、私はどんなに期待したことでせう。流石に三絃を營業の表看板とする狹斜街だけあつて、新橋には至るところにごもくの師匠が巢を張つてゐたやうです。私の目ざす歌女は荒物屋の二階にゐるといふのですけれど、その荒物屋がめつかりませんでした。ある日のこと、ある煙草屋でやつと歌女の消息を知りました。それは私が探してゐた時より三年前に七十幾歳、八十近い壽命を終つて、すでにこの世にはゐなかつたのです。私はどんなにか失望したことでせう。新橋でごもくの師匠として鳴らした女で、以前は板新道に住んでゐたさうです。一時世上に唱はれた洗髮のお妻などが、この歌女から手ほどきをうけたといふのですから、私の探しにかかつた時が、だいぶおそ過ぎてゐたことはいふまでもありません。

歌女は春園節第二代目家元襲名披露の唄も出來てゐながら、大患やら次で怪我のわづらひやらで身の自由を缺くに至り、襲名披露をいたさず仕舞ひで死亡したといふのですから、春園節はそれきりで滅したものかと判斷いたします。

小唄節の政壽齋

興味本位の私は、文獻、考證、せんさくめきたことは嫌ひですけれど、折角知られてゐることですから少々ばかり記錄して見ませう。

明治維新から逆に十年乃至二十年前の頃が、いはゆる幕末小曲界の活躍した時代であつたらうと思はれます。笹丸宗の信者は前述男性のみならず幾多の女性も抱擁されてをりました。中でも代表者の一人は歌澤能六齋を男妾として同棲せしめてをりました小蝶女史の如きがそれであります。彼の女は淺草の廣小路で稽古屋を開いてをりました。後ちの文學博士、井上賴圀先生は小蝶の端唄弟子で、彼の「淺くとも」は先生壯年時の作で、初代芝金の作曲だとか申します。かういつた幾多の女師匠の輩出したことは事實でした。

嘉永六年『當代全盛高名附一』に、人形町さわ、伊豫橋かめ、神田よし、猿若ふさ、堀江丁くま、大傳馬丁うめ、茅場丁なみ、伊勢丁よし元等の女流小唄名手の名を示してをります。これらの女性が幕末の小唄を明治の新時代へ傳統してくれました。

中にも堀江丁のお熊さんが傑出してゐたことは、明治五年、假名垣魯文作『胡瓜遣』初篇下に「………ひさしぶりだ堀江町直傳をきかせねへか………」などいふ記事の上にも想察されます。明治二十七年、原田芳五郎編『遊藝起原』に據ると、このお熊さんが初代虎右衛門の弟子であつたと記述されてありますけれど私には疑問です。お熊さんは小蝶等と一緒に芝、虎等と共に、一様に笹丸宗の端唄同朋であつたらうと思つてをります。

このお熊さんが小唄節第一世の家元であつたとの說が傳はり、政壽齋はお熊さんのあとをついで、第二代目家元であつたといふ說もあり、また別に政壽が小唄最初の家元を名乘つたとの說もあります。明治小唄史の上には大切なる項目

ではありますけれど、その邊のことが私にはまだはつきりとわかりかねます。

政壽齋は百一翁より十年乃至十數年後の天保に産まれたさうです。なるほど明治十七年の出版『萬家肖像雅名集』音曲の部に出てをります彼れの肖像を見ますと慥に四十五六乃至五十年輩に見えますから、天保年間の産れといふのは事實でせうと思ひます。

彼れは本名を吉本政吉といひまた茂平ともいひました。魚河岸を繩張りといたしました、い組の仕事師で同所組頭原田紋吉（舊寄席伊勢本亭）の子分だつたのです。痘痕面の醜男で、淺間神社で賣る麥藁の蛇に似てゐるといふので蛇の茂平さんで通つてをりました。火事のために顏をつぶしたのだともいひます。けれど肖像で見るとさうとは見えません。彼れは天稟の美音家で、一中、蘭八、清元、歌澤等に堪能でした。後ちに專ら小唄研究に入り、名も小唄政壽齋といひましたが、一般世間では小唄の茂平さんで通つてをりました。小唄の茂平といへば、大正の今日でも記憶してゐる人があるほどです。

明治八年、西村隼太郎編輯『諸藝人名錄』を見ますと、歌澤節の頭取は歌澤貞吉、哥澤節の頭取は哥澤芝金、小唄の家元として小唄政壽と明記されてをり、更に同書「諸藝頭取世話方人名」欄に五十餘人の名が出てをり、その中に以上三人が出てをりますところから見ますと、歌澤、哥澤と並んで小唄節の家元たる政壽が獨立して一派一門の頭首であつたことは明かでございます。私は彼れの一生について知りたくて、數年前に人手をかりて調べて見ましたけれど詳しいことが知れませんでした。晩年は小田原町から藏前に移りて「木遣節」を敎授してゐたこと、彼れに一女あり藏前で稻荷鮨を商うてゐたといふこと、淺草材木町組頭小林丑太郎といふ人が木遣節の一弟子であつて現存するはずといふことかういつた斷片的消息しか知りかね、明治の何年に死亡したことかはつきりわかりかねます。さりながら、新吉原には政壽から直接に小唄を習つたといふ老妓が現存するはずともいひ、その他にも茂平さんの記憶を有する人もあるらしく思

へますから、他日再調を試みようかと思つてをります。

自由解放の小唄

小唄政壽が歿して小唄家元は無くなつたものと思ひます。元來、端唄といひ歌澤といひ小唄節といふが如き小曲に家元など無用のはずです。段物の淨瑠璃ものに與へられました家元制度が、たま〳〵安政の歌澤節に許されたのは破格異例のことだつたのです。明治になつて百一翁や政壽齋やが、家元を標榜せんとしたのは、嚢日の虎右衛門、芝金等の態度に對抗しようとしたことかと思はれます。家元の存在は、一流を保護し永續せしめる方便とはなりますけれど、歌章も曲調も不羈自在にして掣肘羈絆のなきを特徴といたしまする流行小曲に、家元の存在は矛盾だといはばいはれます。就中、我が小唄節の本質は、自由解放なるところに鑑賞の價値があり、そこに小唄本來の聲曲的生命が傳統されてをるものかと私は思ひます。

されば小唄はあらゆる階級の人々によろこばれて來たのです。あひの手すさみのなぐさみとして嗜まれるところに小唄趣味が認識されます。然り、あらゆる階級の人々に嗜まれましたけれど、特にこれを上手に試みたのは一中節の仲間と清元節の連中とでありまして今日でもその傾向が遺つてをります。思ふに一中と清元と歌澤と小唄との間には、一脈の燃犀相通ずるところがあり、曲調的に交渉するところがあるゆゑかと思はれます。

私はまだ見ませんけれど、故森鷗外博士が詳細な考證を發表されてをるといふ幕末大通、津藤（津國屋藤兵衛）等と仲好しであつたといふ一中節の一中が、一中節から清元節へ行き、更に小唄節に進んだとの消息があります。次で一中節の一十（傴僂の一十といはれた人）が橋場に鈍尻庵を作つたのは明治何年頃であつたかは失念しましたけれど、これまた一中節の本職の外に小唄節の高手であり、現存小唄仲間の内で彼れから敎へられた人もあるとの消息は疑ひのない

ところです。また次に、清元のお葉が、小唄節のために盡したこと、彼の女がこれを嗜んだこと、多數の作曲を試みたことは、今日も活きたる記錄が遺つてをります。清元お葉さんが明治の小唄節を復活せしめたのではないかとまで私には思へます。とにもかくにも、小唄節と一中節、小唄節と清元節との因緣の淺からぬことは疑ひのない事實です。

明治小唄功勞者

百一翁逝き、政壽齋逝き、お葉さんがなくなつて以來の小唄界は、故永井素岳、先代清元梅吉、故横山小芳等が或は中心となつてゐたのではないかと思はれます。素岳翁は日本橋花街に住し、そこの藝者に小唄を傳授いたしました。小芳は日本橋の藝者で、帝國ホテル故横山支配人の愛妾だつたのです。當人も好むところだつたのですが横山氏がまたこれを好んだところから小芳をして小唄研究に傾倒せしめたのでした。

先代清元梅吉もまたこれを嗜み、彼れの節附した小唄が現在行はれてをります。梅吉と小唄との關係を思ふ時、私はいつも故尾崎紅葉山人の小唄歌章を聯想いたします。幇間を父とし、江戸軟文學に共鳴したる江戸ツ兒の紅葉山人は、泥臭ひ野暮文士とは肌合のちがつたところがあつたでせう。神樂坂だの仲の丁に紅葉の逸話の傳はつてゐたことはめづらしくはありますまい。今日も小唄界、歌澤界で唱はれてをります「夜の雨」(本調子)は、紅葉が塚原澁柿園と新橋の竹富久井で遊んだ折の作で、その席に招かれてゐた梅吉が即座の節附であります。この唄は歌澤の方でも唱つてをりますが、それは半井桃水翁が歌澤に作曲され、紅葉歿後、芝紅葉館の紅葉祭で披露されましたもので、一つの唄が、小唄と歌澤と兩方の節で傳へられてゐるのです。

日本銀行頭取、故川田小一郎氏が小唄を好んだことも事實です。同氏がお葉さんに節附けさせた歌章がどれほどありますか、今日まで無事に傳はつてゐるだけでも私は知つておきたいと思つてをります。端唄も歌澤も小唄も、歌詞に共

通したのが多いために、世人はこの三つの共通點と相異點とをわきまへぬがちですけれど、それ〴〵の相異點がありま す。今ここにそれらの項目を述べようとはいたしませぬけれど、うた澤節には前彈があり、小唄節には前彈はなくて後の手のつくこ　が、兩曲の相異點の一つなのです。然るに、名人お葉さんは、在來のこの傳統的約束を破り、天才的發明を試み、後の手を附けないで、唄の終ると同時に三絃の手を放すといふ工夫に成功したものが傳はつてをります。先年、私はこのことを喜撫樂の女將から聞き、同時にそのお葉式の唄を聽きましたが、なんともいへぬ風韻餘韻を味はつたことです。この一項はいまだ一般小唄連中の知らぬことかと思ひます。

「東明節」の開山といはれる平岡吟舟翁が、小唄功勞者の一人であることは今更いふまでもありません。翁はもう何歳の老人なのか。東明節は明治の新創作であり、隨分久しいものではあるけれど、一向に世間に知られぬのは何故であらうか。平岡大盡に近づきの新橋邊のある藝者の評を聞きますと「面白くないから世間にはやらないのです」と申します。更に「妾等にしても、平岡さんが御馳走をして呉れて、そして聽けといふからまア聽いて上げるのです」と申します。これは或は適評なのかも知れぬと思はれもいたします。東明節については今は申しますまい。けれどこの大盡が、明治の小唄界のために遺してゐる功績は知つてをります。それは大盡がお葉だの梅吉だのに作曲を需めた結果、傑れたる節附の小唄が現在に傳へられて、小唄界に行はれてゐることが何よりの證據です。

家元といふ窮屈な笠をかぶらず、文句も節附も、自由自在の解放主義を本領といたしまする小唄の如きは、川田さんといひ平岡さんといひ、かういつた數寄者のパトロンが、名人上手に名手老腕を工夫作曲せしめることが最第一の功勞であると私は信じまする。

十數名の代表者

過去の聲曲は、貴重品視されて文獻記錄が傳へられてをり、比較的に研究の手がかりを得易いのに、幕末から明治への近代の流行小曲は、記錄されるだけの年代を經てゐないゆゑか、一向に調査困難の憾みを抱かせます。

明治小唄史の如き、今のうちにこれを著手しおかずんば、やがては穿鑿の手がかりを失ひ、あたらこの高價なる小曲藝術の變遷推移を知る由なからんかを私は恐れます。若し幸に、明治小唄史を調査せらるる人あらば、多少の參考にもならうかと思ひ、往年、私が直接に見聞したる當流小唄界における代表的十數人の芳名を紹介しておきたいと思ひます。

先づ銀座の藤村の老女將などは過去と明治との小唄通として最古の一人かと思ひます。藤村といへば銀座唯一の待合で、銀座にこんな家のあることを銀座の人さへも知らぬほどです。いつぞや私はこの老女を訪問して、永井素岳と小唄のこと、芝居の故田村成義、播磨屋の吉右衞門等が藤村で小唄を遊んだことなどを聞き、その斷片記事を數年前の『演藝畫報』へ出しておいたと思ひますが今は忘れました。

次に、八百善の老女將、向島の老妓千世(せんよ)などは小唄通の先達といつてよいかも知れません。老女將の若い時分、千世が山谷堀の藝者時代は新吉原がまだ風流の中心として見られてゐたかと思はれます。その時分の堀の藝者衆に濃い小唄の爪彈きが嗜まれたのは申すまでもありますまい。藤村のお神も、八百善のお神も、千世も、その後の消息は知りませんけれど、震災後も無事息災でゐることなら、彼等の小唄智識を遺しておきたいものだと思ひます。近頃流行の技巧的小唄と、千世一流の素朴なる古調小唄とを聽き較べると、このやうな小品小曲の上にさへ、時代好尚の支配をうけて、纖細巧致の變化を示してゐることを知らしめられまする。

築地の喜舞樂の女將小林きん女は、人柄の上品な如く、小唄も上品な點では傑出してをります。小唄は火燵にあたつて、愛人と差し向ひで味はうものでせう。床柱にもたれての爪彈きのものでせう。ざつくばらんな豆紋りの手拭連にも向くものでせう。黒縮緬の大名向きの好尙でもありませう。おきんさんの上品な小唄は、どうやらお大名向きの風韻を思

はせます。お葉さんの小唄智識を記憶してゐるところも貴重な資料です。

お葉さんで思ひ出すことは、明治座の前の川のそばの北邑のお神の小唄が、模範的傑品であることです。お神は清元お葉の娘であり、かつては芳町で小やなの名で唱はれた人です。母たるお葉さんから傳授の小唄といふのを私も二つ三つ聽いて、現在の東京で、このやうな小唄が聽けやうとは、なんたる僥倖であらうと思つたことでした。

神樂坂の岩泉女將米吉女は元は下谷に勤務したので、下谷のお八重さんなどと友達ですから中老年輩です。小唄の數を多く知つてゐることと、三味線のたしかなることとは小唄界に逸すべからざる一人です。

新橋のおゆう、直次、柳橋のおたか、五十以上六十年輩といふ歴史を有し、小唄堪能で知られてをります。

現在、東京市中で小唄師匠の看板を出して多數のお弟子に教授してゐるのは赤坂の田村照、芝の堀小玉の兩女史があります。この外にもまだあるかも知れませぬ。もの盛んになれば、亂れ易いのは是非のないことです。小唄といふが如きものは、少數の間に嗜まれてゐるのが花で、世間的に盛行流布するに至つては、小唄本來の眞風が破壞されて、大正の變調小唄とならねばよいがと案じる人もあるさうですけれど、新時代の新小唄の流行も、時代の要求ならばまたそれで結構なことではないかと私は思つてをります。

この田村照女は、新橋の吉村ゆう女等と朋輩の間柄で、前記横山小芳女等と一緒に、今の中村歌右衛門の妻女お玉さん等と日本橋で左棲をとつてゐた連中ださうです。日本橋藝者の内には、以上の外に小花、やま子、愛子などいふ連中もありまして、明治二十二三年の頃小唄熱の旺盛であつたことを想起させまする。日本橋では上槇町田卷の女將とめ女は近く待合を廢業して小唄研究所の看板を出すことになつてをり、私は第一番の入門豫約者です。

寡聞ながら、私の見聞から比較的めぼしい人名を選び出だせば先づ以上の如き消息となります。いふまでもなくいづれも明治小唄界から大正小唄界に跨がつての代表と見なしてよい人ばかりです。

氣がとがめますから添へ書きさせて頂きます。前に申す通り、小唄節は自由解放のものであり、由來、家元の必要はなく、師匠などの必要もないものとされてをります。三絃堪能の人が、手すさみの嗜好品ですから、どこの誰れが小唄の大家だなど稱せられるやうなものではありませぬ。それゆゑ、どこの花柳界でも老年の間には、多少の小唄通のあることは疑ひません。どこにどんな高手がゐるか知れぬといふところに、小唄一流の面白い天地が與へられてをります。

藝人社會では、前述の通り、一中節と清元節との方面に小唄通の多いことは昔も今も變りはありませぬ。俳優の仲間では中村吉右衛門が傑出したる老手であることは、小唄界にかくれもない評判で、評判通りの上手ださうです。素人の内にも玄人はだしの通人があつて、風月堂の主人など小唄アマチュアの一人だといひます。昨年死亡した村幸第二世村田久吉君の如きは、明治大正を通じて、東京小唄界のチャンピオンで、彼れの美音と名手の前には、たいていの玄人が耳を傾けてをりました。まだ三十いくつといふ若さで夭折いたしましたのも、實のところ、あんまりうますぎた小唄の祟りだつたのです。

明治初期、清元齋兵衛、二代三代清元順三、幇間松廼會、櫻川等の小唄のこと。明治中期、木挽町の小唄粂次等の小唄のこと。新吉原及び中洲で知られた辰巳家お品等の小唄のこと、その他の誰れ彼れの消息は書き漏しましたけれど、おほよそのことは前述にて大體をお察し願ひます。なほ又せしむしの一十の直弟子岡田よね女はまだ四十いくつといふ年輩ですけれど、小唄の高手だといひます。神門[illegible]三氏の愛妾ですからお座敷へ呼んで聽くことできぬのが殘念です。

學者に問うて分らず、文獻に依らうにも記録もなしといふのが、小唄界の實狀です。學者は聾（つんぼ）で机の上で考證に耽けつてをり、藝人は實演技術の一方で文獻だの研究だの措て問ふところにあらず、といふのが邦樂　全體のありさまです。邦樂に向上の素質を有するものありとも、これでは心細くも思はれます。

江戸文化の二分の一は、いはゆる河原乞食と、いはゆる醜業婦とが傳統維持してくれてゐたのを不思議に思はせます。

花柳社會がどんなに不潔な場所であらうとも、彼等の所有する藝道の智識と才能とはこれを護如することと能はず。明治の小唄の如きは、たしかに花柳界の小唄好きが絶えなかつたゆゑに、細ぼそながら維持したものといつてよいかも知れませぬ。

前記小唄通の人々は、この意味から、今日では貴重なる活きたる文獻です。今の内に、彼等の智識と記憶とをまとめておきたいものです。ただこまることは、彼れらから材料を得るには、新聞雜誌記者が種とりをするやうに手輕に參らず、とにもかくにも脇息にもたれてそく／＼と小唄氣分を浮動してかからねばならぬのです。とかく風流は氣永にです。

私は五代目菊五郎と小唄のこと、三遊亭圓朝の妹であつたか女房の妹であつたか明治十六年頃の小唄上手。公爵、侯爵、伯爵といふ肩書をもつてゐた粹大臣等と小唄とのこと、かういつた方面の消息を逸してしまひました。與へられた枚數を超過してをりますから、思ひ出すことを追記の餘地がありません。どうかゆるして下さい。

明治三十年の頃

耶蘇教が流布したら佛法が滅亡するが如くに思つたのは、佛家の杞憂に過ぎませんでした。外教の宣傳があつたればこそ、桃源の夢から目をさまされたのが日本佛教ではありませんか。佛教も外來宗教ですけれど、傳來久しうして日本化し、終に行きつまつてゐたのです。

西洋音樂の盛行を見て、邦樂の退嬰を嘆息し、邦樂の前途を悲觀した輩は、過去の頑迷なる佛徒の杞憂と同一心理に外なかつたことを思はせます。日本音樂も元は外來樂器の日本化したるもの、舶來樂器の摸造であり變形したるものが、長い間に日本化して、我等の言語と思想と感情とを表現するために、幾多の苦心と工夫と發明と練磨とを經過して邦樂となり、盛衰斷續、やがてこれまた行きつまらんとしてをりました。それが外來音樂の盛行につれて反動的の復活を見

ろに至つたのは爭ふべからざる事實であります。

明治三十年頃、今日より三十年以前、私が端唄稽古屋へ通ひましたのは神田の神保町で、今思へば東京堂書店の裏の横丁でありました。小さい稽古屋の師匠は中老後家だつたと思ひます。私はそこで初めて「東京小唄」の洗禮をうけました。親不孝の聲を殺して端唄の二つ三つを學んだことを覺えてをります。その時分は「うた澤」も今日の如く全盛ではありませんでした。東京小唄といつても、それは小唄のやうでもあり、端唄のやうでもあり、私に端唄節と小唄節との曲調的區別の分らぬ時代です。

稽古仲間は今日でいふ勞働者階級でした。忘れもせぬのは、歳末みそか、師匠の家が煤はきをするといふので、私は砲兵工廠に通つてゐるといふ職人のお弟子と共に、疊を上げたり、棚をふいたら、掃除の手傳をさせられたことがありました。今日の勞働者は、小唄の稽古どころのさわぎではなく、江戸小唄よりもギルドだのマルクスだの硬的研究に沒頭するといふ激變ぶりです。稽古屋にしてもお弟子は卽ちお客様で、師匠がお弟子に大掃除の手傳ひをさせるやうなことも、もはや今日では見られぬ圖であらうかと思はれます。遊藝の稽古をするお弟子の心意氣も、その時分は全く呑氣な道樂氣分であつて、今日の新人が理論的に理窟的に研究をするのと對照して、隔世の感なき能はぬ。

それから十年程を經過し、日露役の後ちあたりから、東京市中の遊藝稽古屋に、新教育をうけたる新人の顏を見るの傾向を促し來り、私が本石町の芝鉛へ通ひ初めたころは江戸趣味として江戸聲曲憧憬熱の擡頭を見るに至つたのです。

爾來、明治を送り、大正の新時代を迎へて、年一年、邦樂の復活は、歌舞伎劇の復活に比例し、洋樂の盛行と並行的現象を示してをります。これひとへに人文の向上、文化生活、趣味生活の要求に職由することでありませうけれど、一面には洋樂の刺戟反動とも見られるのでございます。

事實の紹介に乏しくて、ちよい／＼と、くだらぬ愚見を述べました。お目ざわりのところはお見のがしを願ひまする。

（十五年二月）

樗牛後期の詩評

——詩評家としての高山樗牛(二)——

日夏耿之介

武島羽衣の詩を評して、樗牛は詩評家としての、而して又批評家としての全形を曝露したが、つづいて彼は、「『文學界』の諸君子に寄する書」(二十八年十月)を書いて、先ず「超然一意、靈界の幽趣を樂み、美術の神韻を歌ふ」この一派のダンテ、ペトラルカの遺韻を尋ね、アンジエロ、ラフアエロの流風を慕ふ詩風を說き、「さるにても諸子の歌ふ響の、いかなればかくは悲しく心細きとのみ多かるぞ。」と二度までも繰返して、同誌上の馬場孤蝶が「蝶を葬るの辭」を評してこれをバーンズと比較し、その哀切を賞して終に「さはれ吾等は今日バーンズを歡迎せざるべし。」その理由は、カーライルも "Shut Thy Byron, open rhy Goethe’ と云つたが、そも〳〵この語意を知れりや、「此世には琴よりも花よりも大なるものあるなり。」彼バーンズは「博大なる永遠なる人道に向ては涙を灑がざりき、そは彼れの悲しみは常に下と內とに向ひたればなり。人は徒に悲哀すべからず、悲哀によりて悲哀を脫せざるべからず、是れ大なる人、健全なる人、道德ある人の悲哀なり。」自分は『文學界』の諸子に向てゲーテ、シルレルを持出すほどの『物の勘定だに知らぬ男』ではないと自ら辯護してゐる。

バーンズを孤蝶と比較するの迂拙はしばらく措くも、樗牛の簡單なバーンズ觀及び、粗末極まる「文學界」觀並びに他の纖細な心情への心からなる同情と理解とに乏しきはこれを以ても推しはかられうる。又、彼の衷心要求する詩歌の

傾向がほぼ如何のものであるかも推量するにかたくない。

『文學界』の一般的傾向に對して時代の東道者としての批評家として眞に理解と同情とあらば、牛に向つて馬の動作を要求するが如きことは出來得ない筈である。彼は「孤蝶子を『文學界』一派の思想を代表せしむるを得べきか。」と速斷して、透谷の苦悶も禿木の惝恍も藤村の心緒も柳村の詩情も秋骨の感懐も天知の閑情も事細かに味解してゐない。否、心をとめてよく理解しようとすれば、ある程度までは理解出來ない事はない彼であるが、この一文は輕卒に大さつぱに片つけてしまつた故に彼の缺點が一層よくさらけ出されてゐるのである。

が、樗牛の美所は常に努めて公正の態度に出でんとした一事である。羽衣を推賞しすぎたのも、羽衣への個人的身びいきに出立したものではなくて、たま〳〵自分の思考する詩歌の型式に接近したがためであり、藤村をおとしめ、晩翠をあげたのも一がたま〳〵わが希望と正反對の立場に立つた詩風にあつたからであり、一がたま〳〵わが主張と一致する本質を所有してゐたと考へたからに外ならぬ。否、寧ろその强き性格もて弱く拙き儕輩のある者をわが亞流たらしめんとした程の彼である。樗牛が羽衣、雨江、桂月、烏山ら大學派詩人を評して「今の詩人は故らに其言を迂にし、其情を微にし、務めて讀者の感情を疎隔せむとするもの丶如し。」と云ひ、「彼等の作を讀むや、吾等の望遠鏡を以て其形を見電話機によりて其聲を聞くの感あり。」とせるは結果から見て大體首肯しなければならぬ正論である。この望遠鏡式深山美人の描寫を攻めた樗牛は、かつて此派の羽衣の電話機式小夜砧の音を欣愛したのであるが、一たび賞美したわが舊言に囚はれず斷然所謂擬古詩派の缺點をあげたのは、一面批評に正直で公正な彼の態度を示したものであり、一面わが主張し熱望する何ものかの本體が漸く明らかになつて來たため敢爲にあらゆる作品を評し去るを得たからである。

「通讀の際、其調子のみ耳につきて、其意義の索然たるもの」を斥けた彼は、確かに大學派の缺陷をついたのであるが一面、そこに云ふべからざる含蓄があり、調子を耳にし乍ら同時に微妙な感情の搖曳を悟る度數が鑑賞家と

して樗牛は割合に少なかつた事も事實である。羽衣一派にホイツトマンを强ふるは色鳥の羽毛をとり去つて尚その美を認めんとするにもひとしい愚行である。

眞に樗牛が羽衣雨江らを知つてゐたのならば、眞に詩歌の纎細な鑑賞に耐へえたのならば、匠氣と技巧とを攻めるに先立ち、簡素と眞率とを强ふるに先立ち、彼等の詩風が畢竟全然虛僞のものであるか、幾分の必然性にたよれるものであるかを判別し、若し全くの虛僞又は盲目に出立してゐるものなら、是れに改心と變化と展開とを要求するは自然であるが、既に彼等の立場を批評家的寛裕を以て認め且つ羽衣の場合の如く大いに推賞もした以上は、かれらの文語雅語詩その表現法、その感情の本質、思想の本態をよく査べてかれらの詩風の自然、必然に赴くなべに波のたゆたひにそれらの身を任せしめつゝ、その上で巧みに指針を命じるが評家のとるべき東道的態度である。

『僞詩人とは何ぞ』（三十一年六月）に於てかれは、「文法と古語とを以て詩を造らむとする僞詩人」を嗤ひ、由來我邦には一種奇異なる風習あり、國學者とし云へば必ず歌人にして、漢學者とし云へば必ず同時に詩人たり。かく文法家語學家が詩歌を詠ずることをば一種の先天的職業の如く心得、世人も亦敢て怪むことをせざるは甚だ謂はれなき事ならずや。」といひ「彼等は決して詩人たらむが爲に國文を學びたるにはあらずして、唯國文を學びたる序に詩人たらむとの野心を起したるもののみ。」といひ、「多少古語雅語に通じたりと謂ふの外、何等詩才詩情の特に常人に勝れたるものあるに非ざる也。」といひ、「唯文字章句を巧みに排列して俗目を喜ばしるむ一種の玩具たるに過ぎざるは、是れも無き次第とや謂ふべき。」といひつひに、「吾等は最早や彼等の作り泣き、作り笑ひに飽き果てぬ。吾等の欲するは靈魂の聲なり。」といつたは當年の積弊を確かに鋭く突いた卓見で、これを讀んで冷汗三斗に及んだもの恐らく夥しかつたに相違ない。此等の點を見ても樗牛が如何に天成のジャーナリストとして（天成の評家として以上に）惠まれてゐたかを推測するにかたくない。

然し、此等は一般現象への概括批評としてのみ許さるべきであるが、たとへば樗牛が右の文章を草しつゝ私かにその文敵としてゐたらしい形迹がたしかにある鹽井雨江の如きは、國文科出の文學士で國文學を專攻し國語學にも通じ、註解本の著書もあり、後には詩作を廢して一專門學校教授として終つた人であるが、かれが青年時の詩作中の作品を見れば雨江は決して僞詩人でもなく、「詩歌を詠ずることをば一種の先天的職業の如く心得」た文法家でもなかつた。文法にも古語雅文にも通じてゐたためその方の感化が著しくはあつたが眞の詩情詩才をも持ち合せた純情の人であつた。

一見耳遠き雅語をあやつるを以て直ちに遊戲詩品となし、文法註疏の業に就くを以て詩才なしと斷じさるは輕卒以上の粗笨な暴言ともいはれねばならぬ。眞に詩に純なりや否やは業務や外型や專門やに執する事なくして直ちに作品そのものに對して纖鋭の鑑賞眼批評心を縱横に發揮しなければならぬ。雨江が「花紅葉」や「暗香疏影」中の名品を味解しうるものは、外形一見文法に囚はれ古文雅語に殺された造化文章のごとく思惟するも、よく味はへば、茫寞たる雅文の內生々潑剌たる感情の奔騰あり、情緒の綿々縷々たる搖曳あるを悟るであらう。この微妙な詩趣を頓悟しないで此時代の擬古派の功過を判定することは不可能である。

樗牛たま〳〵言を玩んで大言壯語するが、實はよく這般の消息に通じてゐたのであらうか。若くは然らざりしのであらうか。樗牛の殘した批評文を閱してゆくと、どうも後者と判定しなければならぬ缺點があまりに多く散在してゐるのである。而して擬古派を論じて雨江桂月に及んだ一文を讀んで特にその感を深くするのである。かれの鑑賞と批評とが眞に名評家の域に到達してゐたならば、その批評精神は、その批評眼は、一人の雨江といふ迷へる詩人の天禀の詩才を更に美しく、いとせめて神の定め玉ふたあたり迄發輝せしめて、この詩風、この詩情、この形式に於て明治時代のみが有しうる獨自の詩的所產を產ましめる好助產術を經驗したに相違ない。しかるに事こゝに及ばなかつたのは、當年の唯一の詩評家樗牛がこの程度のジャーナリスト的眼光にすぎなかつたためと、雨江本人が時代の逆潮に抗して飽く迄も自

己詩感の源流まで溯江するの勇氣と自信とを缺いて、空しくその詩才を辛じてあの程度しか發輝出來なかつたがためで時代と詩人との微妙な交渉は多くこの樣な處にも窺はるべく、これを以て直ちに作品その人の天賦の貧弱と解するは速斷である。假令んば雨江は、藤村以上の詩才がない人であつたにもせよ、かれを培ふ時代の五風十雨がかれの詩情によりよろしかつたならば、あの程度よりももつと立派な程度の業績を殘しえたに違ひないと考へられる。

樗牛の現實主義はホイツトマンを紹介し、(三十一年五月)合せて外山博士の新作詩を辯護してゐる。(同年同月)ホイツトマンに於て樗牛が、他のロゼテイやバーンズやバイロンやシエリやを論じた場合以上に精密的確に近くその詩を鑑賞しえたのは、この軍鼓のひびきをとゞろかす米國式人生詩人、「感情の響にあらずして意志の聲なり」と樗牛自ら說明せるこの十九世紀式現實詩人の氣魄に割合に早く能く接し得たからで、すべて世にホイツトマン流の粗荒美を解する人多きもロゼテイの幽緻美を悟る人の少きが如く、樗牛程度の鑑賞眼を以てしては此前世紀の北米詩人ホイツトマンを談るのが唯一の適役であつたのである。

が、このホイツトマン宣傳はあまり多くの影響を詩壇に與へなかつた。かれのホイツトマニズムは樗牛自身にとつては正しく切實な一個の問題であり、嚴肅な一個の希望であり、痛烈な一個の主張ではあつたけれども、詩壇は此等の論議に耳傾けるその以前にもつと早くまとめねばならぬ多くの緊急問題があつたのである。彼等は文語の格律詩の存廢の問題に苦しんでゐるのである。この文語の格律に身を縛めつゝ樗牛の呼ぶ簡素主義や直裁主義に心を寄せんとするは譬へば方丈の室にあつてマラソン競走を思ふ樣なものである。樗牛自身もホイツトマンの「アダムの子等」や「未來詩人」を譯すのに

　爾等は曾て女の肉體を愛せしことありや。

のごとき文語譯を以てしてゐるので、原詩のフレクシビリテイーや自由奔放やの詞致を移するに國語又は國語に類す

る文語體を使用するには及ばなかつたのは、かれが尙未だ詩語卽文語の觀念を套襲してゐたからなので、穴勝ち文語の格調美と簡勁とを愛する念より出でた語法の選定ではなかつたらしい。

　文語詩の完成が當代の一大使命であつた上は、詩壇の風潮が靡然としてその方角に向つて動いたのは當然である。而してその傾向は、透谷梅花はじめ藤村、晩翠の二詩人を經て鐵幹、柳村清白より有明、泣菫に及んでつひにその頂點に到達した。樗牛の斥けた朦朧體はかれが存在中一圖にその進程を忙いだのみならず明治四十年代初期に及ぶまでその行路をとどめなかつたのであるから彼の進言が一として（論それ自身として不正ならざるも）具體化されなかつたのは寧ろ當然である。この卓れたジャーナリストの主張は、自己の主張の一面に急であつて時勢（特に詩壇の）を大觀するの纖細の神經に缺くところあつたがために、ついに多くの貢献をばもたらさなかつたが、「只、當時の一般的詩弊をついて亞流詩人を反省せしめ遠く一詩風勃興の基礎を堅めた效勞はこれを認めなければならぬ。その事に就て更に一度究訊して見やう。

　三十年七月樗牛は「朦朧派の詩人に與ふ」の一文を書いて、「本邦言語の性質として、字母の時間に變化なきこと、一言語を構成する字母の數量の種類に乏しきこと、隨て音律の制限は主として人身生理上のリュトムスに依りて規定せらるゝと、是の如くにして感情思想は一種の外的形式に箝束せられて其自由の暢發を遂げざること、是等の事情の我が詩歌の進捗を沮遏せる所の有力なる原因なるべきことは、吾人之を認む。」と述べたは大體に於て肯すべき論述であるが次に「然れども新體詩昨今の窘塞を致したる上に於て、直接の原因を成せるものは實に新體詩家其の人なりと言はざるべからず。是れ新體詩家を外にして、天下眼あるものゝ明に認識する所なり。」と皮肉な觀察と口吻とを示してゐるのにはこれを飽くまでも彈正臺に上して見る必要を感じる。敍事詩や敍事詩的抒情詩に「今日の詩形」が不適當だといふ樗牛の議論は尤もであるけれども、純抒情詩までが「やゝもすれば雕績滿目」で「故らに意の透徹を避けて隔靴搔痒の弊」

あるが故に、（よしんば、「古語と擬古と必ずしも不可ならず」と辯明せるも）いはゆる朦朧派詩人が「僞善者の態度」をとつてをるのだと結論せるは行論の不備以上に上來繰返し來れるごとく樗牛の鑑賞眼の粗雜を認めざるをえない第一の所因である。

若し果して古語や擬古が必ずしも不可でないといふ樗牛の言が眞實ならば大學派詩人は如何に實際の詩人的態度を決したらばよいのか。樗牛は之れに對し何ら具體的の提案をも示さず、ひたすら現實と直截とを說き朦朧と散漫とを斥けんとするは說論すべき本人を前に自ら目閉ぢて大言叱呼するの類にすぎない。著しく穩當を欠く所以である。而も、そのガイベルやウーランドやハイネやリユツケルトを引證し、ゲーテ、シエリー、キーツ、シルレルの難解あるも朦朧なしと說いたは、難解と朦朧との二範疇の間に歷然たる詩的區分を明確に認めた上の所言であつたらうか。樗牛果してキーツの感情に飽くまでも共鳴して表現詩句法の難を解けば即ち釋然として全篇を氷解頓悟し得たのであらうか。われらは、樗牛の多くの詩人寸評言に照して見て、かれが到然キーツの纖細な鑑賞家に伍する資格がなかつた事を信ぜずにはをられぬ、一歩を讓つてかれ自らはよく味解せりと信じたとするも、これ大ざつぱの解釋法にすぎず、キーツ、シエリー等の情緒神經は樗牛の鑑識を超越し遙かに纖細と幽微とを極めたものであつたのである。樗牛はその朦朧詩の代表として藤村の「四つの袖」をあげて論駁してゐる。（三十年九月「朦朧體の末路」）

島崎藤村は當年詩家の錚々、「作品の醇雅、思想の高潔を以て夙に同人の間に推さる。」と樗牛自ら記してゐるし、右の作が「近業中」苦心の作であるとしてあるから作者と作柄について評者が完く盲目であつたわけではないが、「『四つの袖』は抑々何事を歌ひたるものなるか。吾人一讀して之を解する能はず、再讀三讀して僅かに其の髣髴を摸捉し得たり。」と云ひ、この作を解するの勞苦を以て「吾人は慥かにスヱデンボルグを一讀することを得べし。」と誇張しその「艱深朦朧」を攻め、「比興工ならざるに非ず、措辭造語また纖巧を極む、獨り詩趣の索然なるを如何せむ。」といひ、

なさけの水棹こひの舟

云々の首節四行を解すべからずとしたはよい、が、

あゝ朱盃を舟として
なさけにうかびこひに醉ひ
君のほとりに漕ぎくれば
盲にかへる我身かな

を「何ぞ誇大の甚しきや。」としたは當らず、比喩の言は尚一層誇大なるをいさゝかもさまたげないが、只三行と四行の句が甚しく拙劣なるがために全節の效果が擧がらなかつたので、誇大をせめる前にこれは須らくその表現詩法の迂拙をせめるを正當とする。

あゝわが戀は夏雲の
かげに照る日の熱ければ
涼しき風の吹きかよふ
君の陰こそこひしけれ

あゝわがこひはあを〳〵さ
胸の若葉のしげければ
やさしき涙ふりそゝぐ
君の雨こそこひしけれ

心の暗路むれの星

こひの道芝ふみまよふ
短かき夜のあけそめて
いさも露けき夏の朝

等の行句を評して「風雲月露に托して情を抒ぶるは、小歌曲の事のみ。」とせるも亦あたらない。小歌曲ならずとも大詩人の詩情は譬喩の説法を用ゐてこの種の詩感の造形に成功せるは昔から少くない。

只この藤村の詩が佳作でないのは、風雲月露に托して抒情したその事が悪いのでなく、譬喩文學の興味漸く廢れ來つた近代人の胸に如何にしてかゝる表現法を用ゐてよく簡勁の表現を完し熾情を傳ふべきやといふ殊別の注意が不足で只筆先きの技巧に乘つて輕卒に詩心を滑べらしたに原くので、全篇の朦朧は過半の事實であるが、朦朧を攻めるはそも〱末の末の事である。更に詩歌製作の心理に立入つてその技巧の失敗點を具體的に列擧して、その方面から作者の反省をうながさなければ畢竟批評家の批評は第三者の無責任な快哉を叫ぶにとどまり肝腎の作者自身にとつてよく他山の石たる事は難い。

しかも、桂月、雨江、羽衣らの詩に於て十把一からげにその朦朧と散漫とを斥け去つた樗牛の文章の中には玉石を同置とし本末を顛倒した如き例もないではなかつた。朦朧派を斥けるは樗牛の趣味ではあつたが、詩壇の最大事件では必ずしもなかつたのである。しかも朦朧體を斥けんとした一文として見ても樗牛の文に以上の粗笨が多かつた事は見のがす事の出來ない明白な事實である。

思ふに、當年の作家を通觀して樗牛の評のため可なり手痛い重傷を受けた者の多かつた事は推測するに難くない事さきにも述べたが、評家としての樗牛の業績は詩壇の一流作家に反省を求めた力はかく比較的弱かつたけれども、末派亞流の無自覺な小詩人らに大痛棒を與へた効果は慥かにあつた。樗牛の趣味が更に著しく接近した土井晩翠の詩を評して彼が何と云つたかを驗すれば、樗牛の批評眼の價値に更に一層明らかにせられるのである。（つづく）

文藝時評

風流隱士の辯

本間久雄

正宗白鳥氏が「中央公論」に毎月寄せてゐる「文藝時評」は、私が同誌を手にして先づ第一に讀む程私に取つては興味のある讀物である。氏の長い間の文壇的生活や、創作家としての多年の經驗や、宿命的だといふ嫌ひはあつてもその深刻な人生觀や、これらを背景として氏の現在の心境に浮んで來た當面の問題を解説し批判してゐるこの「文藝時評」は全く他の追隨を許さないものである。氏の眼界が一局部に限られてゐないで、ひろい方面に亙つてゐることも、一般の批評家がよくするやうな態度論や概念論ではなく、常に具體的な事實や問題を捉へて來ることにも、私は感心する。又全く異つて作物や傾向に對しても、常に偏らず、何れもそれ〲の立場から、それを鑑賞しようとする寛大な心を持つてゐることにも感服の外はない。例へば二月號で、全く異つた作風である長塚節の『土』と永井荷風氏の『腕くらべ』とを、それ〲の立場から十分によく鑑賞し批評してゐる如きも、偶々氏のこの寛大な鑑賞心を證明して餘りある。ヴオールタア ペイタアは「眞の批評家に取つては、藝術上の如何なる型も、又いかなる時代も同等の價値を持つてゐる」といふ意味のことを云てたが、たしかに藝術批評の場合には、この何れの型、何れの時代をも、自己の好惡によつて選擇したり、排斥したり、又は推賞したりすることのないだけの心を持つことが必要である。これは當り前のことではあるが、實際には容易にあり得ないことである。この意味でも私は白鳥氏の文藝批評に先づ第一に敬意を表したい。

しかし、二月號の同氏の批評の中には、

ゐる低級な文人を眞顏をして推讃するなんか私には滑稽至極に思はれる」と云つてゐることである。

永井荷風氏のものに、――その『日和下駄』にもその近著『麻布襍誌』にも――事實、柳北が、よい意味で屢々引合に出されてゐる。そのことを無論、こゝでとや角いふのではない。私の怪訝に堪へないのは、柳北は、白鳥氏の言はれるやうに、果して、江戸末期のいやみだけを持つてゐた低級な文學者であらうかといふことである。

尤も、私は柳北について特に研究したといふわけではない。僅かに『柳北全集』一卷と渡邊修二郎編纂、明治十一年刊行の『近世名家傳』所載の柳北傳や信夫恕軒の柳北論などから得た知識しか私は持ち合せてゐない。しかし私の如上から得た僅かの知識から推測しただけでも、柳北は決して江戸末期のいやみだけを持つた低級な文學者ではないらしい。『柳橋新誌』や『京猫一斑』のやうな花柳情調の濃厚な作だけを讀んだ人には、或ひはその戲作氣質や、或ひはその題材そのものゝ與へる遊蕩的情調や或ひはその風流隱士を以て自ら高しとする茶人的氣分や、などから推測して、柳北を以て江戸末期のいやみを多分に持つた文學者と早合點するかも知れない。しかし、さういふ遊蕩的態度をどうして彼れが取るやうになつたか。又、どうして彼れは風流隱士を以て自ら任ずるやうになつたか。――といふことを考へる時にはそこに相當に深刻ないきさつの潛んでゐることを見逃し得ないのである。そしてこのことを明かにするためには、彼れがどういふ經歷の人であり、且つどういう爲人であつたかを先づ一瞥する必要がある。少しくだ〱しいが、上記『近世名家傳』の中からその一節を拔き書きする。

成崎柳北は天保八年を以て生る。小字は甲子太郎、後に大隅守と稱す。世々幕府に仕へ、儒を以て著はる。年十八にして將軍の侍讀となり、德川氏實錄の編輯を督す。當時の內閣振はざるを以て之を矯んとせしが力及ばず。慷慨止むべからず、遂に痛飲縱遊して以てその抑鬱の氣を泄らす。或は筆墨を假りて以てその不平を鳴す。嘗て狂詩を賦して「權官評議臭ㇾ於ㇾ屁、大府威光輕似ㇾ唾」の句あり。幕府權官之を視て大に怒り忽ち其職を免し五十日の謹愼を命ず。君此より門を閉ぢて洋學を修る事三年也。門生其洋學に就くを悅ばず冀く背き去り或は君を殺さんと欲するものあるに至る

これによつても柳北がいかに壯年からすでに學才に長じてゐたか、又いかに硬骨漢であつたか、又いかに新時代を洞察するの明敏さを持つてゐたかを察することが出來るではないか。

その後慶應元年柳北は擢んでられて騎兵頭となり、後外國奉行となり、更に轉じて會計總裁となり、幕府經藏の空乏の際に當つて、大に盡すところがあつた。偶々維新の改革が起つたが、この際における柳北の態度は、最もよくその硬骨振りを發揮したものであつた。

> 慶喜の罪を朝廷に獲るや上野に謹愼せんとす。柳北曰く上野に屛居するは不可なり。單行して京都に至り罪を謝すべし。臣等二三名扈從せん……然るときは東國の人心必ず動搖することなからんと諍ふて深更に至りしかど慶喜聽かず、官軍將に江戸に入らんとする時城中會議し、或ひは慶喜をして人民の爲めに自ら謀る所あらしめんとす。衆皆默す。君(柳北)憤然として云ふ諸君は是れ主君の鴻恩を荷ふ者に非ずや。今危急に臨み主君を殺して罪を謝するが如き諸君忍んで之を爲すも、大隅は決して從ふ能はずと衆皆之に服す。

『近世名家傳』には以上のやうに書いてある。これによつても彼れの爲人を知ることが出來るであらう。

明治維新となつてからは、彼れは徳川幕府に受けた恩誼を考へて薩長の新政府に膝を屈することを潔としなかつた。もし彼れが勝安房のやうな時勢に適合する圓滑な人物であつたならば、巧みに官海を遊泳して一身の榮華を贏ち得たであらうが、――事實新政府から左院出仕を命ぜられても辭して就かなかつた――さうしないで、自ら隱士を以て任じたところに、彼れの馬鹿正直なほど節にあつい、むしろ高潔な人格を認め得るではないか。

しかし、いかに世に隱れたと言つても、上に述べたやうな經歴を持ち、上に述べたやうな爲人であつたから、彼れが決して樂隱居然と構へることの出來なかつたのは言ふ迄もない。彼れは一面に風流に身を委ぜると共に、一面に慷慨悲憤の士であつた。彼れのこの心事は、明治元年の秋にものした彼れ自らの自叙傳『濹上隱士傳』の中に遺憾なく窺はれる。

> 隱士生れて、人に短なるところ少なからず。色を好むこと甚し。酒を嗜むこと亦甚し。百般の遊戲好まざるところなく、好んで
> 人を罵り、[illegible]

へども、常に家國の安危を心にとゞめり。これ長ずるところといふべきか。隱士妙齡より今日に至るまで遊戲連年、未だその倦たるけしきを見ず、古の所謂情痴なるものか。隱士風雲花月の妙處に逢ふ時は、誕、流し、魂を飛し、酒を把て、陶々として樂む。時に詩歌を草す。所謂風流客なるか。隱士盛宴に臨み、紅裙前に滿るに當て、時として感激扼腕、嬌娜の色も眼に上らず、痛憤按劍の志あり。所謂慷慨悲壯なる者か。

いかにもよく自己解剖をしてゐるではないか。

事實においても彼れは慨世の士である。その洗錬された都會趣味から見て、その歷世儒を以て幕府に仕へたといふやうな經歷が自ら齎らしたであらうと思はれる學問的自負から見て、多分禮節にならはない薩長の田舍侍たちが、我れは顏に天下を料理してゐるのを見るのは、彼れに取つて恐らく堪へがたいことであつたであらう。彼れは明治七年朝野新聞社に聘せられたのを機會に、筆をもつて、切りに當時のフイリスチニズムや時の政府のやり方に反抗した。その結果は所謂讒謗律に觸れて、筆禍を買ひ、明治九年、獄に投ぜられたことさへあつた。この一事によつても彼れが決して尋常一樣の風流人でなかつたことがわかるであらう。

『柳北全集』一卷を今日心して讀むものには、第一に彼れの反抗意識が眼につく。その當時のバルガリズムに對する不滿や不平やが眼につく。それから更にその結果自ら釀し出されたサアカステツクな嘲笑が眼につく。それから、更にたとひ朧げではあるが、一種の社會改造意識が眼につく。かくして、柳北の文章の、今日の吾々に與へる興味は、文明批評としてのそれである。柳北のどこからも、江戸末期のいやみだけを持つた低級な文學者といふ感じは受け取れない。柳北はむしろ高邁な文明批評家であり、纖細な感情を持つた詩人であり、情誼にもろい學者であり、更に慷慨悲憤の憂國の士である。序でながら左に「惡年なる哉」と題して、明治十七年の暮れの死ぬ少し前に書いた一節を引かう。こんな一寸としたことの中にも社會を思ふ念がよく現はれてゐると思はれるからである。

噫本年は眞に惡年なる哉、今や隙駒駸々として歲將に除ならんとす。願くはこの惡年の早く去り了て、來る十八年は少しく愉

殺したのも、彼れとしては思ひ設けぬ結果であり、この『叛逆時代の將門』で、常陸の國廳を掠奪したり燒拂つたりして自ら反逆者となつたのも、全く彼れの思ひ設けぬ結果であつた。同樣に關東第一の剛の者と衆人から崇められるのも全く彼れの思ひ設けぬところであつた。彼れ自ら「おれはこの頃高い、危い木の枝に登つて、下を見て眩暈するやうな心持だ」と云つてゐるが、彼れは實際いつの間にか、思ひもかけず一族の長と崇められ、武勇第一の男と尊ばれ、そのために却つて不安と焦燥とに身をもだえる男であつた。彼れは又、「おれはな、から……野に隱れて咲く花の小さなやうに小さく、靜かなやうに靜かに、音もなく、聲もなく、から……靜寂に生きてゆきたいと思ふのだ」といつてゐるやうな一種の詩人であるにかゝはらず、中央政府と地方豪族の政治的及至經濟的對峙の渦中に卷きこまれて吾れ自ら狂するばかりに苦しむ氣の毒な男であつた。

在來のやうに將門を單なる亂臣賊子としたり、所謂相馬內裏を造つて王位を僭するといふ豪慢な人物としたりしないで、上のやうな性格者として解釋したのは、たしかに作者の新見解である。殊に、この作を包んでゐる時代的雰氣圍に作者の文化史的解釋が濃厚に裏づけられてゐるのを私は最も喜ぶ。卽ち中央集權對地方自治の問題や、農村問題や階級鬪爭の問題や、——さういふ今日尙新しいさまざまの社會問題を、この將門時代にたづね上つて、やがて公卿の凋落から武人の勃興に移る社會的空氣をいかにも生々と鮮かに描いてゐるのを私は喜ぶ。

『叛逆時代の將門』はその前篇『平將門』と共に、最近における文化史的史劇の好標本として推賞さるべきものであることは疑ひを入れない。

春の美術展覽會瞥見

殆んど同時に春の上野を飾つた春陽會や國畫創作の繪畫展覽會を一わたりざつとのぞいて見た。そして、甚だ概括的な言ひ方ではあるが、在來の洋畫が日本趣味を取り入れようとする傾向と、その反對に、日本畫が洋畫的畫風を取り入れようとしてゐることとの著しいのが殊に眼についた。(尤もこれは今始めて目についたことではないが。)そして春陽會では

快なる年たらんことを切に希望するのみ。本年は全國の不景氣も既に極點に及べり。彼蒼々々宜く我が窮民のためにこの貧乏社會を一變するの計を畫せよ。漁史の若き貧困に慣れて之を憂と爲さゞる者は姑く論ぜず。この惡しき形勢にて兩三年を經過するならば、人々皆困頓痛苦し、社會の有樣は將に如何なる慘狀を現ずるに至らんか。惡年々々汝去て復た再び來ること勿れ。古人云ふ、人にして年を罪すること勿れと。漁史は其言に拘らず　斷然年を罪せんと欲す。汝それ甘んじて其罪に伏せよ。」

彼れは、しかし翌十八年を迎へることなく、これを書いて間もなく、十一月三十日に、四十八で亡くなつた。

『叛逆時代の將門』を讀む

眞山青果氏が昨年正月の「中央公論」に寄せた長篇戯曲『平將門』は、私もその時讀んで非常に感嘆した一人である。その後、眞山氏は同じ雜誌にその續篇ともいふべき『叛逆時代の將門』を寄せたが、私は何かの都合でつひその時は讀まずに了つた。今度、書籍の形で刊行されたのを機會に、私は早速讀んだ。そして前の『平將門』と同じやうにこの作にも感嘆した。

眞山氏に依つて描かれた將門は、在來の歴史家などの將門觀とは全く趣きを異にしてゐる。在來の將門は亂臣賊子として取扱はれてゐる。例へば手元にある二三の歴史書によつて見ても『史鑑』には「人皇ありしよりこゝに六十餘世、未だ逆號を僣する者あらず。これあるは平新皇より始まれり」と書いてあり、青山延光の書いたものゝ中にも、將門が檢非違使たらんとして得ず、反を起すといふやうに解釋して「將門一呼して起り、群盜景從す」などと將門をあたかも賊の張本人でもあるやうに云つてゐる。文學方面でも、將門は金平本の昔しから惡しざまに描かれてゐる。萬事に同情心の豊かな近松でさへも、その『關八州繫馬』では將門にいさゝかの同情のない書き方をしてゐる。讀本の『將門征伐圖會』といふ十冊物などでは、將門を全く兇暴無殘な人間として描いてゐる。

眞山氏の將門は、さういふ亂臣賊子ではない。物に激し易く且つひたむきに心の中のわだかまりを解釋しようとして焦る性格から、知らず〳〵の間に悲劇の主人公となるやうな人物に描いてある。將門が前篇『平將門』で、叔父國香を

殺したのも、彼れとしては思ひ設けぬ結果であり、この『叛逆時代の將門』で、常陸の國廳を掠奪したり燒拂つたりして自ら反逆者となつたのも、全く彼れの思ひ設けぬ結果であつた。同樣に關東第一の剛の者と衆人から崇められるのも全く彼れの思ひ設けぬところであつた。彼れ自ら「おれはこの頃高い、危い木の枝に登つて、下を見て眩暈するやうな心持だ」と云つてゐるが、彼れは實際いつの間にか、思ひもかけず一族の長と崇められ、武勇第一の男と尊ばれ、そのために却つて不安と焦燥とに身をもだえる男であつた。彼れは又、「おれはな、かう……野に隱れて咲く花の小さなやうに小さく、靜かなやうに靜かに、音もなく、聲もなく、かう……靜寂に生きてゆきたいと思ふのだ」といつてゐるやうな一種の詩人であるにかゝはらず、中央政府と地方豪族の政治的及至經濟的對峙の渦中に卷きこまれて吾れ自ら狂するばかりに苦しむ氣の毒な男であつた。

在來のやうに將門を單なる亂臣賊子としたり、所謂相馬內裏を造つて王位を僭するといふ豪慢な人物としたりしないで、上のやうな性格者として解釋したのは、たしかに作者の新見解である。殊に、この作を包んでゐる時代的雰氣圍に作者の文化史的解釋が濃厚に裏づけられてゐるのを私は最も喜ぶ。卽ち中央集權對地方自治の問題や、農村問題や階級鬪爭の問題や、――さういふ今日尙新しいさま〴〵の社會問題を、この將門時代にたづね上つて、やがて公卿の凋落から武人の勃興に移る社會的空氣をいかにも生々と鮮かに描いてゐるのを私は喜ぶ。

『叛逆時代の將門』はその前篇『平將門』と共に、最近における文化史的史劇の好標本として推賞さるべきものであることは疑ひを入れない。

春の美術展覽會瞥見

殆んど同時に春の上野を飾つた春陽會や國畫創作の繪畫展覽會を一わたりざつとのぞいて見た。そして、甚だ概括的な言ひ方ではあるが、在來の洋畫が日本趣味を取り入れようとする傾向と、その反對に、日本畫が洋畫的畫風を取り入れようとしてゐることとの著しいのが殊に眼についた。(尤もこれは今始めて目についたことではないが。)そして春陽會では

前者の傾向が特に著しく、國展では後者の傾向が特に著しいことも目についた。

洋畫が日本趣味——といふと語弊もあるが——になることは當然なことである。この二三年來度々催される佛蘭西本土から持ち來された繪畫の展覽會などを見た人の眼に、第一に映ずることは、日本の洋畫が、結局彼地のものゝ模倣だといふことである。例へば風景畫などでも、日本の油畫は、日本人の純粹な眼で見た日本の風景といふよりは外國人の網膜を通じて見たらしい日本の風景といふ感じのするものが多かつた。日本獨自の自然的雰圍氣が畫面に十分現はれないのもさういふところに源因するのではなかつたかと思はれる。丁度日本の南畫が明清の畫風を模倣したのと似た現象だと云つてもよからう。

しかし、最近の洋畫家には、純粹の日本人の眼で、物象を見ようとする人が多くなつたらしいのは爭はれない。森田恒友氏や坂本繁治郎氏や津田青楓氏や岸田劉生氏などはその尤なるものであらう。これらの人々の畫風が自ら一代の氣運を釀成したと見え、今度の春陽會などを見ても、特にこの傾向が著しい。これは無論喜ぶべきことである。

しかし、日本畫家が洋畫風を模倣するのは苦々しい。尤も當人は洋畫の長所を採るつもりだらうが、事實は全くの模倣になつてゐる。國展にはこの類の作品が多かつた。評判の甲斐莊楠音氏の「裸婦」の如きは、日本の筆と繪具で、これほどに書ければ、洋畫とちがはないではないかとでも云ひたげな作品だが、私から見ると醜怪見るに堪へない。如何なる場合にも、藝術上では模倣は禁物である。

世間には、日本畫とか洋畫とかの區別は不必要だといふ人もあるらしい。しかしこれは大へんな間ちがひである。藝術を表現する手段と材料とによつて、洋畫と日本畫とは明確に區別し得る。少くもそこには夫々の特徴があり得る。線の妙味や、墨繪の味や淡彩の面白味は、たとへば油畫などの到底現はし得ないところではあるが、複合した強烈な色彩の味ひや、細かくして而も強い寫實的な筆致などには、油畫は又その表現手段と材料の關係上、それ自らの特色を持つてゐる。だから、それらの特色をどこ迄も發揮することによつて、その藝術はいよ〳〵光彩を增すとも云へる。たゞその何れの場合にも畫家は、明かに日本人としての畫家でなければならない。洋畫が日本趣味に傾いたのを、喜ぶとい

ふのも彼等が日本人としての立場から物象を見ようとして來たからである
それはそれとして、今度見た中で、私に取つて特に印象の鮮かなのは、春陽會では森田恒友氏の「半月」及「煙雲」の二點、國展では土田麥僊氏の「舞妓」であつた。森田氏のは、例の墨繪に淡彩をいさゝか加味したものだが、その自然の觀方や表現様式には全く他の追隨を許さないものがある。殊に「煙雲」の如きは、横山大觀氏の去年の院展に出した雲四題(?)の中の煙雲の描寫の精巧に加へるに、森田氏自らの暖かい情趣と田園的詩味とをもつてしたもの。氏獨身の風格が、いよ〳〵完成されつゝあることを證して餘りあるものであつた。

『心中宵庚申』を觀て

久しぶりで雁次郎が上京して、近松巣林子の『心中宵庚申』を歌舞伎座で上場してゐる。これについて私は、三月半ばの國民新聞に感想を書いたが、こゝにはそれをそのまゝ轉載することゝする。

『心中宵庚申』は、同じ作者の同じ心中物でも『天網島』や『曾根崎心中』や『重井筒』や『生玉心中』やなどゝは大ぶ味ひの違つた複雜な作である。例へば『天網島』の治兵衛は廿八、小春は十九『曾根崎心中』の徳兵衛は廿五、お初は十九といふ何れも血氣にはやる、どちらかと云へば無分別な年輩であるに比べて『宵庚申』の八百屋半兵衛は、卅八といふ分別盛りであり、相手の女のお千代も廿七といふ、その頃の女としては、相當に分別のあるべき年である。この點が第一に他の心中物とは異つてゐる。

第二に、近松の他の心中物は、夫婦になれないための心中であるが、この『宵庚申』では、すでに夫婦になつて居り立派に一家を構へてゐるものゝ心中である點が異つてゐる。第三に、心中の一つの動機が、他の作にあつては、金錢の不如意であるが、この作では「此世の心がゝりは微塵ほどもなけれども、金に詰まつて死ぬる心中と、一口に云はれうかと、これが一つの氣がゝり」と云つてゐる通り、金錢問題からも全く離れてゐる點が異つてゐる。

かやうな譯であるから、この『心中宵庚申』の味はひは他の心中物とは餘程趣を異にしてゐる。その上に、半兵衛は

養家を出ても、立派に食つてゆけるだけの腕があるから、たとひ妻が姑に嫌はれ、所謂舌去りに逢つたとしても、別に一家を構へて生活することは、さして困難なことではない。だから今日の吾々から見ると、必ずしも半兵衛夫婦が、心中などをしなくてもよさゝうに思はれる。しかし、彼等を驅つて心中に赴かしめたことには、他に大きな原因がある。

その一つは武士氣質の義理の觀念である。半兵衛は八百屋でこそあれ、もとは武家の出で、彼れ自らも「町こそ町人心は侍」と云ひ「武士の釜の水で育ちし此半兵衛」と云つて、武家出であることを常々心に誇り、武士のやうな行ひをすることを常住坐臥念頭に置いてゐる。作者も亦「智者は惑はず勇者は恐れぬ生れつき、流石武士の息ぞかし」と云つて半兵衛を描寫してゐるが、その當時の武士の最も重んじたものは義理である。西鶴の『武家義理物語』にも當時の武士が義理のために、われとわが身を滅すかず〳〵の悲劇が描いてあるが、武士氣質を自ら誇る半兵衛も亦、やはり義理のために身を滅すやうになつたのである。彼れ自らも「女房の親と我親と、世間の義理と男妻と、三すぢ四すぢの涙云々」と云つてゐる通り、女房の親への義理、我が養ひ親への義理、世間への義理——この義理こそ彼れをして心中に驅り立てた大きな原因である。

今一つの原因——上の原因よりも更に大きな原因と思はれるのは彼れのペシミズムである。心中の道行の中の彼れの述懐にも、

養子になつて十六年このかた、十方旦那の機嫌をとり、殊ある日には町中を振賣りし、もさに僅の八百屋店、今では人に少々の金貸すやうに儲け溜めても、辛い目ばかりに日を半日、心を伸すこともなく、死なうとせしも以上五度。恨みある中にもそなたに緣組み、初めて憂さを晴らせしに、それさへ添はれぬやうになり、死ぬる身にまで成り下る云々」

と云つてゐる通り、彼れは日頃、辛い日ばかり送つて、暗い、果敢ない氣持ちでゐたのである。この暗い果敢ない氣持こそ、分別盛りの四十男をして、夫婦心中といふ心中として變態的な心中に赴かしめた一つの大きな原因ではなかつたかと思はれる。

そして又この點から云へば近松の作としては、この作は他に類のないものとも云へる。何となれば近松のものは生活苦

樂の欲情の旺盛な所謂元祿兒を描くのが特色で、從つていかに心中物といふ悲劇であつても、作全體の雰圍氣かどちらかと云へば明るく華やかであるのに、この『宵庚申』ばかりは暗く淋しく、果敢なくじめ／＼してゐるからである。しかしそれだけ又この作の味ひは複雜で陰影に富んでゐることは云ふまでもない。

さて、今度の鴈治郎一座の演出を見て第一に感心したことは、殆ど原作を崩さず、臺辭なども、殆ど原作通りにやつてゐたその忠實さである。尤も一ケ所原作と違つてゐたところがあつた。第一幕上田村の場で、妻の家に半兵衛が、妻が自分の留守中姑去りになつたのを知らないで、訪ねてゆき舅から烈しく恨まれるので、「武士の性根を見せる」と云つて腹を切らうとするとき、腹を切つては姑去りがいよ／＼世間に知れて養ひ親への不幸になると、舅に云はれるので、すぐ又思ひかへして切腹を止めるといふのが原作の段取だが、今度のは舅の疑ひが解けたので切腹を止めるといふ段取になつてゐた。これは演者の勘違ひか、脚色家の罪か、何れにしてもこの點はちがつてゐた。それから第二幕目の幕切で夫婦が改めて世を果敢なんだり、お腹の子のことを嘆いたりするのは確かに蛇足である。これは無論原作の「道行思ひの短夜」を、こゝで一しよにしようとした脚色家の罪である。この二幕目は原作のやうに、二人が手に手を取つてすぐに急ぎ去る樣にした方が、どの位餘情があつてよいかわからない。

鴈治郎の半兵衛は「身こそ町人心は侍」といふ癖があるのが先づよい。一幕目で何も知らずに舅の家に來て當惑するさまと、二幕目で女房を手強く叩き出しながら「眞額に睨む目に涙」の床につれての愁嘆の心持ちなども上乘の出來である。次ぎに魁車のおかるが逸品である。妹が去られて來たと聞いての憤りや憐れみなど、こまかな心の影を表出して遺憾がない。それに、この人が一番臺辭を間違へず云つてゐたのが感心である。幸四郎の平右衛門は、原作の一種の調子のある臺辭を、現代式に云ふのが第一に耳ざはりである上に、病みほうけた哀れさが薄いのが難だ。これは折角一座してゐるのだから松助で見せて貰ひたかつた。それはとにかく、今度の歌舞伎座の「宵庚申」は、前にも一言したやうに原作に忠實なのが何よりの取柄である。無論近松は人形芝居として書いたのだから歌舞伎劇としては、多少改めるのは止むを得ないとしても『天の網島』が『時雨の炬燵』となつたり、『冥途の飛脚』が『戀飛脚大和往來』となつたりして、今日の劇壇で演ぜられる近松物が、原作の味はひを大ぶ稀薄にしてゐる時に今度の歌舞伎座のやうに、忠實に演じたことは、近松の愛好家に取つてどの位の喜びであるかわからない。（完）

時事消息

○內藤鳴雪翁逝く　俳壇の老宿內藤鳴雪翁は二月十日逝去した。享年八十歲、その告別式は同二十五日青山齋場に於て營まれた尙三月十四日「枯野社」主催にて小石川白山上福相寺に於いて鳴雪翁追悼句會を開いた。

○常夏莊大和繪研究陳列會　松岡映丘氏を中心とせる同會第廿八回研究會は、會員が模寫せる古繪卷類を資料とし、三月十三十四の兩日上野三宜亭に於いて陳列し、模寫技術の一端を示した。

○狩野家歷代展覽會　三月十三、十四の兩日大隈會館にて開催された。

○故有島武郞記念第一回講演會　每年三月四日の同氏の誕生日を記念として開催されることに決した同會は、三月四日本鄕帝大佛敎會館にて開かれ、秋田雨雀、長谷川如是閑諸氏の講演があつた。

○淡島寒月翁逝く　明治初期文壇に多大の貢獻をなした淡島寒月翁は二月廿三日、七十歲を以て永眠された。本號幸田露伴博士の文章を見られよ。

○「テアトル、アナルコ」の設立　村松正俊、加藤一夫、麻生義、新居格その他諸氏によつてこの程組織された。

○フランス繪畫展覽會　中央美術社主催にて、二月十六日より三月六日まで、上野作館にて開催、サロン・ドオトンヌの作家の作品を陳列した。

○春陽會美術展覽會　二月廿六日より三月廿日迄上野竹之臺に開催。

○國畫創作展覽會　三月?日より同??日まで上野美術協會に開催。

新刊一覧

○戀の骨折損　坪內逍遙譯早稻田大學出版部二月發行四六版二五〇頁定價二圓五十錢沙翁傑作集の續刊である。Loves Labours Lost 邦譯である。原作は沙翁初期の代表的喜劇で、且つその時代を最もよく現はした諷刺的劇曲である。之譯は五才女と五才子の戀愛戰爭を取扱つたもので、沙翁の豊富な詩想が滑稽百出、諧謔縱橫の中に遺憾なく窺はれる從つて地口や語呂や當込みや駄洒落が至るところにあつて、沙翁物の中で最も邦譯に困難なものとされてゐる。逍遙博士の譯筆は最もよく原作のこの妙味を傳へたものといふべく、博士以外には恐らく斷じてこの作をかほど迄に輕妙な筆致で譯し得るものがないであらう。永久に飜譯文學の典として尊重さるべきものである。

○大トルストイ傳第一巻　原久一郞譯新潮社二月發行菊判六〇〇頁定價四圓五十錢、苟もトルストイを口にするもの丶先づ第一の權威書と推されてゐるビリユコフの「大トルストイ傳」の飜譯である。この邦譯あつて、我が國に於ける杜翁研究も愈々專門的になつたといふことが出來る。第一篇は杜翁の生ひ立ち第二篇は「若い時代」第三篇は「軍隊勤務時代」第四篇は「文學的方面及び社會的方面の活動時代」に分れてゐる。第二巻は近く公けにされるといふ。譯者は經文を寫すやうな氣持ちで、この名著を譯したといふだけあつて、中々立派な譯である。譯者の苦心も報ゐられたと云つてよい。とにかくこの大飜譯に對しては記者は改めて譯者並びに出版書肆に敬意を表する。

○日本戲曲集　文藝家協會編新潮社二月發行菊版四三四頁定價二圓日本戲曲集第二輯である。昨年の劇場の收穫の總〻高さも見るべきもの秋田雨雀氏の本誌所載「十月の錯覺」を卷頭に、中村吉藏、菊池寛、岡本綺堂氏その他十二氏の創作が收められてゐる。卷末の十四年諜の全員の著作目錄を附けたのは頗る親切なやり方である。

○修道院生活　三木羅風著新潮社一月發行四六版二一二頁定價一圓五十錢、著者の序に曰く「文書は修道院の實際行ひつゝある生活と、其の意然と、そして歷史とを知らしめるために書かれたものである」と、又曰く「我國に於ける北海道の修道院、即ち當別の男の修道院、湯の川の女の修道院なる天使國に對する正しき理解を人々に持つて貰ひたいために仔細にその實際と沿革とを叙し、且つ入院するに當つての必要條件をも書いた」と。著者の「修道院雜筆」と併ゃ結んで興味殊に深いであらう。

○人生學　內ヶ崎作三郞著敎育研究會二月發行四六版五二〇頁定價二圓八十錢　著者が

…て名古屋市の冬期講習會で講演した速記を基として、著者自ら訂正を加へたもので、第一講人生學の成立、第二講生命の神秘と物質の驚異」以下十六講に至り、倫理、道德、宗教その他頗る廣い範圍に亘つてゐる。最近、すべてが餘りに專門的になつてゐる時だから、かういふ綜合的な著述も大に必要なので、ひろく讀まるべき好著である。

○匿名氏の話　秋庭俊彦氏譯新潮社二月發行中版三二〇頁定價一圓二十錢、チエホフ全集第九卷である。「匿名氏の話」「許嫁」「二人のヴオローヂヤ」「紅い靴下」「途上」「一等旅客」の六篇を含む。譯筆例によつて頗る巧妙で、毫も飜譯臭をとゞめない。

○生ける風景　河井醉茗著アルス一月發行四六版二八四頁定價二圓、著者の散文集で「砂丘の家より」「砂上隨筆」「一軒離れの家」以下五十餘篇を收めてゐる　自然を主として、これに人事をなひ交へた、何れも著者の敏感な清新な印象化であつて、むしろ詩として誦すべきものが多い。殊に「鎭まる大地」と題して例の大地震を描いた數章は今日、尚その當時を戰慄を以て追懷させる文である。

○自然、人生、社會　武者小路實篤著新潮社二月發行中版三〇四頁定價一圓、著者最近の感想集で「生長力と害蟲」「へボの學者」「人間の想像力」以下二百餘篇が收まつてゐる、武者小路氏の思想や藝術に興味をもつ人には近來の好著であらう。

○イブセン　布施延雄譯新潮社一月發行四六判二七四頁定價壹圓四拾錢同社の文豪評傳叢書の第二編である。原作はイプセン評傳中最上の位地を占めてゐるブランデスのものであり、またブランデスの著作中最も優れたるものの一でもある。イブセンを知り得ると同時に、批評家ブランデスを知ることも出來、同時に文藝批評の一の型を學ぶことも出來る。

○ルソオ　神部孝譯同上の第三編である。原作者アルテュール、シユーケは、優れたる文學者であり、有名な歷史家である。この近代文學の一偉人の生涯と事業を、われ〳〵はいま一度、この正しい理解者の評傳について學び直す必要があると思ふのである。譯者は佛文學專攻の新進、ルソーのよき理解者である。

○世界短篇小說大系　近代社一月發行菊判七五八頁非賣品柳田泉外七氏の譯にかゝる英國歷代短篇集の部である　リッチ、デフオー、アディソン即ち十七世紀より近くはオスカア・ワイルド、ギッシング、キプリングに及び、家三十餘人作品四十篇をおさめてゐる。い作づれも一粒選りの名篇である。

○財產の進化　高畠素之譯述新潮社十二月發行新四六判二一八頁定價壹圓貳拾錢同社の新學說大系の第十二編である。本書はマルクス文獻の最も重要なるものとして知られたラファルグの名著「所有の進化」を殆んど全譯したものである。著者の純眞なる共產的信仰は、その淡麗な文藻と相俟つて、さながら本書をして文學書を讀む氣を起させる底の名論文となさしめてゐる。

○藝術のための希望と不安　大槻憲二譯聚芳閣十二月發行四六判二〇三頁定價壹圓貳拾錢同閣の海外藝術評論叢書の第三編である。譯者はウイリアム・モリスの研究者として知られてゐる人。本書はモリスの主著の一である。「裝飾藝術と近代生活」「民衆の藝術」「生活の美文明に於ける建築の前途」の四篇をおさめてゐる。最近思想界に取つても注目すべき收獲である。

○燒豚の話　幡谷正雄譯健文社十二月發行四六半裁判定價五拾錢同社の英文學名著選の第四編である。チヤールス、ラムの適切な譯文と、語學的註釋とよりなつてゐる。語學研究生にとつては好侶伴であらう。

○海へ乘り行く者　幡屋正雄譯同上の第五編である。ングシの高名なる一幕物である。

○評論講座　中村星湖著金星堂二月發行菊半截判二三一頁定價壹圓金星堂學藝叢書の一篇である。平明に書かれた文藝批評概論である。「學問的にむづかしく書くといふよりは大體に於いて自分の實際經驗を土臺にして」書かれたところに、本書の面目はあらう。文藝批評の種目を論じて批評家の資格に及び、轉じて批評の歷史を論じ、さらに歐羅巴及び日本の文藝批評家の名作を例證しつゝ批評の根本義を明かにしてゐる。

五月號豫告

ヅーリー氏の源氏物語英譯について

——巻頭論文——

五十嵐力

日本の偉大なる古典に對し、文藝に至り深き外人の始めて試みたる親切なる飜譯について卒直な批評を試み、かねて文學書飜譯の大義に及んだものである。

坪内逍遙論

諸家

浩澣なる『逍遙選集』十二巻の發刊を機として諸家の逍遙論を集む

五月號には以上の外

『小説神髓』の研究……木村毅

勞働詩人としてのモリス……大槻憲二

頽廢派文學の特質（文學講説第三）……本間久雄

等の長論文を載せていよ／＼内容の充實を計り、創作には、作者會心の力作たる左の長篇小説を掲げる。

蛇（長篇小説）……井東憲

早稻田文學（毎月一回一日發行）

定價及郵税

毎號定價を六十五錢とす
臨時特別號を發行すること〻し、該定價はその都度これを定む。
毎號の郵税は内地一錢五厘。外國行八錢。特別號の郵税はその都度これを定む。

▲本誌の御註文はすべて東京堂（振替東京二七〇番）へ御申込の事
▲御註文の際は必ず（早稻田文學何月號より）と御明記の事
▲▲郵券代用の御送金は一割増の事
轉居の際は誌名と新舊兩住所御通知の事

大正十五年三月二十八日印刷納本
大正十五年四月一日發行

No. 243 禁轉載

編輯兼發行者 本間久雄
印刷者 内田廣藏
印刷所 内田印刷所

編輯所 東京市小石川區雜司ケ谷町一四番 早稻田文學社 電話牛込一九〇八

發行所 東京市神田區表神保町三番地 東京堂 電話大手六一（七） 振替東京二七〇番

本號特價壹圓

モリス研究の時代來る!!

吾等如何に生くべき乎

ウイリアム・モリス著
本間久雄譯

原書は、時人にして哲學者、工藝美術家にして社會改造家たるモリスがその蘊蓄を傾け、その熱情を吐露せる晩年の名著にして、一面**近代社會の病弊を痛烈に指摘**すると共に、他面、將に**かくあるべき社會を髣髴**たらしめ、以て**吾等の生くべき方向を明示**せるもの。ブルヂョア對プロレタリヤの問題を始め、社會生活に於ける美と醜との關係、趣味と贅澤單純生活と美的生活等吾々現代の文化人として關心すべき重大問題の一切は收めて本書にある。モリス研究に傾倒せる譯者苦心の翻譯を致て大方にすゝめる。

◉再版出來!!

定價一圓八十錢
送料十錢

振替東京二七〇番
東京堂書店
株式會社
東京神田表神保町

早稻田文學

開化期

明治文學



昭和二年

四月號

山口剛　神代種亮
本間久雄　木村毅　編纂校註

明治文學名著全集

（東京堂出版）
東京神田　振替東京二七〇番

凡そ古典の刊行は、單なる複刻であつてはその意味を爲さない。本全集は此の點十二分の誠意を以て編纂したもので校訂・解題・註釋等は各々編纂者が責任を以て之に當つてゐる。殊に本全集の特色としては口繪挿繪等を多趣多樣に收めたこと、裝幀を一々原本によつて時代の面白味を寫したことで、明日になつて價値の減ずるやうな書物では、斷じてない。明治文學の研究家は勿論、一般文藝愛好家の座右に敢て本全集を推薦する所以である。

(1) 坪内逍遙著
當世書生氣質
四六判四〇〇頁上製
原色版其他數十葉挿入
定價二圓五十錢
送料十二錢

(2) 幸田露伴著
風流佛
四六判木版刷上製
挿畫凸版數葉
定價一圓三十錢
送料十錢

(3) 坪内逍遥著　小說神髓

四六判石版表紙上製　口絵一葉挿入　定價一圓三十錢　送料十錢

(4) 河竹默阿彌著　島衞月白浪

四六判石版表紙上製　口絵三葉挿入　定價一圓三十錢　送料十錢

(5) 假名垣魯文著　高橋阿傳夜刄譚

四六判木版手摺美製　口絵挿絵數十圖　定價一圓三十錢　送料十錢

(6) 森田思軒著　死刑前の六時間

四六判石版刷上製　口絵一葉挿入　定價一圓三十錢　送料十錢

(7) 尾崎紅葉著　色懺悔

四六判石版刷美製　挿絵凸版數葉　定價一圓三十錢　送料十錢

(8) 須藤南翠著　新粧之佳人

四六判石版刷美製　石版色刷口絵數葉　定價一圓三十錢　送料十錢

(9) 菊亭香水著　慘風悲雨 世路日記

四六判石版刷上製　挿畫全部複刻收載　定價一圓三十錢　送料十錢

(近刊) (10) 鳥追阿松海上新話　(11) 澤村田之助曙草紙

早稻田文學第二百五十五號目次

明治文學號

『混沌開明期の研究』



早稻田文學

四月號

第二百五十五號

再び明治の小新聞に就て

野崎左文

（一）

明治初期に於ける小新聞の事に就ては大正十四年六月の本誌明治文學號に拙稿を投じた事があつたが、今思ふと二三の覺え違いもあり又書洩らした事も尠くないので、今度本誌が再び明治文學號を發行せられると聞き、此機會に今少し精しく、小新聞の組織その編輯及營業ぶり等に就て筆を取る事としたが、お斷りして置くのは、僕は明治十一年の末始めて假名讀新聞編輯の一員に連なり、それから二十八年に萬朝報を最後として新聞社を去つたのであるけれども、始終編輯の事にのみ與つて經理方面には全然無關係であつた。固より經濟といふ事にはまるで知識も經驗もなく今日まで一挺の算盤を手にした事もないのであるから、營業上の商略等に就ては只僕の觀察した素人了簡を述べるのに過ぎぬのである。故に見聞考察の誤りは一に讀者諸君の明斷を仰ぐのである。

大新聞は政治向である爲めに、固より營利を無視したのではないが、其經營上多少國家的その公共的とのいふ意義が含まれて居るから、損失が多い場合にも之を持こたへて繼續せしめんとする義務があつたであらうが、小新聞に至るとその書く事が總て社會的興味本意であり、その營業方針も利益一方で多く賣り多く儲けるのが唯一の目的であるから、若し損失を招く事があれば直ちに廢刊して見切りを附けるといふ傾きがあつた、それは近年（大小新聞の區別が無くなつた頃）まで都下で發行された新聞の跡から見て大新聞よりも小新聞の創刊か多かつたと同時に、廢刊したのも亦小新

聞が多かつたといふ事實に照して明かであらうと思ふのである、そこで先づ明治十五年までに發行された小新聞を數へて見ると

讀賣新聞	社長子安峻	明治七年十一月創刊	
東京繪入新聞	主筆高畠藍泉	同八年四月同	
假名讀新聞	主筆假名垣魯文	同年十一月同	
さきがけ新聞	主筆芳川俊雄	同十年五月同	
有喜世新聞	社長寺家村逸雅	同十二年三月同	
あづま新聞	社長大井憲太郎	同年十月同	
いろは新聞	社長假名垣魯文	同年十二月同	
繪入自由新聞	主筆植木枝盛	同十五年九月同	

猶明治十五年には東京日の出新聞といふのが發行されて居り、其他創刊された小新聞は此外にもあつたやうにも思はれるが、手元に新聞歴史の書籍を一冊も持合はせて居ないので、玆には古い手帳から書拔いた前記の八新聞に止めて置く。

さて是から述べんとするのは明治十一年より同十五年迄の五ヶ年間に於ける小新聞の實況であるが、各新聞社の組織はそれ〴〵多少の相違はあるにせよ、持主が資本を投じ俸給制度の主筆以下の社員を働かせて利益を擧げやうとする一個の商賣たる事は皆同一である、未だ會社法の制定せられぬ前であるから株式の如く利益配當の世話もなく、儲けがあれば持主一人の儲けとなるのである、尤もその投資者が二人以上數人組合つて合資組織とするのもあるが、是とても今の合資會社の如く無限責任を負ふでもなく、唯組合同士の相談で内一人が代表者となるくらゐのものであつた、但し持

主が社長となつて表面に立ち編輯の事まで主宰するのと、資本家は蔭に隱れて新聞經營上の權限を凡て主筆に一任するのとの二大別があつて、前者の例とすべきは讀賣新聞がそれで、子安社長が全權を握り主筆の鈴木田正雄氏は單に編輯上の事のみを委任されて居たとの事である、又後者に當て嵌めるべきは假名讀新聞で、これは資本主から魯文翁が編輯上の事は勿論社員の任免までも一任されて居たもので、僕などは最初は誰が此社の持主たるかを知らず、やつと半年も過ぎた後麹町の書肆磯部屋太郎兵衛が投資家の一人たることを聞かされたが、他の組合は誰であつたか終に其名を知らずに了つた程である。

（二）

當時の小新聞には一體どれだけの職員が必要であつたらうか、是は固より資本高や發行紙數に依て相違もあらうが、凡そ其定員を限つて見れば

社長	一人	營業部主任	一人
主筆（編輯局長）	一人	會計及庶務掛	二人乃至四人
次席記者	一人	廣告掛	一人乃至二人
平記者	三人乃至五人	受付、給仕、小使	各一人
校正掛	一人	植字工	四人乃至六人
探訪者	五人乃至十人	文選工	五人乃至八人
通信者	一人乃至五人	印刷工	四人乃至六人
畫家	一人	配達人	十人乃至廿人

ざつとこんなもので、今之に說明を加へて見ると、

社長とは云ふ迄もなく一社の主宰者であるが、之には持主自ら社長となるのと、主筆記者が權利を委任されて社長の印綬を佩るのとの二つがあつて、前者は多くの場合無給であるが、後者は有給であるそこで今から考へると一の疑問が起るのは主筆が社長を兼る場合は議論は無いが、持主が社長となり其下に主筆記者が居る社では此二者の權能がどういふ風に分たれて居たかと云ふ點である。新聞の主腦は無論記者にあつて紙面の記事は則ち其生命であるが、社長が其支配者であつて編輯上の事に干渉主筆を掣肘するやうな事があらば兩者の間に爭ひは絕えないだらうと思はれるが、實際問題としては繪入新聞の高畠藍泉氏が意見の衝突から明治十一年に袂を拂つて退社した外は實顯したのを耳にした事がない、シテ見ると當時は社長とか局長とかいふ職名は設けながら、別に職責權限等の規定もなく全社員が家族的に働いて居たもので、唯自然の成行として社長の勢力が强ければ主筆は之に服從し、主筆の勢力が强ければ社長は之を默認して居たものと見るのが適當ではあるまいか。

主筆には其名を出す丈けでも讀者を惹着ける程の名望手腕を有する人が必要で、俳優で言へば一枚看板の座頭(ざがしら)に當るのである、故に從來草雙紙中本などの著述で名を賣つた戲作者が、主筆に重用せらるゝ傾向を生じ、又其主筆が得意とする文體が全紙面に漲るといふのが自然の勢ひで、繪入の主筆が最初は高畠藍泉氏(三世種彥)後に染崎延房翁(二世春水)であつた爲めに、其記事文は草雙紙や人情本の俤を髣髴せしめ、假名讀の主筆が假名垣魯文翁であつた爲めに其雜報はどこかに洒落本や滑稽本の趣がほの見えた、獨り讀賣の鈴木田正雄氏は戲作者の出で無かつた爲めに、其文章にも飾り氣が無く、實直一方に世上の出來事を有の儘報ずるといふ事を努めて居たので、今から思ふと讀賣が一番新聞らしい新聞であつた。それから此主筆は全紙面の記事に對して責任を負ふべき位置に在るのだから、他の記者の書いた雜報等を一々校閱訂正するかといふに、讀賣は知らず他の繪入、假名讀の主筆は甚だ無頓着なもので、自分の門人が書い

たものすら目を通さずにサッサと組方へ廻させ、翌日の新聞を見てアレは誰が書いたのだ、アンナ事を書いてはいかぬ抔と小言(こごと)をいふ事も折々あつた。新聞紙條例と讒謗律とが發布されて間も無い當時に於ては、編輯長としての署名者は跡から跡からと相踵いで禁獄罰金に處せられるといふ風であるので、資本主に於ては原稿の檢閲を嚴にして成るべく此處刑を免れたいといふ必要上から、後には次席記者又は校正掛をして原稿を檢閲せしむる事となつたが、是とても植字方へ渡す前に原稿を檢査するのでは無く、一旦組上つた校正摺を見て穏かでない字句をチョイ〳〵改めるぐらゐのものであつた。

次席記者とは其字の示す如く主筆の次席に位する者で、大臣に於ける次官、市長に於ける助役の如き女房役である、主筆不在の時は其代理をも勤め、紙上へ二編の小說を揭げる時はその一編の著作をも受持ち、且種子の撰擇紙面の整理等は重(おも)に此次席記者の役目であつた、主筆が座頭(ざがしら)なれば是れは書出し役に當るべきもので一座中の人氣役者で無ければならぬ。此次席記者としては讀賣には最初永井碌氏あり、次に加藤瓢乎氏あり繪入には最初前田夏繁氏あり、次に古川魁蕾氏あり、假名讀には最初久保田彥作氏あり次に野田塘雨氏があつた。又さきがけの岡本起泉、有喜世の須藤南翠、いろはの雜賀柳香、若菜貞爾、繪入自由の渡邊文京、宮崎夢柳諸氏の如きも前後の相違こそあれ一二度づゝは皆此女房役を勤めた人々であつた、獨り有喜世の伊東橋塘氏のみは寺家村社長の信賴を得て一時は主筆格の勢力を振つて居た。

平記者とは次席以下の記者を指すのであつて、中には次席記者を凌駕する程の手腕家もあり又何等の素養もない凡人もあつて、雜然として役者の大部屋といふ觀があつた。代言人の書生をして居たとか郡役所の書記であるとかいふ手に筆を持つのが職掌であつたといふ丈けの口實を以て、此新職業たる小新聞記者を志願する人々も多かつたが、サテ入社して見ると其書く記事が社會萬般の事に渉るので、世事に疎い黄吻兒ではやり切れず、記者も案外六ツかしいものだと嘆息し筆を拋つてそこ〳〵に退社するのも亦尠くは無かつた、要するに當時は未だ記者の分業といふ事が行はれず、得

意不得意に拘はらず何でも片端から書かねばならぬ時代であつたから、隨分噴飯に値する雜報が出る事もあつた、是は單に一例に過ぎぬのだが、某記者が或る宗匠の茶席に招かれ其景況を報ずる翌日の雜報に、布巾捌き鮮かにと書いて濟まして居た事などもあつた。それから此記者の人員であるが、主筆以下校正掛までを合して少きは五人多きも十人を超過する事は無かつた。五人と云へば甚だ少數に過ぎるやうに聞えるが、其頃の小新聞の行數は公聞・廣告、相場の欄を除いて記者の筆を取るべき部分はざつと六百行としても、其内午前中に原稿の出來て居る小說とか雜報の續きとかいふものがあり、寄書とか地方新聞の拔萃なども手が掛らず、小說に繪を加へる場合は其挿畫一個で三四十行は塞がるゆゑ、是等を差引く時は記者の筆を勞すべき行數は四百行ぐらゐに止まり之を五人に割宛れば一人が平均八十行を書けばよいのである、尤も是は五人が五人ながら顏を揃へた時の事であるが、中には無斷缺勤者もあり、出社したかと思へば開業式に招かれたとか芝居の初日であるとか云つて、サッサと出て行く者もあつて、サア斯うなると殘つた一人か二人で大狼狽をする事もあるが、併し今の一分時を爭ふ編輯ぶりに較べて見れば餘程優長な處があつた。

校正掛は其社によつて專任者を置く處と記者に兼させる處とがあつたが、是にも普通と高等との階級があつて、普通とは原稿に照らして植字の誤りを正すだけの事であるが、高等校正掛は一步進んで原稿の誤字は固より其字句までも校訂する役目で、世事に疎い記者が咄嗟の間に書く原稿には殊に此誤謬が多かつたから、記者よりは學問知識ともに一段上にある校訂者を置く事は最も必要で、前田夏繁氏が始めて東京繪入に入社された時は此高等校正掛であつたと云ふのは當時に於ては誠に適任者であつたと云はねばならぬ、猶前にも云つた通り讀賣の如きは全新聞記事組上り後の檢閱を校正掛に一任し條例に觸れさうな事は其記者に注意して改竄せしめて居たといふから、校正掛の任務も亦決して輕いものではなかつた。

探訪者は昔も今も變りのない種取りといふ役で、各自受持の諸官省、警察署、區役所、新橋停車場等を廻る者があり、

商業の方では取引所とか問屋向を訪問する者があり、又別に花街劇場等を専門として居たのもあつたが、其人物は概して低級な者で、警察探偵の下働きをして居たとか、役場の代書人をして居たとかいふの類が多く、風采から見ても縞の木綿羽織に股引の尻はしよりで、腰に木製の鑑札をぶら下げ、テク／＼と歩行いて廻るといふ風であるから、自から世間からも輕く視られて、ア、新聞屋の種取りかと到る處冷遇を蒙つた傾きがあつた、それから當時一の弊害とも云ふべきは各社の探訪者同士で種子の交換が行はれた事で、例へばAが甲所で聞得た種子をBに傳へる代りにBが乙所で聞取つた種子を寫取るの類で、是は本社へ報ずる事件の多いのを競ふといふ點から起つたのであるが其新聞社に取つては今の通信社から來る通信同樣に其種子は各社に普及し隨て特別種としての價値を失ふものであるから、各社でも種子交換の防禦策には頗る苦心した事もあつた、それから今一つは各社でも他の新聞に出ぬ特別の面白い記事を載せる事に腐心して居たから、或る社では一の奬勵法を設けて珍らしい種子には其等級に應じて賞金を與へることにしたが、其結果として探訪者の中には成るべく興味を多からしめんとして針小の事を棒大に報ずる者がある、それに記者が又誇張した飾りを附けて新聞へ出すのだから、其記事は事實とは雲泥の相違を生ずる事となる、まだ少しでも跡方のある事を報ずるのは稍や罪の輕い方で、甚だしいのになると全然痕跡のない事を捏造して記者までを天窓から欺してかゝるのがある、例へば其處で姙婦が頭は人間四體は豚に似た兒を産んだ抔と其畸形兒の繪まで作つて報ずる事もある、記者もウッカリ釣込まれて之を雜報へ掲げると、是が大評判となり地方新聞までが先を爭うて拔萃するのであるが、後に調べて見ると全くの虚報と解り大に面目を失ふやうな事もあつた。一體新聞の誤報が事實のやうに世間へ傳へられた例は、西南戰爭の際澤元彥右衛門といふ人が賊軍の壓迫に堪へず終に鐵砲で自殺したといふ話は、新富座の芝居にまで仕組まれて評判が高かつたが、其實澤元は病死したので自殺したのでは無かつたとの事である。又ズッと後の日清戰役に木口小平といふ喇叭卒が敵彈に斃れるまで猶喇叭を吹奏して居たといふ美談も、學校の教科書にまで載られてあるが、是も某社

の從軍記者が斃れて居る喇叭卒を見て、此事を本社に通信するに當つて名前無しでは困るところから假に木口として報じたのが元で、實際見たので無いから斃れるまで手にせる喇叭を離さなかつたか否やは固より不明であるといふのである、一旦美談として喧傳せられたのであるから、抹殺博士が忠臣の名を歴史から抹殺するやうに、今更詮議立てをするにも及ばぬが、誤報はどこまでも誤報である。要するに是等の誤報又は虚報は探訪者及び之を記載する記者の德義信用を俟たねばならぬのであるが、當時の探訪者は前に述べた通りの人物で、其報酬も月額五圓から七八圓の間であつたから、學問あり人格ある人を得られる筈がなく、隨て此種の探訪者を有利に操縦するのは新聞社に在つては六ッかしい仕事の一ッであつた。

通信者には社員を要所に派遣するのと其地に居住する人に通信を委囑するのとがあつて、前者は有給、後者は其通信事件の數に依て報酬を呈するといふのが例であつた。併し本社專屬の通信員は横濱に一人を置くぐらゐが關の山で、他の大阪、神戸其他の土地には其地發行の新聞社に勤めて居る記者に委托して折々の電報で通信して貰ふといふ事が行はれた、一體に未だ通信機關の完備せぬ時代ゆゑ、電報通信の如きは一つは料金の嵩むが爲めに餘り頻繁には利用せられず、殊に都下の小新聞は都下の出來るのみ重きをおきて、地方の記事は餘程の大事件で無ければ載せぬ風であつたから、隨て通信といふ事は餘り重要視せられなかつた、だが西南戰爭の起つた當時は讀者は誰も早く其實況を聞きたがつた爲めに小新聞紙上にも電報の數が殖えるやうになつたのであるが、併しそれも其筋へ達する官報を轉載するのが多くして、實際其社で拂つた電報通信料は讀賣が一ヶ月三百圓を費したのが最高であつたといふから其幼稚なる事推して知る可しである。

畫家は挿畫の執筆者で、讀賣と假名讀の最初の内とは畫を加へ無かつた爲めに專屬の畫家は居なかつたが、繪入には落合芳幾、有喜世には歌川國松、繪入自由には新井年雪（後芳宗と改む）いろはには稻野年恒の諸氏があり、さきがけ

とあづまとは誰が畫いて居たのかを忘れたが、此外に山崎年信、後藤芳景なども當時の新聞挿畫をかいて居たやうに記憶する、そして其頃の畫料は挿畫一個三四十錢（芳幾氏の畫料は不明、此人は繪入の資本主であつたから或は畫料は取らなかつたものか）其畫家を社員として定雇ひにする場合は一ヶ月の俸給が十圓から十五圓までの間であつた。以上編輯部員の説明を了つたから次は營業部員に移る事とする。

（三）

營業部主任は社主自ら之を兼る所もあり又資本家が信頼する代表者を之に任ずる社もあつたが、其得意先を擴張して利益を擧げると云ふのが此主任の任務であるから、主筆記者との間柄は直接利害の關係上、或は敵となり或は味方となつて相方から鞭撻するといふ風があつた、それも新聞其物が順調に發達して行く場合はさうでも無いが少し非運に向ひ掛けると、主任の方からはモッと賣れるやうに新聞を書けといふ注文が出れば、主筆の方からは面白い種子を集め得らるゝ丈けの資金を提供せよとやり返す事もあり、又夫よりは今少し印刷と配達とを敏速にせよと迫る事もあり、それも此れも皆金のかゝる問題であるから、記者が貧弱で資本の手薄な小新聞社ではこんな內訌の起るのは敢て珍らしく無かつた、つまる處新聞紙の賣れ方は實質と宣傳方法の良否に據るのであるから營業部主任の人選も亦最も大切なものである。

會計及庶務掛は説明する迄もなく、會計掛は金錢の出納を掌どり庶務掛は庶務を處理するのであるが、此庶務の內別に發送掛を設け專ら新聞の配達地方への發送を取扱はせる社もあつた。つまり新聞を多く賣る事則ち其準備として印刷發送を迅速にし又新聞の名を弘める爲めに有らゆる宣傳法を講じるのは營業部主任と庶務掛との役目であつた。

廣告掛とは自家新聞の廣告を取集める人で、今日の如く別に廣告を取扱ふ代理店があつたのでは無く、又廣告主から

進んで廣告を申込むのも甚だ少ない時代であつたから、此廣告掛は日々會社とか商店とかを廻つて廣告の掲載方を依賴する、中に廣告はしたいが文案が出來ぬといふ處があれば大體の主意を聞取つて歸社し、記者に賴んで其文案を作らせ是れで能いといふ處で始めて廣告欄へ掲載するといふ段取になるのもあつて手數のかゝる事夥しく、商店向では今の保險勸誘人でも來たやうに五月蠅がれる事もあつたが、追々廣告の利き目が顯はれ新聞の信用も増して來るに從ひ、廣告募集もだん〳〵容易くなつて來た。そして此廣告掛には歩合の拂戻し制を取つた新聞社もあつたので、廣告料が多く上れば上るほど月給以外の手數料が懷に入り四五年後には金持になつた廣告掛も數名あつた。編輯員には年中素寒貧なるが多く僕なども月給の前借では人後に落ちぬ方であつたが、却て營業部に此金持あるを見て、新聞社員たらんと欲せば須らく廣告掛たるべしなどゝ羨しがつた記者もあつた。

受附、給仕、小使は別に註釋にも及ぶまいが、給仕は編輯局に居て新聞雜誌の整理とか原稿受渡しの使などをするのであるが、中には夜學に通ひ後に一人前の記者になつた人もある。

植字工は活字の組方で、京阪地方ではゲラ組が行はれたが東京では總てステツキ組である。そして各社とも大概一人の職長を置き他の同職工を取締らせて居た。僕が知る所の一二の職長には隨分腕の慥かな人が居て、ルビを振りながらステツキへ組んで行くのが目に止まらぬ程の早さで、其早さは達者な記者が原稿を書くのと殆ど同じ速度で、而かも校正摺を見て餘り誤植もなく、こんな技倆の抽んでた人が必ず一人は各社に居たやうに覺えて居る。僕は當時新聞の原稿を校正した時と現時某々印刷所から來る定時刊行物の拙稿を校正する時とを較べて見ると――無論印刷所のよしあしに依るのであらうが――現時の方が餘程誤字脫字が多く一體の組方もだらしない樣で、植字のみは四十年來少しも進歩の跡が見えぬやうな感じがするが、是れは各種の職工とも一體に其技倆が平均した代りに拔群な名匠が少くなつたと同樣、殊に手先の働きを要する植字方に於ては熟練なる名工が無くなつたといふのでは有るまいか、敢て技術家の一考を煩し

たい。

文選工は原稿通り活字を拾ひ集める役であるが、是は前にも述べた通り活字の種類が殆ど五號に限られて居たゆゑ容易な仕事で、其人員も多くは無かつた、それから解版後その活字を元のケースへ納めるのも亦此文選方の受持であつた。

印刷工は機械一臺に付重立つた者一人、助手一人、別に動力代りに機械の車を廻す者一人、其他フートプレスでも備へて居る社では其掛が一人、印刷時間外には機械の手入れ、ローラーの膠の取換へぐらゐの仕事があつたが、當時はまだ紙型鉛版は用ひられず總て原版の儘印刷したのであるから其刷上りの鮮明といふ事は此印刷工の技倆に頼る所が多かつた。

配達人は本社直營があり、假名讀では一の親方に請負制度で任せて居たが、一人受持の限度が三百軒以内であつたから都下へ六千枚賣れる新聞社ならば二十人の配達人を要した譯である。その出立ちは脊中へ社の徽章を染出し襟に白字で何々新聞と染抜いた半纏に、盲縞の腹掛股引、紺の甲掛けに草鞋履きで頭に饅頭笠を戴き、長い柄の挾箱をかつぎ其柄の先に鈴を結び付け歩行く拍子にチリン／＼と音をさせながら得意先へ新聞を配つて廻るといふ今から思へば優長なものであつた、其途中で請ふ者あれば一枚賣もするのであるが、小新聞の小賣としては別に讀賣の賣子といふ者があつた。是は今の號外賣の如く本社から出すのでは無くして、別に一手の請負人が一日百枚二百枚の新聞を割引で買取り之を子分に分つて辻々で呼賣らせるのであるが、玆に一の弊害が生じたのは例へば其家々庭の秘密などを發いた記事があるとすると、賣子は故ら其家の附近うろ付き「サア御覽うじろ是れは御近邊で評判の高い繼子いぢめ家名ははつきり申されませんが、その繼母が終に大騷動を仕出かしたといふのが今日の何々新聞に事明細」なども其記事を誇張して大聲で呼び歩るゆゑ、其家では居たゝまれず持合せた丈けの新聞を買取ると、又別の賣子が來て同じやうに呼立てる、猶こんな事が段々嵩じて果は最初から百枚二百枚の新聞を其家へ持込み、これを買つて呉ねば門口で讀賣をするから其積り

でと押賣をする者をも生じたので、終に明治十年の末警視廳令で新聞の讀賣を嚴禁せられる事となつた。又明治の初年には各新聞の取次賣捌店の設けはなく其小賣店は府下の各繪雙紙屋であつた。

（四）

小新聞の內容即ち紙面の記事はどんなものであつたかと云へば、大新聞の如く社說で政治を論議するでも無く、軍事とか教育とかの通信を尊重するでも無く、專ら市井萬般の出來事を報道する雜報が其の眼目で、且それが一般的興味本意であつた、どんな記事をどういふ風に書けば讀者の氣に入るだらうかと云ふのが記者苦心の點で、其の記事は讀者の程度に相應せねばならぬ事、繰返して言へば其の書く事は讀者より一步進んだもので之に讀者を惹付けやうとするのでは無くして、讀者と同じ步調を以て徐行し只管讀者の好む所に投じ其の興味をひく事にのみ努めて居たのであつた。後に續き物即ち新聞小說が掲げられるやうになつたのも亦讀者の歡心を得やうとするから起つたもので、是もすべて舊式の草雙紙體であつたのは其の記者が戲作者であるのと其の看客が多く昔の草雙紙程度の讀者であつたからである。尤も此の小說家中には時勢の進步といふ事に注意して、新しい試みとして泰西文明の一端を作物中へ取入れやうとした人もあつたやうだが、根がさうした素養のある人々で無かつた爲めに、其の取材も單に皮相にのみ止まつて、昔の鎧が軍服となり、刀劍がライフル、ピストルとなり、大髻（おほたぶさ）が散髮となり、駕籠が人力車となり、行燈がランプに代つたぐらゐのもので、小說其物の構想は依然として草雙紙式の範圍に止まつて居たのである。序ながら辯じて置たいのは、明治九年十一月の繪入新聞に前田夏繁氏が「金之助の話」といふ續き物を書いたのが、恐らく新聞へ小說を掲げた嚆矢であらうと云ふのが、今では動かす可からざる定說のやうになり、私もうろ覺えの儘此說に裏書した一人であるが、此程某氏からの注意ではそれは明治九年では無くて、十一年九月の繪入新聞に掲げられたのだと、其新聞を見て來ての話であつた、

サア斯うなると玆に二年の相違を生じ、十一年以前ならば他にモッと小說らしいものが記載されて居たやうな氣がしてならぬ（假名讀の鳥追阿松の如きもそれ以前であらう）是は當時の古新聞を一應目を通した上でなければ斷言は出來ぬのであるが、いよ〳〵事實が證據立てられれば、金之助の嚆矢說は根本から覆へされる次第である。

雜報の書き方にしても前に述べた通り興味をそゝるのを本意として居たのであるから、新聞紙は事實を有の儘報道すべきものだとの原則に反し、兎角誇張虛飾に流れる傾きがあつて、且それが往々批評的で記者の意見を附記する事などが行はれた、例へば惡人の事を書けば其終りにナンと憎むべき奴では有りません可抔の數語を附け加へるの類で、是もやはり草雙紙の勸懲主義から胚胎し來つた餘弊であつた。要するに小新聞も明治十五六年までは誰やらの言はれた猿芝居時代で、僕の如きも此お猿の仲間であつたらうが、併し當時の環境を透して一考すれば此の猿芝居が世間に相應した觀せ物で、迚も團十郎の腹藝などは一瞥する人さへ無かつたかも知れぬ。

（五）

營業方面に就て言へば、當時一の小新聞を發行するのは今の稍や大規模の出版をするよりも容易なもので、資本金も五六千圓で取掛る事が出來たのである。都下で日刊新聞を發行する者は千圓の保證金を納めよといふ布令があつた後も、此の保證金は現金でなくとも公債證書で代納が出來、且其の利子は年々下げ渡されるので是は自家の金庫に收めてあるのも同樣である、されば固定する資本と云へば印刷機械活字等が重なるもので、これも社に依ては一の印刷所へ請負はせる處もあり、縱令之を備付けるにした處で八頁掛のロール二臺で中古品でも手に入るれば一千二三百圓のものである（明治十四年に明治日報が印刷局から舶來機械の特別拂下げを請うた時は一臺五百圓ぐらゐであつた）次に本社の家屋であるが最も借家で濟ますれば一ケ月二十圓以内で銀座の二等煉瓦家屋が借り得られる、社員の俸給にしても前に掲げ

た定員表の示す通りで、最高給の主筆にして一ヶ月約五十圓、總人員（配達人まで加へて）六十四五人として給料總高は六百圓以内である。其他の經常費則ち器具費、通信費、交際費及び消耗品費等は知れたもので、一番金のかゝるのが用紙代であるが、是れも亦紙問屋と特約し一ヶ月二回拂ひ制が行はれて居たから新聞代の收入で流通する事が出來るのである、故に資本金を假に六千圓とし之を二ヶ月毎に運轉して行けば、新聞が賣れゝば賣れる程利益は擧がり別に廣告代の收入も加はつて、算盤の上では儲けの多い筈であるが、さて實際になつて見るとさうは問屋で卸して吳れず、殊に新聞の賣れ高が一萬以下の社に在つては其營業は中々困難らしく見受けられた。殊に社主に取つての痛手（いたで）といふのは條例に依る罰金禁獄の處刑で、罰金だけでも一年數百圓に登る處がある、イヤまだ夫れよりも一層の苦痛を感じるのは發行停止で、而かも其筋では此の發行期間を明示せぬ爲め、明日（あす）か明後日（あさつて）かと待つ内に十日以上も長引のされる事があり、之より生ずる目に見えぬ損失は莫大なもので、終る之が致命傷となつた新聞社もあつたのである。

　關西の商人は自ら進んで地方との取引を擴張する風があるが、東京の商人は店に居ながら商賣し地方からのは得意は來つて取引をするのを待つやうな傾きがある。新聞の營業も亦是れに似て、大阪の新聞が明治十年の西南戰爭以來鋭意地方販賣の擴張といふ事に着手し、有らゆる手段を講じて着々新聞の早達といふ事を實現したのに拘はらず、東京では地方の開拓といふ事は最初の内は甚で冷淡で、かの新聞宵出しといふ事すら之を大阪の新聞に學んで一二年後れてやつと實行する始末であつた。都下に於ても亦明治十二三年頃までは配達時間の正確が保たれず、夜明け前に受箱に投込んである事もあり、又朝飯を濟ましてもまだ配達して來ぬ事もある、かうなると待遠しさに僕等はわざ〳〵本社まで月極めの新聞を買ひに出掛けた事もあつた。何事も設備不完全の時とは云へ今から較べると新聞事業も一體にのん氣千萬なものであつた。（二、二　二〇記）

硯友社の「江戸紫」

河井醉茗

坪内博士の「小羊漫言」明治二十三年上半期文學界の風潮の一文の終の方に「『都の花』の艷あせたりといふこと勿れ、『江戸紫』の色やうやく方に濃か也」云々といふ一節がある。その「江戸紫」は何んな雜誌であつたか。「江戸紫」のことは明治文學研究家の記述の間にも散見するが、まだ纏つた話を聞かない。それといふのも僅に十五六頁の薄い雜誌だから三四十年も保存されてゐなかつたからで、今手許に合本があるのを幸ひ聊か述べて置きたい。

二十二年の十月に硯友社の「文庫」は廢刊になつた。まだ創作の大家といふ處に到らなかつた尾崎紅葉は、何かやつてみないと淋しくて仕方がない、その道樂氣が凝つて「江戸紫」となつたので二十三年の七月に初號を出し十二月に終つた。半年の間に十二册續いて刊行したのである。而して型の如く損をした。「江戸紫」のことでは紅葉自身斯う語つてゐる。

> 翌二十三年の七月になると、未だ妄執が霽れずして、又々江戸紫といふのを出した。是が九號の難關を踰えたかと思へば、憐むべし、其の歳の暮十二號にして又殁落、之が爲に無けなしの懷裏を百七十圓ほど傷めて、吽と參つた云々。

而して「文庫」の終刊行の後、「江戸紫」が出るまでの間に「小文學」といふのがあつて同じく硯友社の機關、主筆は柳浪子であつた。また「江戸紫」の作に「千紫萬紅」といふ會員組織のものがあつて主任は紅葉、二十四年に出てゐた。それで紅葉の雜誌道樂は終りになつたらしい。此の「小文學」と「千紫萬紅」の消息も機會があつたら知りたいもので

ある。

さて「江戸紫」の體裁は菊版二段組、本文十四頁乃至十八頁、表紙と本文と同じ用紙で「江戸むらさき」の文字は紅葉の筆蹟、毎月五日二十日二回發兌、定價一册金三錢、編輯人は麴町區飯田町五丁目二十二番地廣津直人（柳浪）、發行所は牛込北町四十一番地硯友社、第一號は二十三年六月二十日發行の日附になつてゐる。

欄のわけかたと「我樂多文庫」「文庫」そのまゝ繼承して心織筆耕（小說戲曲）飛花落葉（小品文俳句等）千紫萬紅（評論の類）街談巷說（文壇消息）古鬪新報（江戸文藝等）森羅萬象（廣告）と云つたやうに普通では承知ができなかつたらしい。僅かの紙面にさま〴〵なものが並んでゐてもさううるさくは感じない。珍しくカットなどが入れてあつて、見た目にはゆとりがある。

全册を通じて創作は紅葉の「わかれ蚊帳」「文ながし」漣山人の「秋の蝶」柳浪の「草餅賣」水蔭の「澪標佐々木盛綱（脚本）の諸篇に過ぎないが此等は皆幾册かに涉つて續載されてゐる。挿畫は毎號でもないが新進の畫家武內桂舟が描いてゐる。

眉山の小品文に「下駄辭」と「百味譜」がある。許六か也有の再來だと云つてしまへばそれまでだが、これだけ文章に骨を折つたのは矢張二十二三年頃の文壇人で、硯友社にでも連つてゐなければ出來なかつた仕事だらう。

紅葉の短い文章には紅葉と署名してゐないけれど直ぐ推測される。俳文めいたものもあるが多くは評論文、これを書いて溜飮を下げなければ「江戸紫」を出してゐる甲斐はないといつたやうな力瘤の入れかたは分るが、その力瘤の入れ場所が文章の技巧にあるのだから何うしても時代は爭はれない。尤も當時評論壇は不振であつたわけではない。新鮮さに於ては逍遙に及ばず、學殖に於ては鷗外に及ばず、銳さに於ては正直正太夫に及ばず。だからその技巧、つまり紅葉の才氣を愛惜すれば澤山で、今更觀察力や鑑賞力を兎や角論じるにも當らないやうである。

詩月旦、俳句月旦といふのが當時批評の一つの型であつた。つまり新しい小說などを評するのに一首の漢詩や俳句で批評の代りをさせたのである。「柵草紙」の詩月旦などは評判になつたものだが「江戸紫」は詩よりも俳句の評が多い。例へば、「一句浮城物語を評す」として龍溪の小說を評してゐるが無論紅葉の筆である。

人あり問ふて曰く、浮城物語は什麼。われ應へて、著者矢野龍溪氏は聞ゆる政治家なり。小說家ならざれば「浮城」は政治家の小說にやいふべき。其他を知らずといひしに、客肯かずして切に其評をもとめければ、案頭の短册箱に節を擊て、

奥さまの田樂やくやさくら茶屋

また「不短庵氏が歸省の評言を見て」と題して、

いま一聲なきなほしてよ郭公

などは婉曲に云つたものである。

「文壇名所案內」といふものを寒唇軒秋風の名で書いてゐるが、これも確に紅葉の筆である。初めに「かゝずの森」といふ名所を出してゐる。此の名所は坪內逍遙博士を指したもので、「森の奥に小說中興神社の小祠あり、加筆の朱の玉垣神寂びて拜殿の扉門常に鎖ぢたりといへども、信心渴仰の輩折々の參詣絕ゆることなし。神木と崇め奉るは學位黐といひて、黐樹の一種なれど本朝の產にあらず、歐洲傳來の名木なるよしは本社の由來記にくはし」云々とあるなど隨分洒落て書いたものである。次に「露西亞ケ谷」、「かゝずの森」に近く「露西亞ケ谷」ありとして二葉亭を諷してゐる。これも文章はなかなか凝つてゐる。のみならず露西亞文學の印象を彷彿せしめるだけの用意があつて必ずしも一篇の戲文とのみ看過し難い。次には「古蒼樓須」、「藤南翠の評である。それから森鷗外を捉へ「鷗ケ淵」として現はしてゐる、その全文を引用してみよう。

郭公鷗ケ淵は「すてるンべるき」湖の水を堀入れ、塘には「ぶろッけン山」の粘土を用ゐ、至て手數の懸りたる名所なり。此淵

底深しと專ら傳唱へて、名の知れぬ體の分らぬ怪物が棲むよし。水面瀰く長く、長く長く長く、長いことは納屋の返しが千軒行列して淀の夜船に乘つて江河を遡るが如し。淵に泛ぶ鷗は、しろれる天神の神使なれば、人もし誤つて之を驚かす時は直どころに罰を蒙るとて尊崇せざるものなし。（況んや洒落半分に之を驚かすに於てをや）、去年までは敗荷殘柳霜枯の不忍池の如く蕭寥を極めたりしを神官深く憂ひて、今年の春より「ぬくとりあ座」の女優にて「えりす」と呼べる小町貴妃物かはといふ美人を召抱えて小意氣なる格子造に住はせ、貴人公子の歌舞宴を目的に御神燈を掲げたりしに大學大評判。淵の側に新聲社といふ神殿あり、月に一度づゝ例祭を行ひ、魔文退治妖著消滅の御祈禱あり、その都度參詣人に石橋の御符を施こす、之をしがらみの石符といふ。名物團十郎の似顔繪は新板なれども餘り賣れず。決闘用の短劍は切味鋭しとて喜ぶ人あれど、トンガリ過ぎてゐるとて好まざる向もあり。塘の溪に小さき森あり、「竹二の森」といふ。なほ若竹の肉黙まられど、他日改良演劇場の良村ならむかと氣を長く樂む人あり。森の側に「黄金井」といふ井戸あり。湧出る音いかにもしほらしく、さながら當琴を掻鳴らす如し。（以下二三行伏字）

戯文脈は脱しないけれど當時の千駄木山房一派が文壇に與へた刺戟は、かういふもので見てもよく知られるから面白い。

また鷗外に與へた「君帶吟」といふ一篇は、現代なら自由詩とでもいふべき處で、句調の揃つた詩のやうな形である。俳文脈から來てゐるから所謂俳詩であらうか、紅葉には新體詩にも筆を染めかけた跡があるから或は新體詩のつもりであつたかも知れない。

紅葉以外に批評を書いたのは依田百川、石橋忍月などの名が見へてゐるのと、北尾次郎といふ人の裸體美論などがあるくらゐで餘り澤山はない。

「古聞新報」も「江戸紫」の特色で、江戸文學の粹を拔かうとして骨を折つてゐる。山東京傳「新造」の自畫贊、瀬川路考の近松評、西澤一鳳の狂歌、東考の俳論、龜山鵬齋の酒佛妙樂經 白笑のけいせい卵子酒など皆文章道の妙味を存

するものである短いものを一つ拔粹してみる。

よし原の高尾が「忘れればこそ」の文は、文簡にして意を盡せりとて人口に膾炙する所なれど、島原の名妓八千代の「奥ひとつ」の文は、文愈短なれど意愈濃かにして掬すべし。恨むらくは知る人少なくしてこの奇文の反古となり埋んぬべきことを、即ち「吉原一言艶談」に出たるを轉載して其味を示すといふ。

きのふもまち今日も待ち只今奥ひとつ見えらるさにもあらずかしく

千代

あか大なごん方

こせうどのまゐる

要するに「江戸紫」は片々たる同人雜誌ではあつたが、斯うして全部十二册を通覽してみると、紅葉の意氣、才氣、覇氣が全紙に溢れて居て少しも無駄のない文學的手習草紙であつた。これも亦明治文學の一側面を窺ふ材料として記憶するに足る價値はあるだらう。

附言、右「江戸紫」の合本は熊谷町の松崎貞吉氏といふ篤志家が、他の各種文學雜誌類と共に史料の一端にもと特に小生に寄贈されたものである。玆に附記して謝意を表す。

中江兆民の『理學沿革史』その他

高須芳次郎

（一）

近時、明治初期の文學研究と共に、中江兆民の文學的業蹟についても注意を拂ふやうになつたが、その『理學沿革史』などは、今も未だ閑却せられ勝ちで、ある特殊專門家のほかは殆どその內容をも知らないやうだ。蓋し兆民は多方面の才人で、唯學者文人たるに留らず、曾て政治家でもあつた實業家でもあつた、官吏でもあつた。さういふ生涯を一貫してゐるのは彼れの奇行であるが、奇行は一時的に世人の耳目を驚かすに留る、寧ろ今日、兆民を不朽ならしむるものはその文學的業蹟で、彼れは學者文人として、いつ迄も忘られ得ぬ一人である。

兆民の文學的業蹟はこれを（一）飜譯（二）評論（三）人物史傳（四）隨筆小品に分つことが出來る。その中で、兆民が晩年病中に書いた『一年有半』『續一年有半』及び『無神無靈魂』などが最も能く記憶せられ、初期の飜譯、史傳、評論、雜文などは多く忘られてゐる。僅かに現代文學史にその題名だけを記されてゐる位のものだ。が、私一個の見解によると、兆民の眞骨頭は寧ろ初期の著作に最もよく現はれてゐるのではなからうかと思ふ。

彼れの『一年有半』は流石に圓熟した想と筆とによつて、隨筆文學中に一頭地を拔いたが、それは彼れの少壯氣鋭な時代に書いたものにくらべて、幾分油氣が拔けてゐるやうにも思はれる。彼れの初期に書いたものは一面、ゴツゴツし

た生硬なところがあるけれども、油氣があつて、生々した光彩を帶びてゐる。さういふ意味で私は彼れの初期に於ける著作を檢討し紹介する必要を感じた。

それには、兆民の略歴を記す必要がある。兆民は土佐高知の出身で、弘化四年に生れ、幼少時代から聰明を以て知られた。十九歳の時、藩の留學生として長崎に遊び、そこで二年ばかり留つて、フランス語を修めた。それから後藤象次郎にその才學を知られて二十五兩の金を借り受け、江戸に出ると、フランス語の大家として知られた村上英俊の塾に入つた。無論、學問はよく出來たが、もうその時分、兆民は遊蕩の味を覺え、深川の假宅に耽溺して外泊數日に亘るやうな有様だつたので塾から退學を命ぜられた。

その後、兆民は横濱に赴いて天主教の僧に從學し、或はフランス領事に從つて大阪に下り、フランス語の研究だけは怠らなかつた。そして王政維新となるに及び、江戸に歸つて箕作麟祥の私塾に入つた。その時分から兆民はフランス留學を思ひ立ち、大久保利通、板垣退介、後藤象次郎らの引立により、明治四年、岩倉大使一行が歐行するとき、司法省出仕として、フランスにゆくこととなつた。それは兆民の二十五歳の時である。

（二）

兆民のフランス留學時代は、ナポレオン三世が失意の地位に起ちガムベツタ、チエールなどが共和、民主の思想に立脚して、大に宣傳につとめた時である。當時、わが新人としてフランスに滯留してゐたのは、西園寺公望、光妙寺三郎その他數名で、兆民はフランス語の學修に力を入れると共に、史學、文學、哲學などを研究した。それから彼れには支那文學の素養があるので『日本外史』『孟子』『文章軌範』などをフランス語に譯した。兆民が後年、文學的活動を示した土臺は多くこの間に作られたのである。

兆民が略ほ學成つて歸朝したのは明治七年である。間もなく、私れは新人材の一人として元老院少書記官に任ぜられたが、奔放不羈の生活を喜んだ彼れは、役人として適しなかつたのみならず、第一、周圍の人々と肌が合はなかつた。それで彼れは書記官をやめて、外國語學校長となつたが、やはり、面白くないので、すぐにやめて浪人となつたのである。

次いで兆民は在野の學者として、番町に佛學塾を開き、政治、歷史、法律、哲學などを塾生に教へた。その門下となつたのは、酒井雄三郎、小山久之助などである。幸德秋水が兆民の弟子となつたのは、遙かに後のことであつた。かうして佛學塾は福澤諭吉、中村敬宇らの英米思想鼓吹に對して、フランス流の自由平等主義を宣傳し一部の青年を熱狂せしめた。それと共に兆民は西園寺公望の『東洋自由新聞』などに關係し、その主張を貫くことにつとめ、時の政府に對して烈しく反抗した。そのため、政府から抑壓せられ、佛學塾を解散しなければならぬ破目となつた。

爾後、兆民の生活は概ね新聞雜誌記者として送られた。明治二十年には、大阪に『東雲新聞』を起して氣焔を揚げ、二十二年、後藤象次郎が大同團結を唱へて、その機關雜誌『政論』を發行すると迎へられてその主筆となつた。次いで『立憲自由新聞』などに執筆し、二十三年には衆議院議員の候補として大阪から現はれ、苦もなく當選した。けれども議員の實際行動に不滿を抱き、『無血虫』の一文を草して、變節議員を罵ると共に辭職したのである。

兆民は議員辭職後、『經濟雜誌』を起したり、『民權新聞』を發行したりしなが、明治二十五年、小樽の有志に聘せられて、『北門新報』主筆となつた。彼れが慨世の餘、心機一轉、紙屋を開いたのはその頃のことで、一時、種々の會社にも關係したが、悉く失敗した。程なく、兆民はまた筆の人となり、雜誌『百零一』を發刊して民黨のために氣を吐き、頗る力めたけれども、資力が乏しいので廢刊のやむなきに立至つた。爾後、政界の實際運動に加はり、始終政友會に反對して、自由黨本來の主義のために健鬪したが、明治三十四年四月、喉頭癌に罹り、十一月十三日、終に世を去つた。そ

の臨終前に書いたのが『一年有半』『續一年有半』『無神無靈魂』などである。

（三）

以上の略歴によると、兆民の一面がいくらかわかるであらう。兆民と略ぼ同時代の文學者で、西洋學と東洋學とに精通したのは、森田思軒と彼れとである。それについて德富蘇峰氏は『漫興雜記』のうちで、この二人の文章を言及し、『思軒の漢文は巧妙の工匠の手に出來た檜舞臺の如くで、兆民の漢文は黄葉が墜ち盡した公孫樹のやうなものである。前は斧削の痕があり後ちは自然に近い。』と評したことがある。また氏は兆民の文致を品して、「十步九折、蒼勁嵯峨恰も急湍の危巖に咽んで淸越の韵を激するに似て、丁度、孟東野の詩を作るが如きもので、大に故井上梧陰先生に類してゐる。唯だ梧陰は正を以てし、兆民は奇を以てするのである。」と述べた。蓋しそれは穩當の評言であると思ふ。

兆民の思想はフランス式にいくらか東洋的傾向を加味したもので、その表現は支那式であつた。思想上に於ては、別段、彼れ獨自のものはない。ルソウの思想を忠實に紹介し鼓吹した迄のことである。その『無神無靈魂』の如きも、フランス流の唯物哲學を祖述した丈のことで、必ずしも異とするには足りないのである。それで文學的業蹟の上から見ると、彼れは寧ろ飜譯家としてすぐれ、次ぎに時論家としてその特質をよりよく發揮したと見るべきである。更に全體をひつくるめて云へば、兆民は社會文學の先驅者といつてよいところがある。が、兎も角、彼れの特色を形造つてゐるのは飜譯と時論の二つで前者は文字の商量に意を用ゐ、正に「字鍛句錬」の慨がある點に於て、後者は奇氣熱氣が筆端に迸つてゐる點に於て、兆民でなくては到底出來ない獨自の世界を築きあげてゐる。

兆民の飜譯として知られてゐるのは、ユウ・ジエーヌ・ヴエロンの著書を譯した『維氏美學』、ルソウの『民約論』を邦語にうつした『民約譯解』及びアルフレツト・フウイエーの『イストアル・ド・ラ・フイロゾフイー』(Histoire de la Phil-

osophie）を譯述した『理學沿革史』などである。『革命前法朗西二世紀事』は飜譯と銘打つてゐないが、恐らく纂譯でなからうかと思ふ。無論、これは餘程兆民一流の趣致をも帶びてゐて、纂譯とするのは、或は當を得ないかも知れない。この一書を作成するについて、兆民が參考書としたのは、フウィエーの『歴史字典』、アンリー・マルタンの『佛國史』、ルソウの『懺悔錄』ヴオルテエルの『手簡抄』などであるが、巧みに情景を躍動せしむるがために『史記』の骨法を用ゐ、叙述の上に於て相當の成功をした。が、それにも關らず、兆民の『三醉人經綸問答』などにくらべて、ひどく閑却せられてゐるのは惜しい。

（四）

さて兆民の『理學沿革史』は、今日見ると正に珍書の部類に入るべきものであらう。本書が世に出たのは明治十八年十二月のことで、文部省編輯局藏版としてある。それは今日の哲學史のことで、物理化學の歴史ではない。兆民が哲學、美學について、早くから興味を持つたのは面白い現象で、かの奇氣縱橫の時論——政治評論と對照すると一種の妙趣を感ずる。卽ち前者は靜的であり、後者は動的であるからだ。靜、動二面に跨つた兆民は哲學、美學の開拓についても、夙に意を致したものと見える。この方面を一貫して擴充してゆけば、兆民は哲學者として一家を爲したかも知れない。兆民が文部省から『理學沿革史』を出したのは、當時、同省が啓蒙的に民衆の新知識を開發しやうとしたによるが、一つは兆民がフランスから歸つてから、外交文書の飜譯などを命ぜられ、彼れの飜譯上に於ける妙手腕を知られてゐたからである。

兆民が飜譯の態度は極めて忠實で一字一句苟くもせぬ風があつた。それは『理學沿革史』の序言に徵してわかる。兆民はそれに於て、「譯者性理學（哲學）を嗜好し、諸家の說に說て甞て竊に窺ふ所あり。」と述べ、次ぎに譯法に言及し

て、「泰西の文、流暢富贍の極、冗漫なるが如くにして而して實は毎句、觀を異にし、毎章容を殊にて委曲婉美、眞に喜ぶべし。而して直ちに之を譯して削る處無きときは冗漫厭ふべきを覺ゆ。然れども削る時は飜譯の本意に非ず。故に一々擧けて遺すこと無し。」と云つた。

兆民の譯文は明快流暢で、而も些のタルミなく、苦澁、晦澁のあとが殆ど見えない。哲學上の譯語が未だ一定しない時代に於て、兆民の如く、比較的雅正穩當の譯字を案出して哲學史の飜譯に最初の成功を示したものは少いと思はれる。勿論、今日からすれば、物足らぬ所や餘りに漢語の中から雅正にして風韻ある文字を撰んで、新譯語を作ることに凝りすぎた點は見ゆるが、それは明治十九年代としては止むを得ない。明治時代に現はれた哲學史の飜譯は相當にあるが、兆民の如く先驅して、而も名譯を出したものは、殆どころを聞かない。そしてその內容はひとりヨオロッパのみならず、印度、支那の古代哲學及び佛教にも及んでゐるところが珍しい。或意味に於て、フウイエーの原著は『世界哲學史』と云つてよいのである。

勿論、印度、支那の哲學については、僅かに片影を叙述した丈で物足りないし、日本の神道哲學を逸してゐるのも慊らぬが、兎も角、古代東洋哲學の一部を西洋哲學と對照せしむべき便宜を與へたのは原著者の視野が廣くて、西洋にのみ偏しなかつた爲めだ。さういふ內容上の批評は暫く措く。今、兆民の譯文の妙を紹介するため、プラトオン哲學に關する一部分を引かう。

プラトンの神の說

プラトン以爲らく、神は儼然存在して必ずしも徵を擧げて之を證することを須ひず。凡そ人の學問は其智に由りて言ふも、其情に由りて言ふも、終に神に歸結せざるを得ず。他無し、神は萬物の資りて立つ所なればなり。

プラトン既に神の德を以て徵證を須ひずと爲す。然れども亦前賢の擧げし所の徵證に就て、更に省察の功を加へて以て之を究

めせり。一人曰く、運動の本原を考ふるときは神の存することを徴すべし。蓋し天地間、庶物皆能く運動するも實は能く自ら動くに非ずして必ず別に之を動かす者あるべし。吾人の精神能く身體をして運動せしむ。即ち神の能く庶物をして運動せしむるは猶ほ精神の能く身體をして運動せしむるが如し。故に神は世界の大精神なり。

其二に曰く、世界の目的を觀察するときは神の存することを徴す可し。蓋し世界庶物の運轉の迹に就て之を察するに一々目的のあるあり。其次第粲然として掩ふべからず。目的とは何ぞや、善これなり。凡そ世界の事皆善に嚮はざる無し。これ必ず一大智慧の然らしむる所なり。（下略）

以上は譯文の一節であるが、殆どその譯文たることを忘れしめるほど暢達明快で、長谷川二葉亭氏の小説に於ける譯文と匹敵するのを覺える。フランス文學に通じない私は一々原文と對照するわけにゆかぬが、誤魔化すことの嫌ひな兆民のことであるから、逐字譯式にして、尚ほ且この功果を收め得たものと思ふ。それで『理學沿革史』上下二卷だけでも、兆民が飜譯家としての功勞を認識し、明治期の海外文學飜譯史には、兆民について相當記述するのが至當だと信ずる。

（五）

一體、兆民の著作は、その門弟秋水ほどにも世に紹介せられてゐない。彼れの『東雲新聞』時代の政治評論などは、徳富蘇峰氏が「滿腔の熱血が筆端に迸つて、奇突横峭の文を作つた。議論とも附かず、又獨語とも附かず、眞面目とも附かず、譃言とも附かないで分明を缺く所などは却て兆民居士が天眞を示してゐる。」と極力賞讃を惜まなかつた位で、後にも前にも見ない新形式でフランス流の思想を表現した。兆民文集『筆猶在り舌猶在り』のうちには、その一部が收められてゐる。その短い評論のうちには、兆民でなくては書けない妙趣が見ゆる。「洋劍政治」に於て、政府の武斷政策

を諷じ、「曰く是れ」に於て政界を護り、「官制」に於て藩閥官僚の弊を冷罵した文章などは、兆民一流の筆法で鋭利を極め、奇氣に滿ちてゐる。かう云ふ點で、彼れの政治評論は啓蒙期の政治文學として白眉に推すべきものと思ふ。今「官制」と題する奇文を左に引かう。

官制、俸給令、瞑目澄座して一考せよ、元これ何が爲めに設けあるかを一考せよ。彼れ制度法令は、租税の奉に衣食する官吏と號する一種の物類の屋を潤ほし身を肥やすが爲めに設け在るに非ず、閣、省、院、廳、諸般の事務を調理して澁滯なく、剳截して阻碍なく、冗糜寡くして、而も効果多き樣做去り、以て一國民の福祉を增すがために設けあるものたり。官を肥やし、民を餒し、都會を沾ほし、村落を乾かし、國庫を脹らし、民嚢を縮むるがために設けあるに非ず。（下略）

（前略）官制……俸給令……數頁、數十頁、數百頁の簿册、數十條、數百條の文字、此文字は果して一個半個移動すべからざる底の一個半個移竄すべからざる底の、金石碑碣の文字なる乎、功臣、功臣の功臣、其功臣の又功臣、功臣の戚、功臣の親戚の親戚、功臣の知巳の知巳、親戚の又親戚の又親戚、知巳の又知巳の又知巳、此多くの「の」の字を肩に擔へる物類は終に移動するを得べからざる乎。終に農に工に商に、其他實業に衣食せしめ、生産的に衣食せしむることを得べからざる乎。相食動物圈中より逐出すことは、終に出來可らざる乎。南畝の百姓、廛肆の商工は、何日迄も其膏血を濺ぎ將て、此等動物を飼養せざるを得ざる乎。（下略）

兆民が如何に藩閥、官僚に向つて、民本主義的に戰ひ、當時に於ける種々の甚だしい情弊を矯めやうとしたかが、この短文の一節によつても察せられる。いづれにせよ、兆民の奇絶的な政論、社會評論は、もつと注目、研究されてよいかと思ふ。が、この點については別に他日を期したい。

尙ほ『理學沿革史』を紹介したにちなみ上卷第一編目次及び下卷目次の一部分を左に掲げる。

敍論　理學（哲學の事）の沿革に於て用ふべき法式及諸家の異同を合するの

法式

緒論

第一編　理學に係る古昔國民の諸說

緒論

本論

第一、印度の理學

一、印度人庶物「原理の學」波羅門教に係る多神の說及神物一體の說

二、波羅門教に係る道學　三、波羅門教外の理學佛陀の理學

第二、百兒矢亞の理學　ゾロアストル

ゾロアストルの庶物原理の學　ゾロアストルの道學

第三、古昔ゴーの理學

第四、支那の理學　孔夫子及孟子

第五　エジプトの理學

第六、猶太の理學

一、猶太の庶物原理の學　二、猶太の道學　三、猶太の政術　四、猶太の善行の進步

——以上上卷目次の一部——

×　×　×　×　×　×　×

（以下、下卷目次の一部）

當代の讀書趣味

日夏耿之介

明治二十年前後の時代相をかへり見る側面觀的方法として、こゝに當代讀書趣味の標準が奈邊にあつたかを究めて見たい。

當時の雜誌の最高水準「國民之友」第四拾八號附錄（明治二十二年四月廿二日發兌）及び同誌第四十九號につづいて「書目十種」といふ特殊記事があつて、當時のいはゆる名士の嗜讀冊子十種を蒐め揭げてゐる。當時歐米でも切りに時花つた名著百種の類の模倣である事いふ迄もない。

先づ二葉亭四迷は長谷川辰之助の署名で左の書目をあげてゐる。（原文のまゝ。以下同じ）

ゴンチローフ著オブルイフ
ドストエーフスキイ著プレスツフレーニエ、イ、ナカザーニエ
ヴリスキイ著ジナア以上三種小說陸宣公奏議　魏叔子文集
思軒先生譯探偵ユーベル

ゴンチ・ロフのオブルイフやドストイエーフスキーの「罪と罰」を「小說神髓」の原史時代を程遠からぬこの時代に夙

く讀んで愛書としてあげてゐる二葉亭は、專門語學の然らしめし所爲とはいへ、又、オブルイフはオブロモフ程ゴンチロフとしては著名でもなく代表的でもないとはいへ、兎に角ゴンチロフとドストイエフスキーと近代思潮のふたりの此の重要な代表人物をあげてゐるのが、他の名士のそれと比較して興がふかい。かれは、而して、同時に陸贄字は敬輿の奏議と魏勺庭字は冰叔の文集二十二卷とをあげてゐる。陸は唐代の翰林學士。諫諍がすぎて永貞中裴延齡に譖せられたる人。魏禧は依田學海も亦あげてゐるが、明末清初にいはゆる寧都の三魏といはれた三兄弟の一人、明亡びてより致仕した。百川が「節を守りて山林に老死せり。さるが故にや文に奇氣あり。」といひ「義を述ぶるに情を本とし理を後にす。」といふてゐるあたり、當年の四迷が思想特色の奈邊に在つたかを忖度する好資料ともならう。しかも、思軒がユーベルを推賞せるは、飜譯家としての二葉亭がこの先進に少からず負ふところあるを談り、又、當時のユゴオ趣味にかれも亦心醉せる一人であつた事實を談る。

二葉亭のこの撰擇に反して、尾崎紅葉が、

太平記	枕草紙清少納言
風俗文選	娘節用人情本
鶴一代女	京傳作小紋雅話
唐宋詩醇	鶴五人娘
平家物語	俳風柳樽

と書せるを見れば、兩者の思想趣味に愕くべき差異あるを知るであらう。元祿復興の氣運漸く動かんとする當時に西

鶴〻に耽湎したるは何の不思議はない、風俗文選や柳樽やは彼一代の俳趣味の兆であり、軍記物や人情本に小說創作の契機を求め得た彼が語學に貧しい關係と、異國への文學興味を反動的江戶文學趣味で拘束せられ而して同時にそこに在つて練磨せられて、この若き敏感な受感性强い靑年期に、鷗外の如く四迷の如く、稚きエサゾテシズムに觸發する西洋思想の培養を十分得る能はざりしは、紅葉がついにあの時代の小乘的文學趣味を極度に洗練せる卓越せる小說家にすぎずして、前二者のやうに今日まで深く現代的共感を强ひる底力の弱い所以を悟り得よう。かれのあげた唐宋詩醇如きは當時の一般人的敎養にすぎない。

四迷、紅葉に對し、坪內逍遙は、

サツカレー、パニチー、フヘヤ
スペクデートルアヂソン氏
ワシントンアルヴンク小品文
カウパーの詩
八文字屋物並丸本　　枕の草紙一二册
論語　かづらごろも　　春臺獨語

とあげた。逍遙は旣に八文字屋の類からは卒業してしまつてゐた頃ではあつたが、かれの一生を通じて窺はるゝ英文學的敎養と八文字屋的趣味とがこゝにその本體を明らかにしてその上で、論語や春臺獨語のモラールや考證趣味で統一せられてゐるを發見するは興味がふかい。

所謂文壇新進の名家三人迄（鷗外露伴の文章は載つて居ない）が以上の返答をなしたに反して、新譯詩家として立つてゐた國府寺新作が、

舊約全書中創世記獨逸譯
新約全書中約翰福音原文
莊子　孟子
詩經　書經
ギヨーテー著ファウスト　ハムレツト
マキアベリ文集英譯　ミルトン詩文集

を列擧せるは、この頃の基教徒の文學趣味ではあるが、又、書目擧示に文學的虛榮心の露出を示してゐた事實がよしんば假りにあつたとして見ても、創世紀と莊子孟子に詩書經とハムレツトにミルトン、ゲーテといふ撰擇は立派な標準で、只一種のマキアベリを除いては現代の書目としても些の遺憾がない。書目に於て遙にか紅道の二人を凌駕せるこの譯詩家が、その詩業に於ては半月にも鷗外にも遠く及ばざりしは天稟の約束是非もない。廣義の創作の人としてでなくて單なる鑑賞家として終始せるものか、徒らに識見の卓越を誇つたにすぎぬものか、同氏の傳記に暗い私は今立入つたせんさくが出來ないけれど、一點はるかに劣つたマキアベリを加へたところに武斷時代の鮮かな韓非子的時代色を見る。

饗庭與三郎篁村が

今様廿四孝寶永ごろ出版作者、月尋堂　廿七松堂集廖柴舟
笠翁一家言李笠翁　曾我物語

根なし草 平賀鳩溪　　鶴林玉露 羅大經
五雜俎 謝肇淛　　雨月物語 上田秋成
琴後集 村田春海家集　　隋園詩話 袁子才

をあけたは翁が文章に照して誰しも、北叟笑まるべきも、その後に書して「和漢五部づゝ五部五分に撰み出し」たのだが、平家や西鶴や巣林子や其磧、團水、馬琴、種彦、浮世風呂、膝栗毛もすてかねるので「少年の折は梧窓漫筆、中年は立志編品行論が精神で、」太閤記、三國志、馬琴、種彦から風來、殘口、黄表紙、蒟蒻本、八文字屋、西鶴、近松を神佛と拜し「只今にては上田秋成といふ新敎を奉じ嗜好更に一定」せぬが、右の十書は「一月の中に必ず顏見ねば病をおこし」とあるは例のおどけ交りではあるが、幕末名殘りの戯作文學者趣味をよくあらはして之れ亦面白い。それにしても、かれの好事家的五雜俎趣味の態度はその博覽を自ら亡して斷考若干に相當權威は示したがついに一册のまとまつた江戸文學史考をも殘さしめなかつたは惜かつた。實はかく生れた人ではあつたのだが、今の所謂國文學大家の無批評と淺薄とがはびこるにつけても今少しまとめる才のある人であつて欲しいもの知りの篁村であつた。

袁隨園や琴後がこの頃の普通の敎養であり趣味であつたとひとしく、ビーコンスフィルドやバイロン（それもオーツ・オン・ナポーリオン）やバーク、ヒューム、ギボン、リツトンが今日のロマン・ローランやウエルズや現象學派であるのだが、中には少しの異り花もないではない。

石橋忍月がレツシングのラオコオンを眞先きにあげた批評家としての表看板からも肯けるのだが、マイエルの獨逸國法學は業務から見て至極尤もとしても「寢覺記」や「若菜物語」が交つてゐるのはこの頃の修養書文學趣味としては不思議はない樣ではあるが今から見れば既にこれらの古書すらも今代人士の耳には些か遠いやうだ。加藤弘之がヘルワルドのクルツールゲシヒテやリリエンフエルドやイエリングをあけるとともにバスチアンのデア・メンシュ・イン・デア・ゲ

シヒテやダーウヰンやヘツケルをあげ、富井政章がパツシイやティエールと共にメインの名著「上代法律考の佛譯に加へてやはりヘツケルを加へ、渡邊國武無邊俠禪子が羅什譯の中論や、鬼谷子や、戰國策や華嚴經とともにショーペンハウエルの「意象世界論」とハルトマンの「無意識哲學」をあげたは興味なしとせぬ。金子堅太郎子が「地方凡例錄」やバークをあげたはいゝが、詩華集のゴールヅン・ツレジユリイをあげたは些か珍ではある憶起す、後年明治三十九年頃に、文藝協會發會當時、今の一つ橋の商科大學講堂で講演會を催し、大隈伯の藝術論は御愛嬌として除けておいても、藝術會合の會頭を常任としてその頃よく勤めた金子子が、題からして不得要領な「米國に於ける美術上の價値」といふ變手古な講演をして、當時松崎天民とともにある通信社の記者をしてゐた私の某舊友が晝は砲兵工廠に勞働者となつて働き、夜は片手間記者をしてゐる勞苦を見かねて初めて私が記者顏をしてこの名講演の筆記をして通信社に送つて全國の田舍新聞に揭げられたが一向要領を得ない論旨であつた事實を追懷すると、ボルグレーブと金子氏とは寔に微笑まるべき對照である。尤も、この頃は尚青春を去る程遠からぬ壯年の外國通として、今の米國がへりがホイツトマンをかつぐ程度の鑑賞の心掛け位はあつたのかも知れぬ。「黃金寶華集(ゴールゾン・ツレジユリ)」はつまり英文字の「三體詩」であり「古詩源」であり、「唐詩選」であるのだから。

詩は拙いが詩論は一應顧る價値のあつた哲學史家の大西祝が、「ウオルヅウルス、ベーコン、カーライル、エモルソン、シエーキスピヤー」と英文學中のみを限つてあげて次ぎに、「コールリツヂ、デクインシー、マシウ、アーノルド、オルヴイング」とあげ來つて、「擧げんと欲して擧げ得ざる者あり」とてラスキンとミルトンとを呼んだは、かれの詩論や思想を一通り究めたもののみには矢張り興味のある事だ。

當時の大批評家と自他ともに許した依田百川が一々註釋つきで、史記に初まつて、順次に、韓非子、蘇老泉文集、魏叔子文集、水滸傳、金瓶梅、紅樓夢、源氏物語、大鏡、徒然艸、藩翰譜、椿說弓張月、邯鄲諸國物語等を列擧し、學者

の本分としては經書歷史法律地誌の類から動植理化の諸學を讀までは叶はぬのだが、こゝには「好みて愛する書」をあげたのだといふてゐる處を見れば、やはり嗜讀者に相違ないが、漢學畑で小說評も劇評もやり文學史の考證染みた事までやつた學海の趣味は同時に當時の老人中の有識者の趣味と解して差支へない。金瓶梅も「權奸の情狀を寫すに、豪奢邪曲の言ふに忍びざる迄を漏すくまなく」その點が苦心の存するところで「淫猥の書のみとして見る可らず」といつてはゐるけれど、帝國文庫本西遊記の序に、後西遊記の晦淫處を略叙して興味ふかしと悅に入つてゐるところを見れば、表紙に庭訓本と書いて中に春宮册子の類を挿んで北叟笑んだ底のこの當時の怪しげな政治家、學者、教育家の僞善的一面―(その僞善行爲にも、せんさくすれば些か同情に値ひする事情がないではないのだが)を聯想して同時代人の矛盾を矛盾とせざる反省不足の道德思想を窺ふよすがにもなる。

敬宇中村正直が、バックルの文明史やフランクリンの自叙傳やモンテーヌ集やアデイスンのスペクテートアと共に舊約詩や杜詩、韓文、左氏傳、五經、四書をあげたるは硬派の文學趣味の好代表であり、內藤耻叟が四庫全書總目提要やら下學邇言やら令式やらをあげたは專門に偏しすぎたもので、他の返答者中にも一般趣味と專門書とを各標準を異にし又はその兩者を半々にあげてあるものがあるが、かくありしは編輯者の放念に基くもので、耻叟のあげた和漢各十種の史書は、かれの學者的立場を考へて之れを見ると又別種の興味があるのは卽ち史籍に對する價値標準の變遷を知る便宜があるからだ。

中江兆民が書物に多情で和漢洋硬軟數多くして一々列擧すると該博を示すやうで氣恥かしいと答へたは卒直正直で兆民らしいし、山田美妙がこゝでは文學に限るがといつて、貫之の歌や賈島の詩とともに「みるとん詩集、どんきほうて、しエれい詩、ぶアにてい、ふエいあ、るみざれぶす、しるれる詩集」と書いたも浮薄の弱點に見免せぬがとにかく英語に堪能で斬新好きで温柔體好みでハイカラな態度の人であつた新人の俤を示し、光妙寺三郎が、柳州文や網川詩や東壁

や孟子や枕草紙や源語とともに「サフオー貴」詩、リユクレス詩、アルラレド、ミユセー詩文、モリエール劇、ウキクトル、ユゴー詩文、タシト諸史」をあげたは之れ亦、ハイカラの名に背かず、當時はやく此種の劣らぬ三郎や美妙やが文壇學界と云はず世間一般に居つて趣味の上の深刻でもないが一種の孤獨地獨に皆苦しんでゐた事は想像するに難くない。只此兩人がどの程度に徹底してゐたかこゝには論じない。

とにかく、斯る所謂洋學好きに伍し、福岡孝悌が、骨董祕訣や閒情偶奇や唐伯虎記事(寫本)や無聲詩史等十六種をあげて(以下五十九種略之)と書いたは愛嬌であるが、山川健二郎がディケンズ、サツカレ、ストウ夫人を世說新語や甲陽軍鑑とともに讀んだり、福地櫻痴が五代史や孔羊傳とともにデユーマ、沙翁、シルレル、リツトン等をあげて「一議論の本は嫌で御座る」といつたは彼等として實情であらうし、森田思軒が「韓愈が應科目時與人書を悅ばずして李綱が康靖傳信錄」を愛しテニソン應酬の作を悅ばずしてウオルヅウオルス「湖邊の吟を愛」すといつたなどはかれ等の本性をよく物語り、合せて時代の讀書の準備知識の程度をも示はしてをる事だ。

元田永孚が集義和書や諸葛丞相集をあげ、三島中洲が尙書、周易をあげたるは異とするに足らぬが、天臺道士がディケンズと共にロビンソン、クルウソオをあげたは敎訓の表意にしても面白い。山田喜之助がトマス、ムアに於けるは內田周平がハルトマン審美學に於けるとともに一見奇異の感を抱かしめるが、實際に當人について詳しい人には左樣ではないのかも知れぬ。

外にも、ハミルトンのメタフイジツクスや、ミルのロヂツクやカントのプラクテイカル●リーズンをあげた人があれば、シエリダン、クリフオード、エリオツト、グレイ、ベイコン、マコウリイ、カーライル、スコツト、コリンズ等の諸册子にパスカル、ラシイヌ、サンピエエル等まで及んでゐる。

以上中の主なものを三宅雪嶺が一口評をした一文が添へてあるのが面白い。福岡子の書目を名前だも聞知したる事な

き珍本の類、御不用の節拜見といひ、篁村はうまく、天臺は道士に似合はず不思議に、光妙寺や山田が詩文人らしく、渡邊が哲人らしく、山川が小說家らしいは一奇、紅葉は奥ゆかしく美妙は力んでゐると評し、さて自分は讀みたくもない本を飾つたり、好きな本を匿す事はしないが、嗜讀書を吐露する勇氣はない。强ひていへば國府寺等に似てゐると返答してゐるのも雪嶺らしい文句である。

坪內逍遙が沙翁をあげずに櫻痴がこれをあげたり、後のメインの譯者鳩山和夫がかの古法史をあげずに、却つて富井政章がこれをあげてゐるなどは主客顚倒ではあるが、大體當時の「名士」の意中の書が如何のものかは以上の略抄でも判明しよう。古典の考究にも、趣味的耽溺は多くあつても隨筆的考證はあつても文學史的批評はまだない。ざつと今から四十前年であるが、和漢書はとにかく、洋書の嗜好の對照の變遷は愕くべく甚しい。九十年代近くの英吉利は佛詩文の影響を多分に受けた文字通りの世紀末の頽唐時代であつたが、それらの反響はまだ此當時の日本に些かもない。一般的にいへば十八世紀末とヰクトーリア中期との文學の漫然たる輸入にすぎなかつた。が、それでも目醒めつゝある道程期の二十年代の日本には新聲であつた。(透谷のマンフッレド張りは新趣味のさきかけであつた頃だ。)ペイタア、ロゼッテイ、ヱルレーヌの名の日本文字で署されたは早くこの二十年代の末期であるを思へば、この二十年代の眩めく思潮のいかばかり急流であつたかは思ふだにすさぎしい。

和文學でも、芭蕉蕪村や萬葉をあげるものは一人もなく、漢文學は主として硬い經史部のみで支那俗文學も厖大な小說傳奇類はあるが、支那獨特の怪異談を集めた說話集は一つもない。文學としても傳說としても正當の興味がまだ眞に動かなかつたからであらう。

明治の二十年代はその初葉に沙翁を讀んでその末期にはロッゼテイまで下つて來てゐるのである。これを見ても、明治の四十五年間にわれ等日本人が泰西の五百年の近代思想を急轉直下に經驗し來つた事實を今更に感じるのである、

言文一致の搖籃時代
――紅葉の「讀者評判記」――

齋藤昌三

本號は「混沌開明期號」として、明治二十年以前の文學的諸相を明かにされるといふのであつたが、自分は明治二十年前後と勝手に變更して、紅葉山人一個人に就ての混沌開明期を少しく探つて見やうと思ふ。

紅葉が兎に角公刊的な誌上に名を列するに至つたのは、實に二十一年五月の『風流京人形』の頃からで、紅葉自身としても、之れ迄は未だ山の者とも海の者とも爲り切らず、文壇世相としても、政治小說と飜譯小說の二大潮流が、『小說神髓』の警鐘によつて稍々本流を離れかゝつて來た時であつた、所謂混沌開明期であつたのだ。

當時紅葉は同人雜誌「我樂多文庫」（第二期）を二十一年五月から、翌年二月まで續け、更に「文庫」『千紫萬紅』『江戶紫』等と順次關係してゐたが、單行本としては「新著百種」それも雜誌の變態）の處女出版が、漸く二十二年一月で、未だ一つぱしの靑書生であつた。だから迎へてさへ吳れたなら、中央の文壇と限らず、地方の雜誌へでも喜んで投稿したらしくも思はれた。

有名な『紅子戲語』は初めは二十一年十月の「我樂多文庫」で發表したが、それは矢張り明治混沌期の影響を多分に含んだ戲文體の作であつた。然し當時の硯友社中の空氣が寫されてゐるので、後世に於ては珍しい資料とされてゐるが、茶番式な時代的雰圍氣によく出てゐるものだ。

今、自分が云はうとしてゐるのは、單にこの一篇によつて、紅葉を時代的に說明しやうといふのではない。紅葉には『紅子戲語』に似た作が未だ一つあることだ。それは『讀者評判記』と稱する、同じく一種の戲文で、それは前者が硯友社中の內輪咄であるのに對し、これは著者と讀者との對外關係の作であつて、翌二十二年九月の大阪好吟會から出た「百千鳥」に、前後五回に亙つて發表したもので、頗る洒脫な作である。この「百千鳥」は紅葉も創刊號から（うかれ鳥）寄稿はしてゐるが、元來は當時流行の講談筆記を主とした雜誌で、紅葉も流石に十號位で手を引いたやうであつたが、後の紅葉であつたなら恐らくこの種のものには應ぜなかつた筈である。

所で、この『讀者評判記』は內容的にも當時の文壇を諷刺したもので、『紅子戲語』よりも珍重すべきものと思はれるのに、今云つたやうに雜誌が雜誌丈に餘り話題にされぬのみならず、「紅葉著作年表」には何れのものにも洩らされてゐるのは遺憾である。尤も二十二年九月頃の「文庫」に『文盲句引草』といふのが見えるのは、或は同一內容の作かとも思はれるが、ひよつとすると佚文のまゝになつてゐるものかとも思はれる。（全集には無論收容されてゐない）

『讀者評判記』の五回に亙る內容といふのは次の通りである。

其一……………惣卷頭　文盲
其二　……　贔負
其三…………贔負の掛合
其四……………道德
其五……………穿鑿

以上で終つてゐるが、或は未だ書くつもりで、途中でいや氣がさして來て止めたものかも知れないが、後の『文學者と爲る法』（魯庵翁作）と前後して、過去の文學を知ると共に小說通には參考に資すべきものであらう。

最初の「文盲」に於ては、頭取、理窟家、通人、老人、半可通、法律家、ヒイキ、惡口、貸本屋、地口屋、雜誌店といふ顏振れで、紅葉の輕妙な與太を飛し合ふ。冠頭に、

頭取 扨此所いよ／＼評判記の始りといたして惣巻頭文盲丈の品評にとりかゝりまする。元來此丈は道化形 はござりまするがこゝもと特別の評義を以てと申すとどうか官省めきますが、惣巻頭の位に据ました。道化形が巻頭になると申すことは役者世界にはとんとない沙汰で厶りまするが、讀者世界は黒表紙の杓子定規では參りませぬ。

といふかき出しで、理窟家は、特別の詮議は怪しいから、其の理由を明言せよといふ。頭取はそれは此の道の禁句だから、判斷に任すと云へば、通人進行係りで話題を進める。甲論乙駁してゐる。

惡口 かうおいてくれ。文盲が小説を讀む日にや啞者が演説をすらア。夜臺の鮨で鯖でもよむのが御人體相應だ。ふりがなを頼みにして十二行二十五字をよみ下すのに小一時間もかゝつて、エー／＼とウー／＼の二三百も言て、中風患者が奥山の釣橋を渡る様に何だ見つとむれエ。此丈(ひと)の藝といつば小説を讀むのぢやれエ「ルビ」を逐つかけるのだ。活版屋でも聞いたことれエ新役。かういふ輩が世間にや多いよ「ルビ」は友を以て聚るつてエね。

そこへ、貸本屋と地口家が口を容れると、

半可通 それ／＼。惡黨の額へ墨をぬつて、傍へこの野郎と捨札を打つたり、美しい娘の腰下へいかゞはしい圖をかいて見たりして、さま／＼の惡戯をする俗物は卽ら是なりけりッ。こんな馬鹿をするほどの烏滸のしれものだから、作者が粉骨の碎身で此處ぞ大眼目と文を舞した所へ來ると下地ッ子が能狂言を見るといふ鹽梅さね。道成寺で鐘樓の石段を昇るといふ心意氣の足拍子を見て、オヤあのお姫樣は「しびれ」を切らしてるよの類でハヽヽ、恐れる奴ス。ここと唾をつけの四五枚一抓にひンめくつて平易處の拾ひ讀み、それであの本は筋がわからないの面白くないのッ。いはれた義理でげせうか。

最後に惡口家が、數枚と字數を勘定して、同じ定價なら崇高なものを求めるのだ。金剛石いふでも貴いことを知るま

いと皮肉る。そこで本章の主眼とする處を、與太の會話から離して「書ぬきに曰く」として別記してゐる。少し長くなるが、全文を轉載して置こう。

もし先日拜借の本は繪が少なくつてどうも面白くございませんね。其處へいくと何といつても昔のでしやう。一枚〳〵に繪があつて、字は讀まなくつてもそれちやんと繪を順に見ていけば、大尾まで筋が明らかに知れるといふのですから、昔の人はそれほど深切に出來て居る……なに繪ばかり喜ぶやうぢや初心だと……初心か油斷か知らないが、深切には違ひないなのう一言もありますまい。それに此頃の作者は第一無學だからいけませんよ。手紙が一ツ書けないと見えますわ……なぜだと……御覽なさいな、女郎の手紙見たやうに、口でいふ通りを書いてるぢやありませんか。へーエあれが言文一致……時代が違ふと不思議なもので、あれが今ではいゝといつて居ますかイ。あれなら譯やない、私にもかけさうだ、なるほどその言文一致とやらが流行る所から落語家のつゞき物までが新聞に出るのと見えますね。して見りや商賣柄だけあつて、まヅ圓朝なぞは言文一致の方での大將ですね。あとの作者はみんな三遊連ですか……さうぢやない。見識でああいふ風に書くのだと、西洋と交際すると見識まで違つて參りますかね。なるほどまヅ言文一致は見識とそれで了解たやうなもの〻、まだわからないのは「……」ですね。あれも見識……ホイさうではない。胡麻の調練か蚤のかげぼうかと思ひましたよハヽヽヽどの本を見てもべた一面の「……」だがあれがもし火の子であらうものなら、それ風上へ荷物をといふので大騒だ。へエーあれは言ひ足りない記標……喰ひたりないしゐなら瘠せませうハヽヽヽして見るとやつぱり作者の筆がまはらないから、言はふと思ふ事もいへないので、其處で言ひ足りないのと見へる。それにしても自分の至らないのを「……」としるして無學の看板を出さずとものことぢやありませんか今の狡猾な人に似合はない事だ。さうでない……はてネ餘情を持せるため……それぢや腹鼓をかいて八疊を持つしるしといふ茶番が出來ます。へヽヽヽ時に此本の中に百合子といふ貴婦人が居ますね。あの人の素性はどういふのでせう。そんな事は皆無書いてないからさつぱり物たりないやうだ。生國は何處で何者といふ事を明さないのは胡亂だね。ひよつとかするとかどわかしかも知れない。あの後は死ぬとも生るとも書いてないがどうしませう。死にましたらうか。御存じないと……私は此度

死ぬと思ふけれどどうだか知らん。一體此頃の作は人の生死がはつきり書いてないからおもしろくない。ありやアどうしても昔の様に形をつけてほしいもんだ、作物は芝居と同じことでつまり女子供の教草だから、女子供によく通曉やうに書いてなけりや小説の主意に背くといふものだ。

卽ち舊體小説を見なれた讀者から見た新體小説を擧げてゐるので、玆に於て紅葉は、新體小説の必ずしも終始一貫されて居らぬこと文體は言文一致體の至妙であることをそれとなく、新舊人の對話として説明しやうとしたものである。當時、言文一致は未だ創成間もないことで毀譽褒貶いづれとも定め難く、又「……」の使用を初めて試みた紅葉に對する、世の批難をも、紅葉はそれとなく説明したもので、共に明治文章史の參考ともなるべきものである。兎に角今から見れば誠に隔世の感あるものである。

第二は「贔屓」で、又頭取が、愛嬌の開山作者の守護神贔屓丈を紹介してゐる。今度は惡口、偏屈、板元、半可、水(すい)破抜(はぬき)、新聞通等が出て來て、作者に贔屓の效用如何を鬪はせてゐる。

〔贔屓〕（前略）まツたいひ足りない處はそれ相應に理窟をつけて、この七分目までかいて言潰した處が貰い餘音嫋々だの言外に意味があるのと、どうのかうの　天晴有難いものにしてしまふといふお家の一藝。ほれられた作者はうれしいか知らないが、文學といふ標準を置て見たら、喜ばしいことではあるまい。見識のある著者なら千羊の皮はそれ何とやら、夏のお小袖は少し恐れる事だらう。

〔板元〕（前略）手前方では高い原稿料を出して出版いたしましても、けして賣れませぬで、大に損をいたしますゆゑ。文章は何でも脚色はどうでも、人氣の澤山な、ヒイキの多い作者でなければ板元は承知いたしませぬ。

終りに「又書抜に曰く」で、説明の便をとつてゐる。

（これ角太夫昨日申しつけた「溝之流」を取寄せたか）

(はッ、御意にござります)

殿様は「一溝之流」をとり上げて、舊思想の角太夫に表紙の圖案に就て、著者の美術思想に富むは維氏美學の通覧によつたものと評し、活字、インキ、紙質、校正を賞玩しながら、本文を朗讀するに角太夫たまり兼ねて吹き出して笑へば、殿様忽ち氣色を荒らげて角太夫と口論に入る。この口論の原因は即ち當時創成間もない「言文一致」體の是非を諷したものである。

(何を笑ふ……いやさ何がをかしい)

(只今の文章が餘りにをかしくぞんじましたゆゑ、不思失笑いよしまして御座り……)

(だまれッ。貴様には此文章に非難をいふべき學識があつて非難をいたすのか。支那高麗の外の世界はポルチユガルにナランダ小人島女護島とばかり心得た量見にて……分を知らぬ白痴者め……)

(中略)

(だまれ。だまれ)

(いやだまりますまい。君には効なくして和漢洋兼學の名聲高くまします、あつぱれ賢君よと人々も御沙汰申し上げしがいかなる天魔に見入られたまひしが只今の如き稚兒の戯言にひとしき言文一致の邪道にまよはせたまひ……)

角太夫は元髻をピツシヤリやられて、引き下げさせられる。次は第三の「最屓の掛合」になつて、二人の女學生を點出して言文一致家（○）と、雅俗折衷家（□）との爭論になる。雅俗折衷は一名攘夷鎖港文章だ、世界の流行はわれわれが造るといふからには、舊弊を捨てゝ言文一致に改字せずば時世に遲れると説く、頑固女史は言文一致を邪道、婆天連文章、落語家の傍聽筆記、賣女用文で便利上なら兎に角、修辭上からは三文の價値もないと、目に角立てゝ排難五ケ修を擧げる。

第一　作文の下手がやつても襤褸が隱くせる事

第二　上顎と下顎とぶつかり放題を書て事が濟む、附腦病除の呪咀

第三　それゆゑ手間暇がかゝらない事

第四　同じ事を生醉が管をまくやうに幾度も〳〵繰返して長たらしく書いて紙をつぶすから苦勞なくして金錢になる事

第五　楊枝の頭で重箱の隅をほじくるやう事をくどくど書けば緻密な處を寫したと世間の馬鹿の喜ぶ事

そこで言文一致女史は、折衷派を時世の變遷を知らず、國粹保存熱にとりつかれて、野蠻人類の單純な思想を辛うじて發表しうる太古文章だ。粹保主義は維新後には用のない浪士と同じだと說き、

　意匠不周列＝謬致

　意味曖昧＝餘情

これが折衷家の虎の巻だらう、文章の奴隷になつて、折角の想も現はせないと罵る。

□（言文一致家は文章といふ事を知らないかして思ふ事あれもこれもとさらけ出して包括のないおちやッぴい。）

○（なに奴隷が）

で、女同志の喧嘩で幕。

舞臺が變つて、其四に於て頭取は三度目に道德丈を登場させて紹介する。曰く一時文學座では舞臺をソヽル事が流行して、愁嘆場でお姫様が裸踊を始るなど怪しからぬ事を、見物までが喜んだが、道德丈の嚴談で、お家の藝は流行に超越して來たとほめそやす。今度はヒイキ、生娘、息子、博學、地口、惡口、水破、知つた風、理學者、理窟、通人、多辯、老婆、腕力家、洒落者、女生徒、假聲家、苦勞性といふ大衆出場で賑つてゐる。

生娘はこんな苦虫が出ては小說も面白く見られないといふ。息子は又、此丈の様にやれ社會の德義を亂すの風敎に害

ありの、作者に道德の標準がないのと云ふが、自體が小説だのにと云へば、惡口は、心學とはき違へてゐるのだと半丈を入れる。多辯は男女相思を以て淫猥なり不德なりといふ日には、道德家先生は獨身を以てあはれなる生活を導くことを喜ぶものだらう、汝は淋しい一匹の蠅にも似てゐるといふを、水破拔、道德丈はその辯十五を頭に五人の子持になつては、なる程色氣もいやにならうと揶揄する。

腕力家は、小説界の大惡魔だから天誅すべしと云へば、酒落者によろしく女學校の取締に乗込ませたらと云ふに、女學生は福助のやうなプロフエッサアなら二名でも三名でもよいといふ。そこで頭取は、近來道德丈の人氣が立つて、若手のお弟子も澤山になつたから、文學社會に一大改良を及ぼすのは樂しいといふ。

苦勞性は、そうなつた日には小説と教育會の演説の區別なしになつて、廿四孝や西國立志篇の反案ばかりにならうと心配するのを、ヒイキ先生は、そうなれば歐洲のやうに小説を教科書にしても恥しくないと、道德丈を讃美して幕になる。

愈々第五の「穿鑿」丈になる。この丈は舞臺よりは樂屋の方が面白いと頭取は紹介する。この丈は「生た傳記」といふもので、數ある作者に一々交際をして居なければ、どうして〱かう精細に穴のしれやうはづがないと、ヒイキの云ふのを、

［水破拔］（前略）知つた風。見たか風。ふうたきい物語には每度ながらすゝろに齒の根の浮くを覺えずだ、表面には著者と兄弟分の交際ありと見せかけ、彼所の立案は賴まれて據所なく我がしたの、彼外題は我がつけてやつたのと俗物丸威したがる一癖で、內實は一度か二度も著者をおとづれた事もあつたが、每度今日は先生お留守の御多忙のと體のいゝ門前拂をくつてへこ刺倒れですご〱還る奴さ」

書拔に曰く、

いやまた始つたぞ小説論が。孰も辯論偏説瞽者が象を撫るの類だス。其方の隅で一人默然として何を御覽。ふゥむ「尾花袖」はア。なアる。大分世評が好いと寒酒白玉は玉にあらずッ。具眼はない物と見える。そりやア君お買ひなすつたの……馬鹿〳〵しは幾何します定價が五十錢で三十錢で賣る……ふゥむ五掛の卸だなそりや賣捌所が五錢の口錢を取るのだなッとこんな事は祕す可し。何いくら懸るものか。三千も摺る日にや十錢は懸るまい。ちよいと拜見。あゝ惡い活字だ。紙がよろしくないね。神戸の乙だな、四十斤といふ見當だらう。この賣價でこんな麁末な物を用ふなら板元大吉利市さ。へエ、曉のやがふゥむ昨夜三冊買つて來たッ。あれも頗る好者され。しかしよく惜くないよ高金を擲つて、へエ、昨夜は此小説ゆゑに徹夜をしたと……そんな事もなるほど有たッけ、其時分が小説もおもしろいのさ。君實に新著だといつて出る度々に買ふのは浪費だよ、浪費して功なしッ。ハヽヽヽ新著が見たくばいつでも僕の宅へお出でなさい。エほんにサ新著といふ新著の來ないのな恐らくないのですから。其を飛讀にして一々目を通さなけりやアならないから僕の身にもなつて御覽なさい。(中略)ハヽヽヽ成程民友社の書目十種は近頃斬新な思附でした時にまだ諸君は御存じなしだらうけれど著者仲間に「書目十種」といふ通言が專ら行はれる。その緣起いかにと尋ぬるに意味が二種ありです。二歩あつたら忠兵衛だと……此は〳〵。第一の意味は腹を見　るといふので、第二のは腹を見られるといふのだか此等は隨分出來た洒落され。此間日本小説研究會へ招ばれて行つた時なども、既にこの通言大流行で一寸穿つた料理が出るとこりやア幹事の書目十種だなぞといひます。なに雨のやふは書目十種を具て小説家の博學に驚いたと……フヽヽヽいやまだ淺い、山の井の淺き心を我は知る哉ッ。ありやアみんあ陰に離れ陽に外れた音さ。民友社から先生平常御嗜好の書目十種御指名云々といふ決鬪をつけられたものだから、夫、木葉作者は狼が狽を負ふといふ亂痴戲見もなか〳〵無殘なり。今日が日まては反譯書を坐右にして獨逸のゴエテの詩だ事の、英のしやアくすぴイゐの院本だ事の、露のづるげェねむの寫眞小説を模擬に致し候の、佛ではそオらさなど、二叉大根の挿繪を喜んでおれがおれがの六ケ月間速成著者は極月が急に小になつたかのやうにまごついて、驚破讒着一身の安危まさに今日に在り命を天に任せどうがなして一方の血路を開いて見やうで透　られ　けは透る算段、弱身を見せたら追擊をやるであらうと百計盡きて奮を挫した智謀から案じついて、和漢洋兼學と見せて荒膽を挫　て

くれんと東西南北四面八角に奔走して、何でも人の知らない珍重があらば青緡百貫文を以て買むといふ鋭氣で百方探索さ、しかしこれでもない所から怱々究して實物は持参に及ばずといゝから責て外題だけも知りたいといふので、東京圖書館の目録が百部賣れて、丸善　出した一かれンだア」ばかりが五十三部としてある。

殺におかしかつたのは僕の家へしげ／＼往來する著者だが、目には一丁字もなしと思ひ給へ。しかし天晴な演喝家たから世間らやア羅馬の丼前風からばびろんの刀劍考までしらべたやうに吹聽する男だが、今度といふ今度はいよ／＼假面がとれるといふので十種の内五種は洋書目にして出したからの心願さ。拾ひ書に書きあつめて見たから何分御校閲をと書目を見せたがいやはや絕倒。ハツハツハツその顏觸はまづかくなむ。

失名氏著　あらびあん　ないと（但英譯）但英譯がはゝハツハツそれからが一層いゝテ、

すこツと氏著　れエき　おふ　ぜエれでイ

これぢや「美人の湖」になるツ。此なら嗜好の中に事新らしく書立ずとよさゝうなものだが、よく／＼の御好物と見えると言てやつたス。それから和書の部を見ると「群書類從」が先陣に書いてあつたがあんまり人を馬鹿にした話さ。漢籍門に莊子とあつたから此奴讀めもしないにと思つて莊子は「郭注」ですかと聞いてやつたら傲然として「田舍」だといひ廣つた。して見ると前の「群書類從」は恐らく「群書一覽」の誤謬だらうといつて後で大笑ひをしたツ。

これで終つてゐるが、この最後の一章は痛快に辛辣的なもので、一貫されてゐる諷刺內容は到底「紅子戯語」の比ではない。要するに、生國から說き出して萬事めでたし／＼に終らねばならぬ式の舊體小說讀者に對する、明治小說の啓蒙教科書であり、新文體の說明をもかねたもので、過渡期の當時としては作家としても默視するに忍びぬもの、そこで生來勝ち氣な紅葉のことであるから、進んで憎まれ（その頃としては）役を引きうけ、大に辨難と皮肉に努めたものであらう。只、前にも云つたやうに地方雜誌に出したが爲に、反響もどうかと思はれ、その年表にまで洩れて仕舞つたのであるが、混沌開明期の一役を買つて出た紅葉山人の爲、頌德表を捧げてやつても然るべしだと思ふ。但し地方とは云

へ、當時の大阪は出版物の勢力も東京と相伍してゐた時代であつたので、强ち地方出版として輕視するにも及ばないやうである。

尚、右の最後の章に書目十種云々とあるのは、その頃雜誌中の權威「國民の友」が第四十八號（二十二年四月廿二日發行）で、諸名家の愛讀書十種を募集發表したものを指したので、紅葉の比喩を實際的に知らうと思ふものは同誌に就かれたら、又新らたな微苦笑も自ら湧き出るであらう。因に、同誌へ當時文壇方面の囘答者は石橋忍月、二葉亭、紅葉、大西祝、依田百川、坪内雄藏、中村正直、内藤耻叟、内田貢、山田美妙、福地源一郎、饗庭與三郎、森田思軒、須藤南翠等であつたことを附記して置く。（二、三、八）

人力車

大路ゆく車も今はうし車らでうちある人の引世なりけり

女教師

時めけるこれやをしへの師なるらむをみながらも我はがほなる

——開化新題歌集（明治十一年）より——

開明期の大阪と東京文壇

三品蘭溪

明治十八年の初夏、私が大阪へ行くまでの、初期文壇餘話は、貴誌昨年の四月號へ粗ぼ盡させて戴きました。今回は當時の大阪と、大阪から見た東京の文壇とを、成るべく簡單に陳べて、貴囑に應じたいと存じます、宜しく御取捨を乞ふ。

大阪は名に負ふ大近松や西鶴の出現した、元祿文運の發祥地であるから、尚ほその餘彩を曳いて、相當に文學愛好の士も多からうと思つてゐた私は、着阪して見て、大いにその期待を裏切られた。それは同地が、いつの頃からか、全く商業地化し、文學などいふ方面には、殆ど無關心に觀じられたからであります。

私の聘された此花新聞といふのは、本社が東區内本町に在り、極めて小規模なもの、發行紙數も僅々三千ぐらゐ、記者としては、金子錦二、吉田香雨の二氏がゐた。（金子氏は越後の人、別號を可猫散史と呼び、漢詩や狂態詩を善くし、別に鐵筆彫刻の餘技もあつた。後に、京都の日の出新聞創刊の際入社し、後年幽禪考などいふ有益な著書もあつた）そして新聞社としては、此花の外、唯だ僅かに大阪朝日と大阪日報と、この二社に過ぎなかつた。

○

挿畫のある、東京の各新聞が、情話や俠客談などを、唯一の呼びものとしてゐる間に、演劇風の續き物を綺截して、それを直に、道頓堀の劇場で演出させるやうにしたのは、何といつても、大阪朝日が先頭であつた。岡野半牧（武平）宇田川文海（半痴居士）の兩君が主任となり、部下として、槇野半醉、和田半黯、奥村柾兮（大頭褸愚樂人）佐伯某、中

村某等これに屬し、各自その得意とする場面を執筆することになつてゐた。「巷説二葉松」とか、「朝櫻大和魂」などが夫れで、前者は名古屋藩に起つた、勤王佐幕兩派の軋轢を材料にし、後者は京都を舞臺にした、勤王志士の活躍である。斯うした趣向に乘せられて、私なども着阪早々岩倉公の事跡（秋津洲勳鑑と題して、院本風に書いたもの）や德島藩と稻田家との、衝突事件なども書いて見た。大正、昭和の近年、「幕末秘事……」とか「幕末秘錄……」とか、如何にも物臭い題號を掲げて、その實西洋探偵ものゝ燒直しや、草双紙の換骨奪體を平氣でやるのとは、そこに幾分かの相違があつた。何しろ惟新後、未だ年數を經て居らぬ、目前にその事實を視て來た古老達も多いから、爾う木に竹を繼ぐやうな虛妄も書きかねたのである。

淡路（稻田家）事件にしても、家老に三田昂馬といふ人があり、これが京都の有栖川宮家の大奥へ、自分の娘を宮仕へさせて置いた關係で、一躍本藩の蜂須賀家を超え、勤王各藩の列に伍した。これを本藩の一部軍隊が憤慨し、不意に洲本を襲うて暴行に及んだ。三田はこの擧を探知し、前夜闇みの海岸から漁舟を泛べて逃れた。「今みた昂馬が、モウ直ぐ居ない」と、翌朝口さがない童どもに謠ひ囃されもした。事件は暴行の主謀者等が切腹、稻田家は北海道の靜內へ移封されて落着した。

マア此樣な手近い事實を材料として扱ふので、實感的に讀者にも喜ばれ、これなども老優民藏、延若等一座が、道頓堀の中座で演出した。そして斯ういふ脚色ものが、丁度四十餘年後の今日、「大衆文藝」と名を替へ、復讐談や劍劇として、讀者の嗜好を得てゐると同じく、可なり長い間、愛讀者を保持して居た。

その內に、此花新聞は本社を道修町のやゝ手廣い家屋へ移し、ロール機も數臺を增置し、紙數一萬を突破する迄に發展した。

○

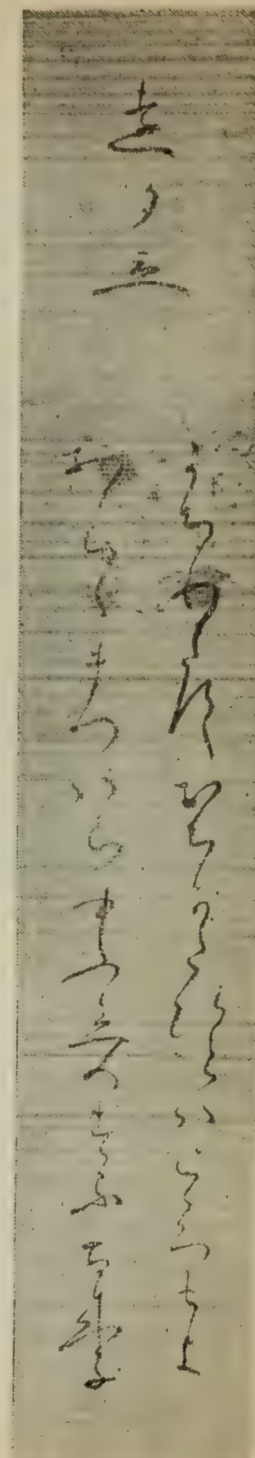
明治十九年の秋、同地方に二日續きの大洪水があつた。橋といふ橋は、最後の端建藏橋一つを殘して、悉く墜落し、中の島の朝日新聞社などは、四面忽ち水に浸され、止むなく一日休刊するに至つた。

この反動で、此花新聞の名が、廣く近畿にまで知れわたるやうになると、其處は機を見るに敏な浪花人等の事とて、社主側では早くも社を株主組織にし、此花を日本給入と改め、宇田川文海君等一派をも朝日から奪取し、それに從來の古川魁蕾、吉田香雨、久津見蕨村（名は息忠、昨年蕨村全集の發刊成る）香川蓬洲、三品藺溪等を併せ、且つ畫工には歌川國松、後藤芳景、林基春等の顏觸れも加へ、この陣容を以て、同年十一月三日の天長節をトし、中ノ島の自由亭へ府知事を初め貴賓數百名を招待して、一大盛宴を張つた（當日の紙上には東京各大家の祝文や祝辭を載せた、その中には杉浦重剛君のや、假名垣魯文翁のもあつた）そして翌朝同亭の前へ、幹部員一同整列して、紀念撮影をもした。

霞城山人中川重麗君の入社は、これよりずつと後であつた、而も此社は永續せなんだ、それは、數年前に、大本教を擔いで生れた、彼の大正日々が、尾大掉はずして、幾干もなく倒れたと同じやうに、彼れもこれも、皆な同一渦裡の泡沫として消へ去つた。

○

日本給入が無期休刊になる前、大阪日報の持主岡崎高厚君の手に據つて、靑紙の浪華新聞が發刊され、記者として東京から坂崎紫瀾、野崎左文の兩君が來られた。然し坂崎君は程なく去られ、次で私が入社し、左文君と暫く同社したが、左文君も神戸の方へ移られ、その跡へ矢張り東京から小宮山桂介（天香又は即眞居士、別に素園、間來子等の各號あり）岡田茂馬、多田直勝の諸君が來た。これで暫く續いたが、大井憲太郎氏等朝鮮事件の豫審調書附錄に祟られて長期の發行停止に遇ひ、この新聞も、岡崎君の手から、遂に神戸の豪商兼松房次郎といふ人の手へ渡つた（現時の大阪每日はこれを前身として改題したものに當る）これより先き、小宮山君は朝野新聞へ復歸し、岡田君も改進新聞から聘さ



小宮山桂介筆

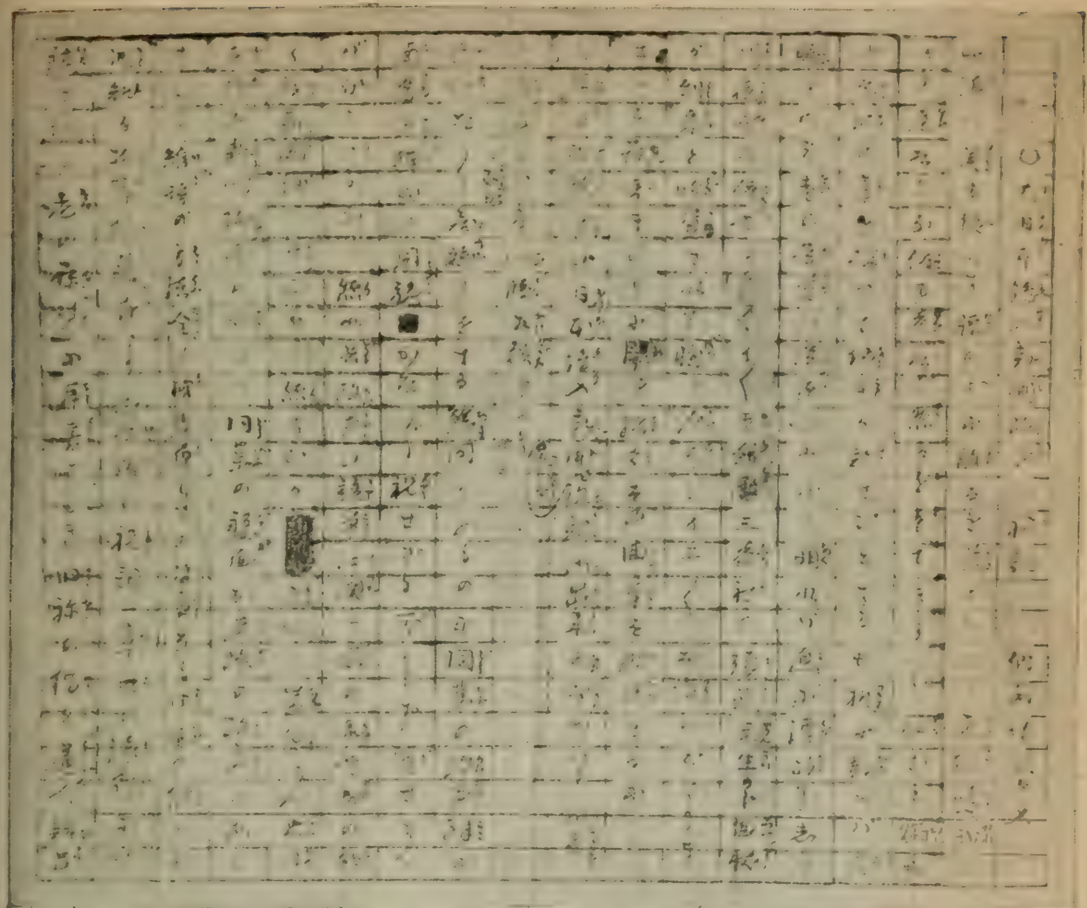
れ、相前後して歸京された。

私は來阪早々、草間天葩君の紹介で、小宮山君には面識を得てゐた。同君は明治後既に世間からその名すら忘れられてゐる。而も初期の文壇を飾つた、その才藻は、決して他に遜色のあるのでない、均しく敬意を拂はるべき價値あるに拘らす、全然等閑視去られてゐるのは遺憾だ。因つて僭越ながら、聊かその事績を述べて參考に供したい。

同君の家は、祖先來水戸藩の儒官で、祖父昌秀（楓軒）君は侍講から郡奉行等に擧げられ、治績著しく、大正七年十一月正五位を追叙せられ、家兄南梁君は、內藤恥叟翁と共に、水戸の古老として知られ、慶應義塾の講師たり、又德川十五代記の如き、有益な著書も多い。

さて、私が初めて君を知つた頃は、大阪日報にあつて、河津祐之、草間時福君等と共に執筆して居られた。その以前の事歴は能く知り得ないが、何でも朝野新聞を出發點として經驗を重ね、來阪後は、津田貞君等と初期の朝日新聞を經營し、後に大阪日報へ移られたのだと聞いてゐる。

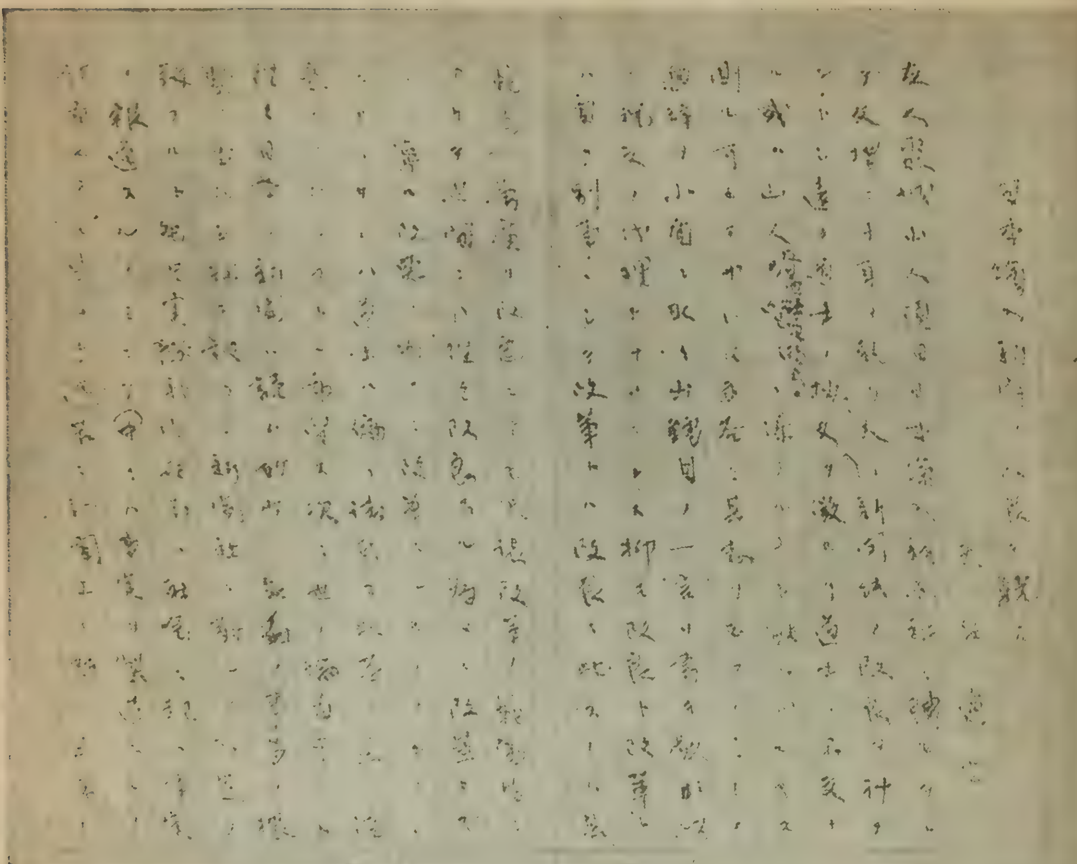
その頃、同日報紙上へ、河津君（佛蘭西學者の法律家で、後に大審院檢事長や、遞信次官に歷任した）が、佛國革命を背景にした、一烈女の壯烈譚を譯載されてゐたが、中途にして同社を去る事になり擱筆した。それを小宮山君が繼承



假名垣魯文翁筆

して完成せしめ、書肆前川源文館（？）から發刊したのが、當時彼の讀書界を驚した「斷蓬奇縁」であつた。

浪華新聞を辭して歸京した後の君は、一時絵入朝野の編輯を主宰してゐた 金港堂から單行本で「涙の谷」「歎の垣」を刊行したのは此頃であつたかと思ふ。この書は異色を帶びた寓意小説だが、世評は區々であつたらしい。次で改進新聞へ連載された「聯島大王」や、征台軍を背景にした「看護婦」なども出色の文字として迎へられ、新小説(第一期)には「不知火」「花扇」等の長篇あり、朝日紙上にも、朝鮮の小説を、なだらかな和文に譯したものが載つた。世間では餘り注意せなんだのを、彼の皮肉家の緑雨君が例の短評で「盲目千人、世人は唯だ名によつて採るのだ」と、憤慨された事もあつた。



天臺道士筆

東京朝日へ入社後は、小說方面よりも、評論、隨筆、紀行文などに縱横の健腕を揮はれた。特に繪畫評に至つては、玄人筋の稻野年恒畫伯をして、舌を卷かしめたこともあつた。

和歌は鈴木重嶺翁を宗とし、優に一家格をなすべく、天台道士杉浦翁なども、時々諷詠を寄せて添削を乞はれた。漢詩の方では籾山衣洲（逸也）君と常に應酬を重ねてゐた。又その門下からは、岡田翠雨君（故右田寅彦君等と共に、艷筆家として知られた）あり、先年大朝社を退き、今は播攝間の勝地に住し俳諧俳句などに、閑日月を送られてゐる。他に俳人渡井菊坪、茶匠岡本洗耳等もその班として數へられる。

然し、君は餘りに潔僻に過ぎ、苟も世俗と迎合するを好まず。殊に退隱後は、曾て親交あり、寧ろ推重してゐた、篁村、南翠兩君と

も、力めて疎隔になつた。況して普通の知人をやである。この點は、彼の德富蘆花君が、好んで世俗と隔絶するに酷似してゐる。但し蘆花君には、夫婦愛の凝結をもつて、慰安とするものがあるらしいが。君にはそれもない。

唯だ月明の緣端、細雨の窗前に、瀟洒な一面の一絃琴を取出し、靜かに撥き鳴すくらゐを唯一の樂しみとしてゐた。「一生不レ受紋々物。亦是當年忠潔公」斯うした眞純の潔僻は、遂に人をして淸教徒かとも思はしむるに至つた。これが卽ち遠く世間と隔絶するに至つた眞因である。

私のやうな、何の貢獻もない者ですら、貴誌によつて、その存在を認められた今日、兎にかく先輩として推薦すべき君の如きが、全く遺却さてゐるのは、文化史研究のためにも本意とはいひ兼る。尠くとも當代の奇人として、傳へられん事を切望する餘り、つい斯う冗長になつた段は、幾重にも御寬恕を願ふのである。

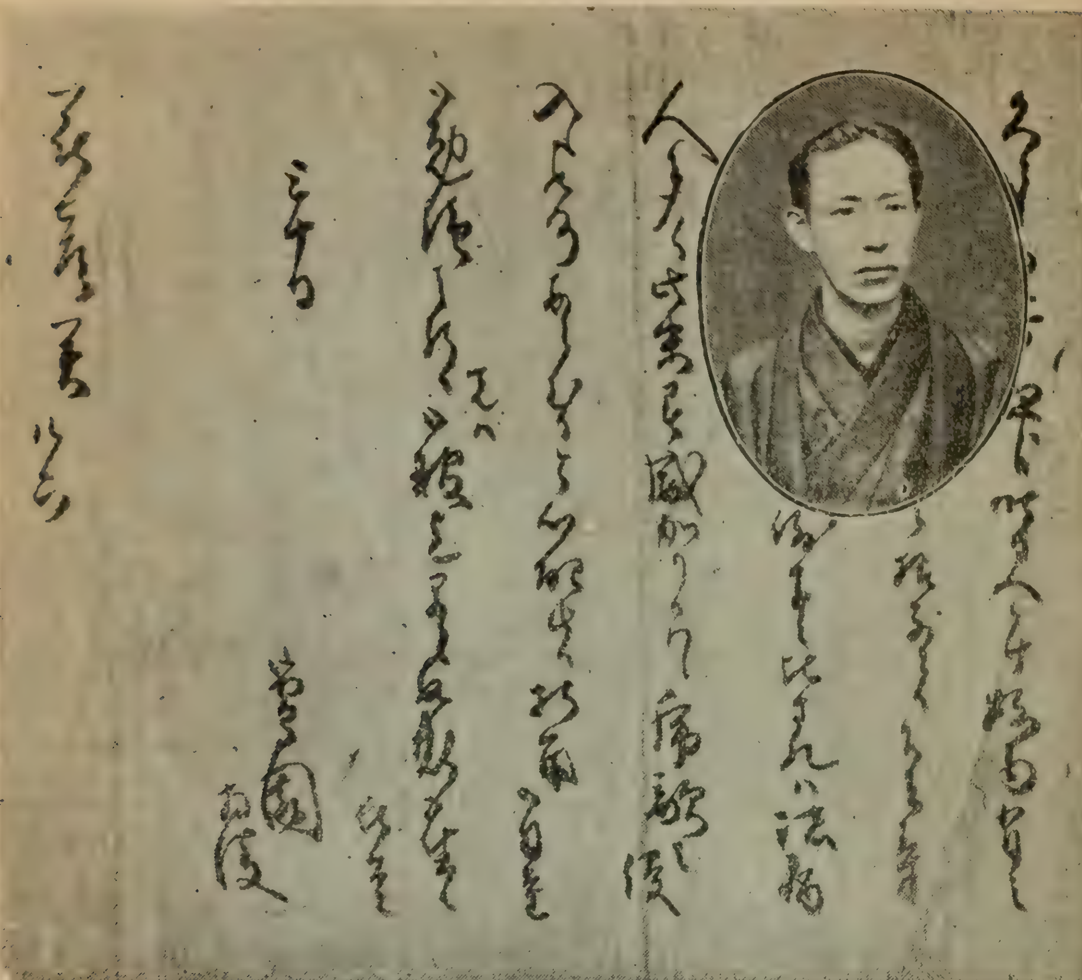
○

浪華新聞の組織が變更した際、宮崎富要（夢柳）君や、羽山尙德（菊醉）君が入社した。

宮崎君とは、爾ぅ長く同社せなんだが、一つ二つ思ひ出語しがある。少しく自分の事に關するので恐縮ながら、序でに書かせて頂く。

神戸に居られた左文君が、鐵道の事を材料にした、目新らしい小說を寄送され、世間の評も極めて好かつた。が、交通不便の頃とて、二三日雨でも降り續いて、鐵道に故障が起ると、直に郵便が遲達する。時には全然達しない事も尠くなかつた。

或る日締切間近になつても、肝腎なその日の小說が來ない。編輯主幹の矢野とかいふ人が頻りに氣を揉む。宮崎君も一寸と當惑の態で私に向ひ『君、甚だ御無理だが、何とか間に合せてくれませんか、二三十回ものでも好いから』と相談された。時計を見ると、モウ四時過ぎてゐたが、何れにしても、拙ないものしか書けない私の事だから「何の構ふも



前田鶯園の筆蹟と寫眞

のかッ」と、向ふ見ずにも、直に下畫をつけて、間に合せた事があつた。

ところが、これが因を爲して、東雲新聞創刊の際、同社へ移られた宮崎君が、發刊二日前の深夜、北濱に住んでゐた私の宅か、氣たたましく叩き起された。何ごとが出來したかと、不審しながら起床して尋ねると、畫工の藤原信一氏と、顔見知りの版木やも同伴で「君、今夜は强談に來たよ、否應いつても承知しない。實は中江（兆民君）のとこの書生が、今度の小説を書くことになつてゐたのだが、いよ〳〵今日になつて見ると、迚も駄目なんさ、そこで中江からも、君によろしく賴むとの傳言だよ、畫伯の藤原君も來てゐるから、サア直に下畫をつけてくれたまへ、イ、エ、出來るのを知つて來たん

さ、是非引受けて下さい」と、たう〳〵押しつけられ、歸京した後もこの關係で、可なり永く、小說寄稿を續けてゐた事もありました。

私の在阪中は、要するに、總てがこんな工合で、新らしい文學の氣運とか、藝術の曙光とかいふやうなものは、まだ〳〵何も芽ぐんではゐなかつた。新聞社側を外にしては、僅かに團珍投書家連の一派か、雜俳とか冠つきとか、そんな低劣趣味に、浸つてゐるくらゐに過ぎなんだ事と思ひます。

×　　×　　×　　×　　×　　×　　×　　×　　×

大阪から見た中央文壇――少し誇張に過ぐるが、その頃の東京情報は、前田曙園、須藤南翠の兩君から、絕えず通知して下された、又た新聞上にも深く注意してゐた　けれど、新日本（尾崎行雄君著）や、雪中梅、花間鶯といつたやうな政治小說ものに壓倒され、一方には骨皮道人の滑稽演說集などが幅を利かせるのみで、他のものは極めて振はなかつた。唯だその中で、讀賣新聞に連載された、加藤紫芳君の「鍛鐵場主」および「椿の花束」の飜譯ものと、改進新聞に出た、南翠君の「綠簑談」などが際立つて見られた。然し可笑い事には、この二書とも、肝腎なお膝元では、單行本にすら出版されず、反つて皆な大阪で出版されたことである。

○

此花新聞に關係のあつた、日野寒柳といふ人が、早くも「鍛鐵場主」に目をつけ、「これを出版して見ようと思ふが如何でせうか」と私に尋ねた。私は直に贊成もし慫慂もして、早速出版させた。同書の奥づけに「出版書肆、大阪東區道修町日野商店」とあるのがそれである。

又た「綠簑談」の方は、これも大阪の書肆大村安兵衛といふのが上京の際「是非あれを出版したいから、須藤君に紹

介狀を頼ひたい」と或る知人を以て頼んで來た。私は快く承知して、須藤君へ紹介し、それで同書が出版される事になつた。

○

今少し立入つて、此間の事情を陳べて見たい。現今では原稿料一回分三十圓乃至四五十圓といふのも珍らしく無いやうだが、僅か三四十年の既往に遡ると、この「緣簑談」一部が版權までついて、タ



明治十七年此花新聞改題日本繪入新聞祝宴翌日撮寫前列左端より六人目宇田川文海。後列右端畫工後藤芳景其次歌川國松。一人おきて和田半點。次香川蓬洲。前列左端三品蘭溪。次ぎ古川魁蕾。

ツタ二十五圓で讓渡されてゐる。これを見ても、如何に當時の操觚者が不幸であつて、現代の文士諸君が幸福であるかゞ窺はれ、眞に今昔の感に堪へぬものがあるではないか、而もこの書肆大村は僅かに手金丈を渡し、容易に出版せぬので、須藤君から屢次懸合方を頼まれ、その往復書翰なども今尙ほ保存しをり、時に追憶を深甚ならしむるものがある。

○

その頃新聞に現はれる、文學趣味といへば、

何といつても、坪内先生と饗庭篁村君とが、交互に健筆を揮された、讀賣新聞の外にはなかつた。「粹教の活用」といふ雜錄文の緒言などは、實に金玉の文字、皆な玲瓏の響きあり、今にして尙ほ愛誦措く能はぬものがある。又當時、如何に小說界が不振にして、生硬な政治小說が跋扈したかは、左に摘載する、白雪山人（篁村君の假名）の諷刺文にても首肯が出來やう。

（前略）山人雪の日の炬燵辨慶に、小說厄運など丶疲馬に勝つた荷を持出し、人は聞かじの太平樂を並べしに、有難くも臨將軍の御目に觸れ（中略）山人は只政治小說の祈り過しを恐る丶より、チヨツピリ世間のヂスレリー氏に御忠告申し、兼ては將軍のお救ひを仰がんと存ぜしなり……終りに臨んで頼み奉るは、今滿天下小說の眞味を知らず、筍を捨て靑竹の煮付を賞翫する此時に方つて、狂瀾を旣倒に返すものは、將軍を措て抑も誰ぞや、仰ぎ願くは神通廣大の筆を執つて、衆生を濟度なし玉へ、吾佛、吾佛。

政治小說中最も多く讀まれた、雪中梅、花間鶯についても、こんな一笑話がある、篇中に出る婦女の對話が、如何にも巧み過るので、誰れいふとなく、「あれは代作だ」との噂さが立つた、素より磊落肌の著者の事とて、直ぐこれに對し「如何にも爾うだ。婦女子の言葉などは、餅やは餅やだから前田君（鶯園）に訂正を託したのだ」と自白された。饗庭君が憤慨された彼の諷刺文も、斯うした政治ものが一時文壇を風靡したからであつた。

○

私が大阪から見た、明治二十年前の東京文壇は。と、いへば、マアこの位ゐなものに過ぎない。以上はまことに取留めもない、管見に過ぎぬながら、少くても御研究上、參考になる點があれば、此上もない本懷と思ひ、敢てくだ〳〵しい繰言を陳べました。汗顏に堪へません。（了）

川島忠之助傳

柳田泉

引

川島忠之助氏の名は、明治初期の飜譯文學を一瞥したことのある人なら必ず知つてゐる筈で、實に川島氏は明治十一年の『八十日間世界一周』ジユール、ヴエルヌ原著）、明治十五年の『虚無黨退治奇談』（ポール・ヴエルニエー原著）の譯者、明治初期の飜譯文學界の先覺として、フランス文學紹介に口火をつけた一人として明治文化研究家に當然その功績を記憶されて可い人である。然し專門の文人でなかつたので、その傳記なども今迄研究家の間に知れてゐなかつたのだが、わたしが下手の横好から深入りしていろいろと明治初期飜譯家の傳記などを調べてゐるうち、偶然な機會から川島氏の現存の人物であることを知り、氏に面談を乞ふて種々その閲歴を話していたゞき、あまつさへ氏の略傳を自筆で認めてさへいただいた。今度早稻田文學が明治文學研究の追加號を出すのを機會に、氏の傳記を草して同好の士の研究資料に供する。

本傳は川島氏自筆の略傳に、わたしが氏から直接伺つた談話を參照して僭越にも取捨增補を試みたものである、專ら事の直な旨としてみだりに文飾を加へない。若し敍事に誤謬があればわたしの記憶違ひか聞違ひのためである。諒察を願ひたい。

一

川島忠之助氏は嘉永六年五月三日の生れで、今年七十五歳、生れたのは江戸本所外手町であるから當然江戸子なのだ

が、次に述べるやうな事情から只今では千葉縣浦安の人となつてゐる。父君は川島奧六知脩（おくろくともより）といひ、舊幕府御料所手代（幕府の直轄地方郡代又は代官に隷屬する身分の輕い小吏）で、氏はその末子である。當時父君は代官增田作左衛門の配下に屬して江戸詰であつたが、方々の遠國勤務が厭になり又健康も思はしくないところから、一時名代を立て、役を辭し、下總葛飾郡行德在の浦安（字猫實）に川島氏の名義で數畝の田地を購ひ、傍ら地引網の漁業を始めて、半農半漁の生活に隱れんとした、これは川島氏の三歳の時であるといふ。それ迄家族は矢張り江戸の家にゐたのであるが、いよいよ仕事が落ついて、これならといふので家族を浦安に迎へようとしたときに、丁度安政四年の大暴風で、折から起つた海嘯のために、家屋はいふまでもなく漁船漁具の一切が流失した。ところが惡い事には件があるとはよくいつたもので、一方父君の名代を勤めてゐた川島氏の從兄弟に當る人が、公金の引負を拵へるといふ始末、それで父君も我を折つて再び役人に歸ることになり、當時新に飛彈の高山の郡代に拔擢された增田作左衛門の手に屬して高山に赴任したのは、安政六年である。川島氏も父君に三四箇月遲れて兄君、姉君などと共に高山に赴き、慶應二年十四歳の春まで同地で成長した。生長と同時に教育といふことが考へられるが、それは士分必修課目たる漢學が主



少壯時代の川島忠之助氏

であつたことは疑ひがなからう。此の年父君が病死されたので、家族一同江戸に引上げることになり、川島氏も江戸に歸つた。元來父君は漢方の醫術を好み、求める人があれば投藥などしてゐたが、一つには當時世間が穩やかでなく次第に險惡に赴いて行く風が見えるのを察して、二人の男子を士籍に置くことを望まなかつたところから、末子の川島氏には醫學を修めさせようとの意志をもつて居られた。然し當時高山のやうな土地では却々醫學の研究など思ひも及ばないことであつたから、遂に果さなかつた。江戸に出て間もなく兄上は家を浦安に移して、浦安の舊田地を耕作し、川島氏にはその名義代として若干の修業費を呉れるといふ事になつた。川島氏も江戸に歸つた始めは、父君の遺志通り醫學でも研究するつもりであつたらしいが、世間の騷々しさに何等纏つた學問をされる暇もない。そのうち間もなく明治維新となり、德川幕府の瓦解となつた、これが川島氏が十六歳の時に當る。

二

明治元年の末に川島氏は、製圖工見習といふ名目で横須賀製鐵所（造船所の前身）に入つた。これは氏の今一人の從兄弟中島才吉氏の慫慂による。初め幕府當局はフランス公使の忠言に從つて文武兩方面にいろいろな改革設備をしたが、その一つに横濱語學所といふのがあつた。これは一見フランス語を傳習する學校のやうに思はれるが事實は單にそれだけではない、人材養成を目的とした一種の陸軍士官學校に外ならなかつたのである。教師は皆フランス政府から派遣された陸軍士官で、生徒は何れも幕府旗下の有爲な子弟ばかり、こゝを卒業すると大抵幕府の陸軍の士官となる。中島氏はこの語學所の出身で、砲兵指圖役まで昇進した人であるが、幕府瓦解、明治政府樹立に當つてその習得したフランス語が役にたち、横須賀製鐵所の通譯をつとめてゐた。横須賀製鐵所もフランス公使の忠言による幕府の設備の一つで、名は製鐵所といふも實は海軍根據地（鎭守府内にあつた）であつて、こゝでフランス海軍士官が幕府の傳習生とい

ふもの（二十名位）を教育してゐた。（然し此の傳習生は明治になる前に解散した）此の製鐵所は明治政府の管轄に歸したが、然し長官から技師長に至るまで依然としてフランス人であつたから通譯附でないと用が足りない、通譯の勢力が却々あつた、中島氏が此の通譯の一人だつたわけである。此の中島氏が、川島氏が幕府瓦解にあひ・浦安あたりに逼迫して途方に迷つてゐるのを見て、それでは横須賀に來い、自分が世話をするからと勸めた、そこで川島氏は波りに舟と（内心はともかく）横須賀に行き、中島氏の斡旋で同製鐵所の製圖工見習となり、フランス語の勉强に熱心し、旁ら英語を修めた。此の時の製圖掛長のフランス人某は幕府時代傳習生を預つたこともあつたので、見習工でも職工として待遇せず、宛も幕府傳習生の復活した一人のやうに親切に取扱つてくれたといふ。

明治二年、語學練習のため、見習工をやめて横須賀から横濱に出で、フランス人の齒科醫某の許に使丁として住込んで苦學した、何れ誰かに傳手を得たのであらう。同三年の春になつて明治政府が第一回の傳習生を募集したので、氏はそれに應募し、首尾好く選に當つて造船機械科に入つた。氏の直話によると、傳習生時代は天性數學に鈍く手先無器用なので、大に困難したといふ。此の數學に鈍い氏が後年銀行家として令名を馳せたのだから、世の中は面白い。

明治五年、いよいよ傳習生々活を終つて官途につき海軍省十五等出仕（判任最下級）を拜命して月給拾二圓貰ふことになつた。氏の實地の仕事は鍛冶、製罐、造船であつたが、矢張り此の無器用に累されて役に立たない。これではならぬ、いつそ一思ひに止めようかと思つても勝手にやめるわけにも行かず、内心頗る悶々としてゐると、これを知つた從兄弟の中島氏は、今度も又川島氏のために恰好の行先を探してくれた。中島氏は此れより先横須賀から轉じて神奈川縣廳の通譯になつてゐたので縣令陸奥宗光とは親しく知合つてゐた。ところが此の頃陸奥氏は大藏省の租税頭で羽振が好かつたので、中島氏から陸奥氏に川島氏の事を話し、何とか仕つて貰へまいかといつた。當時の大藏省の範圍は廣いもので内務の一部、農商務の全部、その他までその管轄に包含してゐたものである。恰もよし、明治政府は上州富岡に製

絲場を建て、外國人(フランス人)を經營主任にして、此の五年の初めに機械の運轉を始めたばかりのところであつた、此の製絲場が陸奥氏の管轄であり、又實際フランス語通譯が必要なところから、陸奥氏の聲掛りで富岡製絲場の通譯になつた。然し海軍省の方では勝手に止めるのは宜しくないといつて、大藏省の方へ遣つてはしまはず、仕方がないからたゞ貸すといふ名義にし、それで大藏省租稅寮雇といふことになつて富岡に赴任した、これは明治五年の春だといふから、製鐵所には眞の暫時よりゐなかつたものと見える。富岡の方は月給三十圓。

富岡には一年半ばかりゐた。此の間職務が職務だから富岡に來たいろいろな公人私人と知合つたらしいが、就中當時の大藏省三等出仕澁澤榮一、小野組糸方の番頭古川市兵衛、横濱の絲商龜善(原善三郎)などを尤なるものとする。殊に澁澤氏とは、氏の從兄弟の澁澤喜作(前の障義隊々長、後租稅寮七等出仕)がイタリヤとフランスに養蠶取調に出張したとき川島氏の從兄弟の中島氏を通譯に伴つたやうな關係もあつて、單に上官下僚間の一面識といふだけではなかつたらしい。

三

川島氏の自筆略傳によると、「翌年秋初全ク官海ヲ離レ某商會ニ入リ佛國ヘ渡航ノ筈ナリシガ偶々此事中止ニ至リシニヨリ身ノ自由ハ得タレトモ風來人トナリ果テ」云々。氏が富岡の通譯を止めたのは明治六年秋の初であるが、これには理由がある。此の引用文中某商會といふのは小野組のことであるが、小野組は吾が國の養蠶製絲が日々に盛んになるのを見て、海外直取引に着眼しいよいよフランスに糸店の支店を置くことにし、その支店長には最近ヨーロッパ養蠶の本場を視察して來たばかりの澁澤喜作氏を宛てる筈であつた。そこで澁澤氏から、何うだ、通譯としてフランスに行かないかといふ相談が川島氏にもちかけられたので、川島氏の意は大に動いた。それで海軍省の方は病氣と稱して免職にし

てもらひ、租税寮の方は好意上、雇をよろしいといふことになつて、もうすつかり官途から足を洗ひ、フランス行の日取の決定を待つてゐた。ところが好事魔多し、その出發は延期になり、遂に不可能に終つた。當時内情が分からないので、途方に暮れたが、段々聞いてみると大體次のやうな事情が伏在してゐたのである。

元來小野組は三井と並んで明治政府の公金を預り、それによつて手廣くいろいろな事業を經營してゐたのであるが、此の頃に至つて兩家とも度々不謹愼の所行があるので、政府では、公金に對して擔保を入れさせること、擔保を入れることが出來なければ公金を取り上げることといふ内議を決定した。然るに三井では此の事を逸早く嗅ぎ出した（何れ井上馨公あたりからだらうが）ので、急に地所の値上をやつた。それで三井は助かつたが、そんな事を知らない小野組は擔保を入れることが出來ず、遂に潰れてしまつた、當然フランスの支店どころの話ではなかつたのである。だがその小さな飛沫が川島氏にもはねかゝつて、氏は月給を棒にふつた、而かも海軍の方からも拾貳圓がそのまゝ入つてゐたから月給を二つ一時に棒にふつたのである。これは成る程痛かつたらう。是は明治七年のことである。

かういふ譯で暫時「風來人」として身の振方を考へてゐたが、禍福は糾へる繩の如しといふやつで、矢張り富岡が縁になつて、そのうち横濱の蘭八番商館に番頭として入ることになつた。それは、富岡製絲場の主任をしてゐたフランス人ブリユーナアといふのは、もと横濱蘭八番館のシルク・インスペクタア（生絲檢査係）をしてゐたので、此のブリユーナアが川島氏の失意を聞き、蘭八番の主人に話し、改めて主人から話があつて（主人も度々富岡で川島氏と知合つてゐた）外國人の書記の下働きとして入ることになつたのである。尤もブリユーナアの方では幾分恩に酬ゐるといふ志もあつたのであらう、それは川島氏が富岡にゐる頃、外國人同志に葛藤が起つて政府の決裁を要したことがあつたとき、氏が大に奔走したことがあつたからである。蘭八番館では、主として諸官省の間の用事の通譯を受けもつてゐたらしい。

此の頃氏が頻りに洋學の研究を始めたことは、一面その好學心がいかに强かつたかを證する。

此の新生活に入つてから一年餘もたつたころ、川島氏が富岡で知合つた諸氏の計劃に成つた蠶紙直輸出が實現されることになり、これに關連して川島氏の最初の洋行がいよいよ事實となるに至つた。明治九年である。

四

此の蠶紙直輸出の實現までには可成り複雜した由來がある。丁度一八六〇年頃からイタリヤ、フランスなどヨーロッパの養蠶地方で蠶兒の流行病か蔓延し、それから出來た繭は繭にならない。たゞ日本だけが頗る結果が可い、それで日本の蠶卵紙が彼地で高價に賣れた。そこで日本では大に蠶卵紙を製造して巨利を博してゐたが、フランスの學者パストウルなどが蠶兒の病氣を調べた結果、段々改良が出來ることになり、日本の蠶卵紙が賣れなくなつ來た、日本では當然蠶卵紙の過剩狀態になつた。ところが明治九年七月十七日、ヨーロッパでは恐ろしい晩霜があつて、イタリや、フランスの養蠶は全く外れた。日本ではこれを聞いて、今年こそはと大に馬力をかけて蠶卵紙をこしらへ、いざ賣らうといふ段になつて、外國商人たちはシンヂゲートを組織して、さう澤山高い金で買はない。そこで日本政府で民業救濟の意味で（幾分身から出た鏽といつた氣味もあるが）百萬圓程買上げた。買ひは買つたが何う處分していゝか分からない、いろいろ考究評議した結果、イタリヤに賣り込むが可いといふことに定まつたが、大藏省勸業寮の役人が自身出張するわけには行かない。そこで政府から澁澤氏、三井の益田氏、横濱の龜善の三人に、誰か先方に蠶卵紙をもつて行くものを選定してくれと賴み込んだ。そこで前橋の豪商下村氏、二本松士族梅原氏などが主立つた人物となつてイタリヤに行くことになつた。此の時澁澤氏から川島氏に話があり、前のフランス行の埋合せに今度通譯兼監督としてイタリヤに行つては何うかとの事であつたので、川島氏は早速蘭八番館の主人に話したところ、歸國後又本館に歸つて來るなら、留守中代理を入れるといふ條件で許さうといふことになつた、川島氏は喜んでイタリヤ行承知の事を澁澤氏に返事した。

かくて一行五名（雨宮敬次郎もその中の一人であつた）が發程したのは、明治九年もあと一月と押詰つた十一月二十五日であつた。往はアメリカ經由としたがこれは當時フヒラデルフヒヤに開催されてゐたアメリカ獨立百年記念博覽會見物のつもり、先づサンフランシスコに上陸し、こゝで日本へ歸朝の途にある使節田中不二麿氏にあつた、それからニユーヨークに出て、フヒラデルフヒヤに廻つて見物を濟し、フランスに渡つて、パリ、リヨンからイタリヤに入つて、ミランについたのは明治十年一月中旬。いよいよ目的の蠶卵紙賣込にかゝつたが、これはもう散々の不成功、此のイタリヤ滯在中、川島氏は間を偸んでスウイス、パリ、ロンドンなどに赤毛布旅行をやつた。一行は不成功のまゝ、六月初旬ネーブルス港から乘船、途中セイロンに船泊してゐたとき、フランスに行く日本人（富井政章、今泉雄作）から西南戰爭のことを聞いて大に驚いた、横濱についたのは七月十五日。川島氏は再び蘭八番館に歸つて番頭生活を續けることになつた。

五

川島氏が『新説八十日間世界一周』の飜譯に着手したのは、歸國後間もなくのことであつたらしい。川島氏の語に「概シテ閑敢ノ任務ニ服セシヲ以テ佛文小說飜譯ヲ試ルニ至リシナリ」云々とある。此の小說の原作は洋行以前、當時パリ三井物產支店にゐた從兄弟の中島氏から贈物にもらつたもので、川島氏は一讀異常な感興を覺えた。ところが洋行の際アメリカの某驛で小憩したとき、賣場の中を覗くと此の小說の英譯があつた、これを買つて車中の徒然を慰めたが、この英譯にはアメリカの部に原作にない增補がしてある、川島氏は此の小說に一層の興味を感じた。それで社會啓蒙の一端にも思つて飜譯の筆を執ることになつた。前編は自費出版で、明治十一年六月出版、有名な織田純一郎氏の『花柳春話』より四箇月早い。出版所は慶應義塾出版部だが、これは知己の朝吹英二氏が部長をしてゐた關係からといふ。前編

が意外に賣れたので、後編は出版部の方で出版を引受けてくれた、これは十三年六月の出版。川島氏の直話によると、二冊合して前後二百六十七十圓の收入があつたと。

猶ほ明治十一年に、これも富岡の外人葛藤事件で知合になつた時の租税權頭松方正義から租税寮に入つてパリに行かぬかと勸められたが、何か思ふところがあつて懇に辭謝して應じなかつた。

第二の飜譯小說『虛無黨退治奇談』は、明治十四年の暮から十五年春迄の間に脫稿したもので、同十五年九月の出版これも慶應義塾で出版を引受けてくれたが、餘り賣れなかつたさうで、川島氏の手には一錢も入らなかつたといふ。『虛無黨奇談』はいろいろな意味で甚だ面白いものであるから、これについて語りたいのであるが、飜譯の動機その他については此の書の序文に詳しいし、又木村毅君が去年の『改造』十二月號に書いてもゐるからそれを參照して貰ふことにして、わたしは此の書に多少の由緣のある一場のローマンスを語るに止める。

此の『虛無黨退治奇談』に依田學海の序のあることはこれを一讀した人の誰でも知つてゐるところであるが、川島家に現に所藏されてゐる此の譯本には、依田翁が手づから朱字で評を書入れてある、而かも通一遍の評ではない、文字通りの細評である。何の因緣もありさうにない漢學者の依田翁とフランス學者の川島氏の間に何ういふ因緣があつたのか。依田翁の夫人といふのが、川島氏の橫須賀時代の親友の姉であつた、學問好きな川島氏のことだから、依田翁の名は承知してゐたらう、何時となく依田家に出入するうち、依田翁は川島氏の爲人に惚れ込んで、俺の娘(三女、現存)を嫁にもらつてくれぬかと申込まれた。川島氏も餘儀なく承知したが今年(十四年)は二十九だから來年三十になつたら引取るといふ約束をした、ところが一方川島氏は後に述べるやうな事情から急にフランスに行くことゝなつたのみならず、他方中島氏の兄君(夫人は川島氏の姉君)の死去に會つてその遺族の扶養を引受けなければならなくなつた。それで依田翁に引取延期を申し込んだところ、引取を延期するのはよろしいから、入籍だけして欲しいといふ、それで入籍

して同棲は待つことにした。これは表面の交渉だが、西洋の戀愛結婚を知つてゐる川島氏の内心には、先方の娘が父の嚴命で此の結婚を承知しても、果して自分に愛をもつに至るか何うかわからぬので、それまで待たうといふ心算があつたので、はなからうか、兎にかく此の戸籍結婚は數年間續いたが、明治二十一年川島氏が何も知らずに妻を迎へようとしてフランスから歸國したときには、依田翁の令嬢はもう姉君や親友やの手で立派に離婚されてゐたのであつた、何れいろいろな理由があつたらうが。純情の川島氏には如何に意外に思はれたらう。

六

明治十五年に、横濱正金銀行はフランスのリヨンに出張員を出すことになつた。當時蘭八番館の輸入品はモスリン、唐ちりめんなどが主であつたが、その第一の顧客は富屋、即ち堀越角次郎であつた。然るに此の堀越家では横濱正金銀行創立以來の大株主であつたところから、いよいよリヨン出張員を派遣するに臨んで、兼ねて眷顧してゐた川島氏を推擧し、氏に交渉して來た。が氏は此の時最初は二の足を蹈んだ、といふのは萬事蘭八番にゐる方がよい樣に思はれた、第一俸金の方からいつても蘭八番の方がずつとよい。だがたゞリヨン出張員の仕事といふのは極めて閑散なものであると聞いたので、氏の好學の志は勃然と動いた、それが實際なら行務に携はる傍ら大に勉强が出來るかも知れないと。それで熟考の末リヨン出張員になることを決心し、萬事打合せが濟んで、此の年五月七日横濱解纜、二度目の洋行の途に上つた、マルセイル着は、六月二十日、リヨンに落ついたのはその後二日目であつた。來てみると、成る程事務は頗る閑散である、そこで豫ての希望の通り、當時リヨンに留學してゐた富井政章氏（後に博士）の世話で法科大學の聽講生となり、午前は登校して講義を聞き、午後は事務を執り、更に餘暇には文字通り東西古今の書を渉獵した、綱鑑易知錄前後漢書などの史書、プルターク英雄傳その他のギリシヤ、ローマの古典を殊に愛讀した。かういふ半學生の生活は約

二年弱の間つゞいた。

その間、明治十六年には矢野文雄氏、本野子爵などの來遊客に會つた。殊に川島氏はギリシヤ、ローマの史籍を耽讀し、プルタークを愛誦して措かず、その中のイウメニイズ傳を飜譯した程熱度の強いときであつたから、『經國美談』の著者とすつかり意氣投合し、爲めに銀行事務を大に詰らなく思ひ始めた。矢野氏もこれを聞いて、では報知新聞に入つたら何うだ、一つ一緒にやらうかとすゝめたので、川島氏も一度はその氣になつたりした。

そのうち大藏省の方針が一變して今迄の消極政策をすてゝ積極政策を採用したので爲替取扱事務が激増し、夜を日についでも手が足りない程になつたので、もう暢氣な學生々生などして居られなくなつた。元々學問のために腰掛のつもりで銀行に奉職したのであるから、かうなつては頗る目的が齟齬し、甚く失望したけれども、もう何うにもならない。而かも時日が經つにつれて銀行の方の待遇も改善され、少くともリヨンに居る間は生活に窮することがないと思はれるにやうになつたので、居据りと覺悟をきめた。川島氏自らはかういつてゐる、「麵麭ノ爲ニ一生ヲ銀行ヘ捧ルコトニナリシ運命ノ奇シキニハ今ニ至リテモ猶低囘禁シ得サル所ナリ」云々。此の時本店から手傳ひとして寄越したのが、『鐵烈奇談』の譯者伊澤信三郎氏であつたのも面白い。

七

明治二十一年に川島氏は七年振りで歸省した、その何の爲めかは、川島氏自身に語らしめよう、「二十一年四月里昂ヲ發シ歸省ノ途ニ就キシハ未タ同棲セシコトナキ妻ヲ迎フル爲ナリキ然ルニ意外ノ運命ハ我ヲ待チツ、アリテ同年十一月里昂ヘ歸任ノ時携帶セシ新婦ハ依田ノ女ニ非スシテ當時元老院議官タリシ石井忠亮ノ二女ナリシ」云々。

此の後、川島氏は明治二十八年の春迄リヨンに在勤し、そのまゝで行けば猶幾許かの年數を同地に過さなければなら

ない身であつたが、夫人が肺炎を煩ひ、豫後がわるかつた結果、醫師に、これは「故山ノ風ニ觸ル、ノ外醫藥ノ療治スベキ所ニ非ス」と宣告されたので、今は歸國後のパン問題などに屈托してゐる場合でないと決心し、斷然病婦と三幼兒を擁して歸途に就いた。それは此の年の三月の末方であつた。幼い子供等の傅役として、當時馬車製造業見習のためにフランスに來てゐた一青年を伴つて歸つた。

途中サイゴン碇泊中船中から火を發して他船に乘り移つることなどがあり、幾多の困難を閲して上海まで來たとき、病夫人の病が益々重り、つひに上海埠頭繫船中に永い眠についた。五月八日のことである。此の時にはもう日清講和條約締結後ではあつたが、その報が未だ來ないので上陸することが出來ず、翌九日船が支那海を離れるのを待つて涙をのんで蒼波の間に葬つた。(因にいふ、川島氏は四年後に再婚（戸籍上では三婚）したが、此の夫人も大正六年逝去された)。

神戸に着いて婦翁石井氏その他親戚諸氏の出迎へを受け、やがて折から神戸へ出張中の正金銀行重役相馬氏にあつて、當時紀州和歌浦に退隱中の石井氏方で暫時休養の上東上することを許可して貰つた。川島氏は當時の心事を正直に告白していふ、「此頃ヨリ心頭ニ往來スル所ハ三幼兒ノ外ニモ扶養中ノ眷屬ヲ如何ニ處置スベキヤノ麪麵問題ニ外ナラザリキ是ハ老生ニ於テ採ルベキ所ハ稍ヤ佛語ニ通ズル而已ニシテ銀行事務ノ如キハ殆ント門外漢タリシヲ以テナリ」云々心ひそかに臧首を分としてゐたものであらう。

然るに意外にも急信で至急東上の旨を促して來たので、六月の末に横濱本店に出頭したところ、當時支配人小泉信吉氏逝去後未だ日本銀行から氏の後任者を定めて來ない、それで副支配人山川勇木氏の雜務猬集、その繁忙名狀し難かつた。といふのは元來正金銀行は制度一切を英國風に倣つたものであるから、證書類には皆頭取、支配人、副支配人、支配人心得の記名を要する、それで山川副支配人がかういふ記名などに忙殺されてゐては肝要の行務に事を缺くに至る懼

があるので、その緩和策として川島氏を副支配人に任命し卽日證書記名の事を擔當させる筈であるとの旨であつた。川島氏も事の意外に大に驚いた、だが首席副支配人山川氏は、氏がロンドン支配人勤務の頃からの先輩であり、且つ事實上營業と銀行の首腦人物であつたので、若し此の人に就いて教授を受けつゝ努力したなら「或は素養ナキ老生ニモ麵麭ヲ離ルル憂目ヲ見ル事モナキ譯」と稍や危惧の念を輕くしたのである。

本店で習業二箇年半の後、明治三十年の暮にインドのボンベイに支店長として赴任、三十一年二月初旬ボンベイについた。此の時迄同地の支店は假設のまゝで頗る規模の小さいものであつたが、既に三年目の事であるから、日本との貿易の發展と共に銀行事業も十分擴張の見込が立つたので、場所も現今使用中の建物に移り、他の同業外國銀行と對抗するまでになつた。

明治三十二年四月歸朝、直ちに東京支店開設の命をうけ六月初旬日本銀行前の、同行所有の建物中にて開店、三十九年七月再び横濱本店に轉任を命ぜらるゝ迄七箇年餘東京支店にゐた。「老生ニ於テ若シ得意ノ時代アリシトセバ此七ケ年ナリトス」云々。此の間北淸事件があり、北京へ銀行代表者を一人駐在させる必要があつたので川島氏がその選に當つたが、當時何分家を離れることの出來ない事情があつたので辭退したが、「此一事、今ニ至リテ猶遺憾措カザル所ナリ」と川島氏は自記略傳中に特記してゐる。

自記略傳の文はつゞく「本店ニ入リテ初メ二ケ年餘ハ無任所ノ體ニテ滿洲金融事情ナドノ調査ナドニ過ギス其內四十年ヲ以テ所謂伴食取締役ノ末班ニ列シ四十二年ニ至リ本店營業ノ支配人ヲ兼ネ山川總支配人ノ下ニ本店ダケノ營業ヲ擔當シ四十五年春實務滿三十年且六十歲ノ老朽ヲ以テ退職伴食重役ハ依然トシテ大正六年ニ至リ全然銀行ヲ去ル身トナレリ」云々。たゞ松方公の委囑によつて就任してゐた横濱堀越家顧問の役は猶ほ暫時つとめてゐたが、大正十四年三月に至つて老齡の故をもつてこれも辭し、全く退隱閑散の身となつた。川島氏はその自記略傳を結んでかういつてゐる、「老

生ハ明治五年初テ海軍省十五等出仕ノ辭令ヲ受ケシヨリ昨年（十四年）至ク退隱セシ迄滿五十三年、當初ノ目的ヨリ一タビ外レシヨリ意ハザル方面方面ヘト唯麵麭ヲ追フテ彷徨シ來レル者ニシテ何等確乎タル意志モナク唯其時々ノ風ノ儘ニ働キシハ我ナガラ苦笑ヲ禁ジ得ヌ所ナリ」云々。

川島氏にわたしが初めて面會したのは昨年九月の候と記憶する。初めわたしは銀行家として終始した人と聞いて、内心牙籌を鼻の先にぶらつかせた人物ではあるまいかと危ぶんだが、會つてみて驚いた。童顏皓眉、諄々として語る樣は丁度老書生の態である。而かもその好んで語るところは、支那の經史のこと、ギリシヤ、ローマの古典で、プルタークの英雄傳のことは再三再四舌頭に上つた、老莊を談じ、陶淵明を引き、李杜を賞したかと思ふと、淚を浮べて古ギリシヤの英雄イウメニイズの不運を嘆ずる、と一轉して漢高祖を論じ、唐太宗を評し、腹笥滾々としてつくるところを知らない。わたしは、秘かに驚いて歸途かう獨語せざるを得なかつた、あれでよくも銀行家などになり切つて居られたものだと。何も銀行家を輕侮していつたのではない、その型を破つてゐる點の甚しいのに驚いたのである。今本傳擱筆に、のぞんで改めて一太白を擧げて（呵々）川島氏の健康をいのる。（昭和二年三月十四日）

明治二十年以前の雜誌界

河井醉茗

明治十年前後

明治二十年より前には新聞と云つても雜誌のやうであり、雜誌と云つても新聞のやうであり、新聞と雜誌の區別が判然としなかつた。雜誌が雜誌としての使命を自覺し、體裁の上にも、記事の上にも、新聞と異つた意義を有つやうになつたのは明治二十年以後のことである。併し明治二十年以前に於ても雜誌らしいものゝなかつたのではない。後年雜誌の全盛時代を將來するだけの素地はあつたので、その混沌たる間に交つてゐた雜誌の分子を少しばかり拾ひ集めて此處に述べてみたい。

新聞の方では明治初年から續いてゐる新聞も多いやうだが、雜誌では殆どない。たゞ比較的永く續いたものでは明治十二年に「歌舞伎新報」と「東京經濟雜誌」とが初號を(一二月頃)發行してゐる。此の二つは明治時代でも生命の永かつたことは人も知る通りである。また「團々珍聞」がその前年あたりから出てゐる。硬いもので後までつゞいてゐた雜誌では「六合雜誌」が明治十三年に創刊されてゐる。基督教運動の若々しく盛んな時に出たのである。教育學術等の方面は後にも記すが、十二三年頃には「教育新誌」「學藝叢談」「地學雜誌」「東京學士會院雜誌」「學藝志林」「同人社文學雜誌」などがあつた。政治方面では例の有名な「明六雜誌」などを初め相當に出てゐたものと思はれる。

投書といふこともよほど早くから行はれてゐたものと見え、明治初年から既に新聞には投書を載せてゐた。十二年には「文學新誌」といふ投書雑誌があり、興文社からは「小學教文雑誌」が出た。また「花月新誌」「風雅新誌」の類も二三に止まらなかつたらしい。何れにしても成嶋柳北や假名垣魯文の渇仰されてゐた頃だから投書と云つても戯文狂歌等が先づ文藝的作品と見られたくらゐであらう。「頴才新誌」が刊行されて投書にも相當に力の有る文章が發表されるやうになつたのは猶ほ幾年かの後であつた。

こゝに明治十年頃の定期刊行場の參考として當時の圖書局で發表した報告を載せておく。尤も大部分は新聞のやうだが、中には雑誌もあるに違ひない。どれが何ういふ内容のものか題名を見たゞけでは一寸判斷は出來ないが、當時の文化に照し合せて略想察はされるのである。而かもそこに列記されたもので永く幾十年も殘つたと云ふやうなのは一つもないやうだ。(但し此表に記録された新聞雑誌類は此の一年間の創刊に限るので、以前から續いて刊行されてゐるものは記されてゐない筈である)

明治八年七月より明治九年六月まで新聞紙及雑誌雑報准允題名表

題名	出版地名	題名	出版地名	題名	出版地名
新聞評論	東京	采風新聞	東京	雅俗新聞	東京
假名布告全書	同	學びの暁	同	東京上等裁判傍聴録	同
御布令新報	同	東京横濱土地家屋賣買貸借報告	同	官令新聞	同
諸相場早見表	同	花京女新聞	同	兩假名附官令雑誌	同
農業雑誌	同	普通開化新聞	同	古今雑報	同
信數雑記	同	支那新聞抜萃	同	假名附旭新聞	同

博聞新誌	同
童蒙新聞	同
報國新誌	同
勸徵鑑	同
草莽雑誌	同
方今府縣實況	同
龍華新聞	同
おはなし新聞	同
內外兵事新聞	同
摘華新聞	同
假名附世間新聞	愛知
東洋新報	東京
錦絵百事新聞	大阪
西京錦繪新聞	京都
明七雑誌	香川
岩手新聞誌	岩手
眞新聞	同
集論新聞	同
めさまし	同
東京論集	同
東京新誌	同
講學餘談	同
開化の勸	同
名譽新誌	同
近事評論	同
東京上等裁判所裁決錄	同
東京花歌新聞	東京
文學雑誌	同
確實書解	同
七一雑報	兵庫
假名傍訓 公布之寫	栃木
説教舊誌	同
数法集説	同
官令全書	同
勸業新報	同
東京裁判所裁決錄	同
小學雑誌	同
歌の枝折	同
都鄙叢談	同
廣益問答新聞	同
平假名繪入譽新聞	同
養生雑誌	同
假名讀新聞	神奈川
醫事雑報	同
鶴岡新聞誌	鶴岡
名東縣下 普通新聞	名東

明治九年七月　　圖書局

内容を知る一つの例

その頃の雜誌は何んなものであつたかといふ一例に「芳譚雜誌」(明治十三四年)の中から少し内容を紹介してみると、同誌は菊版十六頁ほどで總振假名つき、毎月六回の發兌である。發行所は銀座の愛善社で定價金三錢五厘。發行の主意は題名の通り世間の芳譚、卽ち美談善行を傳へるにあつて、毎號必ずそれがある。小學校の設立に勸めたとか哀れな人力車夫に金を惠んでやつたとか、舅姑によく仕へたとか、子供が家の爲に働きに出たとか謂はゞ新聞の雜報であるが、雜報ほど新しくないだけである。而して愛善社では讀者からの惠與金が積み立てゝあつて、さういふ哀れな人達に一圓とか二圓とか惠んでやる。自分の社の記事ばかりでなく、各地で發行してゐて新聞の記事に愍れな人の話が出ると寄贈する、當時流行の勸善懲惡を實際化しようとしたものであらう。さういふ記事、さういふ仕事だけなら殆ど新聞とかはらないのだが、寄書欄には可なり無用な戲文が載つてゐる。つゞきものには假名垣魯文の漫遊記とか、草双紙風の小說とかゞある。伊東橋塘の怪談、狂文亭春江の小說、小金井小二郎俠客傳、烈婦傳など、新聞に載せるべき内容のものより、雜誌に載せるべき性質のものが分量から云つてずつと多いのである。

それはかりでなく同じ世間の出來事を知らせるにしても事件に選擇があり、或る事件には評論(と云つても大げさだが)を主にしてあるところが日刊新聞とは異つたゆきかたで、前に云つた美談佳話にしても大いに啓蒙的說明を附けた報道である。またそれとは別に心中が流行ると心中論の寄書を載せるとか、吉原に大火があると饗庭篁村の阿房宮倒るといふやうな一文を載せるとか、新事件の扱ひ方が新聞より念が入つてゐる。それが後になつて雜誌にも必要なことになつたわけだが、只餘りに時代が隔絶してゐるので引用するのも變な氣がするのであるが、一例として團十郎の家に五人の强盜が入つた時の一文を引いてみる。その戲文式のたわいなさにあきれる人もあるだらうが、これも當時の世相を知る一端だと思つて見てもらひたい。

歴代荒事を演じて雷名を海外にまで轟かしたる市川家の技藝は、顔見世の暫を始めとしア、つがも江の義務に數百騎の賊兵を

拙ぐも實物の賊には敵對難く、明治十三年十一月廿六日の眞夜中ごろ、顔見世ならで顔を隱した五人の賊が振閃かす刄の光に身を縮めて、金錢衣類雜品まで殘なく無欲に渡すと、賊は悉く荷造りしたうへ、棚にあつた牡丹餅だと團十郎に緣もあれば親玉といふ名は離れぬ生玉子を引出し、チウ〳〵吸て立去つたと聞て、或る屑買客が歎息し、噫慨然に團十郎も盜人に吸とられて品物は一つも鷄卵だらうと頻に氣の毒がつた處が玉子に爭るの稱あれば、賊は五人とも忽地に縛られて、盜まれた品も追々に歸るとは赤飯配が前祝ひに成て至極お目出たいといふは獨團十郎のみならず、諸方へ押入つて兇賊を首尾能く退治た其原は、三升の紋の煙草入から足が付たといふ事だから、降魔の勢が今こゝに團十郎や鬼やらひの發句も至極的當するが、猶此上の用心に鬼矢來よりは嚴重な朝鮮矢來でも高くして、惡害淺間な海苔粗朶垣は止て眞田の籠城を堅固にしたらよからうと、芝居歸りらしい人が茅屋の前を話して通つたが、斯う物騷な世の中には俳優に限らず家の構へを嚴重にして夜分は早く締るが肝心でござるぞ。

雜誌界の傾向

明治二十年以前の戲文本位の時代に强て純文學を標榜した雜誌の萠芽を探し出さうとするなら、矢張「我樂多文庫」を推す外はないだらう。「我樂多文庫」最初の寫本は明治十八年、版になつたのは十九年の十一月だから兎に角明治二十年以前の發生である。雜誌展開の徑路は九華氏の追憶（本誌既揭）に詳しく出てゐるから此處には略する。

その頃の雜誌界としては政治雜誌や敎育雜誌が多かつたやうである。その頃の敎育界は歐化主義と國粹主義がうまく融和せず、やたらに理論を唱へた時代だからその機關も必要であつたらうが、先驅者として敬服するに足る言論もあれば、徒らに敎育學者の口まねに止まるのもあつたやうだ。明治二十三年に敎育勅語が發布されて、先づ大體の方針は立つたやうなもの丶、それまでは全く混線狀態で、その有樣を知るには當時の敎育雜誌なども多少の參考にはなるだらう。今その二三を擧げてみると、日下部三之介は十二年に「敎育月報」を出し、一時休刊して「敎育旬報」と改題した

が、それもやめて十八年に東京敎育社を起して「敎育報知」を出し相當に認められる雜誌となつた。二十年には「敎師之友」「貴女之友」二十年には「敎育及政治」なども創刊してゐるから、なか〳〵敎育雜誌界では功勞のあつた方である。少し後にはなるが二十二年に「東京敎育新報」を創めた戸城傳三郎と云ふ人と一時「敎育報知」の編輯に與かつてゐた。「東京敎育新報」は後に「敎育週報」と改題したのである。その他「通俗敎育新聞」といふのもあつたし、開發社の「敎育時論」もその時分から發刊されたのではないかと思はれる。また學藝雜誌にも敎育雜誌と交渉する記事が多かつたのである。學藝方面では「學」「文」「筆の力」「中央學術雜誌」など皆聞えてゐた雜誌であるが、就中山縣悌三郎の「學海之指針」は敎育界にも大いに好評があつた。「博聞雜誌」や「知識の戰場」などいふ雜誌のあつたのもその頃のやうに記憶される。

數の少ない雜誌の中でも、殊に文學雜誌として見られるやうなものは乏しかつたので、寧ろ敎育學術方面が勝れてゐる。それが雜誌界の大勢であつた。

婦人雜誌の起原

現代に於て雜誌界大多數の讀者を占用する婦人ものが、明治の初年からあつたか何うかといふことは興味のある考察であらう。實はこれとても文學雜誌同樣二十年以後にあらはれてきたので、その以前に於ては殆ど稀であつたらしい。

明治の初年に福澤諭吉の主幹で「家庭談叢」といふのがあつた。永くは續かなかつたやうだが或は今日の婦人雜誌の先鞭を着けたものかも知らない。その後婦人雜誌と自稱して現はれてきたものは全く見當らないやうだが、二十年には前述の「貴女之友」が發刊された。また山田美妙の「いらつめ」も二十年から二十一年にかけて出てゐたのだ。前者は敎育の立場から、後者は文學の立場から、共に婦人を目標として發刊されたには違ひない。

尤もその以前に於ても政治雜誌教育雜誌などに婦人を主題とした言論は可なり盛んであつた。所謂女權擴張を高唱した時代だから當然雜誌の上にも現はるべきであつた。(但し、森有禮の一夫一婦論が「明六雜誌」に發表されたこと、津田眞道の廢娼論、當時の婦人參政權論のことなどは最近吉野作造博士が發表されたから此處には略して置く)

こゝに一つ、私が偶然に見つけた廣告文がある。明治十四年二月二十六日の「東京曙新聞」の廣告で、その全文は左の通り。

今般婦女新聞と題し平がな每日刊行の新聞發兌許可を得申候これは專ら婦女の教育に有益のことを記載仕候發兌の上は御ひゐきの程奉希望候且本社に於て探訪便利等のため株主募集仕候右は一株金五圓にて三百五十名を限り募集候間御望の方は本月（三月？）廿五日まで淺草區向柳原町二丁目三浪方まで御來車規則等御一覽御加盟あらんことを悃願仕候

社長　小原燕子

編輯長　三浪鉄子

文章から推測して眞面目な企てらしいが當時にしては珍しい。御ひゐきの程を希望するなど一寸面白い氣もするが、さてその「婦女新聞」なるものが果して發行されたか何うか、また小原とか三浪とかいふのは何ういふ人であつたか、それらのことに就ては全く何ごとも分らない。

山田美妙は二十一年に「都の花」の編輯に任ずるため自分の「いらつめ」を廢刊した。併し此の「いらつめ」は婦人雜誌としても早い方であり、詩の宣傳からも功勞が早かつた。「いらつめ」はなくなつても婦人雜誌はその以後に續々現はれてきたので、明治二十年以後のことにはなるが一言してみると、その時分に興文社から「國のもとゐ」といふ上品な婦人雜誌が發行されてゐたが、餘り永くは續かなかつたやうだ。それから國光社の「女鑑」も相當に古い雜誌だから二十年前後には出てゐたらう。後に「文學界」を生み出した巖本善治の「女學雜誌」もかれこれその時代のものである。

博文館の「女學雜誌」の最初ともいふべき「日本の女學」も亦二十一二年の創刊である。民友社の「家庭雜誌」東洋社の「女子之友」など數へてゆけばいくらもあるだらう。兎に角二十年以後に出た婦人雜誌は、幾度か變遷はあつても皆相當に永い系統をつゞけたものである。

雜誌の時代に入る

明治十四五年頃から次第に現はれてきた飜刻本は二十年前後には大いに盛んになり、江戸時代の稗史小說は容易く讀み得られる機會に到着し、それと同時に生硬な政治小說や飜譯小說も手にすることは出來たが、未だ雜誌といふものゝありがたみとおもしろみはよく分らなかつた。

然るに明治二十年になつて「國民之友」が創刊され、初めて雜誌といふものに對する興味が油然として讀書家の間にゆきわたつた。實に「國民之友」の創刊は雜誌界に於ける劃時代的の企であつた。

「國民之友」は少年の讀む雜誌としては理解し難いのは當然だが、それでも何處からか滋味を吸ひ出さうとして讀みあさつたものだ。翌二十一年には「日本人」が出たけれど、「國民之友」に比べて更にむつかしい。幸ひそれらに代つて專ら少年の讀む雜誌としては「少年園」が二十一年の天長節に初號が發行された。「少國民」も出た。

文學方面ではもはや飜刻熱も下火となり、新しい作が渴望されると同時に「都の花」がはなばなしく創刊され、續いて廿二年には「新小說」が出る、また博文館の「やまと錦」や「日本之文華」が出ていよいよ賑はしくなる。

二十年以後二三年の間に新しい雜誌の出たことは、實に百花燎亂の觀があつて、囑目に遑がない程であつた。「日本大家論」のやうな雜駁な雜誌でも一般の知識階級には普く讀まれたものである。雜誌文化の第一期ともいふべき此時代に於ては、未だ選擇の餘裕もない程、讀み着かれたものだが、一つは雜誌そのものが目新しい感じを與へたからでもあつ

て、書物よりは一層新しく、現在の人の最新の創作なり論議なりが見られるといふ感興が少なからず雜誌界を賑はしたものであらう。

此一篇は明治二十年以前の雜誌界を述べる爲であつたから、二十年以後のことに就ては詳しくは述べない。二十年以前のこともほんの斷片に過ぎないので、却て讀者の失望を招いたかも知れない。たゞ斷片の一つでも他日史料大成の際に役立つことがあつたら筆者の幸ひは之に過ぎないのである。

二葉亭追考

名古屋　堀川柳人

○二葉亭が被つてゐた樣な毛帽子（シャープカ）を被つて、私は二葉亭の嘗て歩むだそのあるハルピンの街上を彷徨つて見た。故人が懷かしくてたまらなかつたからだ。けれどももう彼れは此世には何處にも居ないんだ。私の心は寂しかつた。勿論田舍生れの少年たるに過ぎん私は、故人とは一面の識もなかつたのだが、彼れの「平凡」を讀んで以來迚も永久に忘れ難い印象と感激とを與へられてゐたのである。少くともロシアといふ國に幾分かの興味を覺えるに至つたのは、彼の作物の影響であつたと云ひ得られる。

○彼れと坪內逍遙さんとは共に名古屋人の血を享けてゐたのだ。尤も前者は江戸生れ、後者は美濃の太田で呱々の聲を揚げたので、少年時代は共に父君の故鄕たる名古屋で數ケ年を過ごしたのである。明治文學史の此の二大家が名古屋

人であることを私は私かに誇りとして居る、郷土の人々の多くは殆ど全く無關心ではあるが。

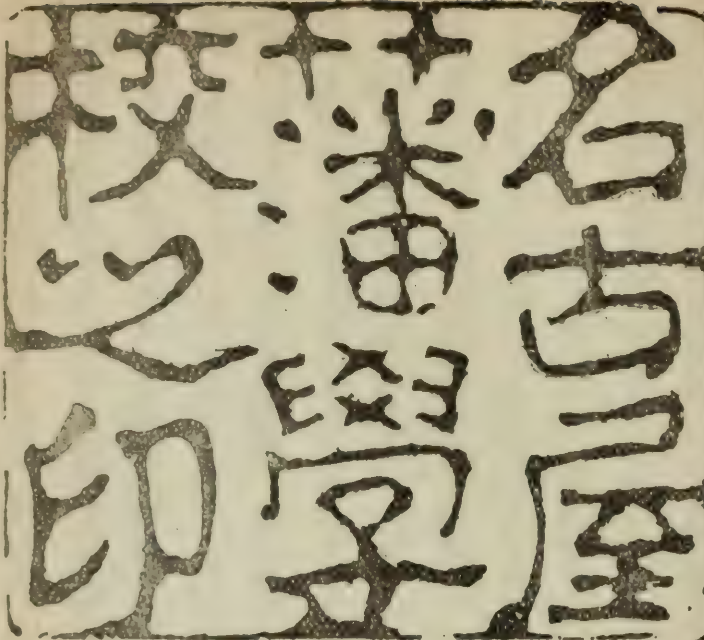
○二葉亭の伯父さんに當る秋月堂主人、後藤有常老人は、自分の家のツイ近くに住して居る。老人とは遠い以前からの顔馴染ではあつたが、有名な二葉亭が其の甥さんであることを耳にしたのは或る偶然な機會からで其際には全く意外な感に打たれた。然しもう其の時に二葉亭は地上の人でなく、印度洋上で永眠してしまつてゐたので、斯うした奇縁はありながら、面晤の機會を得なかつたのを幾重にも殘念なことゝ思つて居る。

○その青年時代には西南役に從軍した程の元氣な後藤老人であつたが、近年は全く老境に入つてしまつて、寒い日には只もう火燵で居眠りをして居るのが仕事。維新當時の記憶なぞは、もう大分薄れかけて居るが、私は、いろ〳〵にして、出來得る限り、老人から故人に關する逸話を斷片的ながら聞くことを得た。又もう十年も前にもなるが、突然無躾に柏木の内田魯庵先生を、お訪ねしたのも、實は同じく二葉亭の逸話を聞きたい爲であつた。近年俄かに勃興しかけた明治初期文化研究に刺戟されて主として、二葉亭の少年時代の事を拙い筆に取纏めて見たいと思つたからであつた。（二葉亭などゝ呼び捨てにするのは潜越ではあるが、一々敬語を附けると冗長になるから略くので其點は讀者方の御恕察を乞ひます）。

○二葉亭四迷、いや、後藤一家からは今でも「辰サン」とばかり呼ばれて居る彼れは、江戸幕府も末季、元治の元年に江戸に生れたのである。（全集大册四卷の自筆履歴書には、文久二年とある様だが、是れは正しくはない。何か就職上の都合で、あゝしたのらしい。）お父さんの長谷川吉數翁は尾張藩御鷹場吟味役といふ役目で江戸詰め。お母さんは同藩御作事方後藤右衛門氏の長女。吉數翁は慶應四年に尾張藩の兵制改革があつて、在來の軍備の外に新兵を募集し、草薙隊と名稱した一隊が出來た時、其一部たる磅礴隊の一員に加はつて居たと云ふ。

○二葉亭は、維新後間もなく、明治元年にお母さんに連れられて名古屋に初めて來た。其頃後藤氏の家は玄蕃新地に在

つたので、其處で育つて、さうして明治四年には八歳で名古屋藩學校に入つた。(國漢文の師は葛町の野村秋足翁では
なかつたかと思ふが、後藤老人にも明確な記憶はない。然し秋足翁の息子さんとは竹馬の友であつたらしかつた。)
○「長谷川の息子が洋學校に行くげな」。こんな噂が、一時、後藤の近所の人々の間に交された。御一新の際とは云へ、
とかく保守的な名古屋人は江戸辨を使ふ少年が同時にペラ〳〵と横文字を讀むのをば耳を欹つゝ聞いて甚だ好奇的に感じたらしい。藩學校は通例洋學校と呼んでゐた。舊尾張藩學明倫堂の皇漢學に對峙する英佛語學の新學校なので、明治三年の六月に南外堀町と七間町の角に當る。元の寺社奉行所趾で開校された。



名古屋藩學校之印

○二葉亭は此學校で、林正十郎、佛人ドクトル・ムリーエなどいふ先生達に佛語を學んだ。其頃上級の英語科には、僅か服部總吉(加藤高明伯)も通學した樣だ。此學校は後の文部省直轄の外國語學校、(坪内博士、八代六郎男や三宅雪嶺博士の學んだ後年の愛知英語學校)と同じと混同し易いが、全く別の洋學校である。藩に學あり、英佛兩語を教授す、云々」といふ二葉亭の手記があるが、これも間違ひ易い。實はもう其頃は尾張藩ではない。維新後僅かの期間存在してゐた名古屋藩なのである。此新舊混沌時代には現在通學したと云ふ某翁からも記憶が甚だ漠然として居る。藩學校は明治四年七月の廢藩置縣以後矢張洋學校の名で存續してゐた。それは六年の六月頃までであつたら

しい。

○二葉亭が西洋文化に朧ろげ乍らも接觸し始めたのは、此藩學校に於てであると思はれるが、更に調べて見ると、母堂がまだ十六七歳の少女時代に、長崎奉行岡部駿河守の伴をして同地に赴いたことがあるさうだ。長崎と云へば徳川時代には現今のドイツへ洋行するよりも遠方のやうに思はれたものであり、又行路難もあつた。奉公先きの主人の伴にもせよ、そこへ出掛けた母堂は、少女としてはシツカリ者であつたと見える。按ふに二葉亭は其の少年時代に長崎土産のフラスコを見せられたり文錦堂の版畫を見せられたりして夢の樣な南蠻紅毛の異國趣味に恍惚としたことが屢々であつたであらう。

○話は少し前に戻るが、父君吉數翁は、若い時に某家から長谷川家へ養子嗣となつたもので、其間のくはしい消息は中村達太郎博士の父君にでも聞かなければわかりかねる。其實家の菩提所は平田院だと云ふのみで、後藤老人ももう記憶から呼び起しかねてゐる。二葉亭の祖母さんは彼れを非常に可愛がつたさうな。「此子は成人すれば、金鍔(つば)さすか菰(こも)被(か)ぶるかにどつちかになる」と豫言したのも此の偉い婆さんであつた。此言葉は現代的に云へば「オール、オア、ナシング」だ。祖母さんの老眼には二葉亭のあどけない言動中に何物かゞ既に映じてゐたと見える。幼時のことや犬のことは「平凡」に於て其の一端だけは窺へる。

○明治八年にお父さんが島根縣廳に奉職した。（尤も其以前廢藩置縣後間もなく、東都神田橋込にあつた愛知縣支廳と云ふ樣な各府縣聯合の役所に通勤して居たこともあつた。）愛知縣の縣令か權令かの鷲尾隆聚(たかまつ)氏に附いて同僚の立(たち)氏と山陰に赴任した。二葉亭も同地に行つた。其頃の警部長山田氏は美妙の父君である。吉數翁は庶務課長であつたらう。官舍が隣り合はせであつたから、少年同志の二葉亭と美妙とは友達であつた。同地へ赴く以前、名古屋で寫眞を撮つたことがあつたが、親戚の一人が見せて呉れとて持つて行つてから、紛失したのか、返却もせず、そのまゝになつた

さうな吉數翁は權少屬になつた。退職する頃は十三等出仕であつたらしい。

○二葉亭の少年時代と其の周圍は先づこんなもの。意地ッ張りで、ヤンチヤ者でオドケ好きで、時々獅子舞ひなどをやる少年であつたといふ。後藤老人は明治廿二三年頃或る舊家の隱居と一しよに上京したことがあつて、神田の彼れの家を訪問したら、生憎其時には二葉亭は不在であつたが、其翌日になつて老人の宿所へ挨拶かた〴〵やつて來た。見ると、少年時代の活潑な面影は失せて、めつきり風姿と態度も豹變して、久方振りの久濶を述べると、もうすぐ沈默して仕舞ふといふやうな陰氣な風になつてゐた。後藤老人は「お前は一體何になる考へかな」と問いたら、彼れは「私の目的とするのは恰度病を治する醫者の樣に總ての社會の病氣を治療するのが希望です」と吐き出す樣に答へたさうな。田舍の伯父さんには、それが何の事やら一向わけがわからず、呆れて深く問ひもせず、其まゝ國に還つた。そして「辰サンには困つたもんだ。とう〳〵變物になつた。」と親戚の人達に屈託顏で告げたらしい。

○これは多分例の語學校退學以後の煩悶時代であつたのらしい。此若き思想家と素朴な伯父さんの對座の姿を思ひ浮べて見ると、一種興味が湧く。北歐のイブセンが多年旅浪の旅から故國に還るや、ドクトル・イブセンと麗々しく名刺に認めてゐたとか云ふ。六十三歳の彼れは自ら社會の醫師、人類の救濟者を以て任じて居たのだ。二葉亭の青年時代の逸話も偶然たる暗合とは云へ、同じ心持であつたかと思ふと、吾々には無限の懷しさを覺えしめる。二葉亭は青年時代に既に先覺者の惱みと寂しさを抱いてゐたのだ。

○「二葉亭は能く外國思想に熟して居たが、同時に矢張幼時から染込んだ東洋思想を全く擺脫することが出來ないで、此の相背馳した二つの思想の膠着が常に頭腦に絕えなかつたであらう」と魯庵先生は「太陽」大正二年九月號に述べられたか、犀利な且つ同情のある評だ。

○後藤の伯父さんの許へ來た手紙に斯う云ふのがある。當時の二葉亭の生活斷片である。

「度々御書面を辱うし候に事にまぎれてのび〳〵御返事を怠り申譯無御座候その後皆々樣御機嫌よく入らせられ候哉當方には一同無事に消光致居候。

さて既に御承知之由に候へば改て不申候へども私事ふとしたる緣にて妻を迎へ候始めより一生無妻と決心致し候ても御座なく候へ共妻を迎へよなど人々に勸められし候時はたわけたることの樣に存ぜられ候ひしが、ふとしたることより人の情の自然として遂にかゝに始末に相成おもへば不思議と外おもはれ不申候をかしき事に有之候也。

また先頃拙著浮雲御高覽に相成候由汗顏の至りに不堪候そのころ少年の客氣に任せみづからの拙きを揣らずしてかゝる愚にもつかぬものを書散らし候こともへばうらはづかしくも存ぜられ候也。

かゝる始末ゆゑ小說は筆を浮雲に絕ちたゞ今はひたすら學事にのみ心を傾けをり申候。犬も文學もすきの道に候へばをり〳〵發句をば口ずさみたのしみ事に御座候、近作二ッ三ッ御笑覽に供し候。

愛犬を失ひて

をのしら（?）のどころやらにして風寒し

木枯や友去（?）れ小笹薄日和

さぶかる雀切干の影

うるめやく閑爐裏戸の烟もれて

まづは御返事まで如此御座候　　辰之助拜

此手紙は坪内老博士の御說に依れば官報局の官吏時代ならんとの事である。年月日も不明。（風寒むしの句故人は細字の達筆故たのしくとも讀まれないでもない。然し意味ををのしら（お前ら——地方語）でないかと思はる。諸方の御垂示を仰ぐ。

本稿のなりしは坪内内田兩先生及び此地の大口佩蘭氏の御助力を辱うした結果である。末筆乍らこゝに感謝の意を表します。

明治初期の大衆文學

服部嘉香

一

現代の鑑識並びにわたくし自身の定義から考へると、明治初期の文學はすべて大衆文學であつたといへる。その種類には、勸懲小說（勸善懲惡主義の小說）、情事小說、滑稽小說、政治小說などがある。いづれも、時代的思想によつて促進せられ、もしくは、時代的思想を促進し、豫言するやうなものでなく、單に時代の趣味に投じたものに過ぎなかつた。

政治小說の一群は、たしかに時代の反映だつたとはいへる。けれども、それらは時代を率ゐたものではない。時代を指導したものは、新聞の論說、先覺の著者、飜譯書などではあつたが、小說ではなかつた。

これは詭辯らしく見えさうであるが、決してさうでない。當時の作者道から考へて、寧ろ當然以上の當然である。

明治五年四月、教導職、俳優及びその作者に對して政府から三條の教則を發したことがある。その趣意は、(一)敬神愛國の旨を體し、(二)天道人道を明らかにし、(三)皇上を奉戴し朝旨を遵守せしめるといふ三條であつたが、同年七月假名垣魯文、條野採菊の二人は、教部省の命によつて自己の立場を說明する奉答文を出した。その一節、

今般著作業道原因委細。次第付可申上旨、御諭示に付、即ち奉建言候。仰も戯作の儀は、虛を主とし實を客とし、或は事跡名

籍を假用し、或は歴史を換骨奪胎し、支那の羅貫中李笠翁等の小説、我源氏狭衣其他何物語と唱ふるもの即ち是れ也。……方今之を以て業と仕る者僅かに私共兩人、其他兩三名のみ。これ無他、知見日に開け、月に進み、稗史の妄語たるをいやしむ所以と奉存候。……素より戯作は識者に示すに非ず、不識者を導くものに候。尚依然として守株仕候へば、迂遠に陷り、曖昧に流るゝのみならず、其弊について人を誤つに至るべし。依て爾後從來の作風を一變し、乍恐教則三條の御趣意に基づき、著作可仕と商議決定仕候。就ては下劣賤業の私輩に御座候へ共、歌舞伎作者とは自然有別儀に御座候間、右可然御含被成下度候。……

この奉答文でも明らかな通り、當時の戯作者は、みづから「下劣賤業の私輩」と稱して恥ぢず、彼等が徳川時代の戯作者に見ることを得た一片の、侠骨も自淫的作者滿足を持つてゐないことを正直に公白してゐる。後の坪内逍遙氏の「小説神髄」に主張された新文學道の提唱と比較して、寧ろ滑稽をさへ感ぜしめる。

二

假名垣魯文の『西洋膝栗毛』は、新舊文化の衝突から生まれた社會の滑稽的現象を捉へて、輕佻な時勢の一部を諷諭し、頑迷な守的の野暮人を罵つて、大いに當時に喜ばれたものであるが、その材料としたものは福澤諭吉の『西洋事情』第一編である、全體の調子は一九の『膝栗毛』を模倣したので、何ら獨創的、思想的なものはない。

政權が江戸に移り、文學もまた江戸に榮えるやうになつた徳川時代文學の後半期にも、同樣の現象はあつた。新開の江戸は、京都人士の集合するところとなり、隨つて、街上に生活に滑稽的材料は極めて多く、殊に太平に馴れた江戸人士の嗜好も、自然洒落や滑稽に傾いてゐたので、黄表紙から洒落本、中本といふ風に發達して來たことがそれで、世上のあら探しに興味を持つたといふ點では、魯文の作も古いものに過ぎない。たゞ、洒落本の取材範圍は、初め主として花柳界に限られ、社會の實相を直寫するといふ作者意識よりも、作者みづからその淫靡を樂しみ、讀者に對しても、そ

の方面の刺激を與へることを主としてゐたために、例の寛政二年の洒落本禁止となつたので、後に一九や三馬が洒落本を復活した中本では、材料を旅行と實社會に求めて、特に滑稽物が發達したのである。魯文は、その傾向を明治時代にまで延長したといふだけで、即ち、最初の花柳通が世間通となつたものを追うて、魯文は、種本のお蔭で世界通を振り廻したのである。取材範圍には變化があり、擴張があつたが、その作意は、單に讀者の哄笑や噴飯を狙つた機智と戯謔の連發を以て人氣を博さうとしたに過ぎない。

この一點だけを考へてみても、眞に時代を指導したものは、福澤諭吉の『西洋事情』や『學問のすゝめ』の如き著作であつて、魯文の『西洋膝栗毛』——即ち小説ではなかつたことが明らかになる。

三

明治初年の思想界並びに社會そのものは、新日本の建設を急務としながら、殆ど統一的な指導勢力を持たなかつた時代である。それが、潜勢力であつた國家意識と、熾烈な個人意識との漠然とした結合から、政治的に自由民權論として一路に進んだことは、一種の奇蹟であるといつていゝ。北村透谷はその間の消息を國民的思想運動と稱し、

維新の革命は、政治の現象界に於て舊習を打破したること萬目の公認するところなり。然れども吾人は寧ろ思想の内容に於て遙かに偉大なる大革命を成し遂げたるものなることを信ぜんと欲す。……國民の精神は外交の事によつて覺醒したり。その結果として尊王攘夷論を天下に瀰漫せしめたり。斯の如く覺醒したる國民の精神は啻に德川氏を仆したるのみならず、從來の組織を碎折し、從來の制度を擊破し盡すにあらざれば滿足すること能はず。

明治政府は國民の精神を相手として立てり。國民の精神は明治政府に於て其の滿足を遂げたり。……吾人の眼球を一轉して、吾國の歴史に於て、空前絶後なる一主義の萌芽を觀察せしめよ。即ち、民權といふ名を以て起りたる個人的精神是なり。

透谷は、當時の思想的經路を斯う見てゐる。「空前」はいゝが、「絕後」は當分なかつた個人主義的思想、明治初期に於ける個人の權利義務の伸長主張が、外國の例に倣はず、國家乃至皇室中心主義から脫線しなかつたことは、面白い現象であるといはねばならん。それは、個人意識の伸長に邪魔物となつたのは、國家意識や皇室などでなく、實勢力を持つてゐた幕府意識や德川氏であつたといふことの機緣があつたからである。これに對して、明治政府がどういふ處理を採るか、そこに透谷は疑問を殘してその『明治文學管見』の筆を置いてゐる。そして、「明治文學は斯の如き大革命に伴ひて起れり。……平民は自由の意志に誘はれて、放縱なる文學を形成せり。」云々と見てゐる。しかしこれは、透谷が政治小說の賓價を買ひかぶり過ぎた言葉だといつていゝ。

わたくしは、當時の政治小說も、やはり大衆文藝としての存在理由を持つに過ぎないものと觀察する。つまり時代を率ゐる力はなく、たゞ當時の人心の好みに投じて、氣を得ようとしたものに過ぎないと見たいのである。

四

明治の維新が、まづ最初に一勢力の倒壞に成功した後に、當時の新人は何らかの目標を求めた。イギリス的の功利思想もしくは穩健實用思想、フランス的の自由民權思想、ドイツ的の國家思想、これらは雜然と輸入された。質の善惡を擇ばず、彼に範のあるものは悉くこれを採つて、心醉した。それが主として自由民權論を中心とするやうになつたのは封建三百年の壓迫に對する反動的機運の據りどころとして好都合であつたからである。民權論や民選議院論、國會開設の建白などは、正當の一路でありながら、一方に廢帝論や、女權擴張論などまで唱道されて、いかに當時の思想が混沌を極めてゐたかを示してゐる。

當時の時代を指導した思想は、多く新聞雜誌に據る名士、新人の主張に明らかで、時に文章家として顯はれた福地櫻

痴、成島柳北、栗本鋤雲、小野梓、馬場辰猪、古津滋、末松謙澄、藤田茂吉、矢野文雄、末廣重恭などは、政府から見てその筆力の偉大を警戒せねばならん危險思想家であつた。保安條例や出版條例によつて、發行停止、罰金、投獄の壓迫を加へたのは、何人も知るところであるが、そのために、主として英國派の小說の飜譯や飜案によつて、また、幼稚な政治小說の創作によつて、政治的主張を爲す風が起つて來た。飜譯物のことは姑く置いて、政治小說には、特にそれを明らかに斷つたものが多いのである。

卽ち、明治十九年七月出版の末廣鐵腸の『雪中梅』には、「當時深く世想に感憤する處あり、情話に託して政治上の有樣を描出す」とみづから序文に記し、同じ頃の久松猖堂（義典）作『雪月花』にもまた「小說の體を假用して二三の人物を作爲し、詳に代議の利弊を寫出し、來るべき國會に於て世人の深く戒愼すべき條件を明示」すると述べてゐる。柴東海散士の『佳人の奇遇』『世路日記』、末廣鐵腸の『花間鶯』、須藤南翠の『綠簑談』『新粧の佳人』、依田百川（學海）の『狹美人』など、すべて情話と政治との混交した傾向小說か、煽動小說であつた。坪內逍遙氏の『內地雜居未來の夢』はそれらの一群中に在つても、小說としての變化情味を持つところの多い異色があり、『小說神髓』の出るやうになつたのも決して偶然でないと思はせるけれども、德富蘇峰氏は、一律に當時の政治小說を「俗物の共進會」とし、人物は皆「純然たる政治世界の丹次郎」であるといひ、更に「演說小說、壯士小說、虎狩小說、慷慨小說、沐猴小說」であると罵倒してゐる。

洋行をすること、歸朝して代議士となること、この二つの目的が、どの政治小說の主人公にも共通の目的で、それを達成したことを書くことが、作者としても、また讀者としても、愉快であつたのである。みづからは實現し得ない實社會の榮達を、小說に於て求め、小說に於て樂しむ――こゝに大衆文藝もしくは通俗文學としての面目が示されてゐるではないか。

附記――盛岡市へ講演のために出發する當時、二時間あまりにこれを書いた。粗雜を許して頂 たい。明治四十二年十二月刊行の『文藝百科全書』中に、わたくしは『明治初期の文學』『日本現代文學』を寄稿してゐる。本論文は主としてその材料に據つた東京堂の覆刻本によつていま勉強してゐることの結果は、他日にまとめたい。

山田美妙評傳

河井醉茗

山田美妙の評傳を書かうと思ひ立つたのは、嘗て明治初年の詩のことをしらべてゐた時からで、今回急にまとめようとしても、自分の心覺えや讀んだものだけでは心もとないのであつた。それで丸岡九華氏を煩して同氏が最近の起稿に成る硯友社沿革の詳しい記錄の中から美妙に關する件だけを聞かせてもらひ大いに得る所があつた。また武州熊谷の篤志家松崎貞吉氏、舊友横瀨夜雨氏などから明治時代の文學雜誌や單行本を借用して參考とした。玆に發表してそれらの諸氏の厚意を謝す。

一、硯友社時代

山田美妙齋、本名武太郎、明治元年七月東京神田柳町に生れた。父の吉雄といふ人は維新前後奥州の方に從軍してゐて歸ることが少なく、美妙が少年時代になつた頃には長野縣の警部を勤めてゐて、殆ど東京の家に居ることがなかつたので、美妙は祖母と母との手で養育された。四歳の時に世界國づくしを母から口授されて諳記したといふほどで、十歳頃までには四書五經を初め漢籍一通りの素讀が出來た。小學校は初め寺小屋から烏森校、巴小學校と移つたがいつも學力優等で夙に神童の稱があつた。十三年に府立第二中に入學したが、きまりきつた學科などはそつちのけで、太平記だの平家物語などを愛讀しはじめ、江戸時代の草双紙就中「八犬傳」の如きは朗々と諳んじるほど耽讀した。此の馬琴に





美妙『夏の木立』挿畫　上圖右端の寫眞は稻舟女史

私淑してゐたことは、後年小說を書くやうになつてからも美妙の作に影響する點が多かつた。讀むばかりでなく作る方も十二三歳から好んで漢詩を作つたし、また祖父と父が和歌を作つた人だつたので、和歌にも興味を持つてゐた。文章は十四五の時から兎に角小說の眞似事でも何でも書いてゐた、そして「讀賣新聞」や「頴才新誌」などに投書したものだ。それから中學を全く修めないうちに大學豫備門に入つた。そこでも學校の課程は美妙に滿足を與へなかつたので、不平滿々、とう〳〵十九年に退學してしまつた。學窓生活をやめた彼は、自ら獨學研究を企て刻苦精勵して勉强をつゞけた。その頃自分できめた日課表がある。

午前六時牀を離る〇七時まで吟詠吹笛〇七時より八時半まで和文學〇九時より午後四時まで圖書館にて文學專攻〇四時半より六時まで英文學〇六時半より十時まで哲學〇十時より十二時まで小說詩歌

明治二十年彼は大學に入學の試驗を請ふた。正則の課程をふんでゐないので何うしても許されなかつた。志望の達しられなかつた彼はいよ〳〵文章に親んでいつた。その頃、美妙は一人の親友があつた。それが尾崎紅葉である。

美妙と紅葉とが知り合つたのはそれより三四年前に遡り、美妙の二中時代に紅葉も同じ中學に居たので、腕白ものゝ紅葉と、溫厚なおつ坊ちやん肌の美妙とが、何ういふ機緣でか友達になつた。美妙は漢詩和歌國文漢文何でもよく出來る秀才であつたから、その趣味嗜好の上でお互ひが近しくするやうになつたものだらうが、それがそも〳〵明治文學史上重要なる運動の最初の動機となつたのである。

紅葉が中學を出て三田英學校に學び、それから大學豫備門に入つて二年目までは美妙との音信が不通であつた。學校が違つたからといふだけのことで別に仔細はなかつた。そのまゝ二人が別々になつてしまつたら、美妙紅葉と並び稱されるやうなこともなかつたらうし、硯友社も早く興らなかつたかも知れないが、偶然にも紅葉が二級の時に美妙が四級に入つてきた。そこで舊交が溫められ、兩者の交情はます〳〵濃かになり、文學を以て立たうといふ決心をさへあかし

合ふ間柄となつた。

紅葉は文學で立たうといふ志は有つてゐたが、まだ物を書くといふ處までは至らなかつた。然るに美妙の方はその頃旣に詩も小說も作つてゐたので、「竪琴草子」といふ百五六十枚の作を紅葉に見せて批評を求めた。一讀してみると文章は馬琴調であつたが、筋は西洋のものでなか〲うまく出來てゐる、さすがの紅葉も舌を卷いてその才氣に驚いた。

その時分山田の家は芝にあつたので、學校に遠いといふわけ、芝から駿河臺の坊城の邸內に引越した。紅葉の家も芝にあつて芝から通つてゐたが、山田の家が駿河臺に移つたので、美妙のすゝめで紅葉は山田家に寄宿することになつた。二人は八疊の室に机を並べて話は文學上の事ばかり、そこへもう一人加はつたのが石橋思案であつた。思案も豫備門の學生であつた。旣に三人寄つたのだから何か始めようじやないかといふ話の持ち上るのはありさうなことで、さうなると今でいふ同人雜誌、同志を集めて作物を發表してみたいといふ希望を抱いたのであつた。さういふことは何の時代にもあるらしく、先づその希望の實現に着手した。

そのうち主唱者が四人になつた。丸岡九華が加はつたのである。その四人が幹部となつて硯友社が創立され「我樂多文庫」が出るようになつた。第一號が明治十八年五月二日に出た。美妙紅葉二人の筆記、會員に限り廻覽せしめるといふ主意であつた。美妙はその一號に例の「竪琴草子」を載せた。稚號は樵耕蛙船と云ひまだ美妙とは名乘らなかつた。(その後の硯友社の動靜は丸岡九華氏が本誌明治文學研究號に詳しく發表されてありますから宜しく參照されたい)。

筆記の「我樂多文庫」は八冊で終り、翌十九年の秋、改めて第九號からは印刷された「我樂多文庫」が發行された。それが四六版時代で十六號までつゞき、十七號めからは改卷第一號として四六二倍版となり、會員以外にも發賣頒布することゝなり、つまり三度の改善を經た後世間晴れての獨立した文學雜誌となつたのである。その間美妙は韻文も小說も作つてゐたが、韻文卽ち詩の方は「新體詞選」や「少年姿」といふ單行本となつて刊行された。

美妙が言文一致體を小說に試みたのは何時頃が初めかといふに、「我樂多文庫」の四六版時代からであつた。二十年十二月に發表した「花の茨茨の花」は純言文一致體であつた。二十一年の同誌には「情詩人」を揭げたがですます調であつた。

明治二十二年は美妙が一大飛躍を試みた年である。「國民之友」新年（二十二年）附錄には自ら力作を吹聽した「胡蝶」を發表し、その前年金港堂からは「夏木立」を出版してゐる。「我樂多文庫」社幹から「都の花」の編輯に、別に自身で「いらつめ」を刊行するなど身邊多事、それと共に筆力も大いに伸びて文名嘖々一躍文壇の流行兒となつた。

二十一年「夏木立」を出版した金港堂では機運に乘じて何か目新しい小說雜誌を出さうといふ計畫を抱いてゐた。編輯には中根淑（香亭）といふ人が居たのだが、その人が美妙の才を認めて新雜誌の記者に招聘してみようといふ考で、潛かに交涉を進めた。美妙の意は大いに動いた。

此處で一寸美妙の性格に就いて一言して置きたい。美妙といふ人は生れながら文章の才があつて、その點では優れてゐたが、內氣のお坊ちやん肌で、外出は嫌ひ、社幹でありながら他の幹部の人達とは一度も外に出て食事を共にしたやうなことはない、家庭は父親は傍に居ず、祖母と母との懷ろ育ちで可なりの我儘は持つてゐる。さういふ家庭に人と成つた美妙と、ざつくばらんの江戶子肌の紅葉とは人間の出來に相違があつた。金港堂の交涉でも、自分が硯友社の幹部である以上、諸否は先づ紅葉その他に相談すべきであるが、彼にはその勇氣がなかつた。遂に硯友社には無斷で金港堂に奔つたのである。

覇氣滿々たる美妙が自己の野心の爲に友情を蹂躙したといはれても辯解の途はなかつたであらう。それに違ひないにしても双方に理解し合つて別れる途はいくらもあつたらうに、わざと誤解を受けるやうな態度を取つたのは彼の性格からも來てゐるので、而して今一つは山田の家の事情も參酌しなければならない。當時山田の家では主人の收入も當にな

らず、祖母と母とが美妙が少しづゝでも原稿料を取るやうになつたので大いに當にしてゐたらしい。殊にそのお祖母さんといふ人（明治三十八年九十五歳まで生きてなくなつた）が勝氣なやかましやであつたから美妙もいくらかそれらの事情にも惹かされて收入の多い新雜誌の方に向つたものだらう。

　果して紅葉は怒つた。怒つたけれどさすがは紅葉だけに、さう深く根に持つて美妙を怨むといふやうなことはなかつた。當時のいきさつに就ては紅葉自ら硯友社の沿革を語つた一節に斯う述べてゐる「その內に金港堂に云々の計畫があるといふ事が耳に入つた。其前から達筆の山田が思ふやうに原稿を寄來さんといふ怪むべき事實があつたので、這は捨て置き難しと石橋と私とで山田に逢に行きました。すると金港堂一件の話があつて、硯友社との關係を絶ちたいやうな口吻、それは宜しいけれど、文庫に連載してある小說の續稿だけは送つてもらひたいと賴んだ。承諾した、然るに一向寄來さん、石橋が逢に行つても逢はん、私から手紙を出しても返事が無い、もう是迄といふので、私が筆を取つて猛烈な絶交狀を送つて、山田と硯友社との緣は都の花の發行と與に斷れて了つたのです。刮目して待つて居ると、都の花なる者が出た。本も立派なれば、手揃でもあつた。而して卷頭が山田の文章、憎むべき敵ながらも天晴書きをつた、彼の文章は確に二三段進んだと見た。さあ到る處、都の花の評判で、然しも全盛を極めたりし我樂多文庫も俄に月夜の提灯となつた」云々。而して間もなく「我樂多文庫」は廢刊となつたのである。

「都の花」第一號は二十一年十月發行、內容は發行のゆゑよし（香亭迂人）花車（美妙齋）めぐりあひ（二葉亭四迷）中原の鹿（流鶯散史）脚本淑女の操（學海居士）華胥の夢（槐堂仙史）諸文評釋鉢の木（迷花生）等、一々木版の插畫があつて、本の大きさは菊版、表紙も花模樣の美しいもので立派な純文學雜誌であつた。その後一二年の間に小說雜誌は數多く出たが一步先んじただけに「都の花」は百號以上繼續し、美妙は勿論一二流の作家は大抵筆を執つてゐるし、餘り大した變化もなく永く續け得た雜誌であつた。

美妙の勢ひが盛んなので、退いて自分を守つてゐた紅葉は、機關雜誌(「文庫」等)の上で着々硯友社の基礎をかためると同時に、自重忍從して自己の作品を琢いてゐた。美妙との感情は一時的であとまで害はれるやうなものはなかつたらうけれど、その當分は作の上で美妙は紅葉に刺戟され、紅葉は美妙に刺戟されたに相違ない。而して最後の結果から顧みると、紅葉は好い役廻りをしたことになり、美妙はつまらない役廻りをしたことになるのだが、何れにしても明治文學史上最初の原動力となつたのが中學時代からの紅葉對美妙といふことは逸し難い事實である。

二、言文一致體の創造

その頃の小說家は一にも文章、二にも文章と文章に骨を折つたことは一とほりでなかつた。十五六年頃に頻出した政治小說飜譯小說類の生硬な文章は迚も發達すべき見込はなかつた。と云つて江戶文學の系統をそのまゝに受け容れた戲文脈も時代錯誤である。和文脈、漢文脈、歐文脈が水と油のやうに混ざつてゐて融和しない。一方では國字改良論が與つてローマ字說もあれば漢字全廢說、假名採用說があり、殆ど所據とする文體がなかつた。

小說を書くにしても、先づ文章の形式から考へてかゝれねばならなかつた時代で、題材も大切だが、或はそれ以上に文章の目新しさが讀者を引きつけたか知れない時代であつた。當時の作家は皆その點に苦心したもので、眞の舍、二葉亭、紅葉、美妙、思軒その他悉く然りである。就中美妙と紅葉は最初から文章々々と云ふことを言つてゐたので、例の何でも人一倍氣の早かつた美妙は言文一致體といふものを唱へ出した。

言文一致體を主唱したのは美妙であるが、殆ど同時に之を創作に試みたのは二葉亭四迷の「浮雲」であつた。併し二葉亭の態度は甚だ謙遜で世間にはそれほど知られなかつたが、美妙の態度は如何にもはなばなしく、「武藏野」に「夏木立」に「いらつめ」に「我樂多文庫」「都の花」に、あらゆる機關を通じて言文一致體の文章(詩と)を發表した。果し

てその目新しさに世間は喝采した。いゝわるいの批判よりも先づその目新しさに驚かされたのである。

美妙の言文一致の目新しさは主として歐文脈を取り入れた點にあるのだが、今日になつてその點を研究しても別に新しいとは見えないのである。美妙は夙にミゼラブルとかドンキホーテとか、詩ではミルトン、シエレイ、シルレルなどを推奬してゐた位だから歐文の素養はあつた方で、所謂言文一致體の主張も歐文から思ひついたことは無論であらう。譯文には當時森田思軒が齒切のいゝ一種の文體を創めてゐたが、矢張文語體であつて言文一致ではなかつた。

美妙は筆寫の「我樂多文庫」初號から「竪琴草子」を書いてゐたが、その文體は殆ど七五調の馬琴張であつた。大いに馬琴に私淑してゐた頃の作だからさもあるべきである。その後十九年の十一月「我樂多文庫」が印刷して會員に頒布されるやうになつてから「嘲戒小說天狗」といふものを載せた。後に「柿山伏」と改題して「夏木立」の中に收めてある。此の作には全然七五調を排し、大部分口語で書いてある。これがそも／＼言文一致體に方向轉換をした第一歩である。此の作は當時有名の某作家を諷刺したもので、筋はつまらないが終りの斷り書に「文も亦一派の風もて綴り」云々と云つてゐるだけに文章の方では確かに新しい試みであつた。次で二十年十二月の同誌に「花の茨茨の花」といふ短篇を書いてゐるが此の作は純然たる言文一致體であつた。

全體明治二十年といふ年には、美妙は新文體を興さうとして最も苦心してゐたのであつて、丸岡氏も特に話されたことだが、逢ふ度にその話が出て、何うすれば西洋の文章のやうに言葉と文章とを一致させることが出來るだらう、さしあたりの難問題は語尾の文字だが、ですとするのがよいか、ありますとするのがよいか、また、だ、であるとするのがよいか、何んな方針で進んだものかといふやうな話は始終聞いてゐたさうである。語尾ばかりでなく句頭の打ち方も、。。などを使ひわけ、また＝……！？のやうな歐文の符號の應用にも苦心してゐた。その折柄二葉亭の「浮雲」が出たので大いに意を强うすることも出來、參考ともなつたので、そのことは後年美妙の口づから石橋思案にも話したさうで

ある。そしてまたその頃までは言と文と一致させた新體文を何と稱してよいかさへきまつてゐなかつたので、普通には俗文（雅文に對して　と云つてゐた。それを初めて「言文一致體」といふ名稱で唱へだしたのも山田美妙である。だから二葉亭に功勞がありとすれば、美妙にも同じく功勞はあつたのである。わが國近代の文章史上に此兩者の功勞は決して沒すべきでない。

さて美妙が言文一致體の確實性を自らも認め、その基調ともなつたらうと思はれる初期の作「花の茨茨の花」の一節を此處に引用してみよう。これは獨逸の童話のやうなものを飜案したらしい。

笛の音が響始めるや否や、毎でも對岸の城の窓が開いて其處から美しい、小さな顏が出る。是も年齡は牧羊兒とおなじほどだらうけれど其顏形は猶麗しくて、姫君と見違へられるばかり。多分是は此城の若君でもあらうが、たゞ顏色は浮立つて居ず、さながら心に深い愁が有る樣で、その有さまは遠方の岸から現然と見える。

なるだけ無難な一節を拔いたのだから、これだけでみると、現代に行はれてゐる文章と殆ど大差はない。併し新しいものは未熟である、殊に美妙の言文一致には稚拙未熟の點が多いので、例へば同じ作中、春風を形容して「風の汽車に乘つて人の鼻の穴の隧道の中、鼻毛の木立の間を續々と旅行してゐる」などはわざとらしいといふよりも、をかしいと云つた方がよい。「もし繪なら金岡が良、ふ、あ、え、るが腕に痲痺を切らしてそれを描いたのでもあらう」「百鬼夜行の繪巻物が燐素の光に映つて居る樣……」「牧羊兒の涙の水では番卒の心の石も脆くなり」等々、このわざとらしさや、いやみやらは美妙の作の全部につきまとつてゐたのである。これでは新感覺派だつて喜ぶまい。

美妙の出世作「胡蝶」は廿二年一月「國民之友」新年附錄に出た。舞臺はよし、文體は新しいし、ぱつと世間の評判になつて美妙の文名は一時に擧つた。「胡蝶」は平家壇ノ浦沒落の情景を題材とした時代物で、創作としては何等の根强い生命をも持つてゐない場當りものに過ぎなかつた。それにも拘はらず世間で稱讃したのは、當時一流の流行雜誌「國

民之友」といふ雜誌がよかつたのと、今一つは讀者があつけに取られたせいもある。何故あつけに取られたかといふに挿畫（渡邊省亭）に裸體畫而かも日本畫の裸體畫を挿入したことなどが先づ衆目を驚かした。それも例の歐化思想からきてゐるので、世の非難攻撃に對して美妙の答辯は未熟にせよ美術の本旨には觸れてゐた。併し世間の大衆は美術のことなどは未だ分つてゐない、只小説の挿畫に裸體の女が立つてゐる畫を見てあつけに取られたのである。

「胡蝶」は彼自身も餘程得意の作であつたと見え、その緒言にも「實の處これこそ主人が精一杯に作つた作で決していつもの甘酒ではありません。匆忙の中の作だの何だのと遁辭をば言ひません、只是が今の主人の實の腕で、善惡に關せず世間の批評をば十分に頂戴します」と云つてゐる。

御座船も源氏の手に歸し、逃げ延びようとする他の女官達と共に、源典侍の侍女胡蝶は一旦海に沈んだが、再び磯づたひの海岸に漂上つた。

濡果てた衣物を半ば身に纏つて、四方には人一人も居ぬながら猶何處やら吾と吾身へ對するとでもいふべき羞を帶びて、風の嘯きにも、鳥の羽音にも耳を側てる胡蝶の姿の奧床しさ、うつくしさ、五尺の黑髪は舐め亂した浪の手柄を見せ顔に同じく浪打つて多情にも乾模の肌が掠め、眉は目蓋と共に重く垂れて其處に薄命の怨みを宿して居ます。水と土とをば「自然」が巧に取合はせた一幅の活きた畫の中にまた美術の神髄とも言ふべき曲線でうまく組立てられた裸體の美人が居るのですものを。あゝ高尙。眞の「美」は即ち眞の「高尙」です。

これが即ち畫面にも表はしてある一場の光景であるが、如何にも描寫が疎雜であり、まるでお說法をしてゐるやうな筆つきである。平家物語と美學の講義とを一緒に書き並べられては何んなにうまい文章だつて感興は拔けてしまふ筈だ。さて胡蝶はそれから裸體で居る處を相思の戀人二郎春風といふ平家の侍に見出され、救はれて後同棲三年、二郎は源氏の廻しものであるといふことが分り、若宮の身邊を安くする爲に二郎を殺してしまひ、自分も尼になるといふのが

一篇の筋、時代物の悲劇を單純に取扱つただけだが、これが抑も世評に上つた所以は前述の挿繪一件の外に矢張り言文一致體で時代ものを書き上げたといふ目新しさが主で、美術の眞髓とか、神經の鋭敏とかいふやうな文字の散見されることが却て當時の讀者を喜ばしたものである。なほ篇中人物の對話はわざと古典的な言葉が用ひてあつて、本文との對照が一層わざとらしく思はれるのだが、寫實といふ主張から美妙は好んで人物の對話に時代語を用ひた。

「胡蝶」の批評も方々に出たが、一旦別れ去つた紅葉さへ、胡蝶殿といふ宛名で公開狀を發表した。それに歌が一首附いてゐる。

かくすべき雪の肌をあらはして
　まことに何うも須磨ぬうら風

紅葉もさすがに裸體畫には感服しなかつたらしい。「胡蝶」の世評があまりやかましかつたので、最もそれに刺戟されたものは矢張紅葉だつたと思はれるが、果して「新著月刊」の第一編として「色懺悔」を作つた。時代物、悲劇、共に似てゐるが、紅葉は豫ての主張通り雅俗折衷體の文章で書いた。これがまた世間の評判になつた。けれども今から考へてみると決して紅葉の傑作ではなかつた。力餘つて背負投げを喰つた形で、彫琢の痕は分るがそれだけに渾然たる作ではない。聰明なる紅葉はそれを自覺して、その後の作は同じ雅俗折衷體でもだん〳〵いやみがとれてきて、一種の好い文體を作り出すやうになつた。美妙の方は必ずしも然うでなく、一大飛躍を試みながらもあとがつゞかない。一作毎に進境が見えるといふわけには何うしてもゆかなかつた。

三、小　説

美妙の全盛期ともいふべきものは極く短かゝつたやうだ。二十一年に「夏木立」を出して文才を認められ、その歳金港堂に聘されて「都の花」の主筆となり、翌春「國民之友」に「胡蝶」を出してますく\その名を知られ、「都の花」は一時萬以上の數を刷り、二十二年憲法發布の際の如き、祝意を寓した短篇（殆ど感想めいた）を特にその本文を赤インキ刷にしてゐるなど、得意さ想ふべしである。それから「都の花」に創作（最初は「花車」といふ作であつた）を發表する傍ら、二十三年には春陽堂から「教師三昧」を出し、二十四年には數種の時代物を發表した。さうしてゐる間に美妙の文名は傳はり、發表の機關も自由であるに拘はらず、一段と優越した作もなく、それでも逹筆家のことゝて明治三十年頃までは作をつゞけてゐたが、二十二三年頃から四五年頃までを絶頂として年一年と美妙の名は文壇から忘れられていつた。從つて美妙は他の意味では功勞があつても、創作家としては遂に第一流に立つことは出來なかつた。また彼の代表作として永く傳へるに足るやうな作もなかつた。

美妙が焦慮つてゐる間に、他の方面では續々新しい作家が現はれてきた。彼が去つた後の硯友社も、一時は淋しかつたが間もなく新進が集つてきた。川上眉山、巖谷漣、江見水蔭、廣津柳浪、渡部乙羽など多士濟々のかたちであつた。硯友社以外では露伴があり逍遙があり鷗外があり二葉亭があり篁村、綠雨、浪六があり、まだく\明治文學隆盛期の人逹はあとからく\と現はれてきて、三十年前後には鏡花、一葉、風葉、秋聲、春葉等も新進として頭角を現はしかけてゐたのだから、美妙たるもの常に一歩を讓らざるを得なかつたのである。

つまり美妙は文章を書く技巧は相當に有つてゐたが、人間を洞察する力に乏しかつた。努めて人間の心理を書かうとはしてゐたけれど、概念に囚はれてゐた。書けば書くほど抽象的描寫に了り、生きた人間のすがたは表はれてこなかつた。それにはさまく\の原因があるだらうが、馬琴一流の江戸文學の影響が思ひの外ながくこびりついてゐたこともその一つである。

馬琴に私淑してゐたことは前にも述べたが、極く初期の時代（十八九年頃）彼は樵耕蛙船といふ雅號から美妙と代る前に一時第二世曲亭馬琴と自稱し、その改名披露の宣傳文をさへ自分で書いたことがある。その頃は馬琴流行であつたから然ういふこともあつたのだらうが、後に言文一致を興し、西歐小說の感化も享け、大いに新しがりでゐたにも拘はらず根本的に猶馬琴流の誇張、說明、疎雜を脫し切れなかつた。紅葉露伴一派が三馬八文字舍西鶴といふ風に傳統を追隨したのに對して、美妙が馬琴近松といふやうに遡つていつた結果は、その作の上に興味ある對照を示してゐる。

二十七年七月の「早稻田文學」六十八號から連載された後藤宙外の「美妙紅葉露伴を評す」といふ一文は、三作家の評論として注目された。美妙の作には同感力と洞察力のないことを力說し、例へばその時代物に於ても「氏は推理分析史に徵し、傳に考へ、幾多の概念を得來りて、秀吉を造り、直義を造り、やがて尊氏をも、いちで姬をも組立てたるならん。即ち具體的に活現し能はざる所は註釋、記述、說明などを藉りて補ひたる趣あり」と評し、更に美妙の描く人物に就いて四つの斷案を下してゐる。第一、人心の脆弱陋劣なる半面をのみ寫すこと。第二、性格に不調和のあること。第三、心理描寫の抽象的、機械的。第四、同感なくして徒に罵詈愚弄すること等。而して彼の作の乾燥無味に歸することをいひ、結論において、

紅葉は江戶氣質に依りて限られたけれども、露伴が「我」を主とせる如き程には局ならず。且又美妙が人物を描かずして直に論ずるの弊にも倣はず、能く泣き、能く笑ひ、能く怒り、能く悲む。露伴は（美妙も或は）落想着眼紅葉より高し。然れども泣き憤り、悲むこと多く、殆ど笑ふことなし。美妙に至りては論じ、罵り、嘲けるのみ。眞の淚もなく眞の笑顏もなし。此の故に露伴は深く、美妙は細しと云ふを得ず、紅葉は二氏よりは廣しと云ふを得べし。之を要するに美妙は細なれども描く能はずして論ずるの傾あり。紅葉は描寫の筆廣けれども淺く、露伴は深けれども狹しといふべくや。

と評してゐるのは大體に於て妥當である。たゞ美妙が好んで人生の醜劣なる半面を描いたのを咎めてゐるのは必ずし

も當らないので、それは否定しないでも描寫の筆力に價値さへあればよいのである。

更に美妙の作そのものに就いて二三檢べてみよう。二十三年春陽堂刊行の「新作十二番」の中の一册で半紙本、全文木版刷といふ頗る凝つた裝幀であるが、內容は女教師の墮落してゆく徑路を書いたものである。書きようによつてはおもしろい作も出來たらうが、此作でみると彼には全然女性が理解されてゐない。寧ろ男性の興味で想像するあばずれ女の型を描いたに過ぎない。對話の一節を引いてみる。

「校長もなか〳〵粋なのねえ、もう妾たちにや隱さないンだけれど、中々根がいゝと思ふわ。」

「今出て行ッたのも例の家？」

「素より。また十二時頃かへッて來るンだわ。妾、昨日そ言つたの、あゝやつて毎晩こちらから通ふのは面倒だから公然とハズバ（ハズバンドの略亭主といふ英語）にしたらようムいましやうッて。」

「そりやア無駄だわ。」

「あゝ無駄だの。なに校長はたゞあの人を　座の相　にしてゝるだけよ。」

「何つッて？　いやだと言ッて？」

「たゞ、なに、笑ッて。勿論いゝわ、產科は御存じだから懷姙避姙自在だから。」

如何に荒んだ女だからと云つて、こんな對話を實際にやるものではなからう。而かも女教師どうし女學校の一室で、こんな話をしてゐるとは受取れない。却て實感に遠ざかつてしまふ。それからみると後年の作「阿千代」二十七年「文藝倶樂部所載）などの方がずつとよくなつてゐる。筋にも無理はなし人物も先づ描けてゐる。主人公はお千代といふ藝妓なので、花柳社會を寫すのに例の癖が出ないでもない、その知つたぶりが少々鼻につくが、「教師三昧」ほど理くつもなく、無難な方であつた。暫く作を出さなかつたので、「阿千代」が發表されると美妙は復活したとも云はれ、「早稻田文

學」や「青年文」でもその批評に激勵の言葉を添へたほどであつた。

美妙は時代物も可なり多く書いた。「新作十二番」と同じ木版和裝の單行本で「文學世界」（二十四年）といふものが春陽堂から出た。その第二篇に「猿面冠者」が發表してゐる。「あはゝ！　己、この今でこそは鹿爪らしい秀吉どの！　思へば吾ながら秀吉どのもよく出來た！　舊を思ふとちやん茶羅をかしい」と云つたやうな書き初めで、秀吉自らがその心事を解剖して獨語してゐる態に書かれたものだ。處が一向英雄らしくない、秀吉といふやうな大物に眼を着けたのは面白いが、英雄にも人間らしい半面のあることを描かうとして失敗したのである。「雪折竹」といふ題で利休と太閤を描いた作がある。それは「猿面冠者」ほど抽象されてゐないから、いくらか秀吉らしい人物があらはれてゐた。

同年に單行本として出版された「丸二つ引新太平記」は、足利尊氏同直義兄弟を主人公として、主として直義の心理を描出しようと試みたらしい。全體の構想は大きいやうに思はれるが世に出たのは一册きりであつた。これも「猿面冠者」より優れてゐる。此處に直義をあらはした一節を引く。

一人の新參の武士が來て始めて見參に入る、すると直義の目に掛つたが最期、左からも右からも四方からも八方からも色々な糸をあやつり出して、其性質をたしかめやうと樣々に探み　なされる、右で詐つたのもいつか奔命に疲れてやがて左りから見やぶられる、それからして見破つて直義自身その人間を一まづ自分と比べて見る、其處はどうで、彼處はあゝだ、やれどうだ、やれあゝだと語る處は其相手を大抵は呑むだけでした。曾て正成の盛名を聞いて竊かに心に烱たくおもひ、両胞の出る程逢ひたがり一度逢つただけで其後は忽然としてまた忘れたやうに口くされ正成とさへ言はず、怪んで傍の人に問はれると、せゝら笑つて、太々しくも呑みに呑んだ返答、馬鹿律義の雛形だけに此世へ生れて來た人物に幾度も逢ふには及ばぬとの言葉、さすがの兄も一言の下に呆れ果てゝ笑ひもされず……

かういふ猾智にかけた直義と、大塔宮との一條が脚色してある。「丸二つ引新太平記」は彼の時代物の中では讀みごた

へのする作であつた。

何事にも詮索好であつた彼は、前にも述べたやうにその當時の人物の言葉は勿論、時代の風俗、器具調度のこまぐ\したことまで調べあげて書いてゐるが、時にはそれが役立つてゐることもあり、無用に歸してゐることもある。

美妙はまた劇にも手を着けた。手を着けてみると先づ例の研究癖が起ると見え、「梨園の内祕」といふ題で「早稲田文學」(二十七年二三月頃)に芝居道の大小さまぐ\な事柄を連載した。併し美妙の脚本にはこれといふ好評を博した作もなく、亦上場されたものもないやうだ。二十七年一月博文館から「美妙齋新脚本村上義光錦旗風」といふ一冊ものに一番目玉堂恨話美人禪(三幕)中幕村上義光錦旗風(一幕)二番目忠烈百錬鐵(六幕)大切通達磨(常盤津連中)と一日の芝居を一人で書いてゐる。前觸のわりに反響はなかつたやうだ。なほ二三の脚本は書いただらうと思ふが、劇の方面では着手したといふばかりで永く活動はつゞけなかつた。

童話や少年物の類もある。これは理くつや議論をしても子供に通じないから、却て文才が役に立つて無難な出來、「夏木立」に收めてある「玉屋の店」「仇を恩」だの、「少年文學雨の日くらし」の諸篇なども皆今の子供に讀ませてもわかりさうに思はれる。

それで美妙は初め「胡蝶」を出して一時有名になり、次で、紅葉露伴その他に壓倒されて聞えずなつたが、「阿千代」が多少評判になつて元氣づけられたとみえ、その歳の十一月に「鰻旦那」、翌二十九年には「しゞみ賣」(太陽)「いのり首」「里見元勝」(文藝俱樂部)等四五篇を發表し、三十年には更に大努力を以て「閻魔地藏」(國民之友新年附錄)「好義人」(新小說)「たかせ川」(文藝俱樂部)「惡の善」(小說八家選)「小杉直茂」(新作文庫)等十篇からの作を發表してゐる。それらの作は皆たいした問題にもならずに過ぎて行つて、三十一年からは年に一二篇の作を主として「文藝俱樂部」などに發表しただけで、最後は三十九年の「四郎高綱」文藝俱樂部六月號)であつたやうだ。

四、詩

明治の初年に大學派が新體詩を創始したのは周知の事實であるが、それに對抗して一つの運動が企てられてゐたことを知る人は少ない。即ち山田美妙丸岡九華等の硯友社内に於ける意圖がそれであつた。

美妙は恐らく十四五年頃から漢詩や和歌と相並んで詩を作つてゐたことゝおもはれる。前にも述べた「竪琴草子」といふ「我樂多文庫」最初の作が假令馬琴調であつても一種の韻文に近いものであつたから、彼は小説を書くよりも、言文一致の文體を創めるよりもなほ早く詩（彼の所謂韻文）に志を有つてゐたので、詩の先覺と云つて差支ない。また紅葉も詩に指は染めたが只それだけのことで傳へるに足るほどの作があるのでもない。美妙の方は詩に就ての研究もあれば作品も多く、詩界最初の開拓者としては大學派と共に逸することはできない。

明治十八年の「我樂多文庫」に「二幅對美少年姿」樵耕蛙船といふ名目で七五の韻文を掲げてゐる。翌十九年十月それが一冊になつて刊行された。「新體詞華少年姿」（香雲書屋藏梓）といふ四六版八十頁ほどの冊子、內容は平田三五郎白菊丸、上田俊一郎、吉田梅若丸、鳥居福壽丸、森蘭丸、大川數馬等所謂美少年を捕へてきて抒情詩風に作つたものである。調は七五、勿論馬琴流のもので西詩の影響などは少しもなく、口繪にも揚州周延が篇中の人物それ〴〵の姿を描いてゐるほど江戸式だから、明治初期の詩集として見る時は頗る珍本の感じがある。

「少年姿」と同年に山田式太郎編輯として「新體詞選」が同書店から出版された。紅葉と九華と美妙との合著、詩は書生歌（紅葉）士卒の夢、佛國革命歌、路易帝斷頭臺、リツプ、バン、ウインクル（以上、九華）隅田川花見、行燈、戰景大和魂、古戰場、大川友石衞門（以上、美妙）の諸篇が收めてある。大抵は七五調で九華には最も長篇の作がある。美妙の序に一輙唄めきたる…和讚めきたる…直譯めきたる物ども全く跡を絶え眞美眞佳の新體詞のあらはれなんを

願ふあまり」云々とあるが、これは暗に大學派や古典派に對して云つたものと思はれる。

明治二十年頃、美妙が言文一致體の工夫に凝つてゐた時、九華に話した一節に韻文にも言文一致は應用されるやうにならなければならないが、散文の言文一致よりも詩の言文一致の方が更にむづかしいだらうと言つたことがあるさうだ。既にその頃から今日の口語詩に對する先見があつたわけである。

而して美妙は二十年頃から二十四五年頃までの間、盛んに詩を作つてゐる。「いらつめ」は自分の機關だから自作を載せるのは勿論、投書の詩をも載せてゐた。その他「國民之友」には「日本韻文論」と題する詩論、作では「智眠り愚覺む（二十二年）「つぼすみれ」「醉沈香」（二十二年）「さても此世の樂しさよ」「山の翁」「夏の貧家」（二十四年）水仙女（二十五年）等、「明治文庫」第五編には小説「みゝずばれ」や雜文もあるが、詩も「大龍王」「田舍聖者」「鎌倉小雛矢明恨」「貧」「あめは降る降る」「ゐなか娘」「母のなさけ」その他數篇あり、少年文學「雨のひぐらし」（二十四年）にも少年向の長篇の詩がある。二十四年に博文館から出版された「新調韻文青年唱歌集」（上下二冊）には「いらつめ」の投書家などから選んだ作が四十一篇、美妙自分の作が五十四篇集めてある。これは美妙の代表詩集ともいふべく、また詩の發達を知る上からも珍重すべき詩集である。

大學派の詩は謂はゞ詩といふものを始めて興したといふ功勞だけで、その作の價値は乏しいのだが、美妙の詩に至ると相當に藝術的價値も認められるのである。馬琴の七五調を踏襲した時代は問題外だが、「つぼすみれ」以後の詩には論するに足るものがある。美妙の詩の特色も、その散文と同じく概して技巧の上に重きを置いて見なければならないのだが、元來詩歌は一つの技巧である點から彼にはその才が詩に適應した點もある。その上、彼は作詩上、種々な試みをやつてゐるので、律格に於ても七五調以外、五七、八六、五七五、七七、五五などゝさまざまな調を試みてゐる。用語も亦大いに自由で、蕪雜は蕪雜であつても大學派などより遙に詩歌らしい香氣に於て優つてゐる。當時美妙と同じやうに

詩を作り出した人に宮崎湖處子や中西梅花があつて愛誦されたものだが、梅花にも作品も少なく、美妙より熱はあつたが、美妙ほど自由ではなかつた。詩の實技の上では美妙の方が研究的意識があつた。湖處子の詩は「歸省」の中に出てくるものなど凡て流麗とでもいはうか、無理な用語を避け、律格も七五調一點張りで完成されたものだが、その代り型にはまつてゐた。美妙は一定の型にはまらない代り蕪雜であつた。湖處子は古雅な詩語を使つたが、美妙は口語、現代語、近代語と手當り次第に驅使し、どんな卑近な言葉でもかまはずに用ひた。二十三年に作つた「つぼすみれ」は、

礒で　つみたる　つぼすみれ、
これ　見よがしの　衣紋どめ。
色が　黑むな、汐かぜに
ただなら　誰が　吹かれうぞ。

といふ句が初めで、殆ど口語に近い詩である。勿論技巧には囚はれてゐるが、その頃口語詩を試みようとしたのは大膽な企てである。

「貧」といふ詩は紙屑買をうたつたのだがその一節を引くと斯ういふ詩風である。

　富みたる　方は　うらやまず。
など　まづしき　か　さとり得ず。
　ふまれて　さわぐ　溷板(どぶいた)に
聞耳　たてて　ゐむ　つまの
　問はぬも　くるし　うすまうけ。
世は　せちがらく　なる子細、
むすぶ　紙撚(こより)の　一筋も

おろかに　すてぬ　うき世より
　つなぎのこせし　玉の　緒の
糸の　はし　引くはかなさよ。
　われ　もろともに　五人口(にんぐち)
五人に　わかつ　代(しろ)とへば……
　なみだ！　こどもは　やせ肱を
張りつ　張られつ　いでむかふ。

現代なら社會詩と稱し得られる處だが、その當時に於ても貧生活に觸れようとしたのが新しく思はれる。掛言葉などを使つた古くさゝは彼の散文と同じく變な癖が出來るのであつた。序に一言しておくが詩の形式に字間を離して書くのは美妙が始まりで、後に岩野泡鳴が踏襲してゐる。泡鳴は美妙の韻文論をも研究し、律格の上でも美妙から得たものがあつたやうだ。

美妙の八六調といふものを一つ拔萃してみよう。これだけの短いもの（飜案）だが音律はよく整つてゐる。

よもすがら　白く　とざす　さぎり、
　つかれたる　世をし　かろく　いだく、
れむげなる　川の　ほゝも　なめて
　かすかなる　山も　かげぞ　やどる。

更に六六調といふのがある。六六といふより三三調と云つた方がよいかも知れないが、その調も珍しく、その詩もおもしろいから紹介する。題は「野薔薇」、

ひとり　さける　のばら　あはれ

あかぬ　いろな　たれか　すてむ
のばら　のばら　あかき　のばら

いかで　ひとえ　なりて　ゆかむ
されど　ならば　てなば　ささむ
のばら　のばら　あかき　のばら

ひとり　さける　のばら　あはれ
てなば　させど　つひに　なりぬ
のばら　のばら　あかき　のばら

「雨の日くらし」には「うたへ鳥」といふ愛らしい童謠（今の童謠と比べて遜色のない）もあり、また紙屑買と同じ意圖になつたらしい坑夫の詩もある。「雛が三匹」といふ長い詩（童謠）があつて全く口語でうたつてゐる。子供向のものだと思つたせいか、その口語はよく消化されて、他の作のやうなわざとらしさが少ない。試みに一節を引くと、

「それ　は　お前　の　心得　ちがひ、
　この世　の　風　は　あらい　もの
時　に　よつて　は　母　さへ　も
　吹き　悩まされ　たぢろぐ　な、
お前　なんぞ　が　飛でも　無い、
　どう　して　凌ぎ　とほせ　やう。」

「いえ〳〵、それ は 母さま が
いつそ 却つて 心得 ちがひ、
是でも 羽 は ふたつ あり
ましてや 飛ぶが つとめ の 身。
御覽 そこら の てふ〳〵 の――
蝶の かよわい 身 で さへ も
あれ あの やうに ひイら ひら
面白さう に 飛んで 行く。」

かういふ口語詩なら非難はない、約三十年を經た今日、童謠はみんな斯んな風になつたのである。

美妙の詩の中で最も優れてゐるのは軍歌である。軍歌といつても「一里半なり一里半」的殺風景なものではない。「八州」「馬上吟」「るうまにあ軍歌」「蒙古襲來」など(「青年唱歌集」)皆おもしろい。「蒙古襲來」はトコトンヤレ節に模したものだが、長篇のわりに緊張があつて一種の民謠と見ても差支ない。恐らく斯う云ふ調子の軍歌は他になかつたらう。「るうまにあ軍歌」の方は七五調だが、これもなか〳〵勇壯でありまた優美である。今でも少年少女達に讀ませたらきつと歡迎するに違ひない。

軍歌はまだあるだらうと思ふが散佚して見當らない。たゞ一つ特筆すべきは「敵は幾萬ありとても」といふ軍歌で、現にレコードとなつて子供達にも覺えられてゐる。併し、あれは誰が作つたのか知つてゐる人は稀である。實は美妙の作で明治十八年刊行の「新體詞選」に「戰景大和魂」といふ題で載つてゐる。恐らく美妙其人も豫期しなかつたであらうが、四十年の餘もたつた今日、作者の名は忘られてもその歌のうたはれてゐるのを聞くと全く今昔の感に堪へない

五、稲舟事件

世に美妙對稲舟事件といふものが傳はつてる。噂の大要は美妙が稲舟女史といふ閨秀作家と結婚したが、間もなく美妙が虐待の結果離縁されて女史は郷里山形に歸り自殺した。世人は美妙をひどく攻撃したので遂に文壇から退かねばならなくなつたのであると。

右稲舟事件の眞相をしらべる前に、別に一つの知つて置かなければならぬことがある。稲舟事件の二三年以前、即ち二十七年十二月の「早稲田文學」七十八號の誌上に早稲田文學記者の家で「小説家は實驗を名として不義を行ふの權利ありや」といふ一文が發表された。その文の起草された動機は美妙が淺草公園の女（私娼の類？）石井おとめといふのに關係したことを「萬朝報」紙上に曝露されたが、美妙はそれに對して抗辯した態度が甚だ不面目に思はれたからであつた。早稲田記者は社會の道德上公憤を發したもので筆鋒甚だ鋭利少しも假借する處はなかつた。

> そも／＼詩文人は一世の豫言者たり、理想の能説者たらん爲に、罪惡を犯すの權利ありや。假に其の作物のいみじき價値は、此の罪惡を償うて餘あるべしとせよ。功過相償うて餘ありや否やは、疑ふらくは後世の裁判に一任すべきものならん。罪惡を行ふ者みづからは（殊にいまだ作せざる時に於ては）かりそめにも之れを口實とするの權利なかるべし。若しみづからかくの如きことを口にするものあらんか、人の之れを目して智は以て其の非を飾る足るものといはんも、之れを峻拒すること難かるべし。思ふに惡をなすに當たり、道德若しくは理義の假面を蒙る者は惡人の最も卑劣なるものなり。又惡をなせるのは、之れを分疏するに、高尚げなる口吻を藉る者は過失者の最も卑怯なるものなり。（一節抄出）

眞正面から打つてかゝるやうな筆法ではあつたが、論旨は要するに當時の道德を標準とした妥當な説であつた。然るに美妙が「萬朝報」の記事に對する辯疏は、

妖艶の巣窟たる淺草公園地にても既に腕前の凄しといはれし石井おとめ其人の人と爲りは初めより知りて之れを種にせんと思へばこそ近づきたれ顧れば玆に三五年其間の研究にて人事千百その怖るべくその悲むべくその笑ふべき所もいさゝかは覺えつ。(中略)。御社の記事の誣妄なるをのみ責めず又腹きたなく怒もせず已に昨日を以て其小說の稿を起し(中略)云々

と云つたやうな記事そのものに對する辯駁でも正誤でもなかつたのである。これは美妙が小說といふものと、生活といふものとをごつちやにした矛盾から生じたので、創作は創作として獨立した價値を有つてゐるのは無論であるから、自家の生活を誤つて傳へられた場合には、それはそれで正した方がよいのである。今もよくあるモデル問題などより聊か罪深い態度を取つたといはねばならない。

此の早稻田記者の一文は大いに反響を呼びおこして、惹いては社會の罪、個性の罪といふやうなことも論議された。此際美妙の爲に辯護の地位に立ち、社會は未だ美妙を勘當してはならないと云ひ「一文を讀むものはたゞ其の文を讀めば足る、强ちに其の作者を讀むの要なし、なすべくは眼前の批評をなせ、傳記の詮議は後來其人あらむ」云々と說いたのは「青年文」記者であつた。けれども美妙は世評に聽せず二十九年三十年と多々益々創作は出來たのであつた。

然るに突如として稻舟の自殺一件が持ち上つた。當時の新聞は擧つて稻舟を自殺したものとして傳へた。今その記事を拔いてみよう。

○稻舟自殺を謀る　一種有名なる小說家山田美妙齋といふ人のものとなりし山形縣西田川郡鶴岡町字三日町川端といふ所の醫師田澤清の娘錦子事雅號稻舟女史は輕薄なる美妙齋の爲め破鏡嘆の悲みを招き一時東京に滯在しゐ、煩惱の羈絆我薄命を恨みつゝ「月にうたふざんげの一ふし」を讀賣の紙上に寄せ實母の爲に國元へ連れ歸られしはも「忍び音」と題する短篇を海嘯義捐小說に寄せて我痴情を繰返し居たりしも遂に此世に在ることを厭ひけん去る五日の午後五時頃自宅の藥局より密かに少量のモルヒネを持出し突然之を服用して自殺を謀り嗟と其場に仆れしかば書生は大いに驚き其由直ちに主人に告げ逸早く解毒劑を投じたれば僅

に玉の緒を繋ぎ留め目下治療を加へ居るよし自身手を下さぬにせよ間接に此境に至らしめたる美妙齋こそ鬼とも邪ともいはんやうなし。（二九、八、一四、國民新聞）

○稲舟女史遂に死す　佳人薄命の語はあれど世に稲舟　女史程憐むべきはあらず女史嚢に輕薄無賴の山田美妙齋なるものに玩弄され忽ち破鏡嘆の境涯に陥り今春其母の爲に郷里羽前の鶴岡へ連れ歸らん身の不幸を悲みつゝ憂き月日を送るうち思ひ潛んで藥を仰ぎ死を圖らんとせしことは當時の紙上に記載せしが一旦此世を捨てんと覺悟せし身のその經過好かるべくもあらず哀れや去る十日午前七時十九歳を一期として散り往く桐の一葉と共に不歸の旅に上りしとなむ悼ましき限りならずや知る人女史の靈を慰めんとせば輕薄漢山田美妙を社會外に放逐して可なり。（二九、九、一七、國民新聞）

此の記事に依れば最初から玩具にするつもりで結婚したやうに思はれるが、美妙と稲舟とは互に愛があつたらしいので、初めは例の小説を見てもらうとかいふやうなことから知り合になり、頓て正當の結婚をしたのである。美妙にはその前石井といふ女に關係のあつたことは前述の通りだが、外に女道樂とか遊蕩兒とかいはれるやうな行ひはなかつた。眞の遊蕩兒肌のものなら結婚するまでに破綻が生じたらうと思はれる。矢張破鏡嘆のおもなる原因は齢のゆかぬ作家肌の女と、やかましい祖母さん（姑）との折合がわるかつたのではなからうか、さういふ家庭の事情に原因して事の起る時に美妙の態度の確實性を缺いてゐることは對硯友社の場合も然うであつた。稲舟が書き殘したといふ「月にうたふざんげの一ふし」といふものを讀まないから、何ういふ點をざんげし、恨んでゐるか分らないが少くとも美妙は女を虐待して自殺せしめるほどの男ではなかつたであらう。

なほその自殺說にしても今は大いに疑ひがある。石橋思案・丸岡九華兩氏の話では自殺說を否認し、催眠藥としてのモルヒネを多量に服みすぎて死んだのだといふ話である。最も年はといへば十九歳、まして多感な女性の身であつてみれば、愛の破綻に死にたくなる位のことはあるだらうから、死ねばよいと思つてわざとモルヒネを多量に服んだかも知

れない。その點は如何樣にも臆測し得られるのである。美妙が臨終に近づいたとき、稻舟のことは世間に誤解があると思案にも云つたさうだが恐らく然うであらう。

稻舟女史には「醫學修業」「白薔薇」「峰の殘月」「小町塲」「殘怨日高夜風」「五大堂」などの作があつて、「文藝俱樂部」の閨秀作家號にも顏を並べてゐるが、作物にはこれといふ新味も魅力も獨創もないやうであつた。たゞ筆が達者によく廻るといふことゝ、年齡が若かつたので何となく世間に持て囃されたといふだけのことであらう。「早稻田文學」の一投書家はざんげの一節を評して、寄せ豆腐のやうによろ〳〵した韻文、自分の過去をべら〳〵としやべり散らしたやくざなものゝやうに冷評してゐる。稻舟の書いたものから推測して然う深みのあるものだとも思はれない。その人柄もよくは分つてゐないが寡言沈默、琴を彈いても歌はうたはなかつたといふから憂鬱性の婦人であつたかも知れない。たゞ幾度も東京に出て、幾度も鄕里に引戾されたといふから、文學志望には熱心に違ひなかつた。

兎に角事件の眞相はさう大したことでもなかつたが、社會の制裁がきびしく、ひし〳〵と美妙の身に迫つて、やがてその晚年期に入つたのである。

六、晚　年

美妙の末路は甚だ悲慘であつた。「胡蝶」時代には飛ぶ鳥も落すばかりの流行兒であつた彼も、駒込の侘住居にその日その日の生計にさへ困るほどの境涯に陷つた。

その前、彼はラムネの製造か何かをやつたが、空しく失敗に歸した。再び小說家として立つにはもう時代が異つてきた。のみならず種々の事件で美妙の名聲に全く失墜して了つたのであつた。

一時痛憤を洩らす爲にアギナルドの同志と語り、危險人物視されたこともあつた。併し何うしても祖母、母、妻（稻

舟事件後に貰つた妻）子供など家族の生活は美妙の手で支へなければならなかつた。青木嵩山堂から出す筈の大辭典を受負つて差當りの生計を立てゝゐた。詮索好きの美妙に辭典の仕事は適應してゐた。佛教語を多く加へるとか挿畫を入れるとか美妙らしい考へはあつたやうだ。その辭典はとう／＼完成しなかつた。

紅葉のなくなる二三年前、飄然として美妙は紅葉を音づれた。紅葉もさぞ驚いたことだらう。勿論舊い昔のことなどは意に介してゐないが、美妙の方ではさすがに詫言を言つたさうだ。原稿の紹介を頼みにきたのだが、紅葉だつて今更何うすることも出來なかつた。原稿紹介の都合はつかなくても紅葉も出來る丈けの好意は持つた。その話にきた時、美妙は外套を被たまゝ座敷に坐つて、歸るまで脱がなかつたさうだ。

四十二年の暮に思案を訪ねて、また原稿（少年もの）の頼みがあつたので、九華が自作の西藏のお伽噺を寄與し、合せて美妙著とし博文館から出版した。それが美妙最後の述作であらう。

また少年園の山縣悌三郎も以前から美妙を知つてゐたので、落魄時代にも相當に面倒をみてゐたやうである。

美妙の最期は「早稻田文學」明治四十三年十二月號の彙欄に報じられてゐる。その一般がよく分るから抄略して載せて置く。

嘗て尾崎紅葉、石橋思案等の諸氏と共に硯友社を起して、小説の試作を公にし、或は言文一致の文體を主張して文壇の革新を促し、氏が明治文壇の先驅者として效績偉大なる山田美妙氏は十月二十四日午後五時十三分本郷區駒込上富士前町一五の寓居に四十三歳を一期としてその不遇なる晩年の生涯を終つた。（中略）要するに氏はわが明治文壇に於ける革新者の一人であつたと云はねばならぬ。併しながら文壇の人としての美妙氏の生涯はその前半生の盛であつたのに比べて、その後半生は實に目もあてられぬ不幸なものであつた。世間的ならぬ氏の性格はあらゆる方面に運命の破綻を生じて、あたら才　の後半生をして空しく不遇裡に葬り去つてしまつた。明治三十六年頃氏はフイリツピンの志士アギナルドの壯擧とその運命とに同情して、その同志を自宅に

對つて居たことなどあつた、不遇裡に於ける氏の胸裡は察するに餘りある。氏は又時にふれて小説の作を公にしたが、一度失つたサムシングは二たび得るによしなかつた。かくの如く不遇の間にも氏が成し了せた一大事業がある。それは國語の大辭典の著述である。氏は今夏來頸線痛腫の爲に再び起つの望なき病床に臥しながら何その稿を續けてゐた。その紙數凡そ十二萬枚であると云ふ。遺骨は十二月二十六日午後府下巣鴨染井墓地に葬られた。

而して會葬者は僅に五六人、その中に文學に縁故のあつたのは硯友社以來の舊友で、また美妙の晩年にも折々交通した石橋思案、丸岡九華の二氏だけであつた。

美妙の生涯は斯の如くにして終つた。美妙は「發明家」と渾名され、「お先走り」とまで云はれたけれど、彼の思ひつくものには間違ひはなかつた。美妙の考へた言文一致體の文章は一般の文章になつたではないか、美妙の試みた口語の韻文は現代詩として行はれてゐるではないか、美妙の創刊した婦人雜誌といふものは眼前にも見る通り盛んになつたではないか、美妙が初めて世を驚かした裸體畫はいくらでも見られるやうになつたではないか、歴史人物の心理描寫は現代の作家にも重んじられてゐるではないか。何事にも優れた思ひつきはあつても、それを完成し得なかつたのは美妙共人としては餘儀ないことであり、他から思へば誠に惜しい悲しいことであるが、それにしても文壇の先覺者山田美妙の名は明治文學史上から忘れ去ることはできないのである。

因に云　。山田氏には二人の子息があつて今は立派に成長し、一人は大阪に、一人は東京に住んでゐられるといふから、氏も安んじて染井の地下に眠つてゐられることゝ思ふ。

美妙著作年表

明治十八年　竪琴草子（我樂多文庫）
明治十九年　新體詞選（單行本、紅葉九華美妙合著）　新體詞華少年姿（單行本、韻文）　嘲戒小說天狗（我樂多文庫）
明治二十年　花の茨茨の花（我樂多文庫）
明治二十一年　情詩人（我樂多文庫）　花車（都の花）　夏木立（單行本、籠の俘囚、玉屋の店、花の茨茨の花、柿山伏、仇な恩、武藏野）
明治二十二年　蝴蝶（國民之友）　軍歌八州（少年園）　日本俗語文法論（國民之友）　智眠り愚覺む（國民之友、詩）　この子（都の花）
明治二十三年　教師三昧（單行本、新作十二番の內）　醉沙香（國民之友詩）　つぼすみれ（國民之友、詩）　日本韻文論（國民之友）
明治二十四年　丸二つ引新太平記（單行本）　猿面冠者（單行本、文學世界第二編）　やたらによ（單行本、聚芳十種第三卷、誠に憂世、橫澤城、松の下露）　雨の日ぐらし（單行本、少年文學第五編、糸犬一郎、忘れぬ慈愛、君子の胸、蝶のをしへ。及び詩無いものづくし、雛が三匹、うたへ鳥、坑夫）　新調韵文青年唱歌集（上下二冊、詩集）　さても此世の樂しさよ　山の翁　夏の貧家（國民之友、詩）
明治二十五年　いちで姬（單行本）　水仙女（國民之友、詩）
明治二十六年　明治文庫の五篇（みゝずばれ、雪の竹、古切手、くされ縁、及び詩大龍王、田舍學者、貧、その他數篇、雜文都門雜興、戶隱山紀行）

叢書　梨園の內秘（早稻田文學）
明治二十八年　阿千代（文藝俱樂部）　饑且那（同上）
明治二十九年　しゞみ賣（太陽）　いのり首　見ぬ勝　後の然月（
三篇文藝俱樂部）
明治三十年　閻魔地藏（國民之友）　惡の善（小說八家…）　好義
可憐狂　鳴呼廣內號（以上三篇新小說）　たか女川
右衛門（以上二篇文藝俱樂部）　小杉直茂　群虎（以
篇新作文庫）　馬丁仙吉（太陽）
明治三十一年　磯千鳥（文藝俱樂部）
明治三十三年　決鬪　死刑囚の懺悔（以上二篇太陽）
明治三十六年　血の淚（新小說）
明治三十七年　性空上人　大博士　以上二篇文藝俱樂部）
明治三十八年　勢至丸（文藝俱樂部）
明治三十九年　四郞高綱（文藝俱樂部）

右の年表は現在の手許にある材料だけでこしらへたものだが
の外に「いらつめ」は無し、都の花」も見本があつて調べか
甚だ不完全な年表であるが他日また／＼諸氏に材料の供給を
補修したいと思ふ。今は遺憾ながら此まゝにして發表してお

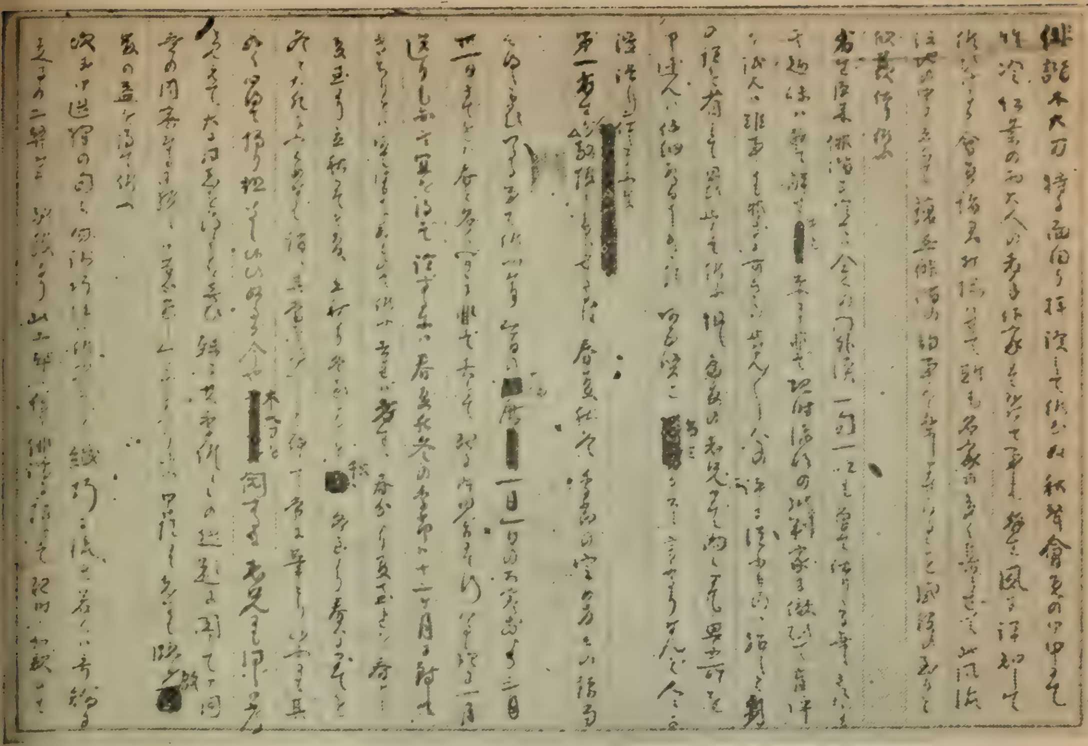
櫻痴居士の俳句評

市島春城

左の一篇に福地櫻痴居士が、角田竹冷に寄せて竹冷一派の俳句を批評した書簡である。書簡の原書は十二行の美濃紙罫紙四枚に細書したもので、往年竹冷が尾崎紅葉に轉送したのを、私が貰ひ受けて、今も藏してゐる。居士は書中にいふごとく、自から俳句を作らなかつたが、併し其評は皆な要を得て、着々中つてゐる。先づ俳諧の季節を論じ、竹冷一派の俳諧を總論し、次に俳諧に忌むべき事を擧け、終りに秀句を摘錄して一々評を下してゐる。居士は晩年論壇に筆を絶ち、脚本家となり小說家となつた。其の豐富の才藻は行く所として可ならざるは無つた。其の天才的の負けず魂は、俳句に對しても默過は出來なかつたのである。但し居士の俳句に就ての說は恐らく此外には無らうと思ふと、此の書簡一通は頗る珍とすべきである。竹冷一派の俳諧は明治の文藝史に逸



晩年の櫻痴



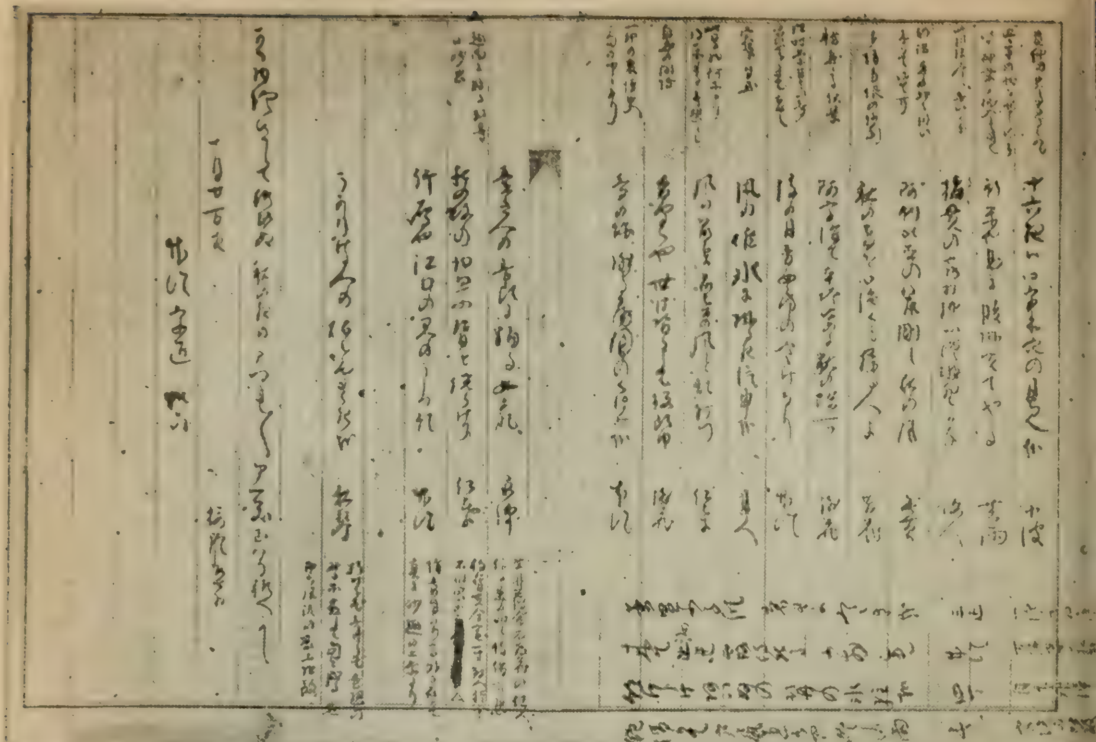
す可らざるものたるは云ふまでもない。其俳社は秋聲會と云ひ其の機關雜誌は「木太刀」といふた。社中には紅葉小波を始め硯友社中の人も參加してゐた。櫻痴居士の批評は即ち「木太刀」に載せた秋聲會員の句に就てであるから、木太刀と其作家を紹介するにはお誂以上のものであると思ふて、其全文を寄することにした。(但し三四句讀み兼ねしものを脫したことを斷つておく)

昭和二年三月中浣　市島春城

櫻痴居士筆

俳諧木太刀特に面白う拜讀して候ひぬ、秋聲會員の御中にて、竹冷紅葉の兩大人の老手作家にておはす事は、劣生夙に詳知して候ひけるが、會員諸君打揃はせて、斯く名家の多く集らせて、此風流沒地の中に立ちて、藐然俳諧の韻事を樂しませらるゝこと感服の至りと欣羨仕り候ふ。

劣生原來俳諧に於ては全くの門外漢、一句一吟も曾て仕りたる無し、されども其趣味は敢て解せずと云ふにも



櫻痴居士筆

非ず、現時流行の批判家に傚ひて盲評を試んは、難事にも非ざる可きが、止なん〳〵。今の評に從ふものは殆しと、身の程を省みて思ひ止りて候ふ。但し舊友の志兄にまで内々にて思ふ所を申述んは、仔細あるまじき歟。あな賢こ。劣生が云々喬ぶなりなんど人々に漫語仕たまふな。

第一劣生が志兄の御苦心に敬服參らせたるは、春夏秋冬、季節の定め方、その穩當を得たまひつる事で候ふなり。今日の太陽暦一月一日の大寒前より三月三十一日まてをば、春と名くべきに非ず。去とて現に片田舍にて行はるる類ひ、一月送りも亦其實を得ず。詮する所は、春夏秋冬の季節は十二ケ月に對して、きちりとはあてはまらぬもので候ふ。去れば劣生は春分より夏至迄を春とし夏至より立秋までを夏、立秋より冬至までを秋、冬至より春分までを冬と、大凡に定めなば、稍々其當を得べしと存じて、常に筆とり候ふにも、其如く心得て獨り極いたし候ひぬるが、今や一木大刀」を閲するに、志兄にも同じ御考と見えて、大に同志を得たるを喜び、殊に其の

至候々々の撰題に關して御用意の周密なるに服し、御苦心察し上たてまつり候ふ。御蔭にて志生も頗る啓發の益を得て候ふ。

次に御撰擇の句に勿論巧拙は候ふべきが、纖巧に流れ、若くは奇矯に走るの二弊なきは敬服なり、此二弊は獨り俳諧に限らず、現時は和歌にも、漢詩にも、俗歌にも、淨瑠璃にも、文章にも、都逸附纏ひつる弊風にて候ふが、夫を斷然擯斥ありて、奇想は奇想のまゝ、叙景抒情は叙景抒情のまゝと、別に罪深き剪裁を加へずして、天籟自然を全くするの高識、大に劣生の心を得たり。原來奇想雄思は求めて得べきに非ず。布置結構の妙想なき畫家が絖紙に臨みて俄かに筆を嘗め、何がな奇拔の繪を寫出さんと致ても、書き上て見れば、岩が跳たり、樹が踊たりして見ゆるだけで、其山水は依然凡庸の山水にて、花卉人物みな其道なり、文章も亦然り、徒らに目新らしき語句を拈出し、甚しきは、自ら製造の語を弄して讀者の眼に新奇を映せしめんと謀るも、其立案趣向が平凡陳腐なる時は、更に其甲斐なきものぞかし。此理を達觀ありて、秋聲會員諸君の句々皆平易にして活氣あるは、實に世上俳諧の弊風を矯正するに足れりと云ふべし。「木太刀」の句句概ね蕉門の正風と見受らるゝが、偶々談林の如きもあり、江戸產の如きもありて、敢て一派に僻せず、流風に拘泥せられてる所、識見の卓越なる尤も面白く拜讀して、夜の深るをも覺えざりけり。

劣生が幼少の頃に先人石橋先生戒めて宣く、詩歌にまれ、文章にまれ、經典詩賦若くは古人の姓名典故などを戲謔に濫用すること勿れと、諄々に其非なるを誨へ玉ひき。劣生は此誨戒を記憶して爾來詩歌文章を讀むに、成程この戲謔は一寸は面白さうで、其實は決して面白からず、覺え候ふ。今や「木太刀」中にて這般の戲謔あり、其一二を擧んに、

千早振卯月八日の野守哉

千早振卯月八日は吉日より歌が原來俗歌也典故とするに足らず

子の内は世をうち山の鹿ならず

世をうじ山と云へる喜撰法師の歌に子鹿何の因緣がある

新茶煮て喝破す聖諦第一義

是れ聖諦第一義の問答を解せざるの作家たり

木の下の藤吉も居る納凉哉

卽ち古人を穢すもの

の如きも劣生が敬服せざる所なり、然れども劣生は一概に比類を非とするものにあらず、左の諸句

鳥一聲山靜かにて椿落つ

五畝の宅井戸も厠も柳かな

春雨や烏啼て山客猶眠る

昔男ありけり今も杜若

夕立の來ぬへき雲のふるまひよ

長安に響けと打つか小夜砧

切干も三千丈や西ヶ原

の如きは所謂善く戯謔して虐とせざることなれば、勿論集中にありて然るべき句なり。

次には俳諧は惡口を旨とするに非ず、然るに奇警斬新の趣向を求るの餘り、識らず知らず惡口に陷ること、詩文の通弊にて、集中にも亦往々見掛け候ふ。

菫摘む中に紅毛の少女あり

春の夜や老道士書を枕にす

覗いたれば唯の女よ青簾
蝙蝠や金貸の女露地を出る
汽車の旅人誤つてラムネを浴ふ
女客ラムネの泡の消えるを飲む
順禮の道に產する清水かな
事じやく納凉の女水にはまる
君が代や月の出て居る大晦日

の如き是なり、中にも

漢方醫の書齋古たる葭戶哉

の如きは實に奇趣奔逸の妙はあれども、惡口たるを免れざるは惜き事にて候ふ。
次に無風流所謂殺風景の句ある、是また奇拔の警句を吐かんと思ふ餘り、誰も踏迷ふ岐路にて候ふなれば、所謂風流の魔道に陷るものなり。

戀猫をいたく打たる女かな
佛頂に糞ひり掛ける乙鳥哉
權門に馬の嘶く牡丹かな
夜をこめて葬禮ゆきぬ時鳥
暗がりに小便すれば鳴く蚊哉
水音や團扇暫く尻に敷く

化粧して鼻に汗かく娘かな

名月や誰がふんどしぞ竿の先

升に落てしられし除夜の鼠哉

の如き一吟すれば、其意表の趣向面白きやうに候ふが、試に靜思して再三再四吟誦して見たまへ、奇警にせよ、斬新にせよ、沒風流殺風景の譏は免れ難かるべきか。

斯いへば劣生が選擇のやかましき、「木太刀」集中一の完璧なしと云ふかと、思召されんが、決して然らず、戯謔に陷らず惡口に流れず、沒風流たらずして、しかも或は奇抜雄渾、或は温𩜙典雅の名句いくらも見受けて候ふ。其中にて劣生が尤も感吟いたし候を左に選ぶべし。

狼の人喰ひし野も若菜哉　　紅葉

天地の妙觀收一句の中にあり

殘雪や如意輪堂の椽の下　　竹冷

何等の感慨

鶯や須磨の苫屋の古簾　　碌一

淸麗佳調

涅槃像獅子の泣面哀なり　　鳥里

奇想天外より來る

金堂も蹈ばかりなり□（一字不明）菫　　浦花

○田よりも一層の妙あり

雉子の尾に良狗の額飾らはや　　紅葉

典故の活用□（不明）の如くにて實に妙

牛も寢つ牛飼も寢つ日永なり　　竹園

宛然畫を觀るが如し

嘴の赤き鳥が浮くぞや□（不明）むぞや　　知十

光氣を出す何等の妙手て

ふうわりと三笠の山やおぼろ月　　竹冷

巧を求めずして自ら巧

萱の藥に酢を乞ふと書き送りけり　　紅葉

巧妙極りて斧鑿の痕なし

鳥部山の烟仇し野の露さくら哉　　凸瀬

人生の無常觀

斗酒ありや日暮て胡瓜刻む音　　紅葉

常事を巧に卒して　て風流の家事に轉化しえる

つれ〳〵や雙が岡の五月雨　　竹冷

劣生尤も此種の句を愛吟す

篝火は小さく焚えて涼み舟　　無黄

一幅の妙畫

肌寒の身は國を出て十歳かな　蘆水
十年夜雨不曾知より脱化し來りて妙

十六夜は御家來衆の月見哉　小波
貴紳の樂事見るが如し

新米や馬に腹掛買てやる　黄雨
豐年の狀を寫し得て以て神樂に挿入して可なり

指貫(サシ)の露打拂ふ嵯峨かな　飯人
此風流今は無いかな

河刺比亞の鬣剛し秋の風　無黄
新語是の如く用ひ來りて初て可

秋の暮を心強くも寢る人よ　苔花
多情多恨の妙句

阿字消て卒塔婆に秋の蝶一ツ　殘花
愴然たる秋景

後の月青女房の寒けなり　竹冷
往時榮華の夢思ひやられて哀也

凩の碓氷に掛る夜汽車哉　月人
實景自然

凩の落葉落葉と風と亂れ打つ　紅葉
此景物何所より得來れる奇想々々

香聞くや世はかりにして投頭中　　残花
　自然の開悟

夢の路殘る蒲團のくぼみ哉　　竹冷
　一部の哀情史一句の中にあり

憂き人の音頭に踊る女かな　　愚佛
　生非薄命不爲花の佳人信に是の如し情緒可想

秋の蚊の物思ふ臂を繞りけり　　紅葉
　約臂黄金寛一寸、對人猶言不相思の趣向に勝る數等の妙思

朝ほらけあいぬの髯の氷柱哉　　四丁
　自から雄渾

鉋借りて戸尻直すや冬の雨　　無一
　實況の妙致

行雁や江口の君のうしろ影　　竹冷
　情意自から言外に在りて眞に妙趣の上乘たり

うかりける人の砧を聞く夜哉　　秋琴
　巧ならず奇ならず意想の到る所發して句と成る是即ち風流の最上極致

かく拜讀いたして候ひぬ、秋の夜の御つれ〲御一笑玉はり候へかし

十月二十一日夜　　櫻痴居士拜

竹冷宗匠机下

明治から昭和へ（三幕）

坪内士行

序幕

下手寄りに十疊位の日本座敷。正面へ續けて茶室。正面奥は植込み、生垣、上手前寄りに泉水。座敷の前に盆栽數株。庭の中央に櫻の苗木。その周圍にさゝやかな繩張り。築山、石燈籠等宜しく。すべて、東京の小笠原市之進の邸の體。

時は明治九年。秋の夕近い頃。

幕開くと、小笠原市之進の娘おむら（十九）と、山路千代（十八）とが座敷にゐて、千代は琴をひいてゐる。庭では市之進が盆栽に手を入れてゐる。

琴が終るので、市之進は娘達へ振向く。

市之進　上出來々々々。大層手があがりましたな。

千代　お耻しう御座います。

市之進　いやく、暫く聞かぬ中に、大變な御上達ぢや。今では到底おむらなどの及ぶところではない。

むら　どうせ私は不器用で御座います。

千代　あれ、おむら樣。お腹をお立て遊ばさないでね。

市之進　ハヽヽ。わしに惡口を云はれてふくれたからとて、千代さんが詫びなさるわけはありませんよ。あんたは大體氣が弱過ぎるよ。

千代　すみません。

市之進　それ〳〵、その通りすぐ詫びなさる。テモお優しいお子ぢや。おむら、ちと千代さんを見習つて優しうするがよいぞ。本當にお前と千代さんとを一つにして二で割ると丁度よいのぢやがのう。

むら　お氣の毒樣。

市之進　お氣毒樣！　これ、どうもお前の我儘にも困るのう。親に向つてその云ひ方は何ぢや。

むら　「天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らずと云へり。されば、天より人を生ずるには萬人は萬人皆同じ位にして、生れながら貴賤上下の差別なく、萬物の靈たる身と心との働きを以て天地の間にあるよろづの物を資り、以て衣食住の用を達し、自由自在、互に人の妨をなさずして、各安樂にこの世を渡らしめ給ふの趣意なり。」

市之進　何ぢや、それは？

むら　これからの世の中は、四民平等、獨立自尊でなければなりませんと申すこと。

市之進　これさ、いかに當世ばやりだからと云つて、女の癖にそんな屁理屈ばかり覺えては困るな。まあ〳〵宜しい。さ、千代さん、庭へ出て、此の苗木を御覽。これから二三ケ月の冬ごもり、その冬を越すと、可愛らしい芽を出し、やがては奇麗な花も咲かう。こんな小さな苗木が今に此の庭一杯に枝をはり、目も綾な花をつけたらどんなであらうわしはそれを見るのが樂しみでなりませんよ。

千代　ほんに可愛らしい苗木で御座いますこと。

此の間におむらは、小間使を相手に膳を片づけ去る。

市之進　（優しく千代の肩に手をかけ）千代さん、櫻の花の盛りも樂しみぢやが、わしはお前さんが尙孝の嫁となつて、樂しく暮らして行く日の來るのが心待たれてならんのぢや。明治はもう九年にもなつたが、征韓論の爭ひ以來、愛國公黨や征韓黨、やれ安全社とか憂國黨とか諸所で徒黨を組む者が續出し、西鄕さんは薩摩に引きこもつて私學校を起さ

それぱかり朝夕考へてゐますぢや。のう、老人の云ふ事ぢや。あの兄妹二人と仲よく折れ合つて行つて下されよ。

千代　（涙ぐみ）はい、はい。いたらぬ私で御座いますが、倘孝様のためには、身も心も捧げまして……

市之進　有難い。よく云つて下された。あゝ、それ聞いてわしも安堵しました。お前さんと倘孝となら、似合したよい夫婦が出來ようての。

千代　（耻ぢて）あれ、あんな事を。（顔をかくす）

市之進　ハヽヽ。

奥からおむらが鋏を持つて椽先へ出る。

むら　お父様々々々。

市之進　何ぢや。

むら　此處へおいでなさいまし。

市之進　（椽側へ來て）來たが何ぞ用か。

むら　はい。大變な御用。

市之進　はて、何かな？

むら　今日はお約束の日で御座いますから、髪をお切り直ばせ。

市之進　（辟易して）あ、あれか。（ベソをかく）

千代　（むらに）何で御座いますの？

むら　いえ、こないだから申してゐるので御座いますがね、斷髪令が出たのは明治四年で御座いませう、もう六年も經ちますのに父はいまだに髷に執着をもつておりますので御座いますよ。ですから、私はやいく申して、とうく今日は切ると云ふ約束を致させましたの。お父様、早くおゐで遊ばせ。

市之進　おゐで遊ばさん。のうおむら。お前方は女だから何でもなからうが、男として、日本の男子として、此の髪の毛がどれほど大事なものか、お前方は感じる事が出來まい。すでに去年廢刀令が出て、二腰をたばさめなくなつたのさへ日本武士道の衰へぢやと思つてゐる。まして此の身についた髪を切るなどゝは、坊主どもか毛唐共のする振舞ぢや。

むら　（笑って）お千代様、父はいつでもあゝ云つて駄々をこねますの。可笑しう御座いますわね。あの河原者と云はれております舊弊な社會の市川團十郎さへ今年は散髪になりましたし、默阿彌とか申す狂言作者などは二年も前にもう髪を切つておりますのに。

市之進　父を河原者などに比べるとは何事ぢや。

むら　河原者でも市民權を持つてゐます同じ日本帝國の一員で御座いますわ。

市之進　いやはや女の癖によく理屈を云ふ奴ぢや。此の様子では、今にお前方も髪をザン切りにして、空を飛んで歩きかねまいぞ。あゝ、世は末となつたなあ。

むら　男女同權々々々々。

市之進　千代さん。お前さんはどう思はれる、おむらのあの云ひ草は。男女同權などゝ聞き噛りの理屈を云ふ。「おなじとは誰か云ふらん鳥すらも、牝鳥は時をつけぬなりけり。」な、お前さんは純粋の日本娘ぢや。な、おむらに見習つてはなりませんぞ。

千代　女とても時代に連れて進まねばならぬとは存じております。

市之進　ホヽヽ。

むら　痛快々々。

市之進　痛快！

千代　あら　さう云ふつもりで申したのでは御座いません。

おら　宜しいのですよ。お父様はお旗本でもお道樂仲間の粹人だつたのですもの。

市之進　これ、さう親の棚下ろしをするな。

むら　さ、そこで散髪。

市之進　（泣きさうで）そ、、それは勘忍してくれ。

むら　いえ、なりません　進取の精神はまづ斷髮に始ります。今日はどうあつてもお切り申します。

市之進　待つてくれ〳〵。これ、千代さん、止めて下さい、娘を止めて下さい。こりやはやとんだ女難ぢや。

市之進逃げる。おむら追ふ。千代止める。息子の尙孝と友人の山路公共、野田大介の三人庭から入る。野田は驚いておむらを止める。

野田　これ〳〵、危い〳〵。おむらさん。まあお待ちなさい。いかなる仔細あるにもせよ、暇りにも自分の父親を、刄物をもつて追ひ廻すとは理不盡千萬。お待ちなさい〳〵。これ〳〵みんな、笑つてゐると云ふ法があるか、早く止めたく〳〵。

むら　何をなさるの、野田さん。くすぐつたい、放して下さい。

野田　放したら、あなたは御父上の命をとるのでせう。

むら　相變らずあなたはランプのホヤね。

野田　ランプのホヤ？

むら　拔けてると云ふこと。

一同　ハ、、、。

野田　ぢや、何だつてそんな刄物をもつてお父様を追廻してゐるのです。

むら　今日はお約束の日だから、お父様の丁髷を切らして頂きますの。

野田　あゝ、丁髷か。成程、そりやお切りになつた方がいゝでせう。時勢ですからなあ。野田大介、仲裁の手を引きます。

市之進　尙孝や、どうしよう。

尙孝　勿論お切りになるが宜しいでせう。

山路　それにしても、おむらさん、鋏では切れませんよ、やはり本式に小刀をとぎ上げてスッパリとなさらなければ。

市之進　おゝ、スッパリと云へば、昨日讀賣で讀んだあの松田での二人斬りの模樣を聞いたかの？　今日はあそこへ晝飯を食ひに行つたのではないか、お前達三人は？

此の間におむらは、小間使をよび、千代も手傳つて茶を出す事。

尙孝　は、參りました。

山路　美事だつたさうで御座いますよ。何しい上田馬之介と云ふ奴、よほどの腕前と見えまして、階子段の上から、かう切り下ろしてくるのを刄物を奪ふなり一人は下へづでんどうと肩車にかけ、上の奴を一刀に撫いで倒し、そのまゝ飛び下りて、まだ起き上りもせぬもう一人を唐竹割りの拜み打ちにしたさうです。

野田　つつぷして嗅いで見たら、廊下はまだ血なまぐさかつたですよ。

むら　いやらしい人。

野田　ハ、、。その二階で喰つた今日の味噌漬の鯛は又格別ベリーグッドでした、ハ、ハ。

千代　松田と申すのは、銀座で評判の料理屋の事で御座いますか。

尙孝　さうです。松田と千歳と云ふのが競爭してゐます。

山路　（千代に）今度おむらさんもお誘ひして、お前もお伴したらいゝね。松田の便所と來たら立派なもので、田舍からわざ／＼見物に來る位だからね。

尙孝　行くなら千歳の方がいゝ、あそこで田樂を喰ふのだね。松田は格が落ちる。まあ、此の手合相應のおごり場所さ。

野田　これ〳〵、慮外な事を云ふまいぞ。松田の今日の拂ひをいくらだと思ふ、三人で一圓三十六錢のマネーを拂つたぢやないか。葢飯としては法外なる値だ。

市之進　何にしても物値が高くなるには困るのう。

むら　何のかのと仰つて、お父様、髷の事をお料理の話でごまかしておしまひにならうとしても駄目で御座いますよ。ねえ、兄様、今日は皆様もお立合ひで、是非お父様を文明開化のお頭(つむ)になる様、御贊成下さいな。

尙孝　さうですね。これは私からもお勸め致します。

野田　ヒヤ〳〵。僕もセームな意見だ。

市之進　どうでも髷を下ろさねばならぬかなあ。あ！　情けない。有爲轉變の世の中ぢやなあ。

（むら、小間使を呼んで云ひつける。）

むら　山路様、父があばれるといけませんから、御一緒に湯殿まで行らしつてお見張り下さいな。

山路　ハヽヽ。見張りとは嚴しいですが、お手傳ひ致しませう。

野田　未來の御夫婦でお舅の髮おろし、これは御苦勞千萬な事で御座る。ハヽヽ。

むら　（流石に顏を赤らめて）いやな野田さん、覺えてゐらつしやい、さ、お父様行らつしやいまし。（三人去る。）

尙孝　（野田に）君も一緒に手傳つてやつてくれ給へ。

野田　なに、我輩も奥へ行けと？　（千代と尙孝とを見比べて）あ、成程々々。（唄ふやうに）戀にはなまじ連れは邪魔。（自分の耳をひつぱつて）こりや邪魔者。とつと、奥へデスアピアー。

（野田も去る、千代と尙孝だけ殘る。）

尚孝　今日は又どうやら雪空になりましたね。

近くで端唄を唄ふ聲が聞える。

千代　うつとうしい事で御座います。

尚孝　（櫻を見て）苗木ながらに春待ち顔の此の櫻、もう一と月もすれば芽が出るでせうね。

千代　ほんに左様で御座いませうね。

尚孝　千代さん、私は此の間中から云はうと思つてゐましたが、千代さんは本當に私を信じ、どんな事でも私のする事に同意して下さいますね。

千代　勿論で御座います、どうして今さらそんな事を仰います。

尚孝　實は私や、あなたの兄さん、又野田大介などはみんな西郷隆盛さんの征韓論に共鳴して、當局の非を鳴らし、及ばぬまでも西郷さんの味方をしようと相談し續けて來たのです。

千代　やつぱりそうで厶いましたか？

尚孝　と云ふのは？

千代　いえ、實はたつた今、お父様からもそのお話が出ましたので。

尚孝　あゝそうでしたか、今や日本は征韓論破裂の後を受けて、廟堂に立つ者と野に在る者とが二派に分れて、一大論議の眞最中です。吾々若い者として、そのどちらかに屬しないものはありません。私も血の燃え立つ若者です。一時は九州へはせ下つて、と思ひ立つには立つたのですが、近頃つくづくさう云ふ事の愚かなのを知つて、すつかり方針を變へようと決心しました。

千代　まあ、どう云ふ風に？

尚孝　私は、日本が朝鮮を伐つてこれを取り、領土を擴張すると云ふ事よりは、もつと平和的に、國家の大をなす所以

力をもつて從へやうとする企てに加はるべきではないと悟つたのです。

千代　まあ。

尚孝　私はこれからは飽くまで平和的に、各々のベストを盡しながら、尙且他に利益と幸福とを與へるやうな仕事をして行かうと決心しました。あなたは勿論それに同意してくれませう。

千代　申すまでもございません。

尚孝　國家をあげて戰爭の渦中に投じようとしてゐる時に、私のかう云ふ風な考は、きつと四方八方から非難の的となりませう。そんな時に、そんな時に、私は味方が欲しい。一人でいゝ、眞に私の心持、私の態度、私の信念を信じ、ひつしと、胸と胸との奥底から共鳴して、どんな場合にも私を助けてくれるたゞ一人が欲しいのです。

千代　おむら様はきつとあなたの味方をなさいます。

尚孝　妹は私を知つてゐてくれます。あれは私を信じてくれます。然し妹は平凡です世俗的な一婦人に過ぎない。人を鼓舞するやうな魅力がありません。私の求めるのは、私を力づけ、私を鼓舞する魅力です。起死回生の天來の靈感です。私はあなたにそれをさづけて貰ひたいのです。

千代　(涙ぐむまで感激して)まあ、私などが!

尚孝　あなたは音無し過ぎる。あまりに謙遜過ぎます。どうか私にどんな事があらうとも、きつと私の終生の力となる事を約束して下さい。

千代　く。

尚孝　いやですか?

千代　いゝえ。けれども〳〵、あんまり勿體なさ過ぎます。私は、私は、そんな力のある女では御座いません。

尚孝　あなたは、どれほど私があなたに縋り、賴り、望みをかけてゐるか知らないのだ。男は、自分を知り、自分を鼓

舞し、自分を甦がへらせる婦人をえた時、その時にこそ百倍の力をえるものです。英語で妻の事をベターハーフと云ふのを知つてゐますか。それは全く此の男子を男子たらしめる天來の靈感を與へる力が女子にある事を云つたのです。千代さん、どうか私にその力を與へて下さい。どんな場合にも。

千代　はい。

尙孝　きつとですよ。

千代　はい。（ハラ〳〵と粉雪降る。）

尙孝　あ、チラ〳〵降つて來ました。

讀賣が讀んで通る。「さあ〳〵、大變ぢや〳〵、熊本御城下の大混亂。敬神黨が乘り出した。さあ〳〵、大變々々。」

尙孝　（呼ぶ）忠造々々。

下男忠造庭へ出る。

忠造　はい〳〵、お呼びで御座いますか。

尙孝　讀賣を買つて來い。

忠造　はい〳〵。（忠造急いで去る。）

尙孝　座敷へ入りませう。

山路公共出る。

山路　おゝ、千代、お前奥へ行つておむらさんを手傳つて上げてくれ。

千代去る。

尙孝　よいところだ。公共、一寸話がある。

山路　今の讀賣は何だ。

尙孝　今買ひにやつた。

忠造　へい、買つて參りました。
尙孝　御苦勞だ。（忠造去る）
山路　尙孝と讀んで顏を見合はせる）とう〳〵始めたな。
尙孝　いよ〳〵始まるな。
山路　この次はいよ〳〵西鄕さんの立たれる番だ。我々の奮起すべき時は近づきつゝあるな。
尙孝　いや、山路。實はそれについて君に話がある。
山路　今さらしく何だ。
尙孝　僕は深く思ふ所あつて、かねて約束の事は勿論、一切の戰ひ事から身をひきたいのだ。
山路　え！　かねて約束の事？　我々同志が西鄕さんの味方をする事を云ふのか？
尙孝　さうだ。
山路　どうして、どう云ふ理由で？
尙孝　理由を云へば長くなる。が、つまり、僕は日本國家のため、いや廣く高く世界人類のため、武力や暴力に訴へる事は何によらず絕對に不善であると考へるに至つたから、一切戰爭などには參加したくないのだ。
山路　なに、もう一度云つて見ろ。
尙孝　僕は爭ひに加はりたくない。僕は平和な仕事に專心一意猛進したいのだ。
山路　馬鹿！
尙孝　君が怒るのは百も承知だ。然し、僕の此の心はどうにも變へる事は出來ない。
山路　馬鹿！　貴樣はどうも近頃怪しい振舞をしてゐると思つたが、さては我々を裏切つて、あのヘロ〳〵の、腰拔けの朝鮮國一つ倒しも出來ぬ木戶や、大久保づれの說に屈服する所存だな。

尙孝　冗談云つちやいけない。そんなつもりなら、なにも殊更ら平和を主張して君と云ひ爭ふやうな間だるこしい事はしてゐない。すぐさま銃を肩にして飛び出すよ。

山路　貴樣は誰よりも熱心な開國論者であり國力の發展を熱望してゐた男ぢやないか。それだから、あの練達豪まい、百年の後代を見拔く大英雄西鄕さんの志に共鳴してゐたのではないか。今となつてそんな卑怯な裏切り者となるとは何だ。

尙孝　裏切つたのではないと云つてゐるのに、分らん男だな。

山路　分らん。そんな腰拔けの卑劣者の云ふ事は分らん。

尙孝　卑劣者とは云ひ過ぎだ。

山路　云ひ足らん。西鄕さんが廟堂に立つて事をなさうとしても、事每に志と違ひ、淚を呑んで國へ歸られた時、日本國の心ある者一人としてその胸中を察して泣かなかつた者があるだらうか。ほくそ笑んだ者は、僅に大將を目の上の瘤とした木戶、大久保、大隈の徒四五人に過ぎない。我々日本國家將來の伸展を思ふ者、我々日本帝國の國威發揚を希ふ若人は、誰も彼も異句同音に大將の不遇に悲嘆の聲をあげたではないか。貴樣にもその若い血がある筈だ。生々と燃える血があつた筈だ。貴樣も「草莽雜誌」を讀んだらう、「壓制政府は顚覆さるべきの論」と云ふのを。立て！飽く迄豫定通りの行動をとつて、優柔不斷の政府をこらし、朝鮮を討つて國威の發揚に力を盡せ。

尙孝　議論はしない。たゞ、僕はもうすでに心深く決する所あつて、平和な仕事に從事する段取りをきめてしまつたのだ。

山路　え！　俺達に內緖でか。

尙孝　內緖と云ふわけではないが……

山路　內緖ぢやないか、俺達に一言も云はなけりや、背中に廻つてコソコソやつてゐた事になるぢやないか、全體貴樣

山路　靴！

倘孝　二三日前に西村の店と約束した。

山路　靴！　こら、貴様は全體氣でも違つたのか。靴とは何だ。靴とは、これ、靴は足にはくものだぞ。土を踏むものだぞ。毛物の皮で拵へるものだぞ。いやしくも兩刀たばさんだ武士たる者のする仕業か。貴様は、貴様は……

倘孝　駄目だよ。君とはもう天と地と程意見が違つてるのだから。君が兩刀たばさんだとか、足にはくものだ、とか區別をつけて怒鳴るのさへ僕にはもう可笑しいのだ。土を踏むのは結構ぢやないか。大地を踏んまへて人間は立つのだもの。

山路　馬鹿々々々々、貴様はあの大西郷さんを靴に見かへたのだ。

倘孝　西郷さんにしても、今まで褒められたまゝの大人物かどうか怪しいよ。朝鮮征伐にしても、多少は自分が日本で志をえない餘憤をはらす……

山路　畜生。そこまで西郷さんの惡口を云ふな。もう許してはおけん。さ、俺と勝負をしろ。

倘孝　いやだ。暴力爭ひはいやだ。

山路　卑劣漢！

倘孝　なに！

山路　そのつらつきは何だ。クソ、叩き切るぞ！

山路は床の間に飾られた刀を拔くが早いか倘孝に切りつける。倘孝庭へ飛んで下りる。山路すかさず追ひかける。一時止んだ粉雪又降る。これよりさき、庭口へ出て樣子を見てゐた下男忠造、この時、用心捧をもつて出て、倘孝をかばふ。

忠造　これ、山路樣、若旦那樣を切ると承知しねえぞ。

山路　下郎、どけ。

忠造　何を、(二人立廻る。)

倘孝　(間を縫つて)これ、忠造危い、あつちへ行け。山路、やめろよ。公共、よせと云ふのに。

山路は二人を追ひ廻す、とゞ忠造と激しく立廻り、忠造の足を一と太刀切る。忠造下にどうとなる。

倘孝　や、忠造、(忿然、座敷へとび上り、槍を押取る)山路、さ、俺が相手だ。

山路　うむ、面白い、つけるものならついて見ろ。

倘孝　おう。

槍と刀とで闘ふ。奥からおむら出、様子を見、仰天し、仲に入りとめる。山路の太刀先あやまつておむらの額をかする。おむらあッといつて倒れる。手拭で頭を包んだ市之進、千代、野田、おため駈けて出、忠造とおむらを介抱する。

市之進　何ぢや／＼、こりやどうしたと云ふのぢや。

山路、千代の手を取り、引つたてる。

山路　妹、來い。

むら　山路様、お待ちなさい。

山路止る。おためと野田は忠造を介抱して去る。野田はすぐ引返して來る。

むら　この爭の元は何で御座います。

山路　あなたを傷けた事は心からお詫びをします。然し、事件は私と倘孝君との間の事です。女の知つた事ではない。

むら　女でも人間で御座います。充分理由を御說明下さい。

市之進　これ／＼、相手は假りにもお前の末の夫だよ。

むら　ですから倘更ら私は理由の說明を求めるのです。それにあの人は「女の知つた事ではない」と云ひました、「女の知つた事ではない」といふやうな人を、私は夫には致しません。

山路承知しましたと云ふ風に頭を下げる。

山路　馬鹿！　貴樣は永久の馬鹿だ！
野田　ほい〳〵。
山路　千代、來い。
むら　お待ちなさい。あなたはあなたでも千代さんは私の兄と許嫁の仲です。
山路　御免蒙る。山路千代を小笠原尙孝如き卑劣者にめあはす事は、兄の公共斷じて承諾せん。
むら　兄を卑劣者と仰る理由は？
山路　尙孝君は我々同志との約を破るのみならず、ひそかに非人に等しき職業に從事せんとしつゝあるからだ。
野田　非人！
市之進　尙孝！
千代　尙孝樣、一體どうした事で御座ります。
尙孝　なに、心配なさる事はありません。兄さんと意見が衝突したのみです。あなたと私との誓ひに變りは生じません。
山路　千代は兄の命令にそむく女ではない。千代、早く先へ行け。
千代　はい、（泣く〳〵去る）
山路　おい、野田、一緖に歸らう。
野田　おい。
市之進　尙孝や、どう云ふ議論か知らないが、二タ組まで目出度い許嫁の仲もある事ぢや。これ、今日切りたてのわしのこの髮に免じて、何とか丸くおさめてくれんかい。
尙孝　私は私の決心を變へるわけにはいきません。

市之進　どんな結果にならうとも？
尙孝　どんな結果にならうとも。
むら　兄さん、私は兄さんを信じます。
尙孝　おゝ妹。
山路　野田、來いと云つたら來い。
野田　おいよ、然し、困つたなあ、ぢやどなたもお八釜ましう。おむらさん、淺い傷だと思つて油斷しちやいけませんよ。御老人、では失禮致します。尙孝君、グッドバイ。然し、どうも困つた事になつたなあ。
山路と野田去る。親子はおむらを介抱する。
市之進　おむらや、痛いかい。
むら　はい、有難う御座います。（考へて）額の傷は痛みませんでも、これから先きの心の傷は……
市之進　え？
庭先からおこそ頭布を冠つた千代入る。
千代　おむら様。（と縋る）
むら　千代様、あなたはどうぞ兄との緣を結んで下さいましね。
千代　そしてあなたは？
むら　私は私。（淋しく笑つて）意地張りの庇物ですね、ホヽヽヽ。
野田、庭口から洋傘を持つて出る。
野田　千代さん。早く來ないと、又、私が兄さんに叱られます。さ、ハリーアップ〳〵。（粉雪散る。野田洋傘をひろげて千代にさしかける。近く聞える唄の聲。）

序幕と同じ邸であるが、廿餘年を經て、中央の楓はすく〳〵と延び繁り、若葉が萠えてゐる。下手寄りの日本座敷はそのまゝであるが、座敷内の壁の色や床の間の飾り等は悉く一變し、椽先には一面にガラス障子が立て廻されてゐる。正面の茶室は西洋風の小應接間と變つてゐる。その前に藤棚、上手にはあづまや、奥の方に空井戸、正面は植込み、板塀、電柱、時は明治三十八年の初夏の午前。

「此處はお國を三百里」の軍歌で幕開く。

座敷の内で、伺孝の妻となつた千代（四十七歳）が手紙を書いてゐる。書生の武者（十七）と女中たか（廿五）とが庭の草などとつてゐる。やがて號外の鈴の音がして、「號外々々、今出た號外、日本海戰の大勝利、日本帝國大勝利、萬歳々々、大勝利」と呼ぶ。

書生は「わあ、號外だ！」と叫んで、座敷へ飛び上つて奥へ去る。女中も急いで下手へ去る。千代も書く手をやめて待つ。すぐ武者、たか、及び松葉杖をついた老僕忠造も出る。

武者　奥さん、奥さん、これ、これ。（と號外を振廻す）

千代　何です、此の人は、そんなに振廻したら讀めないぢやありませんか。

たか　武者さんのあはて者。

武者　嬉しい〳〵、僕ア嬉しんです、奥さん、僕嬉しい。（泣く）

忠造　馬鹿だなあ此の子は。日本が勝つにきまつてるぢやないか。

たか　そんな事を云ふ忠造さんだつて涙が出てますよ。

武者　おたかさんだつて泣いてるぢやないか。奥さん、奥さんだつて泣くでせう。日本が國をあけて、乘るか反るかの大戰さだ。それに美事に勝つたんだ。誰れだつて泣かあ、泣いて嬉しがらない奴ア日本人ぢやない。

あゝ、嬉しい〳〵。（唄ふ）「あな嬉し、悦し、戰ひ勝ちぬ、あな嬉し……

千代　騒々しいね。少し靜になさい。忠造爺や、よかつたね。日本が勝つて。

忠造　全くで御座います。勝つには極つてゐると存じましても、あの廣い海の中、どうなる事かと誰しも心配しておりましたに、まあ〳〵天下晴れての大勝利の様子、御同様お目出度い事で御座います。

千代　（讀んで）「皇國の興廢此の一戰にあり。」（涙ぐんで）まあ、東郷様始め皆様の御苦勞は一と通りではなかつたらうね。

武者　（大砲たうつ眞似をする）ドヾン、ドン〳〵。ドヾンドン。（自分と引つくり返つて見る）

千代　これさ靜かになさいと云へば。

たか　氣が違つたのかよ、此の子は。書生の癖に奥様の前で何と云ふ事です。さあ〳〵、お庭の草を取りませう。

武者　このお目出度の最中に草なんか取つてゐられるものか。

忠造　これさ、武者さん。

千代　いゝよ〳〵。若い者の事です、無理もない。草取りはいゝから、あつちへおいで。たゞ靜かにしなくてはいけませんよ。

たか　はい〳〵。さ、武者さん、向ふへ行きませう。

忠造　折角のお書き物のお邪魔を致しました。さ、行きませう〳〵。

唄ひつゞける武者を引き立てゝ二人とも去りかける時、尙孝と大石とが入る。尙孝は五十二歳になつてゐる。大石と云ふのは元の野田大介で、今は男爵である。

尙孝　おい〳〵、珍らしいお客様を連れて來たのに、玄關に誰もおらんのはいけないぢやないか。何をしてゐるのだ。

千代　おや、少しも心づきませんで、失禮致しました。

忠造　これは旦那様。お歸りなさいまし。いえなに、武者さんが號外を見て浮れ出しましたので、つい、その、はい、

尙孝　千代、どうだ珍らしいお客だらう。
千代　まあ、さつきからどなたかと思つてをりましたら、あなたは野田大介樣でゐらつしやいますね。
大石　おつと待たれよ、奥方。ハヽヽ。僕は今は野田ではありません。大石大介と申します。
尙孝　男爵大石大介と申します、だらう。ハヽヽ。
千代　さう〳〵、大石男爵樣。本當にお久しぶりで御座いますこと。それにしても男爵におなり遊ばして本當にお目出度う存じます。思ひなしか、前よりお若くお見えなさいます。
大石　若く見えますか？　いや、これは忝い。實は誰れに逢つてもさう云はれます。光陰矢の如く流るゝとも、我輩は昔ながらの我輩なり、ですかね　ハヽヽ。
尙孝　（皮肉に）あらゆる點でね。一體君はいくつになつたのだね。
大石　我れ再び三十に見ゆる事能はじ。
尙孝　四十は？
大石　四十亦然り。たゞ、幸ひなる哉五十には間がある。
尙孝　もう二三ケ月のか。
大石　さうツケ〳〵云ふものぢやない。
尙孝　僕は五十二になつた。これと結婚してからでも、かうつと、何年になるかな。何しろ十九の娘があるのだからな。
大石　よくあの頑固な山路が…（千代を見てゝおツと失禮）もう少しであなたの兄さんの惡口を云ふところだつた。
千代　いえ、宜しいのです　兄の頑固は生れつきで御座いますもの。
尙孝　實際山路君はよく千代と僕との結婚に同意したものと今でも思ふよ。一種の奇蹟だね、ハヽヽ。

大石　君も頑固では山路君にヒケを取らん方ぢやないか。いや、むしろ以上だね。（尙孝いやな顏をするが、無關心で續けろ）奥さん、お兄さんの近況はどうです。

千代　はい、實は今手紙を書きかけております所で。

大石　何か二三年前に若い婦人と結婚されたとか承つたが……

尙孝　おい、もうその話はその位にして置かう。

大石　何故？　だつて、山路君は君の妹さんと結婚する筈の人だつたらう。おむらさんが未だに獨身で通してゐられるのに……

尙孝　おい、止せよ。

大石　あいつ大體道樂が過ぎるよ。

尙孝　おい、止せと云つたら。

大石　（千代に氣づき）や、これはとんだ失禮。失敬々々。この通りお詫びします。平に々々。

千代　（苦笑して）相變らずとほけてゐらつしやること。

尙孝　（大石に苦笑して）明治は三十八年となつても、君は相變らずランプのホヤだね。

大石　ランプのホヤ？

尙孝　拔けてゐると云ふ事さ。

大石　さう〳〵、よくおむらさんにやられたつけな、ハヽヽ。然し、今ぢや電氣の球位になつたぜ。

尙孝　頭がか？

大石　さう、頭が。見給へ、大石家の婿となつて金持ちにはなる。家附の娘は死んぢやつて若い男やもめに花が咲く。（唄ふ「赤い夕日に照らされて……」

僕が戰前に滿洲をうろついてゐたのが僕をして今日あらしめたのですよ。人間萬事塞翁の馬。滿洲の事情についち
や、貴族院でも僕は第一人者ですからなあ。

千代　まあ、あなたが？

大石　まああなたが、はないでせう。どうもさう不信用ぢや困りますね。ね、尙孝君、あの話は奥さんに聞かせたの
か。

尙孝　いや、今日云はうと思つてゐた所だ。

千代　宅は何でも私に話してくれます。

尙孝　そして、何でも僕のした事は一々贊成してくれる。今時こんな女房を探そうと云つてもないよ。

大石　いやあ、こりやどうも、チツと照れるな。

尙孝　千代や、私はね五十萬圓だけ大石君方の政黨費として出す事にしたよ。

大石　それからが大問題。ね、奥さん、どうですあなた、男爵小笠原尙孝令夫人と云ふ肩書は？　おいやですか？

千代　何で御座いますつて？

大石　男爵夫人小笠原千代子。

千代　まあ！　あなた、それは本當で御座いますか？　あなたが男爵に。

尙孝　うむ。此の大戰が目出度く終つた後にはさう云ふ事になるだらう。

千代　まあ、あなた！　（涙ぐむ）

尙孝　お前も喜んでくれるね。

千代　勿論で御座います。あなた、あなた、まあ、私は……（泣く）

尙孝　どうした。

千代　男の子を生んでおりましたらね。
大石　奥さん〳〵、そんな慾は云はないこつてす。あなたゞつてせい〴〵ベストを盡されたに違ひありませんからな。
千代　男爵におなりになるつて、それは五十萬圓お出しになりますからで御座いますか。
大石　いや〳〵、政治や政黨をさう輕く見て下すつちや困ります。尙孝君は全くなるべくして男爵になるので、今度の日露戰爭に於ける軍需品の犧牲的供給と云ふ國家的大奉仕が、君をして此の榮譽の候補者たらしめたのですよ。ナチユラル•コンクリユージヨンです。
尙孝　それも全く大石男爵の盡力だよ。（如露をとつて花壇へ水をまく）
千代　まあ、あなたの？
大石　そんなに一々びつくりなさる事はないでせう。あなたは新聞はお讀みですか。
千代　いゝえ。娘は一生懸命に讀んでおりますが。
大石　あゝ、讀んでゐられたら私の勢力について疑ひを抱かれる筈はない。私の議會に於ける演說たるや、反對黨も鳴りを靜めて謹聽してるですからなあ。
千代　まあ。では今に大臣におなりなさるかも知れませんね。
大石　かも、ぢやありません。おなりなさる、です。然しね奥さん、たゞ一つ困る事があります。
千代　何で御座います。
大石　尙孝君、こゝからは、君話してくれ給へ。
尙孝　大石君は、いや大石男爵はね、奥さんが欲しいと云はれるのだ。
千代　そりやねえ。お一人では御不自由でゐらつしやいませうとも。
尙孝　私達と緣つゞきになりたいと云はれるのだ。

千代　（一寸沈黙）はつ子で御座いますか。
大石　私ははつ子さんが大好きですよ。
千代　有難う御座います。けれども、はつ子とあなたとでは年も……
尚孝　（強氣を示して）年の問題は問題にならん。昔とは時代が違つとる。
千代　（おど〳〵して）はい、そりやもうあなたさへ御異存が御座いませんければ。
大石　いゝですね。や、尚孝君有難う〳〵。あゝ、これでバルチック艦隊を打ちとつたよりも僕も嬉しい。
チリン〳〵とベルを鳴らし、自轉車を引いてはつ子出る。はつ子は海老茶袴をはいた十九の娘である。
はつ　駄目ね、此の自轉車は。（書生を呼んで）武者、武者、武者つてば。（大石近づく。）
大石　はつ子さん、お歸り。
はつ　あら、大石の叔父さん、今日は。お父様、お母様、只今。お母様、あのね、今日はあの號外でせう、學校は引つくり返る様な大騒ぎ、授業も何もありやしませんわ。私もう夢中でとび出したので、あんまりペタルを踏みすぎてすつかり駄目にしちやいましたわ。
座敷へ上つて袴をぬぐ。
尚孝　これ〳〵、何だお客様の前で。
大石　いやあ、僕なら遠慮して貰はん方が嬉しいですよ。
千代　はつ子さん、いけませんね、お行儀の悪い。
はつ　お行儀つたつて、時勢につれて變つてきますわ、ね、大石の叔父さん。
大石　叔父さんは困るな、が、然し、遠慮のないのは何より結構です。
尚孝　女の鼻息はどこまで荒くなつて行くのか止めどがない。ね、大石君、今に女の代議士なんてのが出かねないな。

はゝゝ。

大石　代議士と云へば、日本海戰大勝利の祝賀會の打合せをしなけりやならん。尙孝君、僕は一寸失仏する。

尙孝　祝賀會はどうせ夜だらう。打合せがすんだらやつて來給へ、晝飯を家でやらう。

大石　有難う〳〵。僕に取つては意味深い晝飯だ。きつとやつて來る。では奥さん、一寸失禮、はつ子さん、ぢや又後程。

大石は小笠原夫婦に送られて去る。はつ子一人殘る。軍歌。歡聲。

はつ　武者、武者！

書生が手に小さな日の丸の旗をもつて進軍して出る。

武者　（敬禮して）はつ、何か御用でありますか。

はつ　此の自轉車、又具合が惡いのよ。見て頂戴。

武者　お孃さん、今日は勘忍して下さいな。今日は目出度い日ですよ、バルチツク艦隊が全滅したんですよ。そんな時に自轉車の手入れつてな事はないでせう。

はつ　お默り、私は命ずるのです。

武者　はつ。詮方ないであります。心得たであります。あゝあ。

はつ　何があゝあです。叔母さんはお內？

武者　いえ、花を買ひに出られたであります。

はつ　賀川さんは今日內へ見えた？

武者　あなたのスヰートハートの賀川氏でありますか？

はつ　餘計な事は云はないでもいゝ。見えたかどうかと聞いてゐるのです。

はつ　[illegible]

武者　賴まれます。敵艦かなたに現れたり並に打ちかゝれオイ、ズドーン、ドブン。

軍歌を歌ひながら自轉車を引いて去く。はつ子は蓄音器を椽先へ持ち出し、「鶴龜」の曲を奏して踊る。おむらと賀川とが出る。おむらは四十八の寡婦、に明疵が殘つてゐる。手に水仙花を持つ。賀川は廿五の若者。二人は笑ひながら立つて見てゐる。

はつ　（漸く氣がついて）あら、賀川さん、叔母さんも！　まあ、默つて見てゐるなんて人が惡いわ。

賀川　久しぶりでお嬢さんの踊りを拜見しました。

はつ　いやあね。私、恥しいわ。

むら　何の準備です、それは？

はつ　學校の餘興の練習ですの。

おむらは出て來る女中を相手に水仙の花を整理する。賀川は庭へ出て櫻の木を見上げる。

賀川　此の櫻は伺ふたんびにメキ〳〵繁つて行くやうな氣がしますね。

はつ　さうですか知ら。毎日見てゐると氣がつきませんけれど。

むら　木の育つのも早いものです。小さな〳〵苗木を植ゑつけて、毎朝毎晩丹精したのは昨日のやうに思つてゐますが考へて見るともう二十五六年も前になりますからね。

はつ　私よりも兄さんね、此の櫻は？

賀川　僕よりも年上らしいですね。（木を撫でゝ）いゝなあ、木や草は。平和そのまゝの姿ですね。

むら　（女中に）おたか。跡を片づけておいておくれ。私はこれを兄様のお書齋へ持つて行くからね。

たか　畏りました。

おむら去り、やがて女中も去る。庭の二人は如露で草花に水をやつたりしてゐたが、此の時、櫻の木の下に座る。

はつ　友安さん。とう〳〵日本はロシアに勝つたことになりましたわね。

賀川　あなたもそれが嬉しいのですか。
はつ　まあ！　あなたは嬉しくないの。
賀川　僕も嬉しくない事はありません。日本人ですから。然し、はつ子さん、私は今日お目にかゝつたら第一番にあなたに云つて諒解しておいて頂きたい事があるのです。
はつ　何で御座いますの。
賀川　僕は近頃ます〳〵戰爭の悲慘と云ふ事を痛切に感じて來ました。僕は實際四月の奉天の大捷や、バルチック艦隊の全滅の喜びに醉ふ前に、その戰ひのために何萬、何十萬の人の命が犧牲になつてゐる事を考へると、全く目の先が暗くなるやうな氣がするのです。あなたは海老原さんの非戰論を讀みましたか？
はつ　いゝえ。
賀川　僕はあの人の崇高な人格と、深奥な議論にすつかり敬服しました。海老原さんの理想は、此の世から絶對に戰爭をなくす事です。暴力によつての戰ひを絶滅させる事です。
はつ　でも、戰爭しなかつたら日本は負けるでせう。
賀川　負けません。成程一時は負けると云ふ事になるかも知れません。けれども暴力に負けると云ふ事は永久に此の世界から消へ去ると云ふことと同じではありません。御覽なさい。日本はなるほど奉天の戰ひや日本海々戰には勝ちました。けれども來るべき平和談判にはたして日本は最後の勝利者となるかどうか。僕は豫言者ではありませんが、きつと戰爭に負けたロシアの方が平和的に日本に勝ち、日本の國家に精神的な感化を與へるやうになるだらうと思つてゐます。日本人の輕薄さを御覽なさい。濃霧のために浦鹽艦隊を見逃した不幸な村上大將の邸へは、毎日のやうに石を投げ込むと云ふぢやありませんか。さうかと思ふと、今日、バルチック艦隊が全滅したと聞くと、丸で氣違ひのやうに有頂天になつて踊り廻つてゐます。こんな浮調子で世界の日本となる事が出來ると思ひますか。
はつ　だつて、內のお父様は戰爭のおかげでお金持ちにおなりになつたのですわ。

賀川　さうです。僕もお父様の會社の一員として雇はれてゐる以上、間接に戰爭のおかげを蒙つてゐる事を否定は出來ません。然し、それにも拘らず、戰爭が罪惡であり、暴力が否定すべきである事に變りは生じません。僕は一介の雇はれ人に過ぎませんが、今にきつと自分の主義を徹底させます。日本の國是は平和主義にありと云ふ事を知らせます。

はつ　（彼の意氣にうたれて）あゝ！

賀川　はつ子さん。僕はあなたがきつと僕を諒解して下さると信じてゐました。僕が世間からどんなに誤解を受けようと、どんなに迫害されようと、あなたは、いや、あなたゞけは僕を信じ、僕を助けて下さると信じてゐます。はつ子さん、どうか僕の此の信念を裏切らないで下さい。ね。

はつ　はい。

賀川　きつとですよ。

はつ　はい。

賀川　有難う。誓ひの握手をして下さい。

　はつ、無言のまゝ手を差し延べる。賀川、兩手にしつかと握る。女中たか出る。

たか　賀川さん、旦那様がお呼びで御座いますよ。

賀川　はい。唯今。はつ子さん。ぢや今日はもうお目にかゝりません。

はつ　さう。お父様の御用なの。

賀川　えゝ。此の頃は大變忙しいのですから、どこかへ使ひに行けと仰るのでせう。

はつ　ぢや又明日にでもね。

　たかを先に、賀川去る。はつ子一人うつとりと櫻の梢を見上げてゐる。遠くに喚聲。おむら出る。

むら　はつ子さん、一人ですね。

はつ　あ、叔母さん。庭へ行らつしやい。空がよく晴れてゐますこと。
むら　賀川さんがお父さんに叱られてゐましたよ。
はつ　あらどうして。
むら　用があるから呼んだのに、娘と話をしてはいけないと云つてね。
はつ　あら、お父様はひどいわ。不斷は賀川さんの事を褒めてばかりゐらつしやる癖に。
むら　ねえ、はつ子さん。あなたは賀川さんをどうお思ひだ。
はつ　どうつて？
むら　はつ子さん。私はあなたにとつくりとお話しがしたい事がありますよ。
はつ　何ですの？
むら　あなたは、あの賀川さんが好きでせう。本當に好きなのでせう。
はつ　えゝ。
むら　賀川さんのどう云ふ所が好きなのです。
はつ　賀川さんはしつかりした方です。私などが思ひも及ばないやうな深い考へを持つた方です。私はあの方を崇拜しますわ。
むら　賀川さんを夫にと思つておいでなのぢやないか。
はつ　（無言のまゝ、顏を赤らめる）
むら　（やゝ間をおいて）はつ子さん、今私の云ふ事をよく聞いて下さいよ。（目をつぶって）私にも若い時はあつた。戀した昔もありました。はつ子さん。今こそ話しますが、私も一度はある人の妻となる約束をした時がありました。
はつ　あ、叔母さん。私、とうから、叔母さんのやうな方がどうしてどこへもお嫁にいらつしやらなかつたのか不思議でたまりませんでしたわ。話して頂戴、その男の方つてどなたでした？

むら　あなたには伯父さんに當る　あの山路さんです。

はつ　まあ、お母様のお兄様と。

むら　あなたがびつくりするのも無理はない。伯父さんは今では大變老けてゐらつしやる。私も年をとつてしまつた。
いゝえ、誰も彼も今は年を取りました。あなたの他はみんな。あなたと賀川さんをのけてはね。あゝ、あなた達はたつた一つの尊いものを持つてゐるのですよ。

はつ　何ですの叔母さん。

むら　「若さ」さ。山路の伯父さんは五十におなりの頃まで一人身で苦勞な暮らしを續けてゐらつした。もし私が二十何年も前にあの方の所へ嫁入つてゐたなら、あの方もあゝまで身を持ちくづしてはお仕舞ひぢやなかつたらう。（追懷の情にたへかねて）私も、私も今とは變つてゐたらうに。

はつ　叔母様、どうして御一緒におなりぢやなかつたの。

むら　いろ〳〵のわけがあつてね。あの方との意見の衝突、兄さんとの仲たがひ。その衝突やいさかいは何十年の今となつては消へて跡かたもなくなつてしまつたが、消へてしまはないのは昔の疵です。私の額の疵もおなじ事。昔を今に仕様はありません。今となつては、私の此の世のたつた一つの樂しみは、あなたを自分の娘と思つて、あなたの樂しみを自分の樂しみとし、あなたが幸福になるのが私の何よりの幸福。御覽、私の毎日を、私の一生を！　私は自分の兄さんの内に居座つたまゝ、浮世の春も知らないで……

はつ　（涙ぐんで）叔母さん。

むら　私は一生埋れ木です。

はつ　どうして他所へお嫁にいらつしやらなかつたの？

むら　女の嫁ぐ先はたつた一箇所。女の一生の連れ合ひはたつた一人あるばかりだよ。その所、その人を間違へたら、女の一生は埋れ木よりもなほ惡くなるだらう。顔に疵は受けたとて、私も選べば夫を持てたでもあらう。けれど共

私の夫にと思ふ人には一度も出合はずに過ぎてしまつた。心にもない男を夫として、毎日毎日御給仕をする。朝も夜も、心と心は他人同志の男を前にして……そんな一生を考へて御覧。

はつ　叔母樣。

むら　一時の意見の衝突や、他人の云ふ事で迷つてはいけない。女の戀、とりわけ女の初戀は、世の中のどんなものより尊いものです。お前さんのお母さんは、兄さんの反對や、長い間の苦勞を凌いで今のお父さんの所へ嫁入つたので知つての通り幸福な樂しい家庭の主婦となつてゐるでせう。はつ子さん、どうかあなたは自分の一生をあやまつておくれでないよ。此の叔母さんのやうな埋れ木の生活や、心にもない淋しい途を歩いておくれでない。戀のためには命をかけて戰はなければいけませんよ。

はつ　はい。叔母さん、叔母さんもどうぞ私を助けてね。

むら　はつ子さん、その爲めに私は生きてゐるも同樣ですよ。

二人は相抱く。庭から忠造が先に立つて、山路と其の妻のとみとが入る。山路は五十二、とみは三十である。乳のみ兒を抱いてゐる。

忠造　有難う御座います。冬中は時々痛む事が御座いますが、もう春から先は、殊に此頃ではちつとも痛みなどは致しません。はい。

山路　冬中だけでも痛んでは困るな。

忠造　（むらに）お妹御樣。山路樣御夫婦がおいでになりました。（と取り次いで去る）

むら　お久しぶりで御座いますね。おとみ樣、お變りも御座いませんか。

各々挨拶宜しくあゝ。

とみ　まあ〳〵、いつ來てもお庭がよくお手入れの届いておりますことゝ。おやまあ、おめづらしい。これは何で御座います。

はつ　これは蓄音器で御座います。
とみ　蓄音器！
はつ　いえ、蓄音器。
とみ　へえ、不思議な形をしておりますのね。何にするもので御座いますの。
はつ　聲が出て參ります。
とみ　聲が！　この中から？
はつ　この喇叭の中から。
とみ　まあ〳〵。（のぞく）
むら　おとみ様、今度の赤さんは御丈夫ですか。
とみ　はい有難う御座います。丈夫も丈夫、大達者で御座いましてね。もう齒が出かゝつてゐると見へまして、乳を吸ふたんびにチク〳〵嚙むので御座いますよ、早いもので御座いますね。
むら　（山路に）お可愛いでせうね。
山路　さあ、憎くもありませんが……
とみ　宅のはそりや子煩惱なんで御座いますよ。近頃はおしめのしかへがそりや上手になりましてね。
はつ　まあ、伯父様がおしめをお取りかへになるの。
とみ　えゝえ、そりや器用に致します。ねえ、あなた、あなたは本當に何をさせても器用ですわね。
山路　（むらに　千代や、尙孝君は？
むら　今あちらで一寸用談中です。呼んで來ませうか。
山路　いや〳〵、どうせ今日はゆつくりさせて貰ふつもりで來ましたから、呼んで下さるには及びません。

この間、はつととみとは蓄音器の傍で話してゐたが、蓄音器が鳴り出す、と赤兒が泣く。

とみ　おゝ、たがよく〳〵。まあ、びつくり致しますわ。こんなところから音が出て參りますのね。大人の私でさへびつくり致しますもの、おゝ、たがよく〳〵。

むら　はつ子さん、蓄音器はやめて、應接間のオルガンを聞かせてお上げしたらどうです。ゆつくり彈いたら赤さんも眠りませう。

はつ　（思入れあつて）さうね。ぢや、とみ伯母樣、こちらへいらつしやいまし。

はつ子はおとみを案内して去る。やがて靜かなオルガンにつれて獨唱聞えて來る。

むら　公共樣、丁度よい時に來て下さいました。是非あなたのお力をお借りしたい事が出來かゝつております。

山路　私の力を？

むら　あなたも御存じでしたね、兄の會社に勤めてゐる賀川友安と云ふ若い男。あれとはつ子とが戀し合つてゐるのです。

山路　ホ、オ。それで？

むら　はつ子の戀を遂げさせる樣に力を添へて下さい。

山路　然し私が何もそんな……。

奥で尙孝が「早く知らせればいゝのに」、と云ふ聲がする。

むら　（低く、早く）お頼みです、あなたから口添へして下さい。

山路　同じく早く〳〵まあ〳〵宜しい。

尙孝と千代と出る。

尙孝　やあ、山路君、一寸社用で話し込んでゝ失敬した、よく來たね。

千代　兄さん私は　たつた今手紙を書いた所でした。

山路　何か用件で？

千代　いえ、今度の赤さんを見せて頂きたう御座いますと申してね。あの、おとみ様は？
むら　はつ子さんと應接間です。
千代　あゝ、あのオルガンがさうですか。（去る）
山路　時にどう。今度の日本海の大勝利は。すばらしい事ぢやないか。日本帝國萬々歳だね。
尙孝　全くだ。これでロシアを征服すれば、始めて日本は世界列强の一に加はれるわけだからな。
山路　君の商賣も今度の戰爭ぢや大分よかつたらしいね。
尙孝　いや大した事もないが、まあ〳〵だ。
むら　賀川さんはもう歸りましたか。
尙孝　（苦い顏して）あゝ、歸つた。おむら、お前、あんまりあの男を家庭に入れない様にしてくれんと困るよ。はつ子と親しくし過ぎていかんからな。
むら　でも兄さんはあの男は會社の內でも腕きゝだといつも褒めてゐらつしやるぢやありませんか。
尙孝　仕事は出來る。頭もしつかりしてゐる。然し、あの男の云ふ事は少し並外れてゐていかん。
山路　どう外れてゐるのだね。その男の云ふ事と云ふのは。
尙孝　可笑な男でね。日本國民が擧つて大勝利を祝してゐるのに、むづかしい顏をして非戰論を唱へてゐるのだ。暴力の爭ひは非人道的だと云つてね。
山路　成程。然し、その平和論にも一理あるぢやないか。時勢は進んで行く。昔征韓論に反對した君の事を考へ給へ。今の若い者の中に日本海の大勝利を喜ばん者があると云ふ事も、あながち不自然ぢやないぢやないか。
尙孝　君は何か他の事を云はうとしてゐるのだね。賀川の非戰論に贊成しようとするその底意は何なのだ。
山路　いや、別に深い底意があるわけぢやないが、その男が立派な男なら、引立てゝやつてもいゝぢやないか、と考へるだけさ。

尙孝　引立てゝやつてゐる。仕事の方では片腕とも賴んでゐる。然し、（おむらの方を見て）家族の一員とするわけには行かん。
山路　何故ね？
尙孝　僕と千代とは、はつ子の相手はもうきめてゐるのだ。
山路　おゝ。
むら　そんな事と思つた。
尙孝　（おむらには無頓着に）恐らく君はまだ聞くまいが、僕は近々爵位を貰ふ事になつてゐる。
山路　ホ、ヲ、爵位！　男爵に？
尙孝　うん。
むら　まあ、兄ィ様、ちつとも私には仰いませんでしたね。
尙孝　私もたつた今朝聞かされた所さ。それに加へて、はつ子も華族の所へ嫁入らす事になつたのだ。
山路　と云ふと、その相手は？
尙孝　大石男爵さ、勿論。
むら
山路　野田大介！
　はつ子とおとみと千代入る。
尙孝　や、おとみさん、暫く。赤さんがお出來だそうで、結構ですな。
とみ　（馬鹿丁寧に）御機嫌様でお目出度う存じます。
　一座は白ける。
はつ　どうしたの？　みんな妙な顏をしてゐるのね。何かあつたの、叔母樣？

むら　(はさ出す様に)あなたはね。大石の叔父さんの所へお嫁に行くのですと。
尙孝　これ、妹、何だ、その云ひ方は。順序も法もわきまへないで。
千代　本當にまあおむら樣。
むら　どの途さうなら、早く知らせた方がいゝでせう。
とみ　(口を出して)そりやさうで御座いますとも。
尙孝　(とみに)とんだ所をお目にかけてすみませんな。
とみ　どう致しまして、內んなかのゴタ〳〵にはもう馴れ切つております。何で御座いますよ、ゴタ〳〵はなるべく早くぶちあけて、根こそげ引つくら返しちやつた方が、跡がサッパリ致すもので御座いますよ。
山路　そりやさうだ。こないだも內の大きい方の子供が……
尙孝　子供に異存はない筈ぢや。
むら　あります。はつ子は賀川の嫁になりたいと云つてゐます。
尙孝　なに、何だと?
はつ　叔母さん、叔母さん、一體どうしたの。私が、私が大石の伯父樣の所へ行くんですつて? あのお年寄りへ?
尙孝　大石さんは年寄りぢやない。
はつ　だつて、お父樣と同じ年ですわ。
尙孝　同じ年ではない。
山路　ないと云つても三つか四つだ、少しひどいな。
尙孝　君は默つて給へ。第一君自身はどうだ。ひどいなどと云へた義理か。
山路ぐつとつまる。千代難局を救ふ。
千代　(とみに)あなた方は圓滿ですわね。

とみ　えゝえ。年の違ひなんか何でも御座いませんわ。思ひ合つてさへゐますればね。違ふ方が文明開化で御座います。それに宅のは年一年若返りますもの。
尙孝　はつ子、お前が賀川とどうとかと云ふのは何の事だ？
はつ　あの、私……。
尙孝　怪しからん。賀川は會社の一使用人に過ぎん男だぞ。
はつ　けれども立派な主義と理想とをもつております。
尙孝　なに、何だと？
はつ　無理に私を束縛なさるなら、私は内を出て行きます、内を出て行つて死んでしまひます。
千代　まあ、はつ子！
山路　尙孝君、君、若い者には若い者のしたいやうにさせたらどうだ。君もお父さんや僕等の意見に反對して頑張り通したこともあつたぢやないか。
尙孝　いかん。僕は敢て豫言者を氣取るのではないが、もしも日本の若い手合が近頃のやうに我儘になり、近頃のやうに突飛な新らしがりを續けて行つたら、日本帝國は結局は滅亡する。日本には日本固有の魂がある。武を萬國に輝かしてその精髓を發揮するためには、家族制度の尊長、階級の嚴別、上下の區分を判然として、各々その職分に全力を注がなければならん。
山路　ヒヤ〱。
むら　それだからと云つて、兄さん、何も可哀相に、ランプのホヤをはつ子に押つつける事はないぢやありませんか。
尙孝　ランプのホヤ！
はつ　私はランプのホヤはいやです。
尙孝　こら！

はつ　何故賀川さんを夫にしてはいけないのです。
千代　お父う様が反對だからさ。
はつ　お母様、あなたは人が反對してもお父様と添ひ遂げなすつたぢやなくつて。
倘孝　誰がそんな事を云つた？
はつ　誰でもいゝわ。

一同おむらを見やる。

千代　（はつ子に）お前はまあ、お父様と賀川さんとを一つに考へておいでなのかい？
はつ　何故いけなくつて。賀川さんもお父様同樣、立派な男子です。あの方は天才ですわ。
倘孝　天才は危險なものだ。いつも誰か看守する者がゐてこそ役に立つ。それにわしは獨立獨行の男だつた。賀川はわしの會社でわしから澤山の金を貸りて仕事をしてゐる男だ。お前か無理に賀川ど結婚しようとするのは、つまり賀川を亡す事になるのだぞ。
はつ　何故、何故お父様はさう私をいぢめるの？
倘孝　はつ子、そんな事を云つてくれるな。わしはお前の父親だ。わしもお母さんも、此の世の中でお前の仕合せほど願はしいものはないのだ。お前を出世させ、お前を名譽な地位におき、お前の幸福を見る事がわし達の一生の望みなのだ。お前は若い若い。時の考へより年取つた者の分別が優つてゐるぞ　ようく此處の所を嚙み分けて、親に嘆きをかけてくれるな。
千代　はつ子！
むら　然しそれにしても……
倘孝　おむら、お前の口を出すところぢやない。私が此處の主人だ。そして自分の娘に意見を聞いてゐるのだ。
むら　（苦しげに）一言もありません。（はつ子にきつく）あなたの意見一つです。

はつ　でも、叔母さん。私、どうしたら……

泣く。おむら齒がみをして横をむく。沈默。

尚孝　（つぶやくやうに）あの男は確に一種の危險思想を抱いてゐる。社會主義者の一人だ。

山路　（大いに驚いて）社會主義者！　そりやいかん、そりやいかん。

尚孝　（ゆつくりと壓する樣に）賀川の事は思ひ切るかね？

はつ子うなづく。おむら目をおさへて後を向く。他の一同は重荷をおろした樣な思入れ。

女中が出る。

たか　あの奥様。コーヒーはこちらへ持つて上りませうか。

千代　あゝ、さうしておくれ。武者にも手傳はせてね。

女中去る。又號外の音。「號外々々、今出た號外、大海戰の詳報一切。」と呼ぶ聲。庭から忠造と大石男爵出る。

大石　よう、庭前へお集りか。尚孝君、まあ此の號外を見給へ。詳しく讀めば讀む程すてきな大勝利だ。萬歳々々萬々歲。や、これは〳〵、山路公共の大人（うし）だね。こいつあ久し振りだな。

山路　やあ、暫く。（妻に）おい、この方が大石男爵だ。野田君、僕の妻だ。

とみ　（馬鹿丁寧な挨拶）始めまして、幾久しく宜しくお引立てを願上げます。

大石　ベリグラッドツーシーユー。

この間におむらは一同を離れて忠造と語る。武者とおたかとがコーヒーを運び出す。

大石　コーヒーとはハイカラだな。僕も一杯貰へるか。

尚孝　（はつ子に）はつ子、御給仕をしてお上げ。

はつ　（おむらを悲しげに見やつて）はい。

むら　（はき出すやうに）お旦那樣へ、お給仕か。

尙孝　（叱る）おむら！
むら　えゝ、いら／＼してくる。大介さん、あなたはね……
はつ　（嘆願する）叔母さん、どうぞ……
むら　おゝ、はつ子さん。
はつ　いゝのよ、私、いゝのよ。
むら　云はない、云はない。もう私は何も云はずにおきませう。忠造、あつちへおいで。私達疵物の出しやばる世界ぢやなくなつて來た。さ、おいで。

おむらと忠造と去る。

大石　（あきれて、尙孝に）おむらさんはどうかしたのか。
尙孝　なに、いつもの癖だ。（はつ子に）さ、ついでおあげ。

はつ子、野田へまづコーヒーをつぐ。近くに「此處はお國を三百里」の軍歌又聞える、武者はその歌に合せて水菓子鉢を持つて出る。一同氣味合ひの中に。

—幕—

第三幕

同じ邸。上手の建物は、位置や形は同じながら、バルコニー附の二階建西洋建築となり、蔦が生ひかゝつてゐる。かへつて正面へ續く西洋室が今は隱居所らしい日本建に變つてゐる。

中央の櫻の老樹は今が眞盛りである。その幹を取り卷いてのベンチ。一面の芝生。ずつと奥に噴水。上手前方にサンマーハウス正面は石垣。電柱、ラヂオの線。

時は昭和二年春の午後。

洋館の戸をそつと開けて、大石男爵の嫡子武麿が出る。庭を見て廻り、それから正面の日本座敷をのぞいて見、やがて障子を開けて呼ぶ。

武麿　おこひ、おこひ。

奥から小間使おこひ出る。廿歳。

こひ　あら、若様。いつお歸り遊ばしました。

武麿　たつた今のさき。

こひ　まあ、ちつとも存じませんで、失禮致しました。

武麿　全く怪しからん。などゝ云ふのは嘘の皮。お祖父さんや、お祖母さんは？

こひ　あら、御存じないので御座いますか。

武麿　いや一向に。

こひ　あらまあ。大旦那樣方は多摩の御陵へ御參拜遊ばしましたわ。あなたが御案內遊ばす筈だと仰つて、早くから待つてゐらつしやいました。

武麿　わつ！　こりやしなしたり殘念千萬。さう〳〵、そんな事を聞いてたつけ。すつかり忘れちやつた。

こひ　まあ、お忘れ遊ばしてゐらつしやいましたの。

武麿　まあ、お忘れ遊ばしてゐらつしやつたよ。弱つたな。お祖父さんはカン〳〵に怒つたらうね。

こひ　そりやまあ、お年寄でゐらつしやいますから。

武麿　弱つたな。それで、お二人きりでお出かけになつたのか。

こひ　お妹御樣も。

武麿　そりや無論だが、お伴は？

こひ　平山さんがお伴して參りました。

武麿　さうか。ぢやまあ迷子になつちまう心配はないな。

こひ　まあ。あんなお口の惡い。

武麿　お口は惡いがお氣は優しいよ。ね、おこひ、一寸こつちへおいで。
こひ　あら、いやで御座います。
武麿　いやぢや御座いません。おこひ來い〳〵。テ、來いと申すに。
こひ　そんな事を遊ばしますと、お母樣に申上げますよ。
武麿　何もお母樣に申上げるほどの事はない。お母樣の留守にちよいとダンスを敎えて上げやうと云ふだけだよ。
こひ　あれ、お許し遊ばせ。
武麿　タラヽ、タラヽ。

バルコニーへ大石麗子現れる。二十歳。

麗子　兄さんの馬鹿！（おこひ去る）
武麿　（仰ぎ見て）何だ、麗子のアンポンタン。
麗子　晝日中から何と云ふ事です。大石男爵家の面目にかゝりますよ。少しおつゝしみなさい。
武麿　おや〳〵。えらそうな事を云ふね。おつゝしみなさいはないでしよう。省みてまづ汝自身をつゝしみ給へ、アーメンだ。
麗子　何が省てなの。可笑な事を云ふのね、兄さんは。

武麿答へず。「アルヽの女」の曲を口笛で吹く。

麗子　きざな人！

武麿、活動俳優式に辭儀をする。

武麿　おゝ、和製ジユリエツトよ。私が分りますか。私は山路照夫です。あなたの山路照夫です。ユア•オウン•デイア山は照る〳〵、テンツヽテン〳〵。
麗子　兄さんは本當に眞空管ね。山路さんの事を云つてからかつたつて駄目よ。照夫さんと私とは、お互ひ同志でハッ

キリエンゲーヂしてゐる仲なのですからね。

武麿　日本ではね、自動車で牧師の所へかけつけて、二圓や三圓で式をあげて貰らうつて手輕なわけには參りませんからね。お生憎様。

麗子　お母様のお許しを受けますよ。

武麿　お許しは出ませんよ。

麗子　受けますよ。

武麿　出ませんよ。

麗子　兄さんの低能。

武麿　妹の早熟。

この前に、大石はつ子出て聞いてゐる。はつ子は四十三になつてゐる。

はつ　二人ともいゝ加減におやめなさい。みつともない。

麗子はひつこむ。

はつ　武麿さん。あなたは仕様のない子ですね。お祖父様やお祖母様・それからおむら伯母様のお三人を多摩の御陵へ御案内すると云つてお約束をしてゐたぢやありませんか。

武麿　えゝ、それは知つてます。

はつ　知つてゐながら何故御案内しないのです。全體昨日から出たつきりで、何處を歩き廻つてゐたのです。

武麿　お母様、さう頭からお叱りなすつては困ります。僕ももう二十三歳です。貴族院の勢力團體研政會の事務を手傳はせられてゐれば、昨今深甚の考慮を要する政界激變の時ですもの、時には內へ歸れない場合も生ずるぢやありませんか。

はつ　あゝさうだつたのかい。成程ね。それなら私も叱るどころか褒めて上げますがね。何にしても、折角ゐらつし

し、女手で育て上げた甘やかし兒と云はれては、私はどんなにつらからう。その事をよく考へてね、立派な人物になつておくれよ。

武麿　僕は大丈夫ですよ。だがお母さん、麗子には氣をつけなくつちやいけませんよ。

はつ　どう？

武麿　どうつて、麗子は戀におちてますよ。

はつ　まさか。

武麿　まさか、なんて呑氣な事を云つてるからお母樣は駄目ですよ。娘十八番茶も出花でせう。まして麗子はもう二十にもなつてます。今時の若い女にちつとでも目を放して、御覽なさい。モーションの早いことつたら、とてもお母樣の若い時分の比ぢやないですよ。

はつ　何をつまらない事をペラ〳〵云ふのです。そんな所ばかりお父樣に似ては困りますね。

武麿　だつて麗子は、あの山路照夫にすつかり共鳴してゐますよ、南米へ移民しようと云ふ山路と。

はつ　まあお前さんは。冗談にそんな事を云ふのぢやありますまいね。

武麿　嘘と思ふなら、麗子を呼んで聞いて御覽なさい。(小間使出る。)

こひ　奥樣、山路樣の奥樣がおいでになりました。

武麿　そら來た、ガチャ〳〵婆さん。

はつ　これ！　(おこひに)　お一人でかい？

こひ　いえ、若旦那樣と御二人で御座います。

武麿　一ケ聯隊のあのウヂャ〳〵の子供達は連れてないだらうね。

こひ　はい。

武麿　助かつた。

はつ　ずつと庭へお通し、櫻も美事だしするから。

こひ　はい。（去る）

武麿　どうしてあの人はあんなに澤山子を生んだんでせうね。山路の叔父さんも六十幾つで死ぬ間際まで子を生ませた事になりますね、生産能力に於て偉大なる人物だつたな。

はつ　まあお前さんは少しだまつてゐらつしやい。

おこひが山路とみだけを案内して出、すぐ去る。とみは五十四歳。

とみ　まあ／＼／＼、美事に咲きましたこと。目が醒めるやうで御座いますこと。今日ははつ子様、今日は武麿さん。

はつ　今日は、よく行らつしやいました。櫻が眞盛りになりましたから、お宅の皆様お揃ひでお遊びに來て頂いたらと存じておりました。

とみ　きつとお誘ひ下さいますことゝ存じておりましたけれどもね、今日は幸ひの日曜と申し、とてもみんなぢつとしておりませんので、押しかけて參りましたの。相變らず圖々しいで御座いませう、オホヽヽヽ。

はつ　でもお子さん達は？

とみ　照夫は今麗子さんと話があると申しましてね、一寸お二階へ參りました。他の子供は百合子が世話焼で動物園で遊んでおりますが、すぐ後から參ります。

武麿　おや／＼。

はつ　（息子を睨んでから）照夫さんはいよ／＼ブラジル行きを御決心ですか。

とみ　えゝえ、もう是非行くと申しましてね、先へ行つて立派に成功して、すぐ私達もみんな呼寄せると、えらい鼻息で御座いますの。もつとも、何から何までこちらのお祖父様のお力添えがなければ駄目なこつて御座いますが

はつ　（同時に）實は照夫さんの……
とみ　照夫の事で、何か御用で御座いますの？
はつ　いえ、その、別に、實は……
武麿　照夫君は麗子と可なり親密ですね。叔母さん。
とみ　親密だつたらどうなんです。
武麿　いやあ、僕ア、何もその……
はつ　とみ叔母樣は、照夫さんと麗子と親しくしてゐるのは、前からお氣づきでゐらつしやいますの？
とみ　當り前ぢやありませんか。若い男と女と、しかも親類同志の中で、お互ひに氣心が合へば、親密になるのが當り前、ならなかつたらまあ不具ですね。
はつ　では二人の仲はどんなに親しくなつてもよいと思召しですか。
とみ　つまるところは二人が夫婦になる、と云ふのでせうね。
はつ　まあ！
武麿　とみ叔母樣、さう簡單にはいきませんよ。
とみ　何ですか？
武麿　麗子はいやしくも大石男爵家の令嬢でせう。會社の職工と夫婦にはなれませんよ。
とみ　へゝえ、こりやおかしい。男爵家の令嬢と職工とが夫婦になれないと云ふ法律がありますか。第一照夫の事を職工々々とさけすんだ風に云つて下さるな。織工は立派な勞働者ぢやありませんか。お前さんは何です。ノラリクラリとして、たかゞダンスホールで女の手を握るのがせい一杯の仕事の癖に。生れた場所が違つてゝ御覽、お前さんなんざ、何になつたか知れたものか。

はつ　まあ、叔母様！

とみ　いゝえ、お前さんの息子さんだが、此の子はよつぽどきたへ直さないといけませんよ。私の照夫はあれでも賀川さんの第一のお弟子です。

武麿　賀川つてな何です？

とみ　（はつ子を見て）お母さんに聞いて御覽、賀川つて誰だか。

はつ　叔母様！

とみ　（言葉を續ける）お前さんは賀川さんが若い時會社の勞働者だつた事は知るまいが、今衆議院で民衆黨の總理だと云ふ事は御存じだらう。お前さんは何です。たかゞ貴族院の手傳ひ屋さんぢやないか。お前さんのお祖父樣だつて賀川さんの仲裁がなかつたら、今頃は會社のストライキで目を白黑してるなさつたゞらうさ。

武麿　あゝ、あの賀川か。

とみ　あゝ、「あの賀川」さんさ。全體お前さんぞは……

はつ　叔母様！

とみ　照夫の蔭口はきいて貰ひますまい。

　麗子と照夫とが來る。照夫は脊の高い廿四歲の賴もしげな男。

麗子　お母様、私と照夫さんとは結婚の約束をしてよ。

はつ　え！　まあ、麗子さん！

麗子　お母様、いゝでせう。

はつ　お前さんはまあ、何と云ふことでせう。それが若い娘の云ふ事ですか？

麗子　あら、どうしていけないの。

はつ　お前さんは照夫さんがブラジルへ行くと云ふ事を知つてゐるのかい。

麗子　あら、いやなお母様、それを知らないでどうしませう。

はつ　お前さんは、日本を棄てゝ、生れ故郷を棄てゝ、此の邸を棄てゝ、外國へ行くのも平氣なんですか。

麗子　古いわ。お母様の頭は。日本とか故郷とか家屋敷なんてものに囚はれてちや駄目よ。新天地に新生活を始めてこそ生き甲斐があるのぢやなくつて。

はつ　照夫さん、あなた方は眞面目にかう云ふ事を考へてゐるのですか。

照夫　はい。私共の切な希望で御座います。お許しを願ひます。

武麿　駄目だよ君、そんな事をお母様が許す筈がない。

麗子　許す許さないの問題ぢやないわ。私はさうするときめてゐるんだから。

はつ　麗子や。

麗子　だつてお母様、考へて御覧なさい。今日本の最も苦しんでる事は何です。

武麿　金のない事だ。

麗子　兄さんは默つてらつしやい。お母様、日本の將來の大問題は人口と食糧の問題よ。昔のやうにやれ朝鮮をとるとか、滿洲に勢力を張るとか、そんな帝國主義的な軍國的な小さな問題を論ずる時代は去つたのよ。そんな郷土的でなく、人類生存の最上策として、あらゆる未開の土地に新天地をうちたてる。それは取りも直さず、行詰りかけてゐる日本それ自身の大問題を解決する事になるのよ。ねえ、照夫さん。

照夫　さうです。

武麿　女代議士の辯論終り。

麗子　ねえ、お母様、クヨクヨしないで頂戴ね。

はつ　お前さんはまあ……

涙ぐむ、自動車の音、武麿は口笛吹いて、ホースで水を撒く。庭から尙孝、千代、及びおむら入る。尙孝は七十六歳、千代は

七十一歳、おむらは七十二でゐる。おむらを除く二人は杖をついてゐる。

尙孝　ホヽヲ、みんな庭でお花見かな。結構々々。おゝくたびれた〳〵。婆さんや、早速此處へ茶を貰はうか。はつ子山路の親子が來てゐるに、何故お菓子など出さんのぢや。これ〳〵、平山々々。（平山出る）うむ、今買つて來た水菓子をこゝへ持つて來い、（平山去る）あゝ、これ〳〵、武麿、お前はいかんぞ。何故約束を守らん。怪しからん奴ぢや約束を守らん奴に錄な奴はない、全體何處で何をしてゐたのぢや。

武麿　お祖父樣、昨日から二顧會や何やかで研政會の用が多かつたので、つひ大月子爵の所で引止められまして、歸れませんでした。

尙孝　あゝそうか。研政會の用事があつたのか。それならどうも仕方がないな。

むら　（はつ子に）はつ子さん。どうかしましたか。

はつ　（遂に泣き出す）叔母樣。

とみ　（慰めて）はつ子さん。

尙孝　何、何ぢや〳〵。

千代　はつ子や、どうかしたのかい。

尙孝　又武麿めが何かしおつたのか。

麗子　いえ、お祖父樣。私達のせいです。

尙孝　何、何ぢやと。

麗子　私と照夫さんのせいです。お祖父樣。私と照夫さんとは結婚する事にしました。

千代　まあ、麗子。とう〳〵さうなつたのかい。そりや結構、そりや結構。お母さんが泣くのに無理はない。私でさへ嬉し涙が出るよ。

尙孝　何、結構ぢや。誰が誰と結婚する？

照夫　私と麗子さんとで御座います。
尙孝　お前と麗……麗子と！　馬、馬鹿な事を。そりやまあ一體何と云ふ話ぢや。怪しからん。不都合千萬な。これ、はつ子。これはお前の指金か。
はつ　まあ、お父様。とんでもない。私は今聞いたばかりでびつくりしてゐます。
武麿　そら見た。お祖父様も反對だ。
とみ　尙孝様．何が不都合なので御座います。
千代　（おづ〳〵と）えゝ、あなた、どうしていけないので御座います。
尙孝　どうして？　わしが不承知だからだ。
千代　まあ、こんないゝ縁組みを！　あなた、私の五十年間のたつた一つのお願ひで御座います。どうか此の縁組みは許してやつて下さいまし。
尙孝　不承知だと云つてるのが分らんか。お前はわしの言葉に逆くのか。
とみ　お祖父様は、照夫は出來のいゝ男だと褒めて下さつたぢやありませんか。
尙孝　照夫は見込みのある男だ。一種の天才肌の男ぢや。が、それと結婚とは問題が違ふ。廿何年か前に、此處で、此の庭先で、天才と結婚との問題を論じたが、今もわしは同じ意見ぢや。見込みのある男と思へばこそ、ブラジル行きの費用も出してやらうと云つてゐるのに、つけ上りおつて、わしの大事な孫娘まで連れて行かうと云ふのか。厚かましい。
千代　麗子があなたの孫娘なら、照夫は私の甥で御座います。
尙孝　だまんなさい。
千代　いゝえ、だまりません。
尙孝　（ぢつと千代を見つめたまゝ）わしの孫娘は、會社雇ひの勞働者にくれてはやらん。麗子はわしの選んだ所へ嫁に行

くのだ。

照夫　失禮ですが、お考へは少し偏してゐると存じます。

尙孝　(怒つて)なに、何ぢやと。

麗子　お祖父樣。どうぞ落ついてゝ頂戴。

尙孝　落ちついとる。わしは充分落ついとる。

むら　私の考へでは……

尙孝　お前の考へが何になる。お前までが千代に味方して、わしに楯つく氣か。

むら　楯つくのではありませんが、兄さんの反對の理由は理由になつてゐないと思ひます。

尙孝　理由は二の次ぢや。わしが不承知だ。それで充分だ。

麗子　不承知だつて、結婚するのは私達二人ですわ。勝手にしますわ。

尙孝　な、なに、生意氣千萬な。するならして見ろ。照夫には一文の補助もしてやらん。社會的に成功はさせんぞ。

麗子　そんな無茶なおどかしを云つたつて駄目よ。

千代　あなた、あなたはいつまで其の「我」を押通そうとなさいます。私は今　五十年の間にたゞ一度のお願ひを致しましたのに、あなたはそれさへも、それさへも頭ごなしにお叱りつけで……私は……私は……

　　淚をおさへて、急ぎ去る。

とみ　(その後を追ふ)千代樣、千代樣。(去る)

尙孝　(苦々しげに)花盛りの此の長閑な日に、孫娘は生意氣な理屈をこねる、婆さんは口答へして泣き出す。何と云ふ日だ!

照夫　相すみません。

尙孝　あやまつて貰ひたくない。(平山出る。)

平山　賀川太安様がおいでゝ御座います。應接室へお通し申しました。

尙孝　よし。（平山去る。）

むら　賀川さんもこちらへお呼びしたらいかゞ。

尙孝　用事がある。あの男に自分の會社のストライキを仕末して貰はにやならんとは、世も末になつたものだ。お父様の口辯が思ひ當る。武麿、お前にも用がある。來なさい。

武麿　はツ。（二人去る。）

むら　（照夫に、意味ありげに）お前さんは、お母様を探してゐらつしやい。

照夫も去る。ラヂオで音樂の放送聞える。

むら　はつ子さん、お前さんは麗子が可愛くないのかい。

はつ　あら、叔母様、何を仰います。武麿はあの通りのうつそり者。私が身にも命にも代へてと思つてゐますのは此の子ばかりで御座います。

むら　私は又、此の五十年あまりの間、お前さんだけを命にも代へて、我が子のやうに育て上げて來たつもりです。

はつ　はい、それはもうよつく承知しております。それほど私を思つて下さいます叔母様が、どうして此の子を手離せと仰います。

むら　手離して悲しむのは、はつ子さん、お前さんです。手離さずに不幸になるのは麗子です。

はつ　まあ、叔母様。

むら　お前さんの間違つた結婚。その淋しい心の中をよつく知り拔いてゐる私ですよ。私は此の子にお前さんの二の舞をさせたくありません。よつく考へて見るがいゝ。もしもあの時お前さんが、たつて自分の初戀を遂げて……

はつ　あれ、叔母様、大石はよい夫で御座いました。

むら　何も隱す事はありません。お前さんが此の子を本當に愛してゐるなら、自分の過つた結婚、うら淋しかつた一生

のあやまちを此の子に打明け、此の子の初戀の成功に力をかしてやるが本當ぢやあるまいか。

はつ　（しみ／″＼と）自分の一生がうら淋しいだけに、此の子が遠い／＼外國へ行つてしまふのが悲しくてなりません。ブラジルへ移民して、又いつ日本へ歸るか分らぬ者につれ添はせて……。あゝ、考へても私は身が氷るやうに存じます。麗子は私の命で御座います。私の魂で御座います。（麗子を抱きしめて）麗子や、麗子や、どうぞ、どうぞお母樣の傍を離れないでおくれ、お願ひです。淋しい／＼お母樣を一人日本で泣かせておくれでない。麗子、頼みます、頼みます。

麗子　（縋つて）お母樣！

はつ　私を見棄てゝ行つておくれでない。

むら　年寄りは先へ死ぬ。年寄りのために若い者が犧牲になるのは間違つてゐる。

麗子　お母樣。私はどこへも參りません。お母樣、いつまでも／＼、お母樣のお傍近くにおります。

はつ　おゝ！

むら　はつ子さん、お前さんは間違つてゐる、間違つてゐる。

奥から賀川友安出る。四十九歲。

賀川　今日は。成程美事に咲きましたなあ。

麗子　今日は。

麗子は涙をかくして駈け去る。

はつ　賀川樣、ようこそ。どうぞこちらへ。

むら　用は大變早くすみましたね。

賀川　御老人は大分御不機嫌でした。櫻でも見て來いと仰いましたが、何か事件があつたのですか。

むら　[illegible]よ。（行きかける）

にて [illegible] へ。

むら　私などはどこへ行かうと自由さね、ホヽヽ。（淋しく笑つて去る）

はつ　ストライキの片はつきさうですか。

賀川　まあ一時の所はどうにかおさまりさうです。いや、老子爵も流石に衰へられましたね。時勢の移つて行くのを痛切に感じます。人ごとではない。私も疲れて來ました。やゝもすると時勢の進みの早さに追ひ捲られ勝ちです。勞働者の氣持ち、若い者の意見、其等は日一日と私達中老の者を置き去りにして進んで行く。例へば、日本帝國の將來と云ふ事に關しても、我々はまだ〳〵國家中心の範圍でしか考へてゐませんのに、若い者はどし〳〵その埒を飛び越えて、地球全體が自分の國であり、人類全體が兄弟であると云ふ思想を、何の無理も感ぜず、なだらかに心の中に受入れてゐます。私の部下で云へば、あの山路照夫の如きはその好適例です。口は下手な男ですが、あれなどはすばらしい將來を持つてゐます。あゝ云ふ若者に麗子さんなどをめあはせたら、殆ど理想的の新夫婦が出來ませう。どうです麗子さんを山路の嫁にやつては？

はつ　父が何かあなたに申しましたか？

賀川　お父樣？。いゝえ、何故です。

はつ　いえ。でも照夫さんはブラジルへ移つてしまふ人です。

賀川　結構ぢやありませんか。僕は大賛成してゐるのです。すでに九十一のお爺さんで、一家を擧げてブラジルへ移住した人があります。若い者ですもの、どし〳〵海外移住するのは壯快ぢやありませんか。

はつ　麗子はブラジルへは參りません。

賀川　はてな。麗子さんは熱心な賛成者の筈でしたが。

はつ　外國へ行かないと私に約束しました。

賀川　どうして？

はつ　私は我儘で御座います。それはようく分つております。けれども、けれども、私は、あの子に見棄てられては……

賀川　「見棄てる」とはチト言葉が強過ぎますね。

はつ　あなたは　私の心の淋しさはよく御存じの筈で御座います。

賀川　（ゆつくりと）はつ子さん。昨日の事のやうですね。

はつ　え？

賀川　若葉の頃の此の櫻の下でした。私達は堅い〱握手をしましたね。あの時あなたは弱かつた。

はつ　（情激して）あなた、ゆるして下さい！

彼等は再び堅く手を握り合ふ。

「お手々つないで」の童謡聞え、武麿を先頭に山路とみ、に導かれて六七人の子供がダンスしながら來る。一人は平山に脊負はれてゐる。ワイ〱と云ふ賑かさ、武麿と平山の持ち出す、蓄音器のレコードを中心に、暫くは子供等の遊戯が行はれる。ラケットを持ち出す者、ホーズを振廻す者、バルコニーへ上つて物を投げる者、踊る者、等々。はつ子と賀川は辟易して、サンマーハウスに影をかくす。尚孝出る。

尚孝　（あまり多勢の、あまり盛んな遊びに茫然としてゐるが、やがて聲をかける）これ〱、さう庭を臺なしにしてはいかん。奥へ行つてお菓子を貰へ。おい〱千代、おこひ、子供達に菓子をやれ、少し火の手を靜めんと命が縮まるわ。

子供等は「やあい、お爺さんが怒つた」とか「お菓子をくれるとさ」とか云つて一同みな奥へ去る。

尚孝　（見送つて）ようまあ、あれだけ生んだものだ。成程人口問題が起る筈だ。（はつ子の姿を見つけて）おい、はつ子、お母さんはそこらにゐないか。

はつ　いゝえ、さつきあちらへいらしつたまでゞ御座います。

尚孝　（心配顔で）さうか、こつちへ來てるかと思つた。お前探して來てくれ。

はつ　（近寄り）お父様、私、考へて見ましたら、やつぱり麗子と照夫との結婚は許して……

尚孝　よいと思ふ？　わしは思はん、

はつ　賀川さんも仰しやる通り……

尚孝　なに、誰？

はつ　賀川さんも仰しやいますが……

尚孝　賀川？

はつ　二人も深く思ひ合つておりますし、無理に引離すのは可哀想で御座います。

賀川　（近づいて）私はたゞさうではないかと申したゞけです。

尚孝　可哀想であつてもなくても、わしがいかんと云つたらいかん。第一お前は、つひ今の先まで泣いて反對してたぢやないか。

はつ　でも、私は深く思ひ合つてる二人に思ひやりがなさすぎました――つひ今の先までは。

尚孝　何のこつちや、一向分らん。今日は女ののぼせる日かな。天氣もいゝからな。賀川君、君には一體女と云ふものの正體が分るかな。

賀川　はい、チラリ〳〵と位には。

尚孝　（二人の樣子に察して）はゝあ、あ、成程々々。チラリ〳〵とな、ふむ。（考へる）結局わしは此の內で一番の年寄りぢや。順序から云へばわしが一番先へあの世へおさらばぢや。後に殘る者の事を青筋立てゝ力むでも仕方のない事ぢや。

はつ　まあ、ぢやお父樣、同意して下さりますか。

尚孝むづかしい顏をしてゐる。

はつ　お父樣！（尚孝まだ頑固に首を振る。）

はつ　お父樣！

尙孝　（はつ出す樣に）勝手にせい。
はつ　照夫の資金も？
尙孝　やる。
はつ　まあ、大事な〳〵お父樣。
尙孝　大事がられたくない。
はつ　まあ嬉しい。みんなに云つて喜んで貰ひます。（去る）
賀川　一家の主となられると、中々お氣苦勞が大變ですな。
尙孝　どうも時勢の進み方が早過ぎて敵はん。子供は親に楯つく。女房は亭主に反對する。え、賀川君、五十年もつれ添つたわしの妻がわしに反對する。そんなためしがあるものかな。
賀川　大分ある樣です。
尙孝　大分ある？　いや時勢だな。それとも氣候のせいかな。ま、ま、君も時々は女房にやられる覺悟が肝心だな。
賀川　私がですつて？
尙孝　おつとゝ、隱しても駄目々々、ま、それもいゝさ。盛んな中に活躍し給へ。
賀川　では私はおいとま致します。左樣なら。

賀川去る。引違へて、わつと云ふ喚聲と共に、子供等と、おとみ、おむら出る。

とみ　これ〳〵、靜におし、みんな揃つて、お爺樣に御挨拶なさい。「これからみんな揃つて活動を見せて頂きに參ります、左樣なら。」と云ふのですよ。

子供等宜しくある。

尙孝　分つた〳〵。早く行け〳〵、とてもやかましくて溜らん。全く照夫がブラジル移民を思ひついたのも無理はない。武麿、早くつれて行きなさい。

とみ　さ、行きませう〳〵。（子供等とおとみ、武麿去る。）

尚孝　（おむらに）はつ子や麗子はどうした。

むら　仕度をしてゐるのでせう。

はつ子、麗子、照夫出る。

麗子　お祖父様、お許し下さいまして有難う御座います。感謝しますわ。その喜びの紀念に、こら、私、断髪しましたの。

尚孝　なに、亂髪？

麗子　断髪。

尚孝　断髪か。（麗子の髪を見て）成程な。昔私のお父様は丁髷をお切りになる時泣く程いやがつておむらに追ひかけられなさつたものだが、今の世は嬉しいからと云つて髪を切るのかな。どうも分らん、どうも分らん。

むら　とう〳〵内にも断髪の女が一人出るやうになりましたね。

はつ　では私共もみんなのおつき合ひを致して參ります。

挨拶して、はつ子、麗子、照夫去る。

むら　これで晩までは靜かになつた。

平山とおこひ出て片づける。

こひ　あら、どなたかの煙草入れが御座います。

むら　照夫さんのだらう。まあ、そこへ置いてお置き。（召使共去る。花散る。）

尚孝　千代はどうしてる？（千代そつと入る。）

むら　あ、來ましたよ。

千代（尙孝に近寄り）あなた、先程は御意見にさからひましてすみません。お許し下さい。

尙孝　につくい奴ぢや。ハヽヽ。あんな事を二度としてはいかんよ。わしの壽命が縮まるから。

むら　さ、私は臺所を手傳ひましよう。

千代　あ、もし、おむら樣、お願ひが御座います。

むら　何ですの？　（千代、小聲でおむらに賴む。）

むら　まあ、私に何か彈いてくれつて。

千代　どうぞ。

むら　はい〳〵、大きな赤ちやん御夫婦のお仲直りに彈きませう。お琴ではなく、ピアノをね。幾年振りで彈く事か。

（去る）

花散る。ピアノの音。老人夫婦は老樹の下に居並ぶ。

尙孝　花が散るな。

千代　お父樣が、此の櫻が此の庭一杯に枝をはり、目も綾な花の咲くのを見るのが樂しみだと仰しやつたのは、昨日の事の樣に思ひますが。

麗子が急ぎ足で入る。煙草入れを取り、持つて來たバラの花を老人二人の手に持たせ、頰づりし、て、無言で去る。

尙孝　私達も苦勞して來たな。

千代　本當にね。

ピアノの音續く、花散る。

―幕―

（ベンネツトの「一里塚」に據る）

椿咲く

島田青峰輯

山坊の日の當らざる椿かな　如卯漢
落ち次ぎて波紋重ねし椿かな　同
葉鳴らして砦の椿折りとりし　同
藪尻の清水に浸る椿かな　唐
草椿つ一落ちて音なる大地かな　一少年
中腹や椿咲くなる薬師堂　同
落椿汽艇の波にまぎれけり　螢風
椿挿す壺の埃を拭ひけり　桐舟
に温き雨椿そゝぐ日なりけり　裕水
落椿掃くを定めや朝の閑　葉亭
落椿輪波收めて浮びけり　唐麓
社後の崖椿冷たく覗きけり　同
長壽や筏に赤き山椿　同

藥屋根に今日[illegible]椿の落つること　静
藏あひにいま海凪ぎし椿かな　[illegible]
椿活く瓶艶々し書座敷　一
宿場近く家毎に見る椿かな　同
園の徑こゝに盡きたる椿かな　吾
落椿くづれて沈む芝生かな　同
のんびりとかげる日脚や落椿　葉
に親鶏つゞくひよこや落椿　翠盆子
椿咲くや日和の庭に育ち鶏　九州
村中の椿や家と家の裏　若
村道に沿ひて貧寺の椿かな　伸余子
大風の藪の中なる椿かな　致
ひもすがら雨降る窓の椿かな　玉
繋ぎある舟に落ちたる椿かな　磊
納屋屋根の雫づり落ちし椿かな　ひさ
雨細く頻りに椿散る日かな　元
島の上の小さき祠や椿咲く　青

時事消息　自二月十六日 至三月十五日

△ペスタロツチ百年祭（二月十七日）ヨハン・ハインリツヒ・ペスタロツチ百年祭が都下敎育團主催の下で青山會館で行はれた。

△ポール・クローデル氏　二月十七日日本を去つた。

△光風會展、日本美術院試作展　二月十七日から東京府美術館にて開催。

△古川修氏個展　二月二十一日から廿五日迄三越樓上にて展觀。

△ブランデス逝く　世界的文藝批評家ゲオルグ・ブランデスは、二月二十日コペンハーゲンにて逝去した。行年八十六歲。

△佛蘭西美術展　三月一日から十二日迄東京府美術館にて開催。

△大村西崖氏逝く　東京美術學校教授大村西崖氏は三月七日逝去した。行年六十歲。

△中央美術展　三月十日から東京府美術館にて開催。

△學士院第一部授賞者決定　慶大教授文學博士加藤繁氏（唐宋時代に於ける金銀の研究）に恩賜賞授與さる。

學校教授彫刻家新海竹太郎氏は三月十二日逝去した。行年六十歲。

新刊書一覽

△**古事記の新研究**（倉野憲司著）　嘗つて本誌正月號に傳說に關する新研究が發表せられた新進篤實の學徒である倉野氏が、畢生の事業と期してゐる古事記研究の序說とも云ふべきものである。古事記が我が上代の敍事詩的文學として試みた考察で、古事記に對する前人未踏の新研究と云つていゝ。我々はかくの如き研究によつてよりよく上代文化の理解が助けて貰たることを著者に感謝せなければならない。緒論敍事詩の起源及び發達、日本上代の英雄時代、古事記の民族的成立、古事記の統一性並びに其藝術的價値、古事記に現はれたる英雄的性質、古事記に現はれたる說話的性質、結論の數章に分れ極めてアトラクテブに說かれてゐる。國文學研究叢書の第九篇。（四六版布裝四五六頁三圓五十錢赤坂傳馬町至文堂發行）

△**宮廷女流日記文學**（池田龜鑑著）　國文學史上王朝時代と云ふ美しいロマンテイツの日記と云ふ特殊な文學の一系列」が發見その本質を明かにしようとした。その一つの試みが云ふまでもなくこの書である。如何に宮廷にかゝる特殊な文學が發生し發達して行つたか——その過程に最大の興味と關心を置いて著者はこの研究に沒頭したのである。「通俗的な概論的な常識的な研究ともつかず考證ともつかず評論ともつかない不徹底な妙なもの」と著者は謙遜深く序に云つてゐるが、親切な說明と明確な論斷とは眞に敬服に値する。蜻蛉日記、和泉式部日記、紫式部日記、更級日記、讃岐典侍日記、十六夜日記、辨内侍日記、中務内侍日記に就いての研究から成る。國文學研究叢書の第七篇（四六版布裝〇八頁三圓五十錢至文堂發行）

△**校註古本古今和歌集**（尾上八郎著）　今、世に流布してゐる古今和歌集は貞應本云はれるもので、延喜五年の撰進のものと可成異つたものである。しかるにこゝに貞本より原本に近い元永本が發見されたのでる。これによつて、更に筋切又通切を參照尾上博士は、原本に近い古今集の校註定本つくられた。殆ど原本に近く、完全に正しそれが永遠化されたと云ふことは古典に對が感ずるものにとつて、悅ばしき限りである

△**平安朝時代の草假名の研究**（尾上八郎著）平安朝時代の草假名を文化史的に研究したもので、まことに劃期的研究とも云ふべきである。草假名を系統的秩序的に考察し以て文化史的資料としたところに大きな獨創的價値がある。序論、資料の研究、平安朝時代の草假名の系統的考察 結論に分けて說かれてゐる。（菊版布裝二三二頁定價不明 雄山閣發行）

△**良寬和尙萬葉短歌抄**（相馬御風編並解說）「良寬和尙自筆文、保存されて來た萬葉集の抄錄」を紹介したものである。まことに著者が緖言で云はれるやうに「良寬その人がどんな風に萬葉集を讀み味うてゐたかについての資料」として我々の興味をそゝるものである。特に良寬の歌が添へられてあることは萬葉集と良寬との關係影響を知る上に有意義で嬉しい。（四六版布裝二四一頁一圓九十錢日本橋區通四丁目春陽堂發行）

△**詩人一茶**（橫山靑娥著）人間苦に徹し一茶の雖な生涯の步みに對する著者の感激と思慕の心から成るものである。人間として、又詩人としての一茶がこゝに生きてゐると云へよう。溫かな同情とこまやかな鑑賞とを汲むことが出來る。一茶評傳として味讀

二圓四十錢 神田區北神保町新生堂發行）

△**愛の劇場**（鈴木善太郎著）「劇場を愛する心はこの一卷と成つた」と云ふ著者の卷頭の言葉は適確にこの書の本質を語つてゐる。一部は研究の記錄であり、二部は紹介に關するものである。明日に希望をかけることに現在の淋しさから救はれると云ふ著者の氣持がどの頁にもどんな言葉にもよく出てゐる。その意味でこの書は我々に一種の親しみを呼び起してくれる。（四六版布裝二九一頁二圓京橋弓町彩雲堂發行）

△**屁**（福富織部著）屁に關する一切の文献を集錄したものでまことに天下の奇書であり珍書である。「恐らく無用の書と云つてこれ位無用の書は又とあるまい」と著者は云へてゐるが、ブックィエカアによる標題の堂々としたこけおどしの內容の空疏な書物と比して自ら無用を標榜するこの書の方がどれ程有用であるかも知れない。「音に聞くブックなば手に提り屁のひらけば匂ふ玉の言の葉」と云ふ野崎左文氏の歌はよく、それを證明してゐる。（四六版紙裝四一六頁二圓八十錢 神田區表猿樂町玄泉堂發行）

△**新らしい言葉の字引**（服部植原共著）言葉は生活と共に日に日に進步して行く。新

る。嘗てこの字引は數年前刊行され好評を博したものであるが今度大增補改版されたのである。單にこれは辭書として使用されるばかりでなく事實小さな百科辭典と云へる。（二圓實業之日本社發行）

△**新しい語原解釋の字引**（服部嘉香著）日常語の語原をしらべて解說したものでまことに重寶な字引である。前の「新しい言葉の字引」と併用して然るべきものである。（一圓二十錢實業之日本社發行）

△**離愁**（平岡正夫編）故阿部仲次氏の遺稿である。短歌約三百四十首が集められてある。親友平岡伊藤二氏の文章も哀み深くよまれる（非賣品）

△**醫學者の人生觀**（羽太鋭治著）醫學者の人生觀を系統的に簡明に叙述したもので興味深い。思 史に現れた醫學者の人生觀、二個々の問題に關する醫學者の人生觀、三老病死と醫學者の人生觀、四老病死問題の結論 四六版紙裝一八八頁一圓八十錢 本鄕區春木町三南江堂發行）

△**一番鷄は鳴く**（小野田益三編）創作詩隨筆が賑かに滿載されてある。年三回の定期刊行である。片々たる小雜誌と異つて氣持よく編輯され氣品の高いのは嬉しい。（四六版紙裝二五七頁八十錢 春木町三ノ六眞砂社發行）

編輯後記

本號の明治文學號も御覽の通りの貴重なる文献を集めました。來々六月號は、愈々年來計畫してゐる『**自然主義前後**』と題する特別號を刊行いたし、これで一先づ「明治文學の研究」を完結するつもりで居ります。さて來**五月**號は創作欄を**戲曲**號といたし、高安月郊氏の『梁川紅蘭』島村民藏氏の『蒲生氏郷の妻』秋田雨雀氏の新作その他を掲載いたします。論說欄には、今月號に載るべくして筆者病氣のため載りかねた宇田川文海翁の『四十年前の文壇』を初め、尾崎久彌氏の『鄙三處の賣笑記錄』及び、暫く中絕してゐた「文藝講說」第五として長篇「歐洲近代の自然主義」（本間久雄氏）等が載ることになつてゐます。表紙は平福百穗氏が執筆される筈になつてゐます。

■早稻田文學（每月一回一日發行）

特別號は年四回、一月、四月、七月、十月に發行し、其他は普通號とす。

定價表

定價	一冊	税
普通號	六十五錢	一錢五厘
特別號	一圓廿錢	三錢
半年分（特別號とも）	五圓	郵税共
一年分（特別とも）	拾圓	郵税共

□外國は普通號　錢郵税・特別號十六錢

□外國行（半年分郵税共＝五圓四錢　一年分郵税共＝拾圓八錢）

▲本誌の御註文はすべて東京堂（振替東京二七〇番へ御申込の事

▲御註文の際は必ず（早稻田文學何月號より）と御明記の事

▼郵券代用の御送金は一割增の事

▼轉居の際は誌名と新舊兩住所御通知の事

昭和二年三月廿八日印刷納本

昭和二年四月一日發行

No. 255

禁轉載

編輯兼發行者　本間久雄

印刷者　關根慶寛

印刷所　早稻田印刷株式會社

東京市小石川區雜司ケ谷町一四四

編輯所　早稻田文學社

電話牛込一九〇八

發行所　東京市神田區表神保町三番地

株式會社　東京堂

電話牛込六一〇七

振替東京二七〇〇番

早稻田文學

昭和二年

六月號

明治文學號

自然主義前後

明治文學名著全集（11）

東京神田 東京堂發行 振替東京二七〇番

澤村田之助曙草紙

四六判表紙木版手摺 挿繪多數極美本

定價一圓三十錢 送料十錢

（附）阪東彦三倭一流

岡本起泉著

岡本起泉著
神代種亮校訂

艶名一世に高い近世の名女形澤村田之助は、惡病の爲め手足を切斷して了つても、尚舞臺にその妙技を演じた。この事實だけでも、如何に其生涯が波瀾に富み、その影に多くの女性が潜み、そして又、如何に當時名聲が高かつたかを、察するに難くない。小說的材料と、戲曲的主題は、彼の生涯を通じて無數に見出す事が出來る。宜なる哉。田之助を取扱へる戲曲小說の多きこと。附錄のこれ又一代の名優「阪東彦三倭一流」と共に、俳優傳としての明治繪入草册子を代表するものだ。挿繪多數收載、表紙木版十數度手摺美本。一讀を薦む。



自然主義前後研究號

明治文學名著全集（10）

表紙石版色刷
挿畫多數

定價一圓三十錢
送料十錢

鳥追阿松海上新話

（附）夜嵐阿衣花廼仇夢　岡本起泉著

久保田彥作著
本間久雄校訂

本間久雄氏曰く――「私は明治初期の毒婦物に一種特殊の興味を覺えて假名垣魯文の『高橋阿傳夜双譚』を始め、伊東橋塘の『引眉毛權妻阿辰』同『水錦隅田曙』、柳水亭種清の『艷娘毒蛇淵』その他數多く讀んだが、文章の流麗な點で、筋の自然で無理のない點で、時代の空氣の濃厚に出てゐる點で――藝術的にも、文化史的にも、この『鳥追阿松海上新話』に上越すもの、ないことを斷言する」と。

附錄の『夜嵐阿衣花廼仇夢』は、毒婦お絹と當時の人氣俳優嵐雛寛（後の河原崎權十郎）との戀愛事件を中心とした實說的大衆文藝である。この二小說によつて明治毒婦物は代表される。表紙挿繪は例の通り原本から複刻して多數に收めてある。

東京　東京堂　神田



早稻田文學

六月號

第二百五十七號

三つの長篇を書いた當時のこと

島崎藤村

作の出來不出來といふことを別にして、『破戒』は私に取つて最も思ひ出の深いものゝ一つである。私が長い間の田舍教師から著作者としての新生活に移つたのも、あの長篇を書いてゐた頃であつたから。

今だに私の忘れられないでゐることは、二年と續いた長い日露戰爭の中で『破戒』の稿を續けたことであつた。私には、あの大きな戰爭の記憶と、最初の長篇に筆を執つて居た頃のことゝ、それを引き離しては考へられないくらゐだ。おそらくあの日露戰爭から受けた印象は一生私から離れまいかと思ふ。

私が信州小諸から東京西大久保の方へ小さな家族と共に引き移つたのは、明治三十八年のことであつた。丁度それより一年ばかり前に、私は小諸の馬場裏の住居の方に居て、日露戰爭の始まりかける空氣の中で最初の長篇の稿を起した。田山花袋君が從軍記者として出掛けたのも、その頃であつた。私はあの友人が戰地の方へ出發する前によこして呉れた別れの手紙を讀んだ時の心持を今だに想ひ起す。そこでもこゝでも絶えない戰爭の噂、毎日のやうに馳けて通る號外賣の呼聲、そんなものが小諸馬場裏の草屋根の下に居ても私の心を靜かにして置なかつた。昨日は自分の教へた舊い生徒の一人が入營前の別れを家の門口へ告げに來る、今日は同僚のよしみのある體操教師まで召集に應じて出發するといふ度に、私は小諸の停車場まで見送りに出掛けて、悲しい壯んな生命掛けの叫び聲を聞いては歸つて來た。私はあの戰爭

を外に見て、全く自分の創作に耽るほどの靜かな氣分には成れなかつた。戰爭が長びけば長びくほど、私の周圍にあつた町の空氣はシーンとしたものと成つて行つた。私は開戰當時の熱狂と混雜とを見たり聞いたりするにも勝つて、一層胸を打たれることが多かつた。大きな戰爭の影響は私達の日常生活にまで深刻に浸つて來て、それを自分の身にひし〳〵と感ずるやうに成つたからである。私はあの戰爭の續いた年の冬に、馬場裏の草屋根の下で『破戒』の稿を續けた當時のことを忘れかねる。

『戸の外へも早や深い雪が來た。桑畠も、水車小屋の屋根も白く埋れた。そこいらは一面に覆ひかぶさつたやうに成つた。斯の降り積つた雪の中で、今夜は戰勝の祝ひがある。酸漿提灯をつけて小學校の廣庭に集まらうとする町の人達が家の横を通る。私は南向きの雨戸を開けて見た。暗い雪につゝまれた相生町の通りの方には紅い灯がいくつも〳〵動いて見えた。雪に籠つた「萬歳――萬歳――」の叫び聲を私は自分の部屋の方に坐りながら聞いた。』(『突貫』) 私が最初の長篇の試みともいふべき作の前半はこんな空氣の中で生れた。

私が七年の小諸を辭し、半ば書きかけた『破戒』の稿を抱いて東京へ出た頃は、まだ戰爭は續いてゐた。つく〴〵私は戰爭の悲酸を思ひ知つた。私はまた當時の著作者が奈何に戰爭のために困難したかを目撃した。こんなことを書きつけるのは、全く自分一箇の思ひ出を記して置くに過ぎない。しかしあの著作に從事した間は實に私に取つて多事な月日であつた。私の小さな生命は、全く經驗のない新生涯に移らうとする不安のために動搖しつゞけた。私が信州の山の上から引連れて行つた三人の女の兒を失つたのも、あの西大保の郊外に移つてからであつた。

『山から持つて來た私の仕事が意外の反響を世間に傳へる頃、私の家では最も慘憺たる日を送つた。あの朝、私は新聞を懐にして、界隈へ散歩に出掛けた。丁度日曜附錄のつく日で、ぶら〳〵それを讀みながら歩いて行くと、中に麴町の方に居る友達の寄稿したものがあつた。メレヂコウスキイの「トルストイ論」の中からあの露西亞人の面白い話が引い

てあつた。それは芽生を摘んだら、親木が餘計成長するだらうと思つて、芽生を摘み〳〵するうちに、親木が枯れて來たといふ話で、ひどく私は身につまされた。どし〳〵新しい家屋の建つて行く郊外の光景は私の眼前に展けて居た。私は何のために、山から妻子を連れて、この新開地へ引移つて來たか、と思つて見た。つく〴〵私は努力の爲すなく、事業の空しさを感じた。眺め入りながら「芽生は枯れた、親木も一緒に枯れかゝつて來た……」斯う私は思ふやうに成つた。（『芽生』）

西大久保には私は滿一年になるほどしか住まなかつた。しかし短い月日の割合に、そこには種々な樂しい悲しい記憶を殘した。舊本の『破戒』は函館にある秦慶治氏と、信濃にある神津猛君にさゝげたものであつた。あの二人の厚意なしには、私の最初の長篇は世に出る機會はなかつたのである。函館の秦氏も今は最早故人であることをこゝに書き添へて、私のために寄せて呉れた氏の心づくしを記念しよう。

明治三十九年の秋、私は西大久保から淺草新片町の方へ住居を移した。そこで新居に移つてから第二の長篇に取りかゝつた。淺草新片町の住居は隅田川に近く、家の前を右に取れば淺草橋の畔へ出られ、左に取れば柳橋の畔に出られて横町一つ隔てゝ神田川の水に添ふやうな位置にあつた。あの舊兩國附近から大川端へかけては、私が少年時代より青年時代への種々な記憶のあるところで、日本橋濱町の不動新道には恩人吉村氏の故家もあつた。

こんな緣故も深かつた上に、手狹ではあつたが住心地の好い二階が私の心を新たにさせた。私はあの水邊に近町中の空に見える新居に移つて來たばかりの時のめづらしい心でもつて、新片町の往來に面した二階の障子も何となく氣分を改めさせるところで、『春』を書きはじめた。もと〳〵私が西大久保の郊外を去らうと思ひ出つたのも、一年の間に三人

まで女の兒を失つたその屋根の下には長く暮しかねたので。

　私の『破戒』は、もと〳〵單行本として書いたものであるが、『春』も矢張、最初は單行本として書くつもりで、四十枚ほど書きかけてあつたと思ふ。そこへ思ひがけなくも、東京朝日新聞の、當時の社會部長澁川玄耳氏が新片町の住居の方へ訪ねてこられて、「朝日にお前の作を出してみたいと思ふが、どうか。」といふ相談をうけた。それは、澁川君ばかりでなく、おもに故長谷川二葉亭氏が頻りに勸められたといふ澁川氏の傳言もあつた。そんな事情で『春』は、東京朝日に掲載されることになつた。あれは私が新聞小説といふものを書いた最初の試みであつた。

　そればかりでなく、長谷川二葉亭氏は、私にとつては一面識もなかつた人ではあるが、かねて「浮雲」や「あひゞき」や「めぐりあひ」などで、その人の風采を想像してゐた先輩のことであるから、一つは、その好意にも動かされたのであつた。



『春』を書いた家

長谷川二葉亭氏が後進の私に寄せてくれた好意は、『春』の時ばかりではなかつたやうに思ふが、私は、氏の生きてをられる間に、一度も氏を見る機會といふものがなかつたのは殘念であつた。『春』を書いた當時のことで、先づ胸に浮んでくるのは、長谷川二葉亭氏のことである。

『春』を東京朝日に連載したのは、明治四十年のことで、私の三十六の年であつた。あれは、毎日、新聞に出したものだから、書き上げるまでの間はさう長くもかゝらなかつたか、しかし、書く前年の一年間は、殆んどその準備にかけてしまつた。

あれを書く前に、自分の昔の友だちなぞの若かつた時分の記憶を喚び起さうとして、十一二年も前に歩いたところをも一度旅行してみたいと思ひ立ち、ずうつと以前に歩いた東海道の一部を、少し旅してみたとこがあつた。あの時は、以前に歩いて行つた道を反對の方から歩いてみた。箱根の塔の澤の宿屋にも泊つて、あれから舊道を一人で歩いて、元箱根へ出、それから峠を三島の方へ歩いた。もうその時分でも、以前に歩いたときとは違つて、箱根の舊道なども可なり荒れてゐた。途中で、餓ゑた鴉の群れなんかに啼き立てられて、恐ろしく思つたこともある。それほどあの道も寂しかつたので、殆んど人に逢はなかつた位であつた。

そんなに歩いて見たが、東京へ歸つてみると、得るところはなくつて、ずうつと以前に――友だちと一しよに歩いた場所を想ひ起すことも出來ないくらゐに、別の旅をしたやうな氣がした。たゞあの時分、三島の方に乘合馬車があつたが、その乘合馬車へ友だちと一しよに乘つた時、蠅がきて旅の着物にとりついたことがあつた。まあ、拾つてきたものと言へば、たつたそれだけのことを拾つてきたくらゐなものだつた。十一二年の間をおいて、また通つてみて、その二度目の旅の路に落ちてゐたものは、たゞその蠅の群に過ぎなかつた。しかしあの蠅のことだけでも、作に確實な感じを與へたやうな氣がした。このことは以前、何かの端にちよつと書きつけたこともある。

そんな風にして、作に着手してみたが、私には新聞に書くといふ經驗もなかつたし、非常に書きにくい思ひがした。一時は新片町の二階を去つて、月島の海水館の靜かな部屋を借りて、そこで書いてみようとしたが、日々の新聞に追はれる經驗もなかつたといふやうなこともあつて、どうかすると、額から冷めたい脂汗などが出てきて、途中で投げ出さうかと思つたこともあつた位だつた。どうしてそんなに書きにくかつたかと言へば、一つは、その以前に發表した『並木』のモデル問題で、舊友たちから手厳しい抗議をうけたことがあるので、その友だちを更らにまたモデルにするといふことは、可なり心を苦しめたからでもあつた。

あゝいふモデル問題があつたといふことは、自分の舊友や亡くなつた知己などをもつとまともに觀るといふことの力になつた。今になつて考へてみると、あの『並木』ばかりでなしに、その他の作のモデル問題が起るたびに、私は可なり苦しんだが、さういふ問題から教へられたことも多かつたと思ふ。それやこれやの刺戟で、長篇の上などでも、それまで自分で敢てしなかつたことを試みやうと思ひ立つやうになつたのであつた。

今からみると、『春』以前の作は、私にとつても、創作の試みの時代で、『春』あたりから、どうやら自分のものと言へる文體も出來てきたかと思ふ。私の『春』は、瑕だらけの作品ではあるが、今日取り出して讀み返してみても、ところ〴〵に、斯う、自分ながら涙を誘はれるやうな心持が起らないでもない。

『家』を起稿したのは明治四十二年の事であつた。當時岡村千秋君が讀賣文藝部に居られた頃で、主筆はじめ文藝部の人達の意向を私のところへ傳へに來て吳れたのも同君であり、私も朝日紙上に『春』を書いた經驗にはげまされた讀賣への執筆を承諾するやうになつてから、あの作のため讀賣紙上に豫告なぞを書いて吳れたのも岡村君であつたやうに記

憶する。この私は、自分の小説を讀賣の社中にゐて推薦して與れた人の誰であつたかを、つい最近まではつきりとは知らなかつた。その人が正宗白鳥君であつたことを私は同君の書いたもので知つた、私の『春』は故長谷川二葉亭氏の推薦で朝日に掲載され、『家』は正宗君の厚意で讀賣に掲載されるやうになつたといふは、私としては感謝しなければならないことだ。

私が長篇小説を書き初めると、何かしら一身上の不幸が起つて來て、一度ならず二度ならずさういふ目に遭つて見ると長篇に筆執るといふことが恐ろしくもある。私は一作の長篇に大抵二年程づゝを費した。さういふ月日の間には短篇を書くともちがつて、種々な出來事が自分の身邊に起つて來るといふものか、それとも創作に沒頭して家事などを顧みない時の自分の不注意からか、いづれとも言ふことが出來ない。『破戒』を書いた頃は一年のうちに三人までも子供を失つたし、『春』を書いた頃はどうやら無事に濟んだが「家」を書きはじめて前篇を終る頃には甥の訃に接した。甥といふよりも弟のやうな親しい人の死は私に取つて深い打撃であつた。妻が亡くなつたのもそれから間もなくで、私があの作の後篇に着手する頃には最早二人ともこの世にゐない人達であつた。二番目の男の兒がチブスで病院に入るやうなことも、あの後篇の執筆中に起つて來た。熱の高い兒を病院に見に行つては、新片町の舊居の方に歸つて机に向つたことを思ひ出す。

國木田獨歩君の『獨歩集』、『濤聲』、田山花袋君の『生』、それから私の『家』などが公にされた當時何か斯う私達の時代が來たかのやうに文壇の人達からも言ひはやされた。事實私達は新しい機運のもたらした急激な潮流の渦の中に立つてゐた。しかし何事をもたゞ〳〵歴史的に概括的に片付けてしまふやうな人ならいざ知らず、誰の時代なぞといふ事が無造作にさう言へる筈もない。かなり遠くを望みながら出發したものに取つてさうした騷がしい聲は反つて有難迷惑を感じさせるばかりであつたと思ふ。

これは自分一個の事であるかも知れないが、私の創作上の經驗によれば、一つの長篇は他の長篇を喚び起すものゝやうである。私が『破戒』を書いてゐるうちに、『春』は既に私の内部に芽ぐんで來た。それから『春』を書いてゐるうちに私は『家』を書くことを思ひ立つてゐた。ところが『家』を書き終る頃になつても、第四の長篇が胸に浮んで來なくなつてしまつた。あの時は私も淋しい思ひをした。私は自分の三十代を終りかける頃に『家』を脱稿したので、丁度それが明治年代の終りにも當つてゐた。あの後篇を脱稿した翌々年は、代も既に大正と改まつた。自分の生活から言つても、年齢などから言つても、私の上にはある一轉期が來てゐた頃かと思ふ。

記憶と感想の斷片

小川未明

いまから二十餘年前、私が入學した頃の早稻田は、自由な空氣にみちてゐて、今日の官僚的趣味は、どこにも見られなかつた。それといふのも、坪内先生がゐられたり、小泉八雲氏がゐたりして、何といつても、早稻田は文學を學ぶに適してゐたのである。私は、坪内先生のシエクスピアの時間に、書物に就て得る知識よりも、先生の、文學について語られた知識の方に、はるかに得るところがあつた。

坪内先生は恩師だ。私は、たびたび伺つて、拙い作を見て頂いた「紅雲郷」といふ一篇を書いた時には、「ローマンチ

シストの彿見えたり。」と、批評を書いて下すつた。その次に書いた「霰に霙」に對しては、更にいい批評をして下さつた。

當時の文壇は、硯友社の末期にあつて、まだ新らしいこれといふ文學も興らなかつたが、傳統的な文壇へ出るには容易でなかつた。その時分、權威ある雜誌といへば、まづ「新小說」で、「新小說」に作品を發表することは、若い作家の名譽とされてゐた。

「これならば」と仰言つて、坪內先生が、「新小說」へ紹介して下すつたので、私は春陽堂に後藤宙外氏を訪ねた。その時、私は、そこに泉鏡花氏がゐたのを記憶してゐる。その時の作品――「霰に霙」――が、文壇へ出る私の處女作だつた。私は二十二歲で、早稻田大學英文科二年生だつた。

次の作品は、長谷川天溪氏の主宰された「太陽」へ載せることが出來た。「日本海」といふ短篇であつた。そのうちに島村抱月氏が、外國から歸つて來て、「早稻田文學」が再刊されることになつた。その頃の或る日、「早稻田文科」の校友大會が、牛込赤城神社の傍にある「淸風亭」に開かれた。その席で、抱月氏が私を呼んで。

「坪內先生から、まはされた君の「人生」を讀んだが、面白いものだ。「乞食」もいい。で、とにかく「乞食」を來月號に載せるから。」

と、いふ話があつた。その時の嬉しさを、私はいまも覺えてゐる。

こんな風で、私は、順調に文壇へ出たといへよう。いい雜誌に、つゞけて作品を發表することが出來たのだから……。

大體において、私の作品の基調は、ロマンチシズムだつたのである。

學校を出た私は、家庭をもつた、しかし文筆だけで生活することは及びもつかぬことだつた。その時、「讀賣新聞」の文藝欄を擔當してゐた正宗白鳥氏に私は短篇を、たびたび、同紙の日曜附錄にのせてもらつた。その頃の私は、文壇的

な朋友もなかつた、白鳥氏は、その上私を紹介して、讀賣新聞に入れてくれた、そこではじめて社會部主任の上司小劍氏を知つた。

自然主義の風潮が入つて來たのは、その頃のことである。自然主義の議論は、何でも科學的の眞を文藝の上にまで移すとされて、現實曝露をしなければならぬと主張し、これまでの美辭麗句の文學に反抗した。この運動は、日本文壇だけの特殊的現象ではない、歐洲のロマンチシズムの後をうけたナチユラリズムの影響に他ならぬものであつた。自然科學と藝術との相關する必然は、言ふまでもないが、何でもさういふ運動の起る當時にあつては、暴風のやうな雷同を伴ふものである。藝術が、その作家個人の環境と社會といふものを無視して成立つものでない以上は、各作家に依つて、個性が發揮されなければならぬ、その作家の生きてゐる「時代」は、作品の基調をなすものでなければならない。だから、ある作家が郷土的であり、ある作家が都會的だ、といふことは當然であるのだ。その時の私は、雷同的自然主義者の排撃を受ける立場になり、その爲非常な物質的な苦しみに數年間がつゞいた。その時分のみぢめな生活の一端は、「魯鈍な猫」といふ作に書いてある。しかし、數年後「物言はぬ顏」を書き「紫のダリヤ」を書いた頃から、新ロマンチシズムの色彩鮮かだ、と「早稻田文學」から推讃の言葉までをうけたのだつた。あれは明治四十二三年の頃だつたと思ふ。

× × × × ×

過去の苦しい經驗。それから、不幸のうちに育てた子供を、二人までも失つたことは、世間の實相を私に敎へてくれたといへやう、私の心には、正義に對する感激、善良で正しくあつても暴力の下に虐げられる者のあることが、ますます思想の上に變化を來した、これが後年私を驅つて社會主義同盟へ參加させた一つの原因でもあつたといへる。

かうした一人の作家が、自分の生活に就て語り、もしくはその作品が如何にして書かれたかを語つてゐては、際限があるまい。それが果して、社會に對して、如何なる興味を呼び、また關係があるかを疑ふ。

顧つて過去の文學運動を見れば、いろいろな波瀾が思ひ出される、がそれは單獨に、たゞ文學の上にのみ起つたことか？　どんな才能ある作家にも、「時代」を作ることはできない。事實はその反對で、實際的な社會が、さうした文學を生む狀態にあつたのだと思ふ。後世に於て文學史を書く人が、眞に眞相を描かうとするならば、まず社會の研究からかゝらなければいけない。ジヤアナリスチックな記事を基礎的文獻として、文學史を書くのは、甚だしい危險である。殊に、資本主義の發達につれて、新聞雜誌の文學は、純粹な文學から見れば、變態である、しかもこの變態文學が、純正なる文學と思はせる時代があるのだから。なかには、これを文學と見る立場の人もあらうが、文學のほんとうの使命から考へてみても、批評家は、自分の立場なくして批評は出來ない筈である。ある意味で私は、時代に反抗するもののみが、正しい藝術だといふ氣さへする場合がある、卽ち、文藝の價値は商品的價値ではない、と考へるからである。

「別れた妻」を書いた時代の文學的背景

近松秋江

「別れたる妻に送る手紙」が、私の出世作になつてゐるのけ、自分にとりて、永久に不名譽を遺すやうなものである。苟くも文學に志ある者が、天下に名を成さんとするには、もつと堂々とした抱負のある作物を以つて世に問はなけれ

ばならぬ筈であるのだが、私は、常にさういふことを心に描きながら、それを實現することが、いまだに不可能である。その意味に於いて、私は今日に到つても尙ほ出世作といふべきものがないと申してもよろしいのである。

乍併翻つて思ふのに、近松巢林子といへども、處女作といふやうなものは、大した佳作ではなかつた。傑作といふべきものは主に晩年の作である。又曲亭馬琴とても、そのとほりである。彼がまだ京傳の內弟子であつた時分に書いた物で、一寸した物があつた。それが、彼の處女作であつたといふやうな譯で、まあ、さう思つて諦めて、これから先勉强するより他はない。トルストイでも、馬琴でも彼等は、共に人間としての長壽を保つた方であるが、傑作は五十歲以後にあるのだ。

私が「別たる妻に送る手紙」を書いのには、無論、當時の文壇を風靡してゐた自然主義運動に對する反抗といふものがあつた。

自然主義運動の覺醒は、たしかに日本文學史上の明治期の文學に最後の意義を齎らしたものであつたことはいふまでもない。その以前硯友社系統の文學に依つて壟斷せられてゐた文壇が、自然主義運動によつて、文壇的に、一つの小さい革命の洗禮を受けた譯である。

尾崎紅葉は、何といつても明治期四十五年間のその中葉時代を蔽ふてゐる文學的巨人である。いな、明治年間の文學の最高峰に立つてゐる第一人者であつた。しかし紅葉の作品は、いかに優れてゐても、文學には、又、それとは異つた文品詩質を具へたものも當然あるべき筈だ。紅葉の文學に慊焉たらない感じを抱く者もその當時からして少くはなかつた。が、紅葉の偉大なる文學的勢力に風靡されたる文壇は、それ等の擡頭を困難ならしめた。それは、文士の文壇的生活狀態の逼迫からもさうであつたし、又純粹に藝術上の爭ひからもさうであつた。平易にいへば、多少硯友社の氣息を蒙らない以上は文壇人として存在出來ないといふくらゐに紅葉の勢威は盛であつたものだ。恰も後の自然主義の主唱者

が取つて代つた地位と同じ關係であつた。

而して紅葉山人は明治三十六年の秋三十七歳にして病沒した。その後、紅葉門下から出て硯友社系統の作家として文學に働いた人は泉鏡花、小栗風葉、德田秋聲、柳川春葉氏等であつたが、それ等の作風は各々互に個人性の赴く所に從つて大分作風を異にしてゐることはいふまでもない。そして紅葉の門下といふのでなく、紅葉の盟友或は輩儕として紅葉の生前から沒後の文壇にかけて、創作に振つた人に廣津柳浪氏があつた。又柳浪氏と殆ど兩大關の觀をなしつゝ創作に振つた人に別に小杉天外氏があつた。天外氏はその妖艶なる持前の作風に、更に、紅葉山人よりは、稍々進んで西洋文學思想に目覺めた意識のもとに創作した。彼の取つて以て師範とする所はゾラであつた。ゾラは冷靜なる自然の描寫を旗色として起つた。小杉氏の作風が――少くともその意識したる主張が、紅葉山人を盟主とする硯友社時代の文學から後の自然主義文學に到る中間期を代表するものであることは、その一事をもつてしても明かである。

しかし、流石に紅葉は偉大なる權威であつた。一つは時勢の推移でもあるが、紅葉の生存中は、從來の文壇的情勢に歩むを得ず服從してゐるのほか、手も足も出ない形であつたものが、一とたび紅葉が逝いて以後は、その門下生の鏡花、風葉諸氏の力を以つてしては、硯友社系の威望を繫ぐことは出來なかつた。勿論、その時代――明治三十七八年から四十年頃まで――の創作壇で實力の上で花形をつとめた者は、やつぱり紅葉門下の風葉、鏡花、春葉諸氏ではあつたが、硯友社の文壇的支配力といふべきものは、漸く地に落ちて來た。

別にその頃の特殊事件として明記すべきことは、海外文學の輸入とその風化とである。即ちそれは、從來の、硯友社派文學等に不滿を抱いてゐた文學研究家、愛好者等が進んで海外文學――主に歐洲大陸の近代文學を紹介したことであつた。勿論それまでにも歐洲文學は日本に紹介されてゐたが、それは主としてイギリスの文學であつた。近代文學の意味に於いて、外國文學を日本に紹介したる新人の意考と愛好とは、勿論英國文學ではなく、ロシヤ、ドイツ、フランス

イタリイ等の大陸文學であつた。當時それ等の文學に最も親炙したる人々では上田敏、田山花袋氏などが最も著名であつた。勿論この外にもあるが、日本文學の上に直接に強い影響を與へた人はまづ此の二氏に指を屈せねばならぬ。尤も、その以前に早くから長谷川二葉亭氏は、ロシヤ文學の堪能なる飜譯者、紹介者として、後の自然主義の主唱者たる田山花袋とか、又その文學的好伴侶であつた國木田獨歩氏などに多大の影響を與へてゐることは有名の事實であつて、或は紅葉氏がその門下に與へたより以上の深いものを、花袋氏や獨歩氏等に對して二葉亭氏は暗示してゐるかも知れない。

そこで、風葉氏鏡花氏等の紅葉門下の實力聲望を以つてしては漸く文壇の中堅に據ることが出來なくなつて來た。――これは決して黨派的にいふのではない、たゞ比喩していふのである。――その機會に、多年硯友社一流の文學に不滿を抱いてゐた新智識の人々が代つて擡頭せんとしたのが自然主義運動のよつて起つた所以である。

故に自然主義の、無意識の元祖は長谷川二葉亭氏に在りといふも強ち過言ではないのだ。が、私は、何といつても田山花袋氏をその運動の第一人者に推さゞるを得ぬ。勿論、樂屋門の交遊關係に於いて、島崎藤村氏も國木田獨歩氏と同じく、田山花袋氏が、公然、此の派の主唱者を以つて文壇に旗を飜すには、交互的に相影響してゐることはいふまでもない。私は、花袋氏が、身親しく海外大陸文學の感化を蒙り、その愛讀の結果多大の啓發を得てゐることを知つてゐる。私がはじめて氏を知つた當時（明治三十四年――今を去る二十六年前）の田山花袋氏はまだ決して文壇の中堅でもなければ、又、無論、大家でもなかつたが、この人は、今にもつと認められる時が來るにちがひない、又もつと有意義の文學的貢獻を成すにちがひないと思つてゐた。そして遂に四五年の後に果して、あのとほりの自然主義運動の先驅者となつたのであるが、當時は勿論、今日から見ても　實際の氏の作品の文學的價値は、果して、さしもの自然主義派の代表的作品とするに足るかといふに、私は、その肯定的即答には躊躇せざるを得ぬのである。その他島崎藤村氏の當時

の諸作にも隨分優れたる物があり、又、獨歩、花袋、藤村の自然派の三大家に比してその年齡、出處、閲歴に於いて大分の後進ではあつたが、當時早稻田派出身者中の寵兒であるところから、これ又自然派の花形作家を以て推されてゐた正宗白鳥氏にも「微光」「塵埃」などといふ佳作が少くはなかつたが、それ等の人々が文壇の潮先きに乘り出した時分の新鮮味が段々少くなつて來るに正比例して、自然主義評論の論旨は偕々窮屈で、排他的で、狹隘なものになつて來たのであつた。さういふ意味からして田山花袋氏などは、後に起つて來た文壇の新人から隨分、反感を以つて迎へられたものであつた。自然派の論旨は、これを要するに文學の詩味、滋味といふものを枯渇し盡してしまつた。同時に又、文學から悉くローマンチシズムを排除してしまはふとした。而して自然派の中堅を以て目せられたる人々の諸作は、既にその自然派の評論の論旨が甚だしき矛盾に充ちてあるのみならず、實際の作物が、一言にしていへば拙劣淺薄にして、殆ど藝術的價値あるものに乏しかつたのだ。無論いづれの作家にも二三は相當な佳作もあつたが、後には碌な作でもないものをも、その作家が自然派の大家であり又花形であるといふやうなところから、たゞ無意識に價値あるものと迷信するやうな情勢になつて來た。もう、さうなると、自然派の沒落すべき日が來たのであつた。島村抱月氏を圍繞せる早稻田派の自然派、田山花袋氏を圍繞せる文章世界の自然派は何時までも安如として我が天下の泰平を唱つてばかりはゐられなかつた。自然派は先づその實際の創作に於いて、大した佳作傑作を出さず、又その人生觀に於いて、無理想を標榜した點に於いて、後の新理想主義者から反對せられた。永井荷風氏主宰下の「三田文學」、武者小路氏、武島氏、志賀氏等の「白樺」、谷崎潤一郎氏等の「新思潮」派諸作家、夏目漱石氏の門に集まれる赤門派の諸作家、是等は悉く自然派の作品に不滿を抱き、自然派の排他的評論に憤慨して立つてゐた。

その間に文壇を經過して來た私の立場に於いても此の際一言せねばならぬ。勿論文壇全體から見て私の立場などは、新秋の宵の星屑一つにも相當せぬものであつたが、自分一個としては、相當に意識的の立場を自覺してゐた。

即ち一言にして、これをいへば、私は、長谷川二葉亭の「平凡」から直接の影響を受けて「別れたる妻」を書いた。少くとも、「平凡」の卒直なる書き方に依つて勇氣づけられて筆を執つたことを、こゝに明記しておきたい。勿論「平凡」の感化といつても、何から何まで悉く「平凡」を眞似たわけではなかつたが、二葉亭氏の卒直で、自叙傳的、今日でいふところの私小說風の書き方は、それまで、小說の表白的形式、文章等に惱まされて、いつまでも筆を執ることの出來なかつた私に、ひどく勇氣づけてくれたのであつた。

一體が故長谷川さんは、前述の如くロシヤ文學の鑑賞家、紹介者で、紅葉氏一派の形式派とは大分異つた傾向の人ではあつたが、しかし文章には紅葉氏にも讓らぬ工夫を凝した人だと傳聞してゐる。即ち口語體を最初に完成した人といつてもよいのだ。そのくらゐで、勿論文章には苦心した人ではあつたが、又もとより內容を重じた人であつた。そしていつも、內容をいかにして、そのまゝ紙に表はすかといふことを考へてゐた。氏には、前期の名作に「浮雲」があり、後期の名作に「その面影」があつたが、氏も「その面影」では傳習的の形式に囚へられて、本當の腹が云へなかつたといふ、隔靴搔痒の憾があつたことを、私は氏から直接に聞いたことがあつた。その後二度目に「東京朝日」に書いたのが「平凡」で、「平凡」は發表の形式とか文章とかを思ひ切り放擲してしまつて、大膽卒直に自家の肺腑を紙に以つていつて打突けて書いたといふ點が歷々と解る。

氏は別言すれば、從來紅葉一派の作風に頗る慊焉たらなかつたが、しかし自分でも、別な意味で文章には重きを置く人であつた。即ち一種の名匠氣質の人であり、又文學趣味の豐かな人であつた。それほどの氏が從來の文章形式の舊套を一排し去つて、卒直大膽なる私小說に邁進したのは可なりな思切りと勇氣とを要することであつたにちがひない。

又、私自身の心證を顧るのに、私は、小說に於いては紅葉と一葉との文章に、いつも、それ等を崇拜するの餘りに囚へられてゐたし、又評論文にあつては、同じくあまりに崇拜するの結果高山樗牛に囚へられて、何を書き、何をいはう

としても、いつも手も足も出ない形であつた。ところが一度び長谷川氏の「平凡」に朝日紙上に於て接するに及び、「うゝ、これでゆかう」と心中に思つた。勿論、それより前に國木田獨歩氏の諸作によつて硯友社一派の脂粉の氣の勝つた文章以外に又小說の名文章のあることは知つてゐたが、しかし國木田氏の文章も、亦たなか／＼苦心した文章である。文章を書かんがために文章を書いてゐる。「平凡」は、それよりも、まだ、ずつと卒直である。私は、それから約二十年後の今日とても、依然として紅葉の文章は讃仰してゐるが、しかし、その時、「平凡」の文章に接して、轄如としてはじめて心の中の紅葉氏の文章の囚はれから脱することを得た思ひがした。「別れたる妻」を、極めて素直な氣持ちで書き出したのは、「平凡」の文章から思ひ付いたのであつたが、又他面に於いて、「別れたる妻」の中に幾分でも含蓄してゐる情趣といふものがあるならば、それは、明かに意識して、當時恰も武藏野の草原の中に立つて草のほかは何物をも見ることが出來なかつたやうな、自然主義派の枯渇し盡した、無情趣の文學に對する反抗心を具象的に表はしたものであつた。私は、既に度々言つたことであるが、自然主義派の唱說する無理想說に反對であつたから、後の白樺派――武者小路氏等の新理想主義には密かに贊成であつた。又勿論、永井荷風氏等の情緒富麗の文學にも興味を持つたし、やゝ遅れて文壇に出た谷崎潤一郎氏の詩趣豐麗の文學、ローマンチシズムの文學にも喝采を送ることを躊躇しなかつた。又、谷崎氏と前後して文壇の人となつた長田幹彥氏の艶麗なる文學にも固より十分なる價値を認めた。

併しながら、前記のごとく私は夙に田山花袋氏の歐洲大陸文學に造詣するところ深きを認め、且つ又、氏によつて長谷川二葉亭氏のロシヤ文學の飜譯――ルーヂン（浮草）、アーシヤ（片戀）などの如何に藝術味の芳香高きものであるかを教へられてゐたり、又今から二十六年前はじめて、田山花袋氏から借りて讀むことを得たマウパッサンなどの文學によつてロシヤ・フランスの文學に入つてゆくことを得た等の關係から、私も自然主義運動の風化から、全然埒外に立つことは出來なかつた。又文學上の見解から、埒外に立つことを欲しなかつた。けれども自然派が段々その論旨に錯誤

を來したり、極端な、不合理な説を唱へたり、或は文壇の實際行動に於いて甚だしき排他的態度になつたりするに至り、私の穩健雅正を旨とする心掛けとは相容れないものを感じた。そして、前述の如く自然派の先鋒に立つてゐる人々の作物が事實上單調に陥り、型が出來、無味乾燥、そこに何等の藝術的の血と肉とを認めざるに至つて、自然派に同意することを得なかつた。

もう、さうなると、單に私がひとり自然派に反對するのではない、天の時が、反對するのであつた。島村抱月氏が松井スマ子の事で文壇を遠ざかつたり、田山花袋氏が文章世界の編輯を止めて博文館を退いた時が自然主義派の外形の崩壊した時であつた。而して內容、精神の行き詰まり、衰退を導いたのは、決して、その反對者等の微力ではなくして、自然派自身の評論の矛盾、不合理と、實際の作品の不振枯渇とが自から招いたのであつた。

私の「別れたる妻」は、冒頭に於いてもいつてゐるとほり、決して自から滿足してゐる作ではないのであるが、私があれを書いたのには、自然派の無情緒主義――といふよりも、情緒的のことを書き得ない爲に、理屈をこじ附けて、自己の非を飾らうとした――その無情緒主義に反抗したものであつた。果して、自然派の或者は、それを默殺してしまつたが、ひとり島村抱月氏は賞めてくれた。尤も抱月氏は自然派の眞の主張者でなく、いはゞその理解者としての顯著なる一人に他ならなかつた。そして、その主張の無理想であつたりするのに反し、氏本來の文學趣味は、決して無情緒主義一天張りで終始することは出來なかつたのだ。

まだ、書くべきことは、いくらもあるが、一時こゝに擱筆する。（五月十二日熱海にて）

獨步最後の惱み

中桐確太郎

獨步君の臨終近き頃の消息については、眞山青果君の著述の中に詳しく書いある筈でありますが、恐らくはその中に洩れてをつたかと思はれる一つの事があります。

或は何かの機會で私が一度話したことがあるかとも思ひますが、今またそれを申上げて見ませう。

獨步君は人生の問題、宗教の問題等について、隨分煩悶したのでありますが、時の文學者の中では、あれほど惱んだ人は少なからうかと思はれます。私との交際の最も深かつたのはその時代でありまして、お互ひの友情は煩悶によりて結ばれたとでも申すべきでありませう。

晩年、文學で、世間的に成功するやうになつてからは、當時の煩悶も段々薄らいで行つたやうでありましたが、かねての宿痾が重くなつて、茅ケ崎の南湖院に靜養するやうになつた時、此煩悶は再び起つたやうであります。丁度その頃私は支那に參ることになつたので、出發の二三日前、暇乞かた〴〵見舞に行つたことがあります。その折、國木田君は昔の煩悶時代の事や、差當つての心境などをしみじみと話を致しました。どうか新しき惱みから救はれたいと思うて、昔の煩悶時代に獨步君が屬してをつた教會の牧師であつた植村正久先生を請じて、再び教へを求めたのであります。植村先生はわざわざ尋ねて來られましたが、只神に祈るやうにと御勸めになつたさうであります。

然し國木田君は、今はどうしても祈るといふ氣分になれないといつて、非常に煩悶をしてをつた時でありました。で私は恰度その時私の家に來てをられた一燈園の西田天香さんに會つて見たらばどうかといふことを申したのであります。天香さんのことは、それより數年前、秋田の鑛山における事業に結びつけて話したことがあり、その當時から少からぬ興味を持つてをつたものでありますから、大層喜んで是非會はせて吳れといふのでありました。それで近日天香さんに來て頂くことゝし、なほ私が一二ヶ月後、支那から歸つて來るまでは必ず生きてゐるなどゝ例の調子で話して惜しき別れを告げたのでありました。

天香さんは、その後早速、茅ヶ崎に國木田君を訪問せられ、その當時の模樣を手紙にしたゝめて、支那にゐた私の所に送つて來たのでありました。その手紙が殘つてある筈ですが、何所かへ仕舞ひこんで直ぐには見付かりません。又何かの機會に發表して見たいと思つてをります。

私は二ヶ月足らずの後に支那から歸つて來たのでありますが、もうその時は國木田君はそれを待たずして、獨往不歸の客となつてゐました。

未亡人を弔問してその當時のことをたづねましたが、治子夫人は『天香さんが折角いろ〳〵話をして下すつたのでありますが、やはり駄目であつたやうです』と申されました。今日當時のことを思ひいでゝ、感慨無限なるものがあります。(昭和二年五月十日)

平民新聞と大衆文學

木村毅

（一）

日露戰爭と前後して興起したわが國の二つの思想的焦點は社會主義と自然主義である。

どちらも世の迫害の中に芽を吹いた。それでも自然主義の方はどうかかうか完全に成長し、開花し、結實し、そして凋落して行つたが、社會主義の方は謂はゆる大逆事件と共に根こそぎに彈壓されて了つた。が幼芽でまびかれたからとて效積が一つも殘らなかつたわけではない。かなり變つたものとして、或は全く反對なものとして今日開花してゐるかも知れないが、謂はゆる大衆文學の如きは、社會主義運動を除外してはその發生を考へ難いものの一つである。

自然主義運動の機關誌としては太陽、早稻田文學、文章世界、中央公論などがそれ〴〵役立つた。

社會主義のためには平民新聞、新紀元、火鞭、直言などが機關誌となつた。大衆文學は右の中、特に右の諸誌を搖籃とした。

今日の大衆文學に如何なる複雜な意義が含蓄せられてゐるか、それは私の問ふ所でない。たゞ少くともその根幹をなすものを傳統的に窺へば、講談が最も有力な母胎の一つとなつてゐる事を否み難からう。

講談は實にわが國特有の不思議な文學である。それは作者も個人的に分らず、いつとはなく大衆の嗜好の中から生れ

出でて來た事に於て頗るよく泰西の叙事詩と似てゐる。併し泰西の叙事詩は、發生は兎も角として後來は貴族階級に獨占され終り、民衆のものとはなり得なかつた。然るにわが講談はむしろ上流階級と乖離して、初めから下層階級の間に廣汎に浸潤して行つた。

されば何事か世に訴へんとする所あるものが之を利用しないのは迂愚の極みである。隨つて講談を新らしく生かすことに着目したのは必ずしも平民新聞が最初ではない。

聞くが如くんば細川風谷は進文學社に於て坪内逍遙氏のユニオンの第四讀本の講義をきき、その流暢にして面白きことさながら院本を讀み下すが如くなるに暗示を得、この呼吸を以て舊來の講談を甦生させやうと思ひついたさうである。多分明治十八九年の事であらう。

その後私は如何なる人が如何なる努力をこの方面に拂つたかを知らない。隨つて記述はそこから日露戰爭の前、第一次週刊平民新聞發行の時まで飛躍する事を豫め斷つておく。

（二）

外にも或は古いのがあらうが、明かに『新講談』と銘を打つたものでは『直言』三十七年九月五日發行の『露西亞のダイナマイト』が先づ吾等の目を引く。千代坊述とあるから作者は岡千代彦氏であらう。

それから當時の平民社の茶話會の記事を讀むと岡千代彦氏と原霞外氏とがしば〱新講談を演じたとの記事がある。後に日刊平民新聞になつてから原氏は『舶來立食』なる新作を連載した。

定も岡、原兩氏のものはいづれも出來がよくない。たゞ講談の革新に着目した點だけを認めれば充分であらう。所がかうして築かれた留床は無駄にならず、大逆事件後になつてこれはすばらしい實を結ぶに到つた。卽ち白柳秀湖

氏と中里介山氏とがこの間から擡頭したのである。

尤も兩氏とも平民社時代には講談に類するものを發表はしてゐない。白柳氏は美文のスケッチ、社會評論、外國思想の紹介などに專ら筆を取り、やゝ下つては『黃昏』『驛夫日記』などの長篇創作を發表した。この長篇は今日も優に一讀の價値がある。明治三十八九年頃の最も急進的知識階級の懷抱を窺ふべく絶好のものであらう。

日本歷史に唯物史觀的新見解を加へて世に問ふた書は或は『町人の天下』が最初か。私はこの書を初めて手にした時の驚喜を今もまざまざと回憶する事が出來る。日本に於けるブルジョアの擡頭史、即ち足利末期から町人が史上に漸次勢力を占めて來た跡を研究したもので、或は町奴と歐洲平民軍との比較研究、或は近松の『博多小女郎浪枕』に密貿易の狀況をさぐつた論など、今も忘れ難い。尤もこの中には多分に山路愛山氏の所說から影響された點がないでもないがそれが『親分子分』になつて來ると漸く氏獨自のものとして圓熟して來た。これらの書は慶應義塾の某教授が日本經濟史のサイド・リーディングとして學生にすゝめたと確聞してゐる。

然るに史實の骨を拾つたのみでは『黃昏』その他に示された氏の創作的本性が滿足しなくなつだのであらう。氏はその新見解を踏まへた歷史的フィクションを續々と發表し初めた。私の最初に眼に觸れたのは『淑女畫報』あたりであつたが、はじめは新講談と銘を打ち、後に『改造』がさうした物語を特輯して世に問ふた時には社會講談と銘打たれてゐた。今廣義の大衆文藝の中に包攝せられてゐる事は言ふまでもない。

只、氏の作に難を言へば、まだ餘りに歷史的でありすぎて、文藝的でない事である。骨が太すぎて肉の乏しい事である。

(三)

白柳氏は平民社の同人であつたが、中里介山氏は初めは投書家、後に寄書家として加はつた。卅七年二月七日の平民新聞に投じた『人生の哀歌』などが恐らくスタートであらう。後に或は小說、或は評論を投じて、一種の尖銳味に富んだ觀察が早くから人の注目をひした。

トルストイが安部磯雄氏に送つた手紙を見た當時からマルクス派の社會主義に疑惑を抱き、田川大吉郎氏に知られて都新聞に入つた。四十年頃に書いた『原主水』が恐らくは出世作であらう。材料は非常によいけれど私はこの作の出來榮えは餘りに高く買つてゐない。併し『淨瑠璃坂の仇討』になると氏の特色は漸く完熟して來た。『大菩薩峠』については贅說の要もなからう。或は批評家は『大菩薩峠は成程名作である。併し中里氏に今後これだけのものが又書けるかどうかは甚だしく疑問である』と恐ろしく否定的評斷を下してゐたが、私はさうは思はない。まだ序篇しか出てゐないが『夢殿』のあの別記した內容の暗示は、充分に吾等を期待せしめるものがある。

白柳氏の作もその唯物史觀的見解に於て、かいなでの大衆文學とは根本的に品位匹等を異にするが、中里氏の諸作もその高さに於て、深さに於て、他と甚だしく異るものがある。氏が一列に大衆文藝の範疇に入れられるのを喜ばないのも一應はうなづける。而して氏の作を他と異ならしめるものは、一脈の思想的背景である。それに考へ及ぶ時、恐らく現在の氏は眞反對な道を步きつつあるかも知れないけれど、平民社時代の心的訓練の尊いものであつた事を思はないでは居られない。その佛教に造詣の深いことは諸作を一讀しただけでも充分に分るが、一面に於てはレーニンの諸著なども涉獵を怠らないと聞く。

（四）

當人がそれを喜ぶと否とは暫くおいて、私は便宜上、白柳氏も中里氏も玆では大衆文藝の作家と呼んでをく。そして

自然主義の興起と同時代の社會主義運動の渦中から、この二者の頭を擡げた事を繰返して言つて、平民新聞が最も有力な大衆文藝の搖籃であつた事を斷定するのである。

自然主義は題財としての現實を尊重するの餘り、讀者とかなり隔離して了つた。眞實を描きさへすれば、それがたとへ面白くなくて、讀者に受け入れられなくても介意しなかつたのである。現實主義の自然主義がさうであるのは實に不思議な因緣であるが、わが文藝史に於て大衆と讀者とを分離せしめて了つた事、自然主義の如きはあるまい。

平民社の對文藝態度はそれと眞反對で、少々は調子をおろしても大衆に訴へる事を計つた。工場や農村をかなり迫眞的に現實的に取扱つた場合も、現實を何より重んずるからではない。その場合は現實に迫眞する事が、よく強く訴ふる所以となるから、それでさうしたのである。大衆に訴へることが第一。その邪魔になるなら文藝としての品位は下り、現實は多少枉められやうと構はないと云ふ態度であつた。今日の大衆文學の最も有力な主翼が、この態度の中から躍り出たのである。

平民新聞とは全く別だが、塚原澁柿園氏も書くものが書くものであつた加減から講談を新らしく生かす事は相當に考へ、且つ試みもした。今日物語に『ありました』調の文でもかけば、すぐ『大薩菩峠踏襲』の刻印を打たれて了ふけれど、澁柿園もこれはかなり苦心して試みてゐる。左の一文を見よ。

『こんな鹽梅に私も言文一致に趣味をもち、前にいつた工夫までしやうとするに至つたが、併し今日では多少また考へが變つて來た。それは新聞小說の立場から考へて來たので、私は言文一致の中のまた一段とやさしい講演體の文章を作つてみやうと思ふ。現に大阪の新聞に書いてゐる「石川五右衛門」はそれで、ありました、ございましたの調子で書いてゐる。これが他所眼でみる程らくでない、中々困難だ。けれども私は、この講演體の文章は行く〳〵一種の勢力になるやうな氣がしてゐる。』(明治四十年十月文學世界增刊「文話談話」の中「歷史小說の文章」より)

この講演體の文章は講談體と改めてもよからう。そしてこの豫言は美事に適中した。追記――平民社時代の社會主義小説についてとの注文があつたが、それは『文藝東西南北』の中に詳説して居るので、ここに繰返さない。

獨歩君の思出

平塚篤

なんでも日露戰爭前でしたから、明治三十四五年頃だつたと思ひます。窪田通治君、吉江孤雁君、水野葉舟君なんかと、『山彦』と云ふ四六二倍三十二頁と云ふ恐ろしく薄い雜誌を出した事がありました。第一號の卷頭に載つて居たのは小諸の島崎藤村さんから、蒲原有明君に宛てた手紙で、その頃はお役人だつた柳田國男さんなぞにも賴んで書いて貰ひました。『栗の花』と云ふやうな散文が出て居たと記憶して居ります。中澤臨川君は漸と仙臺の二高を了つて、東大の工科に來られた許りの頃で、窪田君や吉江君は同鄉の事だから懇意にして居られた。工科ではあるが、文學の愛好者で隱れた秀才だと云ふので、吉江君の紹介で、小石川原町の素人下宿へ訪問した事がありました。當時は中澤君もたゞ慰みに色々なものを書いて居たと云ふ程度で、『山彦』に出したユーゴーの飜譯セダン回顧とか、女人創造譚と云ふやうなものは、何れもノートの端に書いてあつたのを、破いて吳れました。新聲と云ふ今の新潮の前身の文學雜誌に『トルス

トイを論ず』と云ふ懸賞論文を出して二等になり、高須梅溪君から『論旨やや見るに足る』と云ふお褒めに預つたのも其頃でした。

その頃柳田さんや、蒲原さんのお話で是非國木田獨歩君に何か書いて貰はうぢや無いか、と云ふ事になつたので、鎌倉に居た獨歩君に宛てて、お願ひの手紙を出しました。千部刷つた事は遂に一度も無かつた程の大雜誌ですから、素より原稿料の事などはてんで頭にありません。誰でも彼でも寄附と初めから飲み込んで居るのだから、至つて公平なものです。



南湖院に於ける獨歩（中央）前列向つて右より御風、風葉、星湖、白鳥、　二列目花袋、晁、後列　孤雁、青果、泡鳴、未醒の諸氏

或る日獨歩君から端書が來ました。赤坂の演技座裏のこう云ふ所に居るから來給へと云ふ意味でした。行つて見ると隨分わからない小路の中で、治子未亡人の實家だつたと思ひます。格子を開けて、取次を賴むと、

『ヤア、上り給へ、構やしないよ』

と如何にも氣輕に奥の方から怒鳴りました。小さい體に色の白い、少しばかり髯を蓄へて、見るからキビ〳〵した人で、浴衣の胸を擴げて、夕燒のやうな肌を現して居ました。その時は三四人で八々をやつて居た所でしたが、

『俺はやめるよ』

と云つて、其の室の隅つこで私と對面しました。これが初對面です。

『原稿と云ふ話だつたが、短いものを書いて見た、全體金は吳れるのかい、なアに吳れなけりや吳れんでも好いが…』

これには私も一寸困つた。前に云つた通り今迄一文も出した事はなし、考へた事すらないのだから、何とも返辭の仕樣がない。然し發行を引受けて吳れてゐた窪田君の友人の市岡君と云ふ、その頃外神田に居た味淋屋さんに話したら、幾らかは出してくれるだらうと思つたので、僕も思ひ切つて幾らかは出すつもりだと云つた。

『こんなものどうでも好いがね、俺も貧乏してるからねえ、この間文藝俱樂部へ一つ書いてやつて置いた、第三者と云ふのだが、玆に若い男女がある。別れる、仲人が色々と心配して、元の鞘へ納めやうとあせる。その結果はどうなつたと思ふ、二人は相抱いて投身すると云ふんだ、どうだ意外だらう。』

と獨歩君の癖の、片足を立てて、手の甲で頸を支へて、語つてゐる光景が今も目に見えるやうです。その前獨歩君が民聲新報をやつて居た、赤坂氷川町に堂々たる構へをして居た時に訪問した事があつたが、その時は留守で、面と向つたのは、此の時が初めてだつた、その時、『山彥』に書いて吳れたのは『湯ケ原より』と云ふので、あれは當時獨歩君に最も近く接近して居た岡落葉君の事を書いたものだと、獨歩君自身の口から聞きました。

『牛肉と馬鈴薯』を書かれたのも其頃で、作中に出てゐる竹越與三郎とか、田川大吉郎、渡邊勘十郎（東京市の助役をした事があつた）井上敬次郎（前東京市電氣局長）などは、何れも民聲新聞をやつた頃の同人だつたのです。

鎌倉に居た頃は、高山樗牛なども懇意にして居た樣で、『山彥』の卷頭を飾つた『高山樗牛を悼む』と云ふ短文は、實に立派なものでした。殊に二人で大佛の像を眺めた際の感想は、何だか今でも私共の胸底に殘つてゐるやうで、どこの作集にも遂に收められてないのは殊に殘念です。この追悼文であるとか、初版の「獨歩集」の卷頭に書いた序文などは、獨歩共人の風格が如實に表現された誠に宜いものだと思ひますが、窪田君の手許には一部位はありさうなものだと思ひます。

『巡査』と云ふ短篇は、獨歩君が駿河臺の西園寺公邸に居られた時、同邸の請願巡査だつた男をモデルとして書いたもので、ずつと後ですが、『都の友へB生より』と云ふのがありました。あれは當時湯ケ原に居た中澤臨川から寄來した手紙た、所々へ手を入れたものです。何かにツルゲネーフの「決鬪」と云ふ飜譯がありましたが、あれは全然他人が代作したものです。「ウオーズウオースの詩」は、最初の方だけが獨歩君の筆で、後半は代作です。

今から考へて見ると、まるで噓だと思はれるほど虐待されたもので、隨分澤山の文學雜誌はあつたが、獨歩君に賴んで書いて貰つたのは『山彥』位なものでせう、『運命論者』を書いた時なども、あの原稿は春陽堂、金港堂、博文館、並びに大阪の文淵堂と門並に送つて、全部から斷られたものでした。それを『山彥』から、金十圓を出して頂戴しましたが、その時、

『やア有がたいな、これで正月の餅が食へる』

と云つて小兒のやうに悅んだ樣子が、今も目に見える樣です。

この頃から矢野龍溪氏に招かれて東京に移轉しましたが、それは日本に初めてのグラヒックを出す爲めでした。初めは「東洋畫報」と名乘りましたが、それが「戰時畫報」の前身でした。此の畫報を出すについて、何か科學の話を入れたい、と云つて科學者の科學の話では一向つまらんから、誰か筆の達者な人で、科學の事に詳しい人は無いかと云ふ話

が出ました。そこで私がふと思ひ起したのは中澤臨川君でした。當時は未だ工科大學生でしたが、日頃から非常に獨歩を推奬して居ましたし、あの人なら必つと書いて吳れるだらうと思つたので、さう卒直に話をすると、では早速行かう訪問して賴まうと云ふ事になりました。

當時獨歩君は櫻田本鄕町に居て、臨川君は本鄕眞砂町に居りました。私と獨歩君とは銀座通りを圓太郞馬車に乘つて廣小路で下車し、あれから歩いて行きました。

正月の七八日頃だつたでせう、臨川君は壁ぎわに机を置いて、其上へミゼラブルの初頁のユーゴーの肖像の所を開いて、酒と餅とが供へてありました。獨歩臨川の兩君の初對面は此時でしたが、所謂百年の知己の如しで、能く飮み能く語つて、それから獨歩が數奇な生涯を終るまで、最も相許した間柄でした。その時獨歩君に賴まれて、臨川君が書いたのは第一が「地球の年齡」で、第二は「無線電信の話」でした。

演說は拙では無かつたが、少々堅くなる傾きがあつて、縱橫の座談に比べると、まるで物にならなかつた。獨歩君があの小ぢんまりとした、そして廣い額に筋を立てて、片足を立て、右手に盃を持つて、

『かるが故に……』

と語り出すと、全く客を魅了せずにはおかなかつた。自分の作物に就ては、無論非常な自信を持つて居られましたが岩野泡鳴ほど話對的なものでは無くて、終生政治的の野心丈けは捨てなかつた樣でした。金さへあつたら無論代議士の選擧も遣つた事でせうし、今日に殘された作物は、その大半を見る事が出來なかつたでせう。

貧乏も貧乏、隨分ひどかつたもので、鎌倉の所謂「池の別莊」なるものは、名は立派でも、事實は化物家敷の樣だつたと云ふ話でした。それで二度ばかり、萬朝報へ一等十圓の懸賞小說を出しましたが、後年獨歩集を集める時に此の原稿が無くて閉口しました。最初の獨歩集の原稿は、大部分は小山內薰君の家に保存してあつた古雜誌から切り拔いたも

のでした。

最初の獨歩集は、その頃獨歩君が主として編輯をやつてゐた近事畫報社から出版したので、初め我々が此の計畫をして、實務の方の人とも充分諒解を得たのでしたが、『俺のものなどを出しても賣れや仕ないよ』と云つて却々承知しなかつた。然し小杉未醒君や中澤臨川君なども、頻りに勸めたので漸く承知しました。そこで全集のどこかにあると思ひますが、『余が作物と人氣』と云ふやうな、厭味澤山の（當時の文壇に對して）一文を草して、序とした譯です。今はどこかで田舍中學の先生でも仕て居ると思ひますが、帝國文學の同人だつた櫻井天壇と云ふ人だつたと思ふ、獨歩の惡魔たか運命論者だかを評して『此の作者姓は國木田名は獨歩少しは文壇に野心のある男と見えたり』と書いた程の時代でした。變れば變るものであります。

酒は隨分好きだつたが、殊に酒の吟味がやかましかつた。喰べ物も却て苦情の多い方だつた。臨川君は同じ飲み手でも、割合に弱かつたし、醉へば好いも惡いもなく、唯だガブ〳〵やる方でした。晩年に『食物のシンホニー』と題して面白いものを書かれたが、惜しい事に棄てられて了つた。それは色々の樂器の響きと同様に、皿とスプーンの觸れる微かな囁き、トマトーの切られる音、皿と皿との握手、こう云ふ音樂に對する憧憬を述べて、料理界のワグナーは何所にゐる、ベートーベンは出ないかと結んでありました。當時臨川君は甚しく咽喉を痛めてゐたので、欲しいと思つても何も喰べる事が出來なかつた時だけに、如何にも涙のこぼれるやうな、美しく、細い隨分でした。

自然派は眞面目であつた

長谷川天溪

自然派の本領は、ほんとに人生を觀て行かうとする所にある。そして、その觀たまゝの人生を表現する、自分の觀察を思ひ切つて發表するといふ所にある。

それには、當時ニイチエが紹介されて、自我の發展が說かれた事などにも影響されてゐるが、從來の文學がアーティフイシアルであり、又決してほんとうを寫してゐない、といふ點に對して、此所にほんとに人生を觀て行かうとしたのである。從つて、人生の見方が新しく又深刻である、同時にそれは從來の傳統的な道德や習慣を續々破壞する事になつたのである。が、その態度たるや、要するに、ありのまゝの白紙である。傳統に對しても何に對しても、囚へずに囚はれずにといふ態度である。

遠慮なき人生の觀察――自我の產物、これの發表であるから、從つて、文學としての表現形式に變化を來たした。それは藝術美の變化である。そしてそこに、自然派の人々は自分自身の形式を持つたのである。

で、自然派の作品には、或る意味で、筋の無い小說、結末の無い形式等といふものが產れて來たわけである。

人生を露骨に見るといふこの自然派の態度は主として性慾方面に向かつた。それ以前の文學は、人生を美しく、綺麗に、道德的にも倫理的にも化粧させてゐた。それではほんとでない、一皮剝かうといふのが自然派である。僞りの美を捨てゝ、ありのまゝの美を出さうといふのである。

斯うした自然派の傾向は、或る一派からは、田舍者の藝術だと言はれた。それは當然である。都會人が自然のまゝの慾求を隱して、皮に包んで美しく見せてゐるのに反して、田舍者は自然のまゝにそれを出して見せる。都會中心的な立場からすれば、自然のまゝにさらけ出す事は田舍者の仕業で、自然派の作品は野卑、粗野、藝術を無視するものと見られた。然し、都會人的な見方は決して人生の眞に觸れてゐるものではない。人間が生きて行くには、傳統的解釋では解釋出來ないもつと深いものがある。自然派はそれに突込んで行つたのである。

そんな風に見當を付けて出發したのであるが、此を今から見れば、大きな意味での理想、哲學、宗教、大きな意味での夫等が、自然派には缺けてゐた。が、自然派は、夫等をもつて幻影に過ぎないものとしてゐた。夫等によつては解釋出來ない程、人生は複雜であり、又肉慾的なものであると考へたのである。幻滅時代である。イリユージョンの權威が無くなつてしまつた時代である。

早稻田文學の古い頃の主張に、沒理想といふ事があつた。それは、藝術作品の上に理想を浮かび出させてはいけない、主義主張が作品の上に油のやうに浮き出るのはいけない、浮き出る事なくして作品と渾然としてゐなければならない、と斯ういふ意味である。ところで自然派のは違ふ、沒理想どころでなく無理想である。然し、作品に無暗に理想を持つて來てはいけないといふ點で、自然派は、此の沒理想論に一縷の脈絡がある。

一と口に言へば、自然派は、それ以前の文藝に現れた人生の解釋に滿足出來なくて、新しく自分の見た人生をそのまゝ描寫して見ようといふ、つまり自我の發展、個人性の表現といへば、それでよからう。

一切の傳統、一切の理想を棄てゝ、自分等の感じたまゝを表現して見よう、——此が大體の行き方である。めいめいが、めいめいの型を持つてゐる。そこに、明治文壇の變化した面白味がある。田山君が「藝術は發見する事だ」といつたが、これは自然派の大體の思想を代表してゐる。クリエートするよりは、何か人生の意義あるものを、又

人生に密接なるもののみ發見せんとするのである。

以前の文藝は、「こしらえる」、何か綺麗なものを「こしらえる」、クリエートといふ語を使ふのは勿體ない位なのであるが、自然派は人生の中の生命あるものを、「發見する」、だから嘘は書かない、といふのである。これが根本思想である。

斯ういふ考へで出來上つた作品には、立派なのも澤山あるが、一番大きな功績は、文壇の空氣を自由にした、個人性を尊んで、作に自由を許したといふ點である。文壇が自由になつた。*



向つて右より花袋・春浪・天溪・晃諸氏

*材料を取る上ばかりでなく、發表の形式も自由になつた。以前の文學者なら、到底材料としないものまでも材料にした。又口語體が自由自在に使はれ始めた。口語の開拓といふ事は、まさに自然派の殘した功績の一つと言へよう。そんな風で藝術的活動が非常に樂になつた。それといふのも傳統的形式を打ち破つたからである。

が、自然派が起つたのは、やはり文壇の自然の要求であつたのだ。硯友社一派が行詰つてしまつて、そこに何か展開されなくてはといふ風潮が起つたのである。そこへそれ

を助けに現れたのが外國文學である。

殊にニイチエの個人主義、それからモウパッスサン、その他フランスの寫實主義系統のもの、此等外國文學が盛に輸入された事も、確に自然派興起の一つの原因であつた。

あれまでは、外國文學の圖書はそんなに輸入されたものではない。勿論特志な人は、取り寄せて讀んでゐたのであるが、決して自由に外國書が手に入る、讀めるといふやなう事情ではなかつた。外國書が盛にはひつて來だしたのは日露戰爭前後の事である。此は全く偶然の出來事かも知れないが、とにかく自然派の興起に對しては大した力になつてゐる。あの頃までの丸善といふものは、とても今のと較べものにならない、實に貧弱なものであつて、新しい文藝書なんかめつたになかつたものである。それが、戰爭後になつては續々と現れて來た。

それ以前でも、熱心な人々は研究してゐたのであるから、たとへばゾラ、イプセンやモウパスサンなどゝいふものが、すでに書物や雜誌でも紹介されてゐたのであるが、それが此の時になつて、ほんとの姿を事實上目の前へ現したわけである。田山君などが、その當時讀んだ事は大變なもので、丸善にあるのだけでは滿足し切れないで、わざ／＼外國へ註文したものである。從つて早くから親しまれてゐたのである。

その頃の自然派は實に生眞面目であつた、これは一つの特色である。その頃は所謂遊蕩氣分なるものは盛んでなかつた、この氣分が出て來たのは、その後の現象である。自然派は、やはり、ほんとに人生を見ようとする熱望に動かされてゐて、飽くまで眞摯であつた。遊蕩氣分は自然派の一轉化に過ぎないものである。卽ち、人生に對する理想的な解釋が無くなつてしまつて、遂に行詰を生じた、そこに此は起つたものである。尤も、自然派には、元來、厭世的な色調があり、又悲觀的な情緒がついてまわつてはゐたのであるが。

自然派の運動も、今になつて考へて見ると、少なからぬ過ちが感ぜられる。が、それは、過去のどんな運動に於ても同じだ。又それで好いのだ。それは、それ／＼の運動は、やはり、其時代の必然の產物なのであるから。今、自然派にしてみても、あの當時、あの時代に於て、どうしても起らなければならなかつた必然的な運動なのであつたのだ。（談話筆記）

明治文壇昔話

佐藤義亮

明治三十五年の春であつた。その頃牛込の納戸町にゐた小栗風葉氏を訪ふと、まもなく廣津柳浪氏も來られ、話は、近く金港堂から出る雜誌『文藝界』に及ぶや、風葉氏ひどく得意の顏附で曰く、金港堂の原君（店主）が横寺町の先生の所へやつて來て、是非書いて戴きたいと懇願した。すると先生は、書けと云ふなら書いてあげてもよいが、原稿料は一枚貳圓だよと云つたので、原君大に面喰つて暫くは二の句がつげなかつたさうだと、風葉氏は如何にも愉快で堪らなさうに笑ひながら話すのだつたが、柳浪氏は笑ふどころか、「へえさうかね」と云つたきり只々驚嘆の體であつた。

當時の出版界の覇權を握つてゐたものは勿論博文館であつた。同じ本町に在つて博文館の向ひに店を構へてゐた金港堂も聞ゆる大書肆で、從來主として教科書の方をやつてゐたのが、俄かに博文館に對抗して大規模の雜誌計畫を樹て、『文藝界』を始め『教育界』、『軍事界』、『商業界』、『青年界』などを一時に創刊することになつた。そして『文藝界』は、山口高等學校の教授で、一時文壇で鳴らしたことのある佐々醒雪氏を聘して主幹となし、當時文藝雜誌の中心勢力であつた『文藝倶樂部』『新小說』を壓倒しようとしたのである。その創刊號には是非大家を網羅すべく、先づ小說家の總元締め、謂ゆる横寺町の先生に執筆を請うたのだが、紅葉は此の時漸く三十六であつたけれども「大家意識」で體中一杯になつてゐる人だつたから、從來何の關係もない書肆の註文をやす〳〵と引受けては大家の沽券にかゝはるからと、大きく吹つかけたのである。原氏も今更まけてくれとも言はれず、それで結構だから是非にと言つて歸つたが、紅

葉の作は遂に『文藝界』に現はれなかつた。これは緣故の深い『新小說』に義理立てをしたのではなくて、聞ゆる遲筆の人だから『文藝界』にまで書く餘裕はなかつたのであらう。それは兎に角、文壇人の爲めに大いに氣を吐ける近來の痛快事として、門下の風葉氏をひどく得意にならしめたり、創作界第一の花形柳浪氏を自分達の及びもつかぬ話として驚嘆せしめたりしたその原稿料は、驚く勿れ貳圓である。今から二た昔前の話で物價の標準は勿論ひどく違ふが、此の頃の通俗小說の中には、一枚二十圓も三十圓もするものがあることを思ふと、何人も今昔の感と云つたものを覺えざるを得まいと思ふ。

『文藝界』の創刊號の口繪に、紅葉、露伴を二人並べて、その後に主幹の佐々醒雪氏が立つてゐる寫眞が出て讀者をアッと言はしたものだ。當時、紅葉・露伴は、政界の伊藤・山縣、劇壇の團・菊と云つた具合に並び稱せられて素晴らしい勢であつた。當人同志は左程でもなかつたらうが、取卷き連中に騷がれておのづと兩々對峙の形となり、何となく相和せざるものがあつた。それを一堂に會せしめたのは此の雜誌の一成功として目をそばだゝしめ、流石は醒雪凡手にあらずと將來を囑望せしめたが、發行元の金港堂の水に雜誌は合はなかつたものか、間もなく廢刊して了つた。（『文藝界』ばかりでなく、他の雜誌全部廢刊したのである。）

明治二十六七年頃から十四五年ばかり、明白に云へば自然主義の起る迄の間は、日本の文藝出版は殆ど博文館と春陽堂とに占められてゐたと言つてもよい。博文館は主として硬いものを出してゐたが、これは餘りに官僚尊重、大家萬能で、學位の無いものは容易に受けつけなかつたし、小說專門の春陽堂は硯友社一派を中心として、知名作家のものゝみを出してゐた。いかに力量があり手腕があつても、何等の閥のない、傍系にゐる人は顧みられなかつたので、不平不滿の聲は隨分高かつた。私は明治二十九年、今の『新潮』の前身たる『新聲』を創刊し、聊か青年文壇の爲めに氣を吐いてゐたが、三十一年に、出版をやつて新進文士のものを紹介しようと決意し、先づ始めに田山花袋氏を訪うて、故鄕を

題材にした長いものを書いて貰ひたいと頼んだ。その時の田山氏は二十五六であつたらう。頭の毛を長く延ばし、ひどく青い顔をして、兄さんの家の玄關脇の四疊半にゐた。私の來意を聞くと大へん喜ばれ、原稿を頼まれて書くのはこれが始めてだ。殊に故郷は自分に持つて來いの題目だから、大いにいゝものを書かうと云はれ、間もなく出來た『ふる郷』は可なりの好評で賣行きもよかつた。元來田山氏はもつと早く相當の位置を占むべき人であつたが、硯友社全盛時代は頭を擡げる機會はなかつた。それは小栗風葉氏の說明するところによれば、花袋氏が始めて紅葉を訪うた時、例の口調で「ねえ君！」を連發した。それがひどく逆鱗に觸れた爲めださうである。當時の紅葉の大家ぶりは今日の眼からは到底想像が出來ぬほどで、弟子には三尺去つて師の影を踏ましめず、先輩後進の別は嚴として犯すことを許さないのに、何者の田舍漢ぞ、我輩の前に來つて恐れ氣もなく「ねえ君！」を連發するとは。こいつ到底我家の閾を跨がしむる者にあらずと憤慨したとは、いかにもさもあらんと思はれる。花袋氏こそ寔に飛んだ災難で、紅葉全盛時代は甚だ不利の地位に立たされたが、自然主義の烽火一たびあがるや一擧にして硯友社の牙城を崩壞せしめたのは、定めて溜飲の下つたことゝ思ふ。

話が前に戻つて、花袋氏の『ふる郷』と前後して私の出版したものに、田岡嶺雲氏の『嶺雲搖曳』がある。これは忽ち壹萬部以上を賣つたのだから當時の出版界（明治三十一年）を驚倒せしめて餘りあつた。嶺雲は雜誌『青年文』によつて雄健の筆を揮ひ、何等の情實がなく、謂ゆる侃々諤々の論を立てゝ當るを幸ひ斬りまくつたものだ。鏡花、一葉が好きだつたが、紅葉が嫌ひで隨分痛烈な攻擊を浴せかけたので紅葉大に憤慨し、大野洒竹をして嶺雲に、下宿屋で燒芋を嚙つてゐるやうな者にはおれの小說は分るもんぢやないと言はしめた。嶺雲言下に答へて曰く、下宿屋で燒芋を嚙つた事のない者は、文學など分りようはないと。その人直情徑行、よく泣きよく怒り、激すれば隨分烈しいことをやつた。『青年文』をやめて水戶の『いばらぎ』の主筆になつてゐた時、金錢で誤解されたのを憤り、會計主任を殺して了ふと

長刀をふりかざして追つかけたことがあつたと云ふ。こんな風だから評論におのづから人を魅する情熱があり、青年間の評判は大したもので、論文集『嶺雲搖曳』は前に云つたやうに讀書界を風靡したが、よし一時にせよ、評論であのくらゐ人氣のあつた人は珍らしいことゝ思ふ。

『青年文』は、明治二十八年創刊の雜誌で、同人は嶺雲、醒雪、桂月、臨風、芥舟(くろ柳)、それに山縣五十雄氏などといふ顏ぶれで、一切匿名であつたから、思ひ切つたことを書いたものだ。それに當時これ等の人々は、『帝國文學』や、『八紘』や『六合雜誌』や、『江湖文學』などに同じく匿名で時文評論に執筆してゐたが、自分が甲の雜誌に書いたものを乙の雜誌でほめるやうな事もあつた。桂月などは、ちよい〳〵これをやつたもので、桂月の文は何とかゞ缺點なるも從容富麗、燗として錦を披らけるが如きは獨歩の境地也とか何とか自畫自讃をした事もあつた。それは誰れ知る者あるまじと思ひきや、當時私は文學雜誌の大部分を印刷してゐた秀英舍の校正部にゐたので、原稿のうちに見られる爲め匿名でも筆蹟でちやんと分つたのだ。後年この事を桂月に話すと、さうか、君は知つてゐたのかといかにも可笑しさうに大笑ひされた。

私の秀英舍にゐた時分、齋藤緑雨は博文館の『一葉全集』を校訂することゝなつた(明治三十年)。始め一葉の長逝後まもなく『文藝倶樂部』の主幹の宮澤春文と云ふ人の編輯で全集を出したのだが、隨分可加減なもので批難百出した爲め、それを絶版して新たに緑雨を煩はすことゝなつたのである。緑雨はよく印刷所の秀英舍に來ては、夜遲くまでランプの下で仕事を續けたが、それは單に校正刷りを赤くするばかりでなく、所々附箋をつけて、例の肩下りの字で克明に說明を書く。その綿密で几帳面な事務家風の仕事ぶりを見ては、これが眼中、人も世間もない、辛辣な皮肉屋緑雨その人かと驚かざるを得なかつた。その後、あの短い二三行の皮肉も、咄嗟に口を衝いて出るのではなくて、幾度か字句を推敲し改刪して漸く出來あがる、要するに机上の製造であることを聞いた時、いかにもさうだらうと私には肯かれたの

だつた。

當時活版所で慄へあがる苦手は、紅葉であつた。私も長いこと印刷出版に關係してゐるが、凡そあのくらゐ校正を直した人は二人とあるまい。活版所で製版したものを全然組みかへなければならぬ程度に訂正する、それが八回十回、多い時は二十回に及ぶのだから、活版所との間に必ずごた〳〵が起るのが常例になつて、二三百頁の本の出來あがるのに大抵一年はかゝつたものだ。今と違つて出版界も至極泰平であつた三十年前のことだからあれで濟んだものゝ、版元の辛抱は容易ではなかつたことゝ思ふ。私は秀英舍に居る時、紅葉の著作の下校正は大抵一人でやつたが、その中でも『不言不語』や『浮木丸』などで惱まされた記憶は今尙ほはつきりしてゐる。殊に『浮木丸』は元來風葉の作で、『讀賣新聞』に出る迄に完膚なき位ゐ改删したものを校正になつてから更に縱横無盡に直すこと幾回に及んだか分らぬほどで、最後の校了と初校と較べて見ると全然別のものになつてゐたには驚いた。文章に苦心したこと紅葉の如きは恐らく古今に類例があるまいと思ふ。勿論これは何人も知らぬ者なき話で今更らしく書きたてる迄もない事だが、私は活版所にゐた爲め、名工苦心の痕を歷々目にすることを得て感殊に深きものがあつたのである。

併しながらこれは一面には本屋と活版所とを泣かす我儘だが、その我儘が何處までも通せたのは云ふまでもなく、彼れの置位が何人も及ぶ可からざる高いところに在つたからである。事實、小說を以て世の中に出ようとする者は、彼れの門に拜趨せざるを得なかつた。私は彼が身邊の雜事を隱くすところなく記るした日記を持つてゐるが、それによつても當時彼れの門が、文壇に志ある人によつていかに賑はつたかの一斑がわかる。後藤宙外氏は今は秋田縣の六鄕といふ寂しい町の町長に納まつて、町會議員と稅金の滯納などに就いて心配してゐる身分であるが、一時は新進作家として隨分鳴らしたものだ。元來は早稻田の人で抱月と並んで逍遙門下の雙璧と稱されたものゝ、作家として立たうとするや、紅葉の門に赴いて其の推輓を受けなければならなかつた。後、春陽堂に入つて『新小說』の主幹となつたのも紅葉の斡旋

によるところと聞いた。自然主義の大運動はじまるや、一方の『早稲田文學』の抱月に對抗して、『新小説』に保守派の同志と立籠つて非自然主義の爲に力闘し　自然主義の完全なる勝利に終るや氏及び氏の一味は文壇から落伍したのである。そしてそれと共に、春陽堂も文藝出版書肆として長い間占めてゐた勢力から（一時なりとも）遠ざかるに至つた。若し明治出版史といふやうなものを作る人があれば、これは閑却すべからざる事實であらうと思ふ。

紅葉歿後、風葉氏以下の門下は、俄かに解放された形で、何れも相當の地歩を占められたが、經濟的には尙ほ甚だ情けない境遇から脱することは出來なかつた。これに就て當時の作家生活の實際を知るべき一挿話がある。四十一年の秋だと記憶してゐるが、柳川春葉氏が私のところへ慌てゝやつて來られ、大變な事が出來したと云ふ。聞けば、今執達吏の差押へを受けたと云ふのである。そしてそれは風葉、秋聲三人の連帶共同の責任になつてゐるもので、一人六十圓、合計百八十圓の借金だと云ふ。間もなく風葉、秋聲の二氏、それにこんなことの取扱に慣れてゐると云ふ秋聲氏の親友の小峰大羽氏も來られいづれも非常の緊張ぶりで對策を講じたが一向名案が浮ばない。愚圖々々すれば、風葉、秋聲二氏の宅へも執達吏が向ふに決まつてゐるからと云ふので、結局私が一時立替へることになり、小峰氏がその金を持つて債權者の所へ出掛けたのである。今を去ること二十年、時代が違ふとは云ふものゝ、文壇きつての花形が、而も三人で百六十圓の借金の始末に青くなつたとは、嘘のやうだが全く本當の話である。


故小栗風葉氏

明治文壇の昔話を書いてゐると、始終目前にちらつくのは、小栗風葉氏の面影である。あのくらゐ剽輕な、無鐵砲な醉へば必ず脫線して、隨所に滑稽を演じた人も少なからうと思ふ。新婚旅行の途中、遊廓に沈沒して花嫁の事を忘れて了ふやうな人だから、醉つぱらつて漱石の家へあがり込み、演說めいたことを喋舌つて初對面の漱石を面喰はしたやうな愉快な逸話は數限りない程だ。殊に三十八年頃、眞山青果氏と相知るに及んで、龍、雲を得た形で脫線ぶりも一層鮮かになつた。或時(四十一年だと思ふ)、青果氏と連れだつて私のところへ來られ、大金儲けがあるが一肩入れないかと云ふ。よく途方もない金儲けの夢想をする人ではあつたが、此の時はひどく眞面目で、今度は固い見込みがついてゐる。それは、天理教の教典を書いた男が祕かにやつて來てその版權を讓ると云ふ。これを讓り受けて內務省に登錄して此方のものにして了へば、天理教は非常の窮境に陷る。そこで乾度大和の本部から買ひ戻しに來るに決つてゐる。値段は言ひなり次第で安くて百萬圓は大丈夫とれる。それを我々が分配するのだから、こんなうまい話はあるまいと言つて、愉快で堪らなさうに大きな聲を出して笑ふ。私は勿論仲間に入ることは御免を蒙つたが、氏はその後隨分長いこと共の祕密を賣りに來たと云ふ男と飲み廻つたり、運動と稱して田舍へ行つたりして、その間何も書かず、大きな金塊の懷に飛び込んで來る夢を見通してゐた。その男は酒が飲みたさに風葉氏に出鱈目を言つたので、可加減になると消えて無くなり、始めて風葉氏の金塊の夢も覺めたが、覺めて見れば、ケロリとして何時何處にそんなことがあつたかと云ふ顏をしてゐるからまことに罪がない。こんな話は始終で、愉快な逸話の多かつたことは岩野泡鳴氏以上だらうが、作にかゝると、文字通り一吟雙淚、瘦骨の苦心を重ねて、見る者に襟を正さしめた。三十六七の頃、事情あつて田舍へ引籠つて文壇生活に一段落をつけたが、なぜあんなに早く花道から引つ込んで了つたのか、もつと本舞臺で活躍すべき人であつたのにと殘念である。それでも二十二三歲處女作を出してから十幾年の間に公にした作品中、明治文學史上に錄せらる可きものが甚だ多い。遠からず『風葉全集』發刊の運びになることは、氏の友人ばかりの喜びではあるまいと思ふ。

島村抱月先生傳

相馬御風

先生、本姓は佐々山氏、明治四年正月十日島根縣那賀郡久佐村に生る。父は名を佐々山一平と云ひ、初め其の地にありて製鐵を業とせしが、後破産して商業其他諸種の業務に從事して諸所に轉住し、更に晩年に至りては家を散じて、獨り那賀郡波佐村柚根に孤住せしも、明治三十八年一月同所にて醉餘火災に罹りて燒死す。母はキセと稱し、同縣美濃郡益田村大谷氏の出なり。嘉永二年同村に生れ、晩年病むこと殆んど十餘年にして、明治二十八年十二月同村にありて歿す。先生、二弟一妹あり。雅一寛一及びイチ之れなり。共に健在す。

先生の出生地久佐村は濱田港を奥に入る少許の處にあり。そこにありし佐々山氏の工場に於て製造せられたる物品は馬の背に積まれて濱田港に運ばれ、港よりは自家の所有船によりて下ノ關を經て大阪の市場に運ばるゝを常とせり。先生の幼年時代は實に斯の如き繁劇なる家業の釀す空氣のうちに過されたるなりき。而も先生の性たるや、幼にして既に寡默沈毅、衆と喧騒を共にするを好まず、獨り靜かに書を讀み物を思ふを樂しみたりしが如し。そは先生の弟君佐々山雅一氏が先生の逝去に際し往時を追懷して語りし左の如き談片によりても、想像し得る所なり。

「兄は學問好きで、小學校なども一番の席を獨占してゐた。それに就いては餘談に入るが、餘り兄が成績が好いので學

校中の生徒の嫉みを買つた。そして彼が卒業しようとする間際になつてからにひどい目に遭はされた。それは或る森に誘はれて袋叩きにされたのであつた。常から兄は斯うした嫉みから酷い目に遭はされてはゐたが、手向ひをするでもなく、なすがまゝにさしてゐた。此の時でも矢張りその通りで兄は酷い目に遭つたことなどは何一つ口外はしなかつたが、悴が袋叩きにされたと云ふことを聞き知つた父は酷く怒つてその生徒等の家へ押掛けて行つたりした。兄は矢張り一番で卒業することになつた。」

斯くの如く先生は優等の成績を以て小學校の業を卒へたりしが、慘ましき家運の衰頽は先生をしてそれ以上脩學の志を得しめず、却て先生をして濱田町のとある病院の藥局生としての貧しく苦しき獨立の生活に入らしめざるを得ざりき、而もその當時に於ける先生は、其の貧しき獨立生活を通じて、將來自ら醫師として世に立たん事を望みつゝありしが如しとさへ云はるゝにも拘らず、間もなく其處を去つて、其の地の裁判所に給仕として勤むることゝなれるなり。之れ先生が十五六歳の頃なりとす。

かよはき自己の力により辛うじて糊口の資を得つゝも、先生は嘗て脩學の志を斷つことなく、勤めの傍每夜とある私塾に通ひて、漢文英語數學等を修む。就中先生の最も好んで學びしは漢文と英語とにして、漢文は早くも「日本外史」「史記」「文章軌範」等に精通し、英語はリーダーの初步より初めて濱田町にありし間に變則ながらも中學の上級程度の讀書力を得たりしと云へば、其の獨學自習の如何に熱心なるものなりしかをおもふに足る。當時先生と同じく濱田裁判所に在勤せる同僚中に後の東京地方裁判所檢事伊勢元一郎氏、後の北海道長官俵孫一郎氏、及び洲常太郎、村上其太郎の諸氏あり。而も此等の友人等は間もなく相追うて上京し、或は高等商業學校に、或は慶應義塾に、それ〴〵脩學の途に就けるを見る。さらでだに向學の念夙に衆に超えたりし先生が、自己の前途に對して當時如何に激しき焦燥を感じたりしかは、蓋し想像に餘りある所なり。

時恰も先生の前途に向つて一導の光明をもたらせるものを、當時濱田裁判所の檢事たりし故島村文耕となす。文耕、もと太田姓、伊豫の人、神奈川縣都筑郡都田村大字池邊に巡査奉職中同村島村タツ方へ入夫して島村姓を冐す、後檢事に任じ、晩年職を辭して辯護士となり横濱市に開業、明治三十七年九月五日同處に於て五十一歳を以て病歿す。明治二十二年文耕松江市より轉じて濱田裁判所に檢事たるや、はやく既に先生の非凡を認め、後援鞭韃に努むること切なり。當時先生は給仕より進んで、雇書記たり。文耕つひに先生にすゝむるに東京遊學のことを以てし、毎月五圓宛の學資を給せんことを約す。先生意を決していよ〳〵明治二十三年二月上京す。卽ち先生が二十歳の時なり。而して翌二十四年先生、更に島村氏の懇望を容れ、父君と合意の上、文耕の養子となり、六月十三日入籍して島村姓を冐すに至れり。之より先、島村家より再三先生を養子として貰ひ受けたき旨の交渉ありしが、先生の父君に其の意なかりしより其都度破談に終り、爲めに或時の如きは島村家より先生へ給しつゝありし學資の暫く杜絶せしこと等あり、東京にあり



島村抱月先生

し先生の境遇極めて困難なる時期もありしが如し。而もかゝる窮境にありし間と雖、先生は永く病床に苦しみつゝありし郷里の母君へ小遣錢などを送りたりしと云ふ一事、以て先生の美しき性情の一端を窺ふべし。

先生の東京に出づるや、初め東京物理學校、日本英學院、私立商業學校等に、英、數、理科等を學びたりしが、明治二十四年十月つひに東京專門學校文學部に入り、同二十七年七月其業を卒ふるに至れり。但し上京の當初に於て先生の目的としたりしところ、又は其後如何なる内外の經過を辿りて特に東京專門學校の文學部を選んで入學するに至りしか等の事に關しては、今日之れを知るによしなきを遺憾とす。先生早稻田の學園にあること滿三年、豫備教育に於て甚だ不完全なるものありしに拘らず、學力群を拔き、常に級の首位を占めたり。學生時代の先生は、依然寡默沈思の風を變へず、加ふるに操守甚だ嚴格、又非常なる勉强家にして、出席なども極めて規則正しき方なりき。當時の先生は又其風采の甚だ見すぼらしき點に於て同級生間の注意を惹き、中島半次郎氏と共に「襤褸先生の二幅對」を以て稱せらる。之れ一面に於て當時の先生の苦學の狀を語るものなりと雖、他面に於て外形に拘泥せざりし先生其の人の性情を語る好話柄たり、在學中、先生何れの學課に於ても拔群の成績を示したりしと雖、就中先生の研究と思索とに努めしは哲學、特に美學上の問題に關してなりき。而して卒業に際し先生の提出したる「美の意識」（？）と題する論文は、時の教授坪内雄藏、大西祝の二先生をして驚嘆措く能はざらしめしと云ふ。又先生が二年級の時、上級の金子馬治、中桐確太郎、紀淑雄の三氏、同級の中島半次郎、後藤寅之助（宙外）の二氏、及び下級の綱島榮一郎（故梁川）、五十嵐力の三氏等と共に哲學會と稱する團體を組織し、坪內、大西兩先生監督の下に大に自治的研究に努むるところあり。此の會今日なほ一種の親睦機關として存續す。なほ先生が卒業當時に於ける思想、抱負等の如何なるものなりしかにつきては、卒業に際して先生自ら編輯の任に當りし同窓紀念錄と題する小册子中の自記の告白、最もよく之を語る。

島村瀧太郎

明治四年一月十日、島根縣石見國那賀郡小國村に生る、氏は本佐々山。

平生愛讀する所は、陶淵明の採菊詩、歸去來辭、東坡の赤壁賦、鴨長明の方丈記、上田秋成の雨月物語、新古今の戀の部、平家物語、ゴールドスミスの荒村詩、エマルソン文集など。

希望を語らんか、身を修め家を齊へて斯生を厚くするの餘、願はくは學者として哲學特に美學の研究を全くし、著述家として評論的日本文學史の大成を期し、以て眞理の顯揚に幾分の力を効すを得む。誠實事に處して而も偏狹ならざる點に於て孔子の如きは景慕するに堪へたり。他より思想の自由を制せらるゝことなき限りは、如何に喧擾の裡と雖ども、我が欲するに從ひて、或は靜かに思索に耽り得べく、或は周圍の些末なる事件にまで眞察を馳せ得べく、意を一理に集中せしむると共に、多方に分注すること略ぼ心の儘なる自から得意とする所なり。

我が信仰の當體は未だ名くべからず。信仰なりや否やをも自から知らざれど、唯我れの心底に何ものかの存するをば疑はず。

人々、意志正確、知性英明、同情深切三者調和して以て事々理性の示す所に從ひ行へば、天下おのづから寧し。之れわが主義なり。

我が嗜み食ふ所は菓子、餅、梨子、柿子、甘酒、赤飯の茶漬、其他凡て脂氣强からざるもの。我が好愛する所は、殘月、秋山、牽牛花、小兒、或る種類の夢、狗兒、詩歌、小說、音樂劇。

失　題

秋山を染むるしくれは一色の
　もみちや千々の心なりけむ

て此の坪内先生との間に交ばれたる師弟の關係は、更に卒業後に至りて益々深く且厚きを加へぬ。之れより先き坪内氏東京專門學校に講師たる傍、雜誌『早稻田文學』を刊行して大にわが文學界思想界の啓發に努む。而して先生の學校を出づるや、先づ選ばれて之れが編輯の任に當ることゝなりぬ。當時『早稻田文學』は實にわが文學雜誌界一方の權威を以て目せられ、わが思想界乃至文藝界に貢献するところ甚だ大なり。先生、坪内氏の下に之れが編輯に從ふ傍、東京專門學校文學科講義錄講師として美學講義の執筆に努む。明治二十八年、先生神奈川縣都筑郡都田村字池邊島村瀧藏二女イチ子を迎へて家を成す。時に先生年二十五、イチ子は二十一歲なり。

先生が『早稻田文學』記者として初め最も力を致したるは、『早稻田文學』獨特の記事として重要視せられし「彙報」の作製にありしが如し。そは毎一ヶ月間に起りたる文壇の諸現象に關する材料を、或は新聞、雜誌等の記事により、或は訪問によりて蒐集し、更に之れを分類し、整理し、時には批判を加へて紹介するにあり。『早稻田文學』の此の獨特なる記實的批評が、當時乃至爾後の文壇に與へたる稗益は誠に多大なるものなるが、同時にそは坪内氏指導の下に自ら此の事に從ひし人々にとりて、得易からざる研究實修の好機會なりき。之れ後年先生自ら當時を追懷して、その所謂「彙報つくり」が先生自身にとりて三年間の學校生活以上の價値ある修業なりし事を、常に後進者に向つて語りしによつても知らる。

斯くの如く、先生の『早稻田文學』記者たるや、一方に於てかの「彙報」作製その他の編輯事務に從ひつゝ、他方に於て種々なる哲學上文藝上の問題に關する評論に筆を染め、引續き同誌上に發表す。當時の文壇先生によつて啓發さるゝところ甚だ多く、隨て文壇に於ける先生の地位漸く高きを占むるに至る。明治三十三年四月刊行せられたる『風雲集』（抱月、宙外、青々園三氏合著）に收められたる「西鶴論」「音樂美の價値」「伊達競阿國劇場を觀て所謂夢幻劇を論ず」「悲劇と人生觀」「氣韻生動」「變化の統一と想の化現」等の諸篇はいづれも其の折の所産なり。先生又其の頃『早稻田

文學』同人等を中心とせる數氏と共に近松研究會を組織し、主として近松の戯曲を研究し、その感化を蒙ること少なからざりしが如し。明治三十年四月、先生更に後藤宙外、小杉天外、伊原青々園、水谷不倒の諸氏と文藝雜誌『新著月刊』を發行し、その創刊號に小說「白あらし」を掲ぐ。之れ先生が創作を公にしたる始めとす。『新著月刊』の發行は僅に一ヶ年ほどにして止みしが、その間先生は毎號同誌上に潑剌たる時評を掲げ、當時小說壇に覇を稱しつゝありし硯友社、根岸派などの先輩を目標として戰ひ、大にわが小說界に於ける新領域の開拓に努むるところありしと同時に、自らも一方に於て小說の創作に力を致し、前記「白あらし」を始めとして「笹すべり」「めをと波」「白蓮華」「ながれ星」「月がさ日がさ」「夏の夢」「佛ぞろへ」等の作を引續き發表して、批評家として以外更に創作家としての非凡なる才能を認めらるゝに至る。明治三十九年一月刊行せられたる『亂雲集』一卷に收められたる小說の多くはその頃の創作にかゝるものなり。而して先生の此の創作上の才能は、既に早稻田在學當時より同級生間の廻覽雜誌『友垣草紙』を通して師友間に認められつゝありしところなりと云ふ。

明治三十一年『早稻田文學』休刊し、先生は讀賣新聞社に入り、三面主任記者たり。同年九月より新たに東京專門學校文學科講師となり、一年生の爲めに美辭學、二年生の爲めに支那文學史、三年生の爲めに西洋美學史を講じ、傍ら讀賣新聞月曜附錄を主宰す。明治三十二月讀賣新聞社を辭して、書肆三省堂編輯部の一員たり、專ら辭書編纂の事に從ふ。明治三十三年四月、宙外、青々園二氏と合著の『風雲集』出版、同八月三省堂を辭し、同九月より翌三十四年十二月まで早稻田中學教員となり英語及び倫理を講ず。明治三十五年、『新美辭學』の著あり、斯學の方面に於ける空前の大著として學界の推讃を受くること甚だ大なり。此の年三月、東京專門學校海外留學生として選ばれ、英吉利及び獨逸に派せらる。先生、その送別會の席上に於て述べて曰く、「近來洋行して歸朝する者、多く何等かの土產をもたらす。曰く何、曰く何、曰く何。余若し能ふべくんば歐洲文明の背景とも名づくべきものを觀且味はひて持ち歸らんことを希ふ。」と。

以て當時に於ける先生の抱負の一端を窺ふべし。

先生先づ英吉利に赴き、明治三十五年十月より翌々三十七年六月までオクスフォード大學に在りて E. de Selincourt 講師の英文學講義、同じく Examination School に於いて G. J. Stout 教授の心理學講義、同じくAshenorean Museum に於て P. Gardner 教授の希臘彫刻講義等を聽講す。其間、先生は一面書窓裡の人として讀書と研鑽と思索とに努むること非常なるものありしと共に、他面彼の地の演劇と美術とに深大なる興味を感じ、或は劇場に、或は美術館に、或は展覽會に出入すること繁く、わけてもそれらのうちの或るものを通して近代文化の精神に味到することいよ〱深し。而も亦或時は純粋に倫敦人を以て組織されたる旅行隊に加はつて、かの有名なる湖畔地方に遊び、秀麗なる其の地の自然裡に立つてワーヅワース等湖畔詩人の生活と藝術とを回想し、或時は唯一人かのストラットフォード•オン•エヴンを訪ねて沙翁その人の偉大と共に藝術そのものゝ偉大なる生命を痛感し、更に又或時は大學を中心として程遠からぬ田舍の村々をさまようて、昔ながらの風俗と淳樸との存する其の地の人々の生活に、限りなき愛慕を寄す。斯くの如くして、先生の學殖識見が著しき進歩を得たるは勿論、先生その人の精神的生活は廓然として新らしき生彩を帶び來れるなりき。明治三十九年七月出版せられたる『滯歐文壇』一卷中に收められたる印象錄の如くは、此の英吉利留學中に於ける執筆に係るものなり。而して先生が遠く祖國の文壇に寄せたる此等の印象錄が、當時わが文壇に與へたる刺戟と啓發とは、實に大なるものなりき。英吉利にある事滿二年にして、明治三十七年十月更に進んで獨逸に移り、伯林大學に入りて M. Wolffin 教授の十九世紀藝術史講義、Max Dsoir 教授の美學原論講義に出席す。伯林に於ける先生の生活も亦倫敦に於けるそれと異ならざりき。伯林は勿論、時にはミュンヘン、ウキン等にも赴きて、其の地の造形美術、演劇、歌劇等を鑑賞し研究することは、先生の最も重なる仕事の一つなりき。かくて翌三十八年六月、先生つひに歸朝の途に就き歸途佛蘭西に遊び、同年九月再び祖國の土を踏むことゝなれり。

先生が足掛四年の滯歐中、故國に於ては先生の養父君と實父君と相次いで他界の人となれり。就中明治三十八年一月實父君が不遇孤獨の生活裡に於て醉余燒死したりしと云ふ凶報は、旅中の先生にとりては一層の悲痛事たりしや疑ひなし。更に先生の滯歐中、祖國空前の大事件たりし日露戰役の勃發せしこと、而してそれに關しては歐洲人の間にありて特に見聞せし事々物々も、先生にとりては豫期せざる貴き經驗たりしなるべし。

歸朝の年十月、先生東京專門學校改稱早稻田大學文學科講師として、美學、近代英文學史、歐洲近代文藝史、文學概論等を講じ、傍ら東京日々新聞の月曜文壇を主宰す。翌三十九年一月、諸氏と共に坪內博士を助けて文藝協會組織の任に當り、その機關として再興せる雜誌「早稻田文學」の主幹たり。而して其の初號に歸朝後最初の力作たる「囚はれたる文藝」と題する評論を掲げ、それによりて泰西文藝思潮の主流に關する一家の識見を示す。次ぎて「沙翁の墓に詣づる記」を四月號に、ヴエルサイユ宮殿のロココ藝術を論じたる「ルイ王家の夢の跡」を九月號に掲げ、沈滯に傾きつゝありし當時の批評界に目ざましき波動を與ふ。同年十月東京日々新聞の月曜文壇を退く。翌四十年九月、早稻田大學英文學科教務主任に、更に翌四十一年より同大學維持員に就任す。當時居を牛込區藥王寺前町二十番地に占む。その家の庭墓地に接するところより、時に自ら對墓庵と號す。

明治四十年より二三年間は、わが文壇空前の大波動とも稱すべき自然主義運動の旺盛を極めたる時期なりき。歸朝後日なほ淺くして夙く既に此の運動の勃興の氣運の我が文藝界に閃めきつゝあるを觀取したる先生は、勢ひを新たにして之れが促進と誘導とに力を致すに至りぬ。而も先生が此の運動に於ける大いなる役割は、その當初にありては決して單なる猪進的唱導者のそれにあらずして、寧ろ最も聰明なる、而して最も有力なる說明者、指導者のそれなりき。即ち我が文藝界に於ける其の新しき思潮と努力とに對する深き理解と同情とに基き、之れを歐洲文藝界に於ける主潮に結び付け、以て其の意義と價値とを明らかにせんとすることが、先生の事業の眼目たりしなり。之れ明治四十一年一月號の『早

稻田文學』に掲げたる「文藝上の自然主義」を始めとして、同年九月同じ誌上に現れたる「藝術と實生活との間に横はる一線」に至る間の先生の多くの評論を味讀する者の、何人も認むるところなるべし。而も明治四十二年六月、歸朝後に成れる各種の評論を集めて一卷となし、之れを『近代文藝の研究』と題して出版するに際し、先生は此の書を以て自然主義論を中心とし、最も複雜曲折を極めたる自家の藝術論に一段落をつけんと欲するものなることを自白し、更に新たに卷頭に添ふるに「序に代へて人生觀上の自然主義論を論ず」の一篇を以てし、人生に對する自己の懷疑的心狀を告白し、懷疑哲學とも稱すべき一種の思想傾向の閃めきを示したり。

此の年二月、かねて組織せられたる文藝協會新たに演劇研究科を設置するに當り、之れが指導教師となる。而して之れを動機として先生の演劇に對する興味頓に激增し、爾來專ら力を此の方面に致すに至る。隨て其の頃より文筆の人としての先生の努力の文壇に示さるゝもの漸く其の量を減じ、剩へそれらの多くに於て先生自らの懷疑的主觀の陰影時を追うて彌々濃きを見る。同年六月、雜誌『太陽』新進廿五名大家の投票を發表するや、先生は文藝界泰斗の第四位に當選し、金製頌德盃を受く。なほ此の年、或は仙臺第二高等學校に、或は名古屋に於ける早稻田大學校友會に、或は東京に於ける近松祭に、或は東亞協會講演會に、その他市內及び各地に於て催されたる諸種の講演會に講師として聘せらること甚だ多し。

明治四十三年一月、『早稻田文學』にイブセン劇「人形の家」の飜譯を揭ぐ。之れより前、此の飜譯執筆中肋膜炎に冒され、飜譯完了と同時に床に就く。病やゝ癒え、二月相州小田原に轉地して療養につとむ。初夏全癒、歸京す。翌四十四年五月、文部省文藝調査會を設くるに當り、先生又選ばれて同委員に任ぜらる。同年九月、郊外戶塚村諏訪の新居に移る。此の年、「淸盛」「運命の丘」等戲曲の創作に努む。又此の年、「人形の家」を文藝協會試演場に實演するに際し、先生その舞臺監督として大に努め、多大の反響あり。同九月、更に之れを東京帝國劇場に於ける文藝協會公演に上場

劇壇爲めに動く」演劇に對する先生の興味愈々熾烈にして、漸く他を顧みざるの風あり。翌四十五年五月、ズーダーマンの戯曲「故郷」を飜譯し、之れを東京有樂座に於ける文藝協會公演に上す。是に於て、演劇に對する先生の好尙殆んど其の極度に達せんとする傾ありしと同時に、先生その人の懷疑的苦悶的心狀も亦殆んど其の極に達せんとするの觀あり。十一月、飄然として奈良及び京都地方の旅に出づ。翌大正二年五月、つひに文藝協會幹事を辭す。此の年、新たにメーテルリンク劇に興味を感じ、「ペレアスとメリサンド」「モンナ・ワンナ」等の飜譯を公にす。同年九月、女優松井須磨子（本名小林政子）等と共に藝術座と稱する演劇團體を組織し、東京有樂座に其の第一回公演を催し、「モンナ・ワンナ」を上演し、十月藝術座一行を率ゐて大阪及び神戸を巡演す。藝術家として及び人としての兩方面より、先生の行動に關する世間の論評之れより盛んなり。同年十一月、早稻田大學英文學科敎務主任及敎授を辭し、改めて講師となる。それより後、先生の生活の殆んど全部は、藝術座によつてなさるる演劇事業の爲めに捧げらる。大正四年八月、東京牛込區横寺町に藝術座所屬の藝術倶樂部を新築し、同時に家庭を離れて獨り居をその內に移す。かくて藝術座創設以來歳を經ること六年。其の上演せる脚本は「モンナ・ワンナ」「內部」「サロメ」「海の夫人」「熊」「復活」等を初めとして凡そ四十種、東京に於ける公試演の外に一回乃至數回に及びて巡演せる場所は、遠くは浦鹽斯德、臺灣、滿洲、朝鮮、北海道に至るまで殆んど日本全土に遍ねく、その數二百ケ所に近し。而して斯くの如き藝術座の世間的活動は、卽ち先生その人の活動なりき。四十歳に至るまで專ら靜かなる書窓裡の人たりし先生と、此の數年間に於ける世間的活動の人としての先生とを較べ觀る時、何人かその間の甚だしき相違に驚かざらん。而も斯くの如くして歳を重ぬる事六年の久しきに及びしが、大正七年八月に至り、新たに藝術座の經營を松竹會社に委托し、別に脚本研究會を組織して先生自ら之れを統率し、從來の如き煩雜なる世間的活動を離れて純藝術的の立場よりその方面の研究に努むることを誓ふを見るや、文壇の誰彼此の一事を以て再び書齋裡の人としての先生の生活の復活を豫想し、新たなる眼を以て其の將來を期待

するもの少なからず。即ち最近數年間に於ける實際社會との交渉によりて得たる先生の經驗の豐富と觀察力の鋭敏とを思ふ者は、何人も先生が這般の境遇の變化を以て、正しく先生の生涯に一時期を劃するに至らん事を期したるなりき。

然るに、同年十月下旬、明治座十一月興行の「緑の朝」の稽古を指導しつゝありし間に、圖らずも惡性なる流行感冒の冒すところとなり、同月三十日藝術倶樂部の私室に臥床せしが、病勢日に募り、やがて肺炎を併發し、つひに大正七年十一月五日午前二時心臟麻痺を以て孤獨裡に逝く。享年四十八。同月七日午後四時青山齋場に於て、眞言宗の式を以て盛大なる葬儀を執行し、八日午後二時雜司ヶ谷墓地に葬る。法名安祥院實相抱月居士。

先生、イチ子夫人との間に、四男三女を擧ぐ。第三男、第四男夭折し、長男震也、次男夏雄、長女ハル子、次女キミ子、三女トシ子健在す。

先生の生涯は、劃然として二期に分たる。前期は即ち四十歳に處るまでの永き年月を以て充たされ、後期は四十二三歳の交より最後に至るまでの數年なり。而して此の二期の區分に於て、我等は殆んど全く相異なりたるが如き二個の先生その人を見たるなり。前期にありては、先生は一貫して實に寡默堅忍の人なりき。抑制、柔和、冷靜の人なりき。而して此の四十年に近き先生の前期の生活は、殆んど全く靜寂なる書窓裡に於て營まれたりき。此の永き期間に於ける先生は、終始一貫して純然たる一個の學徒なりき、教師なりき、批評家なりき。觀察と分析と推理と考察との諸點に於て卓越せる頭腦と、稀有なる天與の味感、直覺、洞察の力と相俟つて、批評家としての先生をして實に渾然たる一個の風格を成さしめたりき。豐富なる趣味、廣汎なる味識、機敏犀利なる觀察、明快にして周到なる批判、いづれに於ても先生は眞に批評家として優秀非凡なる資格を具備したるを稱せられたりき。就中、批評家としての先生の存在をして一世に高からしめたる所以のものは、其の温き同情の伴ひたる深き洞察の力と、聰明なる理知によりて整頓され琢磨されたる其の美しき表現の力となりき。「對境に向つて豐かなる同情を注ぎながら同時に其の眞相精髓中心意義を攫取し、之

れを情理兼備の味はひある言葉に表現する」――之れ實に先生が天より禀け得たる無類の資質技倆なりとせられたりき。此の秀でたる資質と技倆とを以て、先生は批評家として立ち、教師として立てり。而して批評家として又教師としての先生が、常に自己の直感的鑑賞を聰明なる理知の力を以て整理して表現することを之れ努めたるが如く、人としての先生も亦常に自己の情意を理性の力を以て統御することを怠らざりき、東京專門學校卒業に際して其の同窓記念錄に自記して「身を修め家を齊へて斯生を厚くするの餘、願はくは學者として」大成を期せんと云ひ、「誠實事に處して而も偏狹ならざる點に於て孔子の如きは景慕するに堪へたり」と云ひしが如く、修身齋家出世之れ第一に人としての先生の目標たりしに似たり。由來身を奉ずるに極めて儉素、毫も享樂遊逸の氣なきは、先生の最も顯著なる性情なりき。加ふるに寡默隱忍、好んで靜居獨座を求めしも、先生が生來の傾向たりしと云はる。斯くの如くして先生の生活の前期は、そが四十年の永き歲月の生活は、宛然古のストア學徒のそれの如くなりき。而も又先生自ら夙く既にかの同窓記念錄に記して「我が信仰の常體は未だ名づくべからず」と云ひし如く、更に後年自ら公に宗教的信仰に對する自己の懷疑的心狀を告白し、若くは或友人に向つて、「余は神とか絕對とか云ふ事に關しては一種の不可知論を取る者なるが、若し强ひて自己の感じの上よりのみ云ふならば、宇宙の本體は何となく一種のグルーミーなる暗黑なるものゝ恐ろしき渦を卷きつゝあるものゝ如し、神か惡魔か、兎に角非常に物凄きものゝ如く思はる」と告白せしと云はるゝが如く、先生の內部には終始一貫して一種の厭世思想が深く根ざしつゝありしが如し。斯くの如くして、先生の生活は一面に於て公人としてのプリ、アンシーを示し、私人としての均整と典雅と靜肅とを示しつゝも、他面に於て隱密のうちに底知れぬ暗陰を藏しつゝありしなりき。而もかくして歲を閱すること多年、齋家と立身との世間的欲望に向つての先生の努力の外的効果が、彌々顯著に擧げられつゝありしに反し、先生の胸奧に於ける陰影は年を追うてます〳〵其の暗さを增すが如く感じられたるに似たり。而して其の所謂內部の何ものかは、つひに何等かの動機を俟つて、奔騰せずんば止まざるの急

を、先生自らに向つて告げつゝありしが如し。

斯くの如くにして、一面種々なる運命に追ひ立てられ、他面先生自身の内的必然の歸向として、先生はつひに懷疑と苦悶とのどん底に陷るの止むを得ざるに至りぬ。之れ先生が四十一二歳の頃の事となす。而して先生の生涯の此の短かき期間を以て假りに名づくれば、卽ち之れ前期より後期への過渡期なりとすべけむ。けにや、此の陰慘の極をきはめしが如き懷疑的苦悶の時期を境界として、先生の生活は實に劃然たる新局面を展開したるなりき。之れ卽ち大正二年夏以降、死に至るまでの先生の生活なりとす。家庭を離れ、書齋を捨て、講壇を去つて、驀焉と演劇界の喧噪裡に突進せし人、赤裸々に自己そのものを投げ出して、あらゆる運命に向つて勇敢なる戰ひを戰はんとせし人、「鞭を浴び石に打たれて傷き、血まみれになつて」倒れんまでも活世間のたゞ中に自己の大道を開いて進まんとの覺悟を示せし人——後期卽ち晩年數歲に於て我等の前に現れたる先生は、實に斯くの如き悲劇的英雄なりき。嗚呼、昨の先生を知り、更に今の先生に接せし者、誰か其の急激なる變轉に向つて一種の驚異を感ぜざりしものあらん。誠に之れ身を以て書かれたる一個嚴肅なる啓示なり。血を以て描かれたる一個深刻なる藝術なり。

初七日の追悼會席上、先生の舊友の一人語つて云ふ、「男子の四十二は厄歳と云へど、そは單に肉體的の危機のみを意味するものにあらずして、同時に精神的の危險期なるが如し、余はこれ迄大なる野心を抱き、それが爲めに禁慾的、克己的なる生涯を送り來りしが、人間の定命五十歲もやがて遠からざる今日に於て日暮道遠を思ふにつけ、これよりは一つ思ひ切りたる事をして死にたきものなり——これ先年島村君の余に語りしところなり」と。その言の何ぞ悲痛なるや。惟ふに、先生をしてつひに此の態度に出でざるを得ざらしめし所以のものは、一面に於て先生その人の獨自なる個性の力、隱れたる魂の力によるものなることと論を俟たずと雖も、而も亦他面に於て先生その人の環境と運命との力によるものあらずんばあるべからず。之れ先生の生活のヒロイックにして同時に悲劇的なる所以なり。一面より見れば先生の生

涯は、實に慘ましき受難者の生涯なりき。而も同時に他面より見れば先生の生涯は、正に勇敢なる偉大なる闘士の生涯なりしなり。先生は實に、虐げられつゝも最後まで憶せず怯れず勇敢に、正直に、運命と闘ひて倒れたる勇士なりき。而も其の晩年數歲に亙りて、人として又事業家として、先生その人の支拂ふべく餘儀なくせられたりし餘りに高き血税の値を思ふとき、我等はつひに何を以てか先生の靈魂を慰むべきを知らざるなり。

まことに、先生は稀有なる淋しき魂の所有者なりき。批評家としての先生が示せる如く、先生の趣味は極めて豐富なりき。文學に、繪畫に、彫刻に、建築に、演劇に、而して自然に、あらゆる方面に向つて、先生は異常なる鑑賞と審美と感味との能力を示しぬ、而も先生はつひに何物によりても醉ひ得ざる人なりき。醉ふべくあまりに明らかなる、あまりにすぐれたる理智を禀けたる人なりき。單に美に醉ひ得ざりしのみならず、先生は實に理想にも、神にも、燃え得ざりしなり。最もよく先生を識りし一人の友は云ふ、「そこに氏の無限の孤獨がある、無底の寂寞がある、勿論あらゆる哲人、あらゆる詩人は皆此孤獨と寂寞の心の祕密境に味到しない者はない、詩も哲學も要するに、此の味到の境地から産れて來ると云つてもよい、而も氏が敏感と鋭覺とを兼ね惠まれた心は、詩人と哲學者とを一身に兼ねた人でなければ到底知り得ない孤獨の天地、寂寞の深淵を窺ひ得たやうに思はれる。氏はそれに堪へ切れずして亂雜な喧噪な、又熱狂的な所謂生のオーケストラの中に身を投じたが、併しそれも或意味では徒勞であつた、詩人の孤獨と、哲人の寂寞とは、終生、心身を襲ひつゞけたのである、而もそこにやがて氏の磨すべからざる偉大さがある、氏の演すべからざる純な個性の光がある」と。誠に然り、而して此の意味に於て、先生の生涯は謂ふところの近代生活そのものゝ一面を、最も鮮やかに、最も純に、最も暗示深く深したる一個の活藝術ならずや。

美の鑑賞に於て、非凡なる纎細の神經と、驚くべき鋭敏なる感覺との所有者たりしにも拘らず、實際生活に於ける先生の周圍は、終始一貫して色彩なく、光澤なく、實に無味乾燥たりき。衣服に於て、食物に於て、調度に於て、娯樂に

於て、おそらく先生の如く無頓着なりし人は少なかるべし。醉うて己れを忘れず、遊んで自ら樂しむことなく、常に眼を自己の內面に向け、凝視省察瞬時も逸せざりしは、生涯を通じて變らざりし先生が生活の姿なりき。孤獨、寂寞、荒涼――自己に奉ぜし先生の生涯は、誠にその境致を脫するの時なかりしなり。而も自ら奉ずるに爾かく薄かりし先生は他に對して――就中己れに親める者に對しては、常に變ることなき溫情の人なりき、柔和の人なりき、深切なる人なりき。わけても師として後進に對する時、先生は常に聊かの衒ひも城壁もなき彼等の友なりき。先生の師として後進を導くや、先づ溫き同情を以て彼等自らの持てるものを洞察し理解し說明し批判し、而して更に彼等自らをして最も聰明に彼等自らの道を進ましめんことを要としたりき。之れ先生のうちに見出されたる美點中の美點なりとす。而して先生のかの常にさびしき微笑を漂はしつゝ、慧知と溫情とに富める眼、低く沈めるうちに一味の底力ある聲、如何なる場合にも逼らざりし沈靜なる態度、少なけれども要を得てしかし美しく整頓されたる言葉、無造作に打ちつくろぎながらも頹れず亂れざりし擧止――此等の表現と相俟つて、先生の人格そのものゝうちには、何ものとも知れず常に接する者を魅する力の存したりし事は、生前先生に親める者の終に忘れ得ざる懷しき印象なるべし。而も斯くの如き先生その人の印象の示すが如く、先生は人に對しても、事に對しても、亦思想に對しても、決して情熱を以て進む人にてはなかりき。時に對他的に鬪士の風を示し、强く己れを固守するが如き傾を示しゝ事なきにあらざるも、そこにはつひに高くあがれる熱情の伴ふことなかりき。頗る强き執着の力はありき、己れを持する自尊の念は高かりき、而も激越の餘自己を忘るゝが如き情熱の熾烈はつひに先生のものにはあらざりき。かの晩年數歲に亙れる先生の英雄的生活に於てすら、我等はつひにいづこにも先生が高くあがれる情熱に乘じたる勇姿を見出すこと能はず、進んで自ら鬪ひを宣したるが如き壯觀を認むる能はず。寧ろ到るところに痛刻を極めたる運命の受難者としての悲壯なる先生を見しのみ。此の意味に於て、先生の偉大は實に最も强き受難者の偉大なりき、苦痛のどん底までも味ひ盡さんとしたる「堪へ忍べる」者の偉大なりき。

而も又隱忍つひに毫も他人を傷くるの擧に出でず、獨り能く自己の運命を甘受しつゝ終りし先生の强く且いたましき生涯は、他面に於て實に美しく尊き受難者の風を示すものなり。棺を蔽うて後、先生の光輝をして却にその美しさを增さしめたる所以のもの、此の先生の隱れたる德の力蓋し少なからずとすべからずや。更に又あらゆる困難、あらゆる苦痛を一身に擔つて、決して他を怨みず、天を恨みず、人に憐れみを乞はず、世に訴ふることなく、最後に至るまでも自ら破ることなく、傷くることなく、棄つることなく、獨り深く自己内部の眞實に活きんとせし先生の男らしき堅忍と獨立自尊の精神に至つてはまことに之れ讃嘆に堪へざるところなり。先生の最後は此上もなく孤獨なりき。巷の中に於ける先生の死は實に曠野の死の如く淋しかりき。而もかくして孤獨はつひに先生の生涯に純一曇なき個性の光を與へぬ。

先生は又種々なる方面に於て、一種の考策者又は劃策者としての才能の凡ならざるを思はしめたりき。敎育者として雜誌經營者として、又は劇團經營者として、先生が常に聰明なる計畫者なりし事は、多くの人々の認めて以て推服したりしところなり。而も之れが實施者として直接自ら其の衝に當るべく、先生はやゝ其の資質に缺くるところありしが如し。先生自ら此の事を知りしや否やは明らかならざれども、或る一事の實行に從ひつゝある間に於てすら、先生は旣に他の新らしき何事かの工夫考案に從ふ事多く、且甚だその事を好みたりしに似たり。或は早稻田大學英文學科主任として、或は『早稻田文學』經營者として、或は文藝協會の主腦の一人として、更に最後に藝術座の經營者として、種々なる方面に於て先生の示したる經營者的技倆は何人と雖多少の驚嘆を禁じ得ざるところなれども、而も先生は孜々として一事業に終始すべく、あまりに現在に滿足し能はざるの氣風ありき。極めて沈靜なるが如き先生の態度の奧には、絕えず現在に滿足せずして「彼方へ彼方へ」と進まんとする欲求の甚だしきものありき。加之、何事に對しても、常に先生の規模はあまりに大なりき。狹き一方面の事業の計畫に當りても、先生は常に之れを廣汎なる文化事業の一部として考慮せずしては止み得ざりき。時代の文化に對して先生の持ちたる抱負は常にあまりに大なりしなり。若し劃策者として

の先生の才能と、實施者としての先生の技倆との間に甚だしき距離ありしと云ふべくば、そは蓋し其の一點に因由せるところ多かるべし。而も終始を一貫して、先生が文學藝術を以て現代に於けるあらゆる文化事業の中に最高位を占むべきものと考へたりし一事は、あらゆる先生の活動をして自らに對し、又他に對して常に權威あらしめたる根本覺悟として、永久に滅すべからざる先生の美點なりとす。然り、先生は常に此の覺悟を以て自らを鞭ち勵まし、他を教へ導きたりき。おそらく先生に對する苦悶のどん底に沈みたりし刹那に於てすら、此の强大なる覺悟を支杖として復び起ち上りし事、屢々なりしならん。之れ一面より考ふれば大なる矛盾なるが如くして、而も先生その人の生涯にありては不思議にも一個の權威ある事實なりしなり。

生來心臟に痼疾を有したりき、而してその故を以て先生がして長生を得る能はざる人なる事は、十數年前既に親しき醫師の豫言せしところなりしとは坪內博士の談なり。科學的見地よりすれば、先生の一生は或はむしろ長かりしとすべけん。然りと雖も、先生にとりては時に天才の濫費とさへ見えたる劇團經營の苦慮今や漸く一段落を告げ、加ふるに最近に於ける實際社會との交涉によつて得られたる經驗の豐富が先生の批評的天才を强大且鋭敏ならしめ、たるを思はしめ、文壇の視聽新たに此の圓熟期の先生に先つて大なる期待を寄せんとする時に當りて、不慮先生の長逝に會す。誠にこれ「一大喬木の俄に倒れ、一巨星の忽焉として地に墮ちたる刹那の光景」たらずんばあらず。その憾みやまことに長く盡きざるなり。

教授として學者としての先生の貢獻、文壇の人としての先生の光輝、劇界革新者としての先生の效績――それらについては我等は茲に云はず。本集に輯錄したる遺著八卷、以て先生の光輝を永久に傳へん事を期す。

(相馬氏のこの一文は、大正八年六月發行『抱月全集』第一卷卷頭所載のもの。特に乞うこと、こゝに抱ぐることゝした。…………記　者)

飜案劇『オセロ』の話

江見水蔭

明治三十六年二月、明治座に於て、川上音二郎が『オセロ』の飜案劇を演じた。その脚本を供給したのは自分で、此顚末は『太陽』の五、六月號に『自己中心明治文壇史』の一節として、既に發表したのであるが、こゝには成るべくそれに重複しない樣に、其上演前後の眞相を書き、次いで飜案に就ての劇評の主なるものを載せる事にした。

最初に川上が『オセロ』を演じたいからと其脚色を依賴しに來た時に、自分は原書が能く讀めぬからと辭退した處、川上は懷中から『太陽』連載の藐姑射山人（戸澤文學士）の譯文の切取りを綴ぢた一冊を出して。

『大丈夫ですよ、この通りチヤンと種が有るんですから、之を土臺にして是非書いて下さい。私は外國でアービング其他のを見て來ましたから、演じるのには手心が有るんです。』といふので有つた。

自分は、劇界の契約なんか全然信用の置けないもの。殊に法螺吹きと相場の極つてゐる川上のいふ事で、若も千圓の稿料を支拂ふなんて言ひ出したのだから、此先どう成る事やら分らなかつたので、此方からも好い加減の返辭をして。

『なに、こんな切取りなんか要らないよ。イザと成れば字引と首ツ引で、ボツ〳〵自分で讀んで掛る。』と答へて置いた。

それが併し段々眞劍だといふ事が分つて見ると、聊か自分の盲目蛇に我ながら呆れもしたけれど、行掛り上遣らなければ成らなく迫つたので、同じ博文館の編輯局にゐる長谷川天溪氏に質疑もし、ソツと『太陽』の切取りもするといふ譯で。

けれども、今から考へると實に汗顔の至りだが、自分としては――何もそんなにセキスピヤを、おツかながる事もあるまい。ムツカシク考へ出したら際限が無いのだから、自分は自分の見方で以てオセロを日本化して了ふと、一氣に（數日で）遣付け終つた。

其時代では、西洋物の上演は絕體に不評判で、悉く失敗に終つたと云ひ切れる位なので、これは如何しても日本化しなければ駄目だといふ自分の意見で有つた。

洋行歸りの川上の土産で酷くバタ臭いものと世間では思つてゐる。この裏を行つて見たくて成らなかつた。

これに就て、川上は迷つてゐた。二三度、新橋の花月で酒食を倶にしながら相談したが。

『自分は舞臺を臺灣にしたい。サイプラスを臺灣にして、名前もオセロを日本名にして、人種の相違を新平民へ持つて行き、猶オセロを薩摩ツ坊にしたいのだが。』と云つたので、川上も後には贊成した。

それでオセロが（室鷲郎）デスデモナ（鞆音）ブラバンシオ（布良蕃城）カツシオ（勝芳雄）イアゴー（伊屋剛藏）ロデリゴー（櫓取孝）エミリヤ（お宮）ビアンカ（琵琶香）ヴエニス公（植西宏）モンタノ（門田信之）クラウン（黑文）クラチア（倉地亞之助）其他で、處が外務省に倉地といふ人が實際に有つたので、其人が倉地亞之助に扮した山本嘉一の爲に、後援をしたといふ挿話も生じて來た。

『オセロなんて、まるで煙草のやうな名ですね。』と見物の中のさゝやきは何度聽かされたか知れなかつた。其頃別にオセロの發音に近い卷煙草も無かつたのだが、片假名で書けば卷煙草だと思つた其當時の世想で有つた。

全く西洋劇には、當時の觀衆は惡感を抱いて居つたので、臺詞（せりふ）を聽くよりも殺陣（たちまはり）を見るといふ見物が大多數と云つても好いので有つた。

無鐵砲の自分――蠻勇的にオセロを飜案はしたものゝ、それでも有繫に名文句は出來るだけ生かして置きたかつた。

これには可成り頭を惱まされた。

原稿が出來たので、早速それを川上に見せた處が、それに對して多數の駄目が出た。中には上演者として道理な註文も有つたが、又下らない揚足取りも少くなかつた。(彼は一々原稿に貼紙を附した)

殊にオセロにイヤゴーが嫉妬を起させる處などは、アノ通りの長帳場で、出入が非常に繁雜なので、自分はズツと節略した處が。

『こゝが肝腎の見せ場ですから、モツト原本に近く書いて下さい。』と云ふので有つた。

『けれども、今の見物の程度では持切れまいと思ふがね。』

『ナーニ、私と高田ですよ。イクラ見物が湧いたツて、ビクともするもんですか。』

蓋を明けて見ると果して此所は初日に湧いた。それで川上はコソ〳〵と、自分に內所で、高田と相談して、大刈りに刈り込んだが、その結果は自分の最初の稿と同じに成つたといふ滑稽も有つた。

更に自分として不愉快で有つたのは、脚本をいつの間にやら、川上から金子堅太郎氏の手許へ廻してゐて、その意見を問ふべく自分にも同行せよといふ事で。

自分は川上をして成功せしめる爲には、自分の小主張なんか、どうでも好いと我慢して、番町の男爵邸へ（未だ子爵ではなかつた）二人で行つた。

金子氏は、一ケ所、駄目を出した。それはデスデモナがオセロに向つて——それは屹度御見張の崇で御座います。堅くお鉢卷を遊ばしまし——といふ處を指摘して。

『鉢卷をさしたら滑稽ぢやよ。これはイカン。』といふので有つた。

實際、舞臺で鉢卷をさしたら、それは滑稽かも知れないが、唯、臺詞として鉢卷をしたら如何ですといふのだから、

一向差支が無いのだけれど、之を躍起と成つて爭ふほどの問題でないから、自分は默つてゐた。

男爵は、それから貞奴が登場するや否やに就て問ひ合されて、脚本は其儘返へされた。

いよ〳〵稽古に掛つてからで有つた。突然川上は總督府の夜會の場を拔きたいと云ひ出した。――此所はカッシオとイヤゴーとの持場に成つてゐる。則ち藤澤淺二郎と高田實とで氣を吐く處なので――オセロをやる川上としては、そこを拔いて、それだけの時間で、大切に喜劇を附けたい考へらしかつた。

無茶な男だ。川上は矢張、文藝を理解する頭腦が無いと思つた。けれども、まア何んでも自分の遣りたい樣に遣つて見るが好いと、自分は彼の云ふ通りに成つてゐたが――藤澤や高田が忠告したと見えて、又夜會の場を出す事にした。

自分は此所を花やかに――悲劇を產む前の歡樂場を表はす爲に、さま〳〵の假裝行列を出す樣に脚色した。處が川上は更にそれを工風して、津坂幸一郎の黑ン坊婦人と山本嘉一の黑ン坊紳士との低級なダンスや、五味國太郎と高浪定次郎との支那劇の立廻り、それから、貞奴、九女八、靜枝の三人のお踊とを入れた。これは成功した。

カッシオとイヤゴーと對酌の臺詞は、高田と藤澤とで相談して、脚本外に勝手な事を喋り散らした。――見物は併し大變にウケてゐた。

稽古は茅ケ崎の旅館に一同泊り込んでしたので有つたが、そこへ自分は參考と成るべく、或る外字雜誌のオセロの挿畫を一枚持つて行つた。それは木村鷹太郎氏の所有なのを、谷活東が借りて來たので有つた。

畫面はオセロがブラバンシオ及びデスデモナの前で、彼の冒險談を試みてゐる處なので有つた。

すると川上は忽ちそれに氣が移つて。

『コレ、コレ、これです〳〵。序幕に賑やかな園遊會を出して、幕の開かない前に盛んな喝采を起し、幕が開くと、ブラバンシオ其他の前で、自分の經歷談を語らせる。それをデスデモナが聽いて、彼の勇壯な閱歷に戀するといふ、然う

いふ事にして下さい。それに限ります。』と云ひ出した。

飛んでもない事を持出したので、自分はアキレたけれど、露骨に彼の穿き違へを諭すのを避けて。

『宜しい。それも好いだらうが、併し君、首相邸の內閣會議（ヴエニス市の會議廳）の後、植西侯に向つて、室鷲郎が、納音孃の愛を貰ひ得たのは、自分の身の上を物語つた爲だといふ。それは身の上話が略されて陰に成つてゐるから好いのだが、今度は表面に立つて、令孃を感激せしめるだけの眞の雄辯——辯舌は好しや拙くても、眞情を絞つて人を感動せしめるだけの——それが君に出來るかね。それだけの自信があれば書いても好いよ。』

これで大將へキエキして、漸く序幕變更は中止と成つた。實に亂暴な話ながら、當時の俳優は（新派——正劇の棟梁たる川上音二郎の洋行歸りの新智識にして）大概此程度の思想で有つたのだ。

最も苦々しかつたのは、大詰て、イヤゴーを知事の所罰に一任したゞけでは、見物が納まるまいから、カッシオの號令で兵隊に一齊射撃をさして、イヤゴーを銃刑に處する處で幕にして吳れといふ註文で有つた。

自分は其通りにした。處が初日に兵隊が皆、廣目屋から傭入れた廣告配りの人足連で有つたので、キッカケを間違へて、オセロを銃殺した。實に大トンチキが演じられた。

この兵隊は、何んでも五六十人もゐて、嫣公城の埠頭で（サイプラス島海岸）臺灣總督が海賊を退治て上陸する時に、出迎への列を組む處にも用ゐられた。斯うした目先の變つた趣向は、皆川上の案なので有つた。

然るに廣目屋の人夫が急に舞臺へ出られるといふので、スッカリ喜んで了つて、中には立派な役者に成つたツモリで、初日に樂屋で川上に向ひ。

『私の部屋はドコだ』』と問ふたので、さすがの川上も返辭が出なかつたといふ餘興も有つた。

オセロが土耳古艦隊を全滅さしたのを、室鷲郎が臺灣總督で、海賊を退治たと脚色されたので、川上は其實地を探る

爲に臺灣の海賊島を探檢に行きなどした。今の宣傳法としては妙だけれど、それが沙翁劇上演の意氣とは甚だしく合しないといふ事を、世間では少しも氣着かなかつた。

川上の臺灣行は單に舞臺面の裝置の參考に成つたに過ぎなかつた。

媽公城外の場は、背景に洋畫を用ゐ、パノラマ風だといふので評判され。總督府の各室も可成り目先が變つてゐて、大道具（長谷川）には大分フンパツしたので有つた。

宗鷲郎は薩摩人だといふので、川上は自分で臺詞を鹿兒島訛にかへた。さうして官邸內では薩摩絣を着たので、どうかすると滑稽味が（持前の愛嬌も邪魔をして）出て、感心しなかつた。

ビアンカの琵琶香を引受けた山田九洲男は、熊本辯を用ゐたので、これは特色が出て喝采を博してゐた。（此琵琶香を藝妓にしたのは、セキスピヤを辱かしめたものだといふ攻擊を、日向きむ子が時事新報で發表した。その誤見である事を長井金風氏が同紙で又反駁した。ビアンカの素性は藝妓類似といふ事を、きむ子は知らない筈はなかつたのだらうが、どういふ考へ違ひで言つたものか）

宗鷲郎の川上は、臺灣總督といふので、時の總督兒玉源太郎氏の顏に似せる苦心をした。

ブラバンシオ——布良伯に扮した松本政雄は、山縣有朋氏に似せようとした。

併し最も扮裝に成功したのは、五味國太郎が、植西首相を、伊藤博文氏に似せて作つたので。眼下のホクロまで附けて好評で有つた。

官邸寢室。デスデモナが柳の歌を唱ふのに擬して、鞆音が蓄音器を掛けると。

『行く水や、さそふ流れに柳蔭、もつれ髮なる乙女子が、戀に泣く音は里川の、瀬に捨てられし石小石、我は浮世に澄む月や、あはれなりけり。

此譜に合せて寝間衣に改める事にした。

處が、其時分には高聲器が輸入されてゐなかつたので、それを止して、川上は河東節の家元山彦秀次郎に節附けさして、芳町藝妓二人に寝室の奥の緞張りの中で唄はせる事にした。

從者クラウン（黑井文太――黑文）の役を引受けた高浪定次郎が納まらなかつた。

『私は總督の從者ですが、その從者が主人から一言も詞を掛けられません。何んとか一口でも好いから聲を掛けられる様にして下さい。』といふので有つた。能く調べて見ると原本でもオセロはクラウンに一語も發してゐなかつた。――セキスピヤに舞臺技巧の手ぬかりが有つたとすれば、或は此一事かも知れないのだと云つて、大笑ひに成つて、其註文は容れた。

此興行では全然花道を使用せず。舞臺面を額ブチ式に仕切りなどして新らしがつた。晝間電燈も芝居には初めて引かれて、日光照明を遮斷した。(然るに、藤澤だけが、ロデリゴーを返り討にする洪辰門の場だけに、花道から出たので、川上は怒つてゐた。――西洋では全然花道は有りません、と頑張るので有つた。)

未だ興行中の逸話の面白いのが有るが、それは略して、脚本に對する批評を二三紹介しやう。

○國益新聞　（明治三十六年二月十三日紙上）

（前略）オセロを飜案したといふ義と飜譯又は直譯したといふ事に意を止めぬといぢらしい處の覘ひ了簡が起るのである、と云へば字義の講釋の樣で訝しいが僕等は總て公平な事が人よりも少し餘計に好きなのであるから玆に念を入れて置く侑江見氏に向つて英學の素養を問ふ馬鹿者が有るが嫉妬の深さ加減が分らぬ或る一物に就て『飜案』する事に異種文字の讀める讀めぬとを以てするは些の要領を得ぬと共に他の名利を傷くる大嫉妬心であるのである。兎に角之を書き現はす丈の才學が有れば餘は問ふ處でない（下略）

○都新聞 (評者――青々園)

(前略) 噂に聞くと水蔭氏が之れを引受ける前に、櫻癡居士が鎌倉時代の事にして置きたいと言はれたさうだが、此れは無論今度のやうに散髪物とした方が正當だ▲だが明治時代の散髪物にすると、全體に於て原作の如き典雅(クラシカル)な趣きを失ふといふ困難が別に起る▲だから米仙翁の如きは、寧ろ伊井が此の座で「シーザル」をしたやうに、飜案でなく飜譯にして、時代も人名も服装も原作の通りに、白(せりふ)だけを日本語でしろ、といふ注文があつたが、一日通し狂言が西洋の世界では無論今の見物の多數が容れない▲斯の通り俗受から言つて日本の事に引直すべき(卽ち飜案すべき)必要は大いにある、だから今度の脚本の書き方は正當、寧ろ已むを得ざる所であるが、飜案の爲めに典雅(クラシカル)の趣きを失つた事は依然として殘つてゐる▲それと原作の名文が散文的(プローマーク)なる駄句になつたのは決して飜案者の技倆が足らないからでは無い、第一は日本語そのものが沙翁金玉の句を寫すには不充分なのである

(下略)

○東京朝日新聞 (評者――青陵)

(前略) マクベスやハムレツトを取るは……國俗を特にし趣味を等しくせざる我社會に、西劇を輸入する最初の階段としては決して策の得たる者に非ざる也。而して水蔭氏が其飜案に際して舞臺面を特に臺灣にとり、オセロを以て其の總督に擬したるは吾人の最も敬服する所なりとす、されど余輩は望蜀の念として、若し此の種の史劇を時代物に飜案しなば一層の感興を加へたるもののあるを思ふ (下略)

○時事新報 (明治三十六年二月二十一日紙上)

(前略) 飜案本と原作とを比較すればその間に趣味の零落を生ぜざるを得ない、が、若しこれを別々にして見るときは、前にもいふ如く飜案本もなか〳〵に善いので、水蔭子の技能も爰に初めて明々地に指點されるのである (下略)

○讀賣新聞（評者——荷葉）

（前略）江見水蔭子が大沙翁の『オセロ』を飜案したる、また單に文學上の産物としてのみ賞するものならんや。原作こそ人も知る如く四大沙翁劇の一つたれ、之を飜する困難は、前日櫻癡居士の述ぶる所の如くなるに、水蔭子の巧に之をさら〳〵と遣つて退けたる、また天才の然らしむる所にあらずとせんや。（下略）

○每日新聞（二月十七日——評者——饗阿彌）

此「オセロ」を日本人の腹で書き日本人の腹で演じてゐるとすれば總ての科白配景の不調和が非常なる攻擊の聲と化せざるを得ないのであるが單に「和裝せる洋客」と假定して之を觀察するに於ては何人と雖も日本の現社會を標的として駁論の矢を放つことは出來まいと思ふ。（下略）

未だ此他に、依田學海翁の、恐るべき猛評が有つた。——それは、いやしくも軍人が、妻の不義を疑がつて、輕々しく殺害するなんて、そんな馬鹿な事が有るか。日本人には斷じてそんな人間は無い。『オセロ』は實に愚劇だといふ樣な大脫線で有つたが、惜しいかな其切拔を紛失さして、手元には殘つて居らぬ。

櫻痴居士が『讀賣』の紙上で、川上に宛た私信を發表してゐる。それには飜案者に對して非常に同情ある批評が下されてゐるが『太陽』に載せたので玆には省く。

自由劇場時代

秋田雨雀

○

日本の演劇藝術は、自由劇場時代に於て始めて、曙の光を見たと言つて好い。一般文學の曙の時代に、ほゞ十年間後れて來てゐると言つて好い。然し此の自由劇場時代の曙の氣持は、二つの意味で重大な意味を持つてゐたと思ふ。一つは舞臺藝術の方面に働いて行き、一つは、文學としての劇作の方面に强い刺戟を與へてゐたからである。

一八八七年のフランスに於ける自由劇場の運動、一八九〇年に於けるモスコー藝術座の運動、一八九七年に於けるイギリスの運動が、アメリカに於ける小劇場運動と前後して、此所に最初の產聲を上げたのであつた。

○

自由劇場發生以前に、幾多の演劇運動があつた。その最も具體的なものは、文藝協會の前期及び後期の運動であつた。然し文藝協會の運動は、演劇の社會的地位を高めるといふ點に强調點があつたけれども、此によつて、新しい時代の創作に刺戟を與へなかつた。その點が、文藝協會と自由劇場との新しい時代に對する態度の區別を示してゐるやうに思はれる。

自由劇場の創立者としての小山內君、市川左團次の功積は、他の凡ゆる點が、忘れられても、日本の演劇史の上に立

派な記錄を殘してゐたであらう。

○

創立者としての小山內薫君は、此の時代には一人の若い自然主義の作家として立つてゐられたやうである。從つて小山內君の舞臺上に於ける主張も又自然主義的であつたのを當然だと言はなければならない。そしてそれが、アントワーヌの自由劇場、モスコーの藝術座、英國の舞臺協會の藝術上の趣味と一致してゐると言ふ事も又自然な事であつた。

自由劇場の最初の出し物である「ボルクマン」が、有樂座の舞臺の上に現れた時の私達の喜びは、殆んど、比較するものゝない喜びであつた。此の舞臺の幕の前に現れた小山內薫君の姿は、作家としてのあの人の姿よりも、ずつと立派で、華であつたやうな氣がした。「ボルクマン」の幕の開いた時に、異常な緊張感が、私達青年を襲ふて來た。此の感じは恐らく、築地小劇場の最初の舞臺を見た今日の青年達の氣持に稍々似たものであらう。私は築地小劇場の幕の前に謙遜な態度で立つた小山內君の姿を見て、直ぐに自由劇場の舞臺の上に立つたあの人を思ひ出した。

○

一九一二年から一九一六年までの日本の演劇の世界は、實に、スツルム・ウンド・ドランクの時代であつたと言つて好い。「夜の宿」の演ぜられた時は、私達は非常な興奮を感じて、殆んど夜を徹して語り明かしたのを憶えてゐる。昔、尾崎紅葉などのよく集つたと言はれる明進軒の跡で、つい近頃までプランタンのあつた一室に、自由詩の運動を起して後で不幸な死を遂げた詩人の三富朽葉君や、今井白楊君などゝ「ソワレ・ド・グリマース」といふクラブを私達は起してゐた。「夜の宿」の歸りに、私達は、此のクラブに集つて朝の光を見るまで、「夜の宿」の印象を語り會つた。醉つぱらひの今井白楊がテーブルの上に上つて「ペヽルの日」を怒鳴つたりしたのを、昨日のやうに私は思ひ出す。實に好い記憶だ。

自由劇場は、日本の創作劇を除りやらなかつたに係らず、偶然にも此の時代の若い作家として吉井勇、長田秀雄の二君の作と共に、私の一番最初の戯曲が上演されたと言ふ事も、私の生涯では忘れる事の出來ないものゝ一つである。吉井君の作物は、「河内屋與兵衛」長田君のは「歡樂の鬼」そして私のは私の一番最初の集にをさめられてゐる「第一の曉」といふリ、カルな短い一幕物であつた。

今から思ふと、その時の印象は、その作物自身の示してゐるやうに、一つの夢に過ぎなかつた。然し、その小さな夢が、凡ゆる時期に、私に最も好い刺戟を與へて吳れた。前にも言つたやうに、自由劇場の運動は、此の時代の若い作家の創作に刺戟を與へて、新しい劇作家の一群を産んだ。今日私達の同じ年配の劇作家の殆んど總ては、此の演劇運動の刺戟によつて生れたものだ、と言つても過言ではない。凡ゆる演劇運動で、それが若し、單に舞臺の上に止まる運動であるならば、恐らくその演劇運動は、小さな意味のものに過ぎないであらう。自由劇場は、日本の演劇運動のメカニズムのために、路を拓いたと同時に、新しい作家の一群を藝術の世界に送つたといふ事は、充分に記憶さるべきであらう。（談話）

○

文藝協會前後

河竹繁俊

○

明治文學研究に關する有意義な企ての終篇として、自然主義を中心にしたものが出來るに就いて、「文藝協會前後」といふ題目が編輯者から與へられた。この題から見ると、文藝協會だけに限られてゐる如くにも見えるが、つまり、自然主義論によつて風靡せられた頃、――それから少しく後の期間に於ける、劇壇の大勢、特に新劇運動の過程に重きをおいて、述べて見るのが本義らしく思はれる。けれども、この問題に就て、詳しく見て行くとなると容易ではない。優に一卷の論文、或は明治後期に於ける新劇運動史といつた風のものになるべき性質のものである。到底、完全な記録になることは望めさうにない。それに、執筆の機を遷延さしたが爲に、遺憾ながら――最も興味のある題目でありながら――極めて簡略な報告しか、此の場合作れなくなつた。この段は讀者諸君を始め、編者にお詫びしなければならない。

○

故島村抱月氏を中心として唱導された自然主義論は、明治四十年、四十一年といふ所が、最高潮であつたやうに記憶してゐる。當時の文學青年であつた吾等は、一も二もなくその洗禮を受けてしまつたもので、今日に到つても、時々に固まつた考へ方に、累せられることがあるくらゐだ。無論近代文藝の根據が、そこにおかれてゐることに異論はないし、

洗禮を受けた恰好になつたのを決して悔いはしないが、其頃の考へ方は、僕などにあつては、少しく理解を缺いてゐたことが、追々に分かつた。

それはそれとして、自然主義全盛時代が、やはり演劇の方面に取つても、さういふ根本的革新の促がされた時代であつたことは、寧ろ不思議なくらゐに一致してゐる。或は當然さうだと言ふべきかも知れないが、何等劇に對する特殊な提供がなされたのではなかつたのに、おのづとさういふ結果にれつたのは、卽ち氣運の然らしめた所かも知れない。

○

奇異なる對照はそればかりではない。

そもそも明治に入つて、文學といふものを眞面目なものにするに、あづかつて力のあつた『小說神髓』『書生氣質』或は『浮雲』といふものは、明治十八年以降に世に現はれたのであり、それを又一層大眞面目なものにした自然主義論は、その後二十年を經た明治四十年頃から現はれたことになつてゐる。（甚だ獨斷的で簡單であるが、だいたい、そんな形になつてゐると思ふ）一方、演劇改良會といふものが社會的に設立されて、演劇革新の唱導された第一階梯は、明治十九年以降のことであつた。が、その改良案が實際に劇界を支配するに至つた動機である文士劇、文藝協會、自由劇場の運動といふものは、演劇改良會の後約二十年間を經た、明治三十八九年以降の現象であつたことになる。卽ち小說――廣く文藝の形勢も、演劇に關する形勢も、明治二十年を出發點として運動が起り、またその後二十年をへだてゝそれが完成に至る運動が起つたといふことになつてゐる。然もこれらの運動は文藝と演劇と、多少の脈絡は認められるが、比較的交涉の少ない人が別々に起した運動であつたのに、時代から言ふと、大凡同時代であつた事は、不思議なくらゐよく似てゐる。

『小說神髓』の著者は言ふまでもなく、坪內先生であるが、演劇改良會の主唱者は末松謙澄とか穗積、外山などゝいふ

顯官又は官學畑の學者であつた。坪内先生などは直接發起人側には決して立つてゐなかつた。また文士劇は杉贋阿彌、岡鬼太郎、右田寅彦、岡本綺堂の諸氏によつて、また文藝協會は坪内先生によつて、また自由劇場は小内山薫、市川左團次兩氏によつて、それ〴〵發企主宰された形になつてゐるが、自然主義論は島村抱月氏を中心として唱導された。島村氏は後には藝術座を組織するに至つたが、文藝協會とは密接な關係は持つてゐたが、その主宰者では決してなかつた況や、最初から演劇運動を豫想した自然主義論ではなかつた。――それは恰も、坪内先生の『小說神髓』が演劇改良を豫想したものでなかつたのと同一軌といつてよい。而もこの兩先生とも、一兩年の後には、共に新演劇運動の中心人物になつてゐる點も同一軌であるのは、いよ〳〵不思議な對照と言はねばならない。

○

『文藝協會前後』の劇壇の狀況は、比較的時代も新らしいことであり、中心に立つた人々の多くは現在の人々が多いしするから、クド〳〵と述べるよりも、表のやうに列記して見る方がよいかと思ふ。さうすれば、說明なしに大凡の經過なり、調子なりが分るやうに思ふ。

（次の表は、貧弱な參考書によつたものであるから、多少の誤脫は免れまい。その點は前以てお斷りしておく。）

明治三十八年

四　月　文藝協會の前身である易風會は牛込淸風亭に研究會を開いて雅劇『妹脊山』を試演した。東儀鐵笛、土肥春曙、水口薇陽の諸氏があつた。

五　月　若葉會の試演會が歌舞伎座にあつた。杉贋阿彌、岡鬼太郎、右田寅彦、伊坂梅雪、岡村柿紅、栗島狹衣の諸氏、劇評家を主とした團體で、所謂毎日派文士劇の前驅をなすものであつた。

明治三十九年

二月　文藝協會の發會式が芝の紅葉館に催された。金子筑水、島村抱月兩氏は幹事、坪內先生は文藝顧問、會頭は大隈伯であつた。『孤城の落月』が上演された。東儀、土肥、水口の諸氏が之れを演じた。
九月　若葉會の第二回目があつた。
十一月　文藝協會は歌舞伎座に演藝大會を開いて、『桐一葉』、『ヹニスの商人』を上演。
十二月　若葉會同人を主體とし、島田三郎氏の主宰で演劇會といふものが歌舞伎座に擧行されて岡本綺堂氏作『新羅三郎』、『熊谷陣屋』、森鷗外氏作『日蓮上人辻說法』等を上演。

明治四十年

五月　荒川重秀、澤村宗之助等の英語劇『シーザー』上演さる。
七月　每日新聞演劇會といふ名稱の下に、高安月郊氏作『吉田寅次郎』、岡本氏作『阿新丸』等を上演、杉、岡、岡本、栗島、荒川の諸氏出演。
十月　略前項の同人にて岡本氏の『十津川戰記』、山崎紫紅氏の『甕破柴田』等を上演。
十一月　文藝協會は第二回を本鄕座に開演し、杉谷代水氏作『大極殿』、及び坪內逍遙博士譯『ハムレット』、坪內博士作『新曲浦島』、等を上演。東儀、土肥、水口、大島居古城、久保田金僊の諸氏出演。此時の『ハムレット』は異常の成功を收めた。

明治四十一年

一月　松居松葉氏計畫せる市川左團次の明治座改革を斷行、但し此の成績はあまりよろしからず。
四月　每日派の文士劇新富座にて開演、岡本氏の『由井正雪』山崎氏作『信玄最後』等。岡、岡本、市川新十郎

栗島、佐藤露英、市川九女八、杉の諸氏出演。

明治四十二年

一　月　東京座にて合同文士劇あり。

三　月　文士劇協會（杉、水口、大島居）の發表演劇あり。

四　月　文藝協會組織一變せられ、在來の方針を改めて演劇の事を專らとする事となり、坪内博士會長となり、金子、島村、伊原青々園、池田大伍、東儀、土肥の諸氏を幹事とする事とし、新たに演劇研究所を設けて俳優の養成を開始した。

十一月　文士劇協會の演劇發表があつて、杉、栗島、岡の諸氏出演。

十一月　自由劇場の第一回試演があつた。イブセン作、森鷗外譯『ボルクマン』で、小山內薰氏の演出、市川左團次、市川猿之助、市川松蔦、市川左升等の諸氏が出演した。此の『ボルクマン』は『ハムレット』以上の出來事であつたと言つてもよかろう。

明治四十三年

四　月　東京俳優學校（藤澤淺二郎氏が校長）の試演があつた。

五　月　自由劇場第二回試演、『出發前半時間』其他。

十一月　井上正夫、桝本淸兩氏の事業ともいふべき新時代劇協會の『馬盜坊』（ショオ作森鷗外氏譯）上演する。

十二月　自由劇場は第三回上演としてゴルキイの『夜の宿』を上演する。

明治四十四年

一　月　川村花菱氏の試演劇場開演す。

二　月　新時代劇協會第二回上演、ゴオゴリ作楠山正雄氏譯『檢察官』、眞山青果氏の『第一人者』。

三　月　帝國劇場開場す。

四　月　新時代劇協會は『ベルス』を。

五　月　文藝協會第一回公演、沙翁作坪內博士作『ハムレット』全五幕。

六　月　自由劇場第四回、長田秀雄氏作『歡樂の鬼』、秋田雨雀氏の『第一の曉』、吉井勇氏の『河內屋與兵衞』。

九　月　文藝協會第一回公演を牛込余丁町坪內博士邸內の試演場にて開演。イプセン作島村抱月氏譯『人形の家』、坪內博士の舞踊劇『寒山拾得』、『お七吉三』『鉢かつぎ姫』等。『人形の家』は『ボルクマン』にも劣らぬ好評であり、松井須磨子はノラに成功して女優の第一人者となつてしまつた。

十一月　自由劇場はハウプトマン作森鷗外氏譯『寂しき人々』を上演。

十一月　文藝協會は第二回公演を行ひ、『人形の家』及び舞踊劇を上演する。

大　正　元　年

一　月　演藝同志會はイプモンの『ゴースツ』を。

三　月　土曜劇場始まる。

四　月　自由劇場は『タンタジールの死』其他を。

五　月　文藝協會は『故鄉』(マグダ)を。其他。

大　正　二　年

文藝協會は六月の『シーザー』を名殘りとして、解散の餘儀なきに立到り、脫退せる島村抱月、松井須磨子の一派は藝術座を組織し、殘れる東儀、土肥、池田大伍の諸氏は演劇無名會を作り、加藤精一、森英治郎、佐々木積、横川唯治

の諸氏は吉田幸三郎を中心として舞臺協會を組織した。
此他舊會員であつた上山草人は伊庭孝氏と共に近代劇協會を作り、藝術座から分離した澤田正二郎君は新國劇を設立するの準備に入るなど、大正の始めは新演達動の戰國時代ともいふべき時期であつた。新劇團の數はおそらくは百にも近かつたであらう。私などが、まだ文藝協會の試演場に時々顏を出してゐた頃に於てさへ、東儀氏が、新劇團の數は五十になつたと明言されたのを覺えてゐる。
所謂スツールム・ウント・ドランクの時代とでも言ふのか知らん、まるで熱病にかゝつたやうな時代であつた。――思へば、僕などもその時の患者の一人であつたのだ！
說明――概說めいたことは最初に於て述べた。あれ以上の註なり、各個の運動の特異點や、功過を述始めたら際限がなからう。そこで、もう一遍言葉を替えて說明を補促しておくにとどめるの外はない。
自然主義運動は明治文壇に一大轉機を與へたものであつたことは、今日から見ても、疑ふ所はない。それと同樣に、「文藝協會前後」の新劇運動――言論、試作の上のみに於ける運動は二十年前のであつたが、實際運動と併せて出發した明治四十年前後の此の新劇運動は、たしかに劇界の情勢を一變せしめる轉機になつたものであつたと言つてよい。
これに對する證明は、おそらくは何等の手數も要せずして、明白であらうと思ふ。例へば今月（五月）本鄉座に上演された出目（高安月郊氏作『江戶城明渡』岡本綺堂氏作『新宿夜話』、同氏作『正雪の二代目』等）を見るがよい。明治三十五年あたりには、一顧だもされなかつた作柄が左團次、猿之助、中車等の一座によつて演せられてゐる。左團次、幸四郎は『シーザー』を歌舞伎座の普通興行に上演し、小山內氏の『森有禮』も上演された。これらの例は擧げるのに寧ろ煩雜過ぎるのを虞れなければならない。
意盡さゞる所は甚だ多いが、今は以上で筆をさしおく。

（二、五、十九）

自然主義運動の回顧

中村星湖

一　日露戰爭

日露戰爭のはじまつたのは、私がまだ二十一二歳で早稻田大學の文科の豫科に籍を置いた頃だつた。變な恰好の制帽――と言へば、その頃の早稻田の制帽を知つてゐる人は直ぐに微笑するであらう――同じ菱形でも帝國大學の制帽などとは異なつて、天邊の面積が廣いのに、薄つぺらで、緣は太い針金か何かで突張つてある羅紗地のまん中から、同じ黑色の絹の撚り紐の房が長く流れて、角ばつた緣の下まで垂れてゐる、その裏には頭骸骨なりの鉢があつて、それも天邊と同じ黑地の羅紗で包まれてゐた。アメリカあたりの大學の制帽を型取つたものださうで、寫眞などで見ると、ちよつと美術的で、面白かつたが、それを被つてゐる本人の氣持には、いさゝか極りのわるいやうな點があつた。それは何故だつたか？　多分、その帽子の恰好が普通の日本の學生のと飛び離れて違つてゐたからでもあらうが、道を通る時などに、大人でも子供でも、不思議さうな時として可笑しさうな眼付をして眺めたからでもあらう。ちやうど、その頃、生々藥館の藥賣りといふのが、變な帽子をかぶつて、オチニ、オチニと掛け聲をしながら田舍などをよく廻り歩つたものだが、私は一度、鄕里に歸省した折に、その藥賣りと間違へられて、田舍の子供等にはやし立てられた事があつた。そんな事があつてから、餘計に私はその制限をかぶるのに氣が退けた。

それでも、當時、早稻田の學校には、兵式教練といふのがあつて、その時間となると、必ず制服制帽で運動場へ集まらなければならぬ掟だつたので、私も見すぼらしい黑サージの合服に例の房のある帽子をかぶつてそちらへ出懸けて行つた。私は制服を夏冬の二た通り揃へて持つ事が出來なかつたので、いつも薄い合服でごまくわしてゐた。冬が來て寒い時には、襯衣を着込んだり、オバアコートを重ねたりして凌ぐのだつた。

日本とロシヤとがいよ〳〵戰端を開くといふ噂の高まつたのは、明治三十七年の何月頃だつたか、季節の事ははつきり記憶してをらぬが、兎に角、私はあの帽子をかぶり、あの服裝で、運動場を二三の友達と一緒に歩いてゐた。兵式體操の時間ではなく、たゞの休み時間だつたかも知れぬ。

その時、私は、今は立派な脚本作家となつた池田大伍君（本名は銀次郎と言つて、天金の次男で、非常な勉强家、讀書家だつた）ともう一人の友達とで、ヨーロッパの强國であるロシヤと戰爭が始まつたなら、この小さな日本は一と堪りもなく滅びるであらう。いや、まさか、日淸戰爭の事を考へてみたつて、日本は小國でも滅多に滅ぼされるやうな事はあるまいなどと話し合つた。何でも、池田君ともう一人の友達は樂觀說を支持し、私一人は悲觀說に傾いてゐた。

「二三日前の新聞に、トルストイが非戰論を唱へたために、シベリヤに放逐された、とか、されようとしてをるとか出てゐたが、あゝいふ人がもう二三人もロシヤにあつたなら、戰爭は起こらずに濟むかも知れぬが、今度はどうしても戰爭になるらしい。戰爭がすこし長引くと、僕等もかうして學問などはしてゐられない。國民軍に編入されるなり何なりして、國家のために生命を棄てなければなるまい。何うも、僕はこの戰爭で日本は滅びると思ふ……」

寄ると觸ると、誰も彼もが戰爭話で持ち切つたのは、その後、間もなく日露の兩國が滿洲の野で砲火を交ふるやうになつてからだつたが、いよ〳〵實際に戰爭してみると、案外日本軍が强くて、勝利の報知が頻々到るといふやうなわけで、戰前の遲疑逡巡とは異なつて、多くの國民が敵愾心や愛國心に振ひ立つたのに比すべくもなかつたが、私のやうな

者でもいくらか心を安んじた。

けれども、幸徳秋水や堺枯川などが社會主義の立場から非戰論を取つて、主戰論を唱へた萬朝報の主筆黑岩周六に反對して、連袂退社したといふ噂や、その頃、早稻田の英文科で英話を教へながら基督教主義の宣傳に努めてゐた內ケ崎作三郎氏の「トルストイの著書がもつと多くの日本人に讀まれてをり、ラフカディオ・ハアンの『心』などがもつと廣くロシヤに紹介されてをつたなら、こんな戰爭は起こらなかつたかも知れぬ」といふやうな意見を耳にして、私は戰爭に破れて國が亡びるといふ事はいやだつたが、人と人とが殺し合ふ事に大きな疑問を抱き始めた。それ故、私は神田三崎町の伯父の家に食客となつてゐたが、そこの書生や俥夫をあひ手に、談、戰爭に及べば、必ず悲觀說を唱へ、「一時は勝つても、末には日本が負ける、だから始めから戰爭などしなければよかつた。」といふ風の事を主張して、ひどくかれ等を憤慨させた。

「そんな事を町へ出て言つて御覽、擲り殺されるから。」

伯父の俥夫は、無智で一刻で、敵愾心といふか、愛國心といふかに、凝り固まつてゐて、眼を剝き、拳を握りながら私を睨み付けた事すらあつた。

二　戰後の思想と文學

少數の非戰論者もしくは悲觀論者にも拘らず、多數國民の、所謂擧國一致の努力と奮鬪とによつて、わが國は露國に對して完全な勝利を得た。その勝利を得るまでに國民または軍隊が拂つた犧牲は精神的にも物質的にも無量無數であつたが、「國の爲め」に皆よく堪へ忍んだ。「堪へがたきに堪へる」といふ言葉はそれまでしばしば聞いた言葉であるが、その實例はふだんは極まれにしか無かつた、けれども、それを多く、且つ到る處で見る事が出來た。幾十萬かの生靈があ

の戰爭で死に、幾百萬の國帑があの戰爭で費された。わが國に取つては實に曠古の大難だつた。

奉天陷落と同時に休戰となり、米大統領ルウズヴエルトの斡旋によつて、ポオツマスに小村とウイツテが講和條約を訂結する事になつたが、戰勝國日本は亞細亞大陸にわづかばかりの足溜りと優越權とを得たゞけで、豫期した賠償金などはすこしも取る事は出來なかつた。日比谷公園で國民大會が催され、講和條約の不滿から熱狂した民衆は交番などの燒打をして鬱憤を霽さうとした。

戰爭に狂奮し、勝利に夢中になつた日本國民が時を經るに連れて覺醒して、何の爲にあれ程の犧牲を拂つたかを反省するやうになると、最早かれ等は戰爭前の日本人ではなかつた。國家に對する愛、さういふ心持を、ちやうど十年前の日清戰爭の際にもかれ等は强く持つたが、日露戰爭の最中及びその後のかれ等はずつと强い愛國心を持つたのは勿論で、その上に、かれ等は國際的觀念もしくは世界的自覺を持つやうになつたのだつた。日清戰爭の際にも、所謂三國干涉といふやうな國際關係に煩はされた爲めに、わが國の國民の自覺はやゝ廣く大きくなつた事は事實だが、日清戰爭の際程に複雜廣汎ではなかつたらしい。實際、日清戰爭では、その勝敗の結果に對して、諸外國も左程の關心を持たなかつたらしいが、日露戰爭では、日本が勝つて大陸に足場を得るといふ事よりも、ロシヤが勝つて太平洋に進出する事を嫌ふ國々が多かつたので、陽に陰にさま〴〵の助力も來、邪魔も入つたといふ事である。從つて、日露戰爭前までは「東洋の日本」であつたものが、その戰爭後には、明かに「世界の日本」となり、それを一方ではうるさく感じながらも他の一方では誇りとするやうにまで國民の自覺もしくは自尊心が高まつたのは當然である。

戰爭の損害は大きくても、豫期した償金は入らなくても、戰勝國の景氣はすばらしいもので、產業は興こり、貿易は盛んになり、新らしい學問も教育も文學も藝術も、世界の各地からこの國めがけて洪水のやうに押入つて來た。

「東西古今の　文化の潮

一つに渦巻く　大島國の……」

これは、私などより一年前に、早稲田の文科を卒業した相馬御風君の作「早稲田大學校歌」の一節であるが、誇張でも虚飾でもなく、日露戰後のわが國の思想界乃至文藝界の光景を歌つて最も當を得たものであつた。

三　天才出現の豫言

その頃（日露戰爭當時）島村抱月先生はまだ歐洲留學中で、私達早稲田の文科生の崇拜の的となつてゐたのは坪内逍遙先生だつた。學校では、先生からシエークスピヤの戲曲の講義やマアデン博士の文學論などを教はつてゐたが、先生のお宅へ伺つて個人的の指導をして頂く程の勇氣を私は持たず、わづかに、先輩片上伸君、相馬御風君などを通して、先生の片言隻語を珍重してゐたのに過ぎなかつた。

「先頃、坪内先生のところをお訪ねすると、日本も完全に露國と戰ひ勝つた、今後の國運の發展は刮目するに足るものがあらう、と同時に、文學藝術の方面も前古未曾有の隆盛期に入り、大天才が出現するといふ事も期待されると仰しやつた。例の先生の博引旁證で、殊にイギリスのエリサベサンエージなどを例に取つて、しきりにそんな事を言はれてゐた。その大天才が、今日の青少年の間に潛んでゐないとすると、ちやうど今頃生れた赤兒などの間にあるかも知れない、などとも言つてをられた。」

或時、私達は片上君からそんな話を聞いて、字義通りに、眼を見張り、胸を躍らせた。「天才」といふ言葉程、當時の文學青年、殊に私などの精神を鼓舞し、興奮させたものはなかつた。

それより半年ばかり前に、（多分さうだつたらうと思ふ、）早稲田の大講堂で、坪内先生のお顏やお姿を初めて見、先生の『千載一遇の機』と題する科外講演を初めて聞いて、日露戰爭が日本國民の物質生活、並に精神生活に與ふる大影

響を考へさせられた事などを思ひ浮べて、私はこの片上君によつて傳へられた『天才の出現』に關する先生の豫言を一層意味深く感じたのだつた。

その頃の文學青年と言へば、大抵晚翠や藤村のロマンチックな詩、鐵幹や晶子のロマンチックな歌、鏡花や風葉のロマンチックの小說を、愛誦し、熱讀してをり、これを文壇的に言ふならば、樗牛も、紅葉も死んではゐたけれども、硯友社派の勢力はなほなか〳〵盛んであつて、批評に於ても、創作に於ても、熱情や、空想や、神祕や、幽玄や、艶麗や、豐富や、――一括し天才的要求が要求され尊重されてゐた。

これより凡そ二十年前に、坪內先生は『小說神髓』を出し、二葉亭四迷は『浮雲』を著はして、わが國の文學に寫實主義の大道を標示し、その一路に精進するともがらもなく、やはり同じ頃から文壇的發途をなした硯友社一派も大體に於て寫實的の脈を辿つて來、一葉の如き、柳浪の如き寫實主義の大家も現はれ、子規の如き、虛子の如き寫生の文の唱道者も見え、天外の如き、荷風の如きゾライズムの信奉者も無いではなかつたが、日露戰爭が終つた後でもまだ、大方の作家や批評家か眞に舊套を脫し得なかつたといふ事は、時代の指導者を以て自ら任じ、他もまた許してゐたであらうあの坪內博士すらが、熱心に『天才の出現』を豫言して他念なかつたのでも知れるであらう。

私の如き意氣地のない人間も、そのやうな刺戟的の言葉を聞くと、ひそかに考へたものである。

「自分にも眞の天才があつて、この機に乘じて大いに活動したなら……」

四　自然主義運動の諸家

あの頃の坪內先生の『天才出現の豫言』は、或意味に於ても當つてゐたが、他の意味に於ては當つてゐなかつた、と今日の私は考へる。

先生が『大天才』と言つたのは、恐らく、ゲーテとか、シエクスピヤとか、近松、西鶴とか、トルストイとかいふ風の、時代をも國境をも超越する文學上の大人物を意味したのであらう。さうだとすると、日露戰後直ぐにはそのやうな大人物はわが國に現れなかつた。けれども、もしも、一國一時代の精神氣魄を代表するやうな人物を『天才』と言ふ事が出來、それが先生の意味するものとさして隔たつてゐないならば、そのやうな人物はあの戰爭前から既にわが國にあつたのだつた。

例へば、田山花袋、國木田獨歩、島崎藤村、島村抱月、長谷川天溪、正宗白鳥、岩野泡鳴等を以て、古今に儔すくなき天才だとするならば、誰しも失笑するであらうが、かれ等を以て、各その才分は異なり、性格も違つてはをるけれども、日露戰後の日本の時代精神を代表する人物と見る時には、大方の人々が首肯するに違ひない。かれ等はまさしくあの時代を代表した。或個人が時代を代表するとは、その個人がその時代の精神を享けて現はれたといふ意味にもなるし、その個人がその時代を指導するといふ意味にもなる。

天才とは何であるか？　定義はそれを下す人によつてさま〴〵に異なるであらうが、人間が自然を代表し、個人が社會を指導するやうな場合に、その人間の才能、その個人の力量に對して命ぜられる名ではあるまいか？　もしこの私の解釋が妥當であるならば、前記の諸家は悉く天才と言つて然るべきであらう。ゲーテだとかシエークピヤだとかと比較する場合には、たゞそれ〴〵の器量の大小が問題となるに過ぎまい。

坪内先生の豫言は、或は日露戰後の日本の時代精神が或一個の人間に依つてのみ代表せらるゝといふ意味だつたかも知れぬが、歷史はいつも同じ事を繰返すものではなく、日本の明治四十年代は英國のエリサベザンエージと同じわけには行かない。昔はたつた一人に現はれたものも、今では多數の人に現はれる。殊に明治四十年代の自然主義運動は、戰勝の夢も破れ、實生活の壓迫から國家主義の迷蒙を次第に脫却しかけた人々によつて起こされたその運動は、西洋風の

デモクラシイの前徵とも見られる運動なので、天才の型も餘程非英雄的になつてゐたのである。

これを別の言葉で言ふならば、坪內先生の豫言した『天才』は卽ち『自然主義』で、その主義の運動にたづさはつたおもな人々は『天才』その物ではなくても、すくなくともその『天才』の分擔者だつたのである。そのやうな意味に於て、先生の豫言は適中した、と私は考へるのである。

さて、前揭の自然主義運動の鬪士達の業績に就いては、こゝに細說する餘裕を持たないが、かれ等はヨオロッパの科學的實證的の自然主義を文學上に採用しながらも、それと同時にあちら發達した社會主義を殆んど考慮せずに（その頃の日本の思想界、否、社會狀態が全般的にはまだそれ程に進んでゐなかつたからである。）何の一人を取揚げて觀察しても、多く、個人主義的の傾向に終始した事を指摘せねばならぬ。これわが國の自然主義運動が、西洋のそれとよほど異なつて、むしろロマンチック運動の變形とも思はれる所以である。

その後、凡そ二十年を經過した今日、文壇の人も漸く社會と文藝との關係の密接なるべきを唱道するやうになつた。

（五月十八日）

自然主義當時

上司小劍

自然主義の勃興當時、私は、小說なんぞ書いてもゐなかつたし、書かうといふ氣もなかつた。たゞ、讀者として、その前から硯友社一派の文學には慊らない思ひがしてゐた。と言つても、未だ何の考へも定まらない青年時代で、當時の青年には今日の青年のやうに早熟の秀才も少く、一般の空氣が、そういふ風である上に、私は又とりわけて晩熟(?)の方だつたから、別に文藝なぞに對して、自分の確な物指しを持つてゐるわけではなかつた。たゞ、自然主義は社會主義と殆ど時を同じくして、日本の思想界及び文藝界に浮かび出たから、社會主義を珍らしく思ふやうに、自然主義をも珍らしく思つて、ちよい〱その方の論文なり、小說なりを讀んだ。然しそれは、もうずつと後で、私の青年時代を過ぎてゐた。

その當時說かれた社會主義といふものは、極めて雜駁なもので、プルードンやスチルネルの無政府主義があるかと思へば、マルクスがあつたり、エンゲルスがあつたり、そうかと思ふと、クロポトキンも持つて來る。甚だしきは社會主義に反對のトルストイまでも擔ぎ出して、社會主義の宣傳に用ひるといふ風であつた。たゞ、その時の權力階級に反抗、若しくは權力階級を慊がらざる種類のものならば、何でもかんでも持つて來て、社會主義の宣傳に供するといふ風であつた。

之に反して、自然主義は、そんな雜駁なものでなく、無論、今日から研究してアラ搜しをやれば、可笑しな事もない

ではなからうが、社會主義の宣傳に比べて、自然主義はじつと眞直ぐな軌道に乘つて、そう脫線する事もなく進んで來たやうだ。私は社會主義のものでは、マルクスとエンゲルスとの共同宣言のやうなものを初めて讀んだし、自然主義の作物では、田山花袋氏の「蒲團」を眞先に讀んだやうに憶えてゐる。どちらも、その當時の私にとつては、珍らしいものであつた。それから此は社會主義ではなく、無論自然主義でもないが、トルストイの日露戰爭論を非常に面白く讀んだ事を憶えてゐる。

私は、少年の頃、近所の



前列右より犬溪・花袋・白鳥・藤村・秋江・晁
後列二番目星湖・樗陰・利彦・恒友・生馬・勝彌・薫諸氏

＊老宗匠から俳句を教はつて、その方に大分趣味を持つてゐたが、どうも、段々年が經つと月並宗匠の俗惡な俳句が嫌になり、それかといつて、尾崎紅葉氏の造花のやうな、綺麗事の俳句にも嫌氣がすのし、俳句といふものが大いに嫌になつてゐた時、正岡子規氏の蕪村張りの俳句が世の中にある事を知つて、大いにそれが好きになつた。これは自然主義の勃興より少し前の事のやうであるが、俳句界の此の革新は、文藝の上の自然主義の勃興と切り離しては考へられないやうに思

つてゐる。

田山花袋氏の「蒲團」に次いでは、島崎藤村氏の「破戒」を讀んだが、あれば純自然主義の作品か何うか、私は今なほ、それを疑つてゐる。無論、それによつて「破戒」の價値を上下するのではないが、一體、島崎氏には、よく言へば、始から自然主義以上に突き抜けた所があると共に、後から出た自然主義の作家、例へば正宗白鳥氏の如きに較べると、キビ〱した所がなくて、ぼうつとした點があるやうに思ふ。そこが島崎氏の大きい所で、元來が詩人出身だから、一つ〱珠を磨くやうな態度で作品を發表する所は、他の自然主義作家の荒削りな作品とは、大分違うのであらう。

私は、どつちかと言へば、文章の彫琢されてあるのが好きで、自然主義には共鳴したが、文章の技巧に重きを置かぬといふ所には不贊成であつた。然し此の文章を巧く書くといふ事は、その人の素質にもよるし、天分手腕といふ事にも大いに關係があるけれども、とにかく文章が巧くなるのには相當の年月を要すので、自然主義勃興時代に新進作家の文章が拙かつた如く、今日でも又新進作家は概して文章が拙い。プロレタリア作家など、言はれてゐる人などには、殊にひどい文章がある。

まあ斯ういふ次第で、自然主義全盛當時、その風潮に捲き込まれながらも、無論慊らない點を多く感じてゐた。唯、社會主義が、兎や角言はれながらも、資本主義制度の弱點をば充分に暴露して見せて呉れたのと同様、自然主義が、現實暴露の悲哀を充分に味はせて呉れた事とは、此の二つの主義主張の殘して行つた大きな波のうねりとも見るべきものであらう。私の自然主義全盛時代に受けた影響は、先づ、此のうねりの餘波位のものであらう。

自然主義勃興時代の諸作家

白石實三

明治三十八年の夏、地方の中學を出たばかりの私は、はじめて、牛込北山伏町のお宅に田山花袋先生をたづねた。その頃からひきつゞいて四五年間ちやうど自然主義時代の文壇のことを巨細に記入した日誌が、今、手許にないので、以下の記述に多少の誤りがあるかも知れないが、たしか三十八年の七月で、日露戰爭が終結したばかりの時、市中は日比谷の燒打ちで、物情騷然たる際だつた。

靑年が小說の習作をするのにもまだペンなどは用ひない當時で、毛筆で原稿紙へ書いた短篇を持つてゆくと、それでも先生は、せはしい中を讀んでくれて、作家としての素質などについて話された。

『この中に男女の嫉妬を書いてあるのが、面白いね。それでこれまで誰れのものを讀んでゐたか、噓でなく、ほんとのことを言つてくれたまへ』

そこで私は正直に（實は仕方なしに）、露伴、柳浪、鏡花といふやうな名をあげた。

『ところが、その鏡花の作品といふものが實はよくないのだ。柳浪だつて作り物だよ、人情小說だよ、露伴の理想もいけないね』

あたまからさうやられた。まだ二十歲前の當時の文學靑年たる私どもには、その言葉は、實に驚きだつた。なぜなら

當時、鏡花の文章の愛好者だつた私たちは、早稻田の學窓においても、長田幹彦君などゝ、鏡花の『白羽箭』や『風流線』を讃美したり、近松の『曾根崎心中』の道行をを諳誦して喜ぶやうな時代だつたから

小杉天外氏の『魔風戀風』が非常な評判で、詩では藤村、泣菫、ことに泣菫氏の『公孫樹』が愛誦されてゐた。若い者は、それらの詩によつて聲を與へられたやうに、道を歩きながらも『公孫樹』の一節や晶子の作歌を歌つた。

小杉天外氏については、田山先生はいはれた。

『さすがにゾラを學んだだけに、スケッチの氣分も出てゐるが、やはり空想が勝ちすぎていけないね。それから會話も多すぎる、人間のほんとの日常生活といふものをよく見てみたまへ、默つてゐる時が多いか、しやべつてゐる時が多いか……』

さういはれて、私は、貸された二葉亭譯の『浮草』の切抜きを携へて歸つたのであつた。

後から考へると、その頃の先生は、例の『蒲團』に書かれたやうな戀愛事件の苦しみで、ひどく寂しさうであつた。北山伏町のお宅の後は酒井邸で、屋敷の樹の夜風に揉まれる音をきゝながら、薄暗い裏座敷で、外の秋雨を見つめたまゝ默つて暗い眼つきをされてゐたこともある。私は一週一度づゝ原稿をもつてそこへ通つて、自然主義の話を聞いた。

作家の批評と大陸文學の、當時にあつてはまつたく新鮮なめづらしい話ばかりであつた。

『風葉？　うん、小栗君も受感性など强くつていゝけれど、どうも文章がうますぎる。文章のために、ひきづられてゐる……僕のやうな無技巧でもこまるけれど……』

風葉氏は、その頃、矢來にゐられたらしい。後に名高かつた戸塚御殿へ移られる前で、『讀賣』へ書かれた『青春』は『魔風戀風』についでの評判で、『戀慕流し』以來の盛名はます〳〵あがり、以後、二三年間はたしかに自然主義文學の頭目たる觀をなしたのであつた。

田山先生の批評もちよつと首肯しかねるほど、風葉氏の作品は聲望を得てゐた。中で、先生の推賞してゐたのは『十七八』だつた。交誼はかなり親しかつたらしく、ある晩、私がゆくと、先生の玄關にゐた鳴海要吉君が出て、『今日は小栗さんが來て、醉つぱらつてしまつたから、だめです。僕と話しませう』さういつて、鳴海君に外へ連れ出されたことがある。鳴海君はその頃『うらぶる』とか『犧牲』とか號して、島崎さんの門下であつたが、先生が島崎さんから托されてゐたのだつた。島崎さんの熱烈なる愛慕者で、私はこの人を通じて、島崎さんが信州小諸ですでに大きな異色のある大作に取りかゝつてゐることを聞いた。

が、なんといつても、先生のところで一番話題に上つたのは、國木田獨歩氏だつた。西本波太氏の雜誌『趣味』がまだ出ず、『中央公論』の創作欄が活躍をはじめない當時、獨歩氏の『新古文林』は、私どもの愛讀した殆んど唯一の雜誌だつた。窪田空穂、水野葉舟、それから柳川春葉門下の三津木春影などいふ人が、同誌に書いてゐた。

ある晩、遊びに行つてゐると、『吉江です』といつて、若い洋服の方が、『新古文林』のために、談話筆記を取りに來られた。吉江孤雁氏で、まだ學校を出たばかりで、早稻田中學かの教師をしてゐられたやうだつたが、せはしい中に、獨歩や風葉氏の消息などが、先生との間に話し交された。

獨歩氏の『獨歩集』が世に出たのは、三十八年の夏だつた。まことにさびしい出版だつた。あの粗末な濃紫の紙表紙の本が、神樂坂の書店の店頭に積まれても、若い者は手に取らうともしなかつた。讀書界はまだ『不如歸』『思ひ出の記』の全盛時代だつた。

『獨歩集』の自序で、作者が『人氣』といふてとをひどく氣にかけてゐるのも、蘆花氏などに對する反抗ではないかと思はれたほど、反響のない出版のやうに思はれた。卷首には、『予はこの小著を友人田山花袋君の机下に獻ず、君は予が

最初の製作を勵ましたる人』といふやうなデディケイシャンがあつて、それが私どもの田山先生に對する信望の情をふかめて行つた。

森鷗外氏の『審美新說』に引かれた外國諸作品の解說、それに當時ではまつたく耳新しいツルゲネエフ、モウパヽサンをはじめ、イプセン、ダヌンチオ、フロオベル、ドストエフスキイ、ズーデルマン、それからストリンドベルグの『父』ハウプトマンの『寂しき人々』、バルザックの話などが、行くたびに先生の話頭に上つた。

ゴンクール、それからユイスマンの『途上』三部作、ホルツの徹底自然主義、フレンセンの農民小說あたりまでも、漁られてゐたらしい。

『ロチの氷島の漁夫はロマンティクだが、面白い。ちよつと德富蘆花といつた感じだね、日本にもあんな作家が一人ぐらゐ出てもいゝと思ふね』

ローデンバッハの『廢都ブルウジエ』を示されて、

『これは蒲原（有明）君から借りたんだが、シンボリカルの作品だね、面白い讀んでみたまへ』

『ユイスマンを岩野（泡鳴）に貸して質に置かれてしまつた』

『僕はアーサア・シモンスの象徵主義は、長谷川君（天溪）に借りて讀んだ』

大陸文學の話と、書の話は實によく話題によつた。早稻田で英文學の講義を聽いてゐて、鷗外先生の書かれたものに親しみのなかつた私どもには、すべてが耳新しい作家作品であつた。私たちはあわてゝ上田敏氏の『海外文學思潮の紹介』を讀んだり、『明星』をのぞいたりした。戸川秋骨氏あたりのドオデエの飜譯まで漁つて讀んだ。

そして、島村抱月先生が英國から歸朝されると共に、期年ならずして早稻田でも、英語を通じて大陸文學の研究が旺盛になつたのである。

風葉氏は、さういふ田山先生の話から、得たところがあるらしい。現に先生のところから借りて行つたのではないかと思はれる『浮草』の一節やそれから『あひゞき』の一節を粉本にして書いたらしい箇所が『青春』にもある。『雲間からさかしげに澄みて見える人の眼のやうな青空』そんな『あひゞき』の字句は、獨歩をはじめ當時の自然派の諸作品には、よく引用されてゐる。一流の作家が、ツルゲネエフの飜譯に名を署して、それを創作として大雜誌の卷頭にかゝげた時代たつた。昇曙夢氏の處女飜譯『ネエジンの草場』（？）あたりがあらはれるまで、そんなことが行はれた。

『田山は俺の教師だ。だが、頭でつかちで、腕が伴はない』風葉氏が、どこかでそんな口吻を漏らしたといふことを、私は間接にきいた。

『中年の戀』といふことが、もうその一派でさかんにいはれてゐて、たしか『戀ざめ』であつたか、風葉氏がその材料に手を着けようとした時、先生は一言いはれた。

『僕の話したやうなことを書くのかも知れない……』それきり、默られてしまつたが、まもなく『蒲團』が現はれたのである。

しかし、それはずつと後のことである。とにかく、自然主義勃興の當初においては、今から考へると異樣なほど、小栗風葉氏は活躍されてゐたのである。『おと娘』といふ短篇で、兄が弟の新婚の夜、嫉妬して、主人公の『自分はその翌朝ぐつすりと寢た』といふやうな結末も喜ばれたものであるし『ぐうたら女』『世間師』『耽溺』など、『中央公論』や『趣味』に發表されて、私どもはいまだにその全部の切拔きをもつてゐるほどである。萬朝報に連載された『天才』は、門下岡本靈華氏をモデルにしたといはれ、眞山青果、岡本靈華の名は、樂屋での評判が非常に高く恐れられてゐた。『戀ざめ』は日本新聞に連載され、たしか發賣禁止になつた作だが、當時、自然主義に對して世間の批難囂然たる中に

徳富蘇峰氏だけが

『あの作は非常に道徳的だ』と、批評されたといふことであつた。作者に倫理批判があつてこそ、あゝいふ醜汚な肉的事件が小説になるといふ意味であつたことゝ思はれる。さういふ風葉氏も、『耽溺』あたりから衰へ、『解脱』にいたつては、意氣込みは大したものだつたが、絢爛な文章も光彩を失つて來て、未完のまゝに、文壇をも去るやうになつてしまはれた。

徳田秋聲氏が『犧牲』や『出產』によつて、自然派文壇の圈内にはひつて行かれたのは、一二年後のことで、『新世帶』から『足迹』『黴』にいたつて手堅い地位を占められたが、最初の中は、柳川春葉氏の方が、純藝術家としても活躍されてゐたやうである。

さういへば、あの頃の人で、思ひ出さなければならない人も、かなりある。『あん火』『鴨』の短篇に露骨な性慾描寫をして、物議を起した佐藤紅綠氏、同じく『都會』で發賣禁止の厄にあつた生田葵山氏、三島霜川氏なども、かなり書かれた。

生田葵山氏が『新小說』や『新古文林』へ書かれた『和蘭皿』『想はれ人』などは、清新なハイカラな氣どつた筆で、私たち若い者は愛讀したものだつた。

『生田君がいはくさ』と、ある時、友の松原至文君がいつた『——今の作家で一番有望なのが俺で、花袋君が二番目だといふのさ！』

永井荷風氏が歸朝されて、『あめりか物語』が、相馬御風氏などによつて推讃され、『監獄署の裏』『祭の夜がたり』『冷笑』『祝盃』などの好短篇が續々公にされて、文壇の視聽を集めた時も、私は同じ畑から出て來た葵山氏のことが思はれてならなかつた。

松原至文氏は『文庫』の同人だつたが、下宿で會つて談論するたびに、新作家の文章を批難して止まなかつた。それが同氏一人でなく、當時の若いわれ〳〵には、共通の不滿でもあつた。獨歩の作集が俄かに持囃されるやうになつたのは第二集の『運命』からであるが、それでも、內容の價値そのものより、『女難』『正直者』あたりの肉慾描寫が、まづ喜ばれたのは、事實である。尤も、肉慾描寫は、獨歩のあの二作にはじまつたわけでなく、天外氏の作にもあり、島崎さんの『老孃』その他にもあるし、田山先生の『春潮』などにも見えるが、獨歩氏のやうにあゝ正面から率直に扱つたものではない。そんなところからも、獨歩氏の作品が讀まれて行つた點もある。

『獨歩も、文章があれぢや、なじめない』さういつた青年も多かつた。解らぬといはれては恥なので、幾何でも解くやうな氣持で、考へ〳〵讀む青年が多かつた。小說の讀み方も一變して行つた。

『惜むらくは獨歩の作には影がない』田山先生もさう評された。

これも後のことであるが、紅綠氏の性慾小說が問題になつた時、非難の聲が、むしろ自然派の作家側から放たれたやうに記憶する。後藤宙外氏が、『蒲團』を自分の主宰する『新小說』に載せておいて、それを告訴したのも事實だが、その後藤氏の『冷笑』といふのか、風俗壞亂で發賣禁止された時は、皮肉だといはれた。

これも後の四十一年頃のことだつたが、私は『文章世界』の訪問記者として、井上哲次郎博士とか高田早苗、澤柳政太郎といふやうな方を訪問すると、知名の人かいづれもすでに『文章世界』といふものを知つてゐて、殊に井上博士のごとき、當時も問題となつてゐた社會主義と自然主義とを對比し、特に自然主義作品の發賣禁止について堂々たる一家見を披瀝されたが、當時は永井荷風氏の『あめりか物語』『歡樂』をはじめ、禁止の厄にあつたものが多かつた。

鷗外先生の『ギタ・セクスアリス』（スバル所載）はかなり長いもので、かなり力をこめて書かれたものらしかつたが、禁止になつたものゝ中での大物で、作者が官にあつただけに、評判がやかましかつた。

島崎先生の『舊主人』は、それよりずつと前、三十五年の『新小説』に載つたもので、それが禁止されるに至つたのは、山路愛山氏が裏面から當路に對して建議やうのことをしたのだとの噂もあつた。

さて、かうして寛ろいだ氣持で、當時の見聞を思ひ出し〳〵書いて來ると、いひたいこともなか〳〵多く記述も混亂して來るが、もう一度前に戻つて、『破戒』が出ていよ〳〵自然主義文學ののろしがあがつたまでには、根底に底力のあるかなり長い準備があつた。それを作品の方面から見ると、島崎さんにはすでに『舊主人』『藁草履』『老孃』といふやうな短篇があるし、半年を費して書かれた『水彩畫家』も、『津輕海峽』も、つとめて氣分の眞實に即きモデルを借り、寫生から組み立てられたやうなところがある。獨歩の短篇集『武藏野』も、同じく自然主義萠芽時代の作集として、研究しなければならぬものであらう。

田山先生になると、『蒲團』までの間に主情主義の作品と自然主義作品とが交錯してゐる點が面白い。すなはち『ふるさと』(三十二年)の次に、『憶梅記』(三十三年)、『野の花』(三十四年)の次に『重右衛門の最後』(三十五年)、それから『梅屋の梅』(同年)の次に『女教師』(三十六年)『春潮』(同年)『秋晴』(三十九年)『少女病』『蒲團』(共に四十年)と展開してゆくのであつて、初期の出世作『ふるさと』『野の花』それから『梅屋の梅』は純然たるセンティメンタリズムの所産である。

『憶梅記』については、曾ていはれた。『僕の自然主義としてのほんとの作は、まあ、あの作あたりからはじまつたのだ』と。『女教師』は『水彩畫家』のやうに中年の戀愛を扱つたもので、『水彩畫家』『春潮』とともに、センティメンタリズムを脱しきらないところに、面白みがある。

獨歩もさうであるが、いふまでもなく、いづれも『詩から物語へ』轉ぜられた人だ。『蒲團』以後において、先生はこのセンティメンタリズムから脱せられた。

自然主義の提唱者としては、田山先生は『文庫』か何かで眞向から『私は自然主義を奉じてゐる』と談話筆記ではあつたらうが、冒頭から旗幟をあきらかに宣言されたことがあるが、その前、三十七年の『太陽』に寄せた『露骨なる描寫』および三十九年の『新潮』に載せた『事實の人生』などは、最もその態度を強く明らかにしたもので、『ありのまゝの事實』の『大膽露骨な描寫』を主張し、『正しき深い觀察と經驗の切要』を說き、ゴンクールの印象的手法を擧げ、主情主義と空想を排し、『活きた人生を深く見なければならぬ』と主張し、殊に從來の文章の型を打破せよと叫ぶあたりは、熱意激情、言外にほとばしつて、自然主義論の各要素は、あの二つの小論文に包含しつくされ、後の議論の源泉をなした觀がある。

　人物事件の平凡化も、排技巧論も、その中に明確に强調されてゐた。

『解決があるやうで解決がなく、結構があるやうで結構がないのが、自然だ。この大自然を再現したものが、まことの小說の結構だよ』

『小說は第二の自然の縮圖でなければならぬ。自然は無關心である。道德を沒し、社會を沒し、傳習を沒して、更に正しく道德を、社會を、傳習を顧みたものでなければならない』

『紅葉の技巧よりも一葉女史の判斷力をとる。正しく判斷するためには、實生活の渦中に入つては駄目だ。主觀的の同情よりも客觀的の觀察だ。卽かず離れずだ』

『作家は人生の從軍記者だ。傍觀者だ。フローベルの冷酷は、作家としては止むを得ない。』

『天才ほど賴りにならないものはない。誰も、自己の耳目と頭と胸にたよるほかはない。長い忍耐、下等八級から出直す覺悟が何より肝要だ。完全を求めないがよい』

ゆくたびに、私はさういふ强い言葉で敎へられた。同時にそれが先生の創作の態度でもあつた。短篇のコツといふこ

と、寫生といふこともよくいはれた。『破戒』は實際ノオトへスケッチして出來たものであらうが、先生は『僕は心へノオトする』とよくいはれた。先生の記憶のよいことは、曾遊の地の紀行文を書かれる時に、よくわかつた。『下等八級』といふことをしば〳〵口にされたが、自然主義運動も、やはり根柢的に第一歩から踏み出すといふ氣持から起つて行つた。その態度はなほ實に眞劍で、張りつめたもので、むしろ悲壯なものだつた。『血にあらずんば汗』といふ意氣込みでかゝつて行つた。硯友社の宿弊だつた代作などいふことはなかつた。『藝術のためには一切を棄てる。妻子をも棄て、家庭の破壞も仕方がない』暗い本能の壁といふやうな考を扱つた『艮』といふ作品は、發表當時、金子筑水氏などに、思想上非常な感動を與へたといふ話だつた。

當時「ライフ」といふ語がよく用ひられた。『考へる作品』といふことがよく言はれた。つまり小說が樂しむものでなくなつて、始めて意識的に實生活に結びついて行つたのであつた。それを的確に最も組織的に、よい頭で、噛んでふくめるやうに柔かにはつきりと、新味となつかしみのこもつた情理整つた文章で解說してくれたのが、島村抱月氏の自然主義に關する諸論文であつた。

英國から歸られた島村先生は、一二年後、早稲田の講壇でトルストイの輪講講義を始められた。『近代文學講義』とはいふものゝ、講壇での講義は、多く大陸文學に關したものばかりだつた。每時間の講義がすべて文壇の自然主義論を學術的に歸納し分析し、裏づけるやうな說ばかりであつた。

かの透徹した齒ぎれのよい美學の講義もすべてリアルといふことを基調にして、名高い『觀照の世界』のことが說かれたり、寫實主義と自然主義との別がはつきりいはれたり、『文藝と實行との間に橫はる一線』といふ言葉が用ひられたりした。ショペンハウエルの庭園論と自然主義を結びつけたのも、當時はまつたく耳新しい印象のふかい說だつた。

坪內先生もイブセンの廻輪講義を始められた。が、坪內先生が自然主義に對する肯定者でなかつたことはいふまでも

ない。文壇をあげて馬車馬のごとく盲目的に自然主義に突進するやうになつてからも、坪内先生は、むしろ沈默がちに愼重な考へぶかい態度をとられてゐたやうにも見える。それは鷗外先生も同樣で、自然主義全盛時代に『スバル』へ創作や戲曲、飜譯などを發表されながらも、ごく自由な捉はれない態度で、『あそび』などゝいふ作を發表された。自然主義の反對をいつた明るい輕い作もあつた。今から考へると、さすがに長い文壇的閱歷を經て來た兩先生の、あの頃の態度はえらかつたと思はれる。

私は一度、陸軍省の醫務局に鷗外先生を訪問した。某誌のために執筆を乞うと、

『今、書きたくない』といつて斷はられた『僕が今やたらに書くと、若いものに餌を投じるやうなものだからね。え？自然主義？ あれも長い眼で見てゐないとね……』

自然主義勃興當時に於いて、陣頭に立つた諸作家はやはりまだ若かつた。その若さから、あの反抗的氣分が湧いて行つたといふことは、否まれない。眞劍で、はげしかつた。したがつて、偏狹でもあつた。柳浪、鏡花といふやうな大物をはじめ、名高い作家が、一時に葬られて行つた。露伴氏でさへ、まつたく筆を絕たれてしまつた。後の夏目漱石氏の作品さへ、輕文學といふ眼で見てゐた。

『獨步集』が出た頃、文壇の淸新な團體として認められた自然主義派は、『破戒』が出るにおよんで、それを切つかけに一時に眞正面へ出て、まつたく文壇の主潮をなすにいたつたが、『破戒』の出た明治三十九年は、あだかも『早稻田文學』の再興されるあり、『文章世界』および『趣味』の新たに發刊されるあつてそれらがいづれも自然主義運動の展開に多大の寄與をしたことは、いふまでもない。

再興の『早稻田文學』は、すぐさま『破戒』の合評を試みた。漱石、藤村、獨步と三家の名は一時に宣傳られ、或は無戀愛小說だとか、ローカル・カラアとか、官能描寫だとか、いろ〳〵の言著が用ひられた。

『官能描寫つていふけれど、僕はずつと前からやつてゐるよ』小杉天外氏が、『早稻田文學』記者の問に答へて、さう豪語したことも、思ひ出される。

『破戒』の淸新な文章、句法、言葉ぐせといふものは、當時の若い者の文章に非常な影響をおよぼした。外國語の語法や、バイブルの譯語などを巧みに驅使された島崎先生の文章は、たしかに新鮮な好ましい感じもひゞきも快いものだつた。以後もよく新しい語法を創出されたもので、『往つたり來たりする』といふやうな動詞も、先生の作から廣またつた一例であるが、中村星湖氏の出世作『少年行』などにも、あの頃として、『破戒』の文章の影響があつたやうに記憶する。

漱石、藤村、獨步と三家の名はさかんに謳はれるが、田山先生の名はいはれない。その頃、先生はもう代々木に移つてゐて、當時玄關にゐた江馬修君が、

『先生の名前だけ出ないのが殘念だ……』などいつたのを、思出す。

『今に』……先生の强い自信は眼に見えたが、やはり默つて、さびしさうにしてゐられた。

が、遂にその時が來た。四十年の初秋、全力をあげて、一週間で、例の『蒲團』を書かれたのである。

『さすがに今度のは手答へがあつたと思つたね……』言葉すくなにさういはれたか、果然、豫期以上の問題を捲も起して、『早稻田文學』あたりの合評となり、翌年、同誌の推讃の辭となつて、多年の勞は酬はれることになつたのである。

風葉氏なども、『蒲團』は推賞した。

岩野泡鳴氏なども、

『うん、今度のはいゝ、センティメンタルでない』と、ある會で、はじめて稱讃した。

岩野氏の『神祕的半獸主義』や『新自然主義』その他、古神道や日本主義に關する論說は、なか〳〵難解で、讀むも

のにも骨が折れたが、自然兒さながらの傍若無人のあの態度は、當時の自然主義的空氣の中では、或ひは喝采され、痛快がられた。その無邪氣、眞率と露骨、人のよさは、到底憎めない人として、文壇の名物として、一部に喜ばれた。

鷗外先生の『ファウスト』が、上山草人氏等によつて上演された時、氏は、われ〱若い者の傍にづか〱と來て、

『君等はこんなものが面白いか……まるで傳說が、舞臺の上でごろ〱してゐるやうなものぢやないか』叱りつけるやうに、肩をそびやかしていはれた。

また、ある時の會の席上で、

『僕は今、痳病をやつてゐるんだ！』と、講演の壇上で大きな聲でどなつて、まづ若い者の膽をひしいだことがある。

『蒲團』や二葉亭の『平凡』が出る。白鳥・青果の二新作家があらはれる。明治四十年の文壇は、自然主義がまつたく文壇の主流と認められた事である。『並木』が出てテデル問題が騷がしくなつたのもこの年だつたし、秋聲氏にも『犧牲』の作があつた。一方夏目漱石氏も『草枕』を經てこの年『鶉籠』『虞美人草』などを書かれたが、それには餘裕派、低徊派などの名が附せられ、傍流といふふうに扱はれてゐた。

寫生といふ點から『ホトヽギス』一派と自然主義とは一脈相通じるところがあつて、高濱虚子氏が小說を書き出したのも、この年である。『煤烟』の作者森田草平、生田長江、『土』の作者長塚節、野上臼川、その他の小宮豐隆、安倍能成、阿部次郎諸氏も、その前後から書かれた人のやうに記憶する。

四十一年に入つては、『春』と『生』との二長篇が出た。長谷川天溪氏の『現實暴露の悲哀』が出て、『幻滅』の言葉が行はれて行つた。後藤宙外、桶口龍峽、中島孤島氏等は『新小說』によつて、非自然主義論で挑戰した。大町桂月氏などもそれに呼應した。講演會がひらかれた。

泡鳴氏も、有力な鬪將の一人だつた。

われ〱若い者の考へも、いふこともまつたく一變した。詩壇も變つた。われ〱は酒を被つて、自己の戀愛を解剖し、弄んだ。

ある時、一緒に街上を散歩してゐた若山牧水君が、こんな新作を示した。

『かゝる時聲はりあげて歌ふくせありき、哀しや今はそれも止みつる』

それよりも前、たしか四十年のはじめ、ある晩ゆくと、田山先生が、

『君、今月の小説をよく見たかね？　正宗白鳥は有望だね』、といはれて、雜誌『趣味』を示された。それに白鳥氏の出世作『塵埃』が載つてゐたのである。尤も、白鳥氏、秋江氏とも、以前から先生のところへ話しに來られたらしくはあつたが、白鳥氏の名に對して、從來とちがつた信望の感じを抱くやうになつたのは、この『塵埃』からであつた。

長田幹彦君は、その頃無二の親しい同級生で、よく『明星』方面の消情を傳へて來られたが、數日後、眼をかゞやかせて言つた。

『君、白鳥は有望だつてね、上田敏さんが褒めてたさうだよ』

が、松原重文君は首を振つて、『だが、白鳥はいかにも文章がまづい。あんなラフな技巧があるものか』と、憤慨した。

白鳥氏の第二作『玉突屋』は『太陽』に載つた。これは『破戒』がドストエフスキイの『罪と罰』を粉本にしたやうに、チエエホフの短篇から書いたのだなどゝ噂されたが、私たちは、『破戒』とも二作が、決してさうでないと議論した。『何處へ』『世間並』『泥人形』と、白鳥氏の聲名はいよ〱あがり。後進われ〱も愛讀措かなかつたものだが、白鳥氏の態度は、その頃から異色を放つてゐた。『僕の作は空想から取材してゐる』眞實萬能の文壇の空氣の中で、さう素つ氣なくいつてのけた態度は、勇敢で、小氣味よく感じられた。『僕には愛讀書はない。二度と讀み返したい氣になる

書はない。たゞ、ツルゲネエフの父と子だけは掛價なしに愛讀したらしい。あの作中のバザロフが、それほど好きだ』そんなことを氏がいつたのを覺えてゐる。島崎さんは、よほど好意を寄せてゐられたらしい。

眞山青果氏が『塵埃』の後まもなく『新潮』に『南小泉村』を發表して、いよ〳〵名乘をあげた時は、すくなからず文壇の視聽を集らた。それから『第一者』『生れざりしならば』などの本領を發揮された大きな戯曲が『中央公論』あたりに發表された時は、氏は、得意であつたらう。

『先生』と風葉氏を指して『今は風葉、青果の時代ですが、まもなく青果、風葉の順になりますよ』醉つてそんなことをいつたとも傳へられた。知名の作家が、『雜糞』あつかひを受けた。

白鳥氏、青果氏が、花々しい大きなスタアとして『早稻田文學』に相並んで新作を發表した頃、近松秋江氏の名も、白鳥氏と共によく想起されたものである。同氏のトルストイの飜譯、それから『食後』『八月の末』あたりの短篇もしんみり讀ませたが氏のものでは後の『文壇無駄話』が呼び物だつた。

片上伸と共に論客としての相馬御風氏の聲望も高かつたが、氏は風葉氏一派に近く、創作をも書かれた。小内山薫氏が『色の褪めたる女』などに示された才氣、氏の創刊の『新思潮』に發表されたイブセン研究會評會の筆記などは、いつも敎へられた。秋川雨雀が、同誌にたづさはつてゐて、短篇を發表された。

さういへば、龍土會といふものもあつた。『新古文林』以來、『あらゝぎ』から『微温』あたりに至る水野葉舟氏の活躍、窪田空穗氏のこと、吉江孤雁氏の自然描寫、『少年行』以後の中村星湖氏の活躍、前田晁氏、特に中澤臨川氏など、名をあげて書かなければならぬ人は、かなり多い。

河上博士が『讀賣』に發表した人生問題についての公開書とか、當時の見神論者の一人齋木仙醉氏のこと、特に幸德秋水、大杉榮氏など、自然主義に連關しても思ひ出すことが多いが、豫定の枚數も近づいたので、先を急ぐ。

同じ『新古文林』や『新小説』に、小川未明氏の『笛の聲』だの『霰と霙』だのといふ短かいものを發表されたのも、久しいことだ。當初は坪内先生の祕藏だといふ評判で、非常に注目されてゐた。自然主義全盛時代の氏の態度を考へ返すと、長い間ほんとうによくも屈せず精進された來たものだと、心からの敬意も寄せられる。

坪内先生の文藝協會が解散されたのは、暗默の間に、この自然主義的思潮が若い者に非常に力づよく働いてゐたのではないかと思ふ。『明星』の若い同人が反旗をひるがへして、『スバル』を起したいきつさつも、ある時代の出來事として、意味が出て來る。北原白秋、木下杢太郎、吉井勇、長田氏兄弟などが、その若い仲間だつた。

まだ二葉亭といふ大きな人を書殘してゐる。われ〳〵若輩の知つてゐる二葉亭は、『うき草』以後、長い間を經て、ちやうど日露戰爭中、『新小説』に『刈心』といふ匿名で、ガルシンの『露助の妻』や、やはり戰爭に取材した『四間間』を發表された頃からであるが、この頃、やはり二葉亭が、何とかいふ匿名で『讀賣』に、坪内先生の『かぐや姫』の、あまりに絢爛にすぎる文章を批難し、內容の理想について論難したことは、文壇のかくれた逸話として殘されてゐる。『むかしの人』『ふさぎの蟲』から、再び文壇の正面にあらはれた二葉亭の『血笑記』（趣味所載）などは、若いものが競つて讀んだが、創作の『其の面影』や『平凡』は、實をいふと、若いわれ〳〵の氣分にはぴつたり來なかつた。殊に『其の面影』では古い文章が眼ざはりで、作の態度にもあきたらなかつた。

獨歩の死についで、二葉亭の客死された明治四十二年は、自然主義も盛りの頂上にのぼりつめた年で、年末の『文章世界』では、『本年文壇の回顧』として、風葉氏など諸家の談を集めてゐたのを記憶するが、時代の機運はまつたく動いてゐた。

谷崎潤一郎氏の『刺青』は、その翌年に出た。『白樺』は四十四年に創刊され、萱野、無車、志賀、有島といふやうな名が、文壇の話頭に上つた。

自然主義的なる詩歌の發生

日夏耿之介

自然主義時代には主唱者にも攻撃者にも雙方に矛盾があつた。

島村抱月の自然主義を生ぬるいと云つた岩野泡鳴その人の「新自然主義」の自家撞着と前後矛盾との所論の大部分は抱月その人の未徹底性よりも、その思想の透徹を缺いてゐた事は衆目の視るところであつた。自然主義に反對した文藝革新會は、自然派的文藝理論の論理的矛盾を突いた點がいくらかあつたけれど、畢竟反對のために反對、自己存在のための反動思想皷吹に結果してしまつて何等文學史上に影響はない。

しかし、自然主義的なる文學と思索とに不滿と輕視と罵詈と批判とを加へたものは多かつた。文壇としては、若き青年文學者の文壇卽ち自然主義の世界であつたけれど旣成文壇と世間とからの抗言は免れなかつた事は當然である。不滿を表はすは中年讀書家と旣成作家のあるもので、輕視を浮べるは學者側と老大家の一團とで、罵詈を加へたは自然派に直接打倒せられた文學一派と世間一般の彌次馬連とで、批判を與へたのは公正の思想趣味の所有者である極めて少數の學者評家であつた。外に冷然とこれを無視した一派も少くなかつた。

その中で興味のあるは、森鷗外、上田敏、夏目漱石三人のこの派に對する態度であつた。鷗外の作品が自然派から遊戯的の一語で默殺又は排斥せられてしまつて、それに遉がの冷靜な鷗外も多少の憤懣と大部分の揶揄心とを感じて「あ

そび」に於ける眞實性と藝術性とを闡明した事は、冷笑的な『不思議な鏡』や、『あそび』や『ル・パルナス・アンビユラン』等の諸小品を見れば判る。約めて云へば、鷗外の態度は遊戲的で、その缺點は無情調にあるといふのが自然派側の意見であつたのだが、今日之れを見て、鷗外の藝術家態度を根柢から不眞面目であつたといふ者は、識見ある人の間には一人もなく、その作品に情趣がないといふ者は、鑑賞眼ある人の間には一人もない。當年の自然派論客の右の妄見は、自分の淺薄な觀察と無神經な味解力とに基くので、鷗外文の諷刺性を顧みる餘裕もなければ、その枯淡なる老成の情趣を味ふ神經もなかつたからで、當時のいはゆる早稻田派文士の通弊はヒユーマアを解する事が出來なかつた事で、それは、學閥の餘弊として官學に繼子扱ひせられてゐた處から來た色々の點で無餘裕狀態にゐた事情にも依るが、又一には前期早稻田文學の坪内博士のいはゆる沒理想的寫實主義精神を繼承する底意から極端に浪漫的作品を斥けるを以て能事足れりとした點にも基く。

しかし、自然派論客の幼稚な行論を認めるものは、同時に當時の鷗外の復活後の作品の大部分の價値著しからず、只ほんの小品物にしか過ぎなかつた事をも認めねばならず（鷗外小說の枯淡にして文章美の極致を示せる幽妙の佳品は後の『高瀨舟』一卷が代表する）反動文學者連の中の硯友社殘照の駄洒落れ好き（例へば文藝革新會の一人登張竹風が之れを代表する）と、時勢の急潮に遲れた陳套性（例へば島村抱月を漫罵した中島孤島が之れを代表する）と、舊浪漫派趣味的架空性の幼稚と姑息と不貽性と（例へば「帝國文學」を中心とする青年文士が之れを代表する）をも亦認めねばならぬ。しかも、この反自然派的態度に出た鷗外が、自然主義的なる詩歌の始祖であつたのは皮肉である。

上田敏は學究詩人の立場をとつてこの運動に最初は冷靜な態度をとり、公平な批判をさへ加へようとしてゐたに係はらず、騎虎の勢ひ猛なる若き最少日本自然派は、自己の文學上立場に對立する集團、「明星」及びその後身「スバル」、「三田文學」などに關係ふかき一人としてその文學上論述を必要以上に攻擊してやまなかつたから、流石に穩當を喜ぶ鑑賞

家柳村も、歐羅巴では三四十年前に時花つて廢れた文學上の一主義が、日本では今日榮えて而もそれが全部であるかの如く思惟してゐる無知の集團があると云つて自然派を揶揄した（四十年十月『趣味』）。之れを抱月が反駁してフランスで何十年前に流行しようが今の日本にとつては必然の存在理由があるから起つたと云つたのは至言で、御風も之れに同じでゐるが、柳村もほんの雜文中に無雜作に書いたものだから自己の眞意をつくしたものではなかつたのだが、洋行歸來後のかれがロマン・ローラン一派の文學の社會性を紹介し高調した事を考へても、卅九年の『藝文』鏡影錄で社會的關心を說いた事を考へても、この言にはゆきがゝりの感情が大分手傳つてゐたらしく思はれる。尤も上田敏の社會文學紹介は知識として文壇を肥沃した點は多かつたが、その人物に妥當な本質の行論として句々熱を含む迄に至らなかつたから主張としては非力に終つたは當然である。これは鑑賞文學者の自然の結果である。

最後に夏目漱石の態度は些か不徹底であつた。その作品が相當に見るべき程度に達しては居たが、實質價以上に今日迄評判され喧傳せられてやまぬのは、その感情趣味の日本的（寧ろ德川士人的儒林的）なると、知識で威めしく武裝した爲めと、スタイルの運命的にやゝ高級の通俗性を帶びてゐたためとに外ならぬ。その小說が、その門下の徒が高唱する程高價のものでない事は、識見ある者は一般讀者と雖も今日之れを悟り、文壇に於ては阿附や遠慮やその外の理由であまり云はぬが、これを兎に角云つたものに谷崎潤一郎一人だけある事を私は記憶にとどめてゐる。その漱石が、自分丈けは詩歌の既成形式として漸く當時過去のものとなつてゐた漢詩（それも和臭のつよい陳套詩）と俳句（それもホトトギス一派の束縛を出でぬ無獨創性の）とに晏如として安住しながら、上田敏の象徵詩を姑息因循の態度で揶揄したり西洋特に英國詩歌に對しては相當に研究あり興味を持ちながら、「讀まないから僕にはわからない。」と云ひつゝも新體詩に就ては「無理に窮窟な言葉の中に思想を篏めやうとしないでも、今少し自由に、遺憾なく、十分にセンテイメントを歌つて見られさうに思ひます。」（三十九年八月「早稻田文學」）と云つた言葉がその最も公平な一語で日常に於ては嘲笑

以外何もなかつた如き、又自然派文學に對する態度も、鷗外が自分から自己の性慾史「キタ・セクスアリス」を公けにして禁止せられたり、公々然と田山花袋を作中人物に引張り出して之れを俎上の魚として堂々嗤殺し去る如き活達の態度には出ず、恒に漱石は陰性で奥にひそんで冷罵してゐたにとどまるから、その冷罵の對象となつた自然派末派の愚昧と非論理とは當然冷罵に値ひしたもので冷罵は卽ち宜しいが、低徊趣味といふ自己の文學境致から則天去私といふ人生觀上の態度に辿りついた一文學者の他流派や他形式に對する態度としては不親切であり少くとも綿密なる眞摯を缺き、文學上の論述者としては跛足的であり片輪であつた。

が、之等三家はとにかく各の小世界を有した上級文士であつたから餘りの無思慮や無知を示さなかつたが、末流の自然派、反自然派の陋劣と無知とは際限なく甚しかつた事今日の末派文士の恰好なる先祖の觀がある。

自然派文學を唱へた中で、主唱者として唯一人島村抱月嶄然群を抜き、評家としては同感の立場に傾いた中澤臨川が著しく秀で、長谷川天溪、岩野泡鳴、田山花袋等の主張者は一は論理の粗笨、一は前後撞着、一は思索皆無に於て各抱月に劣り、生田長江は反自然派的立場にあつて自然派の論理の缺陷を突く事は出來たが、自分の自然主義文學作品そのものについての認識不足は蔽へなかつた。獨逸デカダン文學の冷嘲的史叙を試みた片山弧村は自然から不眞面目の評を受けたが、實は不眞面以上に自己の文學觀の不確立に基く、文學史家としての資格の皆無を暴露した、史料の俗解の見本を示したにすぎなかつた。抱月門下の天弦、御風、星湖三人の社論を見ても、天弦が何んとなく自然派と離れた心境條件を具備しながらも、その要求の一面に基いて論理の確實性を發揮したに反し、あとの二者は史的知識も乏しく文學論も碌にまとまらぬ所謂時論の範圍を出でなかつた。

「スバル」一派は論爭を避けて高踏したから論議は六號物以上に無いが、自然派末輩が自己の流派の作品は少年の手習草紙でも鬼や角論ふたに對し、この派の作品は全く默殺し、たまに口を挿めば全く同情なく理解なき冷罵を頭から加へ

た一例は、鷗外の推輓によつて出た木下杢太郎の小說小品に與へた態度を見れば一見明白である。漱石門下にあつては哲學出身の者は論理の組立てはうまいが、鑑賞味解が粗硬で評家としての一要件を缺き、青年作者にそのある者に作品は相當に卓れてゐたが推理に拙であり論文の體裁さへなさなかつた中に、公正な立場に在つた者は例へば安倍能成があり、偏狹にして排他的無知を發揮したものに例へば臼川野上豐一郎がある。自然派末期の頹廢から新傾向を誘發したものは、勿論かの硯友殘黨でなく、漱石門末でも亦なく（後者は批評的ではあつたが創造的でなかつたから）鷗外柳村を導者とするスバル文學の畑によつて海外歸來後の新感情を吐いた永井荷風であつた。

かう見て來ると、鷗外の文學史的重要が愈よ目立つて來る。藤村、晩翠のあとを受けて泣菫有明二家の作風が一代を風靡した頃から既に詩歌に於ける自然主義の要求があつて、抱月と御風は早稻田文學に之れを論じ、（四十年前期「早稻田文學」及び同年十一月「詩人」）「帝國文學」も固牢なる「アカネ」一派の國文學趣味を嗤つて之れに同じ（四十一年九月號及び十二月號）戰陣から歸つた鷗外は腰辨當の匿名で、三十九年初夏より「趣味」、『藝文』『明星』その他に自然主義的なる詩歌の習作を公けにして忽ち一群の青年詩人の感化さるるところとなつた。この傾向は汽關車を雅語でうたふ泣菫や大鋸ひきを格調詩で賦する有明にもその影響を與へ、日本自然派の頹唐主義は、小說に於ける暗黑描寫とともに詩歌に於ける小世紀末主義、小セイタニズムとなつたが、他の一面である現實直視直叙の三味主義は、古語雅語を避けて安易語より延いては日常語口語となり、想像世界の對境から、家常茶飯の詩材に移つた。櫻井天壇が獨逸象徵詩を紹介したのもこの時で天壇は弧村よりも親切であり綿密であり且同情的であつた。

四十年九月の『藝文』に掲げられた腰辨當の『朝の街』は、

朝あけ大路　しめやかに

立ち並ぶ店　まだ醒めず。
けはひびろびろ。

搏風檐壁を　いろどるや
塗繪廣告　繪看板
露にぞはゆる。

刹那ちりぼふ　ひと群の
素足はらうづ　破帽子
新聞くばり。

のごとく、詩材は街頭小景で、その直叙の間からわき昇る詩情の新鮮が當時の人目をひいたのであるが、言葉は嚴格な古文語の格式を守つてゐる。同年五月の作『雫』も同趣の作である。(石川啄木などは當時なほ『明星』の完全なる感化の下にあつた。)

寒き雨　電車を籠めつ。
ゆきかいに縱きしろへば

迸る青き火二つ。
人いきれくもるガラスを
まじろかでしばしまもりぬ。
窓面の雫小紋の
二つ三つ寄りては流る。
わが思そこはかとなく
浮び來るやがてぞ消ゆる。
鐸は鳴る神田須田町。

同じ趣の作に『三枚一錢』がある。

足早き角の怪、電車
さやぎつゝ來てはとどまる。
かねやすが門邊の辻。

降る乘る蜉蝣の群に
聳り立つ麥稈帽子。
何か爲る。汝壯漢。

籠のうちゆとりいでゝ呼ぶ。
「昨日の新聞三枚一錢。」
さやぎつゝ電車過ぎ行く。
「昨日の新聞三枚一錢。」

日常語使用の家常茶飯小景の直叙は、しば〳〵ヒューマアを主題とする。前の昨日の新聞に對するものに『都鳥』がある。

初夏の日暮。みどりの
ただ中に夕ばえ煉瓦
速かざるまらうどと立つ。
高鳴るや嘲る汽笛。

機關の不斷の鞭に
むちうたれはためき過ぐる
塗丹に經をゆづりて、
川の緯漕ぐわたし船。

房州と人呼ぶ聞きし
牙彫めくをぢ擢とりて
中流のゆふあげ潮を
皺みたる腕にしのぐ。

はや近しさんや棧橋。
水棹には芥まつはり、
浮木觸れ、水底草の
乞兒ぎぬちぎれ靡けり。

にび色の川淀水の
渦巻に、雌雄か、白鳥

並ぶ。こやさすらい人の
ふりし日の風流の記念。

舟人よ。あの鳥を見よ。
「はあ、ありやあかごめでがさあ。」
氣ちかきにおぢぬさま見よ。
「臭くつて食はれませんや。」

のごとく、

房州と人呼ぶ

云々では「房州」の呼名の感じがつよく出ないし。

牙彫めく

云々では象牙彫さながらの表情のといふ心持ちが、その簡明すぎる使用法のために、ともすれば看過されやすい。をぢ權とりてといふ語は、前半につながるをぢの二音語と權の音と不用意に韻を踏むので、反つて調子が混雜した上に印象に錯雜を來たす。詩句の用語は右のごとく文語それも極めて簡明を主とする正統文語で、その間に

「はあ、ありあかごめでがさあ。」

のやうな日常語が點綴される事は、硯友社時代の小說が文語の地の文の間に、日常語の會話を交へるとひとしく、歴史的に見れば、言文一致境に到るまでの文章の過渡期値である。當時上田敏は許して「單語は印象の強きを選び、節奏に

は大膽なる「跨」を用る，棹尾の一振に口語を挿み」(三十九年七月『藝苑』)と賞美したが、この評は兎角鑑賞家の陷り易い過褒であつた。

天壇は四十一年六月の『早稻田文學』にリリエンクロオンを紹介した。それは、

銀行家パラッツオ。主人は旅行に行つた。
よし。召使は外に出た。殘るは小猫一匹。
「今晩お出で。八時によ。淋しいわ。」
我は往つた。主人の室へ。戀の花園。
ソフアの上。嵐の如く、又やさしく，又恥も無く。
キスはキスを呼ぶ。「アー放して。」
「放せつて。」柔音と硬音。
朝。別離。夜の客は出でゆく。
歸りの路は長い。オーはでなソテよ。

のごとく小說的詩材を簡單に印象的に扱つた詩の譯文で、徹底自然派の客觀重視主義と記述描寫主義のわづらはしさに抗して起つたといふて印象的自然派のアルノー・ホルツを引き、當時一流の詩人と崇ばれたる氏すらもその習作を試みたとて右の譯文をその作例に引いたものである。

自然主義的なる詩は，畢竟この天壇のいはゆる印象的自然主義に朝宗して、用語に口語を使用して、――や……や――

等の小道具をさかんに使つてまで刹那的印象の自然主義的描寫に成功せんとしたが、この方面での大いなる詩業はなかつた。年少の詩人が此等の創作や譯詩に刺戟せられ、これを模倣して新作を公けにしたが、只形式を模したるにとどまり、必然性の上に樹つて個性ある詩想を表白したものは一つもなかつた。例へば三木露風や川路柳虹がそれである。

有明や泣菫もこれにつまづいてより再び起たず、露風や早稻田詩社の小詩人等もこれを模して何ものをも產せず、次第に他の詩風に移るか詩林を永久に去るかしてしまひ、畢竟本邦明治末期に於ける自然主義的なる詩歌は用語と取材と詩材の扱ひ方とに於て發生時代より幾分の進步は示したものの、史的重要價を持つ何ものをも殘さずに次なる傾向に推移して了つた。その次期は、大體散文壇と步調を合せた享樂主義的なる詩歌であるが、三十年代に於けるがごとき空靈的架空的舊浪漫主義詩でなくて、現實生活受用の一點に、自然派文學と異る一種のニオ・ロマンテイシズムの色調を帶びてをり、自然派文學を境にして、浪漫的なる詩歌に、大體に於て新舊の差別が生じたと解してよい。

戰爭と詩歌

河井醉茗

二十七八年戰役の時と、三十七八年戰役の時とは、その間僅に十年しか經てゐないが、詩歌發達の上には可なりの相違がある。二十七八年の頃にはまだ〳〵詩的意識の自覺が乏しかつたけれど、三十七八年の際には旣に象徵詩の發生期に入り、自由詩の潛勢力さへ窺知される時代になつてゐた。それら詩歌本位の批判考察はこの一文の主旨とする處でないから詳しくは述べないが、特に戰爭といふものに交渉のあつた詩歌だけに就いて述べて置きたい。一部分のことではあるが詩歌發達の上から見て除外することはできないのである。順序として先づ二十七八年戰役と詩歌に就いて一言する。

日淸戰役の興奮は何と云つても日本の文學に活氣を與へたことだけは確實である。當時の小說、詩歌俳句、漢詩、演劇、講談、民謠はいふに及ばず流行も、遊戲も、風俗も、一切が戰爭化した。戰爭に關した單行本は勿論、新聞の續きものも必ず一種だけは戰爭を題材とした。雜誌の內容にも評論創作凡てが戰爭もので埋まつてをり、また「日淸戰爭實記」や「日淸交戰錄」のやうな專門の雜誌も非常な賣行を示した。それら一般の現象に伴つて、詩歌の方面からいつても戰爭を題材にした作がむやみに行はれ、また相當に實力のある人も作つた。就中眼に着いたのは與謝野鐵幹氏（寬）で、新聞「二六」「日本」などに發表し、詩と共に短歌を試みたのが所謂新派勃興の最初の機緣となつたのである。そ

の集「東西南北」を一瞥すれば分るが氏の詩は格調（七五または五七）の整つたものであつて、歌はまた恐ろしく元氣に充ちてゐた。氏は風雲に乘じて渡韓を企てたほどで、もと〳〵文學の人であつても時代の刺戟にはそれほど動かされた。「東西南北」では詩より歌の方に後の革新を將來するだけの力は籠つてゐた。

戰役は一つの事件である。事件を詩に扱ふことから惹いて抒事詩の隆盛を來たし、また長篇が多く出た。鹽井雨江氏の「深山の美人」（五十七節）戸川殘花氏の「靈鷹高千穗」（二百節）など評判の作であつたが、更に長篇では井上德定といふ人の「高麗野の夜嵐」は三十五頁に涉る長篇であつた。

當時何んな人が多く詩を作つたか（無論戰役に關したものを含んで）その名を擧げてみると宮崎湖處子、與謝野鐵幹伊藤落葉、一柳芳風、太田玉茗、鹽井雨江、武島羽衣、大町桂月、小中村義象 湯淺吉郎、三木天遊、繁野天來等、まだ〳〵あるので、大抵の文章に關係ある人達は有名と無名とを問はず戰役に因んだ詩や歌を作つたものである。尾崎紅葉氏のやうな滅多に詩を作らない人が、「亞細亞の雲」といふのを作つてゐるなどがその一例だ。

また新聞紙上で一般から戰役を歌つた詩の募集をしたもので、「讀賣」「國民」などは賞を懸けて集めた、伊良子清白氏の「明月」が「國民」で一等に選まれてゐる。その他「二六」「日本」「每日」などみな戰爭の詩歌を載せたが、雜誌では「國民之友」「早稻田文學」「帝國文學」などを初め、一二篇は載せない雜誌はなかつた。これらの詩は戰役と云つても何ういふ詩題が多かつたか、二十七年末の「早稻田文學」誌上では之を左のやうに分類してゐる。

普通軍歌　兵氣の鼓舞を主とせるもの、陸戰、海戰、砲戰、拔刀隊、凱旋、進軍、退軍、兵士、日本刀、大和魂、日章旗等に關す

特殊戰鬪　成歡役、安城渡、平壤役、黃海役、九連城役、旅順役、威海衛攻擊、北京陷落等

戰場逸事　生死喇叭卒、玄武門先登、平壤の月、西京丸、赤城艦、靈鷹等

情　歌　重に遠征士卒が家族知己相思のもの、生別死別、空閨嘆、侯歸來等

戰捷歌　時々の戰捷歌の外に日本國民の意氣日本帝國の榮光等を歌へるもの

これでみても內容は略ぼ洞察されるのである。一時の興奮に乘じて作られる丈けに、藝術的香氣に乏しいのは已むを得ない、永く殘つて愛誦されるやうな作も殆どない。けれども詩歌的活氣は横溢してゐたので「一旦挫折せりし新體詩の如きも更に此際より新生氣を加へ來たり」と云ひ、「幾分か國人を若返らしめ、人心を陽氣ならしめ、企業的ならしめ・多望的ならしめし事は事實なるが如し」と「早稻田文學」は肯定した。また「青年文」の記者は戰爭と文學は正反對の地位に立つものだから、戰爭文學が起つても格別歡迎するに當らないといひ、軍歌も一時の流行熱に過ぎないと喝破した。「帝學文學」はその第一號で鐵幹と落葉を稱揚してゐるが概して戰爭の詩には多くを期待してゐない。「振古以來の國民的大活動に際會して國民的精神の欝勃として昂揚するにかり、滔々たる軍歌の終に一の大作を吾人に與へざりし」を怪しんだのは「太陽」記者であつた。而して「帝國文學」は更に一斷案を下していふ、「昨年」(二十七年)は英雋秀拔なる大詩人も出でず雄篇もあらはれざりしかど我が新體詩界の氣運の發達に關しては重大の影響を及ぼしたる年なり」と。

日清戰役は終つた。日本は戰捷國としての光榮に誇つた。詩も果して盛んになつた。三十年には民友社一派の「抒情詩」や藤村の「若菜集」が出て詩界に新生氣を與へ、詩も獨立の一分野を占めることになつた。考へてみるに戰役當時には作として優れたものこそ現はれなかつたが、どの評論家も詩を問題にした。つまらないとはいひながらも新しい形の詩を認めようとする氣持は誰にもあつたので、この刺戟が暗々裡に若い詩人達の胸を衝いて、二三年の後には新しい詩が興つたのである。

さて次は三十七八年戰役と詩、これは二十七八年戰役の時代と違ひ、既に象徵詩運動が起らんとし、詩人として立派

に立つ人さへ現はれてきた。それだけに日露戰爭といふやうな大きな舞臺の幕が開いても、それほどには燃かない。日清戰役の時のやうにあらゆる文化が武裝するといふことはない。勿論國民の興奮はあつた。けれども或る一部分にトルストイから來た非戰論や社會思想から來た戰爭否定論などが唱へられるほど自由になつてゐた。從つて日露戰役と詩とは直接の關係が少ない。換言すれば戰役を題材とした詩歌は前の時より遙に少なかつたのである。

森鷗外氏が陣中の徒然を慰める爲に作つた詩短歌及び少數の俳句等を集めて一册とした「うた日記」は、日露戰役に關して珍重すべき唯一の詩集である。大きな字で組んではあるが兎に角五百頁近くの作が出來たのは、さすがに身軍職にあつても藝術の人の心境は洞察されるのである。

今一つ三十七八年役の作で、その功果の意外にひろかつたことを感じさせるのは「こゝはお國を三百里、離れて遠き滿洲の」のうたの作者眞下飛泉郎氏の詩である。氏は京都の人で伊良子淸白氏等と交情があり「文庫」「よしあし草」などに詩や文章を發表してゐたやうに覺えてゐる。日露戰爭が酣なる頃、氏は例の「こゝはお國の……」の詩を作つた、それが一度作曲されて世間に普及すると京阪を中心として大人といはず子供といはずうたはないものはないほど汎く流布した。作は戰友、出征、露營、凱旋その他の諸篇があつて皆相當に長い。何故此の詩がそんなに迎へられたかといふに一切の古典より脫却して現代語の上に立ち、(父上母上いざさらば、私はいくさに參りますと云つたやうな)國語を自由に驅使したから直ちに何人の胸にも感動を與へ共鳴させたのである。地が京都であつた爲め關西地方に於て一層汎く行はれ、東京では却て後になつたが、猶ほ今でも子供達の間にはうたはれてゐる。戰爭を題材としたものには違ひないけれど、徒らに誇大豪壯な言葉で威勢をつけたものではなく、抒情味の籠つた詩で、而かも在來の唱歌や軍歌とちがひ何となく新しみのあるものとして大衆に喜ばれたのであつた。當時東京の詩界は有明氏泣菫氏などの象徵詩が持て囃されてゐた時に、國語の民衆的詩風を試みたのは確に破天荒の企圖であつた。日本近代詩の發達上、眞下氏の如きは隱

れたる功勞者として逸することは出來ないのである。

序に日露戰役中、私も戰爭に關した詩作があるから一言を添えて置きたい。それは私が「電報新聞」に居た關係上、新聞に戰爭を題材とした詩を載せた。また國木田獨歩氏が編輯してゐた「戰時畫報」に詩を呉れといふことで毎號一篇位は送つてゐた。それらの詩を集めて「劍影」といふ一冊の詩集を刊行した。併し私の「劍影」を讀んだ人があるならそれは宜しく原作と對照してもらうか、寧ろ「劍影」は棄却してもらひたい。(理由はその書を出版した書肆の主人がなまじひ詩ごゝろがあつて、私の作に無斷で手を入れてある。不熟また杜撰の手の入れ方で私は一見驚き入つて絶版を申込んだが、その時は既に幾册も殘つてゐなかつた。改版する機會もなく不愉快ながらそのまゝにして了つた。全く取り返しのつかぬ失敗であつた)。

日清役の時は二三年後に詩は獨立の地歩を占めるやうになつたのだが、日露の役では既に戰爭最中から詩が盛んで、三十七八九年の三年の間に渉つて(殊に八年)明治年間の生命ある詩集は續々刊行されてゐた。而して詩の氣運はまた一轉して文語より國語に、象徴詩より自由詩にと移つてきたのである。同じく戰爭の影響は受けたにしても藝術的文化が遙に進んでゐたのである。

短歌の方面では二十七八年後に與謝野氏が起つて「明星」を創め、晶子氏が現はれて新派の世界となつたが、三十七八年後には窪田空穗氏が現はれ、若山牧水氏が認められるやうになつて、また一新生面をひらいた。

以上は心覺えのまゝを書き流したので、不備の點も多々あるやうに思はれる。讀者の諒恕を乞ふ。

自然派全盛期の筆禍作

齋藤昌三

明治文學の爛熟はたしかに自然主義の勃興した、明治四十年前後から大正へかけての五六年間であつて、自然主義なるものは、眞にさへ描寫すれば誰にでも出來るといふ感念から、都鄙を通じて同人雜誌の發達は、嘗てない目覺ましさであつた。

曩に三十年前後は裸體畫の是非が旺んに論難されたこともあつたが、この四十年前後は眞を描く卽ち性慾もそのまゝに描寫することの是非が論ぜられた。その結果『自然主義』(天溪)や『新自然主義』(泡鳴)に對し『非自然主義』(宙外)なる論文集が相見えて、その所論を闘はした位で、眞の文藝批評も亦この時代から獨立的な立場を築いたのであつた。

一體この自然主義は、眞を寫せば誰にでも出來るといふ考へが、一般的な青年にも自然と湧いてゐたので、新作家の群出は雜誌の續出を來たした理由で、從つて自然主義そのものを誤解した者も少くはなかつたが、新しい文學丈に、いつも時代から遲れてゐる當局者としては、無論正しい自然派の作も誤つた自然派の作も區別がつかなかつた。その結果自然派とは春畫を文字で現はしたものと、その頃の警視廳あたりの一部の頭では解釋するに至つた。そこへ、ゾラやモウパッサン許りを借り來らぬとも、日本には西鶴といふものがあると、西鶴研究が再び擡頭し來つて、西鶴を日頃春本

視してゐた丈に、この春畫觀を一層當局の頭に深く喰ひ込ませるに至つた。西鶴物の禁止が新たに繰返されたのも當然の結果であつた。そこへ、更に四十三年には幸德一派の社會主義問題が加つて、あれこれで明治末期の文壇には時ならぬ多忙の禁止が續出したのであつた。

自分は近代の筆禍作品に就ては、既に一二の年表を作製して見たが、更に一度その內容に就ても詳細を研究して置き度いと思ひつゝ、今まで時間がなく、今回も折角思ひ立ちながら又浮腰で報告せねばならぬ次第をお詫びせねばならない。

そこで又不敢取事務的な報告になるのであるが、自然派の作品で最初の犧牲は、稍々溯つて三十四年の『破垣』(內田不知庵)、その翌年の『舊主人』(島崎藤村)が早い方で、海外作品としては同じく三十四年のジューマの作を譯した『椿姫』(長田秋濤)から、三十七年のゾラの作『勞働問題』(堺枯川)などから初つたもので、これ等を一表に拾つて見ると次の通りである。

內田不知庵	『破垣』	(三十四年)
島崎藤村	『舊主人』	(三十五年)
生田葵山	『富美子姬』	(三十九年)
同	『虛榮』前後二册	(四十年)
同	『都會』	(四十一年)
小栗風葉	『戀ざめ』	(同)
佐藤紅綠	『復讐』	(同)
篠原嶺葉	『怨の戀』後	(同)

無名氏	『女の文』	（同）
北尾花失	『暗流』	（同）
宮崎湖處子	『妻君の自白』	（四十二年）
篠原嶺葉	『新金色夜叉』	（同）
永井荷風	『ふらんす物語』	（同）
德田秋聲	『媒介者』	（同）
篠山吟葉	『筆屋の娘』	（同）
森鷗外	『魔睡』	（同）
同	『ヰタ、セクスアリス』	（同）
小栗風葉	『姉と妹』	（同）
高崎春月	『疊』	（同）
山口三郎	『寄寓』	（同）
永井荷風	『歡樂』	（同）
神崎沈鐘	『人間生活』	（同）
後藤宙外	『冷涙』	（同）
水野葉舟	『旅舍』	（四十三年）
同	『おみよ』	（同）
同	『陰』	（同）

長田秀雄	"Sophi madeleine"	（同）
黒瀬春吉	『沙漠』	（同）
神崎沈鐘	『親と子』	（同）
小山内薫	『笛』	（同）
同	『反古』	（同）
一宮瀧子	『をんな』	（同）
京村子	『靜夜』	（同）
影法師	『新戀夫憐』	（四十四年）
柴田流星	『東京の色』	（同）
同	『東京の女』	（同）
水野葉舟	『壁畫』	（同）
わらび山人	『男爵夫人』	（同）
鮫島大浪	『ある女の日記』	（同）
江南文三	『逢引』	（同）
佐藤紅緑	『三十八年』	（同）
村上里愁	『三笠山』（戯曲）	（同）
谷崎潤一郎	『飇風』	（同）
三上白夜	『薤露歌』	（四十五年）

伊庭孝	『接吻』	（同）
岩野泡鳴	『發展』	（同）
山川亮	『かくれんぼ』	（大正二年）
小笠原貞子	『濁血』	（同）
伊藤銀月	『女五人』	（同）
植松美佐男	『七人の戀』	（同）
長田幹彦	『醫師の娘』	（同）
空蕩々	『泥溝』	（同）
村田實	『女に欺かれた男の死』	（同）
加藤作次郎	『酒精漬』	（同）
平出修	『逆徒』	（同）
岸田劉生	『ある夫婦』	（同）
近松秋江	『疑惑』	（同）

右は創作として筆禍を求めた大體であるが、この内には前にも云つた通り、相當文壇的大家として重きを置かれる者にして尚、主義を感違ひして兎角性慾描寫にのみ走つたので、勢ひ當局から誤解を招くに至つたのもあつた。

自然主義の代表作は花袋の『蒲團』であることは今更いふまでもない。『蒲團』といへば自然主義の代名詞かの如くにも考へられた位で、餘り批評に上つた果は一部には『ふとん』は禁止になつたとまで噂さし合つた作であるが、事實はそんなことはない許りでなく、氏の作には後には（大正七年末）一囘の禁止もあつたが、自然派全盛期の作中には一度

もそんなことはなかつた。そして、自然派に極力反對した後藤宙外の長篇に、却つて禁止品を出すに至つたのは餘りに皮肉でもあつた。

木下尚江の作品の殆ど全部が、四十三年に禁止されたのは、自然派の影響ではなかつたが、いづれも二十版前後にも至つてゐた丈に、かなり一般の驚きは強かつた。

飜譯品で、自然主義の紹介にちかゝつた結果禁止となつたものは次の通りであつた。

長田秋濤	『椿　姫』	（三十四年）
堺　枯川	『勞働問題』	（三十七年）
同	『理想鄕』	（同　）
草野柴二	『モリエエル全集』中	（四十一年）
飯田旗軒	『巴　理』後	（同　）
春水生	『女の一代』	（四十二年）
ゴルギー	『遺傳の罪』	（同　）
三宅野花	『モウパッサン短篇傑作集』	（同　）
若杉三郎	『近代文學譯註叢書』二	（同　）
昇　曙夢	『深　淵』	（同　）
内田魯庵	『二人畫工』	（同　）
水島爾保布	『破壞の前』	（四十三年）
昇曙夢	『　淵　』	（同　）

本間久雄　『一意外』　(四十四年)
堺利彦　『赤裸の人』　(四十五年)
米川正夫　『婚約』其の他　(大正二年)
本間久　『女優ナナ』　(同)
水上齊　『マダム・ボワリー』　(同)

先づこの位なもので、外國作品としてほんとうに多く禁止されるやうになつたのは、大正三年以降であつた。

この外、この頃筆禍として異色のあるものは詩歌によるもので、花外の詩を除けば畢竟自然派によるものと見てもよいかと思ふ。即ち次の如きものである。

兒玉花外　『社會主義詩集』　(三十六年)
近藤元　『驕樂』　(四十二年)
雜誌　『自然と印象』　(四十三年)
矢澤孝子　『雞冠木』　(同)

茲に最も筆禍として特色のあるものは英文による外人の著で、三十八年に出版された"YOKOHAMA YARNS"なる、横濱の暗黒面を描いた四六版二百頁許りの作で、前後に例のないのみならず、矢張自然派の系統に屬すべきエピソードの一つである。(昭和二、五、一二、列車内にて)

自然主義と石川啄木

――彼の思想的展開の序説――

吉田孤羊

序言

一個の思想家として石川啄木を理解するには、彼の思想生活を、大體三期に分類して檢討するのが、最も便宜であり且つ穩當なやうである。その第一期ともいふべきものは、彼が生れながらのそれであつたロマンチシスト時代、第二期は、私がこゝで多少の考察を試みようとする自然主義時代、第三期は、實に啄木の聲價をして今日あらしめた社會主義の時代である。從來、啄木の思想を論じた人は文獻の上から見たゞけでも、十指を屈するに足るほどあるが、そのうち二三の人を除いては、往々にして、啄木がロマンチシズムから、一足飛びに社會主義の彼岸に、彼の思想生活の舟を漕ぎつけたかのやうな、よし、ロマンチシズムから、すばらしいハイジャンプをして社會主義に到達せぬまでも、このロマンチシズムと社會主義との間に介在した、彼の自然主義時代を、割に輕々と看過した憾みがないでもない。勿論、それには、彼の自然主義時代の期間が、非常に短かゝつたせいもあるには相違ないけれども。だが、何れにせよ、啄木の思想生活に於ける自然主義時代の地位は、決してしかく簡單に取り扱はるべく、あまりに重要な時代であつて、いはゞ後年、思想家としての啄木を育んだ大きな搖籃は、實にこの自然主義時代であつたと揚言しても、恐らく異論はないで

あらうと思ふ。私があえてこゝに禿筆を呵して、殊更に、他の論者の顧みぬがちな、その自然主義時代に重點を置いて、彼の思想生活の一端に觸れようとするのは、全く以上の意圖の發現に外ならないのである。

自然主義運動の輪廓

順序として、先づ、啄木が自然主義に觸れ初めた當時の、吾が文壇、乃至は思想界の情勢を、簡單にでもスケッチして置かなければならない。

「文學界」一派によつて起された、日本文壇のロマンチシズム運動が、明治三十四五年ころに入つて愈々下火になり、文藝界は全般的に氣力を失ひかけ、極くレベルの低い家庭小説などが、僅かに讀書界を潤してゐるに過ぎず、全く小波も立たぬ湖の水面のやうな沈靜狀態であつたが、然しこの靜かさは、やがて天地を震撼すべき大瀑布を前にして、一時淀んだ大河のそれであつた。

明治三十五年に入つてから、早くも永井荷風氏が「地獄の花」、翌年には小杉天外氏が「魔風戀風」その他の作品に自然主義的傾向を示し、その間、田山花袋、島崎藤村、國木田獨歩などの新星が、暗々裡にこの新潮流に棹さして、來るべき自然主義黄金時代の地盤が着々と用意されてゐた。三十五年には、評壇の巨人高山樗牛、翌年には、創作界の重鎭であり、技巧派の總元締であつた尾崎紅葉が、恰も既成文壇の衰亡を表徴するかのやうに相次いで世を去り、翌明治三十七年には、新興日本が死を賭して戰つた日露戰役が勃發し、その結果として近代文明の主要素といふべき科學的思想が、洪水の如く日東の一島國を洗ふて、理論的にも、實際的にも、新興自然主義運動勃興の氣運は彌が上にも高潮されて行つた。

越えて三十九年には、新歸朝の島村抱月が「早稻田文學」を再興し、田山花袋また「文章世界」を發刊して、共に自

然主義鼓吹の論陣を張つて理論的覺醒を促し、一方、自然主義のセオリイを裏づけた藤村の大作「破戒」などが生れ、新進作家としては、正宗白鳥、眞山青果、森田草平、秋田雨雀、吉江孤雁、中村星湖、上司小劍、水野葉舟、岩野泡鳴、德田秋聲の諸氏が續々として現はれ、明治四十一年に入つては、全く文藝界に於ける自然派完成期の觀があつた。

當時の啄木の私生活

さて翻つて、吾が石川啄木が、この燎原の火の勢ひで文壇を風靡してしまつた自然主義文學運動を、いかに眺め、いかに考察したか、それを述べる前に、先づ當時の啄木の私生活に、少しく觸れて見なければならない。

自然主義運動が、はつきりと文壇の上に確實な地位を占めた明治三十九年には、啄木が（二十一歳）彼の故郷である岩手縣岩手郡澁民村の小學校に、代用教員として、無垢の兒童を相手に教鞭をとつて居り、翌四十年の五月には、かの有名なストライキ事件から、學校を放逐されて北海道に渡り、主に新聞記者生活をつゞけながら、函館から札幌へ、札幌から小樽へ、小樽から更に北端の釧路へと、パンを求めて放浪したのであつた。

啄木が北海放浪の約一年は、文學に對する熱情も以前ほどではなくなり、稍々眼前の職業、とりわけ興味の廣汎な新聞記者としての生活に囚はれ、沒頭しがちになつてゐたかの感があつたが、それでも彼をして一個の詩人として育んでくれた新詩社とは手を切らず、「明星」誌上には、常に彼の詩や歌が絶えることはなかつた。然しながら、啄木にとつて新聞記者生活をやりながら文學をやるといふ、中途半端な煮えきらない生活には堪へらなれなかつたに相違ない。新聞記者か、文學か、彼は煩悶の末、遂に自分の本領を文學に見出した。明治四十年の九月二十日附で、友人岩崎氏に與へた書簡には、よくこの間の消息を傳へてゐる。

小生が今迄餘りに生活とか其他のために心を勞して、自分の本領を忘れむとして居た事を自分自身で自覺致し候、忘られたる文士？　否、自分で忘れむとしたる「誤れる天才」は今はかなき悔りより醒め申候、我が天職は矢張文學の外何物でもなかりき、此の「復活したる自覺」によつて如何なるものが期待されうるかは疑問とするも、兎も角小生自身は今再び新しき心地にかへり申候、――（啄木全集第三卷）――131――

啄木がこの翌年の一月釧路に入つてから、中央の文壇で日一日と舊勢力を驅逐しつゝある、自然主義の滿潮を望見して頻りに食指動き、パンと自己の野心（アムビション）のヂレンマに陷つて、悶々たる日を送るやうになつた。その年の三月になつてから、いよいよ矢も楯もたまらないほど創作慾の衝動と、自然主義運動の潮流に乘り出さんとするアムビションに驅り立てられ、「家族のパンの犧牲となつてこの地にとゞまるべきか」『上京してまつしぐらに文學生活に入るべきか」といふこの二途に迷ひ、新聞社にも出ず、煩悶の幾日かを送つた末、遂に上京を決心し、家族は一先づ函館なる親友宮崎郁雨氏の處に託して、單身上京することゝなつた。四月十七日附で小笠原迷宮氏に送つた書簡には、

新しき文學的生活。小生の運命を極度まで試驗する決心に候、これは四百四病の外の外、日本の涯に來ての『東京病』は骨も心も腐らさんと致候。――（啄木全集第三卷）――165――

と書き、「二日」として、「小生の向ふべき第一の路は、千思萬考の末、矢張小説の外なしと存居候」といつてゐる。同月二十八日、海路横濱から上京した啄木は、當時詩壇の總本家の觀あつた新詩社の與謝野寛氏を千駄ヶ谷に訪ね、その翌日、金田一京助氏の下宿してゐた本郷菊坂町の赤心館へ押かけて、金田一氏と同宿する約束ができ、一先づ東京生活の腰をそこに据えることになつた。越えて五月に入つてから、自然派小説のセオリイの上に立つて、つゞけざまに「病

院の窓」「母」「天鵞絨」等の短篇小説を脱稿したが、しかしこれらの小説は、いくら書いても雜誌に買つて貰ふことは愚か、發表するチャンスすらも充分に與へられなかつた。一方、一文の貯へもなかつた彼の生活費は、その創作慾に反比例してどんどん嵩んで行き、北海道に殘した母堂や妻からは、一日も早く上京したいといふ催促の手紙が矢のやうに來る。一錢の收入もない。友人には不義理が重なるといつた狀態で、北海道時代に描いた東京に於ける文學生活の夢は、もろくも醒めてしまつて、二進も三進もいかなくなり、

> 蒼茫たる宇宙の間に僅かの時間を與へられて生きてゐるのが我ら人間だ。價値も何もあつたものでない。人生に定義がないから眞とは何ぞ美とは何ぞ。皆不可解だ。藝術にも定義なく、從つて價値なく、自己にも定義なく價値がない。考へると死ぬ外はない。虛無だ。盲動あるのみ。これが僕の得た目下の結論だ。君。遂に盲動あるのみだ。眞に眞面目に考へると、死ぬ外ない。遂に遂に盲動あるのみだ！ ――（啄木全集第三卷）――208――宮崎氏宛書簡――

とさへ洩らすやうになつた。かくして極端までパンに脅迫された啄木は、上京した翌年、すなはち明治四十二年の三月ほんの糊口をしのぐ意味で、東京朝日新聞社の校正係として入社し、六月には北海道に殘して來た家族を呼び寄せて一家を持ち、初めて生活の上にいくらかの落着を得て、この年の秋には靜かに思索生活にも入れるやうになり、主として自然主義に觸れた「きれぎれに心に浮んだ感じと回想」「一年間の回顧」「卷煙草」などの評論を續々と發表した。

自然主義の影響とその作品

啄木の作品を全部通して見ると、作品の上にも明らかに、その思想生活をそのまゝ反映せしめて、概括的ながらやは

り三期に分類することができる。こゝには主に、自然主義の影響を多分にうけてゐるもの丶みについて述べてみる。

先づ詩の方面では、彼の出世作「あこがれ」を出版したころが、ロマンチシズムのクライマックス時代で、「呼子と口笛」を書いたころは、明らかに社會主義時代である。啄木が北海道放浪生活を終つて上京した當初は、「詩なんかもうだめ、これから自分の行く道は小説の外にはない。」といつてゐたが、それでも「泣くよりも」「心の姿の研究」などといふ、自然主義の影響を豊かに反映した十餘の詩篇を書いた。この「泣くよりも」「心の姿の研究」その他の詩は、正に彼の詩に於ける自然主義時代であつた。左に「夏の街の恐怖」「起きるな」の二篇をぬく。

焼けつくやうな夏の日の下に
おびえてぎらつく軌條(れーる)の心。
母親の居睡りの膝から辷り下りて、
肥つた三歳ばかりの男の兒が
ちよこ〳〵と電車線路へ歩いて行く。

八百屋の店には萎えた野菜。
病院の窓の窓掛は垂れて動かず。
閉された幼稚園の鐵の門の下には
耳の長い白犬が寢そべり、
すべて、限りもない明るさの中に
どこともなく、芥子の花が死落(しにを)ち、

生木の棺に裂罅の入る夏の空氣のなやましさ。

病身の氷屋の女房が岡持ちを持ち、
骨折れた蝙蝠傘をさしかけて門を出れば、
横町の下宿から出て進み來る、
夏の恐怖に物も言はぬ脚氣患者の葬りの列。
それを見て辻の巡査は出かゝつた欠伸嚙みしめ、
白犬は思ふさまのびをして、
塵溜の蔭に行く。

燒けつくやうな夏の日の下に、
おびえてぎらつく軌條の心。
母親の居睡りの膝から辷り下りて、
肥つた三歳ばかりの男の兒が、
ちよこ〳〵と電車線路へ歩いて行く。

――夏の街の恐怖―(啄木遺稿)―45―

西日をうけて熱くなつた

埃だらけの窓の硝子よりも
まだ味氣ない生命がある。

正體もなく考へに疲れきつて、
汗を流し、いびきをかいて晝寢してゐる
まだ若い男の口からは黄色い齒が見え、
硝子越しの夏の日が毛脛を照し、
その上に蚤が這ひあがる。

起きるな、起きるな、日の暮れるまで。
そなたの一生に涼しい靜かな夕ぐれの來るまで。

何處かで艶いた女の笑ひ聲。

——起きるな——（同、——43）——

吾々は、これらの詩から、寸毫も「美」を感得することができない。美人の皮を剝ぎ、肉をきざみ、五臟六腑をさらけ出してまで「眞」を求めた自然主義文學の本質を、啄木はかほどまで適確に詩の上に表現してゐる。

短歌の方では、殊に自然主義の影響が甚しい。先づ第一に表現のスタイルがすつかり改め、蕪雜だといはれる口語を

自由自在に驅使し、更に、從來、一行乃至は二行で通つてきた書き方を、三行書に改め、歌境の範圍も、ぐつと日常生活にまで押し擴げ、大膽に、自由に、ありとあらゆる感興——從來の歌人なら、「あなうたてやな」と顏をそむけるやうなものまで——平氣で歌に盛り上げ、傳統の根深い保守的な歌境に、大きなセンセイションを惹き起した。その處女歌集「一握の砂」(明治四十三年十二月)は、實にそのエポック・メエキングの革命的文獻である。この「一握の砂」に收められた歌の中には、まだ多かれ少なかれ、一脈のロマンチシズムの匂ひを漂はしてゐるが、その歿後間もなく、土岐哀果氏の手で世に問はれた「悲しき玩具」(明治四十五年六月)には、もやは、微塵もロマンチシズムの面影を殘してゐない。從つて見樣によつては、この二册の歌集のうち、前者はロマンチシズムと自然主義とを繋ぐ一個の鎖の鐶であり、後者のそれは、自然主義と社會主義との間に架け渡されたブリッヂであるとも言へるやうである。「一握の砂」に收められた

友よさは
乞食の卑しさ厭ふなかれ
餓ゑたる時は我も爾りき (48)

誰が見てもとりどころなき男來て
威張りて歸りぬ
かなしくもあるか (52)

病むてふことさへ惡しと思ひえぬ

心はかなし
かくれ家もなし （70）

などは、ほんの一例に過ぎないが、自然主義の極めて明確な影響は見逃すことができない。啄木の歌と自然主義の影響については、別に項目を獨立さして論じなければならないほど重要な問題であるが、こゝでは本論の性質上、甚だ簡單ながら、以上で筆をとゞめなければならない。

さて、この項の最後として、小說について述べなければならないが、これはもともと啄木が、自然主義の滿潮に乘り出し、小說で一旗擧げようといふ意氣込で、遙々北海道から上京し、當時一意小說に突き進んで行つただけに、今日、全集に收められて殘つてゐる僅か十一篇の小說のうち、二十歳前後のロマンチシスト時代に書いた「雲は天才である」「葬列」二篇と、晩年の作「我等の一團と彼」をのぞく他の九篇は、悉く自然主義のセオリイの上に立つて描いたものばかりである。

明治四十一年の初夏、上京早々、自然主義的意識のもとに筆をとつた、一番最初の作「病院の窓」は、性格破產者に近い黄色紙的一地方新聞記者と、息も詰る北海の自然を描き、「天鵞絨」では、東北の一寒村から、東京にあこがれて飛び出してくる、二人の田舍娘の心理を巧みに寫し、ローカル・カラーの濃い方言を織り交ぜて、一個の鄕土藝術の先鞭をつけてゐる。「二筋の血」には、ロマンチックな少年時代の淡い戀を、回想風な筆致で描き、啄木の小說でたつた一つの長篇である「鳥影」では、彼の故鄕澁民村をバックとして、若い男女の小學教師、大學生、洋畫家、人妻などのラヴ・アフェアを極めて自然に展開させ、「赤痢」には、若いのろまな天理教師を中心に置いて、文明に遠く〳〵取り殘された、東北のある寒村のみじめな生活狀態を、飽くまで平面的に寫し、「道」「葉書」等には、村の敎員生活の或る斷面を覗か

せてゐる。啄木自身、一番力瘤を入れて書き出したといはれてゐる自叙傳的小說「足跡」は、第一回を「スバル」の第二號に發表したきり、當時、「早稻田文學」の記者(中村星湖氏との說あり)に、誇大妄想狂呼はりされてから、すつかり氣を腐らして後をつゞけなかつたものであるが、これには啄木の代用敎員時代の自畫像が、はつきりした輪廓をもつて描かれてゐる。

總じて、小說家として、啄木の最も秀でてゐた點は、その作品に現はれてくる、人物個々の性格を、すこぶる鮮かに描きこなしてゐることである。どの作品を拾つて見ても、舞臺に登つた人物の個性は、讀後その印象が薄くぼんやりと散らばるやうなことがない。啄木が人物の個性を確實に把握して、巧みに描き得たといふことは、彼が、自然派作家として大成すべきエレメントの充分あつたことを、立派に裏付けるものであると言へよう。たゞ惜んでも足らないのは、天、彼に齡を與へることのあまりに吝であつたゝめ、彼をして未完成のまゝ、地下に葬り去らなければならなかつたことの痛恨事である。

彼の自然主義觀と社會主義への段階

啄木が文學に接し初めた中學生時代から、ずつと引續き籍を置いてゐた新詩社は當時、颶風のやうな勢ひで文壇を吹きまくつた自然主義運動に對しては、飽くまで保守的態度を持し、大町桂月、戶張竹風の如きは、明らかに反對の立場から、頭の古さを無遠慮にさらけ出し、猪突的勇敢さをもつて、反自然主義の骨董品的喇叭を吹き鳴し、新詩社の殘壘を最後まで固守しようとしたほど、明らかに時代錯誤の立場に立つて居つたが、新詩社の同人中でも、恐らく一番早く自然主義の洗禮をうけた啄木は、ひとりさびしく、冷然としてこれを傍觀し、苦笑を洩らしてゐた。明治四十一年の一月末、釧路から金田一京助氏に與へた書簡には、

今日以後の日本は、明星がモハヤ時勢に先んずる事が出來なくなつたと思ふが如何、自然主義反對なんか駄目々々。

など、洩してゐる。啄木の評論で、自然主義に觸れた一番最初のものは、その釧路時代・「釧路新聞」に發表した「卓上一枝」であらう。彼は、この一文に於いて、先づ、自然主義の何たるかを解明せんと試みた。

◉一切の生活幻像を剝落したる時、人は現實暴露の悲哀に陷る。現實暴露の悲哀は淚なき悲哀なり。何となれば人一切の幻像に離れたる時唯虛無を見る。虛無の境には熱もなし、淚もなし、唯沈默あるのみ。此境に入れる者は所謂平凡なる悲劇の主人公なり。どうか成ると言ふ人なり。

◉吾人は自然派の小說を讀む每に一種の不安を禁ずる能はず。此不安は乃ち現實暴露の悲哀也。自然主義は自意識の發達せる結果として生れたり。而して其吾人に教訓する所は唯一あるのみ。曰く、「どうにか成る。」「成る樣に成る。」

◉吾人は自然主義文學に對する世論の囂々たるを厭ふ。先づ一切の不確實なる成心を除却して、然る後靜かに思ふ可き也。乞ふ問はむ、「人生を司配する者、汝なりや將た彼なりや。」

◉自然主義の發達は、青春の人に歡はれ、中年以上の人に嫌はる。此現象を見て直ちに自然主義が若き情欲の赤裸々なる描寫を敢てするに歸するは非なり。人は生れて眞なり。漸く老いて漸く虛僞を知る。既に其心的活動の靜止するに至つて、玆に社會的經驗に依つて得たる生活概念を固定し、此概念より組織せる虛僞の法則を作つて人生自然の眞を掩ふ。技巧過重の弊に陷れる文藝を革めんとして生れたる自然主義が、若き人に歡はれて老いたる人に嫌はるゝ、蓋し故あるなり。

◉個性の獨創力は吾人も亦之を是認す。然も之を渾然たる大自然の創造に比較し來れば、廣狹自らにして明かなり。殊に況んや作家が技巧を過重して彫琢之事とするに至つては、淺小なる自家概念に束縛せらるゝ事益々甚しくして、人生自然の眞と相去る

事遂に千里萬里の遠きに到る。玆に於てか自然主義あり、一切の法則と虚僞と誤れる概念とを破壞して、在るが儘なる自然の眞を提げ來る。」

◉「我は我によつて我の中に我を見る」といふ語、古印度の吠陀讃歌にあり。自然主義は、我によつて我の中に見たる自然の我を以て、一切の迷妄を照破し、一切の有生を率ゐて、一先づ「自然に歸」らしめんする運動なるのみ。

かくして啄木は、明治四十一年の四月末、自然主義運動に對する大きな期待と希望とをもつて、遙々雪の釧路から上京したのであるが、上京して見て、自然主義運動の索源地に接觸した結果はどうであつたらう。遠く北海の地にあつて想像したとは、あまりに距離のあり過ぎる狀態であつた。評論「食ふべき詩」には、その當時のことをかう述懷してゐる。

思想と文學との兩分野に跨つて起つた著明な新らしい運動の聲は、食を求めて北へ北へと走つて行く私の耳にも響かずにゐなかつた。空想文學に對する倦厭の情と、實生活から獲た多少の經驗とは、やがて私にも其の新らしい運動の精神を受入れる事を得しめた。遠くから眺めてゐると、自分の脫出して來た家に火事が起つて、見る見る燃え上がるのを、暗い山の上から瞰下すやうな心持があつた。今思つてもその心持が忘られない。(中略)四百噸足らずの襤褸船に乘つて、私は釧路の港を出た。さうして東京に歸つて來た。歸つて來た私は以前の私でなかつた如く、東京も亦以前の東京ではなかつた。歸つて來て私は先づ、新しい運動に同情を持つてゐない人の意外に多いのを見て驚いた。といふよりは、一種の哀傷の念に打たれた。私は退いて考へて見た。然し私が雪の中から抱いて來た考へは、漠然とした幼稚なものではあつたが、間違つてゐるとは思へなかつた。——(啄木全集第三卷)——432. 433. 434——

然し啄木がかうして「一種の哀傷の感に打たれ」ざるを得なかつた反自然主義運動も、日の出のやうな勢ひで、文壇思想界を風靡して行きつゝあつた自然主義運動にとつては、正に一塊の春の雪に過ぎなかつた。時代の底を激しい速力で貫流しつゝある潮を、つきとめて見るだけの明のなかつた反動思想家の影は、次第次第に薄くなり、明治四十一年に入つては、全く文壇に於ける自然主義の完成期に到達してゐた。

在來のロマンチシズムの目的は「美」であり、新興自然主義の求めたものは「眞」である。從つて、文壇に於ける自然主義者達は、一意この「眞」を把握せんがために「あるがまゝの現實を描け」「表現の上での技巧を去れ」といふスローガンの下に、腕のつゞくかぎり、かつてロマンチシスト達の眼のとゞかなかつた、社會の暗黑面、人生の醜悪面を、勇敢に、活潑に、掘りかへしたのである。日本の自然主義運動が「觀照」の圏内を一歩も出ない、この點までなら、たしかに成功といふべきであつた。

現實を暴露したのは「眞」を得んがためである。然らば一歩突きすゝめて、自然主義はなんのために、かくまで熱烈に「眞」を求めたか、それは改めてゾラの理論を借用するまでもなく、その新しく發見された人生の「眞」を基礎として、その上によりよき人間生活、よりよき社會生活を打ち建てんがためでなければならない。かくして日本の自然主義運動は、必然の過程として「實行」に面と接しなければならなくなつたのである。

然しながら、當時文壇に於ける自然主義の闘將達は、運動勃興當初の意氣込ほどもなく、自然主義を單なる文學上のイズムといふ、小さな範疇に、意識的、もしくは無意識的に嵌めこまうとし、自然主義の當然ゆくべき方向には期せずして眼をつぶり出し、この運動のチャムピオンとして自他共に許した田山花袋にさへ「自然主義は單に文學上の問題として考へたい」といふやうな、頗る逃避的な弱音を吐かしむるほど、しかく日本の自然主義運動は、漸次、瑣末主義に

墮落し初め、早くも內部的自己崩壞の徵を現はし出したのである。

人一倍早く、自然主義の洗禮をうけた、啄木の敏感さ、頭のよさは、又かくして人一倍早く、自然主義の破綻を發見せずには居なかつた。明治四十三年一月九日附で、大島經男氏に與へた書簡の一節には、

函館にゐ　お世話になつた頃を考へるとボーッとしてまゐります、あの頃の私は實に一個の憐れなる、卑怯なる空想家でした。あらゆる事實、あらゆる正しい理を回避して、自家の貧弱なる空想の中にかくれてゐたにすぎません、私の半生を貫く反抗的精神、その精神は、然し乍ら、つまり自分で自分に反抗してゐた過ぎません、それと氣がつかずに、唯反抗その事にやりどころなき自分の感情を託して、咨嗟し、慷慨し、自矜してゐた臆病な無識者は、遂に內外兩　の意味に於て「破產」を免れませんでした。自然主義は、私のこの思想上の破產に對して決し　救濟者ではありませんでした、寧ろ執達吏のやうな役目を以てあらはれました、上京後一歲有餘の私の努力――その空しき努力は、要するにこの破產が一時的の恐慌から起つたのでなく、長き深き原因に基づいたものである事を明らかにしたに過ぎません、――（啄木全集第三卷）――241）.241――

と書き、感想、「きれぎれに心に浮んだ感じと回想」（明治四十一年十一月）には、

長谷川天溪氏は、嘗て其の自然主義の立場から「國家」といふ問題を取扱つた時――一見無雜作に見える苦しい胡麻化しを試みた（と私は信ずる。謂ふが如く、自然主義者は何の理想も解決も要求せず、在るが儘を在るが儘に見るが故に、秋毫も國家の存在と牴觸する事がないのならば、其所謂舊道德の虛僞に對して戰つた勇敢な戰も、遂に同じ理由から名の無い戰になりはしないか。從來及び現在の世界を觀察するに當つて、道德の性質及び發達を國家といふ組織から分離して考へる事は、極めて明白な誤謬である――寧ろ、日本人に最も特有なる卑怯である。その事あつて以來、長谷川氏の言は、常に一處に立止まつてゐるやう

に私には見える。言ふ事、説く事凡てその時までに言つた事を繰返し、若しくは補正してゐるやうに見える。田山氏も亦、嘗て「自然主義を單に文藝上の問題として考へて見たい。」といふ意味のことを何かで述べられた。氏の立場としては諒とすべき言葉であるが、一方から見れば、其處に「或物」を回避した態度がないと言へない。――（啄木全集第三卷）――4 2. 46）――

と、不徹底な浮腰の鬪將達に鋭い投槍をあびせ、更に評論「一年間の回顧」（明治四十二年十二月）に於ては、

一度解放された文學の主潮は、然し乍ら色々の理由から、まだ行くべき處まで行かずに、途中で停滯し、彌縫しようとする傾向を作つた。如何なる事件、如何なる運動にあつても、時々斯ういふ事に出會す事は免れないものである。而してそれは明治四十二年前半期に於ける我が文壇の概勢であつた「色々の理由」のうちには、我々は大體に於て、自然主義者それ自身の主張に自己及び自己の文學を全然解放するだけの力の無かつた事（換言すればそれだけの力を得る程までに深い反省を積んでゐなかつた事）と、外部に有力なる刺戟者のゐなかつた事とを數へる事が出來る。今から考へて見て、丁度一年以前、自然主義は今や確實に文壇を占領したと呼號して明治四十二年を迎へた一批評家の言には、一は喜ぶべき、一は悲しき兩樣の意味があつたやうに思はれる。（中略）譬へていふならば、「自然主義の第一期」といふ銀行が、あの頃になつて急に營業資金の不足を告げ、新株の募集も出來ず、廻收も出來ず、遂々固定資本なり積立金なりに手を付けたといふ狀態である。つまり頭が空になつてゐたのである。而して觀照と實行に關する問題は何時の間にか燗冷めの酒の如くなつて捨てられて了つた。――（啄木全集第三卷）――463. 471

――

と論理を推し進めて、「觀照」と「實行」のぬきさしならぬヂレンマに陷つて、無理無體に「實行」に顏をそむけようとする、自然主義運動の鬪將、田山花袋、島村抱月、長谷川天溪、相馬御風その他人々に、片つ端しから鮮かな止めを

刺し、更にその評論「性急な思想」（明治四十三年三月）感想「硝子窓」（同年六月）に入つては、行き詰つた自然主義の廢墟の上に、新理想主義の堅城を築き上ぐべく努力をつゞけてやまなかつた。「性急な思想」の一節には、

日本は其國家組織の根柢の堅く、且つ深い點に於て、何れの國にも優つてる國である。從つて、若しも此處に眞に國家と個人との關係に就いて眞面目に疑惑を懷いた人があるとするならば、其人の疑惑乃至反抗は、同じ疑惑を懷いた何れの國の人よりも深く、強く、痛切でなければならぬ筈である。そして、輓近一部の日本人によつて起されたところの自然主義の運動なるものは、舊道德、舊思想、舊習慣のすべてに對して反抗を試みたと全く同じ理由に於て、此國家といふ既定の權力に對しても、其懷疑の鋒尖を向ければならぬ性質のものであつた。然し我々は、何を其人達から聞き得たであらう。其處にも亦、呪ふべく懼れむべき性急な心が頭を擡げて、深く、強く、痛切なるべき考察を回避し、早く既に、恰も夫に忠實なる妻、妻に忠實なる夫を笑ひ、神經の過敏でないところの人を笑ふと同じ態度を以て、國家といふものに就いて眞面目に考へてゐる人を笑ふやうな傾向が、或る種類の青年の間に風を成してゐるやうな事はないか。——（啄木全集第三卷）——492——

と、詰め寄せ・「觀照」の象牙の塔に立て籠つた所謂瑣末的自然主義達の顧みやうともせぬ「實行」に一意突き進んで行つた。彼がかくして、惱み、もがき、苦しんだ末に把握した結論は實に「明日の考察！」であつた。その評論「時代閉塞の現狀」（强權、純粹自然主義の最後及び明日の考察）は、早くも自然主義の繩を斷ち切り、新理想主義の大海に向つて高々と帆を飜した、當時の啄木の思想的大飛躍を、最もよく裏づけてゐる。

斯くて此「主義」は既に五年の間間斷なき論爭を續けられて來たに拘らず、今日猶其最も一般的なる定義をさへ與へられずにゐ

るのみならず、事實に於て既に純粹自然主義が其理論上の最後を告げてゐるに拘らず、同じ名の下に繰返さるゝ全く別な主張とそれに對する無用の反駁とが、其熱心を失つた狀態を以て何時までも繼續されてゐる。さうして凡て此等の混亂の渦中に在つて今や我々の多くは其心內に於て自己分裂のいたましき悲劇に際會してゐるのである。思想の中心を失つてゐるのである。自己主張的傾向が、數年前我々が其新しき思索的生活を始めた當初からして、一方それと矛盾する科學的、運命論的、自己否定的傾向（純粹自然主義）と結合してゐた事は事實である。さうしてこれは屢後者の一つの屬性の如く取扱はれて來たに拘らず、近來（純粹自然主義が彼の觀照論に於て實人生に對する態度を一決して以來）の傾向は、漸く兩者の間の溝渠の遂に越ゆべからざるを示してゐる。（中略）かくて此結合の結果は我々の今日迄見て來た如くである。初めは兩者共仲好く暮してゐた。それが、純粹自然主義にあつては單に見、而して承認するだけの事を、其同棲者が無遠慮にも、行ひ、且つ主張せんとするやうになつて、其處に此不思議なる夫婦は最初の、而して最終の夫婦喧嘩を始めたのである。實行と觀照との問題がそれである。さうして其論爭によつて、純粹自然主義が其最初から限定されてゐる劃一線の態度を正確に決定し、其理論上の最後を告げて、此處に此結合は全く內部に於て斷絕してしまつてゐるのである。斯くて今や我々には、自己主張の强烈な欲求が殘つてゐるのみである。自然主義發生當時と同じく、今猶理想を失ひ、方向を失ひ、出口を失つた狀態に於て、長い間鬱積して來た其自身の力を獨りで持餘してゐるのである。既に斷絕してゐる純粹自然主義との結合を今猶意識しかねてゐる事や、其他すべて今日の我々青年が有つてゐる內訌的、自滅的傾向は、この理想喪失の悲しむべき狀態を極めて明瞭に語つてゐる。——さうしてそれは實に「時代閉塞」の結果なのである。（中略）斯くて今や我々青年は、此自滅の狀態から脫出する爲に、遂に其「敵」の存在を意識しなければならぬ時期に到達してゐるのである。それは我々の希望や乃至其他の理由によるのではない、實に必至である。我々は一齊に起つて先づ此時代閉塞の現狀に宣戰しなければならぬ。自然主義を捨て、盲目的反抗と元祿の回顧とを罷めて全精神を明日の考案——我々自身の時代に對する組織的考察に傾注しなければならぬのである。明日の考察！　これ實に我々が今日に於て爲すべき唯一である。さうして總てゞある。——（啄木全集第三卷）——547. 556. 557. 560——

かくして啄木は、自然主義の廢墟の上に、輝かしい「明日の考察！」といふ新理想主義を翻した。然しながら、この「明日の考察！」には、思想的に解剖して、果していくばくの理論的根據があつたであらう。

人間個々の「改善」なり「革命」なりが、その集團生活、すなはち社會に對してどれだけの響きを齎し得るものであらうか。——社會生活と個人生活——自然主義脱出直後の、彼の眼前に立ち塞つたものは、實にこの問題でなければならなかつた。

果然！　第二次の思想的革命が、彼の全精神を根柢から搖り動かさずには置かなかつた。明治四十四年二月六日、すなはち彼が病歿する約一年前、大島經男氏に書して、自然主義から社會主義への思想的推移を彼自身から述べてゐる。

> たしか一年前に私は、私自身の「自然主義以後」——現實の尊重といふことを究極まで行きつめた結果として自己そのもの〻意志ヽ尊重しなければならなくなつた事——國家とか何とか一切の現實を承認して、そしてその範圍に於て自分自身の內外の生活を一生懸命に改善しようといふ風なことを申上げた　があゝやうに記憶します、それは確かにこの私といふものにとつて一個の精神的革命でありました、その後私は思想上でも實行上でも色々とその「生活改善」といふことに努力しました、併しやがて私は、その革命が實は革命の第一歩に過ぎなかつたことを知らねばなりませんでした、現在の社會組織、經濟組織、家族制度……それらをその儘にしておいて自分だけ一人合理的生活を建設しようといふことは、實驗の結果、遂ひに失敗に終らざるを得ませんでした、その時から私は、一人で知らず〳〵の間に Social Revolutionist となり、色々の事に對してひそかに Socialistic な考へ方をするやうになつてゐました。——(啄木全集第三卷)——309. 310——

自然主義を眞面目に究極まで追ひつめた者の、當然到達しなければならぬ地點——その社會主義の彼岸に、彼はかくして遂に行きついたのである。

結語

啄木の七週忌追悼會が、土岐善麿氏の生家である、淺草の等光寺で營まれたとき、コンミユニスト荒畑寒村氏が、その席上で「自然主義は必然の過程として社會主義に行くべきである」といふ意味のことを述べられたさうであるが、これはたしかに、自然主義をもつともよく知れる人でなければ言ひ得ない至言であると思ふ。

今からざつと二十年前、自然主義といふ大波浪によつて洗はれたところの、當時の所謂新人達は、或るものは「觀照」の藻につかまつて溺れ、或るものは「回避」の板切にしがみついたまゝ押し流されたのであるが、中にはこの大波浪をあくまで押しきつて、社會主義てふ大岩に突つ立ち上り、遙かに人類の黎明を望んだ戰士も少くはなかつた。この戰士の一人として、一個の敏感な革命兒、吾が石川啄木もあつたことは、私が以上述べて來た通りである。

吾々は啄木の思想展開にぢつと眸を凝らしてゐると、その啄木を通して、實によく、思想方面に於ける明治末期の姿をはつきりと掴むことが出來る。何故と問ふ人があるなら、私はかう答へたい「彼は常に時代に先んじこそすれ、一歩も時代から遲れまいと努力し、實に眼光紙背に徹するの熱烈さをもつて、その時代を直視し、その時代の足跡を明確に彼の思想生活に體現してゐるからである」と。

啄木の思想について、多くの人々の論ぜらるゝことは、彼の抱いた思想がすでに他人事でないといふ社會意識の發達を裏づける意味からいつて、頗る喜ばしい現象でなければならない。たゞ、一部の淺薄者達によつて、彼の社會主義思想が、單なる啄木一流の氣まぐれな、反逆的精神の發露に過ぎないと斷ずるなら、それは勿論斷ずる人の勝手であるが然し啄木をよく理解した人の言とは、恐らく誰しも肯定はできぬであらう。

ロマンチシズムの霧によつて眼を掩はれてゐた啄木が、自然主義によつてその霧をとり拂はれ、現實を直視してゐるうちに、次第次第に社會主義に入つて行つたといふことは、極めて自然な思想的展開であるといはなければならない。

長塚節論

犬田卯

一　「土」に就て

「土」が東京朝日新聞に掲載されたのは明治四十三年六月から同年十二月に亘つてゞあつた。越えて四十五年五月、單行本となつて出版せられた。今でこそ、それは公平な理解の眼を以て見られるやうになつたが、發表當時は完全に文壇からは默殺せられた。多少でもそれを理解し、その特色を認めたものは、ほんの作者の近しい友人達、乃至文壇圏外のある種の人々に過ぎなかつた。「余がかつて「土」を「朝日」に載せ出した時、ある文士が、我々は「土」などを讀む義務はないと云つたと、わざ〳〵余に報知して來たものがあつた。――(「土」の序文、夏目漱石)――だから「土」は默殺せられたといふよりは一部の文士達からはその發表をさへ非難せられたのである。

事實、夏目漱石、池邊三山兩氏の同情がなかつたならば、「土」はさう容易く世に現れる機會はなかつたであらう。よしまた何等かの機會によつて發表せられたとしても、漱石のやうな有力者の盡力がなかつたならば、世のがや〳〵のへぼ文士達の駄評や、譯の分らない新聞社の營業部の連中の專斷によつて、中途でちよん切られてしまつてゐたであらう。「女學生に喜ばれぬ故に、社の營業部にては只今持て餘しの由」(長塚節全集、第六卷、一八七頁)と作者が一友人に與へた手紙の中でもその邊の消息を語つてゐる。

何故あれほどの力作であり價値ある作である「土」が、發表當時さうした待遇を受けなければならなかつたのであらうか？ それは時を同じうして現れた島崎藤村の「家」、田山花袋の「緣」、德田秋聲の「足跡」等を考へて見れば分ることである。卽ち「土」は時流に乘らなかつたのである。

當時文壇を風靡してゐたのは自然主義であつた。然も「土」が現れたのはその最高潮と云つてもいゝ頃だつたのである。なるほど反自然主義者の群れ——夏目漱石、森鷗外、高濱虛子、乃至早くから非自然主義を唱へてゐた後藤宙外、泉鏡花等の人々がないわけではなかつた。が、それらの人々は思ひ〳〵に、孤立的に自說を主張したのであつて、一つのまとまつた主義、ムウヴマンとはなつてゐなかつた。自然主義は當時大濤の如く文壇を捲席し、世を風靡したのである。個々の孤立した說がいかに對抗的の眞理を持つてゐるものであつても、その波濤の勢ひに敵し難いのは分り切つたことである。

「土」は所謂自然主義の作品ではない。芭蕉を中心とした元祿の俳諧あたりから正岡子規へ流れて來てゐた自然に對する態度——實在の觀察とでもいつたやうな態度が、寫生といふ表現形式に結成せられた所謂寫生派の作品である。云はゞ自然主義者の眼から見れば傍流の作品である。これが一般の文壇からは默殺され、仲間以外には僅かに低徊趣味を云々し、餘裕派小說を云々した漱石に認められたに過ぎなかつた所以である。

「土」は人も知る如く、作者の鄕里に於ける貧しい百姓の生活、及び彼等をめぐる自然、人事風習を刻明に描いたものである。作者は一木一草の末に到るまで精細の觀察眼を向けねば止まない。そこでは遠近法などゝいふものは餘り役に立たない。眼前にあるものも數里の遠くにあるものも、等しく平面上に展開せられるのである。同時にまたそこでは人間も自然も共に一物である。

「烈しい雨風が目に見えぬ大きな塊りをごうつと打ちつけては又ごうつと打ちつけて皆痩こけた落葉木の林を一日苛め通した。

木の枝は時々ひらひらと悲痛の響きを立てゝ泣いた。」

これは「土」の冒頭の一節である。風が林を苛め、枝が泣いたといふやうな描寫は、他の自然主義作家達の肯ぜないところであらう。何故なら彼等のモットウとするところは科學であり、智識であり、理性であり、事物の「眞」である。「泣く」などゝいふのは動物に限つたことであつて、非情の木の枝はたゞ風に鳴るのみである。

寫生といふことは氏によると、「一言に盡せば天然人事を眼に見、心に感じたことを、見たまゝ感じたまゝを書く」ことである。だから自然主義派の所謂「私を沒して眞を寫す」といふことゝは違つてゐる。尤も同じ自然主義派にしても、必ずしも主觀の挿入を排斥しない一派――印象主義に近い一派がある。が寫生といふことはそれとも異る。強ひて類似のものを求めれば寫實主義でもあらうか？　とにかく客觀を客觀としてどこまでも描寫して行くことである。

長塚氏はその寫生といふことを氏獨特の形に於て完成してゐる。それが「土」に於て最も高度に行つてゐる。「土」はすべて實在の人物、その人達の使ふ方言そのまゝ、乃至實在の自然を、何等の修飾も施さず、且つ何等の覆ふところもなく客觀し、そのまゝ描いて行つたものである。（「土」の人物は皆現存せり。」――（長塚節全集、第六卷、一〇八頁。）――篇中の人物皆生存致居候。主人公たる人物には氣の毒なれ共、是非もなきことゝ存申候。――（長塚節全集、第六卷、一八七――一八八頁）氏自身が友人に與へた手紙の中で、右のやうに云つてゐるのでもそれは證せられる。

たゞ「土」の中にこしらへた部分がある。それは最後の方に到つて主人公の家に失火があり、その悲劇から主人公の心理に多少の變化を及ぼすといふあの結末である。これは單なる私の推定ではなくて、長塚氏自身が郷里の方の誰かにそれを洩らしたことも私は又聞きしてゐるし、現に主人公の家がもとのまゝ殘つてゐるのを見ても分ることである。

この虛構の部分は何を語るものであらうか？　――然し私はかうした反問を敢てしたくないものである。何故ならそれは單に作をまとめようとするコンヴアンシヨネルな意識以外に、何もなかつたらうと思はれるからである。「土」は寫

生の作品として觀るべきであり、またさう觀ることによつて歴史的の意義と作品そのもの丶意義とかあるのである。

二 「芋掘り」その他

「土」を書く以前に、長塚氏は「太十とその犬」――明治四十三年二月「ホトトギス」へ發表。――「隣室の客」――同年一月「ホトトギス」。――「教師」――明治四十二年十月「ホトトギス」。――「おふさ」――同年九月「ホトトギス」。――「開業醫」――同年一月「ホトトギス」。――「芋掘り」――明治四十一年三月「ホトトギス」等の短篇を發表してゐる。

これらのうち「芋掘り」「太十とその犬」の二篇は、これまた「土」と同じく實在の人物の描寫であり、「開業醫」と「教師」の二篇は氏の友人と思はれる人から丹念に話しをきいてそれをまとめ上げたもの、「隣室の客」は氏の郷里のある人の話しによると、氏の父君とかにあつた事件をそのまゝ自分に移して來て、曾て平潟港へ病氣療養に行つてゐた時見聞した隣室の客を配したものであるとのこと。

何れをとつて見ても「土」と同じやうな態度、否それ以上に客觀的な態度によつて制作せられたものである。そしてまたその手法に於ても、「土」と同樣に寫生といふ規範に則つてゐる、非常に自由にではあるが。「芋掘り」及び「太十とその犬」は、「土」と同じく農民小說の範疇に入れらるべきものである。その描くところの人物が、「土」に比して何れ劣らぬ無知な農夫の生活であり、乃至村の空氣である。

たゞ私達の現在云づてゐる農民小說とは、その態度に於て異るものがある。前述のとほり氏の態度は寫生といふことにある。實在を實在として客觀し、それをそのまゝ描いて行くところに在る。私達のは實在を客觀すると同時に、或はそれ以上に、何がそれに潛んでゐるかを或る視點から摘發して行かうとする。同じ實在の描寫であつても讀者に與ふる

感銘は自ら異つて來なければならない。從つてその表現形式も乃至は藝術上に於ける範疇も。

農民小說として氏のある作を見ることの出來るのは、だから材料の點、及び作者その人の持ち味といふ一方からするのでなければならない。さうした方面からするならば、氏の「土」及び「芋掘り」「太十とその犬」等は、農民小說の先蹤といふことが出來る。

三　紀行文・寫生文

氏は旅行が好きだつた。北海道方面を除き、北は淺虫溫泉・弘前地方をはじめとして南は日向青島まで、その足跡を印してゐる。旅行好きでは有名な田山花袋も、「ことにめづらしいのは、中津川の上流、秋山郷に入つてゐ ることである。また苗場山を越して上洲沼田に出て來てゐることである。そして三十歳の時に草津溫泉から秋山の切明溫泉へと行つてゐる。この路は非常に險しい道である。私も一度入つて見ようとして、たうとう入れなかつた道である。」――（新小說、長塚節追悼號）――といつて驚いてゐる位である。

かうした旅行からの收穫は、寫生文、紀行文として續々發表せられた。殊に有名だつたのは「佐渡ヶ島」――明治四十年十一月「ホトトギス」――であつた。これは前年の八月より九月にかけての旅行中、佐渡へ航した折りの旅行記である。

これより先き、即ち三十九年七月に、氏は青果といふ號を以て「炭燒の娘」を「馬醉木」へ發表してゐる。これは前年五月より六月にかけての房州旅行の途次、清澄山八瀨尾の谷で炭燒きを見た時の記事である。「炭燒の娘」及び、「佐渡ヶ島」は、發表と同時に可成りの反響を呼んだものである。これに遲れること二三年にして發表した小說が一向世評を呼ばなかつたことを思ひ合せると、私は文壇人の卑劣さを感ぜずにはゐられない。

氏の寫生文乃至紀行文は、氏その人の人物の如く純であり、厭味がない。そしてまたそこには讀者に對する強い誘引力をなしてゐるところの女が必ずといつてもいゝ位出て來る。たとへばちよつと指を折つて見ても「炭燒の娘」のお秋さん、「佐渡ヶ島」では小木の港の「美人」、「旅の日記」の中では鮎川の宿の娘、及び作並溫泉場の娘、「痍のあと」の中に出て來る鹽原の宿のまあちやん等々……。

そしてそれらの女は、例の精細な觀察眼によつて細々と描寫されるのである。たとへば、小木の港の美人を描いたところを少し抄出して見る。

「小木の港へ辿りついたのは黄昏近くであつた。相川の町では木賃のやうな宿へ泊つて流石に懲り懲りしたのであつたから此所では見掛の一番いゝ宿へ腰を下ろした。女が表の二階へ案內する。聽てランプを點けて來る。室內が急に明るくなる。此宿はまだ建築して間もないと見えて木柱から疊から頗る淸潔で心持がよい。掃除したランプのホヤが殊に目につく。女は更に茶を出してくれる。氣がついて見るとこの女は驚くばかりの美人であつたのだ。まだ二十には過ぎまいと思ふ。佐渡のやうな豫想外に寂しい島へ渡つてこんな美人に逢はうとは全く思ひもかけぬ所であつた。美人といふ以外に此女を形容の仕樣はない。余は一日雨を凌いだ爲め單衣もズボン下も濡れきつて旅裝が一層みすぼらしくなつて居るので此女に對して何となく極りの惡いやうな心持がした。障子を開けて女の出て行く所を見ると紺飛白の單衣の裾に五分ばかり白いものの出てゐるのが目についた。(中略)

帳場のさきには勝手が見える。竈の側ではさつきの女が串へ立てた魚の切身のやうなものを燒いてゐたがそれを箸でおさへて皿の上で串を拔いたら襷を外して四つに折つて帶の間に挾んだ。左にお鉢を抱へて右に膳を持つて立ち上つた。……此夜は客といふものは余一人であるので別に支度もしなかつたから冷たくなつたが此で我慢をして吳れというて茶碗には小豆飯が堆くつけてある。女を見ると紺飛白の單衣に白地を重ねて居るのであつた。さつき裾から白く見えたのは此白地の丈が長かつたからに相違ないのだ。紺飛白も幾度か水をくゞつて紺が何うすぼけてゐる。此野暮臭い支度をして居ながら女は端然として坐つてゐる

やっぱり美人である　——以下略——」

一擧一動あらゆる精細に亙つて描き出されるのである。それは時によつては描くためにわざ〳〵その女を觀てゐるやうな變な氣さへ起させるほどである。

然し長塚氏の筆に上ると、どんな女でもつゝましやかに見えて來る。また女を見る長塚氏から私達は何等の厭味をも感ずることは出來ない。何時もすつきりとした氣持でその情景を味ふことが出來るのである。この點に關しては久保より江夫人も云はれてゐた。「その夜お別れして歸り道、品のいゝかたですねと主人に囁きましたら、さうだ品のいゝまじめな人　、いゝ人だと主人もうなづきました。（中略）島原の太夫を見にいらしたとか、京祇園の舞妓のお話をうかゞうても、ちつともいやみがありませんでした。旅のお話にきまつて出て來る娘もそれを長塚さんと結びつけて妙に考へる氣にはなれません。」——アララギ、長塚節追悼號——

品のよさと眞面目さ、その生來の德が、氏のあらゆる藝術……殊に寫生文、紀行文により多く現れて來て、私達をその情純な氣分の中へ引込む所以なのである。そしてこれがまた氏の寫生文、紀行文の一特色——それを他人の追從を許さない獨特の存在たらしめてゐるところのものなのである。

四　短歌に就て

長塚氏にはまた短歌の一面がある。令弟順次郎氏の記するところによると、中學の二年頃から作りはじめたとのことであるから、（新小說、大正十四年十二月、長塚節追悼號）氏は寧ろこの短歌の方面から文學に入つたといつてもいゝであらう。

事實、氏の藝術の基調をなした寫生といふことは、氏の短歌の師である正岡子規から脫却したものである。氏が子規庵に入門したのは明治三十三年三月（二十二歲）の時であつた。子規は翌々年、即ち明治三十五年の九月に世を去つてゐる。だから長塚氏の師事したのはほんの短期間であつたが、然し氏の藝術はこの時に本來の芽を出したといつてもいゝのである。

短歌のことについては私は門外漢である。門外漢の駄評をこの際附加するよりは、その道の適切と思はれる評を拜借して置く方が宜しいであらう。氏の短歌の方面に關しては隨分これまでいろ／＼の人によつて評しつくされてゐる。私はその中の、齋藤茂吉の文章を少しく拔萃して置くに止める。

「長塚さんの歌は第一流のところに行ついてゐた、その意味は、長塚さんは明治に生れて三十七の若さで歿したけれども、人麿赤人、家持などゝいふ萬葉集の作者から、貫之とか躬恒とか、俊成とか西行とか定家とか、先づ第一流と謂はれてゐる歌人の間にゐて、ちつとも氣がひけないといふ意味である。

　小夜ふけにさきて散るとふ稗草のひそやかにして秋さりぬらむ
　秋といへば譬へば繁き松の葉のほそくあまれゝ立ちわたるめり
　おしなべて木草に露をおかむとぞ夜空は近く相せまり見ゆ

かういふ歌がある、明治四十年の初秋に作つたものであるが、實に驚くべきほど深さと細かさと靜かさと確かさとを有つてゐる歌である。萬葉集の四季の歌には無論かういふ歌はない。……それならば千載集、新古今集あたりの幽玄味のものはどうかといふに、これは今讀んでみると案外簡單なもので、一種の型が出來てゐて、眞に物を看てゐる作は尠い。すなはち寫生してゐるものが尠いといふことに氣付くのである。そんなら長塚さんの歌はどの邊に類似のものを求め得るかといふに、やはり芭蕉を中心とした元祿の俳諧であらうか。そしてこれは長塚さんの師である正岡子規（竹の里人）の俳諧趣味から出てゐるのである。子

規の俳句の革新は、ものを實地に看ることを教へた。長塚さんはその根柢をだんだん深めて行つて遂に此處まで行著いたのである。

群山の尾ぬれに秀でし相馬嶺ゆいつ湧きいでし天つ霧かも
ゆゆしくも見ゆる霧かもさかさまに相馬が嶽ゆ搖りおろし來ぬ

明治四十一年の作、……前に織くうら寂しい歌を作つた長塚さんは、かういふ強く豪壯な歌をも作つてゐる。この強い歌をよく見るに、正確にものを捉へてゐるその手腕に驚くのであつて、たゞ調べ高くとれらつて、萬葉模倣の調子で持たせてゐるのとは趣きが違ふ。そこが眞淵あたりの歌との差別點で、そのことは子規が既に道破してゐる。「さかさまに相馬が嶽ゆ搖りおろし來ぬ。」といふ自然動運の相を表現してゐるが、その調べがやはり作者の呼吸と相一致してゐるやうに思はれる。そこで「ゆゆしくも見ゆる霧かも。」といふのは主觀的な句でありながら、空虛でなくてやはり何んだか客觀的な中味がある如くに感ぜられる。その前の歌、「いつ湧き出でし天つ霧かも。」でもさうである。この句は作者の主觀句であるが、同時に客觀的內容を持つてゐる。長塚さんの歌はどちらかと云へば一見客觀的の歌であるが、よく味へば主觀客觀の區別を絕して、短歌の形式の有つ抒情詩本來の特徵をあらはしてゐるのである。このあたりのものになると、人麿等の作に肉迫せんとする勢ひを示すものであつて、そして加ふるに近代人の待つ心の鋭さがある。

小夜ふけてあいろもわかず悶ゆれば明日は疲れてまた眠るらむ
ひたすらに病癒えなとおもへども悲しき時は飯減りにけり
すこやかにありける人は心強し病みつゝあれば我は泣きけり

是等は皆晩年の病牀詠である。客觀的に先づ見て草花などを寫生するやうに、病人である自分の行動を寫生してゐる。この寫生の意味をよく考へると、これらの歌に當嵌めて考へると、皆盡く本心を現してゐる。本態が出てゐるといふことになる。長塚さんの病牀吟は毫も僞ることなく云つてゐる。このことが實にむづかしいのである。それを僞らずにぢつと把持して表すのが寫

生である。……この境に至つてはじめて自然作者一元の生を寫すといふことになるのである。

　小夜ふけてひそかに蚊帳にさす月をねむれる人は皆知らざらむ

　白銀の鍼うつごときぎりぎりす幾夜は經なば涼しかるらむ

是等は皆病中已むに已まれぬ詠歎であつたのである。事象を叙してゐて、その一音一音からいふにいはれぬ哀韻がひゞき出でゝ來る。……「白銀の鍼うつごときぎりぎりす」といふ、この鋭さと滲徹さはやはり病のために鋭くなつたものでなければ出ないものである。この何の如きは稍ともすれば、讀者の側から飽かれる性質のものである。つまり「白銀の鍼うつごとき」といふ句は普通の意味でいふ寫生ではないからである。然るに平面寫生から出發した長塚さんは遂にこの深刻寫生の境にまで到つてゐる。僕達はよくこの點を考へなければならぬのである。」――新小説、長塚節追悼號より――

思ふに長塚氏の短歌は、萬葉から脱化して寫生境地に徹したものと見て差支へあるまい。そのことは氏自身も云つてゐる。

一予がまだ根岸へ行かなかつた頃は、唯日常目に觸るゝものによつてのみ作つてゐた。後に萬葉を見て忽ち萬葉調に變化した。これが殆んど去年の春までつゞいた。飽きの來た時である。菜の花が門の畑にさいて居たが、いつしか花は末になつて莢になつた。鶸が莢を喰ひに來る。或日行つて見ると鶸が二羽飛び出した。黄色い翅がひら〳〵と表はれる。面白く感じたので歌によんだ。予は不圖考へた。直ちに天然に接觸して寫生をするといふのが現在の急務であると考へた。何んだか嬉しい氣がする。種々の推測が湧いて出る。萬葉調の歌に傑作を出したもので後に更に聞えないものがあるが、かういふ人の傑作といふものは萬葉のつけ元氣に過ぎない。自分といふものに還らないから再び奮ひ起ることが出來ないのである。天然を寫生することに努めたならば屹度其弊を除去することが出來よう。こんなことも胸に浮んだ。自分で試る、面白い。總べての天然物が皆面白い。暫くはこの眞面目な寫生に立脚地を定めようとした……明治三十八年五月――（長塚節全集第四卷一四〇――一四一頁）

寫生文に於て乃至小說に於て達したよりも以上の深刻に、氏は短歌に於て、寫生に徹底してゐるやうに考へられる。

この境地に於ては誰も追從者がないといふことは一般の定評である。

短歌に就ての評は以上に止める。たゞ私は私だけの考を附加するが、小說乃至寫生文に比して氏の短歌は、私などから見るとあまりに洗練され、否ひねくれ過ぎてゐて、且つ辭書にたよらなければ分らない言葉がざらに出て來るので非常に困る。土の匂ひが消え失せてゐる。さすがに「病中雜詠」や「鍼の如く」の中には打たれる短歌が有るが、その他のものになると、何となく緣遠い氣がする。然しこれは私一個のことであつて、批評とは何の關係もないことである。短歌にこそ氏の全部があり、また短歌こそ氏を語るものであることは私も認めるに躊躇しないものである。

五　人物・史上の位置

長塚節は明治十二年四月三日、茨城縣結城郡岡田村國生に生れた。家は村でも舊家であり、財產家であつたが、父が縣會議員をするやうになつてから傾いてしまつた。然しそれを蔽ふために、氏は早くから母と共に苦勞した。氏は國生小學校、下妻高等小學校を經て水戶の中學校へ入學した。が、卒業するに至らず、極度の神經衰弱にかゝつて退學、鹽原温泉に行き、また上京して山田病院で療養した。そしてこの頃から短歌をつくつた。

明治三十一年、正岡子規の「歌よみに與ふる書」「人々に答ふ」などを愛讀し、翌々年二十二歲の時、親しく子規を根岸に訪うてその門下生となつた。これが氏の文學生活に入る第一步だつたのである。

子規の門下にあつて氏は左千夫、麓、眞秀格堂等の歌人と相識つた。

子規の死後、氏はこれらの門下生達と共に雜誌「馬醉木」を發行し、ぼつ〳〵と作歌や短文を發表しはじめた。この點については、氏は非常に順調に、運よく文學界へ踏入つたといはなくてはならない。

氏は前述のとほり、絹川べりの相當に富有な農家の長男に生れたのである。そして財產が傾きかけるまでは何不足な

く育つたのである、母の細心な愛が、氏をしてあんなにも純情を持つた、素直な性格に育て上げたのだと考へられる。氏の母がいかに女性らしく細かな注意をもつて氏を見守つたかといふことは、「隣室の客」を讀むもの丶誰しも首肯するところであらう。

氏は生涯結婚はしなかつた。それは生來の虚弱といふことにもよつたらうが、一つには相當の相手がなかつたからであつたらうと思ふ。それは福田昌健氏にあつた手紙（全集、第六卷、三四四——三四六）を見ても分ることであり、また岡麓氏にあつた手紙（全集、第五卷、三五八——三五九）に於て、本郷五ノ四十七、井上子爵の第二女の身許調査を依賴してゐる點でも分ることである。また横瀬夜雨氏のところからある女の寫眞を借りて來て置いたり、「或女の性格を面白がつてわざ〳〵S港までその仕へる寺を見に行つた」——夜雨氏、アララギ、長塚節追悼號——りしたことでも明らかである、最後に「病中雜詠」の袈裟の女の事件まであつたが、これも病氣のため乃至それによつて生じた事故のため、成立することが出來ずにしまつた。

この點については氏は不幸であつた。それは時にふれて氏自身が書いてゐる。然しそのために得難い作品を數々殘してゐることも爭はれない事實である。

氏はまた非常な旅行家である。それは前に述べたやうに田山花袋すら驚いてゐる位である。その旅行たるや、これまた普通の旅行家のやうな方法ではないのである。氏は極端につゝましい。父親の放膽なやり方に反して何事に對しもさうであつたのだが、旅に出てもさうであつた。

「余は旅行が好きである。年に一度は長途の旅行をしなければ氣が濟まぬやうになつた。……時には汽車や、船の便を借りることもあるが、大抵は徒歩である。……

余の旅行は極めて簡易な仕方である。最初の用意は旅費で、これが出來ると、豫め歩かうと思ふ方面の地圖を披いて旅費に相

應した行程を定める……全くの徒歩ならば一日五六十錢で余は十分に支へて行くことが出來る。旅費と行程とが定まれば、旅裝の支度にかゝる。余は大抵旅行の時期を夏から秋のはじめと定めて置く。此れは旅費の輕便を欲するからで、……單衣一枚着たまゝで、肌着はシャツとズボン下と越中褌とを別に一組荷物へ入れる。……荷物は外に地圖、雜記帳、鉛筆、葉書位で、あまり澤山は持たぬ。この外に大切なものは辨當箱である。……辨當位大切なものはない。殊に暑中の旅行で、人家の遠い所で腹がへつたら、とても始末になるものではない。……一厘錢でも無駄にせまいといふのは余の旅行中の嚴重な掟である。荷物は二つに分けて所謂兩掛といふものにして肩へかける。脚は脚絆草鞋で固めることはきまつた話であるが、草鞋掛の足袋は底が拔けても指が現れても決して捨てぬ。旅費の節約を旨とするからである。これで笠を冠つて蓙を負へば旅裝は完全する。……宿屋へ着けば、必ず宿料の談判をして安くさせる。必ず辨當を詰めさせる約束をする。一日は一日の節約をして、一日の豫定額のうちから十錢でも二十錢でも翌日へ繰越が出來れば心は甚だゆるやかである。……宿料を安く泊れば宿屋に不平が起らぬ。風呂の加減も聞いてくれる、お給仕もしてくれる、床も敷いてくれる、余は却つて氣の毒に感ずる位である……」——（全集、第六卷、三八六——三九六、「旅行について」——）

かうして氏は殆んど日本全國を旅して歩いた。その旅中、自然人事は勿論、終ひには寺々の有名な鐘や、佛像を見て歩いたことは誰しも周知のことであらう。

旅中に於て右の如く細心なる氏は、家に歸つても律義な大家の小旦那様であつた。

「東京へ養子にやりし弟に男子出生、兩親上京、舊正月を一人にて留守居す。然るに一昨夜「芋掘り」の兼次の兄癩病持の太一死去、今日葬式にて下男下女を手傳にやる。一時はガランとした家に十五の下女と小生と只二人になる。年始客來る。困却す。葬式の場へ人を迎へにやつて客への御馳走をつくる。……夜になりて葬式の義理に行く。」——（全集、第六卷、一〇四——一〇五頁）

氏は正岡子規のすゝめもあり、また自分も好きで百姓をしたと一般に傳へられてゐる。然しその「百姓をした」といふのはどの程度のことであるか？ それは氏の家柄を知れば分ることである。即ち氏は百姓の差圖をしたのである。竹林の栽培や堆肥の製造も、氏がやつたと云へば大したことのやうであるが、差圖をしたと云へばそれで信ぜられる。「日さへ明ければ田畑に出る百姓は私の相手ではなかつた。……私の村に相手になつてくれるものがないといふのは、私と百姓との間には生活狀態から自然著しい隔てを生じて疎通し難い點が多いためである。」——（本集、第二卷、二五七頁）と氏自身も云つてゐる。また村の青年達の指導といふことも同樣の程度なのである。

村人に對する氏の態度は、つまり溫情主義であつた。

「僕は數年前から梅を四段步程植ゑて置く。これは其收入だけを一家の經濟とは別にして置いて、それで村の貧乏な小作人のために色々な有利な方法に消費したいと思つてゐる。僕は性質が狷介で直高を好むから、自然忌まれるやうになる。陽に從つても陰に逆ふやうな傾がないとも云はれまいと思ふ。だから僕にはその緩和劑が必要である。何も百姓共を籠絡しようといふのではない。……百戸の村で一年に百五十圓か二百圓もあればそれが殆んどすべてのものを霑すことが出來るのである。實に容易なことでありながら富者は決してそんなことをしない。僕はこんな小さな未來を空想しつゝ梅の枝を剪む幾分の愉快を感ずる。」——（八集、第五卷、五四二——五四三頁）

氏は徹頭徹尾、生眞面目な細心な努力家だつたのである。漱石の「滿韓所々」をくさした心持ちはよく分る。そして藝術に對しては飽くまでも眞劍であつた。「土」を書く時の努力——小學校の圖書室を借りて書いたことや、事實の正確を期するため、「早苗振りのある家へ招いで貰つてその夜の實際を見る。博勞を賴んで歌をうたはせる。瞽女に錢をくれて無智な青年に組してその唄を聽く。巫女を賴んで口よせをする。爺婆の群に酒を與へて念佛仲間の行事を見せて貰ふ。眞夜中に十町の畔道を鬼怒川の堤まで辿つて、おつぎがモロコシを棄てるといふ記事の正確を期した。」——（橋爪孝

一郎、アララギ、長塚節追悼號、一一四——一一五）

氏は霞ケ浦を題材にして「土」以上の小說を書かうと目論んでゐた。然しこれは準備が足りない、準備が足りないといつて筆をつけないうちに、あの悲しむべき病とそして死とに襲はれてしまはねばならなかつたのだ。

惜しいことではあるが、私達は「土」を以て滿足しなければならない。が、「土」さへあれば氏のユニークな藝術境——寫生に徹した境地は分る。そしてこの境地は、自然主義の作家達、乃至當時の反自然主義の作家達の誰一人及び到り得ない境地だつたのである。明治大正文學史上に於ける長塚節は、この寫生といふ境地に一頭地を拔く存在として永く後世に生きるであらう。

自然主義雜考

——歐洲近代文學の影響について——

本間久雄

自然主義が明治末期の大きな文學運動であるばかりでなく、又一種の人生觀上の大きな運動であつたことは改めていふにも及ぶまい。しかし、この自然主義も、明治時代のわが國の他のあらゆる文化運動と同じくその芽生えが外國から移し植えられたものであつた。尤もどんな芽生えでも、それを培ひ哺むだけの土地がなければ成長しないわけであるから、わが國の自然主義が、全然、外國のそれの模倣だといふのではない。自然主義があれほどわが國に榮えたのには、たとひその芽生えが外國にあるにしても、わが國のその當時の時代的雰圍氣が、それを養ひ育てるやうに準備されてゐたからであると云へる。

文藝上の自然主義の名をいち早く我國に紹介したのは私の知れる限りでは恐らく森鷗外博士であらう。博士の文集『つきくさ』（明治二十九年）の序の中に收められた（明治二十五年一月の稿になつた）『エミル・ゾラが沒理想』と題する文の中に「實際主義といひ、極實主義といひ、自然主義といふ。その言葉はおなじからずといへども、孰か沒理想ならざる云々」と云つてあるのが、少くも私の眼に觸れた限りでは、わが文壇の最初の文字であつた。

自然主義については鷗外博士は同じ書の序文で「世界の舞臺でいふ第十九基督世紀は最早お仕舞に近くなつて來た。その間に際立つて吾人の眼を射る文學の方の新顯象から云へば、佛蘭西のゴンクウル、フロオベルこの方の製作に、自然主義といふ名のついた一種特異な產物がある」と云ふ書出しで、自然主義が、「どこまでも實際のまゝを平に叙して、くだらぬ事をも除かず、特色のあることにも氣をとめぬこと」を特色とすること、及び自然主義が遺傳の法則を重大視するのは、ラマルクが發見して、ダルヰンに活用された法則を詩の境に持つて來たものであること、並びに自然主義が人間の動物性を誇張するのは、イタリイのマンテガツツアやドイツのクラフト・エビングなどの醫學上の學說を詩に適用したものであると述べたのちに、「さてかやうな風潮がいつまでも人に滿足を與へるわけにゆかぬのは、始から分つてゐる」と云ひ、「スカンヂナギアの偏屈者イブセンと佛蘭西の野蠻人ゾラとの全盛時代はいつか過ぎ去つた」と云つてあるところから推しても、ヨオロツパの自然主義運動に鷗外博士は好感を持たなかつたことが推測される。

坪内逍遙博士の文集『文學その折々』(明治廿九年)の中にテーヌの訃に接してものされた『故テーヌ』の一文の中にも、科學派(又は科學的主實旨義)といふ名目で、寫實主義及び自然主義のことが紹介してある。それによると、科學派が眞理の探究を主とすると、及びその眞理が、決して空想的眞理ではなく、「頗る確實に證明することを得べき客觀的即ち科學的眞理であること、並びにこの派が、近世フランスの文藝界全般に亘つた運動であることが細說してあり、「蓋しこの科學的主實旨義は、其の漸く極端に流るゝにおよびて、弊を生ぜしや爭ふべからずといへども、其の志望と努力とが嚴として一致し、恰も大川の堤を切つて一方に橫流したらんが如くなりしは、豈稀有の壯絕觀と稱せざるべけんや」と云つて、公平に穩健に、紹介してある。とにかく明治廿五六年からすでにフランスの寫實主義又は自然主義がわが國に紹介されてゐることがわかる。

その後自然主義の學說としては、森鷗外博士がフオールケルトの美學上の諸問題を論じたものを『審美新說』と題して明治卅三年に出版されたもの、中に窺ふことが出來るが、モウパッサンやゾラなどは、二十年代末からぽつ〱翻譯されたり讀まれたりしてゐた。三十年以後になつては、一般外國文學の輸入紹介と共に益々これら自然派の作家は吾が讀書界に迎へられた。高山樗牛などもゾラを推賞した一人で、例へば明治卅四年にものした長論文『文明批評家としての文學者』の中にはゾラを以て、イプセン、トルストイ其他の近代作家と共に文明批評家として論じてゐる。

其頃のわが文壇には就中ゾラは、異常な刺戟を與へたらしく、明治卅五年出版の永井荷風氏の『地獄の花』と題する小說の次のやうな跋文などはたま〱このことを證明する一つの例である。

人類の一面は確かに動物的たるをまぬかれざるなり。これその組織せらるゝ肉體の生理的誘惑によるとなさんか。將た動物より進化し來れる祖先の遺傳となさんか。そはともあれ、人類は自ら其の習慣と情實とによりて宗教と道德を形造るに及び、久しく修養を經たる現在の生活に於ては、この暗面を全き罪惡として名付くるに至れり。斯く定められたる事情の上に此の暗黑なる動物性は猶如何なる進行をなさんとするか。若し其れ完全なる理想の人生を形造らんとせば、余は先づ此の暗面に向つて特別なる研究をなさゞるべからずと信ずるなり。そは實に正義の光を得んとする法廷に於て、必ず犯罪の證跡と其顚末とを、好んで精査するの必要あるに等しからずや。されば余は專ら祖先の遺傳と境遇とに伴ふ暗黑なる幾多の欲情と腕力暴行等の事實を憚りなく活寫せんと欲す。

ゾラはその『ルウゴン・マッカアル叢書』の序文において、自己の態度を宣言して『個人の集合から成る家族と社會との關係交涉を明かにする前に先づ古き家族が新しい十幾人の子孫を殘して滅絕すると假定せよ。そしてその十幾人の男女の子孫は各自が前家族から傳承した遺傳性と、その薄命な境遇との結果から幾多の悲劇が生れると假定せよ。さうい

ふ場合には吾々は、まづその遺傳と境遇との二つを精細に研究して、一が以て他を生ずる所以を精細に研究しなければならぬ。」と云つたが、この宣言を、上の荷風氏のと并せ見るときは、荷風氏がいかにゾラの影響の下にあつたかは、恐らく思ひ半ばに過ぎるであらう。

尙小杉天外氏の作にも、皮想的ではあるがゾラの影響を所在に認め得る。しかしゾラは、科學的人生觀とか科學的研究法とかいふことのまだ歐洲ほどには旺んでなかつた其頃のわが國には、不向であつたせいか、それとも他に何等かの事情があつたせいか、芽生えだけで、つひにわが國土には成生することなくて了つた。わが國の自然主義運動に、大きな影響を與へたのはむしろフロオベルとモウパツサンとであつた。わが國の自然主義運動の當時の合言葉であつた「無念無想」とか「傍觀的態度」とかいふのもフロオベエルの立場や態度を傳承したものであつた。それからイブセンも亦わが自然主義運動には重大な影響を與へてゐる。

イブセンが、我國に傳へられたのは、逍遙博士の明治廿五年十一月の『ヘンリツク・イブセン』で（『梨園の落葉』）所載の一文であらうか。鷗外博士の『つきぐさ』の中にもイブセンの名が見えてゐる。明治卅三年頃になつては、他の海外文學と同じく、外國文學の研究家には切りに愛讀されたらしく、樗牛の文藝評論などにもイブセンが切りに引合に出されてゐる。其後ニイチエ主義の喧傳されると共に、おのづからわが讀書界にイブセン熱が勃興し、やがてわが自然主義運動の一つの重大な役目であつた因襲打破とか、偶像破壞とかいふことには、直接間接にイブセンの思想が異常な影響を與へることゝなつた。わが國自然主義運動の合言葉の一つであつた「現實暴露の悲哀」といふことも、このイブセン思想のもたらした結果の一つであつた。

自然主義時代に演ぜられた『朝日文藝欄』の役目

森田草平

自然主義をわが國の文壇に於ける一つの主義主張として大いにその宣傳に努めたものは、何と云つてもその頃英國から歸朝して『早稻田文學』の牙城に據つた島村抱月氏とその一黨であつた。勿論、それ以前にも自然主義は我が國に傳へられてもゐれば、その作品も紹介されてゐた。私一個の經驗から云つても、それよりずつと以前に『文學界』の殘黨(?)たる馬場孤蝶先生から自然主義の傳授を受け、ドオデエの『サッフオー』やツルゲエネフの『ルディン』の英譯に依つて人生と藝術とに對する新しい眼を開かせられたものである。それが恰度私の高等學校から大學へ移つた年であつたと思ふから、明治三十六七年のことである。その後柳田國男氏や田山花袋氏からツルゲーネフの作品を借り出して來て、盛に貪り讀んだ。島崎藤村氏が『破戒』を持つて信州から出て來て、東大久保に居をトされたのもその頃のことであつたやうに記憶してゐる。が、いづれにしても、それ等は皆個人のことであつて、纏つた一つの團體として、一つのムーヴメントとして自然主義が唱導されたのは、何と云つても『早稻田文學』の功に歸さなければなるまい。(『破戒』の批評は『早稻田文學』にも出たと思ふから、その出版は同誌の出た後かも知れない。)

そして、それに呼應して立つたのが、田山花袋氏の『文章世界』であつた。この二誌が評論と作品と相俟つて文壇を支配してゐた時氏が即ちわが國に於ける自然主義の全盛期に外ならない。かう云ふ時代が、私が學校を出た三十九年頃

から明治の末年へかけて續いたものである。そして、自然主義が一代の風潮を支配した結果、自然主義、則現代主義現代を代表するものは何でも自然主義であると云ふやうに世間からも思はれ、自然派自身でもさう自惚れるまでに到つた。事程左樣に隆盛を極めたものである。

『朝日文藝欄』はかう云ふ時代に生れたのである。私はこゝに創設者夏目漱石先生の本質的な大に論及しようとは思はない。たゞ世間的なエラさ加減から見ても、彼のエラさは文壇のあらゆる風潮から獨立したものであつた。先生は最初雜誌『ホトヽギス』に依つて文壇に紹介された。併し先生の作はホトヽギスの寫生文とは別段關係がなかつた。寫生文は單なる寫生文である。それに加ふる何物かゞあるとすれば、所謂低徊趣味である。先生はこの低徊趣味に就いて云爲されたこともあつたが、決してこの趣味に終始されたのではなかつた。それは作品自體が證明してゐる。又この低徊趣味から云へば、先生の傾向は享樂主義に近いとも見られた。しかも先生の人格なり作品なりに現はれた傾向は、所謂享樂主義とは誠に緣の遠いものであつた。世間では先生の傾向を自然主義とは全然正反對の境地にあるものと考へてゐた。しかも先生の作の實際に就いて見れば、ジョージ・メレディスやヘンリイ・ジエームスをリアリスティックな作家だと云ふ意味に於て、飽く迄リアリズムに徹底した作家だとも云はなければならない。畢竟するに、先生はその當時の風潮の何物でもなかつたと同時に、又何物でもあつたのである。

で、この先生が私を助手として、東京朝日新聞の一隅に『文藝欄』を設けられた時、（そして、これが新聞の文藝欄の濫觴である。私を喚んで先づ第一に相談されたのは、この文藝欄を一般の讀者を相手とする新聞の文藝欄らしく、一黨一派のものとせず、汎く文壇各方面の寄書に待つか、それとも自分達同好の者だけで遣り切るか、その點はいづれとも自分一個裁量に委ねられてゐるから、何うしても構はないのだが、君の意見は何うだといふ意味のことであつた。私は勿論その時分はまだ年も若かつたし、それに先生の門に集まつた者の中では、最も深く自然主義に感觸れてゐたやうな

ものゝ、それはトルストイやドストエーフスキイのリアリズムであつて、日本の自然主義ではない。その頃『早稲田文學』や『文章世界』で唱導された無理想無解決にも反對なら、況んや平面描寫の新技巧には全然同意しかねるやうに考へてゐた處から、即座に自分達一味の者だけで遣つて見たいと申し出でた。それに『文藝欄』を助けてくれることになつてゐた小宮豊隆君を始め、その他の連中もやはり同意見であつた處から、とう〳〵『朝日文藝欄』は文壇の各方面に原稿を乞ふやうなことはしないで、(尤も、先方から寄書される分は詮議の上掲載するが)兎に角自分達だけで遣つて行かうといふ案を立てゝ、直ちに實行つた。それは私が『煤煙』を書いて大分經つた後であつたから、明治四十二年の末か、四十年であつたかと思ふ。執筆者としては、故先生が最も多く書かれ、前に擧げた小宮君、阿部次郎、安倍能成の兩君なぞが主として手傳つてくれた。殊に次郎君の『自ら知らざる自然主義者』は敵味方の間に大分大きなセンセエションを喚起したものである。想ふに、その時分は自然主義全盛の時代であつただけに、自分の素質なり傾向なりが果して自然主義の主張をその儘受け容れ得るかどうかも深く吟味しないで、徒らに流行に感觸れて、一人自ら自然主義者を以て任じてゐる向きも少なくなかつたらう。それは恰度後年の自稱社會主義者と同一轍である。さう云ふ浮薄な、自ら知らざる傾向に對しては、正に頂門の一針であつたらうと思ふ。その他能成君は『自己の問題としての自然主義的思想』を書いて、眞面目にその問題を考へてゐた。又小宮豊隆君が劇に興味を以て、在來の劇評家のそれ以外に新しい劇評を書き出したのも、その頃のことである。私としては、冷靜な科學的觀察者としての自然主義の態度には、飽く迄同感しながらも、しかも作者に頭から理想の把持を拒否するやうな態度や、作品から全然光りと陰翳とを取り去らうとする平面描寫の態度は、西洋の大きな實例を見てゐる上から云つても、何うしてもその儘承認する譯には行かなかつた。で、已むを得ず、その間の折衷案として、『理想主義的自然主義』と云つたやうな名稱の下に、自ら云はむとする所に切めても表現を與へようと試みて見たこともある。

これを要するに、『朝日文藝欄』の態度は決して自然主義に對する反動ではなかつた。寧ろ自然主義の主張を純粹にして、これを徹底させようとするにあつた。少なくとも、文藝上の主義主張は、自己の性向なり信念なりに根ざすものでなければならぬと主張する所にあつた。かくして自己に徹底することを重んじたがために、『朝日文藝欄』はどちかと云へば一人一黨であつた。それだけに又一つのムーヴメントとしての勢力は極めて微弱なものであつた。これは文壇でも政界でも同様である。ですから、私どもは決してわが『朝日文藝欄』が自然主義の反動として、後年に於ける自然主義沒落の価を造つたものであるなぞとは考へてゐない。それは寧ろ『白樺』一派、特に武者小路實篤氏一派の人道主義であつたやうに思ふ。一つは時代が自然主義に飽きて、自然主義自ら自滅を急ぎつゝあつたからだとは思ふが、強弩の餘勢にも比すべき自然主義を打ち倒して、それに取つて代つたものは、矢張り武者小路氏一派の人道主義と見るのが至當であらう。しかし人道主義の流行も餘り長くはつゞかなかつた。そして、その次ぎに來たものは、自然主義でも、享樂主義でも、人道主義でもない、凡てそれ等の主義傾向と黨派とを超越した一人一黨主義であつた。自己に徹して、自己に生きる！そして、意味ある作品さへ出せば、その人の主義主張は問はないと云ふことになつた。これが文藝の隆興を意味するか、衰頽を意味するか、私には分らない。しかし、少なくとも、煩鎖な主義主張の議論を聞かされないだけでも助かると思つてゐる。これで本當に自己に徹して、自己に生きることとさへ出來れば、十數年前に唱へられた『朝日文藝欄』の主張は始めて實現されると云ふものである。

『朝日文藝欄』はその後明治四十三年夏目先生の修善寺大患の翌年までつゞいて、先生の事情から終に廢止することになつた。で、この『文藝欄』と云ひ、自然主義の運動と云ひ、いづれにしても過去の問題である。そして、その當時敵味方（？）となつて鎬を削つた早稲田文學社から依頼されて、私が『朝日文藝欄』の話しをすると云ふのも、考へて見れば、面白い時の推移ではある。で、その個人的な面白さに釣られて、私は何の準備もなく、極めて不用意にその當時の漫談を試みた。若し他日機會があつたら、もう一度過去を振り返つて見て、それ相應の考慮を費やした上、改めてこの間の消息を語つて見たい。以上。――（昭和、二、五、二二）――

明治年間雜誌「ホトトギス」略史

高濱虛子

◇自明治三十年一月至明治三十一年九月（ホトトギス第一巻時代）

伊豫の松山で、柳原極堂の手で發行してゐた時代なのである。子規はじめ鳴雪、碧梧桐、虛子などが東京から應援して時々文章を送つたり俳句の選をしたりした位のものであつた。特に記録すべきたいしたものもない。たゞ子規の一たび日本新聞紙上に載せた「俳人蕪村」を轉載したり、又「日本人」誌上に載せた鳴雪、飄亭、碧梧桐、虛子などの評論を轉載したりした。

◇自明治三十一年十月至明治三十二年九月（ホトトギス第二巻時代）

第一號 に正岡子規の「古池の句の辯」が出た。これは芭蕉以前の俳句の歴史を概論して芭蕉の俳句の古池の句に至つて始めて自然と云ふものを詠ずることに美を見出したのである、と云ふことを説いたものである。芭蕉も古池の句に至つてはじめて自然美といふことを悟つたので、その頃の子規も自然を描寫することに俳句の眞目的のあること悟つ

て之を高調したものである。俳句の寫生主義はこの前後より意識された。

同じく第一號に虛子の小品文「淺草寺のくさ／＼」がある。いくらか元祿の文章の模倣をしたやうな綾、省略、頓智、かけ言葉等で、面白味を出してゐるといふ傾きがあるが、而しながら描いてある事がらは淺草奧山の繁昌雜閙の模樣であつて、見聞したことを親しく手帖に書き取つてこれを敍したものである。俳句の自然描寫と言ふことを文章の方に應用したものである。後の寫生文の濫觴である。同じ紙上に子規の「小園の記」



夏目漱石氏

「土達磨を毀つ辭」等の小品文があるけれども、これらは從來の文章の型であつて未だ寫生文と稱すべきものではない。

第二號　には子規に「車上所見」といふ文章がある。これは前號の「小園の記」「土達磨を毀つ辭」などよりも一層寫生文とも云ふべきものであつた。

同じく二號に夏目漱石の「不言の言」なる隨筆がある。これは漱石の和漢洋の學問に深いといふことの知ることの出來る種類のものである。また漱石が文學雜

誌に原稿を寄せた最初のものであつたらう。

第三號 に子規の「蕪村と几董」と題する評論が載つてをる。

「文學美術評論」の欄下に寫生寫實を論じた子規の文章があつた。主として繪の寫生を論じたものであるが、子規の寫生に對する意見を伺ふことが出來るものである。

第五號 に虛子の「半日あるき」と題する紀行文がはじめて言文一致で書かれてゐる。

第六號 に「炭太祇」と題する子規の評論がある これは始めて太祇の優れた作家であることを文壇に紹介した文章である。

第七號 に漱石の「英國の文人と新聞雜誌」といふ文章が載つてをる。これは英國に於ける文人の文章と新聞雜誌との關係を述べたものである。西暦一千六百二十二年頃からのことが書いてある。該博な知識を述べたものである。さうして注意すべきことはこの文章も言文一致で書かれてゐることである。

この卷を通じて蕪村句集の輪講が載せられてをる。これは已に第一卷の半ばごろから連續してゐるものである。

尚以上に擧げたもの丶外子規、虛子をはじめ碧梧桐、鳴雪、四方太、把栗などの小品文、評論、雜筆等が載つてをる。

又淺井默語、下村爲山、中村不折等の口繪及裏繪が載つてゐる。世人が之を以てホトトギス一派の俳畫と見た。

◇自明治三十二年十月至明治三十三年九月（ホトトギス第三卷時代）

二號

子規の「闇汁の圖同じく圖解」といふものが出た。これは病床に横はつてゐた子規がたまたま車に乘つてホトトギス發行所を訪づれた、そこで遽に人を招來して闇汁の會を催した、その時の清興を筆にしたものであつた。子規の病中半日の興味が短かい文章のうちに現はれてゐる。同じく柚*

四方太の文章が大いに振ひはじめた。



高濱虛子

*味噌會なる文章もある。これは露月の郷に歸るのを送る文章である。

三號

「根岸草廬記事」と題するものが載つてをる。それは四方太、青々、子規、碧梧桐、虛子の五人が一日根岸の子規の庵に會して快談したその時の記事である。この時から以後

六　號

寒川鼠骨の「ふうちやん」といふ文章が載つてゐる。

七　號

鼠骨の「新囚人」といふ文章が載つてゐる。これは鼠骨が新聞「日本」の署名人であつた爲めに或る政治上の事件で罪に問はれて獄に下つた記事である。鼠骨の寫生文に名をなしたのはこの「新囚人」に始まる。

八　號

碧梧桐の創作「魚屋」、虚子の創作「丸の内」といふものがのつて居る。

十　號

子規の「車上の春光」と題する文章が載つてをる。これは春光に唆かされて病人の子規が車に乘つて伊藤左千夫を訪ふた記事である。わざと二人乘の車に乘つて行つたと書いてある。その患部に障らぬやうに車上に身體を横へて行つたものであらう。その日も左千夫のところで話してゐるときに熱が昇つたといふやうな記事もあり、翌日は四十度に昇つたといふやうな記事もある。

十　二　號

「水滸傳と八犬傳」と題した子規の文章がある。これはかなり長文で「水滸傳と八犬傳」を評論したものである。子規

の以前愛讀したこの兩書を評論することは子規の病床の慰藉ともなつたものである。

この卷にも子規、虛子、碧梧桐、杷栗、四方太、青々、鼠骨、鳴雪等の寫生文や隨筆、評論等がある。

前卷には子規、碧梧桐、露月、虛子などの和歌が載つてゐたが、碧梧桐以下の俳人の和歌はこの三卷に至つて跡を絕つた。和歌の方面では左千夫、秀眞、麓などが出て來て子規も專らそれらの人と硏鑽してゐた。ホトヽギスは俳句の方面と文章の方面との發表機關たる觀があつた。文章では第一卷は子規、虛子、碧梧桐を數へるに過ぎなかつたが、この三卷に至つて四方太、鼠骨、青々等を見るに至つた。

◇自明治三十三年九月至明治三十四年十月(ホトトギス第四卷時代)

一號

岡麓谷(麓)の「蛇のから」と題する文章がある。淺井默語の「巴里消息」といふ通信文がある。これより後中村不折も渡佛し相島虛吼も渡米したのでそれ等の通信がとき〲出てゐる。一號の裏繪は寺田寅彥が未だ熊本の高等學校にゐる時分に描いた繪を漱石から子規のもとまで送つて來たものを載せてゐる。

募集文章に鹿取秀眞の「鑄物日記」伊藤左千夫の「草花日記」などがある。やがて歌人たちも文章に傾きかけて來たことを證明することが出來る。

二　號

藤井紫影の「古俳書の諺」と題する文章がある。

六　號

子規の「くだもの」と題する文章がある。これは特に果物の好きな子規が果物についての種々の知識感想を述べたものである。

七　號

「六阿彌陀詣」と題する碧梧桐、鼠骨、四方太、虛子の紀行文がある。

夏目漱石の「倫敦消息」がある。これは病床の子規を慰める爲めに倫敦遊學中の漱石の起居を報じた文章である。從前あつた隨筆などの該博な知識を土臺としてゐるものとは違つて、これは子規に宛てた肩の張らない寫生的消息である。後の漱石の創作の素地とも見るべきである。

十　號

佐藤紅綠の「參禪」と題する文章がある。是亦後の紅綠の演劇通俗小說等に立つに至る素地を見るべきである。

◇自明治三十四年十月至明治三十五年九月（ホトトギス第五卷時代）

四號

淺井默語と和田英作兩人合作の「グレー日記」といふ文章がある。これは巴里に遊學中であつた兩人がグレーの秋色を探つてその記事を繪と共に送つて來たものである。

六號

直木燕洋の「大西洋」と題する文章がある。そのほかこの頃は漱石、不折、虛吼などの海外に於ける通信記事がたくさん載つてをる。

七號

子規の「病床苦語」と題する文章が載つてをる。

十一號

子規の「天王寺畔の蝸牛廬」と題する文章がある。これは十年前子規が天王寺畔の露伴を訪ふた記事である。

同じく子規の「九月十四日の朝」と題する文章がある。これは前夜看護の爲め泊つてをつた虛子に朝眠さめたとき氣もちがよいからと云ふので筆記さした文章である。さうしてその文章の終りの頁に「九月十九日午前一時子規氏遠逝せり」といふだけの文字が大きい活字で出てをる。

◇自明治三十五年十月至明治三十六年九月（ホトトギス第六巻時代）

一　號

巻頭に內藤鳴雪の「ホトヽギス六巻一號のはじめに」と題する文章が載つてゐる。子規沒後、同人一同の結束して行くべきことを書いたものである。

四　號

子規追悼號として出されたもの。

五　號

四方太、碧梧桐、虛子三人湯河原に遊びたる「湯河原日記」といふもの載り居る。

十　號

漱石の「自轉車日記」載り居る。西洋に居る時分に自轉車に乘つた記事である。歸朝後はじめての文章である。

之を要するに六巻は子規沒後四方太、碧梧桐、虛子等が小品を書いたり文章、俳句の選をしたりして雜誌を維持して居つた時代である。

◇自明治三十六年十月至明治三十七年九月（ホトトギス第七卷時代）

總じて之を言へば碧梧桐、虚子俳句を論じ、四方太、鼠骨等寫生文を作るともいふべき時代だ。

日露戰爭のはじまつた歳で、俳人で從軍したもの、幷に滿洲地方に在つたものなどの、戰爭記事を寄せたものが多い。津田青楓の投書なども載つてをる。

第十二號 に虚子の連句論が載つて居る。之が後ちに漱石、虚子等の連句を作り、俳體詩を作るに至つた動機となるものである。

◇自明治三十七年十月至明治三十八年九月（ホトトギス第八卷時代）

第一號

虚子、四方太、漱石三人の連句が掲載されてある。

虚子の俳體詩論が載つてゐる。

漱石、虚子等の俳體詩が載つてゐる。

第二號

漱石、虛子の俳體詩「尼」が載つてをる。

第三號

不折の「ロダン先生を訪ふ」といふ文章出てをる。

第四號

漱石の「我輩は猫である」第一回が出て居る。

子規の「仰臥漫錄」が載つてをる。

第五號

猫の續きが出て居る。以下殆ど每號續載されて居る。

第七號

漱石の「幻影の盾」が載つて居る。

寺田寅彥の「團栗」といふ創作が載つて居る。

第九號

寅彦の「龍舌蘭」が載つて居る。

第十號

不折の「佛國土產」としてローランス筆將軍マルソーの死以下二十四枚の繪畫の寫眞版が載つて居る。

これを要するに九卷は在來の四方太、鼠骨の寫生文。碧梧桐の俳句に關する雜筆等のほかに新たに崛起した漱石並びにその門下の小說、俳體詩の類が載せられて居る。殊に漱石の「我輩は猫である」は目覺しき衝動を文壇に與へた。

◇自明治三十九年十月至明治四十年九月（ホトトギス第十卷時代）

第一號

寅彦の「嵐」が載つて居る。

第二號

漱石の「文章一口話」が載つて居る。

第四號

漱石の「野分」が載つて居る。
鈴木三重吉の處女作「山彦」が載つて居る。
寅彦の「森の絵」が載つて居る。

第五號

野上彌生子の處女作「縁」が載つて居る。
寅彦の「枯菊の影」が載つてゐる。
四方太の「夢の如し」が載りはじめた。この文章は四方太の今まで務めて居た彼の寫生文が大成された感があつた。

第七號

虛子の「風流懺法」が載つて居る。これは虛子の今までの寫生文が漸く小說の域に踏み入らうとしたものである。

第八號

虛子の「斑鳩物語」が載つて居る。

第九號

野上彌生子の「七夕さま」が載つて居る。

第十號

虚子の「大内旅宿」が載つて居る。

是を要するに從來築き來つた寫生文が小說の形を備へ來つたこと丶又別途に漱石の門下が擡頭し來つたことが此卷の重要な出來事である。

◇自明治四十年十月至明治四十一年九月（ホトトギス第十一卷時代）

第一號

寅彦の「やもり物語」が載つてゐる。

虚子其他の「俳諧散心」と題する俳句が載つて居る。

第二號

長塚節の「佐渡ヶ島」が載つて居る。

片上天弦の評論が載りはじめた。

第四號

小說附錄といふものがくつついて左千夫、四方太、彌生子、鼠骨、寅彦、虛子の創作が載つてゐる。又天弦の「文壇最近の趨勢」といふ評論が載つてゐる。

第六號

長塚節の「芋掘り」といふ創作が載つて居る。

第七號

寅彦の「伊太利人」左千夫の「春潮」といふのが載つてゐる。
漱石の論文「創作家の態度」といふのが載つてゐる。

第八號

虛子の「續風流懺法」が載つて居る。

第十號

鈴木三重吉の「鴉物語」が載つてゐる。

第十二號

漱石、不折、四方太、鼠骨、左千夫等の子規追懷の文章が載つてゐる。

◇自明治四十一年十月至明治四十二年九月（ホトトギス第十二卷時代）

第一號

漱石の「文鳥」、寅彦の「花物語」、碧梧桐の「帶地」、鼠骨の「夏の雨」、彌生子の「病人」、左千夫の「紅黄錄」が附錄となつて載つて居る。

第二號

加納作次郎の「藥種屋のイブセン」といふ文章が載つてゐる。

第三號

四方太の「寫生文と小說との區別について」といふ文語が語つてゐる。

第四號

節の「開業醫」、寅彦の「マヂヨリカ皿」、鼠骨の「馬車」、左千夫の「胡頽子」、臼川の「破甕」、虛子の「三疊と四疊半」が附錄となつて載つて居る。安倍能成の「野尻湖日記」が出てゐる。

第五號

小宮豐隆の「文藝に於ける眞の四種」といふ評論文が載つて居る。

第六號

加能作次郎「ゴルキイの木賃宿」といふのが載つて居る。以下毎號位に作次郎の此種の文章が載つて居る。

附錄として左千夫、彌生子の創作、小宮豐隆の論文が載つて居る。

第九號

虛子の「興福寺の寫眞」といふ文章が載つて居る。

第十號

小宮豐隆の「ダヌンチオの死の勝利と森田草平の煤煙」といふ評論が載つてゐる。

第十一號

安倍能成の「近代文藝の研究を讀む」といふ文章が載つて居る。

第十二號

伊藤左千夫の「奈々子」長塚節の「おふさ」といふ創作が載つてゐる。

◇自明治四十二年十月至明治四十三年九月（ホトトギス第十三卷時代）

第一號

四方太、左千夫、臼川、彌生子、節、津田青楓、山崎樂堂等の創作、小宮豐隆、片上天弦等の評論が載つて居る。

第三號

彌生子の「墓地を通る」といふ創作が出て居る。

第四號

三重吉の「小猫」、鼠骨の「見送り」、左千夫の「眞面目な妻」、節の「隣室の客」、能成の「自己の問題として觀たる自然主義的思想」、魚住折蘆の「美術上の基督」が載つて居る。

五明句稿、春興、秋の風六吟歌仙等が附錄として載つて居る。

第八號

彌生子、左千夫、青木健作、篠原溫亭、安倍能成、山崎樂堂、萩原羅月、衞藤東田等の創作並に評論が載つて居る。

第十二號

虛子の露月を「女米木に訪ふの記」といふ文章が出て居る。加能作次郎の處女創作「恭三の父」といふ創作が出てゐる。

◇自明治四十三年十月至明治四十四年九月（ホトトギス第十四卷時代）

第一號

附錄小說といふうちに彌生子、作次郎、左千夫、虛子、天弦等の文章が出て居る。

坂元雪鳥　野上臼川の修善寺に於ける漱石の病狀を報じた文章が載つてゐる。

第二號

ケーベル博士の「背教者ユリアーヌス序文」が載つて居る。

第三號

メレシユコフスキー著島村苳三譯の「背教者ジウリアノ」が全號を埋めて載つて居る。

第五號

虛子の「東京市」と題する文章が載りはじめる。

第九號
小宮豐隆、安倍能成、阿部次郎、鈴木三重吉、森田草平の創作を集めた五人集と題したものがこの號である。

第十號
野上彌生子の「父親と三人の娘」と題する創作が載つて居る。

◇自明治四十四年十月至大正元年十月（ホトトギス第十五卷時代）

第一號
虛子の「秋の濱の犬」と題する寫生文がある。

第三號
虛子の「澤子の嘘」其他九編の寫生文が載つて居る。虛子の「子規居士」と題する文章が載りはじめる。

第四號
虛子の「河童の宿を訪ふの記」其の他の文章がある。

第五號

虛子の「鳥羽の一夜」と題する創作がある。

第七號

虛子の「お七」と題する創作が載つて居る。

第九號

德川秋聲「晝寢から覺めて」中村吉藏の「ストリンドベルドのこと」島村抱月の「故鄕實演後の所感」等が載つて居る。

第十號

近松秋江の「本間久雄君と加能作次郎君とに對つて藝術談を仕掛くる書」と題する文章が載つて居る。

虛子の「子どもらに」と題する霞ヶ浦の紀行が載つて居る。

第十一號

これはもう大正元年になつて居る。

之を要するに、此卷より變革を來して、紙上には虛子の文章を見るのみとなつた。他の人の文章も時々之を見るけれども、從來とは面目を一新した。さうして同じ狀態を持續して昭和の今日まで來てをるのである。

山吹三十章

島田青峰輯

飛石や雨の山吹覆ひ被り　烏夕
山吹やこゝら伏樋のある處　同
上げ泥に裾葉埋れぬ濃山吹　同
山吹に砂引の道盡く玄關かな　一少年
山吹に芝冷えて來し暮色かな　同
山吹にしば〳〵及び棕梠の風　同
山吹を井に掘る土の盛られけり　映月
山吹に噴水遠く上りけり　雪江
垣漏れし濃き山吹や訪へり　竹窓
山吹の垣をへだてゝ隣りかな　啓堂
雨風や花山吹を就中　匏生
山吹を束ねる姉に傘さして　同
山吹の濡れ色かため咲きにけり　孤仙子

山吹や部屋吹き通す庭の風　樹雲
絶え間なき水車しぶきや濃山吹　蝶夢
山吹の木戸明けて入る空家かな　竹洞
山吹の垣又添うて曲りけり　東台子
山吹に輝く月や雨上り　同
山吹に午後の張板裏返す　猛子
山吹に雨ひねもすの暮色かな　露十
掃き觸れて山吹暫し搖らぎ居り　如卯渓
山吹に窓の灯とゞく籬かな　瑩風
激つ瀬に山吹一枝搖れ止まず　同
夕風や山吹散れる渓　春冠子
山吹のいつ咲き了へし籬かな　不知火
峰寺や山吹晴るゝ女坂　叔人
せゝらぎや搖られどほしの濃山吹　ひさし
人去りし釣瓶雲や葉山吹　明舟
水暮れて八重山吹の花明り　裕水
山吹の土にまみれて久しけれ　青峰

西洋小說の讀始めと書生氣質の材料

高田早苗

左は近く公けにされる高田早苗博士著『半峰學人昔ばなし』の一節で、特に乞うてこゝに揭げることにした……（記者）

私が其昔東京大學に在學中（明治十一二年の頃）丹乙馬といふ私の親しい友人があつた。此人は結局大學を卒業せずに退學して或る仕事に關係し間もなく死んだのであつたが、併し英語には頗る熟達し、讀書力に於ては同級生中無比の人であつた。私も英語の方面には相當自信があつたのであるけれども、此の丹君には一籌を輸すると考へて、半分ばかり兜を脫いだ事も屢ばあつた。

此の丹君は、私の知る限りでは日本に於て西洋小說といふものを始めて讀んだ一人であると思ふ。丹君は始めて西洋小說――其書は何んであつたかは忘れた――を自分で讀み、其事を私に物語つて、非常に面白いものであるから是非私にも一讀せよと勸めた。私も其氣になり、二三冊西洋小說を讀み出した。すると一日、散步に出た折り、古本屋でウェバレーノブルスと題した金線の立派な本を見付けて、ノブルは小說と心得て居る處から安く値切つてそれを買つて歸つて耽讀した。

私が最初に讀んだのは、ロブロイといふスコットの小說であつた、ウエバリーノベルスの中でロブロイ程に、スコッチ方言の多いものは他に少ないと言はるゝ。それを私が最初に讀んだのであるから何の事かわからなかつた。併し前にも話した通り、私は八犬傳や弓張月で頭が出來て居るので、無茶苦茶に筋を辿つて讀み了つた。是に興味を覺え、アイバンホー、ケネルオース・タリズマン、ガイマナリングなどを讀み耽ける面白くて堪らなくなつた。其中、丹君は自分の讀んだ西洋小說を讀むことを私に勸め、殊に、其の當時世人の多くは知らなかつたが、近頃でも大分世間で珍重するエドガー・アラン・ポーの小說なども丹君の勸めに依つて讀んだ爲に可なりな西洋小說通となつた。

そこで私は、元來、馬琴とか團十郎とかいふ話が兩人間の交渉を益々厚くする種となつたのみならず、最初名古屋に居る時分から其地の大貸本屋の小說を大概讀んだといふ親友坪内雄藏君にも西洋小說を讀む事を勸めて、遂に此人も亦西洋小說通の一人となつた次第である。斯んな次第で、我々は當時の大學生中自分達のみが西洋小說讀みと思つて居ると、或時東大の近くにある牛肉屋へ登つて飯を食つて居ると隣席に、岡倉覚三、福富孝季の兩君が居た。此の二人は我々よりも二學年の先輩であつて、談偶ま西洋小說の事に及ぶと、岡倉君は頻りに、キクトル・ユーゴーの「レ・ミゼラブル」の話をする。又福富君は、ヂューマのモント・クリストの話をし出した。私も負けぬ氣でスコットのアイバンホーの略筋を語り、互に頗る興味を感じたのであつた。西洋文學、殊に其小說を日本の學生が讀み始めたのは其頃からと思ふ。

尤も、其頃私共は文學部の課程として、沙翁は勿論、チョーサー、スペンサー、ミルトン、ドライデンなどいふ樣な英國詩人の作品を讀む事が正科の中に加はつてあり、ホートンといふ英文學先生の懇切丁寧な教を受けて居たから、外國文學の趣味は既に多少持つて居たに相違ないのである。

私は文學部在學中、頗る不勉強な學生であつた。私のみならず、同級生は大概怠け者で唯一人の勉強家は有賀長雄君であつた。我々は怠け者だから正課は勉強せず、圖書館に行つては西洋小說を多く讀んだ。加之、卒業近くなつた頃に

は少々酒を飲む事も覺え、殊に私は生來、てんぷら好きであつたから私が先陣となり、坪內君、市島君、小田一郎君、石渡敏一君なぞいふ豪傑を引率して數屡々神保町の松月といふ天ぷら屋へ出掛て行つて飲み食ひしつゝ、或は文學論、政治論、又市島君が其頃得意であつた經濟論なども鬪して愉快を極めたのである。元より嚢中は限りあるから、神保町の有斐閣といふ古本屋へ我々の所持する書物を質に入れ、又は賣却して所謂軍用金に充てた。或る場合には、一つ橋通りから神保町の通りへ出る兩側のパン屋、牛肉屋へ借金が出來て其關門を通過するが容易でない爲スッポリ蝙蝠傘で顏をかくして通つた事もあつた。

然ういふ次第で、餘り天ぷら屋へ行き過ぎた處から、當時大學の副總理であつて、實際の指導監督者たる濱尾新先生に呼びつけられて大目玉を頂戴した事などもあつた。其時濱長先生は、一體君達は其處へ行く度、一人前何程の勘定を拂ふかと問はれた。私共は甚だ恐縮して、割前は大概一人廿錢前後であると答へた事を今尙記憶する。

實は頭割三十錢位迄遣つたのだが少々內端に答へたのであつたが、それにしても我々が飲食した分量から考へると、當時物價の安かつた事は今日の人からは想像の及ばん事と思ふ。

此の松月といふ天ぷら屋に連關して、今日の流行り言葉で言へば一つの、ローマンスとかいふものが起つた。そしてそれが種になり、坪內君の「書生氣質」が出來たか出來ないか、又私が其中に出て來る小町田養治であつたか否かは讀者の判斷に委せる外ないのである。隨分作者坪內逍遙君に直接此點を質問した人も少くない樣だが、明瞭な答辯を得ないのであつて、作者其人がはつきり言はんのに私が明瞭に意識する筈はない。兎に角此處には餘興として其のローマンスなるものを簡單に述べて見やう。それは實にくだらぬ事である、此の松月に、主人の妾の妹とかいふ娘があつて先づ天ぷら屋の女中中の稍や見るに足る代物であつた。これが折ふしお酌に出て來ると、一座の興を一層增したのであるが、私も多少それに對して何等かの考を抱いたものと見える。それが同人間の評判となり、坪內君の如きは其の姿をわ

ざ〳〵書いて私にくれたのである。そうこうする中其娘が藝妓となるといふ事で、我々が行つた時暇乞に出て來た。既に藝妓の下準備をして居たものと見えて、平生よりも一段美しく我々一同の目に映じたのである。そこで一同大喝釆をして其行を壯にした樣な譯であつた。

其中に、一度あの女の藝妓になつたのを見やうといふので、下谷の伊豫紋へいろ〳〵と算段して五六人で出掛け大騷ぎをした事があつた。大騷ぎと言つても其連中は一人たりとも藝妓を呼んだ經驗がなかつたのであるから、後で考へると隨分ぶまな騷ぎ方をしたのであつたらうと思ふ。併し其連中は私は元より誰一人、二の矢の繼げる者はないのであるから、話はそれで大團圓となつた。そんな事が若し材料になつたとすれば、坪內逍遙君即ち春の屋おぼろが書生氣質を書いた時に、或る程度迄役に立つた事であらう。唯に小町田賛治といふ點に於てのみならむ。其頃我々の行動は、所謂當時の書生氣質中に現はれて居るのであるから、總てを綜合すれば確かに作者逍遙君に相當の材料を提供したに相違ないと思つて居る。

こういふと當時の學生、殊に我々は不品行を極めた樣に誤解せらるゝ處もあるが、其實、磊落といふ事は少し有り過ぎたとしても、不品行といふ事は爪の垢程もなかつたのである。此事は友人の爲にも、又自分の爲にも爰に明言して置く。但し當時の東大三學部の多數黨は肩を怒らしたり、太いステッキを持つたりして妙な風に威張るのが、我々には氣が喰はなかつた爲に少々反抗的氣分から學生としては不謹愼な行爲が多少有つたかも知れぬ。と言つた處で、其の最高潮は天ぷら屋で酒を飲む位に止つた次第である。當時學生間の多數派は紺足袋黨で、我々は多く白足袋黨であつた。其邊の事から、當時の我々の氣持を今の人に察してもらいたいと思ふ。

時事消息 自四月十五日 至五月二十日

◇**日佛藝術社展** 四月二十日より日本三共ビル六階の日佛藝術社畫廊にて

◇**農民文藝會** 四月二十三日、加藤武雄氏宅にて同例會。

◇**帝大支那佛教研究會** 本郷佛教青年會館にて、四月二十五日、伊東忠太博士の「法隆寺建築及びその大陸との關係」について講演があつた。

◇**ザメンホツフ博士十年祭** 國際語エスペラントの創始者、同博士の紀念祭が、四月二十七日午後の六時から、お茶の水なる文化アパートメントに行はれた。

◇**土岐善麿氏渡歐** 四月二十七日午後七時二十分京都發で神戸に向ひ熱田丸に乘船渡歐された。

◇**千田是也渡歐送別興行** プリンス・ハアゲンを上演禁止された前衛座は、四月廿九日、千田君送別のため、築地小劇場に於て、晝夜二回の興行をなした。

◇**漫畫展** 四月二十八日から一週間、白木屋にて、同展第一回が開かれた。

◇**日本美術協會** 同協會第七十四回展、上野美術協會にて開催、五月一日より同十五日まで。

◇**萬鐵五郎氏死去** 五月一日同氏長逝した。惜しむべし。

◇**高須芳次郎氏慰勞宴** 同氏の主任せらるゝ「大隈侯八十五年史」の勞を慰する爲、五月五日、三共ビル內エンプレスに有志等は集つた。

◇**武郎會第二回講演會** 五月七日、讀賣講堂にて。秋田、吉江、石原、長谷川諸氏出演。

◇**無產者の夕** 五月八日、芝協調會館に於て開催。演劇、音樂、映畫。總て、日本プロレタリア藝術聯盟の手になるもの。

◇**宮島新三郎氏歸朝** 五月九日氏は遂に歸朝した。

◇**澤田撫松氏追悼會** 五月十三日、

◇**新劇協會** 帝國劇場にて、十五日より第五回公演。

◇**新ロシヤ美術展覽會** 勞農ロシヤ對外文化協會と我が日露藝術協會及び朝日新聞社との手によつて、五月十八日より同三十一日まで、朝日社五階に於て開催された。

新刊書一覽

◇**世界文豪代表作全集第六卷** 中島清譯、世界文豪代表作全集刊行會 非賣品

ゲーテのファウストの譯である。森鷗外氏の譯以外、我々はなほ既に一二の上梓されてゐる事を知つてゐる。ファウストの如き世界的クラシックは、いくらその譯があつてもよい。飜譯は、純正なる意味に於て、研究であり、創作でもある。創作だと斷定してしまへば、そこに當然議論が生じよう。が、その問題を超えて、如何なる意味に於ても「正しき」飜譯は創作である。飜譯としてのクラシックといふ事は、飜譯についての重點を、原作者自身及びその時代に置くか、又は譯者自身及び彼の時代に置くか、何れにせよ、それ〴〵の立場に於て「正しい」といふ事に於て成立する。此の譯者は、泰西の文藝作品を日本に移植する事の可能は、彼我の國情、習慣其他生活方法一般に渡つて相異れるとの餘りに甚しき爲め、泰西諸國相互間に於ける飜譯よりも、遙かに困難の度を加へ、自明の事たる語學力の深さを別とすれば、第一に文藝的創作の能力に俟ち、第二に其創作能力の個性

的適合な必須條件とする、といふ。それは正しい意見だ。なほ、譯者の熱心に結成した「ファウスト解說」が、本書の卷頭を八十三頁にわたつて、强く飾つてゐる。それは、「緖言」「史實及び傳說のファウスト。ゲーテのファウスト製作」「ゲーテ以前のファウスト文學」「ファウストの內面的考察――一、善靈と惡靈。二、哲學、科學、自然宗教。三、ヰルヘルム・マイステルとファウスト。四、諧謔、俳調」「ファウストの上演」「ファウストと後世」「我が生涯よりのグレーチヘン」と、七項にわたつて解說してある。

◇**硯友社と紅葉**　江見水蔭著　改造社發行　一圓五十錢　待ちあぐんでゐた文獻である。江見さんの好著である。現代的必然としての明治文學に對する我々の興味は、殊に又自然主義以後の時代に於てやつと文學的意識を持ち出だした若い者等にとつては、いくら明治初期殊に硯友社時代の文學に手を延しても、どうしても靴をへだてゝ痒きを搔くの感から脫し切れない。それは時代の甚だしき差異が生ぜしめる仕方のないものであるが、そして我々の立場がそれでも好いのだといふ批判的位置に當然又居るのではあるが、それにしても……と、何だか物たらなさを自分自身に感ずる。斯うした物足らないといふ感じを充たして吳れるのは、やはり本書である。本書が持つ多くの重大性の中の一つは、我々にとつて、確に右の點である。著者は曰く「……併しながら少壯の頃に考へてゐたのでは、事實は事實として正しく傳はるといふ、樂觀であつた。それが今日になつて見ると、餘りに裏切られ過ぎて、纔かの歲月を經ただけで明治文壇の事情は殆ど忘失され、偶々記憶されてゐるとすれば、それは誤解も甚だしいので、それでは責めて硯友社に就てだけでも、今の間に本統の事實を――包まず隱さず、書き遺して置く必要がある。然う自分は心着いたのであつた。」と。我々が例へば沙翁の研究するについて、沙翁の時代、特に個人に觸れた實生活に對して何等知る事が出來ないのは、ほんとの意味での批評的研究に於ても、又單に觀賞的な研究に於ても、やはり不滿を感ぜしめずにはをかない。然し、事沙翁に關する場合には、その不滿もなほアキラメル事が出來る。然し、非明治文學に關してはアキラメ切れない。不滿は一種の焦燥となつて現れる。此を醫して吳れるのは本書である。我々は好著を得た事を喜んで好い。まことに、本書の如きは、明治文學に興味を持つものゝ逸すべからざる文獻である。早稻田文學の讀者諸氏に對して、此所に今改めて、是非とも一讀されん事を希望致します。

◇**逍遙全集第三卷**　坪內逍遙著　春陽堂刊行　非賣品　近世日本文學史上に於ける坪內博士の功績を今更ら云々する事は不必要だ。我々は改めて氏に接して見る必要がある。本書には、新曲浦島、長生新浦島、新曲赫映姬、鉢かつぎ姬、傀儡人、金毛狐、一休禪師、お夏狂亂、初夢、小袖物狂、寒山拾得お七吉三、歌麿と北齋、和歌の浦、墮天女、常闇、聖德太子と惡魔等の諸名篇、新樂劇論其他三十二篇の舞踊論を收めてある。日本舞踊の特質及び、その行くべき道について考へる者は、是非本書を一讀すべきである。『新曲浦島』以下の名篇は、その文章の美、構想の斬新、又は雄大な點で千古の名篇である。

◇**上海**　村松梢風著　東京騷人社發行　一圓五十錢「騷人」主幹村松氏の小說である。內容は上海及び南京と二つに別れてゐる。卷頭に支那の裝ひをせる著者の寫眞がある。本誌讀者のうち、いつかの東京朝日新聞の三面に出た閑談を讀まれた方があつたら、此の寫眞を見て、微笑をもつてうなづかれるに相違ない。

上海、南京、國民黨の進出、民主派と共產派との喧嘩、而して此等と世界列國との闘爭——上海、南京は新しい興味を我々に呼び起す。

◇**綠の春**　中村武羅夫著　新潮社版　二圓五十錢　新刊小說において第一人の稱ある中村氏の最近作長編小說。「災厄の日」より筆を起し「勝ち得ざるもの」に終るまで、充分信賴を裏切られざるものである。

◇**新ロシヤ舞臺美術大觀**　昇曙夢編　新潮社發行　一圓三十錢　新ロシヤ・パンフレットの第八編である。一九一七年のロシヤ革命は、まことに人類史の一大エポックである。共產主義者は此の革命を以て、新しい人類史の第一頁となす。次の頁は、世界に於て如何に展開されるや？　此の第一頁を彩る勞農藝術の紹介が、此の新ロシヤ・パンフレットなるセリーズとなつて現れてゐるのであるが、本書はその舞臺美術に關する部門を取り扱つた好編である。最近、日露藝術協會及び朝日新聞社と、ロシヤ對外文化協會との主催の下に東京朝日會館に於て、ロシヤ美術展覽會が開かれる。最新のロシヤ藝術は、それが本國に於ける絕えざる進出と、又それに步調を合せる世界新興藝術の展開と共に、世界のヤンガー・ゼナレーションに取つて大きな生命の表現であらう、少くともそれは否定出來ない眼前の事實である。本書に集められたる畫集——立體派の舞臺美術、構成派及び其他のそれ、總計百葉に垂んとする。なほ昇氏の筆になる紹介文が附せられてゐる。

◇**藤娘**　小杉天外著　大日本雄辯會講談社發行　二圓二十錢　一年半にわたつてキング誌上に連載された長編小說。雜誌はキングだが、作者は天外氏。「千枝野は實在の某婦人をモデルにしたものであるが、其生活と行動を如實に描寫する事は、最初から作者の企圖したところでなかつた。先年、靈鐘が發表しつゝある頃、婦人は伯爵夫人のモデルが自身である事を覺つて居たらしい。會見する機會ある每に、賢く敏い婦人の顏には、作者などの眼の屆き切れない深い所に心を持つてゐると云ふやうな、矜持と冷笑が輝いて居た。千枝野はこの婦人の性格描寫として第二回の試である。」と。裝幀吉邨二郎氏。

◇**午後三時**　大黑貞治著　森林社發行　一圓六十錢　雜誌「森林」の同人として令名ある大黑氏の散文詩集である。「第一の墓」「默想」「午後三時」「心の廢墟」の四部に別る。智識階級的な感情を盛つた詩著である。

◇**女の夢**　飯田政良著　實業之日本社出
部　二圓三十錢　かつて大阪朝日新聞に連
された小說。德田秋聲氏の序文がある。又
者の自序があつて、その中にいろんな事が
いてある。逍遙、漱石氏などゝの色んな交
が。

◇**愛憎**　山中靜也譯　八天書房版　五十錢
アルツキバーシエフの五幕戲曲の譯である
「合衆國から英國へ向ふ前に、名??り紐
育街の或る本屋へ入つた時私の眼いつぱい
映つた背文字は此の書だつた。此貧乏旅客
とつても、その値二弗五十仙は少しも惜し
はなかつた」と。

◇**愛經**　今東光著　新潮社發行　二圓
西朝日新聞に連載されて、人氣を呼んでゐ
もの。新感覺派の闘士今氏の最初の、そし
最も力のこもつた、長編小說である。長編
家としての今氏の技倆は、これによつて充
に證される。

編輯後記

明治文學研究として『**自然主義前後**』を編輯いたしました。御覽の通りの充實した内容です。これで明治文學研究を一先づ打切ることにいたします。一昨年三月に始めて明治文學の**混沌期研究號**を出して以來、本號で卷を重ぬること**七**、頁數は**一千三百頁**を超えてゐます。明治文學研究資料として恐らく空前のものであると思ひます。

さて來七月號は、前號豫告の通り

『南北と默阿彌』

と題し、南北、默阿彌を中心として、わが國民衆藝術の代表たる歌舞伎劇の研究に全誌を捧げる筈になつてゐます。執筆諸家は坪内逍遙博士を始め演劇專門の諸名家です。發行の日を待たれることを希望いたします。

■早稻田文學（毎月一回一日發行）

定價及郵稅

毎號定價を六十五錢とす。
隨時特別號を發行することゝし、該定價はその都度これを定む。
毎號の郵稅は内地一錢五厘、外國行八錢。特別號の郵稅はその都度これを定む。

▲本誌の御註文はすべて東京堂（振替東京二七〇番）へ御申込の事
▼御註文の際は必ず（早稻田文學何月號なり）と御明記の事
▼郵券代用の御送金は一割増の事
▼轉居の際は誌名と新舊兩住所御通知の事

昭和二年五月廿五日印刷納本
昭和二年六月一日發行

No. 257

（禁轉載）

編輯兼發行者　本間久雄
印刷者　關根慶寛
印刷所　早稻田印刷株式會社

編輯所　東京市小石川區雜司ケ谷町一四八
早稻田文學社
電話牛込一九〇八

發行所　東京市神田區表神保町三番地
東京堂
電話牛込六一〇〇
振替東京二七〇七

本號特價　九拾五錢

坪内逍遙著　神代種亮校訂

（明治文學名著全集第一篇）

當世書生氣質

四六判　三七六頁　上製
總ルビ付九ポイント組
三色版一葉寫眞版二葉
挿繪拾八圖挿入
定價貳圓五拾錢
送料十二錢

明治文學を複刻する者日日に多きを加ふ。されどこの親切用意と、この親切を以て出版したる全集ありや。

坪内先生の「當世書生氣質」が明治文學隨一の古典であることは云ふまでもない。たゞ文學と時代との關係は頗る密接である。その時代を談り、その作品の生れ出でた經路を說明する時に、その興味は倍加するであらう。本書が解說に、註釋に、附錄に、左の如く力を注いだのは、一時的の流行を追つての仕事ではないからである。文學研究家の座右に此校訂本を推薦する所以である。

當世書生氣質

（附錄）

解題……坪内逍遙補　神代種亮稿
當世書生氣質の批評……高田半峯
私の學生時代……高田半峯
書生氣質の芝居……市島春城
一橋同窓會に寄す……森鷗外
作者餘談……逍遙遊人

東京神田表神保町
東京堂書店
振替東京二七〇番